

CloudNativePG

リリース *1.25.0*

The Cloud NativePG Contributors.

2024 年 12 月 26 日

目 次

第 1 章 CloudNativePG **1**
1.1 サポートされている Kubernetes ディストリビューション . . . 1
1.2 コンテナイメージ . . . 2
1.2.1 オペレーター . . . 2
1.2.2 オペランド . . . 2
1.3 主な機能 . . . 2
1.4 このガイドについて . . . 4

第 2 章 始める前に **5**
2.1 Kubernetes の用語 . . . 5
2.2 PostgreSQL の用語 . . . 6
2.3 クラウド用語 . . . 7
2.4 次に何をするか . . . 7

第 3 章 ユースケース **9**
3.1 ケース 1Kubernetes 内のアプリケーション . . . 9
3.2 ケース 2Kubernetes 外部のアプリケーション . . . 10

第 4 章 アーキテクチャ **11**
4.1 状態の同期 . . . 11
4.2 Kubernetes アーキテクチャ . . . 12
4.2.1 マルチアベイラビリティーゾーン Kubernetes クラスター . . . 12
4.2.2 単一のアベイラビリティーゾーン Kubernetes クラスター . . . 13
4.2.3 PostgreSQL ワークロードのノードの予約 . . . 15
4.2.4 提案されたノードラベル . . . 15
4.2.5 提案されたノードテイント . . . 16
4.3 PostgreSQL アーキテクチャ . . . 16
4.3.1 読み取り/書き込みワークロード . . . 17
4.3.2 読み取り専用ワークロード . . . 18
4.4 Kubernetes クラスター全体のデプロイメント . . . 19

第 5 章 インストールとアップグレード **21**
5.1 Kubernetes へのインストール . . . 21
5.1.1 オペレーターマニフェストを直接使用する . . . 21
5.1.2 `kubectl` の `cnpg` プラグインを使用する . . . 21
5.1.3 最新の開発スナップショットのテスト . . . 22
5.1.4 Helm チャートを使用する . . . 22
5.1.5 OLM を使用する . . . 22
5.2 デプロイメントの詳細 . . . 23
5.3 アップグレード . . . 23
5.3.1 スプレッドアップグレード . . . 24

5.3.2 インスタンスマネージャーのインプレース更新 . . . 25
5.3.3 バージョン間の互換性 . . . 25
5.3.4 1.25.0 または 1.24.x へのアップグレード . . . 26
5.3.5 以前のマイナーバージョンから 1.24 へのアップグレード . . . 26
5.3.6 レプリカクラスターから分散トポロジへ . . . 26
5.3.7 以前のマイナーバージョンから 1.23 へのアップグレード . . . 27
5.3.8 ユーザー定義のレプリケーションスロット . . . 27
5.3.9 サーバーサイドでのマニフェストの適用 . . . 27

第 6 章 クイックスタート 29
6.1 パート 1: ローカル Kubernetes プレイグラウンドをセットアップする . . . 29
6.1.1 Minikube . . . 30
6.1.2 種類 . . . 30
6.2 パート 2 CloudNativePG のインストール . . . 30
6.3 パート 3 PostgreSQL クラスターを展開する . . . 30
6.4 パート 4 Prometheus と Grafana を使用してクラスターを監視する . . . 32
6.4.1 インストール . . . 32
6.4.2 Prometheus での表示 . . . 34
6.4.3 Grafana ダッシュボード . . . 35

第 7 章 イメージカタログ 37
7.1 CloudNativePG カタログ . . . 38
7.1.1 PostgreSQL コンテナイメージ . . . 38
7.1.2 PostGIS コンテナイメージ . . . 39

第 8 章 Bootstrap 41
8.1 `bootstrap` セクション . . . 42
8.2 `externalClusters` セクション . . . 42
8.2.1 パスワードファイル . . . 43
8.3 空のクラスターをブートストラップする `initdb` . . . 43
8.3.1 `initdb` にオプションを渡す . . . 45
8.3.2 初期化後のクエリの実行 . . . 47
8.4 別のクラスターからのブートストラップ . . . 49
8.4.1 バックアップからのブートストラップ `recovery` . . . 49
8.4.2 ライブクラスターからのブートストラップ `pg_basebackup` . . . 49
8.4.3 要件 . . . 50
8.4.4 レプリケーションユーザーについて . . . 51
8.4.5 ユーザー名/パスワードの認証 . . . 51
8.4.6 TLS 証明書認証 . . . 53
8.4.7 アプリケーションデータベースの構成 . . . 54
8.4.8 現在の制限 . . . 55

第 9 章 Postgres データベースのインポート 57
9.1 その仕組み . . . 58
9.2 `microservice` タイプ . . . 58
9.3 `monolith` タイプ . . . 60
9.4 インポートの最適化 . . . 62
9.5 `pg_dump` および `pg_restore` の動作のカスタマイズ . . . 63

9.6 オンラインインポートとアップグレード 64

第 10 章 セキュリティ **65**
10.1 コード 65
10.2 コンテナ 66
10.2.1 コンテナセキュリティのガイドラインとフレームワーク 66
10.3 クラスター 67
10.3.1 ロールベースのアクセス制御 RBAC 67
10.3.2 デプロイメントと `ClusterRole` リソース 68
10.3.3 クラスターロールのアクセス許可が必要なのはなぜですか? 69
10.3.4 インスタンスマネージャーによる API サーバーへの呼び出し 69
10.3.5 ポッドセキュリティポリシー 70
10.3.6 AppArmor を使用してポッドアクセスを制限する 71
10.3.7 ネットワークポリシー 71
10.3.8 公開ポート 72
10.3.9 PostgreSQL 72
10.3.10 ストレージ 73

第 11 章 Postgres インスタンスマネージャー **75**
11.1 スタートアップ、活性、および準備状況プローブ 75
11.1.1 スタートアッププローブ 75
11.1.2 Liveness Probe 76
11.1.3 Readiness Probe 77
11.2 シャットダウン制御 78
11.2.1 スイッチオーバー中のプライマリのシャットダウン 78
11.3 フェイルオーバー 79
11.4 ディスクフル障害 79

第 12 章 スケジューリング **81**
12.1 ポッドアフィニティとアンチアフィニティ 81
12.1.1 ポッドのアンチアフィニティの必要性 82
12.1.2 トポロジの考慮事項 83
12.1.3 アンチアフィニティポリシーの無効化 83
12.1.4 カスタムルールを使用したきめの細かい制御 83
12.2 `nodeSelector` によるノード選択 83
12.3 許容範囲 84
12.4 PostgreSQL ワークロードの分離 84

第 13 章 リソース管理 **87**

第 14 章 障害モード **91**
14.1 ストレージ領域の使用量 91
14.2 障害モード 92
14.2.1 ユーザーによって削除されたポッド 92
14.2.2 Liveness プローブの失敗 93
14.2.3 Readiness Probe の失敗 93
14.2.4 ワーカーノードがドレインされました 93
14.2.5 ワーカーノードの障害 94

14.3 自己修復 . . . 94
14.4 手動介入 . . . 94

第 15 章 ローリングアップデート **97**
15.1 自動更新 unsupervised . . . 98
15.2 手動更新 supervised . . . 98

第 16 章 レプリケーション **99**
16.1 アプリケーションレベルのレプリケーション . . . 99
16.2 非常に成熟したテクノロジー . . . 99
16.3 ストリーミングレプリケーションのサポート . . . 100
16.3.1 継続的なバックアップ統合 . . . 101
16.4 同期レプリケーション . . . 101
16.4.1 クォーラムベースの同期レプリケーション . . . 102
16.4.2 例 . . . 102
16.4.3 非推奨の同期レプリケーション実装からの移行 . . . 102
16.4.4 優先度ベースの同期レプリケーション . . . 103
16.4.5 synchronous_standby_names コンテンツの制御 . . . 103
16.4.6 例 . . . 104
16.4.7 データの耐久性と同期レプリケーション . . . 105
16.4.8 必要なデータの耐久性 . . . 105
16.4.9 優先データの耐久性 . . . 106
16.5 同期レプリケーション非推奨 . . . 107
16.5.1 同期レプリケーションのノードを選択します . . . 109
16.6 レプリケーションスロット . . . 110
16.6.1 高可用性のためのレプリケーションスロット . . . 110
16.6.2 ユーザー定義レプリケーションスロット . . . 111
16.6.3 同期周波数 . . . 112
16.6.4 レプリケーションスロット用に保持される WAL サイズのキャップ . . . 113
16.6.5 レプリケーションスロットの監視 . . . 113

第 17 章 論理レプリケーション **115**
17.1 出版物 . . . 115
17.1.1 Publication マニフェストの必須フィールド . . . 117
17.1.2 調整とステータス . . . 117
17.1.3 パブリケーションの削除 . . . 117
17.2 サブスクリプション . . . 118
17.2.1 Subscription マニフェストの必須フィールド . . . 119
17.2.2 調整とステータス . . . 120
17.2.3 サブスクリプションの削除 . . . 120
17.3 制限事項 . . . 121
17.3.1 スキーマレプリケーションのアドレス指定 . . . 121
17.3.2 シーケンスの処理 . . . 121
17.4 論理レプリケーションを使用したライブ移行とメジャー Postgres アップグレードの例 . . . 121
17.4.1 ステップ 1 パブリッシャーの設定 freddie . . . 122
17.4.2 ステップ 2 サブスクライバー king の設定 . . . 123

第 18 章 バックアップ **125**

18.1 WAL アーカイブ . . . 126
18.2 コールドおよびホットバックアップ . . . 126
18.3 オブジェクトストアまたはボリュームスナップショットどちらを使用しますか? . . . 127
18.4 スケジュールされたバックアップ . . . 128
18.5 オンデマンド バックアップ . . . 130
18.6 スタンバイからのバックアップ . . . 131

第 19 章 オブジェクトストアのバックアップ 133
19.1 共通オブジェクトストア . . . 134
19.2 リテンション ポリシー . . . 134
19.3 圧縮アルゴリズム . . . 134
19.4 バックアップオブジェクトのタグ付け . . . 135
19.5 backup および WAL コマンドの追加オプション . . . 136

第 20 章 WAL アーカイブ 139

第 21 章 ボリュームスナップショットのバックアップ 141
21.1 標準のボリュームスナップショットについて . . . 141
21.2 要件 . . . 142
21.3 ボリュームスナップショットバックアップを構成する方法 . . . 142
21.4 ホットおよびコールドバックアップ . . . 143
21.4.1 デフォルト動作のオーバーライド . . . 144
21.5 ボリュームスナップショットオブジェクトの永続化 . . . 145
21.6 例 . . . 146

第 22 章 リカバリー 149
22.1 オブジェクトストアからのリカバリー . . . 150
22.2 `VolumeSnapshot` オブジェクトからのリカバリー . . . 151
22.3 `Backup` オブジェクトからのリカバリー . . . 152
22.4 追加の考慮事項 . . . 153
22.5 ポイント インタイム リカバリー PITR . . . 153
22.5.1 オブジェクトストアからの PITR . . . 154
22.5.2 `VolumeSnapshot` オブジェクトからの PITR . . . 155
22.5.3 リカバリーターゲット . . . 156
22.6 アプリケーションデータベースの構成 . . . 158
22.7 リカバリーの内部的な仕組み . . . 159
22.8 バックアップセクションを使用したクラスターへのリストア . . . 160

第 23 章 サービスマネージメント 161
23.1 デフォルトサービスの無効化 . . . 161
23.2 独自のサービスの追加 . . . 162
23.2.1 Postgres サービスの公開について . . . 163

第 24 章 PostgreSQL の構成 165
24.1 `postgresql` セクション . . . 166
24.1.1 レプリケーション設定 . . . 168
24.1.2 ログ制御設定 . . . 168
24.1.3 共有プリロードライブラリ . . . 168
24.1.4 マネージド拡張機能 . . . 169

24.1.5 auto_explain の有効化 . . . 170
24.1.6 pg_stat_statements の有効化 . . . 170
24.1.7 pgaudit の有効化 . . . 171
24.1.8 pg_failover_slots の有効化 . . . 171
24.2 pg_hba セクション . . . 172
24.2.1 LDAP 構成 . . . 173
24.3 pg_ident セクション . . . 173
24.4 構成の変更 . . . 174
24.5 ALTER SYSTEM の有効化 . . . 174
24.6 動的共有メモリ設定 . . . 175
24.6.1 POSIX 共有メモリ . . . 175
24.6.2 System V 共有メモリ . . . 176
24.7 固定パラメーター . . . 176

第 25 章 PostgreSQL ロール管理 179
25.1 パスワード管理 . . . 181
25.1.1 パスワードの有効期限 VALID UNTIL . . . 182
25.1.2 パスワードがハッシュ化されました . . . 183
25.2 実現不可能なロール構成 . . . 183
25.3 管理対象ロールのステータス . . . 184

第 26 章 PostgreSQL データベース管理 187
26.1 主要なコンセプト . . . 187
26.1.1 管理範囲 . . . 187
26.1.2 宣言的な Database マニフェスト . . . 187
26.1.3 Database マニフェストの必須フィールド . . . 188
26.2 予約されたデータベース名 . . . 188
26.3 調整とステータス . . . 188
26.4 データベースの削除 . . . 189
26.4.1 delete 再利用ポリシーを介した削除 . . . 189
26.4.2 ensure: absent の宣言的設定 . . . 190
26.5 制限と注意事項 . . . 190
26.5.1 データベースの名前の変更 . . . 190
26.5.2 データベースの作成と変更 . . . 190
26.5.3 レプリカクラスター . . . 191
26.5.4 競合の解決 . . . 191
26.5.5 Postgres バージョンの違い . . . 191
26.5.6 手動変更 . . . 191

第 27 章 テーブルスペース 193
27.1 宣言的テーブルスペース . . . 193
27.2 宣言的テーブルスペースの使用 . . . 194
27.3 ストレージクラスとテーブルスペース . . . 196
27.4 テーブルスペースの所有権 . . . 197
27.5 バックアップ リカバリー . . . 198
27.6 レプリカクラスター . . . 198
27.7 一時テーブルスペース . . . 199
27.8 kubectl プラグインのサポート . . . 200

27.9 制限事項 200

第 28 章 オペレーター設定 **201**
28.1 使用可能なオプション 201
28.2 オペレーター構成マップの定義 203
28.3 オペレーターシークレットの定義 203
28.4 オペレーターを再起動して構成をリロードする 204
28.5 pprof HTTP Server 204

第 29 章 インスタンスポッド構成 **207**
29.1 予測される量 207
29.2 エフェメラルボリューム 209
29.2.1 一時ストレージのボリューム要求テンプレート 209
29.2.2 共有メモリのボリューム 209
29.3 環境変数 210

第 30 章 ストレージ **213**
30.1 バックアップ リカバリー 214
30.2 CloudNativePG のベンチマーク 214
30.3 保存時の暗号化 214
30.4 Persistent Volume Claim Claim PVC 215
30.5 ストレージクラスを介した構成 215
30.6 PVC テンプレートを介した構成 216
30.7 WAL のボリューム 216
30.8 テーブルスペースのボリューム 217
30.9 ボリュームの拡張 217
30.9.1 ボリューム拡張 Kubernetes 機能の使用 218
30.9.2 AKS での PVC ボリュームの拡張 218
30.9.3 AKS のボリューム拡張の回避策 218
30.9.4 ストレージの再作成 220
30.10 永続ボリュームの静的プロビジョニング 221
30.11 ブロックストレージの考慮事項 Ceph/Longhorn 222

第 31 章 ラベルとアノテーション **223**
31.1 事前定義されたラベル 223
31.2 事前定義されたアノテーション 224
31.3 前提条件 226
31.4 クラスターのメタデータの定義 226
31.5 現在の制限 227

第 32 章 モニタリング **229**
32.1 モニタリングインスタンス 229
32.1.1 Prometheus Operator の例 230
32.1.2 メトリックポートで TLS を有効にする 231
32.1.3 事前定義されたメトリックセット 232
32.1.4 ユーザー定義メトリック 241
32.1.5 ユーザー定義メトリックの例 242
32.1.6 述語クエリーを使用したユーザー定義メトリックの例 243

32.1.7 複数のデータベースで実行されているユーザー定義メトリックの例 243
32.1.8 ユーザー定義メトリックの構造 245
32.1.9 ユーザー定義メトリックの出力 246
32.1.10 メトリックのデフォルトセット 247
32.1.11 Prometheus Postgres エクスポーターとの違い 247
32.2 オペレーターのモニタリング 247
32.2.1 Prometheus Operator の例 248
32.3 エクスポートされたメトリックを検査する方法 248
32.4 補助リソース 249

第 33 章 ロギング **251**
33.1 クラスターログ 251
33.2 オペレーターログ 252
33.3 PostgreSQL ログ 252
33.4 PG 監査ログ 253
33.5 その他のログ 255

第 34 章 証明書 **257**
34.1 オペレーター管理モード 257
34.1.1 サーバー証明書 258
34.1.2 サーバー CA シークレット 258
34.1.3 サーバー TLS シークレット 258
34.1.4 サーバー代替 DNS 名 258
34.1.5 クライアント証明書 258
34.1.6 クライアント CA シークレット 258
34.1.7 クライアント `streaming_replica` 証明書 259
34.2 ユーザー提供の証明書モード 259
34.2.1 サーバー証明書 259
34.2.2 例 259
34.2.3 Cert-manager の例 260
34.2.4 クライアント証明書 264
34.2.5 Cert-manager の例 265

第 35 章 クライアント TLS/SSL 接続 **271**
35.1 新しい証明書の発行 271
35.2 TLS 証明書を介した接続のテスト 272
35.3 TLS プロトコルバージョンについて 275

第 36 章 アプリケーションから接続する **277**
36.1 DNS 解決 277
36.2 環境変数 278
36.3 シークレット 278

第 37 章 接続プーリング **279**
37.1 アーキテクチャ 279
37.2 クイックスタート 280
37.3 リソースのライフサイクルのプール化 281
37.4 セキュリティ 281

37.4.1 証明書 . . . 281
37.5 認証 . . . 282
37.6 ポッドテンプレート . . . 283
37.7 サービステンプレート . . . 284
37.8 高可用性 HA . . . 285
37.9 PgBouncer 構成オプション . . . 286
37.10 モニタリング . . . 288
37.11 ロギング . . . 295
37.12 接続の一時停止 . . . 295
37.13 制限事項 . . . 296
37.13.1 単一の PostgreSQL クラスター . . . 296
37.13.2 制御された構成可能性 . . . 296

第 38 章 レプリカクラスター **297**
38.1 基本概念 . . . 298
38.1.1 PostgreSQL のロールについて . . . 298
38.1.2 レプリカクラスターのブートストラップ . . . 298
38.1.3 レプリケーションの構成 . . . 299
38.1.4 外部クラスターの定義 . . . 299
38.1.5 バックアップおよびシンメトリックアーキテクチャ . . . 299
38.1.6 分散アーキテクチャの柔軟性 . . . 300
38.2 レプリカクラスターのセットアップ . . . 300
38.3 分散トポロジ . . . 301
38.3.1 分散 PostgreSQL データベースの計画 . . . 301
38.3.2 プライマリのレプリカクラスターへの降格 . . . 302
38.3.3 レプリカのプライマリクラスターへの昇格 . . . 303
38.4 スタンドアロンレプリカクラスター . . . 304
38.4.1 分散トポロジとの主な違い . . . 305
38.4.2 `pg_basebackup` を使用したスタンドアロンレプリカクラスターの例 . . . 305
38.4.3 オブジェクトストアからのスタンドアロンレプリカクラスターの例 . . . 306
38.4.4 ボリュームスナップショットを使用した例 . . . 307
38.5 遅延レプリカ . . . 308

第 39 章 Kubernetes のアップグレードとメンテナンス **311**
39.1 定期的なアップデートの重要性 . . . 311
39.2 クラスター内のメンテナンス操作 . . . 311
39.3 一時的な PostgreSQL クラスターの低下 . . . 312
39.4 ポッドの中断予算 . . . 312
39.5 開発またはテストに使用される PostgreSQL クラスター . . . 312
39.6 ノードのメンテナンスウィンドウ . . . 313
39.6.1 `reusePVC` が `false` に設定された単一インスタンスクラスター . . . 314

第 40 章 Kubectl プラグイン **315**
40.1 インストール . . . 315
40.1.1 インストールスクリプトを介して . . . 315
40.1.2 Debian または RedHat パッケージを使用する . . . 315
40.1.3 Debian パッケージ . . . 315
40.1.4 RPM パッケージ . . . 316

40.1.5 Krew を使用する . . . 317
40.1.6 Homebrew を使用する . . . 317
40.1.7 サポートされているアーキテクチャ . . . 317
40.1.8 オートコンプリートの設定 . . . 318
40.2 使用する . . . 319
40.2.1 インストールマニフェストの生成 . . . 319
40.2.2 ステータス . . . 320
40.2.3 プロモート . . . 323
40.2.4 証明書 . . . 323
40.2.5 再起動 . . . 323
40.2.6 リロード . . . 324
40.2.7 メンテナンス . . . 324
40.2.8 レポート . . . 325
40.2.9 レポート演算子 . . . 325
40.2.10 レポートクラスター . . . 328
40.2.11 ログ . . . 329
40.2.12 クラスターログ . . . 330
40.2.13 かなり . . . 331
40.2.14 デストロイ . . . 333
40.2.15 クラスターハイバーネーション . . . 333
40.2.16 pgbench を使用したデータベースのベンチマーク . . . 334
40.2.17 fio を使用したストレージのベンチマーク . . . 334
40.2.18 新しい物理バックアップの要求 . . . 334
40.2.19 psql の起動 . . . 335
40.2.20 Postgres クラスターのスナップショット . . . 336
40.2.21 評価/デモ目的でのみ pgAdmin4 を使用する . . . 336
40.2.22 ロジカルレプリケーションのパブリケーション . . . 337
40.2.23 新しいパブリケーションの作成 . . . 337
40.2.24 パブリケーションの削除 . . . 339
40.2.25 論理レプリケーションサブスクリプション . . . 339
40.2.26 新しいサブスクリプションの作成 . . . 340
40.2.27 サブスクリプションの削除 . . . 341
40.2.28 シーケンスの同期 . . . 341
40.3 K9s との統合 . . . 342
40.4 プラグインに必要な権限 . . . 342
40.4.1 ロールの例 . . . 343

第 41 章 自動フェイルオーバー **345**
41.1 RTO と RPO のインパクト . . . 346
41.2 遅延フェイルオーバー . . . 346

第 42 章 障害対応 **347**
42.1 始める前に . . . 347
42.1.1 Kubernetes 環境 . . . 347
42.1.2 便利なユーティリティ . . . 347
42.2 最初の一歩 . . . 348
42.3 バックアップはありますか？ . . . 348

42.4 緊急バックアップ . . . 349
42.5 ログ . . . 350
42.6 オペレーター情報 . . . 350
42.6.1 オペレーターに関する詳細情報を収集する . . . 351
42.7 クラスター情報 . . . 352
42.8 ポッド情報 . . . 353
42.8.1 PostgreSQL ポッドに関する追加情報を収集およびフィルタリングする . . . 354
42.9 バックアップ情報 . . . 355
42.10 ストレージ情報 . . . 355
42.11 ノード情報 . . . 356
42.12 条件 . . . 356
42.12.1 特定の条件を待機する方法 . . . 357
42.13 ネットワーキング . . . 358
42.14 PostgreSQL コアダンプ . . . 358
42.15 いくつかの既知の問題 . . . 359
42.15.1 ストレージがいっぱいです . . . 359
42.15.2 ポッドが `Pending` 状態でスタックしている . . . 359
42.15.3 バックアップが構成されていない場合、レプリカが同期していない . . . 360
42.15.4 クラスターが `Creating new replica` でスタックしている . . . 360
42.15.5 インストールされたネットワークポリシーにより、ネットワーキングが障害されます 361
42.15.6 データディレクトリのブートストラップ中のエラー . . . 361
42.15.7 ブートストラップジョブが実行中ステータスでハングする . . . 362

第 43 章 フェンシング **363**
43.1 インスタンスをフェンスする方法 . . . 363
43.2 フェンシングのリフティング方法 . . . 364
43.3 フェンシングの仕組み . . . 364

第 44 章 宣言的ハイバーネーション **367**
44.1 ハイバネーション . . . 367
44.2 水分補給 . . . 368

第 45 章 PostGIS **369**
45.1 PostGIS クラスターに関する基本的な概念 . . . 369
45.2 PostGIS で新しい PostgreSQL クラスターを作成する . . . 370

第 46 章 エンドツーエンドテスト **373**

第 47 章 コンテナイメージの要件 **377**
47.1 イメージタグの要件 . . . 378

第 48 章 オペレーター能力レベル **381**
48.1 レベル 1 基本インストール . . . 381
48.1.1 宣言的構成を介した Operator の展開 . . . 382
48.1.2 宣言的構成を介した PostgreSQL クラスターの展開 . . . 382
48.1.3 CRD を介したオペランドイメージのオーバーライド . . . 382
48.1.4 ラベルとアノテーション . . . 382
48.1.5 自己完結型インスタンスマネージャー . . . 382
48.1.6 ストレージ構成 . . . 383

48.1.7 レプリカ構成 . . . 383
48.1.8 サービス構成 . . . 383
48.1.9 データベース構成 . . . 384
48.1.10 Postgres のロール、ユーザー、およびグループの構成 . . . 384
48.1.11 ポッドセキュリティポリシー . . . 384
48.1.12 アフィニティ . . . 384
48.1.13 トポロジスプレッドコンストレイン . . . 385
48.1.14 コマンドラインインターフェイス . . . 385
48.1.15 クラスターの現在のステータス . . . 385
48.1.16 オペレーターの認証局 . . . 385
48.1.17 クラスターの認証局 . . . 385
48.1.18 TLS 接続 . . . 386
48.1.19 ストリーミングレプリケーションの証明書認証 . . . 386
48.1.20 継続的な構成管理 . . . 386
48.1.21 既存の PostgreSQL データベースのインポート . . . 386
48.1.22 PostGIS クラスター . . . 386
48.1.23 PostgreSQL の基本的な LDAP 認証 . . . 387
48.1.24 複数のインストール方法 . . . 387
48.1.25 構成より規約 . . . 387
48.2 レベル 2 シームレスなアップグレード . . . 387
48.2.1 オペレーターのアップグレード . . . 387
48.2.2 管理対象ワークロードのアップグレード . . . 388
48.2.3 アップグレード中にクラスターの可用性ステータスを表示する . . . 388
48.3 レベル 3 完全なライフサイクル . . . 388
48.3.1 PostgreSQL WAL アーカイブ . . . 389
48.3.2 PostgreSQL のバックアップ . . . 389
48.3.3 スタンバイからのバックアップ . . . 390
48.3.4 バックアップからの完全な復元 . . . 390
48.3.5 バックアップからのポイント インタイム リカバリー PITR . . . 390
48.3.6 同期レプリケーションを介したゼロデータ損失クラスター . . . 390
48.3.7 レプリカクラスター . . . 390
48.3.8 分散データベーストポロジ . . . 391
48.3.9 テーブルスペースのサポート . . . 391
48.3.10 スタートアップ、ライブネス、および準備状況プローブ . . . 391
48.3.11 ローリング展開 . . . 392
48.3.12 レプリカのスケールアップとスケールダウン . . . 392
48.3.13 Kubernetes ノードのメンテナンスウィンドウと PodDisruptionBudget . . . 392
48.3.14 フェンシング . . . 392
48.3.15 ハイバネーション宣言的 . . . 393
48.3.16 ハイバネーション (必須) . . . 393
48.3.17 ポッドの永続ボリュームストレージの再利用 . . . 393
48.3.18 CPU とメモリの要求と制限 . . . 393
48.3.19 PgBouncer を使用した接続プーリング . . . 393
48.3.20 論理レプリケーション . . . 394
48.4 レベル 4 深い洞察 . . . 394
48.4.1 構成可能なクエリを備えた Prometheus エクスポータ . . . 394
48.4.2 Grafana ダッシュボード . . . 394

48.4.3 JSON 形式の PostgreSQL エラーメッセージの標準出力ログ . . . 394
48.4.4 リアルタイムクエリモニタリング . . . 395
48.4.5 監査 . . . 395
48.4.6 Kubernetes イベント . . . 395
48.5 レベル 5 自動操縦 . . . 395
48.5.1 自己修復のための自動フェイルオーバー . . . 395
48.5.2 スタンバイの自動再作成 . . . 396

第 49 章 カスタムポッドコントローラ 397
49.1 PVC のサイズ変更 . . . 397
49.2 プライマリインスタンスとレプリカ . . . 397
49.3 PVC のコヒーレンス . . . 398
49.4 ローカルストレージ、リモートストレージ、およびデータベースのサイズ . . . 398

第 50 章 例 401
50.1 基本 . . . 401
50.2 バックアップ . . . 409
50.3 レプリカクラスター . . . 412
50.4 PostGIS . . . 418
50.5 管理対象ロール . . . 418
50.6 管理対象サービス . . . 419
50.7 宣言的テーブルスペース . . . 420
50.8 プーラー構成 . . . 422
50.9 宣言的なパブリケーションおよびサブスクリプションオブジェクトを介した論理レプリケーション . . . 423
50.10 Postgres データベースの宣言的管理 . . . 427

第 51 章 ネットワーキング 429
51.1 オペレーターのクロス名前空間ネットワークポリシー . . . 429
51.2 クロスクラスターネットワーキング . . . 430

第 52 章 ベンチマーク 431
52.1 pgbench . . . 431
52.2 fio . . . 433

第 53 章 よくある質問 FAQ 435
53.1 Kubernetes での PostgreSQL の実行 . . . 435
53.2 高可用性 . . . 438

第 54 章 API リファレンス 441
54.1 リソースタイプ . . . 441
54.2 Backup . . . 441
54.3 クラスター . . . 442
54.4 ClusterImageCatalog . . . 442
54.5 Database . . . 443
54.6 ImageCatalog . . . 443
54.7 プーラー . . . 443
54.8 Publication . . . 444
54.9 ScheduledBackup . . . 444

54.10 サブスクリプション . . . 445
54.11 AffinityConfiguration . . . 445
54.12 AvailableArchitecture . . . 446
54.13 BackupConfiguration . . . 447
54.14 BackupMethod . . . 447
54.15 BackupPhase . . . 448
54.16 BackupPluginConfiguration . . . 448
54.17 BackupSnapshotElementStatus . . . 448
54.18 BackupSnapshotStatus . . . 449
54.19 BackupSource . . . 449
54.20 BackupSpec . . . 449
54.21 BackupStatus . . . 450
54.22 BackupTarget . . . 451
54.23 BootstrapConfiguration . . . 452
54.24 BootstrapInitDB . . . 452
54.25 BootstrapPgBaseBackup . . . 454
54.26 BootstrapRecovery . . . 454
54.27 CatalogImage . . . 455
54.28 CertificatesConfiguration . . . 456
54.29 CertificatesStatus . . . 457
54.30 ClusterMonitoringTLSConfiguration . . . 457
54.31 ClusterSpec . . . 457
54.32 ClusterStatus . . . 461
54.33 ConfigMapResourceVersion . . . 463
54.34 DataDurabilityLevel . . . 463
54.35 DataSource . . . 463
54.36 DatabaseReclaimPolicy . . . 464
54.37 DatabaseRoleRef . . . 464
54.38 DatabaseSpec . . . 464
54.39 DatabaseStatus . . . 466
54.40 EmbeddedObjectMetadata . . . 466
54.41 EnsureOption . . . 467
54.42 EphemeralVolumesSizeLimitConfiguration {#postgresql-cnpg-io-v1-EphemeralVolumesSizeLimitConfiguration} . . . 467
54.43 外部クラスターリスト . . . 467
54.44 ImageCatalogRef . . . 468
54.45 ImageCatalogSpec . . . 468
54.46 Import . . . 468
54.47 ImportSource . . . 469
54.48 インスタンス ID . . . 469
54.49 InstanceReportedState . . . 470
54.50 LDAPBindAsAuth . . . 470
54.51 LDAPBindSearchAuth . . . 470
54.52 LDAPConfig . . . 471
54.53 LDAPScheme . . . 471
54.54 ManchedConfiguration . . . 472
54.55 ManchedRoles . . . 472

54.56 ManchedService . . . 472
54.57 ManagedServices . . . 473
54.58 メタデータ . . . 473
54.59 MonitoringConfiguration . . . 474
54.60 NodeMaintenanceWindow . . . 475
54.61 OnlineConfiguration . . . 475
54.62 PasswordState . . . 476
54.63 PgBouncerIntegrationStatus . . . 476
54.64 PgBouncerPoolMode . . . 476
54.65 PgBouncerSecrets . . . 476
54.66 PgBouncerSpec . . . 477
54.67 PluginConfiguration . . . 477
54.68 PluginConfigurationList . . . 478
54.69 PluginStatus . . . 478
54.70 PodTemplateSpec . . . 479
54.71 PodTopologyLabels . . . 479
54.72 PoolerIntegrations . . . 479
54.73 PoolerMonitoringConfiguration . . . 480
54.74 PoolerSecrets . . . 480
54.75 PoolerSpec . . . 481
54.76 PoolerStatus . . . 481
54.77 PoolerType . . . 482
54.78 PostgresConfiguration . . . 482
54.79 PrimaryUpdateMethod . . . 483
54.80 PrimaryUpdateStrategy . . . 483
54.81 Probe . . . 483
54.82 ProbesConfiguration . . . 484
54.83 PublicationReclaimPolicy . . . 484
54.84 PublicationSpec . . . 485
54.85 PublicationStatus . . . 485
54.86 PublicationTarget . . . 486
54.87 PublicationTargetObject . . . 486
54.88 PublicationTargetTable . . . 486
54.89 RecoveryTarget . . . 487
54.90 ReplicaClusterConfiguration . . . 487
54.91 ReplicationSlotsConfiguration . . . 488
54.92 ReplicationSlotsHAConfiguration . . . 489
54.93 RoleConfiguration . . . 489
54.94 SQLRefs . . . 491
54.95 ScheduledBackupSpec . . . 491
54.96 ScheduledBackupStatus . . . 492
54.97 SecretVersion . . . 493
54.98 SecretsResourceVersion . . . 493
54.99 ServiceAccountTemplate . . . 494
54.100 ServiceSelectorType . . . 494
54.101 ServiceTemplateSpec . . . 494
54.102 ServiceUpdateStrategy . . . 495

54.103SnapshotOwnerReference . . . 495
54.104SnapshotType . . . 495
54.105StorageConfiguration . . . 495
54.106SubscriptionReclaimPolicy . . . 496
54.107SubscriptionSpec . . . 496
54.108SubscriptionStatus . . . 497
54.109SwitchReplicaClusterStatus . . . 497
54.110SyncReplicaElectionConstraints . . . 498
54.111SynchronizeReplicasConfiguration . . . 498
54.112SynchronousReplicaConfiguration . . . 498
54.113SynchronousReplicaConfigurationMethod . . . 499
54.114TablespaceConfiguration . . . 499
54.115TablespaceState . . . 500
54.116TablespaceStatus . . . 500
54.117トポロジ . . . 501
54.118VolumeSnapshotConfiguration {#postgresql-cnpg-io-v1- VolumeSnapshotConfiguration} . . . 501

第 55 章 サポートされているリリース **503**
55.1 サポートポリシー . . . 503
55.2 命名スキーム . . . 504
55.3 CloudNativePG リリースのサポートステータス . . . 505
55.3.1 サポートされている PostgreSQL バージョン . . . 505
55.4 今後のリリース . . . 506
55.5 古いリリース . . . 506
55.6 サポートとは . . . 506

第 56 章 プレビューバージョン **509**
56.1 リリース候補の目的 . . . 509
56.2 コミュニティへの参加 . . . 509
56.3 使用アドバイザリー . . . 509
56.4 現在のプレビューバージョン . . . 510

第 57 章 Release notes **511**
57.1 CloudNativePG 1.25 のリリースノート . . . 511
57.1.1 バージョン 1.25.0-rc1 . . . 512
57.2 CloudNativePG 1.24 のリリースノート . . . 513
57.2.1 バージョン 1.24.1 . . . 513
57.2.2 バージョン 1.24.0 . . . 514
57.3 CloudNativePG 1.23 のリリースノート . . . 518
57.3.1 バージョン 1.23.5 . . . 518
57.3.2 バージョン 1.23.4 . . . 519
57.3.3 バージョン 1.23.3 . . . 520
57.3.4 バージョン 1.23.2 . . . 521
57.3.5 バージョン 1.23.1 . . . 523
57.3.6 バージョン 1.23.0 . . . 523
57.4 Release Notes - Old . . . 524
57.4.1 CloudNativePG 1.22 のリリースノート . . . 524
57.4.2 CloudNativePG 1.21 のリリースノート . . . 531

57.4.3 CloudNativePG 1.20 のリリースノート . . . 542
57.4.4 CloudNativePG 1.19 のリリースノート . . . 549
57.4.5 CloudNativePG 1.18 のリリースノート . . . 556
57.4.6 CloudNativePG 1.17 のリリースノート . . . 563
57.4.7 CloudNativePG 1.16 のリリースノート . . . 567
57.4.8 CloudNativePG 1.15 のリリースノート . . . 573
57.5 1.14.0 以前のリリースノート . . . 578
57.5.1 バージョン 1.14.0 . . . 578
57.5.2 バージョン 1.13.0 . . . 579
57.5.3 バージョン 1.12.0 . . . 580
57.5.4 バージョン 1.11.0 . . . 581
57.5.5 バージョン 1.10.0 . . . 583
57.5.6 バージョン 1.9.2 . . . 584
57.5.7 バージョン 1.9.1 . . . 584
57.5.8 バージョン 1.9.0 . . . 585
57.5.9 バージョン 1.8.0 . . . 585
57.5.10 バージョン 1.7.1 . . . 586
57.5.11 バージョン 1.7.0 . . . 587
57.5.12 バージョン 1.6.0 . . . 588
57.5.13 バージョン 1.5.1 . . . 588
57.5.14 バージョン 1.5.0 . . . 588
57.5.15 バージョン 1.4.0 . . . 589
57.5.16 バージョン 1.3.0 . . . 590
57.5.17 バージョン 1.2.1 . . . 591
57.5.18 バージョン 1.2.0 . . . 591
57.5.19 バージョン 1.1.0 . . . 591
57.5.20 バージョン 1.0.0 . . . 592

第 58 章 Appendix **593**
58.1 付録 A-バックアップ用の共通オブジェクトストア . . . 593
58.1.1 AWS S3 . . . 593
58.1.2 Azure Blob Storage . . . 596
58.1.3 Google Cloud Storage . . . 598
58.1.4 MinIO ゲートウェイ . . . 600

第1章　CloudNativePG

CloudNativePG は、オープンソースの operator

サポートされている Kubernetes クラスターで PostgreSQL ワークロードを管理するように設計されています。**レプリカクラスターから分散トポロジへ** により、プライベート、パブリック、ハイブリッド、およびマルチクラウド環境での展開をサポート

機能。

CloudNativePG は、宣言的構成や不変のインフラストラクチャなどの DevOps の原則と概念を遵守しています。

`Cluster` と呼ばれる新しい Kubernetes リソースを定義します。高可用性と読み取り専用クエリのオフロードのために、選択した Kubernetes 名前空間に共存する単一のプライマリとオプションの数のレプリカで構成される PostgreSQL クラスターを表します。

同じ Kubernetes クラスターにあるアプリケーションは、オペレーターがのみ管理するサービスを使用して PostgreSQL データベースにアクセスでき、フェールオーバーまたはスイッチオーバーに伴うプライマリロールの変更を心配する必要はありません。Kubernetes クラスターの外部にあるアプリケーションは、サービステンプレート機能と `LoadBalancer` サービスを活用して、TCP 経由で PostgreSQL を公開できます。さらに、Web アプリケーションは、PgBouncer に基づいたネイティブ接続プーラーを利用できます。

CloudNativePG は、もともと EDB によってビルドされ、Apache License 2.0 の下でオープンソースをリリースしました。 CNCF Sandbox in September 2024 に送信されました。 source code repository is in Github 。

注釈: *Operator Capability Levels model* に基づいて、ユーザーは CloudNativePG オペレーターからの**「レベル V - 自動パイロット」**機能のサブセットを期待できます。

1.1 サポートされている Kubernetes ディストリビューション

CloudNativePG の各マイナーリリースは、さまざまな Kubernetes バージョン、通常、マイナーバージョンが最初にリリースされたときに CNCF によってサポートされているバージョンで動作するように設計されています。

詳細は **サポートされているリリース** ページを参照してください。

1.2 コンテナイメージ

CloudNativePG community は、オペレーターと PostgreSQL オペランドの両方のコンテナイメージを維持します。

1.2.1 オペレーター

CloudNativePG オペレーターコンテナイメージは、cloudnative-pg で入手できます。

3 つの異なるフレーバーで

- Debian 12 ディストリビューション
- Red Hat UBI 9 micro サフィックス `-ubi9`
- Red Hat UBI 8 micro サフィックス `-ubi8`

Red Hat UBI イメージは、主に OLM 使用を目的としています。

1.2.2 オペランド

PostgreSQL オペランドコンテナイメージは、複数のアーキテクチャにわたって、すべての PGDG supported versions of PostgreSQL で postgres-containers から直接利用できます。

毎日のジョブにより、スタック全体の重大な脆弱性 CVE が迅速に対処されます。

さらに、コミュニティは *PostGIS extension* のイメージを提供しています。

1.3 主な機能

- 外部ツールを必要とせずに、高可用性を実現する Kubernetes API サーバーとの直接統合
- 最も調整されたレプリカ
- レプリカの自動再作成を促進することによるプライマリインスタンスの
- フェイルオーバーを介した自己修復機能
- 選択したレプリカの昇格によるプライマリインスタンスの計画的なスイッチオーバー
- スケールアップ/ダウン機能
- 任意の数のインスタンスの定義最小 1 - 1 つのプライマリサーバー
- アプリケーションをクラスターの唯一のプライマリサーバーに接続するための_read-write_サービスの定義
- _read-only_サービスの定義、ワークロードを読み取るためのインスタンスにアプリケーションを接続するため

- クラスターを介した特定の人気の Postgres 拡張機能を含む PostgreSQL 構成の宣言管理 spec pgaudit 、auto_explain 、pg_stat_statements 、および pg_failover_slots
- Postgres のロール、ユーザー、グループの宣言的管理
- Postgres データベースの宣言的管理
- PVC テンプレートを使用したローカル永続ボリュームのサポート
- ポッドの永続ボリュームストレージの再利用
- WAL ファイルとテーブルスペースの個別のボリューム
- 一時テーブルスペースを含む Postgres テーブルスペースの宣言的管理
- PostgreSQL マイナーバージョンのローリングアップデート
- オペレーターアップグレードのインプレースまたはローリング更新
- TLS 接続とクライアント証明書認証
- カスタム TLS 証明書のサポート cert-manager との統合を含む
- オブジェクトストアへの継続的な WAL アーカイブ AWS S3 および S3 互換、Azure Blob Storage、および Google Cloud Storage
- ボリュームスナップショットのバックアップ基になるストレージクラスでサポートされている場合
- オブジェクトストアのバックアップ AWS S3 および S3 互換、Azure Blob Storage、および Google Cloud Storage
- ボリュームスナップショットまたはオブジェクトストアの既存のバックアップからのフルリカバリーおよびポイントインタイムリカバリー
- PostgreSQL のメジャーアップグレードを含む、既存の PostgreSQL データベースのオフラインインポート
- PostgreSQL ネイティブ論理レプリケーション宣言的、Subscription リソースを介した PostgreSQL のメジャーアップグレードを含む既存の PostgreSQL データベースのオンラインインポート
- 宣言的な方法での PostgreSQL クラスター全体、またはインスタンスのサブセットのフェンシング
- 宣言的な方法での PostgreSQL クラスターの休止状態
- クォーラムベースおよび優先度ベースの同期レプリケーションのサポート
- クラスターレベルでの HA 物理レプリケーションスロットのサポート
- ユーザー定義の物理レプリケーションスロットの同期
- スタンバイからのバックアップ
- バックアップ保持ポリシーリカバリウィンドウに基づいて、オブジェクトストアのみ
- 並列 WAL アーカイブと復元により、データベースが大量の書き込みシステムでの WAL 生成に追いつくことができます
- オブジェクトストアにアップロードされたバックアップファイルのタグ付けをサポートして、オブジェクトストアレイヤーでオプションの保持管理を有効にします

- 複数の Kubernetes クラスターにまたがる PostgreSQL 分散トポロジのレプリカクラスター。制御されたスイッチオーバーのサポートを備えたプライベート、パブリック、ハイブリッド、およびマルチクラウドアーキテクチャを有効にします。
- 遅延レプリカクラスター
- PgBouncer を使用した接続プーリング
- `nodeSelector` を介したノードアフィニティのサポート
- `metrics` ポート 9187 を介したプロメテウスのユーザー定義メトリックのネイティブなカスタマイズ可能なエクスポーター
- JSON 形式の PostgreSQL エラーメッセージの標準出力ログ
- ポッドの `readOnlyRootFilesystem` セキュリティコンテキストを自動的に設定します
- `kubectl` 用の `cnpg` プラグイン
- 単純なバインドと検索+バインドの LDAP クライアント認証
- マルチアーチフォーマットのコンテナイメージ
- OLM のインストール

注釈: CloudNativePG は、データの永続性の管理に `StatefulSet` s を使用しません。代わりに、永続ボリューム要求 PVC を直接管理します。興味がある場合は、 **カスタムポッドコントローラ** を読んで詳細をご覧ください。

1.4 このガイドについて

クイックスタート の指示に従って、Kind または Minikube を使用してローカル Kubernetes クラスターで CloudNativePG をテストします。

Kubernetes と PostgreSQL の基本的な用語に慣れていない場合は、**始める前に** を参照してください。

_ Postgres, PostgreSQL and the Slonik Logo

は、カナダ PostgreSQL コミュニティ協会の商標または登録商標であり、その許可を得て使用しています。

第2章　始める前に

始める前に、Kubernetes と PostgreSQL に固有の用語を確認することが重要です。

2.1 Kubernetes の用語

Node

ノードは、Kubernetes の仮想または物理的なワーカーマシンであり、ポッドを実行するために必要なすべてのサービスがコントロールプレーンノードによって管理されます。

Postgres Node

Postgres **ノード**は、PostgreSQL ワークロードの実行専用の Kubernetes ワーカーノードです。これは、`node-role.kubernetes.io` ラベルとテイントを *proposed by CloudNativePG* として適用することにより実現されます。`postgres` ノードとも呼ばれます。

Pod

ポッドは、Kubernetes クラスターに展開できる最小のコンピューティングユニットであり、ネットワークとストレージを共有する 1 つ以上のコンテナで構成されます。

Service

service は、ポッドのグループで実行され、アプリケーション全体のサービス検出、ロードバランシング、フェイルオーバーなどの重要な機能を標準化するアプリケーションをネットワークサービスとして公開する抽象化です。

Secret

シークレットは、パスワード、アクセスキー、トークンなどの少量の機密データを保存し、ポッドで使用するように設計されたオブジェクトです。

Storage Class
: **ストレージクラス** を使用すると、管理者は、プロビジョナー AWS EBS など、再利用ポリシー、マウントオプション、ボリューム拡張などを含むクラスター内のストレージのクラスを定義できます。

Persistent Volume

永続ボリューム PV は、管理者によって手動でプロビジョニングされた、または**ストレージクラス**コントローラによって動的にプロビジョニングされたストレージを表す Kubernetes クラスター内のリソースです。PV は、**永続的なボリューム要求**を使用してポッドに関連付けられ、そのライフサイクルはそれを使用するポッドから独立しています。通常、PV はネットワークボリューム、特にパブリッククラウドでは。**local persistent volume* (LPV)* は、それを使用するポッドが実行されている特定のノードにのみ存在する永続ボリュームです。

Persistent Volume Claim

永続的なボリューム要求 PVC は、ストレージの要求を表します。これには、サイズ、アクセスモード、または特定のストレージクラスが含まれる場合があります。ポッドがノードリソースを消費する方法と同様に、PVC は PV のリソースを消費します。

Namespace

名前空間は、Kubernetes クラスターの論理的で分離されたサブセットであり、より広範な物理クラスター内の**仮想クラスター**として見ることができます。名前空間を使用すると、管理者はプロジェクト、部門、チームなどに基づいて分離された環境を作成できます。

RBAC

ロールベースセキュリティ としても知られる **ロールベースのアクセス制御** RBAC は、コンピューターシステムのセキュリティで使用され、システムのネットワークとリソースへのアクセスを許可されたユーザーのみに制限する方法です。Kubernetes には、名前空間とクラスターレベルでロールを制御し、特定のリソースと個人に関連付けるネイティブ API があります。

CRD

カスタムリソース定義 CRD は、Kubernetes API の拡張機能であり、開発者は**カスタムリソース**と呼ばれる新しいデータ型とオブジェクトを作成できます。

Operator

オペレーターは、1 つ以上のアプリケーションまたは特定のサービスを管理するときに通常人間のオペレーターが実行する手順を自動化するカスタムリソースです。オペレーターは、Kubernetes を支援して、リソースの定義された状態が観察された状態と常に一致するようにします。

kubectl

`kubectl` は、Kubernetes クラスターの管理に使用されるコマンドラインツールです。

CloudNativePG には、コミュニティでサポートされている Kubernetes バージョンが必要です。詳細は **サポートされているリリース** ページを参照してください。

2.2 PostgreSQL の用語

インスタンス「IP アドレス」と「TCP ポート」のペア通常は 5432 で実行およびリッスンする Postgres サーバープロセス。

プライマリ読み取り操作と書き込み操作の両方を受け入れることができる PostgreSQL インスタンス。

レプリカクラスター内の唯一のプライマリインスタンスから複製する PostgreSQL インスタンス。先行書き込みログ WAL レコードのストリームを読み取ることにより更新されます。レプリカは、**スタンバイ** または **セカンダリ** サーバーとしても知られています。PostgreSQL は、物理的ストリーミングレプリケーション非同期/同期とファイルベースのログ配布非同期に依存しています。

ホットスタンバイ **レプリカ**が読み取り専用のワークロードを受け入れられるようにする PostgreSQL 機能。

クラスター高可用性 HA クラスターとして意図され、単一のプライマリとオプションの任意の数のレプリカで構成される PostgreSQL インスタンスのセット。

レプリカクラスター選択した PostgreSQL クラスターから継続的リカバリモードにある CloudNativePG `Cluster` 。通常は Kubernetes クラスターの外部にあります。これは、プライベート、パブリック、ハイブリッド、およびマルチクラウドのコンテキストでのマルチクラスター展開を有効にする機能です。

指定されたプライマリ別の PostgreSQL クラスターから継続的リカバリーにあり、レプリカクラスターがプライマリになった場合にプライマリになるように指定されているレプリカクラスター内の PostgreSQL スタンバイインスタンス。

スーパーユーザー PostgreSQL では、 **スーパーユーザー** は、`LOGIN` と `SUPERUSER` の両方の特権を持つロールです。セキュリティ上の理由から、CloudNativePG は、ローカルの Unix ドメインソケットを介して `peer` 認証を介して `postgres` ユーザーとして `postgres` データベースに接続することにより、管理タスクを実行します。

WAL

先行書き込みロギング WAL は、データベース管理システムのデータの整合性を保証する標準の方法です。

PVC グループ CloudNativePG の用語における PVC グループは、同じ PostgreSQL インスタンス、つまり PGDATA を含むメインボリューム `storage` と WAL のボリューム `walStorage` に属する関連 PVC のグループです。

RTO 「recovery Time Objective」の頭字語、アプリケーションに悪影響を与えることなくシステムを利用できない時間。

RPO 「目標復旧ポイント」の頭字語で、ディザスターリカバリーシナリオに従った許容可能なデータ損失のレベルの計算。

2.3 クラウド用語

リージョン クラウドの **リージョン** は、 **アベイラビリティーゾーン**で編成された隔離された独立した地理的エリアです。リージョン内のゾーンの往復ネットワーク遅延はほとんどありません。

ゾーン クラウドの *アベイラビリティーゾーン** ゾーン*としても知られるは、リソースを展開できるリージョンのエリアです。通常、アベイラビリティーゾーンは、データセンターまたは同じデータセンターの分離された建物に対応します。

2.4 次に何をするか

用語を理解したところで、選択したクラウド環境にオペレーターを展開する前に *test CloudNativePG on your laptop using a local cluster* を決定できます。

第3章　ユースケース

CloudNativePG は、完全なクラウドネイティブエクスペリエンスを実現するために、同じ Kubernetes クラスター内にあるアプリケーションと連携するように設計されています。

ただし、データベースは Kubernetes クラスター内でホストできますが、アプリケーションは同時にコンテナ化できず、VM などの_従来の環境_で実行する必要がある場合があります。

3.1 ケース 1Kubernetes 内のアプリケーション

通常、アプリケーションとデータベースは、Kubernetes クラスター内の同じ名前空間で実行されます。

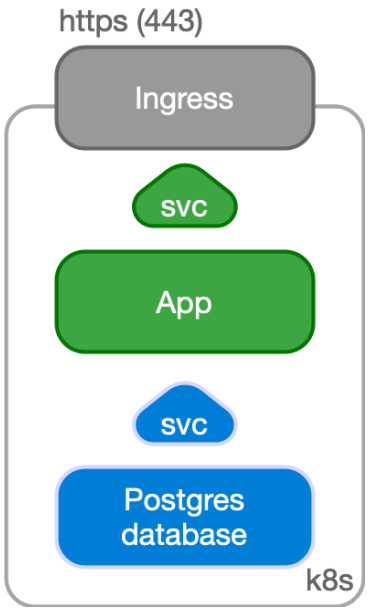


図 1: Application and Database inside Kubernetes

アプリケーションは通常ステートレスで、標準の `Deployment` として管理され、複数のレプリカが異なる Kubernetes ノードに分散され、`ClusterIP` サービスを介して内部公開されます。

サービスは、 `Ingress` およびプロバイダーのロードバランサー機能を介して、HTTPS を介してエンドユーザーに外部公開されます。

アプリケーションは、バックエンドの PostgreSQL データベースを使用して、信頼性の高い永続的な方法で状態を追跡します。アプリケーションは、TLS 接続を介して、現在のプライマリインスタンスをポイントする CloudNativePG によって定義された `Cluster` リソースによって公開される読み取り/書き込みサービスを参照します。`Cluster` リソースは、単一のプライマリと複数のスタンバイアーキテクチャのロジックを埋め込み、Postgres での高可用性クラスターの管理の複雑さを隠蔽します。

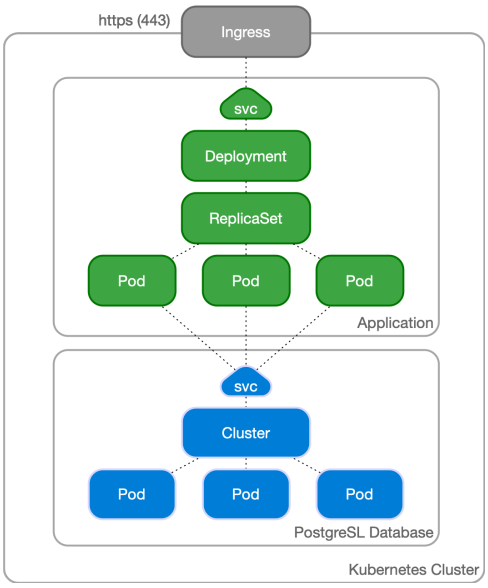


図 2: Close-up view of application and database inside Kubernetes

3.2 ケース 2Kubernetes 外部のアプリケーション

もう 1 つの考えられるユースケースは、Kubernetes 内で PostgreSQL データベースを管理し、アプリケーションをその外部たとえば仮想化環境に持たせることです。この場合、PostgreSQL は、Kubernetes で定義された Ingress リソース通常は サービスマネージメント ページで説明している `LoadBalancer` サービスタイプに対応する IP アドレスまたはホスト名と TCP ポートで表されます。

アプリケーションは、PostgreSQL への TLS 接続の恩恵を引き続き受けられます。

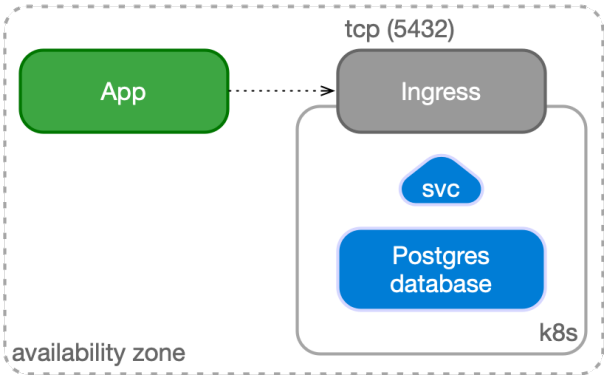


図 3: Application outside Kubernetes

第4章　アーキテクチャ

ヒント: より深く理解するには、 *Recommended Architectures for PostgreSQL in Kubernetes* というタイトルの CNCF ブログ投稿の記事を読むことをお勧めします。これは、Kubernetes での PostgreSQL 展開のベストプラクティスとデザインの考慮事項に関する貴重な洞察を提供します。

このドキュメントページでは、Kubernetes に PostgreSQL を展開する際に、堅牢なビジネス継続戦略を実装するための主要なアーキテクチャの考慮事項の概要を提供します。これらの考慮事項には次のものが含まれます。

- ** **マルチアベイラビリティーゾーン *Kubernetes* クラスター**

vs.　**単一のアベイラビリティーゾーン *Kubernetes* クラスター** ** ストレッチクラスター 3 つ以上のアベイラビリティーゾーン全体での展開と非ストレッチクラスター単一のアベイラビリティーゾーン内での展開の違いを評価します。

- ***PostgreSQL* ワークロードのノードの予約** 特定のワーカーノードを `postgres` タスク専用にすることにより PostgreSQL ワークロードを分離し、最適なパフォーマンスを保証し、他のワークロードからの干渉を最小限に抑えます。
- ***PostgreSQL* アーキテクチャ**単一の Kubernetes クラスター内での効果的な PostgreSQL 展開を設計して、高可用性とパフォーマンス要件を満たす。
- ***Kubernetes* クラスター全体のデプロイメント**複数の Kubernetes クラスターにまたがる PostgreSQL アーキテクチャを計画および実装して、包括的なディザスターリカバリー機能を提供します。

4.1 状態の同期

PostgreSQL はデータベース管理システムであるため、Kubernetes で**ステートフルワークロード**として扱う必要があります。ステートレスアプリケーションは、主にトラフィックリダイレクションを使用して高可用性 HA とディザスターリカバリー DR を実現しますが、データベースの場合、次のいずれかを採用して、できれば連続的かつ瞬間的な方法で、状態を複数の場所にレプリケートする必要があります 2 つの戦略

- **ストレージレベルのレプリケーション**、通常は永続ボリューム
- **アプリケーションレベルのレプリケーション**、この特定の場合 PostgreSQL

CloudNativePG は、簡単な理由でアプリケーションレベルのレプリケーションに依存しています。PostgreSQL データベース管理システムには、**ログの先行書き込み WAL 配送** に基づいた堅牢で信頼性の高いビルトイン**物理レプリケーション** 機能が付属しています。10 年以上、世界中の何百万ものユーザーが実稼働環境で使用していました。

PostgreSQL は、ネットワークを介した非同期および同期ストリーミングレプリケーションの両方と、非同期ファイルベースのログ配布通常はフォールバックオプションとして使用される、オブジェクトストアに WAL ファイルを保存するなどをサポートしています。レプリカは通常_スタンバイサーバー_と呼ばれ、_ホットスタンバイ_機能のおかげで、読み取り専用のワークロードに使用することもできます。

重要: **PostgreSQL を使用したストレージレベルのレプリケーションをお勧めしません**が、CloudNativePG ではその戦略を採用できます。詳細については、KubeCon NA 2022 での Chris Milsted と Gabriele Bartolini による Data On Kubernetes, Deploying And Running PostgreSQL And Patterns For Databases In a Kubernetes Cluster というタイトルの講演を参照してください。

このトピックが詳細にカバーされている場所。

4.2 Kubernetes アーキテクチャ

Kubernetes は、冗長、低遅延、プライベートネットワーク接続を介して相互に接続されている別の物理的な場所データセンター、障害ゾーン、またはより頻繁に**アベイラビリティーゾーン**としても知られる場所にまたがる可能性をネイティブに提供します。

分散システムであるため、単一ゾーンの障害に対するコントロールプレーンの復元力を高めるために、Kubernetes クラスターの推奨最小アベイラビリティーゾーンの数は 3 です。詳細については、Running in multiple zones を参照してください。これは、**各データセンターが常にアクティブ**であり、ワークロードを同時に実行できることを意味します。

注釈: パブリッククラウドプロバイダーのマネージド Kubernetes サービスのほとんどは、各リージョンに 3 つ以上のアベイラビリティーゾーンを既に提供しています。

4.2.1 マルチアベイラビリティーゾーン Kubernetes クラスター

3 つ以上のゾーンを備えたマルチアベイラビリティーゾーンの Kubernetes アーキテクチャは、PostgreSQL の使用にお勧めします。このシナリオは、クラウドプロバイダーによって管理される Kubernetes サービスの一般的なシナリオです。

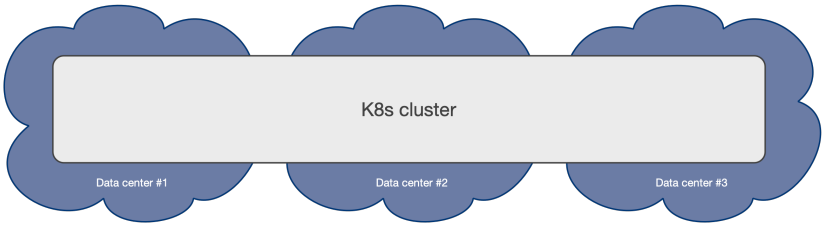


図 1: Kubernetes cluster spanning over 3 independent data centers

このようなアーキテクチャにより、CloudNativePG オペレーターは、すべてのアベイラビリティーゾーンをアクティブとして扱うことにより、単一の Kubernetes クラスター内のゾーンにわたって `Cluster` リソー

スのライフサイクル全体を制御できます。これには、他の操作の中で、宣言的方法でワークロードの **スケジューリング** が含まれますアフィニティルール、トレランス、ノードセレクターなど)、自動フェイルオーバー、自己修復、および更新。すべては、単一の Kubernetes クラスター内のゾーンを超えてシームレスに動作します。

PostgreSQL **アーキテクチャ** を参照してください。

ストレージ、ワーカーノード、およびアベイラビリティーゾーンレベルでのシェアードナッシング展開を介して、同じ Kubernetes クラスター内で PostgreSQL クラスターをデザインする方法の詳細については、以下のセクションを参照してください。

さらに、 *Kubernetes* **クラスター全体のデプロイメント** を活用できます。

さまざまなリージョンで「パッシブ」 *PostgreSQL replica clusters* をホスティングし、宣言的構成を介して管理する分散 PostgreSQL トポロジ。このセットアップは、ディザスターリカバリー DR、読み取り専用操作、またはクロスリージョンの可用性に最適です。

重要: 各オペレーター展開は、ローカル Kubernetes クラスター内の操作のみを管理できます。制御されたスイッチオーバーや予期しないフェイルオーバーなどの Kubernetes クラスターにわたる操作の場合、GitOps などを介して手動で、または高レベルのクラスター管理ツールを使用して、調整を処理する必要があります。

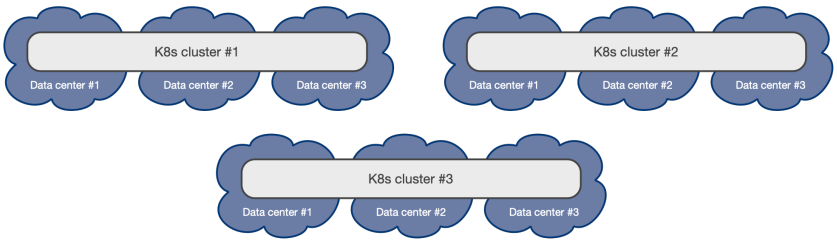


図 2: Example of a multiple Kubernetes cluster architecture distributed over 3 regions each with 3 independent data centers

4.2.2 単一のアベイラビリティーゾーン Kubernetes クラスター

Kubernetes クラスターにアベイラビリティーゾーンが 1 つだけある場合でも、CloudNativePG は、PostgreSQL データベースの HA および DR の結果を向上させるための多くの機能を提供し、可能な限り単一障害点 SPoF をゾーンのレベルにプッシュします。つまり、CloudNativePG クラスターに障害が発生する前に、ゾーンを停止する必要があります。

このシナリオは、1 つのデータセンターのみが使用できる自己管理のオンプレミスの Kubernetes クラスターの一般的なシナリオです。

単一のアベイラビリティーゾーン Kubernetes クラスターは、低遅延接続の範囲内で **2 つのデータセンター**のみが使用可能な場合、通常は同じ大都市圏で、唯一の実行可能なオプションです。2 つのゾーンのみがあると、マルチアベイラビリティーゾーンの Kubernetes クラスターを作成できません。これには、少なくとも 3 つのゾーンが必要です。その結果、ユーザーはアクティブ/パッシブ構成で 2 つの別個の Kubernetes クラスターを作成し、2 番目のクラスターは主にディザスターリカバリーに使用される *replica cluster feature* を参照してください。

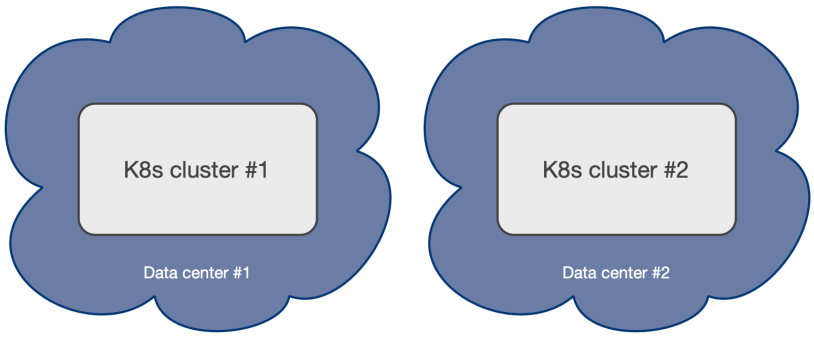


図 3: Example of a Kubernetes architecture with only 2 data centers

---

ヒント: Kubernetes の取り組みの初期段階にある場合は、このドキュメントをインフラストラクチャチームと共有してください。 2 つのデータセンターのセットアップは、従来のベアメタルまたは VM ベースのインフラストラクチャから Kubernetes への「リフトアンドシフト」移行の結果である可能性があり、3+ゾーンシナリオで Kubernetes が提供するメリットは知られていない可能性があります、またはインフラストラクチャアーキテクチャの設計時に対処されました。最終的に、他の 2 つに接続された 3 番目の物理的な場所は、日常の複雑さをアプリケーションレベルから物理的インフラストラクチャレベルに移動することにより、インフラストラクチャの全体的なコストを削減するため、組織にとって検討すべき有効なオプションを表す可能性があります。

PostgreSQL アーキテクチャ を参照してください。

ストレージおよびワーカーノードレベルのみでのシェアードナッシング展開を介して、単一のアベイラビリティーゾーン Kubernetes クラスター内で PostgreSQL クラスターをデザインする方法の詳細については、以下のセクションを参照してください。HA の場合、このようなシナリオでは、PostgreSQL インスタンスが別のワーカーノードに配置され、同じストレージを共有しないことがさらに重要になります。

DR の場合、追加の *Kubernetes クラスター全体のデプロイメント* を使用して、“passive” *PostgreSQL replica clusters* をホスティングする分散トポロジを定義することにより、単一ゾーンより上に SPoF をプッシュできます。このシナリオの他の Kubernetes ワークロードと同様に、Kubernetes クラスターのプライマリとしての昇格を手動で行う必要があります。

replica cluster feature を介して、最初にプライマリクラスターを降格し、次にレプリカクラスターを昇格させることにより、分散 PostgreSQL トポロジを定義し、データセンター間の制御されたスイッチオーバーを調整できます。以前のプライマリを再クローンする必要はありません。フェールオーバーは完全に宣言型になりましたが、オペレーターは単一の Kubernetes クラスター内でのみ機能できるため、Kubernetes クラスター間の自動フェイルオーバーは CloudNativePG のスコープ内ではありません。

重要: CloudNativePG は、高レベルのオペレーターまたは管理ツールを介してさまざまな Kubernetes クラスターにわたって PostgreSQL アクティブ/パッシブトポロジを調整するために必要なすべてのプリミティブとプローブを提供します。

4.2.3 PostgreSQL ワークロードのノードの予約

マルチアベイラビリティーゾーン環境で動作しているか、より重要には、単一のアベイラビリティーゾーン内で動作しているかにかかわらず、運用環境で特定のワーカーノードを `postgres` 専用にすることにより、PostgreSQL ワークロードを分離することを強くお勧めします。PostgreSQL ワークロードの実行専用の Kubernetes ワーカーノードは、**Postgres ノード** または `postgres` ノードと呼ばれます。このアプローチにより、データベース操作の最適なパフォーマンスとリソース割り当てが保証されます。

ヒント: 一般的な経験則として、Postgres ノードは 3 の倍数で展開します。理想的には、アベイラビリティーゾーンごとに 1 つのノードを使用します。 3 つのノード 1 つのプライマリと 2 つのスタンバイレプリカを含む PostgreSQL クラスターが異なるノードに分散され、フォールトトレランスと可用性が向上するため、3 つのノードが最適な数です。

Kubernetes では、これは宣言的な方法でノードラベルとテイントを使用して、インフラストラクチャ・アズ・コード IaC の実践に合わせて実現できます。ラベルはノードが `postgres` ワークロードを実行できることを保証し、テイントは非 `postgres` ワークロードが実行されないようにするのに役立ちます。そのノードでスケジュールされています。

重要: この方法は、コンピューティングリソースと、ローカルに接続されたディスクを使用する場合はストレージの両方の点で、PostgreSQL ワークロードを他のワークロードから分離する最も簡単な方法です。異なる PostgreSQL クラスターが同じノードを共有する場合がありますが、ラベルとテイントを使用して、ノードが特定の `Cluster` の単一のインスタンス専用になるようにすることにより、これをさらに進めることができます。

4.2.4 提案されたノードラベル

CloudNativePG は、 `node-role.kubernetes.io/postgres` ラベルを使用することをお勧めします。これは予約ラベル`*.kubernetes.io` であるため、ワーカーノードが作成された後にのみ適用できます。

`postgres` ラベルをノードに割り当てるには、次のコマンドを使用します。

```
kubectl label node <NODE-NAME> node-role.kubernetes.io/postgres=
```

`Cluster` リソースが `postgres` ノードでスケジュールされるようにするには、マニフェストで`.spec.affinity.nodeSelector` スタンザを正しく構成する必要があります。次に例を示します。

```
spec:
  # <snip>
  affinity:
    # <snip>
    nodeSelector:
      node-role.kubernetes.io/postgres: ""
```

4.2.5 提案されたノードテイント

CloudNativePG は、 node-role.kubernetes.io/postgres テイントを使用することをお勧めします。

postgres テイントをノードに割り当てるには、次のコマンドを使用します。

```
kubectl taint node <NODE-NAME> node-role.kubernetes.io/postgres=:NoSchedule
```

postgres テイントを持つノードで Cluster リソースがスケジュールされるように保証には、マニフェストで.spec.affinity.tolerations スタンザを正しく構成する必要があります。次に例を示します。

```
spec:
  # <snip>
  affinity:
    # <snip>
    tolerations:
      - key: node-role.kubernetes.io/postgres
        operator: Exists
        effect: NoSchedule
```

4.3 PostgreSQL アーキテクチャ

CloudNativePG は、非同期および同期ストリーミングレプリケーションに基づいてクラスターをサポートし、次の仕様で同じ Kubernetes クラスター内の複数のホットスタンバイレプリカを管理します。

- 1 つのプライマリ、HA 用のオプションの複数のホットスタンバイレプリカ
- アプリケーションで使用可能なサービス
- -rw アプリケーションはクラスターのプライマリインスタンスにのみ接続します b_tran_6 -ro アプリケーションは読み取り専用ワークロードオプショナルのホットスタンバイレプリカにのみ接続します
- -r アプリケーションは読み取り専用のインスタンスに接続しますワークロードのみオプショナル
- PostgreSQL クラスターの復元力を向上させるために推奨されるシェアードナッシングアーキテクチャ
- PostgreSQL インスタンスは別の Kubernetes ワーカーノードに存在し、ネットワークのみを共有する必要があります。その結果、インスタンスはストレージを共有せず、できれば自分が作成したノードに接続されたローカルボリュームを使用する必要があります。run on
- PostgreSQL インスタンスは、同じ Kubernetes クラスター/リージョン内の異なるアベイラビリティーゾーンに存在する必要があります

重要: *Cluster* 構成の`managed.services` セクションを介して上記のサービスを構成できます。これは、サービスの数を減らし、タイプを選択することにより実行できますデフォルトは`ClusterIP` です。詳細については、 サービスマネージメント を参照してください。

以下。

次の図は、3 つの異なるアベイラビリティーゾーンにまたがる PostgreSQL クラスターに推奨されるシェアードナッシングアーキテクチャの単純化したビューを提供し、それぞれが PostgreSQL データ専用のローカルストレージを備えた別のノードで実行されます。

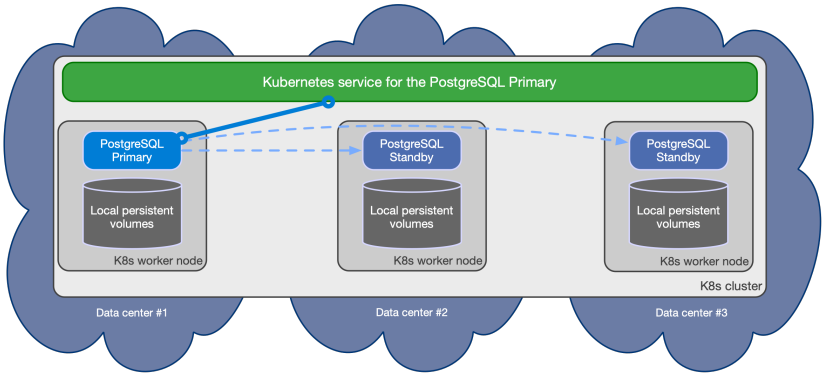


図 4: Bird-eye view of the recommended shared nothing architecture for PostgreSQL in Kubernetes

CloudNativePG は、クラスターのトポロジが変更された場合に、上記のサービスの更新を自動的に処理します。たとえば、フェールオーバーが発生した場合、`-rw` サービスを自動的に更新して昇格したプライマリをポイントし、アプリケーションからのトラフィックがシームレスにリダイレクトされるようにします。

参考:

CloudNativePG が同期設定を含む PostgreSQL レプリケーションに依存する方法の詳細については、 **レプリケーションユーザーについて** を参照してください。

参考:

同じ Kubernetes クラスター内のステートレスアプリケーションから CloudNativePG に接続する方法については、 **アプリケーションから接続する** を参照してください。

参考:

接続プーラーとして PgBouncer を利用し、アプリケーションと PostgreSQL クラスターの間にアクセスレイヤーを作成する方法については、 **接続プーリング** を参照してください。

4.3.1 読み取り/書き込みワークロード

アプリケーションは、次の図に示すように、Kubernetes オペレーターによって_currentprimary_として選択された PostgreSQL インスタンスに接続することを決定できます。

アプリケーションは、 `-rw` サフィックスサービスを使用できます。

プライマリが一時的または永続的に使用不可になった場合、高可用性の目的で、CloudNativePG はフェイルオーバーをトリガーし、`-rw` サービスをクラスターの別のインスタンスをポイントします。

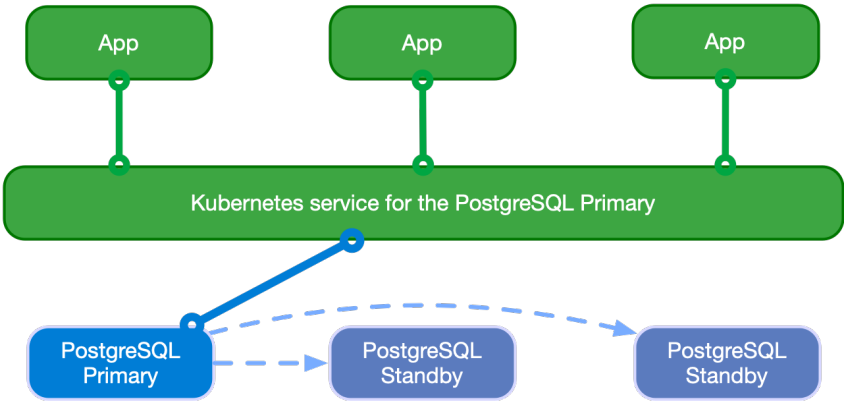


図 5: Applications writing to the single primary

4.3.2 読み取り専用ワークロード

重要: アプリケーションは制限に注意する必要があります Hot Standby

は、これらのワークロードを処理するときに PostgreSQL が動作する方法を示し、精通しています。

アプリケーションは、オペレーターが利用できる `-ro` サービスを介してホットスタンバイレプリカにアクセスできます。このサービスにより、アプリケーションはプライマリノードから読み取り専用クエリをオフロードできます。

次の図は、アーキテクチャを示しています。

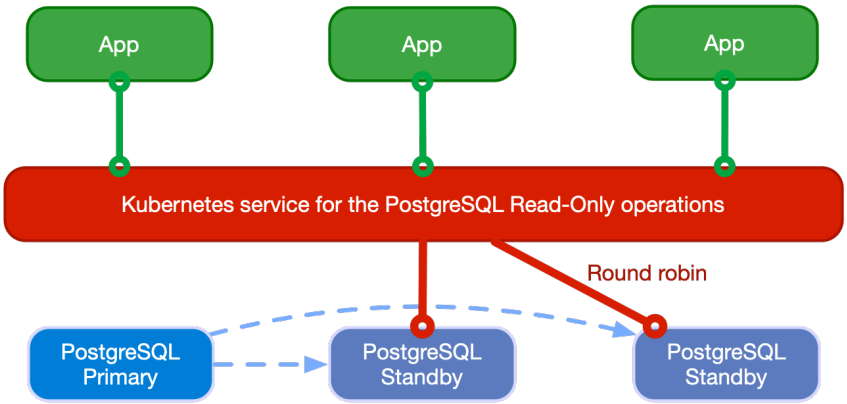


図 6: Applications reading from hot standby replicas in round robin

アプリケーションは、 `-r` サービスを介して PostgreSQL インスタンスにアクセスすることもできます。

4.4 Kubernetes クラスター全体のデプロイメント

注釈: CloudNativePG は、このセクションで説明するように、レプリカクラスターを使用して分散 PostgreSQL トポロジを定義できる機能を介して、複数の Kubernetes クラスターにわたる PostgreSQL の展開をサポートします。

分散 PostgreSQL クラスターでは、常にプライマリとして機能する 1 つの PostgreSQL インスタンスのみが存在できます。これは、アプリケーションが常に単一の Kubernetes クラスター内にのみ書き込むことができることを意味します。

ただし、ビジネス継続性の目標に関しては、次のことが基本です。

- PostgreSQL バックアップデータを複数の場所、リージョンに保存し、場合によっては異なるプロバイダーを使用することにより、グローバル**リカバリポイント目標** PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} を削減しますディザスターリカバリー
- プライマリ Kubernetes クラスター高可用性を超えた PostgreSQL レプリケーションを利用することにより、グローバル**リカバリ時間目標** *RTO と RPO のインパクト* を削減します。

上記の懸念事項に対処するために、CloudNativePG は、さまざまな Kubernetes クラスターに分散され、プライマリ PostgreSQL クラスターと 1 つ以上の PostgreSQL レプリカクラスターで構成される PostgreSQL トポロジの概念を導入します。この機能は、**レプリカクラスターを使用した分散 PostgreSQL トポロジ**と呼ばれ、プライベート、パブリック、ハイブリッド、およびマルチクラウドのコンテキストでのマルチクラスター展開が有効になります。

レプリカクラスターは、継続的リカバリーにある別個の `Cluster` リソースであり、WAL アーカイブからの WAL シッピングを介して、またはプライマリまたはスタンバイカスケードからのストリーミングレプリケーションを介して、別のソースからレプリケートされます。

次の図は、2 つの異なる Kubernetes クラスターにまたがる PostgreSQL クラスターを示しています。プライマリクラスターは最初の Kubernetes クラスターにあり、レプリカクラスターは 2 番目にあります。2 番目の Kubernetes クラスターは、会社のディザスターリカバリークラスターとして機能し、災害が発生して最初のクラスターが使用不可になった場合にアクティブ化される準備が整います。

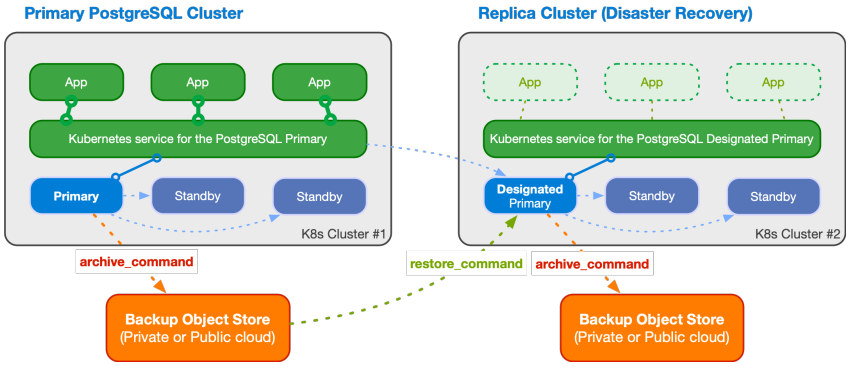


図 7: An example of multi-cluster deployment with a primary and a replica cluster

レプリカクラスターは、プライマリクラスターと同じアーキテクチャを持つことができます。プライマリインスタンスの代わりに、レプリカクラスターには**指定されたプライマリ**インスタンスがあります。これ

は、ストリーミングレプリケーションレプリケーション対称アーキテクチャで任意の数のカスケードスタンバイサーバーを持つスタンバイサーバーです。

指定されたプライマリは、いつでも昇格でき、レプリカクラスターを、書き込み接続を受け入れることができるプライマリクラスターに変換できます。これは通常、次のことによりトリガーされます。

- **人間の決定**他の PostgreSQL クラスターまたは Kubernetes クラスター全体をプライマリにすることを選択します。データの損失を回避し、元のプライマリが再クローン化されずに続くことができるように保証特に大規模なデータセットの場合、最初に現在のプライマリを降格し、次に CloudNativePG が提供する API を使用して指定されたプライマリを昇格させます。
- **予期しない障害** Kubernetes クラスター全体に障害が発生すると、データ損失が発生する可能性がありますが、PostgreSQL レプリカクラスターを昇格させることにより、他の Kubernetes クラスターにフェールオーバーする必要があります。

警告: CloudNativePG は、単一の Kubernetes クラスターを超える権限がないため、クラスター間の自動フェイルオーバーを実行できません。このような操作は手動で実行するか、マルチクラスター/フェデレーションクラスター対応機関に委任する必要があります。

重要: CloudNativePG では、宣言的構成を介して分散トポロジを制御でき、GitOps を含むインフラストラクチャ・アズ・コード IaC プロセスの一部としてこれらの手順を自動化できます。

上記の例で指定されたプライマリは、WAL ストリーミング `primary_conninfo` を介してフィードされ、`restore_command` および `barman-cloud-wal-restore` を介したファイルベースの WAL 配送のフォールバックオプションを使用します。

CloudNativePG では、複数のレプリカクラスターを使用したトポロジを定義できます。より少ない数のレプリカクラスターを定義し、クラスターがプライマリに昇格したときにこの数を増やすこともできます。

参考:

物理レプリカクラスターがどのように動作するか、およびさまざまな Kubernetes クラスターにわたって読み取り専用クラスターを使用した分散トポロジを定義する方法の詳細については、 レプリカクラスター を参照してください。このアプローチは、グローバルディザスターリカバリーと高可用性 HA 戦略を大幅に強化できます。

第5章　インストールとアップグレード

5.1 Kubernetes へのインストール

5.1.1 オペレーターマニフェストを直接使用する

オペレーターは、Kubernetes の他のリソースと同様に、kubectl を介して適用される YAML マニフェストを介してインストールできます。

latest operator manifest をインストールできます

このマイナーリリースでは次のようになります。

```
kubectl apply --server-side -f \
  https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/main/releases/cnpg-
↪1.25.0-rc1.yaml
```

これは次の方法で確認できます。

```
kubectl get deployment -n cnpg-system cnpg-controller-manager
```

5.1.2 kubectl の cnpg プラグインを使用する

cnpg プラグインを使用して、静的マニフェストにあるデフォルトの構成オプションをオーバーライドできます。

たとえば、デフォルトの最新のマニフェストを生成しますが、ウォッチ名前空間を特定の名前空間のみに変更するには、次のコマンドを実行できます。

```
kubectl cnpg install generate \
  --watch-namespace "specific-namespace" \
  > cnpg_for_specific_namespace.yaml
```

より包括的な例については、 Backup {postgresql-cnpg-io-v1-Backup} ドキュメントを参照してください。

> **警告:** GKE に CloudNativePG をデプロイしており、エラー`... failed to call webhook...` を取得した場合は、公式 docs で説明しているように、デフォルトでは、ワーカーノードとコントロールプレーン間のトラフィックは、いくつかの特定のポートを除きてファイアウォールによってブロックされていることに注意してください

そしてこれによって issue 。 Webhook サービスの `targetPort` を許可されるもののいずれかに変更するか、ファイアウォールで Webhook のポート `9443` を開く必要があります。

5.1.3 最新の開発スナップショットのテスト

次の公式パッチリリースの前に CloudNativePG の最新の開発スナップショットをテストまたは評価する場合は、 cloudnative-pg/artifacts からマニフェストをダウンロードできます。

これにより、現在のトランクメインおよびサポートされている各リリースに簡単にアクセスできます。

たとえば、次の使用でオペレーターの最新のスナップショットをインストールできます。

```
curl -sSfL \
  https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/artifacts/main/manifests/operator-
↪manifest.yaml | \
  kubectl apply --server-side -f -
```

代わりに、この特定のマイナーリリースのオペレーターの最新のスナップショットを探している場合は、次を実行できます。

```
curl -sSfL \
  https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/artifacts/release-1.25/manifests/
↪operator-manifest.yaml | \
  kubectl apply --server-side -f -
```

重要: スナップショットは CloudNativePG コミュニティでサポートされておらず、運用環境での使用を想定していません。

5.1.4 Helm チャートを使用する

オペレーターは、提供されている Helm chart を使用してインストールできます。

5.1.5 OLM を使用する

CloudNativePG は、 Operator Lifecycle Manager (OLM) からインストールすることもできます

OperatorHub.io から直接。

Red Hat OpenShift での展開の場合、EDB は、Red Hat OpenShift Container Platform から入手可能な CloudNativePG の認定バージョンを提供および完全にサポートしています。

5.2 デプロイメントの詳細

Kubernetes では、オペレーターはデフォルトで Kubernetes Deployment として cnpg-system 名前空間にインストールされます。この展開の名前は、インストール方法によって異なります。マニフェストまたは cnpg プラグインを介してインストールされる場合、デフォルトで cnpg-controller-manager と呼ばれます。Helm を介してインストールされた場合、デフォルト名は cnpg-cloudnative-pg です。

注釈: Helm を使用すると、 *"values.yaml"* file の `fullnameOverride` フィールドを介してデプロイメントの名前をカスタマイズできます。

---

kubectl の describe コマンドを使用して、詳細情報を取得できます。

```
$ kubectl get deployments -n cnpg-system
NAME                 READY   UP-TO-DATE   AVAILABLE   AGE
<deployment-name>    1/1     1            1           18m
```

```
kubectl describe deploy \
  -n cnpg-system \
  <deployment-name>
```

他の展開と同様に、レプリカセットの上にあり、ローリングアップグレードをサポートします。CloudNativePG オペレーターのデフォルト構成には、単一のレプリカの展開が付属しており、ほとんどのインストールに適しています。ポッドが実行されているノードに到達できなくなった場合、ポッドは別のノードで再スケジュールされます。

オペレーターレベルでの高可用性が必要な場合、オペレーターがリーダー選択をサポートしていることを考慮すると、展開構成で複数のレプリカを指定できます。また、テイントと寛容を利用して、実際の PostgreSQL クラスターが実行されているノードでオペレーターが実行されないことを確認できます。これには、自己管理の Kubernetes インストールのコントロールプレーンが含まれる場合があります。

参考:

いくつかのデフォルトオプションをオーバーライドすることにより、オペレーターのデフォルト動作を変更できます。詳細については、 **オペレーター設定** セクションを参照してください。

5.3 アップグレード

重要: *1.14.0* **以前のリリースノート** をよくお読みください

一部のバージョンは追加の手順を必要とする場合があるため、アップグレードを実行する前に。

CloudNativePG オペレーターのアップグレードは、2 段階のプロセスです。

1. コントローラと関連する Kubernetes リソースをアップグレードする

2. すべての PostgreSQL ポッドで実行されているインスタンスマネージャーをアップグレードする

リリースノートに別の記載がない限り、最初のステップは、通常、プレーンな Kubernetes インストールの新しいバージョンのマニフェストを適用するか、使用するディストリビューションのネイティブパッケージマネージャーを使用して実行されます上記のセクションの指示に従ってください。

2 番目のステップは、コントローラの更新後に自動的にトリガーされます。デフォルトでは、これにより、展開されたすべての PostgreSQL クラスターのローリング更新が開始され、新しいインスタンスマネージャーを使用するように一度に 1 つのインスタンスをアップグレードします。ローリング更新は、`primaryUpdateStrategy` オプションによって制御されるスイッチオーバーで終了します。デフォルト値 `unsupervised` は、スイッチオーバーを自動的に完了します。 `supervised` に設定している場合、ユーザーは `kubectl` の `cnpg` プラグインを使用して、新しいプライマリインスタンスを手動でプロモートする必要があります。

参考:

このプロセスは、 ローリングアップデート ページで詳細に説明されています。

重要: *primaryUpdateStrategy* が`unsupervised` のデフォルト値に設定されている場合、オペレーターのアップグレードは PostgreSQL クラスターでスイッチオーバーをトリガーし、通常は無視できるダウンタイムを発生します。 PostgreSQL クラスターにインスタンスが 1 つだけある場合、*supervised* 値は`primaryUpdateStrategy` でサポートされていないため、インスタンスは自動的に再起動されます。いずれの場合も、アプリケーションは PostgreSQL に再接続する必要があります。

デフォルトのローリング更新動作は、インスタンスマネージャーのインプレース更新に置き換えることができます。このアプローチでは、PostgreSQL インスタンスの再起動が必要ないため、クラスター内のスイッチオーバーを回避します。この機能はデフォルトで無効になっていますが、以下で詳細に説明します。

5.3.1 スプレッドアップグレード

デフォルトでは、すべての PostgreSQL クラスターは同時にロールアウトされるため、特に複数のクラスターを管理する場合、リソース使用量の急増につながる可能性があります。CloudNativePG は、 *operator level* で 2 つの構成オプションを提供します

これにより、クラスターのロールアウト間、または同じクラスター内のインスタンス間で遅延を導入でき、時間の経過とともにリソース使用量を分散するのに役立ちます。

- `CLUSTERS_ROLLOUT_DELAY` さまざまな PostgreSQL クラスターデフォルト `0` のロールアウトの間で待機する秒数を定義します。
- `INSTANCES_ROLLOUT_DELAY` 同じ PostgreSQL クラスター内の個々のインスタンスのロールアウトの間で待機する秒数を定義しますデフォルト `0` 。

5.3.2 インスタンスマネージャーのインプレース更新

デフォルトでは、CloudNativePG は、オペレーターが更新されるたびに、クラスターのローリング更新を発行します。オペレーターに同梱される新しいインスタンスマネージャーは、init コンテナを介して各 PostgreSQL ポッドに追加されます。

ただし、この動作は構成を介して変更でき、インスタンスマネージャーのインプレース更新を有効にできます。これは、コンテナを生きたままにする PID 1 プロセスです。

内部的には、CloudNativePG の各インスタンスマネージャーは、完全性検証フェーズが正常に完了し、すべての内部プロセスを正常に終了した後、既存の実行可能ファイルを置き換える新しい実行可能ファイルのインジェクションをサポートします。新しいバイナリで再起動すると、インスタンスマネージャーは既に実行されている *postmaster* をシームレスに採用します。

その結果、PostgreSQL プロセスは更新の影響を受けず、スイッチオーバーを実行する必要はありません。コインの反対側は、Pod がスタート後に変更され、不変性の純粋な概念を壊すということです。

オペレーター設定 で `ENABLE_INSTANCE_MANAGER_INPLACE_UPDATES` 環境変数を`'true'` に設定することにより、この機能を有効にできます。

インプレースアップグレードプロセスでは、ポッド内の init コンテナイメージは変更されません。したがって、ポッド定義はオペレーターの現在のバージョンを反映しません。

5.3.3 バージョン間の互換性

CloudNativePG はセマンティックバージョニングに従います。同じ API バージョン内のオペレーターのすべてのリリースは、以前の API バージョンと互換性があります。現在の API バージョンは v1 で、オペレーターのバージョン 1.x.y に対応します。

新機能に加えて、オペレーターの新しいバージョンにはバグ修正と安定性の強化が含まれています。このため、各バージョンは、最も安全で安定した Postgres 環境を維持するためにリリースされるため、**オペレーターの最新バージョンにアップグレードすることを強くお勧めします。

CloudNativePG は現在、少なくとも毎月オペレーターの新しいバージョンをリリースしています。各バージョンが利用可能になったときに更新を適用できない場合は、バージョンをスキップせずに、各バージョンを順番にアップグレードして、定期的に最新の状態になることをお勧めします。

1.14.0 **以前のリリースノート** ページには、CloudNativePG のすべてのリリースバージョンで導入された変更の詳細なリストが含まれており、ソフトウェアの新しいバージョンにアップグレードする前に読む必要があります。

ほとんどのバージョンは直接アップグレード可能であり、その場合、プレーンな Kubernetes インストールに新しいマニフェストを適用するか、選択したディストリビューションのネイティブパッケージマネージャーを使用するだけで十分です。

バージョンを直接アップグレードできない場合、新しいバージョンをインストールする前に古いバージョンを削除する必要があります。これはユーザーデータに影響を与えるのではなく、オペレーター自分自身にのみ影響を与えます。

<!–

5.3.4 1.25.0 または 1.24.x へのアップグレード

重要: CloudNativePG の既存のすべてのユーザーは、バージョン 1.25.0 または少なくとも現在使用しているマイナーリリースの最新の安定バージョン 1.24.x にアップグレードすることをお勧めします。 -->

5.3.5 以前のマイナーバージョンから 1.24 へのアップグレード

警告: 上位のマイナーリリースにアップグレードするたびに、すべての中間マイナーリリースのリリースノートとアップグレード手順を確認してください。たとえば、1.22.x から 1.24 に移行する場合は、1.23 および 1.24 のリリースノートとアップグレード手順を必ず読んでください。

5.3.6 レプリカクラスターから分散トポロジへ

CloudNativePG 1.24.0 の重要な機能強化の 1 つは、レプリカクラスター機能のアップグレードです。

以前のレプリカクラスター機能は、現在「スタンドアロンレプリカクラスター」と呼ばれていますが、複数の Kubernetes クラスターにまたがるディザスターリカバリー DR および高可用性 HA シナリオでは推奨されなくなりました。スタンドアロンレプリカクラスターは、レポート、OLAP、テストデータを使用した開発環境の作成などの読み取り専用ワークロードに最適です。

DR と HA の目的で、CloudNativePG はレプリカクラスターの分散トポロジー戦略を導入するようになりました。この新しい戦略では、プライベート、パブリック、ハイブリッド、およびマルチクラウド環境、複数のリージョン、および異なるクラウドプロバイダーにまたがる PostgreSQL クラスターを構築できます。また、スイッチオーバー操作を制御する API も提供し、任意の時点で 1 つのクラスターのみがプライマリとして機能します。

この分散トポロジ戦略は、復元力とスケーラビリティを強化し、多様なインフラストラクチャ設定にわたって高可用性とディザスターリカバリー機能を必要とする最新の分散アプリケーションのための堅牢なソリューションになります。

分散 PostgreSQL セットアップに関係するすべての `Cluster` リソースを変更することにより、以前のレプリカクラスター構成から分散トポロジにシームレスに移行できます。次の手順が実行されていることを確認します。

- `externalClusters` セクションを構成して、分散トポロジに関係するすべてのクラスターを含めます。保守性と一貫性を維持するために、すべての `Cluster` リソースで同じ構成を使用することを強くお勧めします。
- 分散トポロジを反映するように `.spec.replica` スタンザの `primary` および `source` フィールドを構成します。`primary` フィールドには、分散トポロジの現在のプライマリクラスターの名前が含まれている必要がありますが、`source` フィールドには、各 `Cluster` リソースの複製元のクラスターの名前が含まれている必要があります。`enabled` フィールドは、以前に `true` または `false` に設定されていましたが、設定を解除するデフォルトにする必要があることに注意してください。

詳細については、 レプリカクラスターから分散トポロジへ を参照してください。

5.3.7 以前のマイナーバージョンから 1.23 へのアップグレード

5.3.8 ユーザー定義のレプリケーションスロット

CloudNativePG は、プライマリで定義されたすべてのレプリケーションスロットの自動同期を提供するようになりました。高可用性 HA クラスター内のスタンバイ。

スタンバイでレプリケーションスロットを手動で管理する場合、これらのレプリケーションスロットを同期から除外することが重要です。これを行わないと、CloudNativePG がスタンバイから削除する場合があります。この除外を実装するには、次の YAML 構成を利用します。この例では、'foo' で始まる名前のレプリケーションスロットは同期されません。

```
...
  replicationSlots:
    synchronizeReplicas:
      enabled: true
      excludePatterns:
      - "^foo"
```

または、同期メカニズムを完全に無効にする場合は、次の構成を使用します。

```
...
  replicationSlots:
    synchronizeReplicas:
      enabled: false
```

5.3.9 サーバーサイドでのマニフェストの適用

Kubernetes 1.29 および次のバージョンとの互換性を保証するために、CloudNativePG は Server-side apply の使用を義務付けました

オペレーターマニフェストを展開するとき。

このインストール方法を採用することは、新しい展開に問題はありませんが、`--server-side` オプションを使用して既存のオペレーターマニフェストを更新すると、以下の例のようなエラーが発生する場合があります。

```
Apply failed with 1 conflict: conflict with "kubectl-client-side-apply" using..
```

このようなエラーが発生した場合は、 `--force-conflicts` オプションを明示的に指定して競合解決を強制することにより解決できます。

```
kubectl apply --server-side --force-conflicts -f <OPERATOR_MANIFEST>
```

今後、 `kube-apiserver` は CRD の認識されたマネージャーとして自動的に認識され、この問題に関するさらなる手動介入の必要性がなくなります。

第6章　クイックスタート

このセクションでは、Kind または Minikube のいずれかを使用してローカル Kubernetes クラスターに Cloud-NativePG を展開することにより、ローカルマシンで PostgreSQL クラスターをテストする方法を説明します。

> **警告:** このセクションに含まれる手順は、デモンストレーション、テスト、および練習のみを目的としているため、実稼働環境では使用しないでください。

他の Kubernetes アプリケーションと同様に、CloudNativePG は YAML で書かれた通常のマニフェストを使用して展開されます。

このページの手順に従うと、ローカルの Kubernetes インストールで PostgreSQL クラスターを起動し、実験できるはずです。

重要: Kubernetes クラスターに接続するためには、マシンに `kubectl` がインストールされていることを確認してください。 *how to install `kubectl* <https://kubernetes.io/docs/tasks/tools/install-kubectl/>`_ の Kubernetes ドキュメントに従ってください。

6.1 パート 1: ローカル Kubernetes プレイグラウンドをセットアップする

最初の部分は、Minikube または Kind のインストールに関するものです。時間をかけてシステムについて読み、どれを続行するかを決定してください。いずれかの設定を行ったら、パート 2 に進んでください。

パート *4 Prometheus* と *Grafana* を使用してクラスターを監視する では、ローカルテスト/評価のために Prometheus と Grafana を使用したモニタリングを設定する手順も提供します

6.1.1 Minikube

Minikube は、Kubernetes をローカルで簡単に実行できるツールです。Minikube は、Kubernetes を試してみるか、日常的に開発しようとしているユーザーのために、ラップトップの仮想マシン VM 内でシングルノード Kubernetes クラスターを実行します。通常、VirtualBox と組み合わせて使用します。

詳細については、ローカルの個人環境の公式 Kubernetes documentation on how toinstall Minikube で見つけることができます。インストールしたら、次のコマンドを実行して minikube クラスターを作成します。

```
minikube start
```

これにより、Kubernetes クラスターが作成され、使用する準備が整います。次のコマンドで動作することを確認します。

```
kubectl get nodes
```

`minikube` という名前のノードが 1 つ表示されます。

6.1.2 種類

仮想マシンハイパーバイザーを使用したくない場合、Kind は、Docker コンテナ「ノード」を使用してローカル Kubernetes クラスターを実行するためのツールです。Kind は、確かに「Kubernetes IN Docker」の略です。

Quickstart の指示に従って、環境に `kind` をインストールし、次の Kubernetes クラスターを作成します。

```
kind create cluster --name pg
```

6.2 パート 2 CloudNativePG のインストール

ラップトップで Kubernetes インストールをアップして実行しているため、CloudNativePG のインストールに進むことができます。

インストールとアップグレード セクションを参照して、PostgreSQL クラスターの展開を続行してください。

6.3 パート 3 PostgreSQL クラスターを展開する

Kubernetes の他の展開と同様に、PostgreSQL クラスターを展開するには、目的の `Cluster` を定義する構成ファイルを適用する必要があります。

以下は、デフォルトのストレージクラスを使用して単純な `Cluster` を定義して、ディスク領域を割り当てます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi
```

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi
```

3 ノード PostgreSQL クラスターを作成するには、次のコマンドを実行する必要があります。

```
kubectl apply -f cluster-example.yaml
```

`get pods` コマンドでポッドが作成されていることを確認できます。

```
kubectl get pods
```

これにより、デフォルトの名前空間でポッドが検索されます。Kubernetes インストールの他のワークロードからクラスターを分離するには、クラスターを展開する新しい名前空間をいつでも作成できます。または、ラベルを使用できます。オペレーターは、特定のクラスターに関連するすべてのオブジェクトに `cnpg.io/cluster` ラベルを適用します。例

```
kubectl get pods -l cnpg.io/cluster=<CLUSTER>
```

重要: ラベルとして `cnpg.io/cluster` を使用していることに注意してください。過去に `postgresql` を見たり使用したりしたことがあるかもしれません。このラベルは非推奨であり、将来的に削除される予定です。*cnpg.io/cluster* を使用してください。

デフォルトでは、オペレーターは、オペレーターがリリースされたときに PostgreSQL の最新メジャーバージョンの利用可能な最新のマイナーバージョンをインストールします。`Cluster` 定義の `spec` セクションで `imageName` キーを設定することにより、これをオーバーライドできます。例、PostgreSQL 13.6 をインストールするには

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  # [...]
spec:
  # [...]
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:13.6
  #[...]
```

重要: 不変のインフラストラクチャパラダイムでは、常にコンテナイメージの特定のバージョンをポイントする必要があります。クラスター内の更新ポリシーとバージョンの一貫性の点で予期せぬシナリオが発生する可能性があるため、実稼働環境では`latest`や`13`のようなタグを使用しないでください。厳密な決定論的で反復可能な展開の場合、 *<image>:<tag>@sha256:<digestValue>* 形式を介してイメージ名にダイジェストを追加できます。

6.4 パート 4 Prometheus と Grafana を使用してクラスターを監視する

重要: Prometheus と Grafana のインストールは、このプロジェクトの範囲を超えています。このセクションの手順は、実験と説明のみを目的として提供されています。

このセクションでは、可観測性を実現するために Prometheus と Grafana を展開する方法、CloudNativePG クラスターを監視するための Grafana ダッシュボードを作成する方法、およびアラート条件を定義する Prometheus ルールセットを示します。

Kube-Prometheus stack 、 Helm チャートを利用します。これは、Prometheus Community によって維持されます。追加のドキュメントと背景については、プロジェクトの Web サイトを参照してください。

Kube-Prometheus-stack Helm チャートは、 Prometheus Operator Alert Manager を含む Prometheus Operator 、および Grafana デプロイメントをインストールします。

この Helm チャートの展開のための構成ファイルが含まれており、CloudNativePG クラスターのオブザーバビリティに役立つ初期設定を提供します。

6.4.1 インストール

Helm をまだインストールしていない場合は、*instructions* の指示に従ってシステムにインストールしてください。

`prometheus-community` Helm チャートリポジトリを追加し、提供するサンプル構成を使用して_Kube Prometheus stack_をインストールする必要があります。

これは、次のコマンドで実行できます。

```
helm repo add prometheus-community \
  https://prometheus-community.github.io/helm-charts

helm upgrade --install \
  -f https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/main/docs/src/
↪samples/monitoring/kube-stack-config.yaml \
  prometheus-community \
  prometheus-community/kube-prometheus-stack
```

完了すると、Prometheus、Grafana、および Alert Manager が `kube-stack-config.yaml` ファイルの値でインストールされます。

- Prometheus インストールから、 **any** `PodMonitor` *_monitoring_* を参照してください。
- Grafana インストールは、Grafana ダッシュボード `ConfigMap` を監視します。

参考:

上記のコマンドの詳細については、 helm install を参照してください。

ドキュメント。

いくつかのカスタムリソースが作成されたことがわかります。

```
% kubectl get crds
NAME                                        CREATED AT
…
alertmanagers.monitoring.coreos.com         <timestamp>
…
prometheuses.monitoring.coreos.com          <timestamp>
prometheusrules.monitoring.coreos.com       <timestamp>
…
```

および一連のサービス

```
% kubectl get svc
NAME                                      TYPE        PORT(S)
…                                          …           …
prometheus-community-grafana              ClusterIP   80/TCP
prometheus-community-kube-alertmanager    ClusterIP   9093/TCP
prometheus-community-kube-operator        ClusterIP   443/TCP
prometheus-community-kube-prometheus      ClusterIP   9090/TCP
```

6.4.2 Prometheus での表示

この時点で、モニタリングをアクティブ化して展開された CloudNativePG クラスターは、Prometheus を介して監視できます。

たとえば、PodMonitor を有効にした単純なクラスターを展開できます。

```
kubectl apply -f - <<EOF
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-with-metrics
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi

  monitoring:
    enablePodMonitor: true
EOF
```

Prometheus にアクセスするには、Prometheus サービスをポート転送します。

```
kubectl port-forward svc/prometheus-community-kube-prometheus 9090
```

次に、次の Prometheus コンソールにローカルにアクセスします。 http://localhost:9090/

モニタリングスタックが正常に展開され、enablePodMonitor: true を使用したクラスターがあると仮定すると、CloudNativePG クラスターに関連する一連のメトリックを見つけることができます。詳細については、*_monitoring section_* を参照してください。

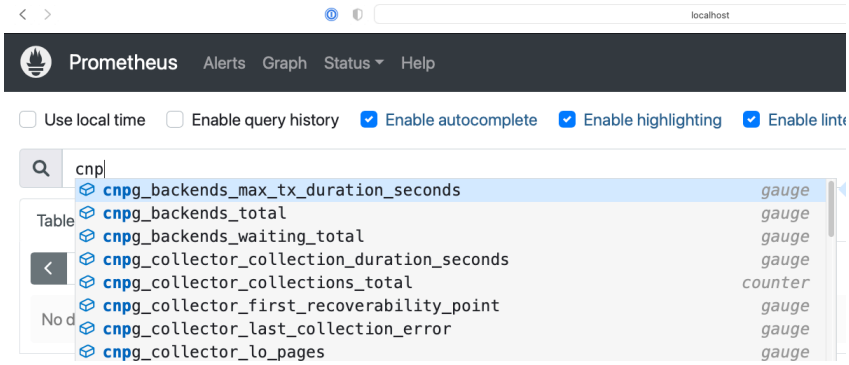


図 1: local prometheus

prometheusRule を作成することにより、いくつかのアラートを定義できるようになりました。

```
kubectl apply -f \
  https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/main/docs/src/
↪samples/monitoring/prometheusrule.yaml
```

デフォルトのアラートが表示されます。

```
% kubectl get prometheusrules
NAME                                                    AGE
cnpg-default-alerts                                     3m27s
```

Prometheus コンソールで、_Alerts_メニューをクリックして、インストールしたばかりのアラートを表示できます。

6.4.3 Grafana ダッシュボード

「プレーン」インストールでは、Grafana は事前定義されたダッシュボードなしで展開されます。

ポートフォワードができます。

```
kubectl port-forward svc/prometheus-community-grafana 3000:80
```

http://localhost:3000/ で Grafana にローカルにアクセスします

ユーザー名として資格情報が `admin`、パスワードとして `prom-operator` を提供します `kube-stack-config.yaml` で定義。

CloudNativePG は、公式 Helm chart の一部として Grafana のデフォルトのダッシュボードを提供します。grafana-dashboard.json をダウンロードすることもできます。

ファイルを作成し、GUI を介して手動でインポートします。

警告: 前のダッシュボードの一部のグラフは、*No data* を表示するいくつかのグラフを生成する `kubelet_volume_stats_available_bytes` や `kubelet_volume_stats_capacity_bytes` など、これが作成された時点でアルファ段階にあったメトリックを利用しています。



図 2: local grafana

ローカル設定では、Prometheus と Grafana は、モニタリング機能を有効にして展開された CloudNativePG クラスターを自動的に検出および監視するように構成されていることに注意してください。

第7章　イメージカタログ

ImageCatalog および ClusterImageCatalog は、 Cluster を作成するためのイメージを定義できるようにする重要なリソースです。

主な違いはスコープにあります。ImageCatalog は名前空間ですが、ClusterImageCatalog はクラスタースコープです。

どちらも、イメージのリストで構成される共通の構造を共有し、各イメージのメジャーバージョンを示す major フィールドを備えています。

> **警告:** オペレーターはユーザー定義のメジャーバージョンを信頼し、PostgreSQL バージョンの検出の実行を控えます。カタログで宣言されたメジャーバージョンと PostgreSQL イメージ間のアライメントを保証するのはユーザーの責任です。

major フィールドの値は、カタログ内で一意を維持し、イメージ間の重複を防ぐ必要があります。ただし、別のカタログは、同じ major 値で異なるイメージを公開する場合があります。

名前空間 ``ImageCatalog`` の例

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: ImageCatalog
metadata:
  name: postgresql
  namespace: default
spec:
  images:
    - major: 15
      image: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:15.6
    - major: 16
      image: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2
```

``ClusterImageCatalog`` リソースを使用したクラスター全体のカタログの例

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: ClusterImageCatalog
metadata:
  name: postgresql
spec:
  images:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    - major: 15
      image: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:15.6
    - major: 16
      image: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2
```

Cluster リソースは、 ImageCatalog または ClusterImageCatalog を参照して、目的の画像を正確に指定する柔軟性を備えています。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  imageCatalogRef:
    apiGroup: postgresql.cnpg.io
    kind: ImageCatalog
    name: postgresql
    major: 16
  storage:
    size: 1Gi
```

これらのカタログを使用するクラスターは、継続的な監視を維持します。カタログ内の画像が変更されると、その特定のエントリを参照する**関連するすべてのクラスター** の自動更新がトリガーされます。

7.1 CloudNativePG カタログ

CloudNativePG プロジェクトは、提供するイメージの ClusterImageCatalogs を維持します。これらのカタログは、各メジャーバージョンの最新のイメージで定期的に更新されます。CloudNativePG プロジェクトの GitHub リポジトリから ClusterImageCatalog.yaml ファイルを適用することにより、クラスター管理者は、クラスターが指定されたメジャーリリース内の最新バージョンに自動的に更新されるようにできます。

7.1.1 PostgreSQL コンテナイメージ

latest version of the cluster catalog for the PostgreSQL Container Images をインストールできます

cloudnative-pg/postgres-containers リポジトリ)

```
kubectl apply \
  -f https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/postgres-containers/main/Debian/
↪ClusterImageCatalog.yaml
```

7.1.2 PostGIS コンテナイメージ

latest version of the cluster catalog for the PostGIS Container Images をインストールできます

cloudnative-pg/postgis-containers リポジトリ)

```
kubectl apply \
  -f https://raw.githubusercontent.com/cloudnative-pg/postgis-containers/main/PostGIS/
↪ClusterImageCatalog.yaml
```

第8章　Bootstrap

このセクションでは、新しい PostgreSQL クラスターを作成するために必要なオプションと、その背後にある設計理論的根拠について説明します。新しいクラスターをブートストラップするには、主に 2 つの方法があります。

- スクラッチから `initdb`
- 既存の PostgreSQL クラスターから直接 `pg_basebackup` または物理ベースバックアップ `recovery` を介して間接的に

`initdb` ブートストラップは、Kubernetes の外部で、Postgres の異なるメジャーバージョンを使用している場合でも、既存の Postgres クラスターから 1 つ以上のデータベースをインポートする可能性も提供します。この機能の詳細については、*Postgres* **データベースのインポート** セクションを参照してください。

重要: 既存のクラスターからのブートストラップは、**レプリカクラスター**を作成する可能性を開きます。これは、継続的リカバリーでソースと同期し、読み取り専用接続を受け入れる独立した PostgreSQL クラスターです。

警告: CloudNativePG では、 *postgres* ユーザーとデータベースの両方が常に存在する必要があります。クラスターで管理タスクを実行するには、ローカルの Unix ドメインソケットを使用して、*postgres* ユーザーとして `peer` 認証を介して `postgres` データベースに接続する必要があります。 *postgres* ユーザーまたは `postgres` データベースは**削除しないでください**。

注釈: CloudNativePG は *Kubernetes' native `VolumeSnapshot* API <https://github.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/issues/2081>`_ のサポートを段階的に導入しています

バックアップおよびリカバリ操作におけるインクリメンタルおよび差分コピーの場合- 基になるストレージクラスでサポートされている場合。*Recovery from Volume Snapshot objects* を参照してください。

詳細については。

8.1 bootstrap セクション

_bootstrap_メソッドは、クラスター仕様の bootstrap セクションで定義できます。CloudNativePG は現在、次のブートストラップ方法をサポートしています。

- initdb 新しい PostgreSQL クラスターを初期化しますデフォルト
- recovery 既存のクラスターのベースバックアップから復元し、必要に応じて、使用可能なすべての WAL ファイルまたは指定された_ポイントインタイム_までを再生することにより、PostgreSQL クラスターを作成します
- pg_basebackup ストリーミングレプリケーションプロトコルを介して pg_basebackup を使用して、同じメジャーバージョンの既存のクローンを作成することにより、PostgreSQL クラスターを作成します。Kubernetes の外部からでもデータベースを CloudNativePG に移行する場合に役立ちます。

initdb 方法とは異なり、 recovery と pg_basebackup は両方とも別のクラスターオフラインまたはオンラインに基づいて新しいクラスターを作成し、レプリカクラスターをスピンアップするために使用できます。どちらも外部クラスターの定義に依存します。

CloudNativePG オペレーターが提供するバックアップストレージの組み合わせがいくつかあることを考慮して、各方法のガイダンスについては バックアップからのブートストラップ `recovery <バックアップからのブートストラップ *recovery*>` を参照してください。

参考:

"API reference for the `bootstrap section <API リファレンス>` を参照してください。

詳細については、

8.2 externalClusters セクション

externalClusters セクションは、現在の構成に関連付けられている 1 つ以上の PostgreSQL クラスターを指定するメカニズムを提供します。その主な使用例には次のものが含まれます。

1. **データベースのインポート** initdb ブートストラップ方法の一部として、論理バックアップとリストアを介して *importation of databases* 中に利用する外部ソースを指定します。
2. **クロスリージョンレプリケーション**物理レプリケーションを採用するクロスリージョン PostgreSQL クラスターを定義し、個別の Kubernetes クラスターまたは従来の VM/ベアメタル環境に拡張できます。
3. **物理ベースバックアップからの復旧**物理ベースバックアップを参照することにより、PostgreSQL クラスターを完全にまたは特定のポイントインタイムに復旧します。

注釈: 進行中の開発は `externalClusters` の機能を拡張して、将来のリリースでの論理レプリケーションやフォーリンサーバーなどの追加のユースケースに対応します。

ブートストラップに関する限り、 externalClusters は、pg_basebackup メソッドまたは recovery メソッドのソース PostgreSQL クラスターを定義するために使用できます。外部クラスターには以下が必要です。

- オリジンクラスターを識別する名前。 source オプションを介して参照として使用されます
- 次の少なくとも 1 つ
- ストリーミング接続に関する情報 b_tran_3 **リカバリオブジェクトストア**に関する情報。これは、以下を含む Barman Cloud 互換オブジェクトストアです。
- WAL アーカイブポイントインタイムリカバリーに必要
- カタログ Postgres クラスターの物理ベースバックアップの

注釈: リカバリオブジェクトストアは、通常、 Barman Cloud によって管理される AWS S3、Azure Blob Storage、または Google Cloud Storage ソースです。

ストリーミング接続のみが定義されている場合、ソースは pg_basebackup メソッドに使用できます。リカバリオブジェクトストアのみが定義されている場合、ソースは recovery メソッドに使用できます。両方が定義されている場合、2 つのブートストラップ方法のいずれかを選択できます。

さらに、 pg_basebackup または完全な recovery ポイントインタイムの場合、クラスターはレプリカクラスターモードの資格があります。これは、クラスターがストリーミングを介して、PostgreSQL の restore_command を介した WAL シッピングを介して、または 2 つのいずれかを介してソースから継続的にフィードされることを意味します。

参考:

"API reference for the `externalClusters section <API リファレンス>` を参照してください。

詳細については、

8.2.1 パスワードファイル

externalClusters エントリー内でパスワードが指定されるたびに、CloudNativePG は自律的に PostgreSQL password file

その場合、各インスタンスの/controller/external/NAME/pgpass にあります。

このアプローチにより、CloudNativePG は、接続文字列でパスワードを公開せずに、外部サーバーとの接続を安全に確立できます。代わりに、接続は passfile 接続パラメーターを介して前述のファイルを安全に参照します。

8.3 空のクラスターをブートストラップする initdb

initdb ブートストラップ方法は、新しい PostgreSQL クラスターをスクラッチから作成するために使用されます。特に指定しない限り、デフォルトのものです。

次の例には、initdb 構成の完全な構造が含まれています。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-initdb
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    initdb:
      database: app
      owner: app
      secret:
        name: app-secret

  storage:
    size: 1Gi
```

上記のブートストラップの例では、次のことを行います。

1. PostgreSQL のネイティブ `initdb` コマンドを使用して、新しい `PGDATA` フォルダーを作成します
2. app という名前の_unprivileged_ユーザーを作成します
3. `app-secret` シークレットのパスワードを使用して、後者 app のパスワードを設定します `username` が `owner` の同じ名前と一致することを確認します
4. app ユーザーが所有する app という名前のデータベースを作成します。

_構成上の規則パラダイム_のおかげで、オペレーターにデフォルトのデータベース名 app とデフォルトのアプリケーションユーザー名データベース名と同じを選択させたり、スーパーユーザーとアプリケーションの両方の安全なパスワードをランダムに生成したりできます PostgreSQL のユーザー。

または、上記の例で説明したように、パスワードを生成し、シークレットとして保存し、PostgreSQL クラスターで使用できます。

提供されたシークレットは、kubernetes.io/basic-auth の仕様に準拠する必要があります。その結果、シークレットの `username` は、`owner` アプリケーションシークレットの場合およびスーパーユーザーの `postgres` のいずれかと一致する必要があります。

以下は、`basic-auth` シークレットの例です。

```yaml
apiVersion: v1
data:
  username: YXBw
  password: cGFzc3dvcmQ=
kind: Secret
metadata:
  name: app-secret
type: kubernetes.io/basic-auth
```

アプリケーションデータベースは、アプリケーションデータを保存するために使用するデータベースです。アプリケーションは、アプリケーションデータベースを所有するユーザーでクラスターに接続する必要があります。

重要: 追加のユーザーを作成する必要がある場合は、 *Declarative database role management* を参照してください。

データベース名を指定しない場合、オペレーターは慣例に従って app データベースを作成し、_defaulting Webhook_を使用してクラスター定義に追加します。データベースを所有するユーザーは、代わりにデータベース名をデフォルトにします。

アプリケーションユーザーは、オペレーターによって内部的に使用されず、代わりにスーパーユーザーに依存して、クラスターを目的のステータスに調整します。

8.3.1 initdb にオプションを渡す

PostgreSQL データディレクトリは、initdb を使用して初期化されます。

CloudNativePG を使用すると、initdb の動作をカスタマイズ、デフォルトのロケール構成やデータチェックサムなどの設定を変更できます。

> **警告:** PostgreSQL のロケールサポートの進行中の重要な機能強化のため、CloudNativePG は、ロケール関連オプションの `initdb` の直接プロキシとしてのみ機能します。 PostgreSQL ドキュメントに従って、正しいオプションが提供されていることを確認し、ブートストラッププロセスが正常に完了したことを確認するのはあなたの責任です。

initdb コマンドにカスタムオプションを含めるには、次のパラメーターを使用できます。

builtinLocale builtinLocale が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを initdb の--builtin-locale オプションに渡します。このオプションは、 Locale Support で定義された組み込みロケールを制御します

PostgreSQL ドキュメントからデフォルト空このオプションでは、localeProvider を builtin に設定する必要があることに注意してください。 PostgreSQL 17 から利用できます。

dataChecksums dataChecksums が true に設定されている場合、CloudNativePG は initdb の-k オプションを呼び出して、データページのチェックサムを有効にし、I/O システムによる破損の検出に役立ちます。それがなければサイレントデフォルト false 。

enabled encoding が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを initdb の--encoding オプションに渡します。これは、テンプレートデータベースデフォルト UTF8 のエンコードを選択します。

icuLocale icuLocale が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを initdb の--icu-locale オプションに渡します。このオプションは、Locale Support で定義された ICU ロケールを制御します

PostgreSQL ドキュメントからデフォルト空このオプションでは、localeProvider を icu に設定する必要があることに注意してください。 PostgreSQL 15 から利用できます。

icuRules `icuRules` が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを `initdb` の`--icu-rules` オプションに渡します。このオプションは、PostgreSQL ドキュメントデフォルト空の LocaleSupport で定義された ICU ロケールを制御します。このオプションでは、`localeProvider` を `icu` に設定する必要があることに注意してください。 PostgreSQL 16 から利用できます。

locale `locale` が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを `initdb` の`--locale` オプションに渡します。このオプションは、PostgreSQL ドキュメントの Locale Support で定義されているロケールを制御します。デフォルトでは、locale パラメーターは空です。この場合、`LANG` などの環境変数はロケールを決定するために使用されます。これらの変数はコンテナイメージごとに異なる場合があり、一貫性のない動作が発生する可能性があることに注意してください。

localeCollate `localeCollate` が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを `initdb` の`--lc-collate` オプションに渡します。このオプションは、Locale Support で定義されているように、照合順序 `LC_COLLATE` サブカテゴリを制御します

PostgreSQL ドキュメントデフォルト `C` より。

localeCType `localeCType` が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを `initdb` の`--lc-ctype` オプションに渡します。このオプションは、Locale Support で定義されているように、照合順序 `LC_CTYPE` サブカテゴリを制御します

PostgreSQL ドキュメントデフォルト `C` より。

localeProvider `localeProvider` が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを `initdb` の`--locale-provider` オプションに渡します。このオプションは、PostgreSQL ドキュメントの Locale Support デフォルト空、PostgreSQL の `libc` を意味しますの Locale Support で定義されたロケールプロバイダーを制御します。PostgreSQL 15 から利用できます。

walSegmentSize `walSegmentSize` が値に設定されている場合、CloudNativePG はそれを `initdb` の`--wal-segsize` オプションに渡しますデフォルト未設定-16 メガバイトとして PostgreSQL で定義されています。

注釈: *initdb* ブートストラップ中に CloudNativePG が実装する 2 つの唯一のロケールオプションは、 *LC_COLLATE* および `LC_TYPE` サブカテゴリーを参照します。残りのロケールサブカテゴリは、*lc_messages* 、*lc_monetary* 、*lc_numeric* 、および `lc_time` パラメーターを使用して、PostgreSQL 構成で直接構成できます。

次の例は、データのチェックサムを有効にし、デフォルトのエンコードを `LATIN1` に設定します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-initdb
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    initdb:
      database: app
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    owner: app
    dataChecksums: true
    encoding: "LATIN1"
  storage:
    size: 1Gi
```

警告: CloudNativePG は、 *options* サブセクションを使用して、*initdb* 呼び出しの動作をカスタマイズする別の方法をサポートしています。ただし、オペレーターの動作を壊す可能性のあるオプション `--auth` や `-d` などがあることを考えると、このテクニックは非推奨であり、API の将来のバージョンから削除されます。

8.3.2 初期化後のクエリの実行

クラスターが作成および構成された直後に、1 回実行されるクエリのカスタムリストを指定できます。これらのクエリーは、3 つの異なるデータベースに対して_superuser_ `postgres` として、次の特定の順序で実行されます。

1. `postgres` データベース `postInit` セクション
2. `template1` データベース `postInitTemplate` セクション
3. アプリケーションデータベース `postInitApplication` セクション

CloudNativePG は、これらのセクションごとに、次の順序で実行されるカスタムクエリを指定する 2 つの方法を提供します。

- クラスターの定義 `postInitSQL` 、`postInitTemplateSQL` 、および `postInitApplicationSQL` スタンザ内の SQL クエリーのリストとして
- シークレットおよび/または ConfigMap のリストとして、それぞれに実行される SQL スクリプト `postInitSQLRefs` 、`postInitTemplateSQLRefs` 、および `postInitApplicationSQLRefs` スタンザが含まれます。シークレットは ConfigMap の前に処理されます。

各リストのオブジェクトはシークエンシャルに処理されます。

警告: クエリーはスーパーユーザーとして実行され、クラスター全体を中断する可能性があるため、*postInit* 、*postInitTemplate* 、および `postInitApplication` オプションを使用する際には細心の注意を払ってください。これらのクエリのエラーはブートストラップフェーズを中断し、クラスターが不完全なままとなり、手動介入が必要になります。

重要: *postInitSQLRefs* 、*postInitTemplateSQLRefs* 、および `postInitApplicationSQLRefs` で指定された ConfigMaps または Secrets 内のエントリの存在を確認します。それ以外の場合、ブートストラップは失敗します。これらの SQL ファイルにエラーがあると、ブートストラップフェーズが正常に完了できません。

次の例では、postInitSQL スタンザの一部として単一の SQL クエリーを実行します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-initdb
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    initdb:
      database: app
      owner: app
      dataChecksums: true
      localeCollate: "en_US"
      localeCType: "en_US"
      postInitSQL:
        - CREATE DATABASE angus
  storage:
    size: 1Gi
```

次の例では、postInitApplicationSQLRefs を使用して、シークレットと、アプリケーションデータベースの初期化後に実行するクエリーを含む ConfigMap を指定します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-initdb
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    initdb:
      database: app
      owner: app
      postInitApplicationSQLRefs:
        secretRefs:
          - name: my-secret
            key: secret.sql
        configMapRefs:
          - name: my-configmap
            key: configmap.sql
  storage:
    size: 1Gi
```

注釈: SQL スクリプト内では、各 SQL ステートメントは PostgreSQL semantics に従ってサーバー上の単

一の exec で実行されます。コメントを含めることはできますが、 *psql* のような内部コマンドは含めることができません。

8.4 別のクラスターからのブートストラップ

CloudNativePG は、同じメジャーバージョンの別のクラスターから開始するクラスターのブートストラップを有効にします。この操作は、ストリーミングレプリケーション pg_basebackup を介してソースクラスターに直接接続することにより、または既存の物理的_basebackup_recovery を介して間接的に接続することにより発生します。

ソースクラスターは、 name で識別される externalClusters セクションで定義する必要があります。オリジンクラスターと同じ name を使用することをお勧めします。

重要: デフォルトでは、 *recovery* メソッドは `externalClusters` セクションのクラスターの `name` を厳密に使用して、通常サーバーの名前に予約されているオブジェクトストア内のバックアップデータのメインフォルダーを見つけます。 *barmanObjectStore.serverName* プロパティデフォルトで、外部クラスター定義の `name` の値に割り当てられますを使用して、別のプロパティを指定できます。

8.4.1 バックアップからのブートストラップ recovery

バックアップとリカバリーの観点から CloudNativePG オペレーターが提供するいくつかの可能性、方法、および組み合わせを考慮して、バックアップからのブートストラップ `recovery <バックアップからのブートストラップ *recovery*>` を参照してください。

8.4.2 ライブクラスターからのブートストラップ pg_basebackup

pg_basebackup ブートストラップモードでは、有効な_streaming replication_接続を使用して、CloudNativePG によって管理される既存の**バイナリ互換** PostgreSQL インスタンス_source_の正確な物理コピーとして、新しいクラスター_target_を作成できます。ソースインスタンスは、プライマリまたはスタンバイの PostgreSQL サーバーのいずれかです。PostgreSQL の物理レプリケーションの長所と短所が完全に適用されるため、以下の要件セクションを徹底的に確認することが重要です。

この方法の主な使用例には次のものが含まれます。

- 定期的に (毎日、毎週) 再生成する必要があるレポートおよびビジネスインテリジェンスクラスター
- 定期的な再生毎日、毎週、毎月、匿名化が必要なライブデータを含むテストデータベース
- スタンドアロンレプリカクラスターの迅速なスピンアップ
- CloudNativePG クラスターの別の名前空間または Kubernetes クラスターへの物理的な移行

重要: すべての要件が満たされ、オペレーションが徹底的にテストされていることが完全に確信できない限り、物理レプリケーションに基づくこの方法を使用して、Kubernetes の外部の既存の PostgreSQL クラスターを CloudNativePG に移行することは避けてください。 CloudNativePG コミュニティは、このようなユースケースについてこのアプローチを支持しておらず、代わりに論理インポートを使用することをお勧めします。物理レプリケーションのすべての要件が CloudNativePG とシームレスに動作する方法で満たされることは非常にまれです。

警告: 現在の実装では、このメソッドはソース PostgreSQL インスタンスのクローンを作成し、それにより_snapshot_を作成します。クローン作成プロセスが完了すると、新しいクラスターがすぐに起動されます。詳細については、 **現在の制限** を参照してください。

`recovery` ブートストラップ方法と同様、クローン操作が完了すると、オペレーターは最初のインスタンスからターゲットクラスターの完全な所有権を取得します。これには、CloudNativePG の必要に応じて特定の構成パラメーターのオーバーライド、スーパーユーザーパスワードのリセット、`streaming_replica` ユーザーの作成、レプリカの管理などが含まれます。結果のクラスターは、ソースインスタンスから独立して動作します。

重要: ターゲットインスタンスとソースインスタンス間のネットワーク接続の構成は、特定のコンテキストと環境に大きく依存するため、CloudNativePG ドキュメントの範囲外です。

`pg_basebackup` によって透過的に管理されるターゲットインスタンス上のストリーミングレプリケーションクライアントは、次のいずれかの方法を使用してソースインスタンスで認証できます。

1. **ユーザー名/パスワードの認証**
2. *TLS* **証明書認証**

両方の認証方法について以下に詳しく説明します。

8.4.3 要件

`pg_basebackup` ブートストラップ方法には、次の要件が適用されます。

- ターゲットとソースは同じハードウェアアーキテクチャである必要があります
- ターゲットとソースは同じメジャー PostgreSQL バージョンである必要があります
- ターゲットとソースは同じテーブルスペースを持つ必要があります
- バックアップ用に少なくとも 1 つの_walsender_と WAL ストリーミング用に 1 つを提供することにより、この一回限りのオペレーションのターゲットからのアクセスを許可するために、十分な `max_wal_senders` でソースを構成する必要があります
- ターゲットインスタンスがソースインスタンスの PostgreSQL ポートに接続できるように、ソースとターゲット間のネットワークを構成する必要があります

- ソースには REPLICATION LOGIN 特権を持つロールが必要で、pg_hba.conf でこのロールのターゲットインスタンスからの接続を受け入れる必要があります、できれば TLS を介して下記の レプリケーションユーザーについて を参照してください
- ターゲットは、REPLICATION LOGIN 特権を持つロールを使用してソース PostgreSQL インスタンスに正常に接続できる必要があります

参考:

詳細については、 Planning 、 pg_basebackup を参照してください。

High Availability, Load Balancing, and Replication

PostgreSQL ドキュメント。

8.4.4 レプリケーションユーザーについて

要件セクションで説明したように、ソースインスタンスに SUPERUSER または、できれば REPLICATION 特権のみを持つユーザーが必要です。

ソースデータベースが CloudNativePG で作成されている場合、streaming_replica ユーザーを再利用し、クライアント TLS 証明書認証を利用できます。デフォルトでは、streaming_replica に許可される唯一の接続方法です。

Kubernetes の外部を含む他のすべての場合、 REPLICATION 特権を持つユーザーが既に存在することを確認するか、以下の手順に従って新しいユーザーを作成してください。

ソースシステムの postgres ユーザーとして、次を実行してください。

```
createuser -P --replication streaming_replica
```

ターゲットインスタンスのシークレットに追加する必要があるため、プロンプトにパスワードを入力し、後で保存します。

注釈: 名前は重要ではありませんが、簡単にするために`streaming_replica` を使用します。以下のセクションの指示を調整する場合、必要に応じて変更してください。

8.4.5 ユーザー名/パスワードの認証

pg_basebackup ブートストラップを使用して CloudNativePG でサポートされている最初の認証方法は、ユーザー名とパスワードの一致に基づいています。

手順を開始する前に、次の情報があることを確認してください。

- ホスト名または IP アドレスと TCP ポートで識別されるソースインスタンスの場所
- レプリケーションユーザー名簡単にするために streaming_replica
- パスワード

次のような行をソース PostgreSQL インスタンスの pg_hba.conf ファイルに追加する必要がある場合があります。

```
#  A more restrictive rule for TLS and IP of origin is recommended

host replication streaming_replica all md5
```

次のマニフェストは、pg_basebackup ブートストラップ方法を使用して、source-db externalClusters 配列内で定義された外部 PostgreSQL クラスターのクローンを作成します。ご覧のとおり、source-db 定義は source-db.foo.com ホストをポイントし、streaming_replica ユーザーとして接続します。そのパスワードは source-db-replica-user シークレットの password キーに保存されています。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: target-db
spec:
  instances: 3
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2

  bootstrap:
    pg_basebackup:
      source: source-db

  storage:
    size: 1Gi

  externalClusters:
    - name: source-db
      connectionParameters:
        host: source-db.foo.com
        user: streaming_replica
      password:
        name: source-db-replica-user
        key: password
```

クローン操作が機能するには、同じ PostgreSQL バージョンこの場合は 17.2 を含むすべての要件を満たす必要があります。

8.4.6 TLS 証明書認証

pg_basebackup ブートストラップを使用して CloudNativePG でサポートされている 2 番目の認証方法は、TLS クライアント証明書に基づいています。これは、セキュリティの観点から推奨されるアプローチです。

次の例では、同じ Kubernetes クラスター内の既存の PostgreSQL クラスター cluster-example のクローンを作成します。

注釈: この例は、Kubernetes クラスターの外部にあるインスタンスをカバーするように簡単に適合できます。

マニフェストは、 cluster-clone-tls と呼ばれる新しい PostgreSQL 17.2 クラスターを定義します。これは、 cluster-example 外部クラスターから pg_basebackup メソッドを使用してブートストラップされます。ホストは同じクラスター内の読み取り/書き込みサービスによって識別され、streaming_replica ユーザーは、提供されたキー、証明書、および認証局情報それぞれ cluster-example-replication および cluster-example-ca シークレットのおかげで認証されます。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-clone-tls
spec:
  instances: 3
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2

  bootstrap:
    pg_basebackup:
      source: cluster-example

  storage:
    size: 1Gi

  externalClusters:
    - name: cluster-example
      connectionParameters:
        host: cluster-example-rw.default.svc
        user: streaming_replica
        sslmode: verify-full
      sslKey:
        name: cluster-example-replication
        key: tls.key
      sslCert:
        name: cluster-example-replication
        key: tls.crt
      sslRootCert:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      name: cluster-example-ca
      key: ca.crt
```

8.4.7 アプリケーションデータベースの構成

また、initdb および recovery ブートストラップ方法の場合と同様に、ライブクラスターからブートストラップするクラスターのアプリケーションデータベースの構成もサポートしています。新しいクラスターがレプリカクラスターとしてレプリカモードが有効化されて作成される場合、アプリケーションデータベースの構成はスキップされます。

重要: *Cluster* がリカバリモードである間、カタログを含むデータベースへの変更は許可されません。この制限には、*Cluster* がプライマリに移行するまで遅延されるロールオーバーライドが含まれます。復旧フェーズでは、ロールはソースクラスターで定義されたとおりに残ります。

次の例では、ライブクラスターからブートストラップに従って、所有者 app と提供されたシークレット app-secret に保存されたパスワードを使用して app データベースを構成します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  bootstrap:
    pg_basebackup:
      database: app
      owner: app
      secret:
        name: app-secret
      source: cluster-example
```

上記の構成では、次は **復旧が完了した後** にのみ発生します。

1. app データベースが存在しない場合、作成されます。
2. app ユーザーが存在しない場合、作成されます。
3. app ユーザーが app データベースの所有者でない場合、所有権は app ユーザーに付与されます。
4. username 値がシークレットの owner 値と一致する場合、アプリケーションユーザーこの場合は app ユーザーのパスワードはシークレットの password 値に更新されます。

8.4.8 現在の制限

スナップショットコピー

pg_basebackup メソッドは、PostgreSQL ベースバックアップの形式でソースインスタンスのスナップショットを取得します。バックアップの開始からバックアップの適切な終了までに書き込まれるすべてのトランザクションは、2 番目の接続を使用してターゲットインスタンスにストリーミングされます pg_basebackup の--wal-method=stream オプションを参照してください。

バックアップが完了すると、新しいインスタンスが新しいタイムラインで起動され、ソースから分岐します。このため、ターゲットデータベースに移行する前に、ソースデータベースへのすべての書き込み操作を停止することをお勧めします。

重要: 移行を試行する前に、プロシージャとアプリケーションの両方をテストする必要があります。特に、必要なだけ移行手順を実行して、運用中のアプリケーションのダウンタイムを体系的に測定することが重要です。

第9章　Postgresデータベースのインポート

このセクションでは、新しい CloudNativePG クラスター内に 1 つ以上の既存の PostgreSQL データベースをインポートする方法について説明します。

インポート操作は、PostgreSQL のオンライン論理バックアップの概念に基づいており、オリジンホストへのネットワーク接続を介して `pg_dump` 、および `pg_restore` に依存します。ネイティブのマルチバージョン同時実行制御 MVCC とスナップショットのおかげで、PostgreSQL では、書き込みアクティビティを停止せずに、ネットワークを介して同時実行の方法で、一貫したバックアップを取得できます。

論理バックアップは、PostgreSQL バージョンのメジャーアップグレードを実行するための最も一般的な柔軟で信頼性の高い技術でもあります。

その結果、このセクションの手順は両方の場合に適しています。

- Kubernetes の外部でも、既存の PostgreSQL インスタンスから 1 つ以上のデータベースをインポート
- PostgreSQL バージョンから同じまたは新しいバージョンにデータベースをインポートし、PostgreSQL の_メジャーアップグレード_を有効にしますバージョン 11.x からバージョン 15.x など

> **警告:** PostgreSQL のメジャーアップグレードを実行するときは、アプリケーションが新しいバージョンと互換性があり、データベース拡張機能を含むオブジェクトのアップグレードパスが実行可能であることを確認する責任があります。

どちらの場合も、操作は元のデータベースの一貫した **スナップショット**で実行されます。

重要: このため、バックアップの開始後にソースデータベースに行われた変更は宛先クラスタにないため、*Cluster* リソースの最終インポートの前にソースの書き込み操作を停止することをお勧めします。したがって、この機能が参照される理由「オフラインインポート」または「オフラインメジャーアップグレード」として。

9.1 その仕組み

概念的には、インポートには、空のクラスターをブートストラップする `initdb <空のクラスターをブートストラップする *initdb*>` を使用して新しいクラスター_destination cluster_を作成し、`initdb.import` サブセクションを完了して、既存の Postgres クラスター_source cluster_からオブジェクトをインポートする必要があります。PostgreSQL の推奨に従って、_destination cluster_の PostgreSQL メジャーバージョンが_source cluster_のメジャーバージョン以上であることをお勧めします。

CloudNativePG は、ソースクラスターから宛先クラスターにオブジェクトをインポートする 2 つの主な方法を提供します。

- **マイクロサービスアプローチ**宛先クラスターは、CloudNativePG プロジェクトで推奨されているように、指定されたアプリケーションユーザーが所有する単一のアプリケーションデータベースをホストするように設計されています
- **モノリスアプローチ**宛先クラスターは、ソースクラスターからインポートされた複数のデータベースとさまざまなユーザーをホストするように設計されています。

最初のインポート方法は `microservice` タイプを介して使用でき、後者は `monolith` タイプで使用できます。

> **警告:** 宛先クラスターが、スーパーユーザーまたは `pg_dump` で論理バックアップを取るための十分な特権を持つユーザーでソースクラスターにアクセスできることを確認するのはあなたの責任です。PostgreSQL documentation on "SQL Dump" を参照してください。

詳細については、

9.2 `microservice` タイプ

マイクロサービスアプローチでは、ソースクラスターから宛先クラスターにインポートする単一のデータベースを指定できます。操作は 4 つのステップで実行されます。

- 新しいクラスターの `initdb` ブートストラップ
- `pg_dump -Fd` を使用した選択したデータベース `initdb.import.databases` 内のエクスポート
- `initdb.owner` ユーザーが所有する `initdb.database` アプリケーションデータベースへの `pg_restore --no-acl --no-owner` を使用したデータベースのインポート
- データベースダンプファイルのクリーンアップ
- `postImportApplicationSQL` パラメーターを介してアプリケーションデータベースでのユーザー定義の SQL クエリーのオプションの実行
- インポートされたデータベースでの `ANALYZE VERBOSE` の実行

たとえば、以下の YAML は、 `postgres` に接続することにより、`cluster-pg96` クラスターサポートされていない PostgreSQL 9.6 から `angus` データベースをインポートする `cluster-microservice` と呼ばれる新しい 3 インスタンスの PostgreSQL クラスターオペレーターがリリースされた時点での利用可能な最新の

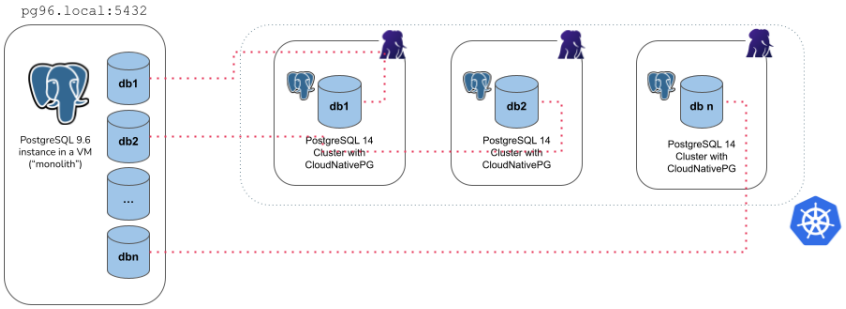


図 1: Example of microservice import type

メジャーバージョンを作成します cluster-pg96-superuser シークレットに保存されたパスワードを介して、 postgres ユーザーを使用してデータベースにアクセスします。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-microservice
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    initdb:
      import:
        type: microservice
        databases:
          - angus
        source:
          externalCluster: cluster-pg96
        #postImportApplicationSQL:
        #- |
        #  INSERT YOUR SQL QUERIES HERE
  storage:
    size: 1Gi
  externalClusters:
    - name: cluster-pg96
      connectionParameters:
        # Use the correct IP or host name for the source database
        host: pg96.local
        user: postgres
        dbname: postgres
      password:
        name: cluster-pg96-superuser
        key: password
```

警告: 上記の例では、コミュニティ、したがって CloudNativePG でサポートされていないバージョンの PostgreSQL を実行しているソースデータベースを意図的に使用しています。ソースインスタンスからのデータのエクスポートは、宛先クラスターの `pg_dump` のバージョンを使用して実行されます。これは、サポートされているものであり、ソースのものと同等以上である必要があります。私たちの経験に基づいて、データをエクスポートするこの方法は Postgres の古いバージョンのサポートされていないバージョンでも動作するため、古いデータを Kubernetes 内のより良いシステムに移動する機会が得られます。これが、このセクションの例で 9.6 を使用した主な理由です。この領域で問題が発生した場合は、ご連絡をお待ちしております。

`microservice` タイプを使用するときは、いくつか注意する必要があります。

- インポートするデータを含む既存の PostgreSQL インスタンスをポイントする `externalCluster` が必要です。詳細については、 :ref:``externalClusters` セクション <*externalClusters* セクション>` を参照してください。
- オペレーション中に Kubernetes クラスターと `externalCluster` の間でトラフィックを許可する必要がある
- ソースデータベースへの接続は、`pg_dump` を実行し、ロール情報を読み取る必要がある指定されたユーザーで付与される必要があります_superuser_は OK です
- 現在、`pg_dump -Fd` 結果は `PGDATA` ボリュームの `dumps` フォルダー内に一時的に保存されます。そのため、割り当てられたノードにダンプ結果、復元されたデータとインデックスを一時的に含むための十分な利用可能な領域が必要です。インポート操作が完了すると、このフォルダーはオペレーターによって自動的に削除されます。
- `initdb.import.databases` 配列内で指定できるデータベースは 1 つだけです
- ロールはインポートされません - そのため、`initdb.import.roles` 内で指定できません

9.3 monolith タイプ

モノリスアプローチでは、ソースクラスターから宛先クラスターにインポートするロールとデータベースのセットを指定できます。操作は次の手順で実行されます。

- 新しいクラスターの `initdb` ブートストラップ
- 選択したロールのエクスポートとインポート
- `pg_dump -Fd` を使用して、選択したデータベース `initdb.import.databases` 内を一度に 1 つずつエクスポート
- 選択した各データベースを作成し、 `pg_restore` を使用してデータをインポートします
- インポートされた各データベースで `ANALYZE` を実行します
- データベースダンプファイルのクリーンアップ

たとえば、以下の YAML は、 `cluster-monolith` と呼ばれる新しい 3 インスタンスの PostgreSQL クラスターオペレーターがリリースされた時点での利用可能な最新のメジャーバージョンを作成します。`postgres`

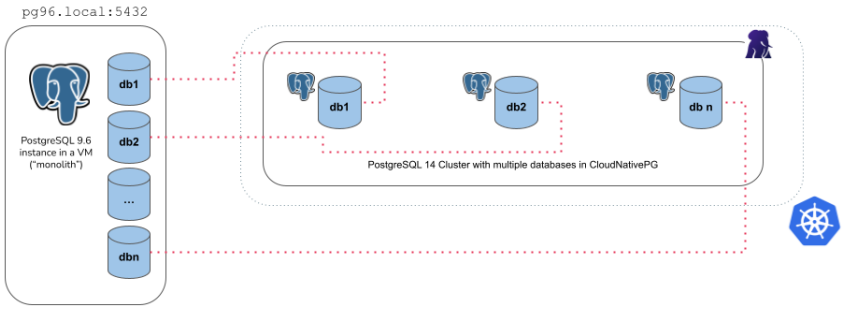


図 2: Example of monolith import type

ユーザーを使用して postgres データベースに接続し、cluster-pg96-superuser シークレットに保存されているパスワードを介して postgres データベースに接続します。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-monolith
spec:
  instances: 3
  bootstrap:
    initdb:
      import:
        type: monolith
        databases:
          - accounting
          - banking
          - resort
        roles:
          - accountant
          - bank_user
        source:
          externalCluster: cluster-pg96
  storage:
    size: 1Gi
  externalClusters:
    - name: cluster-pg96
      connectionParameters:
        # Use the correct IP or host name for the source database
        host: pg96.local
        user: postgres
        dbname: postgres
        sslmode: require
      password:
        name: cluster-pg96-superuser
        key: password
```

monolith タイプを使用するときは、いくつか注意する必要があります。

- インポートするデータを含む既存の PostgreSQL インスタンスをポイントする externalCluster が必要です。詳細については、 :ref:``externalClusters` セクション <*externalClusters* セクション>` を参照してください。
- オペレーション中に Kubernetes クラスターと externalCluster の間でトラフィックを許可する必要がある
- ソースデータベースへの接続は、pg_dump を実行し、ロール情報を取得する必要がある指定されたユーザーで付与される必要があります_superuser_は OK です
- 現在、pg_dump -Fd 結果は PGDATA ボリュームの dumps フォルダー内に一時的に保存されます。そのため、割り当てられたノードにダンプ結果、復元されたデータとインデックスを一時的に含むための十分な利用可能な領域が必要です。インポート操作が完了すると、このフォルダーはオペレーターによって自動的に削除されます。
- initdb.import.databases 配列で指定される少なくとも 1 つのデータベース
- インポートされたデータベースに必要なロールは、 initdb.import.roles 内で指定する必要があります。以下の制限があります。
- 次のロールが存在する場合、インポートされません。postgres 、streaming_replica 、cnp_pooler_pgbouncer
- SUPERUSER オプションは、インポートされたロールから削除されます
- ワイルドカード"*" は、databases および/または roles 配列の唯一の要素として使用して、その種類のすべてのオブジェクトをインポートできます。データベースを照合する場合、ワイルドカードは postgres データベース、テンプレートデータベース、および接続を許可しないデータベースを無視します
- クローンプロシージャが完了した後、すべてのデータベースに対して ANALYZE VERBOSE が実行されます。
- postImportApplicationSQL フィールドはサポートされていません

9.4 インポートの最適化

データベースの論理インポート中に、CloudNativePG は、以下を強制することにより、速度とデータの耐久性を優先するために PostgreSQL の構成を最適化します。

- archive_mode 〜off
- fsync 〜off
- full_page_writes 〜off
- max_wal_senders 〜0
- wal_level 〜minimal

インポートジョブを完了する前に、CloudNativePG は予想される構成を復元し、initdb --sync-only を実行してデータがディスクに永続的に書き込まれるようにします。

重要: WAL アーカイブ要求された場合、およびデータベースのインポートプロセスが完了した後に WAL レベルが受け入れられます。同様に、レプリカはブートストラップフェーズの後に、実際のクラスターリソースが開始されるときにクローン作成されます。

インポートフェーズ中に実行できる最適化は他にもあります。このトピックは CloudNativePG の範囲を超えていますが、`Cluster` 構成で `shared_buffers`、`max_wal_size`、`checkpoint_timeout` などの Postgres GUC を直接調整することにより、チェックポイント領域への不要な書き込みを削減することをお勧めします。

9.5 pg_dump および pg_restore の動作のカスタマイズ

`pgDumpExtraOptions` および `pgRestoreExtraOptions` パラメーターを使用して追加オプションを指定することにより、`pg_dump` および `pg_restore` の動作をカスタマイズできます。たとえば、次の例に示すように、パラレルジョブを有効にしてデータのインポート/エクスポートプロセスを高速化できます。

```
#  <snip>

bootstrap:
  initdb:
    import:
      type: microservice
      databases:
        - app
      source:
        externalCluster: cluster-example
      pgDumpExtraOptions:
        - "--jobs=2"
      pgRestoreExtraOptions:
        - "--jobs=2"

#  <snip>
```

警告: *pgDumpExtraOptions* および `pgRestoreExtraOptions` フィールドは、自己の責任で注意して使用してください。これらのオプションはオペレーターによって検証または検証されておらず、一部の構成は意図された機能または動作と競合する場合があります。運用に適用する前に、安全で制御された環境で完全にテストしてください。

9.6 オンラインインポートとアップグレード

論理レプリケーションは、次のアプローチを使用して、ネットワーク経由でアクセス可能な PostgreSQL データベースをインポートする強力な方法を提供します。

- **スキーマのみのオプションを使用したブートストラップのインポート**レプリケーションを開始する前に、ターゲットデータベースのスキーマを初期化します。
- **``Subscription`` リソース**連続レプリケーションを設定してデータ変更を同期します。

この手法は、最小限のダウンタイムでメジャー PostgreSQL のアップグレードを実行するために活用できるため、シームレスな移行とシステムのアップグレードに最適です。

制限やベストプラクティスを含む詳細については、ドキュメントの ロジカルレプリケーションのパブリケーション セクションを参照してください。

第10章　セキュリティ

このセクションには、CloudNativePG のセキュリティに関する情報が含まれており、コード、コンテナ、クラスターの 3 つの異なるレイヤーで分析されます。

> **警告:** このページに含まれる情報は、Kubernetes クラスターで通常の InfoSec 業務を実行することから免責されてはなりません。 *Overview of Cloud Native Security* についてよく理解してください

Kubernetes ドキュメントのページ。

参考:

The 4C’ s Security Model in Kubernetes を参照してください。

ブログ記事

10.1 コード

CloudNativePG のソースコードは、 CI / CD パイプラインに直接統合されている Go の人気のオープンソースリンター GolangCI-Lint を使用して、セキュリティ脆弱性のチェックを含む体系的な静的分析を受けます。GolangCI-Lint は、同じソースコードで複数のリンターを実行できます。

次のツールは、セキュリティ問題を特定するために使用されます。

- ** Golang Security Checker `gosec`)** ハードコードされた資格情報、整数オーバーフロー、SQL などの既知の脆弱性、脅威、弱点を検出するように設計された一連のルールに対してソースコードの抽象構文ツリーをスキャンするリンター注射。GolangCI-Lint は、スイートの一部として `gosec` を実行します。
- ** govulncheck :** このツールは CI / CD パイプラインで実行され、Go コードまたはコンパイラーに影響を与える既知の脆弱性を報告します。既知の脆弱性を含む Go コンパイラーのバージョンでオペレーターがビルドされている場合、`govulncheck` はそれを検出します。
- ** CodeQL :** GitHub が提供するこのツールは、セキュリティ問題をスキャンし、検出された脆弱性を含むプルリクエストをブロックします。CodeQL は、Python や Bash などのリポジトリ内の他の言語を除き、Go コードのみをレビューするように構成されています。
- ** Snyk :** スケジュールされたジョブで毎晩コードスキャンを実行し、コードのセキュリティとライセンスの問題に関連する新しい結果を強調する週次レポートを生成します。

CloudNativePG リポジトリでは、 *Security section* で_“Private vulnerability Reporting”_オプションが有効になっています。この機能を使用すると、ユーザーは一般に公開される前に、注意深い取り扱いが必要な

セキュリティ問題を安全に報告できます。セキュリティバグを発見した場合は、この媒体を使用して報告してください。

重要: CI / CD パイプラインの静的コード分析フェーズの障害は、CloudNativePG の配信プロセス全体をブロックします。すべてのコミットは、GolangCI-Lint で定義されたすべてのリンターを渡す必要があります。

10.2 コンテナ

CloudNativePG のすべてのコンテナイメージは、各コミットに続いて CI / CD パイプラインを介して自動的にビルドされます。これらのイメージには、オペレーターのイメージだけでなく、特にサポートされているすべての PostgreSQL バージョンのオペランドのイメージも含まれます。CI / CD プロセス中に、画像は次のツールを使用してスキャンされます。

- ** Dockle :** コンテナビルドプロセスのベストプラクティスを保証します。
- ** Snyk :** コンテナ内のセキュリティ問題を検出し、GitHub インターフェイスを介して結果を報告します。

重要: すべてのオペランドイメージは、パイプラインによって毎日自動的に再構築され、ベースイメージとパッケージレベルでセキュリティ更新が組み込まれ、コミュニティに配布されたコンテナイメージに** パッチレベルの更新**を提供します。

10.2.1 コンテナセキュリティのガイドラインとフレームワーク

コンテナレベルのセキュリティを確保するために、次のガイドラインとフレームワークが検討されています。

- ** Container Image Creation and Deployment Guide :** 米国国防総省 DoD の防衛情報システム局 DISA によって開発されました。
- ** *CIS Benchmark for Docker* :** インターネットセキュリティセンター CIS によって開発されました。

参考:

CloudNativePG のコンテナレベルでのセキュリティに関して EDB が採用したアプローチの詳細については、ブログ記事 *Security and Containers in CloudNativePG* を参照してください。

10.3 クラスター

クラスターレベルのセキュリティでは、コントロールプレーンとノードの両方を形成するすべての Kubernetes コンポーネント、およびクラスターで実行されるアプリケーション PostgreSQL を含むが考慮されます。

10.3.1 ロールベースのアクセス制御 RBAC

オペレーターは、`cnpg-manager` という名前の専用サービスアカウントを使用して Kubernetes API サーバーと対話します。このサービスアカウントは、通常、オペレーター名前空間、一般的に `cnpg-system` にインストールされます。ただし、名前空間は、展開方法によって異なる場合があります以下のサブセクションを参照してください。

同じ名前空間に、`cnpg-manager` サービスアカウントとロールの間にバインディングがあります。このロールの具体的な名前とタイプ `Role` または `ClusterRole` も、展開方法によって異なります。このロールは、オペレーターが正常に機能するために必要な権限を定義します。これらのロールの詳細については、展開方法に応じて、`kubectl describe clusterrole` または `kubectl describe role` コマンドを使用できます。

重要: 上記の権限は、Kubernetes API サーバーと対話するためにオペレーターのサービスアカウント専用に予約されています。これらは、 *Cluster* 、*Pooler* 、*Backup* 、*ScheduledBackup* 、*Database* 、*Publication* 、*Subscription* 、*ImageCatalog* 、および `ClusterImageCatalog` リソースとのみ対話するオペレーターのユーザーは直接アクセスできません。

以下に、いくつかの例と、最も重要な理由を提供します。CloudNativePG が標準の Kubernetes 名前空間または非名前空間リソースの完全または部分的な管理を必要とする理由。

`configmaps` オペレーターは、Prometheus エクスポーターモニタリングメトリックのデフォルト構成マップを作成および管理する必要があります。

`deployments` オペレーターは、標準の Kubernetes `Deployment` リソースを使用して PgBouncer 接続プーラーを管理する必要があります。

`jobs` オペレーターは、ジョブを処理して、さまざまな `Cluster` のフェーズを管理する必要があります。

`persistentvolumeclaims` `PGDATA` が存在するボリュームは、PostgreSQL `Cluster` リソースの中心的な要素です。オペレーターは、選択したストレージクラスと対話して、定義されたスケジューリングポリシーに基づいて、要求されたボリュームを動的にプロビジョニングする必要があります。

`pods` オペレーターは、`Cluster` のインスタンスを管理する必要があります。

`secrets` `Cluster` オブジェクトに証明書とパスワードを提供しない限り、オペレーターは、ランダムに生成されたパスワードと TLS 証明書をセルフプロビジョニングし、シークレットに保存することにより、「構成より規約」パラダイムを採用します。

`serviceaccounts` オペレーターは、インスタンスマネージャー PostgreSQL サーバーを制御するコンテナの_PID 1_プロセスが Kubernetes API サーバーと安全に通信してアクションを調整し、信頼できるステータスを継続的に提供できるようにするサービスアカウントを作成する必要があります。`Cluster` .

`services` オペレーターは、アプリケーションから PostgreSQL クラスターまたは接続プーラーへのネットワークアクセスを制御し、自動化された方法でフェイルオーバー/スイッチオーバー操作を適切に管理する

必要がありますたとえば、サービスの正しいエンドポイントを割り当てることにより、適切なプライマリ PostgreSQL インスタンス)。

`validatingwebhookconfigurations` および `mutatingwebhookconfigurations` オペレーターは、管理するすべてのリソースを検証および変更するために必要な両方の Webhook 構成に、自己署名 Webhook CA を注入します。詳細については、 *Kubernetes documentation* を参照してください。

`volumesnapshots` オペレーターは、PostgreSQL サーバーのバックアップを取るために、`VolumeSnapshots` オブジェクトを生成する必要があります。VolumeSnapshot は、復元プロセスを開始する前に検証するために読み取られます。

`nodes` オペレーターは、アフィニティとアンチアフィニティのラベルを取得して、ポッドをスケジュールできるノードを決定できるようにする必要があります。これは、たとえば、レプリカが同じノードでスケジュールされるのを防ぐ場合に役立ちます。ノードが異なるアベイラビリティーゾーンにある場合に特に重要です。この権限は、ノードがスケジュールされているかどうかを判断し、スケジュールされていないノードでのポッドの作成を防止、またはプライマリがスケジュールされていないノードに存在する場合にスイッチオーバーをトリガーするためにも使用されます。

10.3.2 デプロイメントと ClusterRole リソース

前述のように、各展開方法には、サービスアカウントの名前空間の場所、ロールバインディング、および各ロールの名前とタイプが異なる場合があります。

Kubernetes マニフェスト経由

Kubernetes マニフェストを使用して CloudNativePG をインストールする場合、権限はデフォルトで `ClusterRoleBinding` に設定されます。次を実行して、オペレーターに必要な権限を検査できます。

```
kubectl describe clusterrole cnpg-manager
```

OLM 経由

セキュリティの観点から、Operator Lifecycle ManagerOLM は、より柔軟な展開方法を提供します。すべての名前空間または特定の名前空間を監視するようにオペレーターを構成できるため、より詳細な権限管理が可能になります。

注釈: OLM では、オペレーターを独自の名前空間に展開し、CloudNativePG クラスターに使用される特定の名前空間を監視するように構成できます。この設定は、権限を含め、より効果的にアクセスを制限するのに役立ちます。

10.3.3 クラスターロールのアクセス許可が必要なのはなぜですか?

現在、オペレーターが nodes および ClusterImageCatalog オブジェクトを読み取るには、ClusterRole 権限が必要です。他のすべての権限は、名前空間スコープつまり Role またはクラスター全体つまり ClusterRole にすることができます。

これらの権限でも、誰かが ServiceAccount へのアクセスを取得した場合、リソースの表示に制限されている get 、list 、および watch 権限のみがあります。ただし、無許可のユーザーが ServiceAccount へのアクセスを取得した場合、それはより重大なセキュリティ問題を示しています。

したがって、ユーザーがオペレーターの ServiceAccount および昇格した権限で他の ServiceAccount にアクセスしないようにすることが重要です。

10.3.4 インスタンスマネージャーによる API サーバーへの呼び出し

オペランドコンテナのエントリポイントであるインスタンスマネージャーは、Kubernetes API サーバーへのいくつかの呼び出しを行って、一部のリソースのステータスが正しく更新されることを確認し、その Postgres クラスターに関連付けられている構成マップとシークレットにアクセスする必要があります。。このような呼び出しは、同じ PostgreSQL Cluster リソース名を共有するオペレーターによって作成された専用の ServiceAccount を介して実行されます。

重要: このオペランドは、API サーバーを介してリソースの特定の限定されたサブセットにのみアクセスできます。サービスアカウントは recommended way to access the API server from within a Pod です。

透明性を維持するために、サービスアカウントに関連付けられている権限は roles.go .

ファイル。たとえば、 myns 名前空間の汎用 mypg クラスターの権限を取得するには、次のコマンドを入力します。

```
kubectl get role -n myns mypg -o yaml
```

次に、ロールがサービスアカウントにバインドされていることを確認します。

```
kubectl get rolebinding -n myns mypg -o yaml
```

重要: **ロールは特定の名前空間**に制限されていることに注意してください。

以下に、汎用の Kubernetes リソースのサービスアカウントに関連付けられた権限の簡単な概要を提供します。

configmaps インスタンスマネージャーは、カスタムモニタリングクエリなど、同じクラスターに関連する構成マップのみを読み取ることができます

secrets インスタンスマネージャーは、同じクラスターに関連するシークレットのみを読み取ることができます。ストリーミングレプリケーションユーザー、アプリケーションユーザー、スーパーユーザー、LDAP

認証ユーザー、クライアント CA、サーバー CA、サーバー証明書、バックアップ資格情報、カスタムモニタリングクエリー

events インスタンスマネージャーは、クラスターのイベントを作成し、PostgreSQL インスタンスのライフサイクルの特定の側面について API サーバーに通知できます

ここでは、代わりに、CloudNativePG に固有のリソースに関する同じ概要を提供します。

clusters インスタンスマネージャーは、独自の Cluster リソースに対してのみ、読み取り専用権限、つまり get 、list 、および watch を必要とします。

clusters/status インスタンスマネージャーは、 update および patch に、自分自身の Cluster リソースのみのステータスを必要とします

backups インスタンスマネージャーが名前空間内の Backup リソースを読み取るには、 get および list 権限が必要です。さらに、オブジェクトストアに対応するものがない Backup オブジェクトを削除することにより、Kubernetes クラスターをクリーンアップするには、delete 権限が必要です。通常はリテンションポリシーのため

backups/status インスタンスマネージャーは、update および patch に、名前空間内の Backup リソースのステータスを必要とします

10.3.5 ポッドセキュリティポリシー

重要: Kubernetes v1.21 から、*PodSecurityPolicy* の使用は非推奨になり、Kubernetes v1.25 の時点で、完全に削除されました。この非推奨にもかかわらず、オペレーターが現在 Kubernetes の古いサポートされていないバージョンでテストを受けていることを確認しています。したがって、このセクションはこれらの特定のシナリオのために保持されています。

Pod Security Policy

これは、クラスターで実行するためにポッドが満たす必要があるセキュリティルールと仕様を定義する Kubernetes 方法です。InfoSec の理由から、すべての Kubernetes プラットフォームはそれらを実装する必要があります。

CloudNativePG は、コンテナの実行に_privileged_モードを必要としません。PostgreSQL コンテナは、postgres システムユーザーとして実行されます。root として実行する必要があるコンポーネントはありません。

同様に、ボリュームへのアクセスには、 _privileges_モードまたは root 特権も必要ありません。Kubernetes プラットフォームおよび/または管理者は、適切な権限を適切に割り当てる必要があります。PostgreSQL コンテナは、読み取り専用のルートファイルシステムつまり書き込み可能なレイヤーなしで実行されます。

オペレーターは、必要なセキュリティコンテキストを明示的に設定します。

10.3.6 AppArmor を使用してポッドアクセスを制限する

container.apparmor.security.beta.kubernetes.io アノテーションを介して、すべての Cluster ポッド内の postgres、initdb、join、full-recovery、および bootstrap-controller コンテナに AppArmor プロファイルを割り当てることができます。

```
kind: Cluster
metadata:
    name: cluster-apparmor
    annotations:
        container.apparmor.security.beta.kubernetes.io/postgres: runtime/default
        container.apparmor.security.beta.kubernetes.io/initdb: runtime/default
        container.apparmor.security.beta.kubernetes.io/join: runtime/default
```

警告: この種類のアノテーションを使用すると、クラスターが動作を停止する可能性があります。この場合、アノテーションは `Cluster` から安全に削除できます。

AppArmor 構成は Kubernetes ノードレベルである必要があります。つまり、基になるオペレーティングシステムでこのオプションを有効にし、適切に構成する必要があります。

これは状況ではなく、アノテーションが Cluster 作成時に追加された場合、ポッドは作成されません。一方、Cluster が作成された後にアノテーションを追加すると、クラスター内のポッドは起動できず、次のようなエラーが発生します。

```
metadata.annotations[container.apparmor.security.beta.kubernetes.io/postgres]:␣
↪Forbidden: may not add AppArmor annotations]
```

このような場合、Kubernetes 管理者に連絡し、使用する適切な AppArmor プロファイルを聞いてください。

10.3.7 ネットワークポリシー

Cluster リソースによって作成されたポッドは、Kubernetes によって制御できます network policies

IP および TCP レベルでインバウンドおよびアウトバウンドのネットワークアクセスを有効/無効にします。詳細については、*networking document* を参照してください。

重要: オペレーターは、TCP ポート 8000 で各インスタンスと通信して、PostgreSQL サーバーのステータスに関する情報を取得する必要があります。ネットワークポリシーを追加する場合にこれを念頭に置いて、より詳細な制御のために CloudNativePG が使用するポートのリストについては、以下の「公開ポート」セクションを参照してください。

ネットワークポリシーは、このドキュメントの範囲外です。Network policies を参照してください。

詳細については、Kubernetes ドキュメントのセクションを参照してください。

10.3.8 公開ポート

CloudNativePG は、以下の表にリストされているように、オペレーター、インスタンスマネージャー、およびオペランドレベルでポートを公開します。

System	Port number	Exposing	Name	TLS	Authentication
operator	9443	webhook server	*webhook-server*	Yes	Yes
operator	8080	metrics	*metrics*	No	No
instance manager	9187	metrics	*metrics*	Optional	No
instance manager	8000	status	*status*	Yes	No
operand	5432	PostgreSQL instance	*postgresql*	Optional	Yes

10.3.9 PostgreSQL

CloudNativePG の現在の実装は、データベース所有者と、`enableSuperuserAccess` を `true` に設定して要求された場合にのみ、`postgres` スーパーユーザーのパスワードと `.pgpass` ファイルを自動的に作成します。

警告: *enableSuperuserAccess* は、オペレーターのセキュリティバイデフォルト姿勢を向上させるためにデフォルトで `false` に設定され、PostgreSQL への変更が `Cluster` リソースの `spec` を介して宣言的な方法で実行されるマイクロサービスアプローチを促進しながら、開発者に内部のフルパワーを提供しますデータベース所有者ユーザーを介してデータベースにアクセスします。

パスワードの暗号化に関する限り、CloudNativePG は PostgreSQL のデフォルト動作に従います。PostgreSQL 14 以降、`password_encryption` はデフォルトで `scram-sha-256` に設定されますが、以前のバージョンでは `md5` に設定されています。

重要: Password authentication を参照してください。

詳細については、PostgreSQL ドキュメントのセクションを参照してください。

注釈: オペレーターは、*enableSuperuserAccess* オプションのトグルをサポートしています。実行中のクラスターで無効にすると、オペレーターはシークレットの内容を無視し、削除し、オペレーターが以前に生成した場合、*postgres* ユーザーのパスワードを `NULL` に設定しますパスワード認証を介したリモートアクセスを事実上無効にします。

詳細は、 シークレット を参照してください。

これらのファイルを使用して、データベースへのアプリケーションのアクセスを構成できます。

デフォルトでは、すべてのレプリカは、`streaming_replica` と呼ばれる特別なユーザーを使用して、現在のプライマリインスタンスに**物理非同期ストリーミングレプリケーション**で接続するように自動的に構成されます。ノード間の接続は **暗号化**され、認証は **TLS クライアント証明書**を介して行われます。詳細に

ついては、**クライアント *TLS/SSL* 接続** ページを参照してください。デフォルトでは、オペレーターは TLS v1.3 接続を必要とします。

現在、オペレーターは、管理者が `postgresql` 構成の `pg_hba` セクションの一部としてマニフェストに `pg_hba.conf` 行を直接追加できます。マニフェストで定義された行は、デフォルトの `pg_hba.conf` に追加されます。

オペレーターによる `pg_hba.conf` の管理方法の詳細については、ドキュメントの ***PostgreSQL* の構成** を参照してください。

管理者は、デフォルトでローカルの postgres ユーザーをデータベース内の postgres ユーザーにのみマップする `pg_ident.conf` ファイルの内容をカスタマイズすることもできます。

オペレーターによる `pg_ident.conf` の管理方法の詳細については、ドキュメントの ***PostgreSQL* の構成** を参照してください。

重要: 例では、Kubernetes クラスターがプライベートで安全なネットワークで実行されていることを前提としています。

10.3.10 ストレージ

CloudNativePG は、保存時の暗号化を基になるストレージクラスに委任します。運用環境でのデータ保護のために、保存時の暗号化をサポートするストレージクラスを選択することを強くお勧めします。

第11章　Postgresインスタンスマネージャー

CloudNativePG は、フェールオーバー管理に外部ツールに依存しません。これは、Kubernetes API サーバーと、 **Postgres インスタンスマネージャー**と呼ばれるネイティブキーコンポーネントに依存するだけです。

インスタンスマネージャーは、PostgreSQL サーバープロセス `postmaster` としても知られるライフサイクル全体を処理します。

新しいクラスターを作成すると、オペレーターはインスタンスごとにポッドを作成します。フィールド `.spec.instances` は、作成するインスタンスの数を指定します。

各ポッドは、メインコンテナの親プロセス PID 1 としてインスタンスマネージャーを起動し、PostgreSQL インスタンスを実行します。ポッドのライフタイム中、インスタンスマネージャーはバックエンドとして機能して startup, liveness and readiness probes を処理します。

11.1 スタートアップ、活性、および準備状況プローブ

スタートアップとライブネスプローブは `pg_isready` に依存しますが、準備状況プローブは、データベースが起動していて接続を受け入れることができるかどうかを確認します。

11.1.1 スタートアッププローブ

`.spec.startDelay` パラメーターは、PostgreSQL ポッドが起動した後に liveness プローブがアクティブになるまでの遅延秒単位を指定します。デフォルトでは、これは `3600` 秒に設定されます。ご使用の環境で PostgreSQL が完全に初期化に必要な時間に基づいて、この値を調整する必要があります。

> **警告:** *.spec.startDelay* の設定が低すぎると、liveness プローブが途中でアクティブ化される可能性があり、PostgreSQL が完全に初期化されていない場合は不必要な Pod が再起動する可能性があります。

CloudNativePG は、次のデフォルトパラメーターを使用して起動プローブを構成します。

```
failureThreshold: FAILURE_THRESHOLD
periodSeconds: 10
successThreshold: 1
timeoutSeconds: 5
```

ここで、 `FAILURE_THRESHOLD` は、 `startDelay` を `periodSeconds` で除算して計算されます。

startDelay に基づくデフォルトの動作がユースケースに適していない場合は、.spec.probes.startup スタンザでカスタムパラメーターを指定することにより、起動プローブを完全に制御できます。このスタンザを定義すると、startDelay の使用を含むデフォルトの動作がオーバーライドされることに注意してください。

警告: カスタムプローブ設定がクラスターの操作要件と一致していることを確認して、意図しない中断を防ぎます。

注釈: プローブ構成の詳細については、 *probe API* を参照してください。

たとえば、次の構成は startDelay を完全にバイパスします。

```
#  ... snip

spec:
  probes:
    startup:
      periodSeconds: 3
      timeoutSeconds: 3
      failureThreshold: 10
```

11.1.2 Liveness Probe

liveness プローブは、startup プローブが成功した後に開始され、PostgreSQL インスタンスがポッドの再起動が必要な壊れた状態に入ったかどうかを検出します。

ポッドが生きていないとして分類されるまでの時間は、.spec.livenessProbeTimeout パラメーターを介して構成できます。

CloudNativePG は、次のデフォルトパラメーターを使用して liveness プローブを構成します。

```
failureThreshold: FAILURE_THRESHOLD
periodSeconds: 10
successThreshold: 1
timeoutSeconds: 5
```

ここで、 FAILURE_THRESHOLD は、 livenessProbeTimeout を periodSeconds で除算して計算されます。

デフォルトでは、.spec.livenessProbeTimeout は 30 秒に設定されます。これは、liveness プローブが、各チェックの間に 10 秒の間隔で、3 回連続したプローブ障害を検出した場合に障害を報告することを意味します。

livenessProbeTimeout を使用したデフォルトの動作がニーズを満たさない場合、.spec.probes.liveness スタンザでパラメーターを定義することにより、liveness プローブを完全にカスタマイズできます。このス

タンザを指定すると、livenessProbeTimeout の使用を含むデフォルトの動作がオーバーライドされることに注意してください。

警告: カスタムプローブ設定がクラスターの操作要件と一致していることを確認して、意図しない中断を防ぎます。

注釈: プローブ構成の詳細については、 *probe API* を参照してください。

たとえば、次の構成はデフォルトの動作をオーバーライドし、livenessProbeTimeout をバイパスします。

```
#  ... snip

spec:
  probes:
    liveness:
      periodSeconds: 3
      timeoutSeconds: 3
      failureThreshold: 10
```

11.1.3 Readiness Probe

Readiness Probe は、PostgreSQL インスタンスを実行しているポッドがトラフィックを受け入れ、要求を処理する準備ができているときを判断します。

CloudNativePG は、準備状況プローブに次のデフォルト構成を使用します。

```
failureThreshold: 3
periodSeconds: 10
successThreshold: 1
timeoutSeconds: 5
```

デフォルト設定が要件に合わない場合は、 .spec.probes.readiness スタンザでパラメーターを指定して、readness プローブを完全にカスタマイズできます。例

```
#  ... snip

spec:
  probes:
    readiness:
      periodSeconds: 3
      timeoutSeconds: 3
      failureThreshold: 10
```

警告: カスタムプローブ設定がクラスターの操作要件と一致していることを確認して、意図しない中断を防ぎます。

注釈: プローブの構成の詳細については、 *probe API* を参照してください。

11.2 シャットダウン制御

Postgres を実行しているポッドが手動で、またはノードドレイン操作に続いて Kubernetes によって削除されると、kubelet はインスタンスマネージャーに終了信号を送信し、インスタンスマネージャーは適切な方法で PostgreSQL のシャットダウンを担当します。`.spec.smartShutdownTimeout` および `.spec.stopDelay` オプションは秒単位であり、PostgreSQL がシャットダウンするまでの時間を制御します。値はデフォルトでそれぞれ 180 および 1800 秒です。

シャットダウン手順は 2 つの手順で構成されます。

1. インスタンスマネージャーは **スマート**シャットダウンを要求し、PostgreSQL への新しい接続を禁止します。このステップは最大`.spec.smartShutdownTimeout` 秒間続きます。
2. PostgreSQL がまだアップしている場合、インスタンスマネージャーは**高速**シャットダウンを要求し、既存の接続を終了してすぐに終了します。インスタンスが WAL ファイルのアーカイブおよび/またはストリーミングを行っている場合、プロセスは`.spec.stopDelay` で設定された残り時間まで待機して操作が完了し、強制的にシャットダウンします。このようなタイムアウトは少なくとも 15 秒である必要があります。

重要: データベース PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} に影響を与える Postgres クラスターでのデータの損失を回避するには、プライマリインスタンスが実行されている Pod を削除しないでください。この場合、最初に別のインスタンスへのスイッチオーバーを実行します。

11.2.1 スイッチオーバー中のプライマリのシャットダウン

スイッチオーバー中のシャットダウン手順は、一般的な場合と少し異なります。実際、オペレーターは、新しいプライマリですべてのデータが利用できるように保証に、選択した新しいプライマリを昇格させる前に、元のプライマリに **fast** シャットダウンを発行する必要があります。

このため、秒単位で表される`.spec.switchoverDelay` は、元のプライマリが正常にシャットダウンし、すべての WAL ファイルをアーカイブする時間を制御します。デフォルトでは、`3600` 1 時間に設定されています。

警告: *.spec.switchoverDelay* オプションは PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} に影響します

と PostgreSQL データベースの *RTO と RPO のインパクト* 低い値に設定すると、RPO よりも RTO が優先される場合がありますが、クラスターレベルおよび/またはバックアップレベルでデータの損失が発生します。逆に、高い値に設定すると、スイッチオーバー中にアクティブなプライマリのないクラスターを長時間放置する間のデータ損失のリスクを取り除くことができます。

11.3 フェイルオーバー

プライマリポッドに障害が発生した場合、クラスターはフェールオーバーモードになります。詳細は **自動フェイルオーバー** を参照してください。

11.4 ディスクフル障害

ストレージの枯渇は、PostgreSQL クラスターのよく知られた問題です。PostgreSQL documentation

では、考えられる障害シナリオと、ディスクの使用状況を監視してディスクがいっぱいになるのを防ぐことの重要性を強調しています。

同じことは CloudNativePG と Kubernetes にも当てはまります。 ClusterMonitoringTLSConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterMonitoringTLSConfiguration}

WAL セグメントが使用するディスク領域と、Prometheus にエクスポートされたディスク使用量の標準メトリックの確認に関する詳細を提供します。

重要: 実稼働システムでは、データベースを継続的に監視することが重要です。ディスクストレージが使い果たされると、データベースサーバーがシャットダウンする場合があります。

注釈: 使い果たしたストレージの検出は、ディスクのサイズと使用状況を正確に報告するストレージクラスに依存しています。これは、Kind のようなシミュレートされた Kubernetes 環境、または`csi-driver-host-path`などのテストストレージクラス実装には当てはまらない場合があります。

WAL が含まれるディスクがいっぱいになり、これ以上 WAL セグメントを保存できなくなると、PostgreSQL は動作を停止します。CloudNativePG は、次の WAL セグメントを保存するための十分な領域があることを確認することにより、この問題を正しく検出し、復旧を複雑にする可能性のあるフェイルオーバーのトリガーを回避します。

これにより、人間の管理者は根本的な原因に対処できます。

このような場合、ストレージクラスでサポートされている場合、現在最も早いアクションは次のことです。

1. フル PVC のストレージサイズを拡張する
2. `Cluster` リソースのサイズを同じ値に増加します

問題が解決され、WAL セグメント用の十分な空き領域が確保されると、ポッドが再起動し、クラスターが正常な状態になります。

ドキュメントの ボリュームの拡張 も参照してください。

第12章　スケジューリング

Kubernetes のスケジューリングは、いくつかの基準に基づいて、可能な限り最適なノードに新しいポッドを配置するプロセスです。

参考:

Kubernetes documentation を参照してください。

使用可能なすべてのポリシーを含むスケジュールの詳細については、をご覧ください。このページでは、アフィニティ、アンチアフィニティ、ノードセレクターなどの概念に精通していることを前提としています。

AffinityConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-AffinityConfiguration} を介して CloudNativePG クラスターのインスタンスをスケジュールする方法を制御できます

クラスターの定義のセクション。以下をサポートします。

- ポッドアフィニティ/アンチアフィニティ
- ノードセレクター
- 許容範囲

12.1 ポッドアフィニティとアンチアフィニティ

Kubernetes は、_affinity_および_anti-affinity_ルールを使用してポッドをスケジュールする場所を制御するメカニズムを提供します。これらのルールを使用すると、そこで既に実行されているワークロードに基づいて、ポッドを特定のノードでスケジュールするかどうかを指定するか、特定のノードで回避するかどうかを指定できます。この機能は、技術的に**ポッド間アフィニティ/アンチアフィニティ** と呼ばれます。

デフォルトでは、CloudNativePG はクラスターインスタンスをできれば別のノードでスケジュールするように構成しますが、`pgBouncer` インスタンスは同じノードで実行される場合があります。

例、次の `Cluster` 仕様の場合

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  affinity:
    enablePodAntiAffinity: true # Default value
    topologyKey: kubernetes.io/hostname # Default value
    podAntiAffinityType: preferred # Default value

  storage:
    size: 1Gi
```

インスタンスポッドに適用される affinity 構成は次のとおりです。

```
affinity:
  podAntiAffinity:
    preferredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution:
      - podAffinityTerm:
          labelSelector:
            matchExpressions:
              - key: cnpg.io/cluster
                operator: In
                values:
                  - cluster-example
              - key: cnpg.io/podRole
                operator: In
                values:
                  - instance
          topologyKey: kubernetes.io/hostname
        weight: 100
```

この設定では、十分なリソースが利用可能であると仮定して、Kubernetes は 3 つの異なるノードにまたがって 3 ノード PostgreSQL クラスターをスケジュールすることを_prefer_します。

12.1.1 ポッドのアンチアフィニティの必要性

上記の設定を調整することにより、デフォルトの動作を変更できます。

たとえば、podAntiAffinityType を required に設定すると、preferredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution の代わりに requiredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution が適用されます。

ただし、この厳密な要件により、リソースが不十分な場合、ポッドが保留されたままになる場合があることに注意してください。これは、Cluster Autoscaler を使用する場合に特に関連します

Kubernetes クラスターでの自動ホリゾンタル スケーリング用。

参考:

詳細については、 *Kubernetes documentation* を参照してください。

12.1.2 トポロジの考慮事項

クラウド環境では、ポッドがノードだけではなく異なるアベイラビリティーゾーンに分散されるように、`topology.kubernetes.io/zone` を `topologyKey` として使用することを検討できます。その他のオプションについては、Well-Known Labels, Annotations, and Taints を参照してください。

12.1.3 アンチアフィニティポリシーの無効化

必要に応じて、`enablePodAntiAffinity` を `false` に設定することにより、オペレーター生成のアンチアフィニティポリシーを無効にできます。

12.1.4 カスタムルールを使用したきめの細かい制御

より正確な制御が必要なシナリオの場合、`additionalPodAffinity` および `additionalPodAntiAffinity` 構成属性を使用して、カスタムポッドアフィニティまたはアンチアフィニティルールを指定できます。これらのカスタムルールは、オペレーターが有効になっている場合は生成されたルールに追加され、オペレーター生成ルールが無効になっている場合は直接使用されます。

注釈: *additionalPodAntiAffinity* または `additionalPodAffinity` を使用する場合、Pod 仕様で想定されている完全な `podAntiAffinity` または `podAffinity` 構造を提供する必要があります。次の YAML 例は、どの PostgreSQL クラスターに属しているかに関係なく、ワーカーノードごとに PostgreSQL のインスタンスを 1 つだけ構成する方法を示しています。

```yaml
additionalPodAntiAffinity:
  requiredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution:
    - labelSelector:
        matchExpressions:
          - key: postgresql
            operator: Exists
            values: []
      topologyKey: "kubernetes.io/hostname"
```

12.2 nodeSelector によるノード選択

Kubernetes では、 `nodeSelector` がラベルのリストキーと値のペアとして定義を提供して、ポッドを実行できるノードを選択できます。具体的には、ノードには、スケジュールおよび実行するポッドのラベルとして、指定された各キーと値のペアが必要です。

同様に、CloudNativePG は、 `affinity` セクションで `nodeSelector` を定義することに同意して、これらのラベルを持つノードでのみ実行する PostgreSQL クラスターを要求できます。

12.3 許容範囲

Kubernetes では、 taints を介して tolerations を介して明示的に許容しないすべてのポッドをノードが反発するかどうかを指定できます taints を介して 。

したがって、特定のノードの taints と一致するワークロードに tolerations の適切なセットを設定することにより、Kubernetes スケジューラーは、汚染されたノードを考慮に入れて、ワークロードをスケジュールするノードを決定するようになります。.spec.affinity.tolerations セクションを介して、クラスターのすべてのポッドの許容値を構成できます。このセクションは、許容値の通常の Kubernetes 構文を受け入れます。

参考:

taint と toleration の詳細については、 *Kubernetes documentation* を参照してください。

12.4 PostgreSQL ワークロードの分離

重要: 続行する前に、ドキュメントの **アーキテクチャ** セクションを必ず読んでください。

さまざまな方法で Kubernetes に PostgreSQL を展開できますが、運用環境では次の重要な原則に従うことをお勧めします。

- **アベイラビリティーゾーンのエクスプロイト**可能であれば、異なる AZ に PostgreSQL インスタンスを分散することにより、同じ Kubernetes クラスター内のアベイラビリティーゾーン AZ を利用します。
- **専用ワーカーノード** *PostgreSQL ワークロードのノードの予約* で詳細に説明しているように、node-role.kubernetes.io/postgres ラベルとテイントを介して PostgreSQL ワークロードの特定のワーカーノードを割り当てます。

セクション。

- **ノードのオーバーラップの回避**同じ PostgreSQL クラスターのインスタンスが同じノードで実行されていないことを確認します。

前のセクションで詳しく説明したように、CloudNativePG は、ポッドのアンチアフィニティ、ノードセレクター、および許容範囲を構成する柔軟性を提供します。

以下は、PostgreSQL Cluster が postgres ノードにデプロイされ、そのインスタンスがさまざまなノードに分散されていることを確認するためのサンプル構成です。

```
#  <snip>

affinity:
  enablePodAntiAffinity: true
  topologyKey: kubernetes.io/hostname
  podAntiAffinityType: required
  nodeSelector:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    node-role.kubernetes.io/postgres: ""
  tolerations:
    - key: node-role.kubernetes.io/postgres
      operator: Exists
      effect: NoSchedule

#  <snip>
```

そのシンプルさにもかかわらず、このセットアップは PostgreSQL ワークロードの最適な分散と分離を保証し、運用環境のパフォーマンスと信頼性の向上につながります。

第13章　リソース管理

一般的な Kubernetes クラスターでは、ポッドは無制限のリソースで実行されます。デフォルトでは、必要なだけ CPU と RAM を使用できます。

CloudNativePG を使用すると、管理者は、マニフェストの `resources` セクションを介して、クラスターのポッドによるリソース使用を制御および管理できます。

- `requests` 初期要件
- `limits` 最大使用量、リソースニーズが動的に増加した場合

たとえば、次のように 32MiB 128MiB までスケーラブルな RAM の初期量と 50m の CPU 100m までスケーラブルを要求できます。

```yaml
resources:
  requests:
    memory: "32Mi"
    cpu: "50m"
  limits:
    memory: "128Mi"
    cpu: "100m"
```

メモリ要求と制限はコンテナに関連付けられますが、ポッドにメモリ要求と制限があると考えると便利です。ポッドのメモリ要求は、ポッド内のすべてのコンテナのメモリ要求の合計です。

ポッドのスケジューリングは、制限ではなく要求にもとづいています。ポッドのメモリ要求を満たすだけの十分な使用可能なメモリがノードにある場合にのみ、ポッドはノードで実行されるようにスケジュールされます。

リソースごとに、コンテナを優先度の高い順に 3 つのサービス品質 QoS クラスに分割します。

- **保証**
- **バースト可能**
- **ベストエフォート**

詳細については、 Configure Quality of Service for Pods を参照してください。

Kubernetes ドキュメントのセクション。

PostgreSQL ワークロードの場合、「保証」QoS を設定することをお勧めします。

Kubernetes のリソース関連の問題を回避するには、クラスターの作成中に「リソース不足」処理のベストプラクティスを参照できます。

- マニフェストファイルのリソースセクションでメモリと CPU の必要な値を指定します。この方法により、`OOM Killed` OOM はメモリ不足の略です `CPU throttle` または実行中のインスタンスに関するその他のリソース関連の問題を回避できます。
- クラスターのポッドを「保証」QoS クラスに割り当てるには、メモリと CPU の両方の制限と要求を同じ値に設定する必要があります。
- ポッドリソースと一貫して必要な PostgreSQL メモリパラメーターを指定します VM または物理マシンのシナリオで行うように、以下を参照してください。
- nodeSelector を使用して、専用ノードにデータベースサーバーポッドをセットアップします。API リファレンスページの *"affinityconfiguration"* リソースの「nodeSelector」および「tolerations」フィールドを参照してください。

次のマニフェストの例を参照できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-resources
spec:

  instances: 3

  postgresql:
    parameters:
      shared_buffers: "256MB"

  resources:
    requests:
      memory: "1024Mi"
      cpu: 1
    limits:
      memory: "1024Mi"
      cpu: 1

  storage:
    size: 1Gi
```

上記の例では、 `256MB` の値で `shared_buffers` パラメーターを指定しました。つまり、データをキャッシュするために PostgreSQL サーバーに専用のメモリの量です。このパラメーターのデフォルト値は定義されていない場合の `128MB` です。

`shared_buffers` の適切な開始値は、システム内のメモリの 25%です。例えば `shared_buffers` が 256 MB の場合、コンテナメモリサイズの推奨値は 1 GB です。これは、ポッド内ですべてのコンテナが合計 1 GB のメモリを持つことを意味し、Kubernetes が常に保持し、コンテナができることを意味します予想通りに動作します。詳細については、Resource Consumption を参照してください。

PostgreSQL ドキュメントのセクション。

参考:

リソース管理の詳細については、 Managing Compute Resources for Containers を参照してください。

Kubernetes ドキュメントのページ。

第14章　障害モード

このセクションでは、PostgreSQL がその有効期間中に Kubernetes クラスターで直面する可能性のある主要な障害シナリオの概要を提供します。

重要: 発生している障害シナリオがこのセクションでカバーされていない場合、すぐに professional support を探してください。

参考:

Postgres **インスタンスマネージャー** を参照してください。

CloudNativePG によって実装される liveness プローブと readness プローブの詳細については、を参照してください。

14.1 ストレージ領域の使用量

オペレーターは、PostgreSQL インスタンスごとに 1 つの PVC をインスタンス化して、`PGDATA` コンテンツを保存します。クラスターの初期化中に`.spec.walStorage` が指定された場合、WAL ストレージ専用の 2 番目の PVC がプロビジョニングされます。

このような記憶領域は、2 つの場合に再利用のために設定されます。

- 対応するポッドがユーザーによって削除され、新しいポッドが再作成されるとき
- 対応するポッドが削除され、別のノードでスケジュールされたとき

オペレーターが特定の PVC を再利用したくない場合は、ポッドを削除する前に PVC を削除する必要があります。このために、次のコマンドを使用できます。

```
kubectl delete -n [namespace] pvc/[cluster-name]-[serial] pod/[cluster-name]-[serial]
```

注釈: 専用の WAL ボリュームを指定した場合、このプロセス中に削除する必要があります。

```
kubectl delete -n [namespace] pvc/[cluster-name]-[serial] pvc/[cluster-name]-[serial]-
↪wal pod/[cluster-name]-[serial]
```

例

```
$ kubectl delete -n default pvc/cluster-example-1 pvc/cluster-example-1-wal pod/
↪cluster-example-1
persistentvolumeclaim "cluster-example-1" deleted
persistentvolumeclaim "cluster-example-1-wal" deleted
pod "cluster-example-1" deleted
```

14.2 障害モード

Cluster に属するポッドは、次の方法で障害が発生する場合があります。

- ポッドはユーザーによって明示的に削除されます。
- postgres コンテナの準備状況プローブは失敗します。
- postgres コンテナの liveness プローブは失敗します。
- Kubernetes ワーカーノードがドレインされます。
- ポッドがスケジュールされている Kubernetes ワーカーノードに障害が発生します。

これらの障害はそれぞれ、Cluster およびオペレーターが管理するサービスにさまざまな影響を与えます。

14.2.1 ユーザーによって削除されたポッド

オペレーターに削除が通知されます。 Cluster に属する新しいポッドは、既存の PVC を再利用可能な場合は再利用し、それ以外の場合は_primary_の物理的バックアップから開始して自動的に作成されます。

重要: ポッドを意図的に削除した場合、*PodDisruptionBudget* ポリシーは適用されません。

自己修復は、_apiserver_が通知されるとすぐに発生します。

次の汎用コマンドを使用して、クラスターの特定のポッドで突然の障害をトリガーできます。

```
kubectl delete -n [namespace] \
  pod/[cluster-name]-[serial] --grace-period=1
```

たとえば、プライマリで実際の障害をシミュレートし、フェールオーバープロセスをトリガーする場合は、次を実行できます。

```
kubectl delete pod [primary pod] --grace-period=1
```

警告: PostgreSQL クラスターで誤解を招く結果を生成する可能性があるため、フェールオーバーシミュレーションテストでは`--grace-period=0` を決して使用しないでください。猶予期間 0 は、実際の障害が発生した場合に何が起こるかとは逆に、*postgres* コンテナインスタンスマネージャーの PID 1 プ

ロセスがシャットダウンしていることを最初に確認せずに、ポッドが Kubernetes API サーバーからすぐに削除されることを保証します例 電源コードケーブルまたはネットワークパーティショニングを取り外します。その結果、オペレーターはプライマリのポッドを認識せず、プライマリがシャットダウンされた保証なしで、最も調整されたスタンバイをプロモーションするフェールオーバーをトリガーします。

14.2.2 Liveness プローブの失敗

デフォルトでは、liveness プローブが 3 回連続して失敗すると、`postgres` コンテナに障害が発生したとみなされます。ポッドは `Cluster` の一部のままですが、_kubelet_は、障害が発生したコンテナを再起動しようとします。障害の原因となった問題が持続し解決できない場合は、ポッドを手動で削除できます。

どちらの場合も、根本的な問題が解決されると、自己修復は自動的に発生します。

14.2.3 Readiness Probe の失敗

デフォルトでは、readiness Probe が 3 回連続で失敗すると、Pod は_notready_としてマークされます。これは `Cluster` の一部のままで、新しい Pod は作成されません。障害の原因となっている問題を解決できない場合は、ポッドを手動で削除できます。障害が解決されると、ポッドは自動的に以前のロールを取り戻します。

14.2.4 ワーカーノードがドレインされました

ポッドはワーカーノードから削除され、サービスから削除されます。`nodeMaintenanceWindow` パラメーターの `reusePVC` オプションが `off` に設定されている場合、新しいポッドは_primary_の物理バックアップから別のワーカーノードに作成されます。デフォルトメンテナンス時間帯は `on` 、それ以外の場合は `off` 。

`PodDisruptionBudget` は、準備ができていない少なくとも別のポッドが存在する場合、ポッドのエビクトを防止する場合があります。

注釈: *reusePVC* が `false` に設定されている場合、単一インスタンスクラスターはノードのドレインを防止します。 *Kubernetes Upgrade section* を参照してください。

自己修復は、_apiserver_が通知されるとすぐに発生します。

14.2.5 ワーカーノードの障害

ノードに障害が発生しているため、_kubelet_は liveness プローブと readness プローブを実行しません。ポッドは、その特定の障害原因に対して Kubernetes クラスター管理者が構成した許容秒後、削除用にマークされます。Kubernetes クラスターの構成に基づいて、ポッドはサービスから以前に削除される場合があります。

新しいポッドは、_primary_の物理バックアップから別のワーカーノードに作成されます。Kubernetes クラスターにおけるそのパラメーターのデフォルト値は 5 分です。

自己修復は `tolerationSeconds` の後に発生します。

14.3 自己修復

障害が発生したポッドがスタンバイの場合、ポッドは`-r` サービスおよび`-ro` サービスから削除されます。ポッドは、可能な場合は PVC を使用して再起動されます。それ以外の場合、新しいポッドは、現在のプライマリのバックアップから作成されます。準備ができたら、ポッドは`-r` サービスと`-ro` サービスに再度追加されます。

障害が発生したポッドがプライマリの場合、オペレーターはステータスが準備ができており、レプリケーションラグが最も低いアクティブなポッドをプロモートし、`-rw` サービスをそこにポイントします。障害が発生したポッドは、`-r` サービスおよび`-rw` サービスから削除されます。他のスタンバイは、新しいプライマリからの複製を開始します。元のプライマリは、PVC が利用可能な場合、`pg_rewind` を使用して新しいプライマリと自分自身を同期します。それ以外の場合、現在のプライマリのバックアップから新しいスタンバイが作成されます。

14.4 手動介入

文書化されていない障害の場合、介入して問題を手動で解決する必要がある場合があります。

重要: このような場合、 professional support なしで手動操作を実行しないでください。

以下に示すように、 `cnpg.io/reconciliationLoop` アノテーションを使用して、特定の PostgreSQL クラスターのリコンシリエーションループを一時的に無効にすることができます。

```
metadata:
  name: cluster-example-no-reconcile
  annotations:
    cnpg.io/reconciliationLoop: "disabled"
spec:
  # ...
```

`cnpg.io/reconciliationLoop` は、特別な/緊急操作の期間のみに、細心の注意を払って使用する必要があります。

警告: このアノテーションは限定的な期間のみ使用し、緊急事態が終了したら削除するようにしてください。このアノテーションをクラスターに残すと、オペレーターはフェールオーバーなどの自己修復操作を発行できません。

第15章　ローリングアップデート

オペレーターを使用すると、アプリケーションが実行されているときにクラスターで使用される PostgreSQL バージョンを変更できます。

重要: PostgreSQL マイナーリリースのアップグレードのみがサポートされています。

ローリングアップグレードは、次の場合に開始されます。

- ユーザーはクラスター仕様の `imageName` 属性を変更します。
- **イメージカタログ** は、クラスターが使用するメジャーの新しいイメージで更新されます。
- PostgreSQL 構成を変更するには、再起動を適用する必要があります。
- `Cluster .spec.resources` 値の変更
- AKS の永続ボリューム要求のサイズの変更
- オペレーターが更新された後、ポッドが最新のインスタンスマネージャーを実行していることを確認します *in-place updates are enabled* の場合

オペレーターは、一度に 1 つのポッドずつ、すべてのレプリカのアップグレードを開始します。シリアルが最も高いものから開始します。

プライマリは、アップグレードされる最後のノードです。

ローリング更新は構成可能で、完全に自動化する `unsupervised` か、人間の介入を必要とする `supervised` のいずれかです。

アップグレードでは、データの再クローンを作成せずに、CloudNativePG ID を維持します。ポッドは削除され、必要に応じて同じ PVC と新しいイメージを使用して再度作成されます。

ローリング更新手順中に、各サービスエンドポイントが移動してクラスターのステータスを反映するため、アプリケーションは更新中のノードを無視できます。

15.1 自動更新 unsupervised

primaryUpdateStrategy が unsupervised に設定されている場合、ローリング更新プロセスは Kubernetes によって管理され、完全に自動化されます。レプリカがアップグレードされると、選択された primaryUpdateMethod オペレーションがプライマリで開始されます。これはデフォルトの動作です。

primaryUpdateMethod オプションは、次のいずれかの値を受け入れます。

- restart 可能であれば、プライマリインスタンスが実行されているポッドの自動再起動を実行します。それ以外の場合、再起動要求は無視され、スイッチオーバーが発行されます。これはデフォルトの動作です。
- switchover スイッチオーバー操作が自動的に実行され、最もアライメントされたレプリカを新しいターゲットプライマリとして設定し、以前のプライマリポッドをシャットダウンします。

データベースの実際のワークロード、PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} および *RTO と RPO のインパクト* に関する要件、PostgreSQL アーキテクチャが共有されているか、何も共有されていないなどのいくつかの要素に依存するため、update 方法に万能の構成はありません。で。

実際、PostgreSQL はプライマリ/スタンバイアーキテクチャのデータベース管理システムであるため、更新プロセスは必然的にアプリケーションのダウンタイムを生成します。コンテキストに合わせて考慮する必要がある重要な側面の 1 つは、ポッドが新しい PostgreSQL コンテナイメージをダウンロードするのにかかる時間です。これは、Kubernetes クラスターの設定と仕様によって異なります。switchover メソッドは、昇格したインスタンスがコンテナのターゲットイメージバージョンを既に実行していることを確認します。代わりに restart メソッドでは、プライマリポッドがシャットダウンされた後、元のレジストリからイメージをダウンロードする必要がある場合があります。データベースにとって、ローリング更新プロシージャの一部として restart または switchover を使用することが最善であるかどうかは、あなたが判断する必要があります。

15.2 手動更新 supervised

primaryUpdateStrategy が supervised に設定されている場合、ローリング更新プロセスは、すべてのレプリカがアップグレードされた直後に一時停止されます。

このフェーズは、手動スイッチオーバーまたはインプレースリスタートのいずれかでのみ完了できます。イメージのアップグレードはインプレース再起動では適用できないため、このような場合にはスイッチオーバーが必要であることに注意してください。

次の方法でスイッチオーバーをトリガーできます。

```
kubectl cnpg promote [cluster] [new_primary]
```

次の方法で再起動をトリガーできます。

```
kubectl cnpg restart [cluster] [current_primary]
```

詳細については、 Backup {postgresql-cnpg-io-v1-Backup} を参照してください。

第16章　レプリケーション

物理的レプリケーションはPostgreSQLの強みの1つであり、世界最大の組織の一部がビジネス継続性のコンテキストでのデータの管理にそれを選択した理由の1つです。物理レプリケーションは、主に高可用性を実現するために使用されますが、読み取り専用ワークロードのスケールアウトと、プライマリから一部の作業をオフロードすることもできます。

重要: このセクションは、同じKubernetesクラスターで管理される同じ`Cluster`リソース内のレプリケーションに関するものです。異なるKubernetesクラスター間でも、別のPostgres *Cluster* リソースを使用して複製する方法については、 レプリカクラスター セクションを参照してください。

16.1 アプリケーションレベルのレプリケーション

PostgreSQLのレプリケーション機能に長年貢献してきましたが、ネイティブ物理レプリケーションテクノロジーに基づいてCloudNativePGで高可用性を構築し、Kubernetes APIに直接統合することにしました。

Kubernetesの用語では、これは_ストレージレベルのレプリケーション_とは対照的に、**アプリケーションレベルのレプリケーション** と呼ばれます。

16.2 非常に成熟したテクノロジー

PostgreSQLには、プライマリインスタンスから1つ以上のレプリカにデータをレプリケートするための非常に堅牢で成熟したネイティブフレームワークがあり、WALライトアヘッドログに継続的に保存されるトランザクションの変更の概念を中心に構築されています。

クラッシュリカバリーとポイントインタイムリカバリーテクノロジーの進化として始まった物理的レプリケーションは、継続的リカバリーでのプライマリからウォームスタンバイへのWALシッピングを介してPostgreSQL 8.22006で最初に導入されました。

PostgreSQL 9.0 2010は、_ホットスタンバイ_を介したWALストリーミングと読み取り専用レプリカを導入しました。2011年、PostgreSQL 9.1はトランザクションレベルで同期レプリケーションをもたらし、PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} =0クラスターをサポートしました。カスケードレプリケーションはPostgreSQL 9.22012で追加されました。 ロジカルレプリケーションのパブリケーション の基礎はPostgreSQL 9.42014で確立され、バージョン102017では、オリジンから宛先にデータをレプリケートするためのパブリッシャー/サブスクライバーパターンのネイティブサポートを導入しました。以下の表は、これらのマイルストーンをまとめたものです。

Version	Year	Feature
8.2	2006	Warm Standby with WAL shipping
9.0	2010	Hot Standby and physical streaming replication
9.1	2011	Synchronous replication (priority-based)
9.2	2012	Cascading replication
9.4	2014	Foundations of logical replication
10	2017	Logical publisher/subscriber and quorum-based synchronous replication

この表は、主要な PostgreSQL レプリケーション機能とその各バージョンを強調表示しています。

16.3 ストリーミングレプリケーションのサポート

現時点では、CloudNativePG は、 spec で提供された instances の数に基づいて、宣言的な方法でクラスター内の物理的ストリーミングレプリカをネイティブかつ透過的に管理します。

```
replicas = instances - 1 (where  instances > 0)
```

クラスターの初期化の直後、オペレーターは次のように streaming_replica というユーザーを作成します。

```
CREATE USER streaming_replica WITH REPLICATION;
- - NOSUPERUSER INHERIT NOCREATEROLE NOCREATEDB NOBYPASSRLS
```

すぐに使える、オペレーターは、暗号化されたチャネルを介してクラスター内のストリーミングレプリケーションを自動的に設定し、streaming_replica ユーザーの TLS クライアント証明書認証を適用します。pg_hba.conf からの次の抜粋で強調表示されています。

```
#  Require client certificate authentication for the streaming_replica user

hostssl postgres streaming_replica all cert
hostssl replication streaming_replica all cert
```

参考:

CloudNativePG が証明書を管理する方法の詳細については、 証明書 を参照してください。

ドキュメントで。

構成されている場合、オペレーターは HA クラスター内のすべてのレプリカのレプリケーションスロットを管理し、各スタンバイに必要な WAL ファイルが、フェールオーバーまたはスイッチオーバーの後でもプライマリのストレージに保持されるようにします。

参考:

CloudNativePG が高可用性レプリカのレプリケーションスロットを自動的に管理する方法の詳細については、 高可用性のためのレプリケーションスロット を参照してください。

以下。

16.3.1 継続的なバックアップ統合

クラスターで継続的バックアップが構成されている場合、CloudNativePG は、継続的リカバリー時に `restore_command` を利用するようにレプリカを透過的に構成します。その結果、PostgreSQL は、ストリーミングレプリケーションを介した WAL のプルが失敗するときは常に、フォールバックオプションとして WAL アーカイブを使用できます。

16.4 同期レプリケーション

CloudNativePG は、両方の quorum-based and priority-based synchronous replication for PostgreSQL をサポートしています。

> **警告:** デフォルトでは、トランザクションのコミット中に WAL レプリケーションに必要な数のスタンバイノードを使用できない場合、同期レプリケーションは書き込み操作を一時停止します。この動作はデータの耐久性を優先し、PostgreSQL DBA のベストプラクティスに沿っています。ただし、セットアップでの厳密なデータの耐久性よりも自己修復の方が優先される場合、この設定を調整できます。この動作の管理の詳細については、 データの耐久性と同期レプリケーション を参照してください。

セクション。

`synchronous_standby_names` オプションの直接構成は許可されていません。ただし、CloudNativePG は、このオプションにローカルポッドの名前を自動的に入力しますが、カスタマイズで `Cluster` リソースを超えて同期レプリケーションを拡張できます。これは、*.spec.postgresql.synchronous* を介して実現できます。

同期レプリケーションはデフォルトで無効になっています。 `synchronous` スタンザは定義されていません。定義すると、2 つのオプションが必須です。

- `method` `any` クォーラムまたは `first` プライオリティ
- `number` トランザクションが応答を待機する必要がある同期スタンバイサーバーの数

16.4.1 クォーラムベースの同期レプリケーション

PostgreSQL では、クォーラムベースの同期レプリケーションにより、トランザクションのコミットは、WAL レコードが指定された数のスタンバイにレプリケートされるまで待機します。これを有効にするには、method を any に設定します。

このレプリケーション方法は、CloudNativePG クラスターの最も一般的なセットアップです。

16.4.2 例

次の例は、3 つのインスタンスを使用した一般的な cluster-example 構成に基づいて、少なくとも 1 つのインスタンスを使用してクォーラムベースの同期レプリケーションを設定します。

```
postgresql:
  synchronous:
    method: any
    number: 1
```

この構成では、CloudNativePG は次のように synchronous_standby_names のコンテンツを自動的に設定します。

```
ANY 1 (cluster-example-2, cluster-example-3, cluster-example-1)
```

16.4.3 非推奨の同期レプリケーション実装からの移行

このセクションでは、非推奨のクォーラムベースの同期レプリケーション形式から CloudNativePG の新しいより堅牢な実装に移行する方法について概要を説明します。

次のマニフェストを考えると

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: angus
spec:
  instances: 3
  minSyncReplicas: 1
  maxSyncReplicas: 1

  storage:
    size: 1G
```

次のとおりに、新しい形式に更新できます。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: angus
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1G

  postgresql:
    synchronous:
      method: any
      number: 1
      dataDurability: required
```

厳密なデータの耐久性よりも自己修復を優先するには、代わりに `dataDurability` を `preferred` に設定します。

16.4.4 優先度ベースの同期レプリケーション

PostgreSQL の優先度ベースの同期レプリケーションは、WAL レコードが、優先度に基づいて選択された要求された数の同期スタンバイにレプリケートされるまで、トランザクションコミットを待機させます。`synchronous_standby_names` オプションで前にリストされたスタンバイには、より高い優先順位が与えられ、同期とみなされます。現在の同期スタンバイが切断されると、次に優先度の高いスタンバイにすぐに置き換えられます。この方法を使用するには、`method` を `first` に設定します。

重要: 現在、この方法は、以下で説明する `maxStandbyNamesFromCluster` 、*standbyNamesPre* 、および `standbyNamesPost` オプションを使用して、現在のクラスターを超えて同期レプリケーションを拡張する場合に最も役立ちます。

16.4.5 synchronous_standby_names コンテンツの制御

デフォルトでは、CloudNativePG は `Cluster` リソースのローカルポッドの名前を `synchronous_standby_names` に設定し、PostgreSQL クラスター内の同期レプリケーションを保証します。`.spec.postgresql.synchronous` スタンザの次のオプショナルパラメーターを使用して、要件とレプリケーション方法クォーラムまたは優先順位に基づいて `synchronous_standby_names` のコンテンツをカスタマイズできます。

- `maxStandbyNamesFromCluster` PostgreSQL の `synchronous_standby_names` オプションに自動的に含めることができるローカル `Cluster` オブジェクトのポッド名の最大数。
- `standbyNamesPre` オペレーターによって自動的にリストされたローカルポッド名のリストの前に追加されるスタンバイ名のリスト特に `application_name` 。

- standbyNamesPost オペレーターによって自動的にリストされたローカルポッド名のリストに追加されるスタンバイ名のリスト特に application_name 。

警告: *standbyNamesPre* および `standbyNamesPost` の名前が正しいことを確認するのは自分の責任です。 CloudNativePG は、ここにリストされている `application_name` でスタンバイを管理し、高可用性を保証することを想定しています。エントリが間違っていると、PostgreSQL データベースのアップタイムが危険にさらされる可能性があります。

16.4.6 例

次に、いくつかの例を示します。すべては、3 つのインスタンスを持つ cluster-example に基づいています。

設定すると

```yaml
postgresql:
  synchronous:
    method: any
    number: 1
    maxStandbyNamesFromCluster: 1
    standbyNamesPre:
      - angus
```

synchronous_standby_names の内容は次のとおりです。

```
ANY 1 (angus, cluster-example-2)
```

設定すると

```yaml
postgresql:
  synchronous:
    method: any
    number: 1
    maxStandbyNamesFromCluster: 0
    standbyNamesPre:
      - angus
      - malcolm
```

synchronous_standby_names の内容は次のとおりです。

```
ANY 1 (angus, malcolm)
```

設定すると

```
postgresql:
  synchronous:
    method: first
    number: 2
    maxStandbyNamesFromCluster: 1
    standbyNamesPre:
      - angus
    standbyNamesPost:
      - malcolm
```

synchronous_standby_names オプションは次のようになります。

```
FIRST 2 (angus, cluster-example-2, malcolm)
```

16.4.7 データの耐久性と同期レプリケーション

.spec.postgresql.synchronous スタンザの dataDurability オプションは、同期レプリケーションのデータの安全性と可用性間のトレードオフを制御します。required または preferred に設定できます。指定しない場合、デフォルトは required になります。

重要: *preferred* は、 *standbyNamesPre* および `standbyNamesPost` が設定されていない場合にのみ使用できます。

16.4.8 必要なデータの耐久性

dataDurability が required に設定されている場合、PostgreSQL は、WAL 書き込み先行ログレコードが指定された数の同期スタンバイにレプリケートされた後にコミットされたトランザクションのみを考慮します。この設定では、可用性よりデータの安全性が優先されます。つまり、必要な数の同期スタンバイが使用できない場合、書き込み操作は一時停止します。これにより、ゼロデータ損失 RPO=0 が保証されますが、ネットワークの中断またはスタンバイ障害が発生するとデータベースの可用性が低下する場合があります。

同期スタンバイは次の優先順位で選択されます。

1. 正常インスタンス
2. 異常なインスタンス
3. プライマリー

リストはこの値が設定されている場合は maxStandbyNamesFromCluster に基づいて切り捨てられ、正常なインスタンスを優先し、synchronous_standby_names が設定されていることを確認します。

例

次の例を考えます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: foo
spec:
  instances: 3
  postgresql:
    synchronous:
      method: any
      number: 1
      dataDurability: required
```

1. 初期状態。 synchronous_standby_names の内容は次のとおりです。

```
ANY 1 ("foo-2","foo-3","foo-1")
```

2. foo-2 は使用できなくなります。優先的にプッシュバックされます。

```
ANY 1 ("foo-3","foo-2","foo-1")
```

3. foo-3 も使用できなくなります。リストには正常なスタンバイは含まれません。

```
ANY 1 ("foo-2","foo-3","foo-1")
```

この時点で、少なくとも 1 つのスタンバイが再び利用可能になるまで、書き込み操作は許可されません。

4. スタンバイが再び利用できるようになると、synchronous_standby_names は初期状態に戻ります。

16.4.9 優先データの耐久性

dataDurability が preferred に設定されている場合、必要な同期インスタンスの数は、使用可能なスタンバイの数に基づいて調整されます。PostgreSQL は、指定された数の同期スタンバイに WAL レコードをレプリケートしようとしますが、要求された数よりも少ないスタンバイが使用可能な場合でも、書き込み操作は続行されます。

この設定は、データの安全性と可用性のバランスをとり、アプリケーションが一時的にスタンバイが使用不可になっているときに書き込みを継続できるようにします。したがって、_self-healing モード_としても知られています。

> **警告:** このモードでは、すべてのスタンバイが使用不可になるとデータが損失する可能性があります。

preferred データ持続性では、 **正常なレプリカのみ**が synchronous_standby_names に含まれます。

例

次の例を考えます。デモンストレーションでは、5 つのインスタンスと 2 つの同期スタンバイを持つ bar という名前のクラスターを使用します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: bar
spec:
  instances: 5
  postgresql:
    synchronous:
      method: any
      number: 2
      dataDurability: required
```

1. 初期状態。 synchronous_standby_names の内容は次のとおりです。

```
ANY 2 ("bar-2","bar-3", "bar-4", "bar-5")
```

2. bar-2 および bar-3 は使用できなくなります。これらはリストから削除されます。

```
ANY 2 ("bar-4", "bar-5")
```

3. bar-4 も使用できなくなります。リストから削除されます。使用可能なスタンバイの数は要求された数より少ないため、要求された量は削減されます。

```
ANY 1 ("bar-5")
```

4. bar-5 も使用できなくなります。 synchronous_standby_names は空になり、同期レプリケーションを完全に無効にします。書き込み操作は継続されますが、プライマリ障害が発生した場合に潜在的なデータ損失のリスクが伴います。

5. レプリカが戻ると、synchronous_standby_names は初期状態に戻ります。

16.5 同期レプリケーション非推奨

警告: CloudNativePG 1.24 より前では、クォーラムベースの同期レプリケーション実装のみがサポートされていました。この方法は現在非推奨ですが、すぐに削除されることはありません。新しい方法は、自己修復よりもデータの耐久性を優先し、優先度ベースの同期レプリケーションや`synchronous_standby_names`オプションの完全な制御など、より堅牢な機能を提供します。前の段落で説明したように、同期レプリケーションの新しい構成方法に徐々に移行することをお勧めします。

重要: 非推奨なメソッドと新しいメソッドは相互排他的です。

CloudNativePG は、 `minSyncReplicas` および `maxSyncReplicas` と呼ばれる 2 つの構成オプションを介して**クォーラムベースの同期ストリーミングレプリケーション* の構成をサポートします。これらは、任意の時点で使用可能な同期スタンバイレプリカの予想される最小数と最大数です。自己修復の目的で、オペレーターは常にこれらの 2 つの値を使用可能なレプリカの数と比較して、クォーラムを決定します。

重要: デフォルトでは、同期レプリケーションは、使用可能なすべてのレプリカを区別なく選択します。次のセクションで説明するように`syncReplicaElectionConstraint` オプションを介してノードラベルを操作することにより、同期レプリカをスケジュールできるノードを制限できます。

同期レプリケーションはデフォルトで無効になっています `minSyncReplicas` および `maxSyncReplicas` は定義されていません。 `minSyncReplicas` と `maxSyncReplicas` の両方が設定されている場合、CloudNativePG は PostgreSQL の `synchronous_standby_names` オプションを次の値に自動的に更新します。

```
ANY q (pod1, pod2, ...)
```

そこで

- `q` は、演算子によって自動的に計算された整数です。`1 <= minSyncReplicas <= q <= maxSyncReplicas <= readyReplicas`
- `pod1, pod2, ...` は、クラスター内のすべての PostgreSQL ポッドのリストです

警告: 自己修復機能を提供するために、オペレーターは`minSyncReplicas` そのような値が現在使用可能なレプリカの数より大きい場合は無視できます。 *readyReplicas* が`0` の場合、同期レプリケーションは自動的に無効になります。

PostgreSQL documentation で述べているように、 _method `ANY` は、クォーラムベースの同期レプリケーションを指定し、WAL レコードが少なくとも list_内の要求された数の同期スタンバイにレプリケートされるまで、トランザクションコミットを待機させます。

重要: オペレーターが同期レプリケーション設定の適用よりも自己修復を選択する場合でも、3 つ以上のインスタンスがあるクラスター、より一般的には`maxSyncReplicas < (instances - 1)` の場合にのみ同期レプリケーションを計画することをお勧めします。

16.5.1 同期レプリケーションのノードを選択します

CloudNativePG を使用すると、PGDATA と Postgres ポッドを保持する PVC が存在するノードラベルに基づいて、アンチアフィニティルールを介してクォーラムベースの同期レプリケーションセットに参加する資格のある PostgreSQL インスタンスを選択できます。

参考:

一般的なポッドアフィニティおよびアンチアフィニティルールの詳細については、 スケジューリング を確認してください。

> **警告:** *.spec.postgresql.syncReplicaElectionConstraint* オプションは、同期レプリケーションの古い実装にのみ適用されます 同期レプリケーション非推奨 を参照してください。

この機能のユースケースの例として単一の同期レプリカを持つクラスターでは、同期レプリカがプライマリインスタンスとは別のアベイラビリティーゾーンにあることを確認できます。通常は `topology.kubernetes.io/zone` label on a node で識別されます。これにより、単一のアベイラビリティーゾーンで停止が発生した場合のクラスターのロバスト性、特に目標復旧ポイント PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} の点で向上します。

アンチアフィニティのアイデアは、クォーラムに参加する同期レプリカが、選択したラベルこの場合、アベイラビリティーゾーンラベルの異なる値を持つノードで実行されているポッドから選択されるようにすることです。プライマリが現在存在するノード実行中。このような基準に一致するノードがない場合、レプリカは同期レプリケーションの対象となります。

重要: 自己修復の適用は、同期レプリカ選択の追加制約を定義しているときに引き続き適用されます 同期レプリケーションを介したゼロデータ損失クラスター を参照してください。

次の例は、`.spec.postgresql` 内の `syncReplicaElectionConstraint` セクションを介してこれを行う方法を示しています。`nodeLabelsAntiAffinity` では、現在のプライマリと、アベイラビリティーゾーンラベルの値が異なるノードにあるレプリカの間で、オペレーターによって同期レプリケーションが動的に構成されることを確認するために、評価する必要があるノードラベルを指定できます。プライマリが存在するノード

```
spec:
  instances: 3
  postgresql:
    syncReplicaElectionConstraint:
      enabled: true
      nodeLabelsAntiAffinity:
        - topology.kubernetes.io/zone
```

ご想像のとおり、アベイラビリティーゾーンは一例にすぎませんが、ストレージ、CPU、メモリなど、ノードを説明する他のラベルに基づいてこの動作をカスタマイズできます。

16.6 レプリケーションスロット

Replication slots

は、9.4 で導入されたネイティブの PostgreSQL 機能で、接続されているすべてのストリーミングレプリケーションクライアントが WAL セグメントを受信するまで、プライマリが WAL セグメントを削除しないこと、およびプライマリが次の場合でもリカバリ競合を発生させる可能性のある行を削除しないことを保証する自動方法を提供しますスタンバイは一時的に切断されています。

レプリケーションスロットは、それを作成したインスタンスにのみ存在し、PostgreSQL はスタンバイサーバーでレプリケートしません。その結果、フェールオーバーまたはスイッチオーバー後、新しいプライマリには、古いプライマリのレプリケーションスロットが含まれません。これにより、古いプライマリに接続され、スロットを失ったストリーミングレプリケーションクライアントに問題が発生する可能性があります。

CloudNativePG は、プライマリから各スタンバイに物理レプリケーションスロットのコンテンツを同期するターンキーソリューションを提供し、2 つのユースケースに対応します。

- Postgres クラスターの高可用性のために自動的に作成されるレプリケーションスロット**高可用性のためのレプリケーションスロット** を参照してください

詳細についてはこちら

- プライマリで作成された **ユーザー定義レプリケーションスロット**

16.6.1 高可用性のためのレプリケーションスロット

CloudNativePG は、高可用性クラスターから始めて、クラスター管理レプリケーションスロットの概念を導入することにより、このギャップを埋めます。この機能は、プライマリとスタンバイの両方で、高可用性クラスター内の各ホットスタンバイレプリカの物理レプリケーションスロットを自動的に管理します。

CloudNativePG では、次の用語を使用します。

- **プライマリ HA スロット**ライフサイクルがクラスターの現在のプライマリによって完全に管理され、目的がストリーミングレプリケーションで特定のスタンバイにマッピングすることである物理レプリケーションスロット。このようなスロットは、プライマリにのみ存在します。
- **スタンバイ HA スロット**スタンバイの物理レプリケーションスロット。そのライフサイクルは、プライマリの `pg_replication_slots` ビューの内容に基づいて、クラスター内の別のスタンバイによって完全に管理され、`pg_replication_slot_advance()` を使用して定期的に更新されます。

この機能はデフォルトで有効になっており、構成から無効にできます。詳細は ReplicationSlotsConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ReplicationSlotsConfiguration} を参照してください。以下に、メインオプションの簡単な説明を示します。

`.spec.replicationSlots.highAvailability.enabled` `true` の場合、機能は有効です `true` がデフォルトです

`.spec.replicationSlots.highAvailability.slotPrefix` この機能のオペレーターが管理するレプリケーションスロットを識別するプレフィックスデフォルト`_cnpg_`

.spec.replicationSlots.updateInterval スタンバイがレプリケーションスロットのローカルコピーの位置を現在のプライマリ上の位置と同期する頻度。秒単位で表現されますデフォルト 30

お勧めしませんが、別の動作が必要な場合は、上記のオプションをカスタマイズできます。

たとえば、次のマニフェストは、レプリケーションスロットを無効にしたクラスターを作成します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  # Disable replication slots for HA in the cluster
  replicationSlots:
    highAvailability:
      enabled: false

  storage:
    size: 1Gi
```

16.6.2 ユーザー定義レプリケーションスロット

CloudNativePG は、物理レプリケーションスロットを宣言的に定義する方法をサポートしていませんが、create your own slots via SQL はできます。

注釈: 現時点では、宣言的な方法でレプリケーションスロットを管理する計画はありませんが、ユーザーから受け取るフィードバックによっては変更される可能性があります。その理由は、レプリケーションスロットは特定の目的のために存在し、プライマリ上のスロットのライフサイクル全体を監督する特定のアプリケーションで各スロットを管理する必要があるためです。

CloudNativePG は、上記で説明した HA レプリケーションスロットの場合と同様に、プライマリとスタンバイ間のユーザー管理の物理レプリケーションスロットの同期を管理できます。唯一の違いは、レプリケーションスロットを作成する必要があることです。

この機能はデフォルトで有効になっていますが、レプリケーションスロットが同期されることを意味しますが、synchronizeReplicas スタンザを介して無効にするか、正規表現を使用して一部のスロットを除外するなど、その動作をさらにカスタマイズできます。例

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  replicationSlots:
    synchronizeReplicas:
      enabled: true
      excludePatterns:
        - "^foo"
```

詳細については、ReplicationSlotsConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ReplicationSlotsConfiguration} を参照してください。以下に、メインオプションの簡単な説明を示します。

`.spec.replicationSlots.synchronizeReplicas.enabled` true または指定されない場合、プライマリのすべてのユーザー定義のレプリケーションスロットは、各スタンバイで同期されます。false に変更した場合、オペレーターは、各スタンバイで自分自身が以前に作成したレプリケーションスロットを削除します。

`.spec.replicationSlots.synchronizeReplicas.excludePatterns` 同期から除外するユーザー定義のレプリケーションスロットの名前と一致する正規表現パターンのリスト。これは、命名規則に基づいて特定のスロットを除外する場合に役立ちます。

> **警告:** この機能を利用するユーザーは、ユーザー定義のレプリケーションスロットを注意深く監視して、運用要件を満たし、フェイルオーバープロセスを妨げないことを確認する必要があります。

16.6.3 同期周波数

この例のように、スタンバイがプライマリで `pg_replication_slots` ビューを照会し、レプリケーションスロットのローカルコピーを更新する頻度を制御することもできます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  # Reduce the frequency of standby HA slots updates to once every 5 minutes
  replicationSlots:
    updateInterval: 300

  storage:
    size: 1Gi
```

16.6.4 レプリケーションスロット用に保持される WAL サイズのキャップ

レプリケーションスロットが有効になっている場合、PostgreSQL がレプリケーションスロットによって要求された WAL ファイルを保持しようとするため、ディスク領域が不足する場合があります。これは、スタンバイが一時的にダウンしている、遅延している、または単に孤立したレプリケーションスロットが原因で発生する可能性があります。

PostgreSQL 13 以降、 *max_slot_wal_keep_size* を利用できます。

構成オプションは、レプリケーションスロットがチェックポイント時に `pg_wal` ディレクトリに保持できる WAL ファイルの最大サイズを制御します。デフォルトでは、PostgreSQL では `max_slot_wal_keep_size` は `-1` に設定されています。これは、レプリケーションスロットが無制限の量の WAL ファイルを保持できることを意味します。その結果、レプリケーションスロットのサポートが有効になっているときに `max_slot_wal_keep_size` を明示的に設定することをお勧めします。例

```
# ...
postgresql:
  parameters:
    max_slot_wal_keep_size: "10GB"
# ...
```

16.6.5 レプリケーションスロットの監視

インフラストラクチャでレプリケーションスロットは注意深く監視する必要があります。デフォルトでは、Prometheus エクスポーターの `pg_replication_slots` メトリックに、スロットの名前、タイプ、アクティブかどうか、プライマリからの遅延などの重要な情報を提供します。

参考:

CloudNativePG 展開をモニタする方法の詳細については、 ClusterMonitoringTLSConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterMonitoringTLSConfiguration} を参照してください。

第17章　論理レプリケーション

PostgreSQL は、logical replication を提供することにより、レプリケーション機能を物理的レプリケーションを超えて拡張します。これは、正確なブロックアドレスとバイトごとのコピーのレベルで動作します。論理レプリケーションは、定義されたレプリケーション ID 通常は主キーに基づいて、データオブジェクトとその変更をレプリケートします。

論理レプリケーションでは、パブリッシュアンドサブスクライブモデルを使用し、サブスクライバーはパブリッシャーノードでパブリケーションに接続します。サブスクライバーはこれらのパブリケーションからデータの変更をプルし、再公開できるため、カスケードレプリケーションと複雑なトポロジが有効になります。

この柔軟なモデルは、次の場合に特に役立ちます。

- オンラインデータの移行
- ライブ PostgreSQL バージョンのアップグレード
- システム間のデータ分散
- リアルタイム分析
- 外部アプリケーションとの統合

注釈: 詳細、例、および制限については、 *official PostgreSQL documentation on Logical Replication* を参照してください。

CloudNativePG は、主要な PostgreSQL 論理レプリケーションオブジェクトの宣言サポートを提供することにより、この機能を強化します。

- `Publication` リソースを介した **出版物**
- `Subscription` リソースを介した **サブスクリプション**

17.1 出版物

PostgreSQL のパブリッシュアンドサブスクライブレプリケーションモデルでは、***publication***

データ変更のソースです。これは、データベース内の 1 つ以上のテーブルから生成された変更セット_replication set_としても知られる論理コンテナとして機能します。パブリケーションは、_publisher_として機能する PostgreSQL 10+インスタンスで定義できます。パブリッククラウドで人気の DBaaS ソリューションによって管理されているインスタンスを含みます。各パブリケーションは単一のデータベースに関連付けられ、どのテーブルと変更をレプリケートするかについての詳細な制御を提供します。

Kubernetes 外部のパブリッシャーの場合、次のことができます create publications using SQL

または *cnpg publication create* を活用します。

CloudNativePG で `Cluster` オブジェクトを管理する場合、PostgreSQL パブリケーションは `Publication` リソースを介して宣言的に定義できます。

注釈: *API リファレンス* を参照してください。

各 `Publication` オブジェクトに定義できる属性の完全なリストについては、

`freddie` という名前のクラスターがあり、 `app` データベース内のすべてのテーブルをレプリケートするとします。これは `Publication` マニフェストです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Publication
metadata:
  name: freddie-publisher
spec:
  cluster:
    name: freddie
  dbname: app
  name: publisher
  target:
    allTables: true
```

上記の例では

- パブリケーションオブジェクトの名前は `freddie-publisher` `metadata.name` です。
- パブリケーションは、`publisher` `spec.name` という名前の `freddie` クラスター `spec.cluster.name` のプライマリを介して作成されます。
- `app` データベース `spec.dbname` のすべてのテーブル `spec.target.allTables: true` が含まれます。

重要: *allTables* は構成を簡素化しますが、PostgreSQL は特定のテーブルまたはターゲットを絞ったデータ変更をレプリケートするためのきめの細かい制御を提供します。高度な構成については、 *PostgreSQL documentation* を参照してください。さらに、 *CloudNativePG API reference* を参照してください。

レプリケーションターゲットの宣言によるカスタマイズの詳細については、

17.1.1 Publication マニフェストの必須フィールド

Publication オブジェクトには次のフィールドが必要です。

- metadata.name Kubernetes Publication オブジェクトの一意の名前。
- spec.cluster.name PostgreSQL クラスターの名前。
- spec.dbname パブリケーションが作成されるデータベース名。
- spec.name PostgreSQL でのパブリケーション名。
- spec.target パブリケーションに含めるテーブルまたは変更を指定します。

Publication オブジェクトは特定の Cluster を参照し、パブリケーションを作成する場所を決定する必要があります。これはクラスターのプライマリインスタンスによって管理され、必要に応じてパブリケーションが作成または更新されます。

17.1.2 調整とステータス

Publication を作成すると、CloudNativePG は指定されたクラスターのプライマリインスタンスでそれを管理します。リコンシリエーションサイクルが成功すると、Publication ステータスは次を反映します。

- applied: true 、構成が正常に適用されたことを示します。
- observedGeneration は metadata.generation と一致し、適用された構成が最新の変更に対応することを確認します。

リコンシリエーション中にエラーが発生した場合、status.applied は false になり、エラーメッセージは status.message フィールドに含まれます。

17.1.3 パブリケーションの削除

publicationReclaimPolicy フィールドは、Publication オブジェクトを削除するときの動作を制御します。

- retain デフォルト手動管理のために PostgreSQL にパブリケーションを残します。
- delete PostgreSQL からパブリケーションを自動的に削除します。

次の例を考えます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Publication
metadata:
  name: freddie-publisher
spec:
  cluster:
    name: freddie
  dbname: app
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  name: publisher
  target:
    allTables: true
  publicationReclaimPolicy: delete
```

この場合、 Publication オブジェクトを削除すると、 freddie クラスターの app データベースから publisher パブリケーションも削除されます。

17.2 サブスクリプション

PostgreSQL のパブリッシュアンドサブスクライブレプリケーションモデルでは、***subscription***

は、データの変更を消費するダウンストリームコンポーネントを表します。サブスクリプションは、パブリッシャーのデータベースへの接続を確立し、サブスクライブするパブリケーションのセット 1 つ以上を指定します。サブスクリプションは、_subscriber_として機能するサポートされている PostgreSQL インスタンスで作成できます。

重要: スキーマ定義はレプリケートされないため、サブスクライバーは、データレプリケーションを開始する前に、対応するテーブルを既に定義している必要があります。

CloudNativePG は、 Subscription リソースを使用して宣言的に定義できることにより、サブスクリプション管理を簡素化します。

注釈: *API リファレンス* を参照してください。

各 Subscription オブジェクトに定義できる属性の完全なリストについては、

freddie クラスター_publisher_の app データベースの publisher パブリケーションから king クラスター_subscriber_の app データベースに変更をレプリケートするとします。次に、Subscription マニフェストの例を示します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Subscription
metadata:
  name: freddie-to-king-subscription
spec:
  cluster:
    name: king
  dbname: app
  name: subscriber
  externalClusterName: freddie
  publicationName: publisher
```

上記の例では

- サブスクリプションオブジェクトの名前は freddie-to-king-subscriber metadata.name です。
- サブスクリプションは、king クラスター spec.cluster.name の app データベース spec.dbname に、subscriber spec.name という名前で作成されます。
- spec.externalClusterName によって参照される、外部 freddie クラスターの publisher パブリケーションに接続します。

この設定を容易にするには、 king クラスターの構成で freddie 外部クラスターを定義する必要があります。以下は、 king マニフェストで外部クラスターを定義する方法を示す抜粋例です。

```
externalClusters:
  - name: freddie
    connectionParameters:
      host: freddie-rw.default.svc
      user: postgres
      dbname: app
```

注釈: *externalClusters* セクションの構成の詳細については、ドキュメントの *Bootstrap* を参照してください。

ご覧のとおり、サブスクリプションは、ネットワーク経由でアクセス可能な PostgreSQL データベースに接続できます。この柔軟性により、ほぼゼロのダウンタイムでデータを Kubernetes にシームレスに移行できます。これは、人気のクラウドベースの DBaaS プラットフォームを含むさまざまな環境から移行するための優れたオプションです。

17.2.1 Subscription マニフェストの必須フィールド

次のフィールドは Subscription オブジェクトを定義するために必須です。

- metadata.name 名前空間内の Kubernetes Subscription オブジェクトの一意の名前。
- spec.cluster.name サブスクリプションが作成される PostgreSQL クラスターの名前。
- spec.dbname サブスクリプションが作成されるデータベースの名前。
- spec.name PostgreSQL に表示されるサブスクリプションの名前。
- spec.externalClusterName spec.cluster.name クラスターの構成で定義された外部クラスターの名前。これは、発行者データベースを参照します。
- spec.publicationName サブスクリプションが接続するパブリッシャーデータベース内のパブリケーションの名前。

Subscription オブジェクトは特定の Cluster を参照し、サブスクリプションを管理する場所を決定する必要があります。CloudNativePG は、指定されたクラスターのプライマリインスタンスでサブスクリプションが作成または更新されるようにします。

17.2.2 調整とステータス

Subscription を作成すると、CloudNativePG は指定されたクラスターのプライマリインスタンスでそれを管理します。リコンシリエーションサイクルが成功すると、Subscription ステータスは次を反映します。

- applied: true 、構成が正常に適用されたことを示します。
- observedGeneration は metadata.generation と一致し、適用された構成が最新の変更に対応することを確認します。

リコンシリエーション中にエラーが発生した場合、status.applied は false になり、エラーメッセージは status.message フィールドに含まれます。

17.2.3 サブスクリプションの削除

subscriptionReclaimPolicy フィールドは、Subscription オブジェクトを削除するときの動作を制御します。

- retain デフォルト手動管理のために PostgreSQL にサブスクリプションを残します。
- delete PostgreSQL からサブスクリプションを自動的に削除します。

次の例を考えます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Subscription
metadata:
  name: freddie-to-king-subscription
spec:
  cluster:
    name: king
  dbname: app
  name: subscriber
  externalClusterName: freddie
  publicationName: publisher
  subscriptionReclaimPolicy: delete
```

この場合、Subscription オブジェクトを削除すると、king クラスターの app データベースから subscriber サブスクリプションも削除されます。

17.3 制限事項

official documentation で概要を示しているように、PostgreSQL の論理レプリケーションには、いくつかの固有の制限があります。特に、次のオブジェクトはレプリケートされません。

- **データベーススキーマと DDL コマンド**
- **シークエンスデータ**
- **大きなオブジェクト**

17.3.1 スキーマレプリケーションのアドレス指定

スキーマレプリケーションに関連する最初の制限は、CloudNativePG の機能を使用して簡単に対処できます。たとえば、`import` ブートストラップ機能を活用して、レプリケートが必要なテーブルのスキーマをコピーできます。または、PostgreSQL データベースの場合と同様に、スキーマを手動で作成できます。

17.3.2 シーケンスの処理

シーケンスは、論理レプリケーションを介して自動的に同期は保たれませんが、CloudNativePG は、ライブマイグレーションで使用されるソリューションを提供します。Backup {postgresql-cnpg-io-v1-Backup} を使用できます

シーケンス値を同期し、パブリッシャーとサブスクライバーデータベース間の一貫性を保証します。

17.4 論理レプリケーションを使用したライブ移行とメジャー Postgres アップグレードの例

論理レプリケーションの強力な機能を強調するために、この例では、PostgreSQL 16 を実行しているパブリッシャーデータベース `freddie` から最新の PostgreSQL バージョンを実行しているサブスクライバデータベース `king` にデータをレプリケートする方法を示します。このセットアップは、評価と実践学習のために Kubernetes クラスターに展開できます。

この例は、論理レプリケーションがデータの一貫性を保証しながら、PostgreSQL バージョン間のライブマイグレーションとアップグレードを促進する方法を示しています。論理レプリケーションと CloudNativePG を組み合わせることで、Kubernetes 環境でこのようなシナリオを簡単にセットアップ、管理、および評価できます。

17.4.1 ステップ 1 パブリッシャーの設定 freddie

最初のステップでは、バージョン 16 での freddie PostgreSQL クラスターを作成します。クラスターには、単一のインスタンスが含まれ、10,000 の数値を保存するテーブル n で初期化された app データベースが含まれます。 publisher という名前の論理レプリケーションパブリケーションも、データベース内のすべてのテーブルを含むように構成されています。

freddie クラスターとそのパブリケーションリソースをセットアップするためのマニフェストは次のとおりです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: freddie
spec:
  instances: 1

  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:16

  storage:
    size: 1Gi

  bootstrap:
    initdb:
      postInitApplicationSQL:
        - CREATE TABLE n (i SERIAL PRIMARY KEY, m INTEGER)
        - INSERT INTO n (m) (SELECT generate_series(1, 10000))
        - ALTER TABLE n OWNER TO app

  managed:
    roles:
      - name: app
        login: true
        replication: true
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Publication
metadata:
  name: freddie-publisher
spec:
  cluster:
    name: freddie
  dbname: app
  name: publisher
  target:
    allTables: true
```

17.4.2 ステップ 2 サブスクライバー king の設定

次に、最新バージョンの PostgreSQL を実行して、king PostgreSQL クラスターを作成します。このクラスターは、外部クラスター構成を使用して freddie クラスター上の app データベースからスキーマをインポートすることにより初期化します。Subscription リソース freddie-to-king-subscription は、freddie の publisher によって公開された変更を消費するように構成されます。

以下は、king クラスターとそのサブスクリプションをセットアップするためのマニフェストです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: king
spec:
  instances: 1

  storage:
    size: 1Gi

  bootstrap:
    initdb:
      import:
        type: microservice
        schemaOnly: true
        databases:
          - app
        source:
          externalCluster: freddie

  externalClusters:
    - name: freddie
      connectionParameters:
        host: freddie-rw.default.svc
        user: app
        dbname: app
      password:
        name: freddie-app
        key: password
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Subscription
metadata:
  name: freddie-to-king-subscription
spec:
  cluster:
    name: king
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  dbname: app
  name: subscriber
  externalClusterName: freddie
  publicationName: publisher
```

king クラスターが実行されたら、 app データベースに接続し、n テーブルのレコードをカウントすることにより、レプリケーションが機能していることを確認できます。次の例では、簡単にするために cnpg プラグインが提供する psql コマンドを使用しています。

```
kubectl cnpg psql king -- app -qAt -c SELECT count(*) FROM n
10000
```

このコマンドは 10000 を返し、 freddie クラスターからのデータが king クラスターに正常にレプリケートされたことを確認します。

cnpg プラグインを使用して、既存のシーケンスを同期して、パブリッシャーとサブスクライバー間の一貫性を保証することもできます。次の例は、king クラスターのシーケンスを同期する方法を示しています。

```
kubectl cnpg subscription sync-sequences king --subscription=subscriber
SELECT setval("public"."n_i_seq", 10000);

10000
```

このコマンドは、現在の値と一致するように king クラスターのシーケンス n_i_seq を更新し、ソースデータベースと同期していることを確認します。

第18章　バックアップ

PostgreSQL は、ファイルシステムレベルの物理コピーに基づいて、ファーストクラスのバックアップおよびリカバリー機能をネイティブに提供します。これらはミッションクリティカルな運用データベースで 15 年以上使用され、世界中の組織が Postgres でディザスターリカバリー目標を達成するのを支援してきました。

注釈: PostgreSQL でデータベースをバックアップする別の方法があります。*pg_dump* ユーティリティは、物理的バックアップではなく論理バックアップに依存します。ただし、論理バックアップは事業継続のユースケースには適していないため、少なくともまだ CloudNativePG の対象になっていません。 *pg_dump* ユーティリティを使用する場合は、 *Troubleshooting / Emergency backup* からインスピレーションを得てください。

CloudNativePG では、各 PostgreSQL クラスターのバックアップインフラストラクチャは次のリソースで構成されます。

- **WAL アーカイブ** Postgres によって継続的に書き込まれ、データ耐久性のためにアーカイブされる WAL ファイルトランザクションログを含む場所
- **物理ベースバックアップ** PostgreSQL がデータベースにデータを保存するために使用するすべてのファイルのコピー主に `PGDATA` およびテーブルスペース

WAL アーカイブは、現時点ではオブジェクトストアにのみ保存できます。

一方、CloudNativePG は、物理ベースバックアップを保存する 2 つの方法をサポートしています。

- **付録 *A*-バックアップ用の共通オブジェクトストア** 上、tarballs として - オプションで圧縮
- *Kubernetes Volume Snapshots* 上、基になるストレージクラスでサポートされている場合

重要: CloudNativePG でバックアップ戦略を選択する前に、時間をかけて WAL アーカイブ、ホットおよびコールドバックアップなどの基本的な概念を理解することが重要です。

重要: サポートされているすべてのサービスのリストについては、Kubernetes の公式ドキュメントを参照してください Container Storage Interface (CSI) drivers

---

スナップショット機能を提供します。

18.1 WAL アーカイブ

PostgreSQL の WAL アーカイブは、 **継続的バックアップ**の中心であり、次の理由で基本的なものです。

- **ホットバックアップ**サーバーをシャットダウンせずに、Postgres クラスタープライマリまたはスタンバイのインスタンスから物理ベースのバックアップを取得する可能性。オンラインバックアップとしても知られています
- **ポイント インタイム リカバリー** PITR システムで最初に使用可能なベースバックアップから任意の時点で復旧できます。

> **警告:** WAL アーカイブだけでは役に立ちません。物理ベースのバックアップがないと、PostgreSQL クラスターを復元できません。

一般に、WAL アーカイブの存在により、PostgreSQL クラスターの復元力が強化され、各インスタンスは、必要に応じてアーカイブから必要な WAL ファイルを取得できます。通常、WAL アーカイブの保持期間は、通常これらのファイルをリサイクルする Postgres インスタンスよりも長くなります。。

このユースケースは、WAL アーカイブに依存するだけで長距離にわたって同期でき、さまざまなリージョンにわたってディザスターリカバリー目標を拡張できるため、レプリカクラスター に拡張することもできます。

configure a WAL archive を実行すると、CloudNativePG は、リージョンを超えても、ディザスターリカバリーに PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} <= 5 分をすぐに提供します。

重要: 常に本番で WAL アーカイブをセットアップすることをお勧めします。通常ステージング環境と開発環境が関係する既知のユースケースがあり、上記の利点はいずれも必要とされず、WAL アーカイブは必要ありません。この場合の RPO は、24 時間毎日のバックアップまたは無限バックアップなしなどの任意の値です。

18.2 コールドおよびホットバックアップ

ホットバックアップは前のセクションで既に定義されています。これらは WAL アーカイブの存在を必要とし、最新のデータベース管理システムでは標準です。

コールドバックアップは、オフラインバックアップとしても知られ、代わりに、PostgreSQL インスタンススタンバイまたはプライマリがシャットダウンしたときに取得される物理ベースバックアップです。これらは定義ごとに一貫しており、シャットダウンされた時点のデータベースのスナップショットを表します。

その結果、PostgreSQL インスタンスは、WAL アーカイブを必要とせずにコールドバックアップから再起動できますが、利用可能な場合はそれを利用できます前のセクションで強調表示した復旧面のすべての利点を備えています。

RPO が高く 1 時間または 24 時間など、保持期間が短い状況では、コールドバックアップは、ディザスターリカバリー計画で検討される実行可能なオプションを表します。

18.3 オブジェクトストアまたはボリュームスナップショットどちらを使用しますか?

CloudNativePG では、オブジェクトストアベースのバックアップ

- 常に WAL アーカイブが必要
- ホットバックアップのみをサポート
- インクリメンタルコピーをサポートしていません
- 差分コピーをサポートしていません

代わりにボリュームスナップショット

- WAL アーカイブは必要ありませんが、運用環境では常にお勧めします
- 基になるストレージクラスに応じて、インクリメンタルコピーをサポート
- 基になるストレージクラスに応じて、差分コピーをサポート
- コールドバックアップもサポート

どちらを使用するかは、次を含む特定の要件と環境によって異なります。

- Kubernetes クラスターでの実行可能なオブジェクトストアソリューションの可用性
- ボリュームスナップショットをサポートする信頼できるストレージクラスの可用性
- データベースのサイズオブジェクトストアの場合、データベースが大きくなると、バックアップ、そして最も重要なことに、リカバリ手順に時間がかかります後者は *RTO と RPO のインパクト* に影響を与えます。超大規模データベース VLDB が存在する場合、一般的なアドバイスは、コピーオンライトのおかげで、より速いリカバリを提供するため、ボリュームスナップショットに依存することです
- データのモビリティと、別のリージョンまたはその後のリージョンのセカンダリの場所にバックアップファイルを保存または中継する可能性
- その他の要素、主に基になるストレージソリューションへの信頼と精通に基づいています

以下の概要表は、物理ベースバックアップの保存に使用可能な 2 つの方法の主な違いの一部を強調表示しています。

	Object store	Volume Snapshots
WAL archiving	Required	Recommended (1)
Cold backup	☒	✓
Hot backup	✓	✓
Incremental copy	☒	✓ (2)
Differential copy	☒	✓ (2)
Backup from a standby	✓	✓
Snapshot recovery	☒ (3)	✓

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

	Object store	Volume Snapshots
Point In Time Recovery (PITR)	✓	Requires WAL archive
Underlying technology	Barman Cloud	Kubernetes API
上記の表の注意事項については、以下の説明を参照してください。> >		
1. 現在、WAL アーカイブはオブジェクトストア上にある必要があります >		
2.PostgreSQL ボリュームの基になるストレージクラスでサポートされている場合		
> 3. スナップショットリカバリーはエミュレート可能>		
`bootstrap.recovery.recoveryTarget.targetImmediate` オプションを使用する		

18.4 スケジュールされたバックアップ

スケジュールされたバックアップは、CloudNativePG でバックアップ戦略を構成するための推奨される方法です。これらは `ScheduledBackup` リソースによって管理されます。

注釈: ScheduledBackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackupSpec} を参照してください。

オプションの完全なリストについては、API リファレンスを参照してください。

`schedule` フィールドでは、*Go `cron* package format <https://pkg.go.dev/github.com/robfig/cron#hdr-CRON_Expression_Format>`_ で表現される秒を含む_six-term cronSchedule_仕様を定義できます。

警告: このフォーマットは `seconds` フィールドも受け入れます。Unix/Linux システムの `crontab` フォーマットとは異なることに注意してください。

これは、スケジュールされたバックアップの例です。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: ScheduledBackup
metadata:
  name: backup-example
spec:
  schedule: "0 0 0  **  *"
  backupOwnerReference: self
  cluster:
    name: pg-backup
```

上記の例では、スケジュールで秒、分、および時間を指定する一方、日、月、曜日にすべてを意味するワイルドカードを指定するため、毎日午前 0 時にバックアップをスケジュールします。

Kubernetes CronJob では、秒が含まれないため、同等の式は `0 0 ** *` になります。

ヒント: バックアップ頻度は、完全またはポイントインタイムの復旧操作が必要なディザスターの発生後の目標復旧時間 *RTO と RPO のインパクト* に影響を与える可能性があります。私たちのアドバイスは、バックアップをリカバリーし、スクラッチからのリカバリーにかかる時間を測定することにより、バックアップを定期的にテストして、RTO の予測可能性を調整することです。リカバリ時間は、ベースバックアップのサイズと、リカバリ中にアーカイブから取得して再生する必要がある WAL ファイルの量に影響されます。WAL アーカイブは、PostgreSQL での継続的なバックアップを可能にするものであることに注意してください。私たちの経験に基づいて、ほとんどの場合、毎週のベースバックアップで十分です。ただし、1 日 1 回より頻繁にバックアップをスケジュールすることは非常にまれです。

`.spec.method` 属性、デフォルトでは `barmanObjectStore` に設定を介して、定義されたオブジェクトストアまたはボリュームスナップショットのバックアップをスケジュールするかどうかを選択できます。**オブジェクトストアまたはボリュームスナップショットどちらを使用しますか?** を適切に定義している場合

クラスターの `backup` スタンザでは、ボリュームスナップショットのベースバックアップのスケジュールを開始するように `method: volumeSnapshot` を設定できます。

スケジュールされたバックアップは、必要に応じて `.spec.suspend: true` を設定することにより一時停止できます。これにより、オプションが削除されるか `false` に設定されるまで、新しいバックアップはスケジュールされなくなります。

ScheduledBackup リソースが作成されたらすぐにバックアップを発行したい場合は、`.spec.immediate: true` を設定できます。

注釈: *.spec.backupOwnerReference* は、作成されたバックアップリソース内にどの ownerReference を配置するかを示します。

- *none:* 作成されたバックアップオブジェクトの所有者参照なしフィールドが導入される前と同じ動作

18.5 オンデマンド バックアップ

注釈: BackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-BackupSpec} を参照してください。

オプションの完全なリストについては、API リファレンスを参照してください。

新しいバックアップを要求するには、次のような新しい Backup リソースを作成する必要があります。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Backup
metadata:
  name: backup-example
spec:
  method: barmanObjectStore
  cluster:
    name: pg-backup
```

この場合、オペレーターはクラスターのオーケストレーションを開始し、barman-cloud-backup を使用してオブジェクトストアで必要なバックアップを取得します。通常の kubectl describe backup <name> コマンドを使用して、バックアップステータスを確認できます。

```
Name:         backup-example
Namespace:    default
Labels:       <none>
Annotations:  API Version:  postgresql.cnpg.io/v1
Kind:         Backup
Metadata:
  Creation Timestamp:  2020-10-26T13:57:40Z
  Self Link:         /apis/postgresql.cnpg.io/v1/namespaces/default/backups/backup-
↪example
  UID:               ad5f855c-2ffd-454a-a157-900d5f1f6584
Spec:
  Cluster:
    Name:  pg-backup
Status:
  Phase:       running
  Started At:  2020-10-26T13:57:40Z
Events:        <none>
```

バックアップが完了すると、フェーズは次の例のように completed になります。

```
Name:         backup-example
Namespace:    default
Labels:       <none>
Annotations:  API Version:  postgresql.cnpg.io/v1
Kind:         Backup
Metadata:
  Creation Timestamp:  2020-10-26T13:57:40Z
  Self Link:         /apis/postgresql.cnpg.io/v1/namespaces/default/backups/backup-
↪example
  UID:               ad5f855c-2ffd-454a-a157-900d5f1f6584
Spec:
  Cluster:
    Name:  pg-backup
Status:
  Backup Id:         20201026T135740
  Destination Path:  s3://backups/
  Endpoint URL:      http://minio:9000
  Phase:             completed
  s3Credentials:
    Access Key Id:
      Key:   ACCESS_KEY_ID
      Name:  minio
    Secret Access Key:
      Key:      ACCESS_SECRET_KEY
      Name:     minio
  Server Name:  pg-backup
  Started At:   2020-10-26T13:57:40Z
  Stopped At:   2020-10-26T13:57:44Z
Events:         <none>
```

!!!重要この機能は、スーパーユーザーとアプリケーションユーザーのシークレットをバックアップしません。シークレットは、Kubernetes クラスターの標準のバックアップ手順の一部としてバックアップされることになっています。

18.6 スタンバイからのバックアップ

ベースバックアップを取るには、ディスク上の PostgreSQL インスタンスのデータコンテンツ全体をスクレイピングする必要があります、その結果、データベースの実際のワークロードとの I/O 競合が発生する可能性があります。

このため、CloudNativePG では、 PostgreSQL で直接利用可能な機能**スタンバイからのバックアップ** を利用できます。

デフォルトでは、バックアップは `Cluster` の最もアライメントの高いレプリカで実行されます。使用可能なレプリカがない場合、バックアップはプライマリインスタンスで実行されます。

注釈: スタンバイはプライマリと常に最新の状態であるとは限りませんが、最初に使用可能なバックアップから最後にアーカイブされた WAL までの時間連続性では、これは通常無関係です。ベースバックアップは、確かに、PITR を含む復旧操作を開始する開始ポイントを表します。 pg_basebackup で起こることと同様に、オンラインスタンバイからバックアップする場合、プライマリで WAL のスイッチを強制しません。これにより、書き込みアクティビティが低い展開では、短期的に `archive_timeout` がキックインする前に予期しない結果が発生する可能性があります。

常にプライマリでバックアップを実行したい場合は、以下の例に示すようにバックアップターゲットを primary に設定できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata: [...]
spec:
  backup:
    target: "primary"
```

警告: ボリュームスナップショットを使用してコールドバックアップを実行するときは、ターゲットをプライマリに設定するように注意してください。これにより、スナップショットの取得に必要な時間プライマリがシャットダウンし、書き込み操作に影響します。これは、プライマリをターゲットとして明示的に設定していない場合でも、単一インスタンスのクラスターでコールドバックアップを取得する場合にも適用されます。

バックアップターゲットが prefer-standby に設定されている場合、このようなポリシーは、バックアップが最新の使用可能なセカンダリインスタンスで実行されるか、他のインスタンスが使用できない場合はプライマリインスタンスで実行されます。

デフォルトでは、特に指定しない限り、ターゲットはスタンバイからバックアップを取得するように自動的に設定されます。

Cluster で指定されたバックアップターゲットは、次の例のように、Backup および ScheduledBackup タイプでオーバーライドできます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Backup
metadata: [...]
spec:
  cluster:
    name: [...]
  target: "primary"
```

前の例では、Cluster がレプリカを優先するように設定されている場合でも、CloudNativePG は常にプライマリインスタンスを選択します。

第19章　オブジェクトストアのバックアップ

CloudNativePG は、オブジェクトストアでの継続的な物理バックアップと WAL アーカイブを介して、PostgreSQL クラスターの**オンライン/ホットバックアップ**をネイティブにサポートしています。これは、データベースが常に稼働しており、ダウンタイムが必要なく、ポイントインタイムリカバリーが利用できることを意味します。

オペレーターは、 Barman Cloud ツールに基づいた継続的なバックアップインフラストラクチャをオーケストレーションできます。多くの PostgreSQL インスタンスをバックアップする Barman サーバーで古典的なアーキテクチャを使用する代わりに、オペレーターは `barman-cloud-wal-archive` 、`barman-cloud-check-wal-archive` 、`barman-cloud-backup` 、`barman-cloud-backup-list` 、および `barman-cloud-backup-delete` ツールに依存します。その結果、ベースバックアップは_tarballs_になります。ベースバックアップと WAL ファイルは両方とも圧縮および暗号化できます。

このためには、 `barman-cli-cloud` が含まれるイメージを使用する必要があります。コミュニティ PostgreSQL イメージと最新の `barman-cli-cloud` パッケージで構成されているため、このスコープにイメージ `ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql` を使用できます。

重要: Barman クラウドで導入された機能強化を利用するため、システムでオペランドの最新バージョンを実行していることを常に確認して、クラスターのセキュリティ面を向上させます。

バックアップは、`Cluster` のプライマリまたは指定されたプライマリインスタンスから実行されます**レプリカクラスター** を参照してください

指定されたプライマリインスタンスの詳細については、 **スタンバイからのバックアップ** 。

19.1 共通オブジェクトストア

AWS S3 、 *Microsoft Azure Blob Storage* 、 *Google Cloud Storage* 、または *MinIO* ゲートウェイなどの特定のオブジェクトストア、または互換性のあるプロバイダーを探している場合は、付録 *A*-バックアップ用の共通オブジェクトストア を参照してください。

19.2 リテンション ポリシー

重要: 現在、保持ポリシーはボリュームスナップショットでは使用できません。

CloudNativePG は、リカバリウィンドウに基づいて **リテンションポリシー**を使用して、バックアップオブジェクトストアからのバックアップファイルの自動削除を管理できます。

内部的には、保持ポリシー機能は barman-cloud-backup-delete と--retention-policy “RECOVERY WINDOW OF {{ retention policy value }} {{ retention policy unit }}”を使用します。

たとえば、次のように 30 日の保持ポリシーを使用してバックアップを定義できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "<destination path here>"
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_SECRET_KEY
    retentionPolicy: "30d"
```

19.3 圧縮アルゴリズム

CloudNativePG は、デフォルトでバックアップと WAL ファイルを非圧縮方法でアーカイブします。ただし、barman-cloud-backup バックアップ用および barman-cloud-wal-archive WAL ファイル用を介して次の圧縮アルゴリズムもサポートします。

- bzip2
- gzip

- きびきび

バックアップと WAL の圧縮設定は独立しています。 barman-cloud API リファレンスの DataBackupConfiguration および WALBackupConfiguration セクションを参照してください。

アーカイブ時間、復元時間、およびサイズはアルゴリズムによって異なるため、ユースケースに応じて圧縮アルゴリズムを選択する必要があることに注意してください。

Barman チームは、 Barman Cloud でサポートされているアルゴリズムのパフォーマンスの評価を実行しました。次の表は、ローカルの MinIO 展開でバックアップが作成されるシナリオをまとめています。Barman GitHub プロジェクトには、 deeper analysis が含まれています。

Compression	Backup Time (ms)	Restore Time (ms)	Uncompressed size (MB)	Compressed size (MB)	Approx ratio
None	10927	7553	395	395	1:1
bzip2	25404	13886	395	67	5.9:1
gzip	116281	3077	395	91	4.3:1
snappy	8134	8341	395	166	2.4:1

19.4 バックアップオブジェクトのタグ付け

Barman 2.18 では、 `barman-cloud-backup` および `barman-cloud-wal-archive` を介してオブジェクトストアに保存する際のバックアップリソースのタグ付けのサポートを導入しました。その結果、PostgreSQL コンテナイメージにバージョン 2.18 以降の Barman が含まれる場合、CloudNativePG では、バックアップオブジェクト、つまりベースバックアップ、WAL ファイル、履歴ファイルのキーと値のペアとしてタグを指定できます。

`.spec.backup.barmanObjectStore` 定義では 2 つのプロパティを使用できます。

- `tags` バックアップオブジェクトとバックアップオブジェクトストアのアーカイブされた WAL ファイルに追加するキーと値のペアタグ
- `historyTags` バックアップオブジェクトストアのアーカイブされた履歴ファイルに追加されるキーと値のペアタグ

以下の YAML マニフェストの抜粋は、この機能の使用例を提供します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      [...]
      tags:
        backupRetentionPolicy: "expire"
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    historyTags:
      backupRetentionPolicy: "keep"
```

19.5 backup および WAL コマンドの追加オプション

.spec.backup.barmanObjectStore.data および.spec.backup.barmanObjectStore.wal セクションの additionalCommandArgs プロパティを使用して、barman-cloud-backup および barman-cloud-wal-archive コマンドに追加オプションを追加できます。このプロパティは、barman-cloud-backup および barman-cloud-wal-archive コマンドに追加される文字列のリストです。

たとえば、 --read-timeout=60 を使用して、接続の読み取りタイムアウトをカスタマイズできます。

barman-cloud-backup および barman-cloud-wal-archive コマンドでサポートされる追加オプションについては、公式バーマンドキュメント here を参照してください。

additionalCommandArgs で提供されるオプションが、そのセクション.spec.backup.barmanObjectStore.data または.spec.backup.barmanObjectStore.wal の宣言されたオプションに既に存在する場合、追加のオプションは無視されます。

次に、このプロパティの使用方法の例を示します。

バックアップの場合

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      [...]
      data:
        additionalCommandArgs:
        - "--min-chunk-size=5MB"
        - "--read-timeout=60"
```

WAL ファイルの場合

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      [...]
      wal:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      additionalCommandArgs:
      - "--max-concurrency=1"
      - "--read-timeout=60"
```

第20章　WALアーカイブ

WAL アーカイブは、 *WAL アーカイブ* をフィードするプロセスです

CloudNativePG で。

重要: CloudNativePG は現在、オブジェクトストアの WAL アーカイブのみをサポートしています。このような WAL アーカイブは、オブジェクトストアのバックアップとボリュームスナップショットのバックアップの両方に役立ちます。

WAL アーカイブは、`Cluster` リソースの`.spec.backup.barmanObjectStore` スタンザで定義されています。**オブジェクトストアのバックアップ** にあるものと同じ手順を進めて、WAL アーカイブを設定してください。

注釈: BarmanObjectStoreConfiguration を参照してください。

オプションの完全なリストについては、barman-cloud API で 。

必要に応じて、WAL ファイルがアップロードされたらすぐに圧縮および/または暗号化することを選択できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      [...]
      wal:
        compression: gzip
        encryption: AES256
```

バケットに暗号化を直接構成できます。クラスター構成でオーバーライドしない限り、オペレーターはそれを使用します。

PostgreSQL は、シークエンシャルアーカイブスキームを実装しており、アーカイブされるすべての WAL セグメントに対して `archive_command` がシークエンシャルに実行されます。

重要: デフォルトでは、CloudNativePG は`archive_timeout` を`5min` に設定し、ワークロードが低い場合でも WAL ファイルが少なくとも 5 分ごとに閉じてアーカイブされ、目標リカバリポイント PgBouncerPoolMode

{postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} の決定論的な時間ベースの値を提供します。 archive_timeout の値を変更する場合でも、私たちの経験から、オペレーターが設定したデフォルト値がほとんどのユースケースに適していることが示唆されています。

PostgreSQL インスタンスとオブジェクトストア間の帯域幅で複数の WAL ファイルを並列してアーカイブできる場合、次の例のようにインスタンスマネージャーの並列 WAL アーカイブ機能を使用できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      [...]
      wal:
        compression: gzip
        maxParallel: 8
        encryption: AES256
```

前の例では、インスタンスマネージャーは、PostgreSQL によって要求されたものを含む最大 8 つの準備ができている WAL を並列アーカイブすることにより、WAL アーカイブプロセスを最適化します。

PostgreSQL が、最適化としてインスタンスマネージャーによって既にアーカイブされた WAL のアーカイブを要求する場合、そのアーカイブ要求はポジティブなステータスで却下されるだけです。

第21章　ボリュームスナップショットのバックアップ

警告: *backup document* で述べたように、プライマリをターゲットに明示的に設定されたコールドスナップショットは、バックアップ中にプライマリがフェンスされ、その間クラスターを読み取り専用にします 安全のため、既にフェンスされたインスタンスを含むクラスターでは、コールドスナップショットは拒否されます。

CloudNativePG は、完全に宣言的な方法で、バックアップとリカバリー操作の両方に Kubernetes ネイティブボリュームスナップショット API を直接利用するデータベースオペレーターの最初の既知のケースの 1 つです。

21.1 標準のボリュームスナップショットについて

ボリュームスナップショットは Kubernetes 1.12 (2018) as alpha で最初に導入され、beta in 1.17 (2019) 、および moved to GA in 1.20 (2020) に昇格しました。安定して広く利用可能な標準になり、3 つのカスタムリソース定義 `VolumeSnapshot` 、`VolumeSnapshotContent` 、`VolumeSnapshotClass` を提供します。

この Kubernetes 機能は、次の汎用インターフェイスを定義します。

- PVC から始まる新しいボリュームスナップショットの作成
- 既存のスナップショットの削除
- スナップショットからの新しいボリュームの作成

Kubernetes は、実際の実装を基になる CSI ドライバーに委任しますそれらのすべてがボリュームスナップショットをサポートしているわけではありません。通常、ボリュームスナップショットを提供するストレージクラスは、**アプリケーションの透過的な方法でのインクリメンタルおよび差分ブロックレベルのバックアップ**をサポートします。これにより、スナップショットのクラスター間の可用性を含む、スタックの複雑さと独立した管理を委任できます。

21.2 要件

ボリュームスナップショットが CloudNativePG クラスターで動作するには、PostgreSQL ボリュームつまり `storage` および `walStorage` セクションの動的プロビジョニングに使用される各ストレージクラスがボリュームスナップショットをサポートしていることを確認する必要があります。

手順はストレージクラスごとに異なるため、Kubernetes システムに展開した特定のストレージクラスと関連する CSI ドライバーのドキュメントを参照してください。

通常、それは *VolumeSnapshotClass* です

特定のストレージクラスの永続ボリュームからスナップショットを取得し、`VolumeSnapshot` および `VolumeSnapshotContent` リソースとして管理できることを保証します。

重要: ボリュームスナップショットがサポートされていることをサードパーティベンダーに確認するのはあなたの責任です。 CloudNativePG は、この問題に関して Kubernetes API とのみ対話し、特定の CSI ドライバーごとにストレージレベルでの問題をサポートすることはできません。

21.3 ボリュームスナップショットバックアップを構成する方法

CloudNativePG では、`backup.volumeSnapshot` スタンザを介したボリュームスナップショットバックアップ用に特定の Postgres クラスターを構成できます。

注釈: VolumeSnapshotConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1- VolumeSnapshotConfiguration} を参照してください。

オプションの完全なリストについては、API リファレンスを参照してください。

ボリュームスナップショットを使用した一般的な例 PGDATA と WAL が同じストレージクラスを共有すると仮定した場合、次のとおりです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: snapshot-cluster
spec:
  instances: 3

  storage:
    storageClass: @STORAGE_CLASS@
    size: 10Gi
  walStorage:
    storageClass: @STORAGE_CLASS@
    size: 10Gi
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
backup:
  # Volume snapshot backups
  volumeSnapshot:
    className: @VOLUME_SNAPSHOT_CLASS_NAME@
  # WAL archive
  barmanObjectStore:
    # ...
```

ご覧のとおり、 backup セクションには、 volumeSnapshot スタンザボリュームスナップショットの物理ベースバックアップの制御と barmanObjectStore スタンザ *WAL アーカイブ* の制御の両方が含まれています。

注釈: *barmanObjectStore* を定義すると、ボリュームスナップショットとオブジェクトストアのバックアップ戦略の両方を同時に使用して物理的バックアップを取得することができます。

---

volumeSnapshot.className オプションを使用すると、PostgreSQL クラスターで定義したすべてのストレージボリュームに使用されるデフォルトの VolumeSnapshotClass オブジェクトを参照できます。

注釈: *PGDATA* および WAL ファイルに別のストレージクラスを使用している場合、 *walClassName* オプションデフォルトで `className` と同じ値を介してそのボリュームに別個の `VolumeSnapshotClass` を指定できます。

ボリュームスナップショットバックアップ用にクラスターを定義したら、このようなバックアップを定期的に要求する ScheduledBackup リソースを定義する必要があります。

21.4 ホットおよびコールドバックアップ

デフォルトでは、CloudNativePG は PostgreSQL defaults of the low-level API for base backups を使用して、ボリュームスナップショットのオンライン/ホットバックアップを要求します。

- バックアップ手順の開始時に、即時チェックポイントを要求しません
- バックアップ手順を終了するときに、WAL アーカイバーがバックアップの最後のセグメントをアーカイブするのを待機します

重要: デフォルト値は、ほとんどの実稼働環境に適しています。ホットバックアップは一貫性があり、スナップショットリカバリーを実行するために使用できます。バックアップの開始から一時レプリケーションスロットを介して WAL の保持を保証します。ただし、そのためにはコールドバックアップに依存することをお勧めします。

Cluster リソースの.spec.backup.volumeSnapshot スタンザの次のオプションを使用して、デフォルトの動作を明示的に変更できます。

- online true デフォルトまたは false を値として受け入れます
- onlineConfiguration.immediateCheckpoint バックアップ手順を開始する前に、即時チェックポイントを要求するかどうか。技術的には、PostgreSQL の pg_backup_start /pg_start_backup() ファンクションに渡す fast 引数に対応し、true デフォルトまたは false を受け入れます
- onlineConfiguration.waitForArchive アーカイバーがバックアップの最後のセグメントを処理するまで待機するかどうか。技術的には、PostgreSQL の pg_backup_stop /pg_stop_backup() ファンクションに渡す wait_for_archive 引数に対応し、true デフォルトまたは false を受け入れます

デフォルトでコールドバックアップを取得するように Postgres クラスターのデフォルト動作を変更する場合、次のようにマニフェストに online: false オプションを追加するだけです。

```
#  ...

backup:
  volumeSnapshot:
    online: false
    # ...
```

代わりに、デフォルトの動作として即時チェックポイントを要求する場合、このセクションを追加できます。

```
#  ...

backup:
  volumeSnapshot:
    online: true
    onlineConfiguration:
      immediateCheckpoint: true
    # ...
```

21.4.1 デフォルト動作のオーバーライド

Backup または ScheduledBackup オブジェクトの online および必要に応じて onlineConfiguration に別の値を設定することにより、クラスターリソースで定義されたデフォルトの動作を変更できます。

たとえば、オンデマンドのコールドバックアップを発行する場合、.spec.online: false を使用して Backup オブジェクトを作成できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Backup
metadata:
  name: snapshot-cluster-cold-backup-example
spec:
  cluster:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    name: snapshot-cluster
  method: volumeSnapshot
  online: false
```

同様に、 ScheduledBackup の場合

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: ScheduledBackup
metadata:
  name: snapshot-cluster-cold-backup-example
spec:
  schedule: "0 0 0  **  *"
  backupOwnerReference: self
  cluster:
    name: snapshot-cluster
  method: volumeSnapshot
  online: false
```

21.5 ボリュームスナップショットオブジェクトの永続化

デフォルトでは、 CloudNativePG によって作成された VolumeSnapshot オブジェクトは、それらを生成した Backup オブジェクトまたはそれらが参照する Cluster を削除した後も保持されます。このような動作は、次の値を受け入れる .spec.backup.volumeSnapshot.snapshotOwnerReference オプションによって制御されます。

- none 所有権が設定されていません。Backup および/または Cluster リソースが削除された後も VolumeSnapshot オブジェクトが持続することを意味します
- backup VolumeSnapshot オブジェクトは、それを生成した Backup リソースが所有しており、バックアップオブジェクトが削除されると、ボリュームスナップショットも削除されます
- cluster VolumeSnapshot オブジェクトは、バックアップされた Cluster リソースが所有しており、Postgres クラスターが削除されると、ボリュームスナップショットも削除されます

VolumeSnapshot が削除される場合、 VolumeSnapshotContent で指定された deletionPolicy が評価されます。

- Retain に設定されている場合、VolumeSnapshotContent オブジェクトは保持されます
- Delete に設定されている場合、VolumeSnapshotContent オブジェクトも削除されます

警告: *VolumeSnapshotContent* オブジェクトは、バックアップと参照するクラスターに関するすべての情報を保持しているわけではありません *VolumeSnapshot* オブジェクトに含まれる注釈やラベルなど。可能ですが、この種のオブジェクトのみからの復元は簡単ではない場合があります。このため、Kubernetes レベルのデータ保護ソリューションを使用する場合でも、常に`VolumeSnapshot` 定義をバックアップすることをお勧めします。

VolumeSnapshotContent の値は、対応する VolumeSnapshotClass 定義で設定された deletionPolicy によって決定されます。これは、.spec.backup.volumeSnapshot.className オプションで参照されます。

Kubernetes documentation on Volume Snapshot Classes を参照してください。

この標準の動作の詳細については、

21.6 例

次の例は、ebs-sc ストレージクラスと csi-aws-vsc ボリュームスナップショットクラスを使用して、AWS の EKS クラスターでボリュームスナップショットベースバックアップを構成する方法を示しています。

重要: 例のテストに興味がある場合は、お読みください Volume Snapshots

ストレージクラスとスナップショットクラスのインストールプロセスの詳細な手順については、を参照してください。

次のマニフェストは、ボリュームスナップショットに使用する準備ができ、サービスアカウント IRSA の IAM ロールを介して S3 バケットに WAL アーカイブを保存する Cluster を作成します *AWS S3* を参照してください。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: hendrix
spec:
  instances: 3

  storage:
    storageClass: ebs-sc
    size: 10Gi
  walStorage:
    storageClass: ebs-sc
    size: 10Gi

  backup:
    volumeSnapshot:
      className: csi-aws-vsc
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://@BUCKET_NAME@/
      s3Credentials:
        inheritFromIAMRole: true
      wal:
        compression: gzip
        maxParallel: 2
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  serviceAccountTemplate:
    metadata:
      annotations:
        eks.amazonaws.com/role-arn: "@ARN@"
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: ScheduledBackup
metadata:
  name: hendrix-vs-backup
spec:
  cluster:
    name: hendrix
  method: volumeSnapshot
  schedule: "0 0 0  **  *"
  backupOwnerReference: cluster
  immediate: true
```

最後のリソースは、深夜に毎日のボリュームスナップショットバックアップを定義し、クラスターが作成された直後に 1 つを要求します。

第22章　リカバリー

PostgreSQL の用語では、リカバリとは、既存のバックアップを使用して PostgreSQL インスタンスを起動するプロセスです。PostgreSQL のリカバリメカニズムは非常に堅牢で豊富です。また、ポイントインタイムリカバリー PITR もサポートしており、カタログ内の最初に使用可能なバックアップから最後にアーカイブされた WAL まで、特定のクラスターを任意の時点に復元できます。(この場合、WAL アーカイブは必須です。)

CloudNativePG では、既存のクラスターでリカバリーインプレースを実行できません。リカバリーは、代わりに、使用可能な物理的バックアップから新しい Postgres クラスターをブートストラップする方法です。

注釈: *bootstrap* スタンザの詳細については、 *Bootstrap* を参照してください。

`recovery` ブートストラップモードでは、既存の物理ベースバックアップからクラスターを作成できます。次に、アーカイブから REDO ログを含む WAL ファイルを再適用します。

WAL ファイルは、定義された_recovery object store_からプルされます。

ベースバックアップは、オブジェクトストアまたはボリュームスナップショットを使用して取得できます。

_recovery object store_からのリカバリは 2 つの方法で実現できます。

- リカバリオブジェクトストア、つまり Barman Cloud によって作成され、`externalClusters` セクションの `barmanObjectStore` オプションを介して定義された別のクラスターのバックアップを使用することをお勧めします。
- または、同じ名前空間内の既存の `Backup` オブジェクトを使用できます。

どちらの復旧方法も、完全な復旧最後に使用可能な WAL までまたは最大**ポイント インタイム リカバリー** *PITR* までのいずれかが有効になります。完全なリカバリーを実行するときに、クラスターをレプリカモードで起動することもできます。 **レプリカクラスター** を参照してください。

重要: レプリカモードを使用する場合、復旧したクラスターの PostgreSQL 構成`.spec.postgresql.parameters`が、物理レプリケーションの観点から元の構成と互換性があることを確認します。

_volume snapshots_を使用したリカバリの場合

- すべてが同じバックアップに属し、同じ `cnpg.io/cluster` および `cnpg.io/backupName` ラベルで識別される `VolumeSnapshot` オブジェクトの一貫したセットを使用します。次に、:ref:`VolumeSnapshot`オブジェクトからのリカバリー <`VolumeSnapshot` オブジェクトからのリカバリー>` の説明に従って、 ``.spec.bootstrap.recovery` スタンザの `volumeSnapshots` オプションを使用してリカバリします。

22.1 オブジェクトストアからのリカバリー

Barman Cloud によって作成され、サポートされているオブジェクトストアに保存されているバックアップから復元できます。`barmanObjectStore` セクションで必要な構成をすべて含む外部クラスターを定義した後、`.spec.recovery.source` オプションで参照する必要があります。

この例では、Azure の BLOB コンテナにリカバリオブジェクトストアを定義します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-restore
spec:
  [...]

  superuserSecret:
    name: superuser-secret

  bootstrap:
    recovery:
      source: clusterBackup

  externalClusters:
    - name: clusterBackup
      barmanObjectStore:
        destinationPath: https://STORAGEACCOUNTNAME.blob.core.windows.net/
↪CONTAINERNAME/
        azureCredentials:
          storageAccount:
            name: recovery-object-store-secret
            key: storage_account_name
          storageKey:
            name: recovery-object-store-secret
            key: storage_account_key
        wal:
          maxParallel: 8
```

前の例では、アプリケーションデータベースとその所有ユーザーの名前がデフォルトで app であることを前提としています。リストアする PostgreSQL クラスターが別の名前を使用している場合、**アプリケーションデータベースの構成** に記載されているように、リカバリフェーズを終了する前にこれらの名前を指定する必要があります。

重要: デフォルトでは、 *recovery* メソッドは、オブジェクトストア内のバックアップデータのメインフォルダーの名前として、 *externalClusters* セクションのクラスターの `name` を厳密に使用します。この名前は、通常、サーバーの名前用に予約されています。 *barmanObjectStore.serverName* プロパティを使用して、別のフォルダー名を指定できます。

注釈: この例では、並列 WAL リストア機能を利用し、最大 8 つのジョブを専用にして、アーカイブから必要な WAL ファイルを同時に取得します。この機能により、復旧時間を大幅に短縮できます。このシナリオを事前に計画し、ご使用の環境に合わせてこのパラメーターの値を正しく調整してください。必要なときに違いを生みますし、そうします。

22.2 VolumeSnapshot オブジェクトからのリカバリー

警告: ボリュームスナップショットからプライマリインスタンスをリカバリした後にレプリカを作成する場合、オペレーターは `pg_basebackup` を使用して同期することになる場合があります。この動作により、データベースのサイズによっては、プロセスが遅くなります。この制限は、将来的にオンラインバックアップと PVC クローン作成のサポートが導入されると解除されます。

CloudNativePG は、*volumesnapshot backups* の宣言 API を使用して取得された既存の `Cluster` の PVC の `VolumeSnapshot` から新しいクラスターを作成できます。次の例のように、スナップショットの名前を指定する必要があります。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-restore
spec:
  [...]

  bootstrap:
    recovery:
      volumeSnapshots:
        storage:
          name: <snapshot name>
          kind: VolumeSnapshot
          apiGroup: snapshot.storage.k8s.io
```

バックアップされたクラスターが別の PVC を使用して WAL ファイルを保存していた場合、リカバリーにはそれも含める必要があります。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-restore
spec:
  [...]
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  bootstrap:
    recovery:
      volumeSnapshots:
        storage:
          name: <snapshot name>
          kind: VolumeSnapshot
          apiGroup: snapshot.storage.k8s.io

        walStorage:
          name: <snapshot name>
          kind: VolumeSnapshot
          apiGroup: snapshot.storage.k8s.io
```

前の例では、アプリケーションデータベースとその所有ユーザーの名前がデフォルトで app であることを前提としています。リストアする PostgreSQL クラスターが別の名前を使用している場合、アプリケーションデータベースの構成 に文書されているように、リカバリフェーズを終了する前にこれらの名前を指定する必要があります。

警告: スナップショットからレプリカモードクラスターをブートストラップして、プライマリだけでなくスタンバイインスタンスのスナップショットを活用する場合、次のことをお勧めします。

1. 単一インスタンスのレプリカクラスターから開始します。プライマリインスタンスは、スナップショットとソースクラスタからの使用可能な WAL を使用して復旧されます。2. レプリカクラスター内のプライマリのスナップショットを取得します。3. 必要に応じて、レプリカクラスター内のインスタンスの数を増やします。

22.3 Backup オブジェクトからのリカバリー

クラスターを作成する必要がある名前空間で Backup リソースが既に利用可能な場合、次の例のように、spec.bootstrap.recovery.backup.name を使用して名前を指定できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-initdb
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    recovery:
      backup:
        name: backup-example
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  storage:
    size: 1Gi
```

このブートストラップ方法では、復元する必要があるバックアップへの参照のみを指定できます。

前の例では、アプリケーションデータベースとその所有ユーザーの名前がデフォルトで app であることを前提としています。リストアする PostgreSQL クラスターが別の名前を使用している場合、アプリケーションデータベースの構成 に記載されているように、リカバリフェーズを終了する前にこれらの名前を指定する必要があります。

22.4 追加の考慮事項

オブジェクトストア、ボリュームスナップショット、または既存の Backup リソースからリカバリーするかどうかにかかわらず、Cluster が完全にプライマリに昇格し、書き込み操作を受け入れるまで、カタログを含むデータベースを変更することはできません。この制限には、Cluster がプライマリに移行するまで遅延されるロールオーバーライドが含まれます。その結果、次の考慮事項が適用されます。

- アプリケーションデータベース名とユーザーは、復元されるバックアップからコピーされます。これは、Kubernetes クラスターの通常のメンテナンスアクティビティの一部であるため、現在基になるシークレットのバックアップは行っていません。
- 元の postgres ユーザーパスワードを保持するには、enableSuperuserAccess を構成し、superuserSecret を提供します。

デフォルトでは、リカバリはデフォルトのターゲットタイムライン latest で使用可能な最新の WAL まで続行されます。オプションで recoveryTarget を指定して、ポイントインタイムリカバリーを実行できますポイント インタイム リカバリー *PITR* を参照してください。

重要: *barmanObjectStore.wal.maxParallel* オプションを使用して、リカバリオブジェクトストアからトランザクションログを同時にダウンロードすることにより、アーカイブからの WAL 取得を高速化することを検討します。

22.5 ポイント インタイム リカバリー PITR

ベースバックアップを抽出した後、最新の WAL までのすべての WAL を再生する代わりに、任意の時点で WAL の再生を停止するように PostgreSQL に依頼できます。PostgreSQL は、この技術を使用して PITR を達成します。WAL アーカイブの存在は必須です。

重要: PITR では、 リカバリーターゲット で説明したオプションを使用してリカバリターゲットを指定する必要があります。

リカバリターゲットが指定された場合、オペレーターは、この機能が動作するために必要な構成パラメーターを生成します。

22.5.1 オブジェクトストアからの PITR

この例では、ベースバックアップと WAL アーカイブの両方を含む Azure のリカバリオブジェクトストアを使用します。リカバリターゲットは、要求されたタイムスタンプに基づいています。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-restore-pitr
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 5Gi

  bootstrap:
    recovery:
      # Recovery object store containing WAL archive and base backups
      source: clusterBackup
      recoveryTarget:
        # Time base target for the recovery
        targetTime: "2023-08-11 11:14:21.00000+02"

  externalClusters:
    - name: clusterBackup
      barmanObjectStore:
        destinationPath: https://STORAGEACCOUNTNAME.blob.core.windows.net/
↪CONTAINERNAME/
        azureCredentials:
          storageAccount:
            name: recovery-object-store-secret
            key: storage_account_name
          storageKey:
            name: recovery-object-store-secret
            key: storage_account_key
        wal:
          maxParallel: 8
```

この例では、タイムスタンプの形式で targetTime のみを指定する必要がありました。リカバリーを開始するベースバックアップを指定する必要はありません。

backupID オプションは、リカバリプロセスを開始するベースバックアップを指定できるオプションです。デフォルトでは、この値は空です。

Barman バックアップ ID の形式で値を割り当てると、オペレーターはそのバックアップをリカバリのベースとして使用します。

重要: このようなバックアップが存在し、アクセス可能であることを確認する必要があります。

バックアップ ID を指定しない場合、オペレーターは次のようにリカバリのベースバックアップを検出します。

- `targetTime` または `targetLSN` を使用する場合、オペレーターは、そのターゲットより前に完了した最も近いバックアップを選択します。
- それ以外の場合、オペレーターは最後の利用可能なバックアップを時系列で選択します。

22.5.2 VolumeSnapshot オブジェクトからの PITR

次の例では、以下を使用します。

- リカバリプロセスを開始するベースバックアップを含む `PGDATA` の Kubernetes ボリュームスナップショット。このスナップショットは `recovery.volumeSnapshots` セクションで指定され、`test-snapshot-1` と呼ばれます。
- WAL アーカイブを含む MinIO のリカバリオブジェクトストア。オブジェクトストアは、外部クラスター定義の形式で `recovery.source` オプションで指定されます。

リカバリターゲットは、要求されたタイムスタンプに基づいています。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-snapshot
spec:
  # ...
  bootstrap:
    recovery:
      source: cluster-example-with-backup
      volumeSnapshots:
        storage:
          name: test-snapshot-1
          kind: VolumeSnapshot
          apiGroup: snapshot.storage.k8s.io
      recoveryTarget:
        targetTime: "2023-07-06T08:00:39"
  externalClusters:
    - name: cluster-example-with-backup
      barmanObjectStore:
        destinationPath: s3://backups/
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: minio
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: minio
          key: ACCESS_SECRET_KEY
```

注釈: バックアップクラスターで `walStorage` が有効になっていた場合、 *Recovery from VolumeSnapshot objects* で述べたように、 *PGWAL* ディレクトリを含むボリュームスナップショットも指定する必要があります。

警告: ボリュームスナップショットのベースバックアップの終了時刻がリカバリターゲットのタイムスタンプより前であることを確認するのは自分の責任です。

22.5.3 リカバリーターゲット

次に、使用可能なリカバリターゲット基準を示します。

targetTime RFC 3339 形式で表現される、リカバリーが進行するタイムスタンプ。正確な停止ポイントは、`exclusive` オプションの影響も受けます。

targetXID リカバリーが続行されるトランザクション ID。正確な停止ポイントは、`exclusive` オプションの影響も受けます。回復されるトランザクションは、指定されたトランザクションより前にコミットされたトランザクション、およびオプションで含まれるトランザクションです。

targetName リカバリが続行する名前付けのリストアポイント `pg_create_restore_point()` で作成されます。

targetLSN リカバリを続行するログ先行書き込みの場所の LSN。正確な停止ポイントは、`exclusive` オプションの影響も受けます。

targetImmediate リカバリーは、一貫した状態に到達するとすぐに、つまりできるだけ早く終了します。オンラインバックアップから復元する場合、これはバックアップの取得が終了したポイントを意味します。

重要: *targetTime* または `targetLSN` のいずれかを指定すると、オペレーターは最も近いバックアップを取得できます。ただし、これは残りのターゲット `targetName` 、*targetXID* 、および `targetImmediate` では不可能です。このような場合、*backupID* の指定は必須です。

この例では、`targetName` ベースのリカバリターゲットを使用します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
  bootstrap:
    recovery:
      source: clusterBackup
      recoveryTarget:
        backupID: 20220616T142236
        targetName: restore_point_1
[...]
```

各 recoveryTarget 構成のターゲットから 1 つだけを選択できます。

さらに、 targetTLI を指定して、特定のタイムラインに強制的にリカバリーできます。

デフォルトでは、以前のパラメーターは包括的であるとみなされ、リカバリターゲットの直後で停止し、the behavior in PostgreSQL と一致します。

exclusive パラメーターを true に設定することにより、リカバリターゲットの直前で停止する排他的動作を要求できます。次の例は、この動作を示しており、ベースバックアップと WAL アーカイブの両方に Azure の BLOB コンテナーに依存します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-restore-pitr
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 5Gi

  bootstrap:
    recovery:
      source: clusterBackup
      recoveryTarget:
        backupID: 20220616T142236
        targetName: "maintenance-activity"
        exclusive: true

  externalClusters:
    - name: clusterBackup
      barmanObjectStore:
        destinationPath: https://STORAGEACCOUNTNAME.blob.core.windows.net/
↪CONTAINERNAME/
        azureCredentials:
          storageAccount:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
          name: recovery-object-store-secret
          key: storage_account_name
        storageKey:
          name: recovery-object-store-secret
          key: storage_account_key
      wal:
        maxParallel: 8
```

22.6 アプリケーションデータベースの構成

復旧したクラスターの場合、追加の構成でアプリケーションデータベース名と資格情報を構成できます。アプリケーションデータベースの資格情報を更新するには、独自のパスワードを生成、シークレットとして保存し、シークレットを使用するようにデータベースを更新できます。または、オペレーターにランダムで安全なパスワードを使用してシークレットを生成させて使用することもできます。空のクラスターをブートストラップする `initdb <空のクラスターをブートストラップする *initdb*>` を参照

シークレットの詳細については、

重要: *Cluster* がリカバリモードである間、カタログを含むデータベースへの変更は許可されません。この制限には、*Cluster* がプライマリに移行するまで遅延されるロールオーバーライドが含まれます。このフェーズでは、ユーザーはソースクラスターで定義されたままになります。

次の例では、ライブクラスターからブートストラップに従って、所有者 app と提供されたシークレット app-secret に保存されたパスワードを使用して app データベースを構成します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  bootstrap:
    recovery:
      database: app
      owner: app
      secret:
        name: app-secret
      [...]
```

上記の構成では、次は **復旧が完了した後** にのみ発生します。

1. app データベースが存在しない場合、作成されます。
2. app ユーザーが存在しない場合、作成されます。
3. app ユーザーが app データベースの所有者でない場合、所有権は app ユーザーに付与されます。

4. username 値がシークレットの owner 値と一致する場合、アプリケーションユーザーこの場合は app ユーザーのパスワードはシークレットの password 値に更新されます。

22.7 リカバリーの内部的な仕組み

オブジェクトストレージにアップロードされたデータを使用して、既存のバックアップから新しいクラスターを_bootstrap_できます。オペレーターは、barman-cloud-restore ツールベースバックアップ用と barman-cloud-wal-restore ツール WAL ファイル用、要求に応じて並列サポートを含むを使用して、リカバリプロセスをオーケストレーションします。

recovery ブートストラップ方法の詳細と手順については、バックアップからのブートストラップ `recovery <バックアップからのブートストラップ *recovery*>` を参照してください。

重要: PostgreSQL PITR の方法がよくわからない場合

は動作しますが、 .spec.postgresql.parameters に関しては、リカバリクラスターを元のクラスターとして構成することをお勧めします。新しいクラスターが復元されたら、必要に応じて設定を変更できます。

その仕組みは、オペレーターが新しいクラスターの最初のインスタンスに init コンテナを注入し、init コンテナがオブジェクトストレージからバックアップのリカバリを開始することです。

重要: 新しい PVC のベースバックアップコピーの期間は、バックアップのサイズ、およびネットワークとストレージの両方の速度によって異なります。

ベースバックアップ復旧プロセスが完了すると、オペレーターは Postgres インスタンスをリカバリモードで起動します。このフェーズでは、PostgreSQL は起動していますが、接続を受け入れることはできず、liveness プローブによれば、ポッドは正常です。restore_command を介して、PostgreSQL はアーカイブから WAL ファイルの取得を開始します。maxParallel オプションを設定し、並列 WAL リストア機能を有効にすることにより、このフェーズを高速化できます。

このフェーズは、PostgreSQL がターゲット WAL の最後または PITR の場合は必要なターゲットに到達すると終了します。オプションで recoveryTarget を指定して、PITR を実行できます。指定しない場合、リカバリは上の最新の使用可能な WAL まで継続されます。デフォルトのターゲットタイムライン latest

復旧が完了すると、オペレーターは必要なスーパーユーザーのパスワードをインスタンスに設定します。新しいプライマリインスタンスは通常どおり起動し、残りのインスタンスはレプリカとしてクラスターに参加します。

プロセスはユーザーに対して透過的であり、ポッドで実行されているインスタンスマネージャーによって管理されます。

22.8 バックアップセクションを使用したクラスターへのリストア

クラスターリストアのマニフェストには、backup セクションが含まれる場合があります。これは、復旧後に、新しいクラスターが WAL のアーカイブと、構成されている場合にバックアップの取得を開始することを意味します。

たとえば、このセクションは、クラスター cluster-example-backup からブートストラップするクラスターのマニフェストの一部です。ストレージバケットに、recoveredCluster という名前のフォルダーを作成します。ここに、復旧したクラスターのベースバックアップと WAL が保存されます。

```
backup:
  barmanObjectStore:
    destinationPath: s3://backups/
    endpointURL: http://minio:9000
    serverName: "recoveredCluster"
    s3Credentials:
      accessKeyId:
        name: minio
        key: ACCESS_KEY_ID
      secretAccessKey:
        name: minio
        key: ACCESS_SECRET_KEY
  retentionPolicy: "30d"

externalClusters:
  - name: cluster-example-backup
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://backups/
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials:
```

異なるクラスターで同じ barmanObjectStore 構成を再利用しないでください。ストレージバケットの既存の情報が新しいクラスターによって上書きされる場合があります。

> **警告:** オペレーターには、情報を含むストレージバケットをクラスターが上書きしないことを確認する安全チェックが含まれます。既存のストレージを上書きするクラスターは、ポッドがエラー状態の `Setting up primary` 状態のままです。ポッドログには `ERROR: WAL archive check failed for server recoveredCluster: Expected empty archive` が表示されます。

重要: 復旧したクラスターで `cnpg.io/skipEmptyWalArchiveCheck` アノテーションを `enabled` に設定すると、安全性チェックをスキップできます。一般的な使用ケースでは、チェックは正常に機能するため、チェックをスキップすることはお勧めしません。重大なデータの損失が発生する可能性があるため、PostgreSQL リカバリシステムに精通している場合にのみこのチェックをスキップしてください。

第23章　サービスマネージメント

PostgreSQL クラスターには、CloudNativePG によって直接管理される標準の Kubernetes ネットワークサービスを介してのみアクセスする必要があります。詳細については、Service を参照してください。

CloudNativePG は、`Cluster` リソースごとに 3 種類のサービスを定義します。

- `rw` クラスターのプライマリインスタンスへのポイント読み取り/書き込み。
- `ro` レプリカを指します使用可能な場合読み取り専用。
- `r` クラスター内の PostgreSQL インスタンスを指します読み取り。

デフォルトでは、CloudNativePG は次の規則で `Cluster` リソースの上記のすべてのサービスを作成します。

- サービスの名前は、`<CLUSTER_NAME>-<SERVICE_NAME>` の形式に従います。
- すべてのサービスは `ClusterIP` タイプです。

重要: デフォルトのサービス名は CloudNativePG 使用のために予約されています。

この設定は、同じ Kubernetes クラスター内の PostgreSQL にアクセスするためのほとんどのユースケースをカバーしていますが、CloudNativePG は次のような柔軟性を提供します。

- `ro` および/または `r` デフォルトサービスの作成を無効にします。
- Kubernetes が提供する標準の `Service` API を使用して、独自のサービスを定義します。

これら 2 つのオプションを組み合わせることができます。

一般的なシナリオは、Kubernetes クラスターの外部からデータベースへのアクセスが必要な DBaaS コンテキストで CloudNativePG を使用する場合に発生します。このような場合、Kubernetes 環境で使用可能な場合、タイプ `LoadBalancer` の独自のサービスを作成できます。

23.1 デフォルトサービスの無効化

managed.services.disabledDefaultServices を介して、 `ro` および `r` デフォルトサービスの一部またはすべてを無効にできます。

重要: CloudNativePG は PostgreSQL レプリケーションを保証するためにそれに依存しているため、*rw* サービスは必須であり、無効にすることはできません。

たとえば、 `ro` 読み取り専用と `r` 読み取りサービスの両方を削除する場合は、次の構成を使用できます。

```
#  <snip>

managed:
  services:
    disabledDefaultServices: ["ro", "r"]
```

23.2 独自のサービスの追加

重要: 独自のサービスを定義する場合、規約 `<CLUSTER_NAME>-<SERVICE_NAME>` に従っているデフォルトの予約サービス名は使用できません。 Kubernetes 名前空間でサービスの一意の名前を選択するのはあなたの責任です。

managed.services.additional を介して追加サービスのリストを定義できます。

`selectorType` フィールドでサービスタイプ `rw` などを指定し、オプションで `updateStrategy` を指定します。

`serviceTemplate` フィールドは、ネットワーク `Service` リソースの標準の Kubernetes API にアクセスし、必要に応じて `metadata` および `spec` セクションの両方を定義できます。

`name` をサービスに提供し、`selector` フィールドはオペレーターによって管理されるため、定義しないでください。

警告: サービステンプレートは、PostgreSQL データベースへのネットワークアクセスの構成という点で無限の可能性を提供します。これは、サービスが期待どおりに動作することを保証するための、あなたの側の責任の増大を意味します。 CloudNativePG は、セレクターを尊重することを除き、サービス構成を制御できません。

`updateStrategy` フィールドを使用すると、オペレーターがサービス定義を更新する方法を制御できます。デフォルトでは、オペレーターは `patch` ストラテジーを使用し、変更をサービスに直接適用します。または、`recreate` ストラテジーは、既存のサービスを削除し、テンプレートから再作成します。

警告: *recreate* ストラテジーは、変更されるたびにサービスの中断を発生させます。ただし、サービスの作成中にのみ設定できる特定のパラメーターを変更するために必要になる場合があります。

たとえば、PostgreSQL データベースプライマリに単一の `LoadBalancer` サービスを使用する場合、次の抜粋を使用できます。

```
#  <snip>

managed:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
services:
  additional:
    - selectorType: rw
      serviceTemplate:
        metadata:
          name: "mydb-lb"
          labels:
            test-label: "true"
          annotations:
            test-annotation: "true"
        spec:
          type: LoadBalancer
```

上記の例は、作成したサービスのアノテーションやラベルなどのメタデータを設定する方法も示しています。

23.2.1 Postgres サービスの公開について

PostgreSQL サービスを Kubernetes クラスターの外部に公開するには、主に 3 つのユースケースがあります。

- 一時的に、テスト用。
- 永続的に、 **DBaaS 目的** 。
- 長期/永久簡単または持続的にコンテナ化できず、Kubernetes の外部の仮想マシンまたは物理マシンに存在する必要がある**古いアプリケーション** の場合。この使用例は DBaaS に非常に似ています。

パブリックネットワークからデータベースへのアクセスを許可すると、データベースが悪意のあるユーザーからの潜在的な攻撃にさらされる可能性があることに注意してください。

> **警告:** 外部アクセスを許可する前にデータベースを保護していることを確認するか、Kubernetes クラスターがプライベートネットワークからのみ到達可能であることを確認してください。

第 24 章　PostgreSQL の構成

PostgreSQL に慣れているユーザーは、インスタンスを構成するための次の 3 つのファイルの存在に気づいています。

- `postgresql.conf` PostgreSQL のメインランタイム構成ファイル
- `pg_hba.conf` クライアント認証ファイル
- `pg_ident.conf` 外部ユーザーを内部ユーザーにマッピング

PostgreSQL コンテナの宣言的構成と不変性の概念により、ユーザーはこれらのファイルに直接触れることはできません。`parameters` 、`pg_hba` 、および `pg_ident` キーを介してカスタム `postgresql.conf` 、`pg_hba.conf` 、および `pg_ident.conf` 設定を定義することにより、`Cluster` リソース定義の `postgresql` セクションから構成が可能です。

これらの設定は、すべてのインスタンスで同じです。

> **警告:** *ALTER SYSTEM* クエリを使用して、命令的方法で PostgreSQL インスタンスの構成を変更しないでください。通常、オペレーターによって制御されるオプションの一部を変更すると、実際にクラスターの予測不能/回復不能な状態が発生する可能性があります。さらに、 *ALTER SYSTEM* の変更はクラスター全体でレプリケートされません。詳細については、以下の Enabling ALTER SYSTEM を参照してください。

カスタム設定の使用に関するリファレンスはサンプルに含まれています。以下を参照してください。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-custom
spec:
  instances: 3

  # Parameters and pg_hba configuration will be append
  # to the default ones to make the cluster work
  postgresql:
    parameters:
      max_worker_processes: "60"
    pg_hba:
      # To access through TCP/IP you will need to get username
      # and password from the secret cluster-example-custom-app
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    - host all all all md5

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Require 1Gi of space per instance using default storage class
  storage:
    size: 1Gi
```

24.1 postgresql セクション

ポッド内の PostgreSQL インスタンスは、デフォルトの `postgresql.conf` ファイルで始まり、これらの設定が自動的に追加されます。

```
listen_addresses = *
include custom.conf
```

`custom.conf` ファイルには、次の例にあるように、`postgresql` セクションのユーザー定義設定が含まれます。

```
#  ...

postgresql:
  parameters:
    shared_buffers: "1GB"

#  ...
```

参考:

GUC Grand Unified Configuration としても知られる more information on the available parameters の PostgreSQL ドキュメントを参照してください。 CloudNativePG は PostgreSQL パラメーターの文字列のみを受け入れることに注意してください。

`custom.conf` のコンテンツは、次のセクションをこの順序で適用することにより、オペレーターによって自動的に生成および維持されます。

- グローバルデフォルトパラメーター
- PostgreSQL メジャーバージョンに依存するデフォルトパラメーター
- ユーザー指定パラメーター

- 固定パラメーター

グローバルデフォルトパラメーター は次のとおりです。

```
archive_mode = on
dynamic_shared_memory_type = posix
full_page_writes = on
logging_collector = on
log_destination = csvlog
log_directory = /controller/log
log_filename = postgres
log_rotation_age = 0
log_rotation_size = 0
log_truncate_on_rotation = false
max_parallel_workers = 32
max_replication_slots = 32
max_worker_processes = 32
shared_memory_type = mmap # for PostgreSQL >= 12 only
wal_keep_size = 512MB # for PostgreSQL >= 13 only
wal_keep_segments = 32 # for PostgreSQL <= 12 only
wal_level = logical
wal_log_hints = on
wal_sender_timeout = 5s
wal_receiver_timeout = 5s
```

警告: PostgreSQL クラスターでの WAL セグメント保持を計画し、予想および観察されたワークロードに基づいて、サーバーバージョンに応じて `wal_keep_size` または `wal_keep_segments` を適切に構成するのはあなたの義務です。

また、唯一のストリーミングレプリケーションクライアントが高可用性クラスターで実行されているレプリカインスタンスである場合、クラスターレベルでレプリケーションスロットのサポートを追加するレプリケーションスロット機能を利用できます。`replicationSlots.highAvailability` オプション詳細については、**レプリケーションユーザーについて** を参照してください。レプリケーションスロットも継続的バックアップも設定せずに、`wal_keep_size` または `wal_keep_segments` を構成することが、スタンバイを同期外れから保護する唯一の方法です。スタンバイが同期が外れると、`"could not receive data from WAL stream: ERROR: requested WAL segment **** **** **** **** **** **** **** has already been removed"` のようなエラーメッセージが生成されます。これには、`PGDATA` の一部、または WAL ファイルの保存専用のボリュームを専用にして、ストリーミングレプリケーションの目的で古い WAL セグメントを保持する必要があります。

次のパラメーターは **固定**で、オペレーターによって排他的に制御されます。

```
archive_command = /controller/manager wal-archive %p
hot_standby = true
listen_addresses = *
port = 5432
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
restart_after_crash = false
ssl = on
ssl_ca_file = /controller/certificates/client-ca.crt
ssl_cert_file = /controller/certificates/server.crt
ssl_key_file = /controller/certificates/server.key
unix_socket_directories = /controller/run
```

固定パラメーターは最後に追加されるため、ユーザーが YAML 構成を介してオーバーライドすることはできません。これらのパラメーターは、正しい WAL アーカイブとレプリケーションに必要です。

24.1.1 レプリケーション設定

`primary_conninfo` 、`restore_command` 、および `recovery_target_timeline` パラメーターは、クラスター内のインスタンスの状態に応じて、オペレーターによって自動的に管理されます。

```
primary_conninfo = host=cluster-example-rw user=postgres dbname=postgres
recovery_target_timeline = latest
```

24.1.2 ログ制御設定

オペレーターは、CSV 形式でログを出力するために PostgreSQL を必要とし、インスタンスマネージャーは自動的にそれを解析し、JSON 形式で出力します。このため、PostgreSQL のすべてのログ設定は固定され、変更できません。

詳細については、 ロギング を参照してください。

24.1.3 共有プリロードライブラリ

PostgreSQL の `shared_preload_libraries` オプションは、サーバー起動時にコンマ区切りリストの形式でプリロードされる 1 つ以上の共有ライブラリを指定するために存在します。通常、PostgreSQL で使用され、システム全体のほとんどのデータベースセッションで使用する必要がある拡張機能がロードされます `pg_stat_statements` など。

CloudNativePG では、`shared_preload_libraries` オプションはデフォルトで空です。`shared_preload_libraries` のコンテンツをオーバーライドすることはできますが、熟練した Postgres ユーザーのみがこのオプションを利用することをお勧めします。

重要: 指定されたライブラリが見つからない場合、サーバーは起動に失敗し、CloudNativePG の自己修復の試行を妨げ、手動介入が必要になります。コンテンツを直接管理する予定がある場合は、*shared_preload_libraries* の拡張機能と設定の両方を常にテストしてください。

CloudNativePG は、最も使用される一部の PostgreSQL 拡張機能の shared_preload_libraries オプションのコンテンツを自動的に管理できます。詳細については、以下の マネージド拡張機能 セクションを参照してください。

具体的には、構成パラメーターに管理ライブラリのいずれかが必要であることにオペレーターが気づくと、必要なライブラリが自動的に追加されます。オペレーターは、実際のパラメーターが必要としないとすぐにライブラリを削除します。

重要: *shared_preload_libraries* からライブラリを削除するには、クラスター内のすべてのインスタンスを再起動する必要があることに常に注意してください。

文字列のリストとして、.spec.postgresql.shared_preload_libraries を介して追加の shared_preload_libraries を提供できます。オペレーターは、それらを自動的に管理するものとマージします。

24.1.4 マネージド拡張機能

前のセクションで予想されたように、CloudNativePG は、一部のよく知られサポートされている拡張機能の shared_preload_libraries のコンテンツを自動的に管理します。現在のリストには以下が含まれます。

- auto_explain
- pg_stat_statements
- pgaudit
- pg_failover_slots

これらのライブラリの一部は、使用する前にデータベース内の追加オブジェクトも必要とします。通常は、データベースで実行する CREATE EXTENSION コマンドを介して管理されるビューおよび/またはファンクションです。通常、DROP EXTENSION コマンドはこれらのオブジェクトを削除します。

このようなライブラリの場合、CloudNativePG は、次のクエリーで識別されるクラスター内の接続を受け入れるすべてのデータベースでの拡張機能の作成と削除を自動的に処理します。

```
SELECT datname FROM pg_database WHERE datallowconn
```

注釈: 上記のクエリーには、*template1* のようなテンプレートデータベースも含まれています。

24.1.5 auto_explain の有効化

auto_explain

拡張機能は、 EXPLAIN を手動で実行することなく、遅いステートメントの実行プランを自動的にログに記録する手段を提供します最適化されていないクエリーを追跡するのに役立ちます。

次の抜粋例のように auto_explain. で始まるパラメーターを構成に追加することにより、auto_explain を有効にできます。完了までに 10 秒以上かかるクエリの実行プランを自動的にログに記録します。

```
#  ...

postgresql:
  parameters:
    auto_explain.log_min_duration: "10s"

#  ...
```

注釈: auto_explain を有効にすると、パフォーマンスの問題が発生する可能性があります。 the auto explain documentation を参照してください。

24.1.6 pg_stat_statements の有効化

pg_stat_statements

拡張機能は、クエリのリアルタイムモニタリングのために PostgreSQL で使用可能な最も重要な機能の 1 つです。

次の例の抜粋のように、pg_stat_statements. で始まるパラメーターを構成に追加することにより、pg_stat_statements を有効にできます。

```
#  ...

postgresql:
  parameters:
    pg_stat_statements.max: "10000"
    pg_stat_statements.track: all

#  ...
```

前述のように、オペレーターは pg_stat_statements を shared_preload_libraries に自動的に追加し、各データベースで CREATE EXTENSION IF NOT EXISTS pg_stat_statements を実行します。これにより、pg_stat_statements ビューに対してクエリーを実行できます。

24.1.7 pgaudit の有効化

pgaudit 拡張機能は、標準の PostgreSQL ロギング機能を介して詳細なセッションおよび/またはオブジェクト監査ログを提供します。

CloudNativePG は、PostgreSQL クラスターで PGAudit の透過的かつネイティブサポートを備えています。詳細については、*PG 監査ログ* を参照してください。

次の例の抜粋のように、pgaudit. で始まるパラメーターを構成に追加することにより、pgaudit を有効にできます。

```
#
postgresql:

  parameters:
    pgaudit.log: "all, -misc"
    pgaudit.log_catalog: "off"
    pgaudit.log_parameter: "on"
    pgaudit.log_relation: "on"

#
```

24.1.8 pg_failover_slots の有効化

pg_failover_slots

EDB による拡張機能により、論理レプリケーションスロットがフェールオーバーシナリオでも生き残ることができます。フェールオーバーは、CloudNativePG の場合と同様、物理的ストリーミングレプリケーションを使用して実装されます。

pg_failover_slots. で始まるパラメーターを構成に追加することにより、pg_failover_slots を有効にできます。上記で説明したように、オペレーターは、これに応じて shared_preload_libraries オプションの pg_failover_slots エントリーを透過的に管理します。

the を参照してください。

この拡張機能の詳細については、

さらに、 pg_failover_slots で使用するデータベースごとに、各レプリカがプライマリに接続できるようにする pg_hba セクションにエントリを追加する必要があります。たとえば、 app データベースを pg_failover_slots で使用する場合、次のエントリを pg_hba セクションに追加する必要があります。

```
postgresql:
  pg_hba:
    - hostssl app streaming_replica all cert
```

24.2 pg_hba セクション

pg_hba は、ポッドが使用する pg_hba.conf を作成するために使用される PostgreSQL ホストベースの認証ルールのリストです。

重要: *more information on `pg_hba.conf* <https://www.postgresql.org/docs/current/auth-pg-hba-conf.html>`_ については、PostgreSQL ドキュメントを参照してください。

最初に一致するルールが認証に使用されるため、オペレーターによって生成された pg_hba.conf ファイルは 4 つのセクションで構成されていると考えられます。

1. 固定ルール
2. ユーザー定義のルール
3. オプションの LDAP セクション
4. デフォルトルール

固定ルール

```
local all all peer

hostssl postgres streaming_replica all cert
hostssl replication streaming_replica all cert
hostssl all cnpg_pooler_pgbouncer all cert
```

デフォルトルール

```
host all all all <default-authentication-method>
```

PostgreSQL 14 から、password_encryption データベースパラメーターのデフォルト値は scram-sha-256 に設定されます。そのため、この PostgreSQL バージョンからのデフォルトの認証方法は scram-sha-256 です。

PostgreSQL 13 以前では、デフォルトの認証方法として md5 を使用します。

結果の pg_hba.conf は次のようになります。

```
local all all peer

hostssl postgres streaming_replica all cert
hostssl replication streaming_replica all cert

<user defined rules>
<user defined LDAP>

host all all all scram-sha-256 # (or md5 for PostgreSQL version <= 13)
```

クラスターマニフェスト内では、次の抜粋にあるように、pg_hba 行が.spec.postgresql.pg_hba のリスト項目として追加されます。

```
postgresql:
  pg_hba:
    - hostssl app app 10.244.0.0/16 md5
```

上記の例では、安全なチャネル hostssl を介して MD5 パスワード認証必要に応じて scram-sha-256 を使用して、app ユーザーの app データベースへのアクセスを有効にしています。

24.2.1 LDAP 構成

クラスター仕様の postgres セクションの下には、pg_hba.conf ファイルに追加されるルールに変換する LDAP 構成を定義するオプションの ldap セクションがあります。

これは、2 つのモードをサポートします。LDAP セクションで server 、prefix 、および suffix を指定する必要がある simple bind モードと、 server 、baseDN 、binDN 、および ldap パスワードを含むシークレットである bindPassword を指定する必要がある search+bind モード。さらに、 search+bind モードでは、 searchFilter または searchAttribute を指定するオプションがあります。 searchAttribute が指定されていない場合、 uid のデフォルトの 14 が使用されます。

さらに、両方のモードで、 ldapscheme の scheme と port の指定ができます。ただし、スキームもポートも必要ありません。

search+bind のために入力されたこのセクションは次のようになります。

```
postgresql:
  ldap:
    server: "openldap.default.svc.cluster.local"
    bindSearchAuth:
      baseDN: "ou=org,dc=example,dc=com"
      bindDN: "cn=admin,dc=example,dc=com"
      bindPassword:
        name: "ldapBindPassword"
        key: "data"
      searchAttribute: "uid"
```

24.3 pg_ident セクション

pg_ident は、CloudNativePG がデータディレクトリ内の ident マップファイル pg_ident.conf と呼ばれるを生成および維持するために使用する PostgreSQL ユーザー名マップのリストです。

重要: *more information on `pg_ident.conf* <https://www.postgresql.org/docs/current/auth-username-maps.html>`_ については、PostgreSQL ドキュメントを参照してください。

オペレーターが書き込んだ pg_ident.conf ファイルは、次の 2 つのセクションで構成されています。

1. 固定ルール
2. ユーザー定義のルール

現在、オペレーターによって自動的に生成される唯一の固定ルールは次のとおりです。

```
local <postgres system user> postgres
```

インスタンスマネージャーは、PostgreSQL インスタンスを実行しているユーザーを検出し、データベースの postgres ユーザーにマップするルールを自動的に追加します。

postgres ユーザーがコンテナ内で適切に構成されていない場合、インスタンスマネージャーはローカルユーザーの接続を許可し、次のような警告メッセージをログに記録します。

```
Unable to identify the current user. Falling back to insecure mapping.
```

結果の pg_ident.conf は次のようになります。

```
local <postgres system user> postgres

<user defined lines>
```

クラスターマニフェスト内で、 pg_ident 行が.spec.postgresql.pg_ident のリスト項目として追加されます。例

```
postgresql:
  pg_ident:
    - "mymap /^(.*)@mydomain\.com$ \1"
```

24.4 構成の変更

Cluster リソースの postgresql セクションを編集することにより、構成変更を適用できます。

変更後、クラスターインスタンスはすぐに構成をリロードして変更を適用します。変更に再起動が必要なパラメーターが含まれる場合、オペレーターはローリングアップグレードを実行します。

24.5 ALTER SYSTEM の有効化

CloudNativePG は、PostgreSQL クラスターの構成を変更するための排他的な方法として、クラスターマニフェストを使用することを強くお勧めします。このアプローチは、高可用性クラスター全体の一貫性を保証し、インフラストラクチャ・アズ・コードのベストプラクティスと連携しています。

CloudNativePG では、デフォルト構成により、新しい Postgres クラスターで ALTER SYSTEM の使用が無効になっています。この決定は、このコマンドに関連する潜在的なリスクの認識に基づいています。ALTER SYSTEM の使用を有効にするには、.spec.postgresql.enableAlterSystem を true に明示的に設定します。

警告: *ALTER SYSTEM* を利用するときは注意してください。このコマンドは、接続されたインスタンスで直接動作し、レプリケーションは行いません。 CloudNativePG は、特定の固定パラメーターに対する責任とその他の完全な制御を引き受け、注意深い検討の必要性を強調します。

PostgreSQL 17 以降、`.spec.postgresql.enableAlterSystem` 設定は allow_alter_system を直接制御します

— CloudNativePG によって PostgreSQL に直接提供された機能。

PostgreSQL 17 より前では、 `.spec.postgresql.enableAlterSystem` が `false` に設定されている場合、`postgresql.auto.conf` ファイルは読み取り専用になります。したがって、`ALTER SYSTEM` コマンドを実行しようとするとエラーになります。エラーメッセージは次のようになります。

```
ERROR:  could not open file "postgresql.auto.conf": Permission denied
```

24.6 動的共有メモリ設定

PostgreSQL は、dynamic_shared_memory_type を介した動的共有メモリ管理のいくつかの実装をサポートしています

構成オプション。CloudNativePG では、次の 2 つの値のいずれかに制限することをお勧めします。

- `posix` `shm_open` デフォルト設定を使用して割り当てられた POSIX 共有メモリに依存します
- `sysv` `shmget` を介して割り当てられた System V 共有メモリに基づいています

PostgreSQL では、この設定はパラレルクエリーでのメモリ割り当てにとって特に重要です。詳細は、*thread from the `pgsql-general* mailing list <https://www.postgresql.org/message-id/CA%2BhUKGJOj7qzDLxeFPVvto8YEWop6FSQoTYPO9Z6Ee%3Di-nPS_Q%40mail.gmail.com>`_ を参照してください。

24.6.1 POSIX 共有メモリ

オペレーターが/dev/shm の下に `shm` と呼ばれるメモリバインドの `EmptyDir` volume_を自動的にマウントすることを考慮すると、ほとんどの場合、`posix` のデフォルト設定で十分です。次の方法で、実行中の Postgres コンテナ内のこのようなボリュームのサイズを確認できます。

```
mount | grep shm
```

次の出力のようなものを取得するはずです。

```
shm on /dev/shm type tmpfs (rw,nosuid,nodev,noexec,relatime,size= **** **)
```

`shm` ボリュームの最大サイズを設定する場合は、`Cluster` リソースの `.spec.ephemeralVolumesSizeLimit.shm` フィールドを設定することにより設定できます。例

```
spec:
  ephemeralVolumesSizeLimit:
    shm: 1Gi
```

24.6.2 System V 共有メモリ

Kubernetes クラスターの SHMMAX および SHMALL パラメーターの十分な値がある場合、次のことを設定することもできます。

```
dynamic_shared_memory_type: "sysv"
```

次のコマンドを実行して、PostgreSQL コンテナ内から SHMMAX /SHMALL を確認できます。

```
ipcs -lm
```

例

```
- ----- Shared Memory Limits --------
max number of segments = 4096
max seg size (kbytes) = 18014398509465599
max total shared memory (kbytes) = 18014398509481980
min seg size (bytes) = 1
```

ご覧のとおり、max total shared memory の数が非常に多いため、dynamic_shared_memory_type を sysv に設定することをお勧めします。

別の方法は次を実行することです。

```
cat /proc/sys/kernel/shmall
cat /proc/sys/kernel/shmmax
```

24.7 固定パラメーター

一部の PostgreSQL 構成パラメーターは、オペレーターが排他的に管理する必要があります。オペレーターは、ユーザーが Webhook を使用してそれらを設定できないようにします。

ユーザーは postgresql セクションで次の構成パラメーターを設定することはできません。

- allow_alter_system
- allow_system_table_mods
- archive_cleanup_command
- archive_command
- archive_mode

- bonjour
- bonjour_name
- cluster_name
- config_file
- data_directory
- data_sync_retry
- event_source
- external_pid_file
- hba_file
- hot_standby
- ident_file
- jit_provider
- listen_addresses
- log_destination
- log_directory
- log_file_mode
- log_filename
- log_rotation_age
- log_rotation_size
- log_truncate_on_rotation
- logging_collector
- port
- primary_conninfo
- primary_slot_name
- promote_trigger_file
- recovery_end_command
- recovery_min_apply_delay
- recovery_target
- recovery_target_action
- recovery_target_inclusive
- recovery_target_lsn

- recovery_target_name
- recovery_target_time
- recovery_target_timeline
- recovery_target_xid
- restart_after_crash
- restore_command
- shared_preload_libraries
- ssl
- ssl_ca_file
- ssl_cert_file
- ssl_crl_file
- ssl_dh_params_file
- ssl_ecdh_curve
- ssl_key_file
- ssl_passphrase_command
- ssl_passphrase_command_supports_reload
- ssl_prefer_server_ciphers
- stats_temp_directory
- synchronous_standby_names
- syslog_facility
- syslog_ident
- syslog_sequence_numbers
- syslog_split_messages
- unix_socket_directories
- unix_socket_group
- unix_socket_permissions

第25章　PostgreSQLロール管理

CloudNativePGは、当初から、PostgreSQLインスタンスで必要な特定のロールの作成を管理してきました。

- `postgres`スーパーユーザー、`streaming_replica`、`cnpg_pooler_pgbouncer`などの一部の予約済みユーザーPgBouncer `Pooler`を使用する場合
- アプリケーションデータベースの低特権の所有者として設定されたアプリケーションユーザー

このプロセスは、*Bootstrap*セクションで説明しています。

クラスター仕様の`managed`スタンザにより、CloudNativePGは`.spec.managed.roles`で指定されたロールの完全なライフサイクル管理を提供するようになりました。

この機能により、既存のロールの宣言的管理と、データベースにまだ存在しない場合は新しいロールの作成が可能になります。ロールの作成は、データベースのブートストラップが完了した後に発生します。

宣言的なロール管理を使用するクラスターのマニフェストの例は次のとおりです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-with-roles
spec:
  instances: 3
  storage:
    size: 1Gi

  managed:
    roles:
    - name: app
      createdb: true
      login: true
    - name: dante
      ensure: present
      comment: my database-side comment
      login: true
      superuser: false
      createdb: true
      createrole: false
      inherit: false
      replication: false
      bypassrls: false
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      connectionLimit: 4
      validUntil: "2053-04-12T15:04:05Z"
      inRoles:
        - pg_monitor
        - pg_signal_backend
      passwordSecret:
        name: cluster-example-dante
- --
apiVersion: v1
data:
  username: ZGFudGU=
  password: ZGFudGU=
kind: Secret
metadata:
  name: cluster-example-dante
type: kubernetes.io/basic-auth
```

次に、そのファイルからの抜粋を示します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
spec:
  managed:
    roles:
      - name: dante
        ensure: present
        comment: Dante Alighieri
        login: true
        superuser: false
        inRoles:
          - pg_monitor
          - pg_signal_backend
```

`.spec.managed.roles` のロール仕様は PostgreSQL structure and naming conventions に従います。ロールごとに定義できる属性の完全なリストについては、*API リファレンス* を参照してください。

いくつかの点に注意してください。

1. `ensure` 属性は PostgreSQL の **ではありません**。これにより、宣言的なロール管理でロールを作成および削除できます。2 つの値は、`present` デフォルトと `absent` です。
2. `inherit` 属性は、PostgreSQL の規則に従って、デフォルトで true です。
3. `connectionLimit` 属性は、PostgreSQL の規約に従って、デフォルトの-1 に設定されます。
4. `inRoles` のロールメンバーシップは、デフォルトでメンバーシップなしです。

宣言的ロール管理により、PostgreSQL インスタンスが仕様に準拠していることが保証されます。ユーザーがデータベースでロール属性を直接変更した場合、CloudNativePG オペレーターは、次の調整サイクル中

にこれらの変更を元に戻します。

25.1 パスワード管理

宣言的ロール管理機能には、ロールパスワードの調整が含まれます。パスワードは Kubernetes の世界と PostgreSQL では根本的に異なる方法で管理されており、その結果、いくつかの注意事項があります。

管理対象ロール構成は、オプションでユーザー名とパスワードが保存される**シークレット**の名前を指定できます。Kubernetes で通常のように Base64 でエンコードされます。例

```
managed:
  roles:
  - name: dante
    ensure: present
    [··· snipped ···]
    passwordSecret:
      name: cluster-example-dante
```

これは、ユーザー名とパスワードを含む `cluster-example-dante` と呼ばれるシークレットの存在を前提としています。ユーザー名は、パスワードを設定しているロールと一致する必要があります。例

```
apiVersion: v1
data:
  username: ZGFudGU=
  password: ZGFudGU=
kind: Secret
metadata:
  name: cluster-example-dante
  labels:
    cnpg.io/reload: "true"
type: kubernetes.io/basic-auth
```

ロールに `passwordSecret` が指定されていない場合、インスタンスマネージャーはパスワードを使用してロールを作成/変更しようとしません。これは、`WITH PASSWORD` で指示されない限り、ALTER がパスワードを更新しない PostgreSQL 規約に従います。

ロールが最初にパスワードを使用して作成され、PostgreSQL でパスワードを NULL に設定したい場合、これは CloudNativePG のユーザー側で明示的にする必要があります。「仕様で提供されているパスワードなし」と「パスワードを NULL に設定する」を区別するには、フィールド `DisablePassword` を使用する必要があります。

データベースの `dante` ロールにパスワードを設定しないことにしたとします。このような場合、次を指定します。

```
managed:
  roles:
  - name: dante
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    ensure: present
    [··· snipped ···]
    disablePassword: true
```

注特定のロールで passwordSecret と disablePassword の両方を設定することはエラーとみなされます。この構成は、検証 Webhook によって拒否されます。

25.1.1 パスワードの有効期限 VALID UNTIL

PostgreSQL の VALID UNTIL ロール属性は、パスワードの有効期限を制御します。 VALID UNTIL を指定せずに作成されたロールは、PostgreSQL でデフォルトで NULL を取得します。これは、パスワードの有効期限が無期限であることを意味します。

PostgreSQL は、 VALID UNTIL のタイムスタンプタイプを使用します。これには、パスワードの有効期限が無期限であることを示す値'infinity' のサポートが含まれます。 PostgreSQL documentation を参照してください。

参考までに。

宣言的ロール管理では、管理対象ロールの validUntil 属性がパスワードの有効期限を制御します。validUntil は以下のみを取ることができます。

- Kubernetes タイムスタンプ、または
- 省略しますデフォルト null

最初のケースでは、指定された validUntil タイムスタンプは、ロールの VALID UNTIL 属性としてデータベースに設定されます。

2 番目のケース validUntil 省略オペレーターは、パスワードの有効期限が決してないことを保証し、PostgreSQL の動作をミラーリングします。具体的には

- 新しいロールの場合、ロール作成ステートメントの VALID UNTIL 句を省略します
- 既存のロールの場合、データベースで VALID UNTIL が NULL に設定されていない場合、VALID UNTIL を infinity に設定します。これは、PostgreSQL が ALTER ROLE SQL ステートメントで VALID UNTIL NULL を許可していないためです。

警告: *passwordSecret* を使用せずに作成された新しいロールは、PostgreSQL 内に `NULL` パスワードがあります。

25.1.2 パスワードがハッシュ化されました

MD5 / SCRAM-SHA-256 ハッシュ形式でパスワードを指定することにより、事前に暗号化されたパスワードを提供することもできます。

```
kind: Secret
type: kubernetes.io/basic-auth
metadata:
  name: cluster-example-cavalcanti
  labels:
    cnpg.io/reload: "true"
apiVersion: v1
stringData:
  username: cavalcanti
  password: SCRAM-SHA-256$<iteration count>:<salt>$<StoredKey>:<ServerKey>
```

25.2 実現不可能なロール構成

PostgreSQL では、場合によっては、コマンドはデータベースが受け入れられず、拒否されます。PostgreSQL documentation on error codes を参照してください。

詳細については。

ロール操作では、このような基本的なエラーが発生する可能性があります。2 つの例

- PostgreSQL に、ロールグループ `poets` のメンバーとしてロール `petrarca` を作成するように依頼しますが、`poets` は存在しません。
- PostgreSQL にロール `dante` を削除するように求めますが、ロール `dante` はデータベース `inferno` の所有者です。

これらの基本的なエラーは、人間の管理者の説明がない限り、データベースまたは CloudNativePG オペレーターによって修正できません。上記の 2 つの例は、それぞれロール `poets` を作成するか、データベース `inferno` を削除することにより修正できますが、それらは人的エラーが原因で発生した可能性があり、そのような場合、提案された「修正」は間違ったものである可能性があります。

CloudNativePG は、このような基本的なエラーが発生すると記録し、クラスターステータスに表示します。どちらが続くか…

25.3 管理対象ロールのステータス

クラスターステータスには、以下に示すように、管理対象ロールのステータスのセクションが含まれます。

```
status:
  [···snipped···]
  managedRolesStatus:
    byStatus:
      not-managed:
      - app
      pending-reconciliation:
      - dante
      - petrarca
      reconciled:
      - ariosto
      reserved:
      - postgres
      - streaming_replica
    cannotReconcile:
      dante:
      - could not perform DELETE on role dante: owner of database inferno
      petrarca:
      - could not perform UPDATE_MEMBERSHIPS on role petrarca: role "poets" does not␣
↪exist
```

データベースおよび CloudNativePG が受け入れられない操作、および人間の介入を必要とする操作用の特別なサブセクション cannotReconcile に注意してください。

このセクションでは、オペレーター使用のために予約されているロールと、宣言的管理の下ではない**ロールをカバーし、データベースインスタンスのロールの包括的なビューを提供します。

Kubectl プラグイン は、 status サブコマンドで管理対象ロールのステータスも表示します。

```
Managed roles status
Status                  Roles
- -----                   -----
pending-reconciliation  petrarca
reconciled              app,dante
reserved                postgres,streaming_replica

Irreconcilable roles
Role      Errors
- ---       ------
petrarca  could not perform UPDATE_MEMBERSHIPS on role petrarca: role "poets" does␣
↪not exist
```

重要: 下位互換性の観点から、宣言的ロール管理は、データベースには存在するが仕様に含まれていない

ロールを無視するように設計されています。これらのロールのライフサイクルは、引き続き PostgreSQL 内で管理されるため、CloudNativePG ユーザーは自分の都合に合わせてこの機能を採用できます。

第26章　PostgreSQLデータベース管理

CloudNativePG は、デフォルトで app という名前のアプリケーションデータベースを自動的に作成することにより、PostgreSQL データベースのプロビジョニングを簡素化します。このデフォルトの動作については、空のクラスターをブートストラップする `initdb <空のクラスターをブートストラップする *initdb*>` で説明しています

セクション。

より高度なユースケースのために、CloudNativePG は**宣言的データベース管理**を導入します。これにより、ユーザーは `Database` カスタムリソース定義 CRD を使用して PostgreSQL データベースのライフサイクルを定義および制御できます。この方法は Kubernetes とシームレスに統合し、PostgreSQL データベースを管理するためのスケーラブルで自動化された一貫したアプローチを提供します。

26.1 主要なコンセプト

26.1.1 管理範囲

重要: CloudNativePG は、データベース、ロール、テーブルスペースなどの PostgreSQL クラスターの**グローバルオブジェクト**を管理します。ただし、データベースのコンテンツスキーマやテーブルなどは管理しません。データベースのコンテンツには、専用のツールまたはアプリケーション自分自身を使用する必要があります。

26.1.2 宣言的な `Database` マニフェスト

次の例は、 `Database` リソースが `Cluster` とどのように相互作用するかを示しています。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Database
metadata:
  name: cluster-example-one
spec:
  name: one
  owner: app
  cluster:
    name: cluster-example
```

適用されると、このマニフェストは、 cluster-example PostgreSQL クラスター内の app ロールが所有する one という名前のデータベースを要求する cluster-example-one と呼ばれる Database オブジェクトを作成します。

注釈: *API リファレンス* を参照してください。

各 Database オブジェクトに定義できる属性の完全なリスト。

26.1.3 Database マニフェストの必須フィールド

- metadata.name 名前空間内の Kubernetes オブジェクトの一意の名前。
- spec.name PostgreSQL に表示されるデータベースの名前。
- spec.owner データベースを所有する PostgreSQL ロール。
- spec.cluster.name ターゲット PostgreSQL クラスターの名前。

Database オブジェクトは特定の Cluster を参照し、データベースを作成する場所を決定する必要があります。クラスターのプライマリインスタンスによって管理され、データベースが必要に応じて作成または更新されます。

注釈: *metadata.name* と `spec.name` の違いにより、複数の `Database` リソースは、同じ Kubernetes 名前空間内の異なる CloudNativePG クラスターにわたって同じ名前のデータベースを参照できます。

26.2 予約されたデータベース名

PostgreSQL は、 postgres 、 template0 、 template1 などのデータベースを自動的に作成します。これらの名前は予約されており、CloudNativePG の新しい Database オブジェクトに使用できません。

重要: *spec.name* を `postgres` 、 *template0* 、または `template1` に設定して `Database` を作成することはできません。

26.3 調整とステータス

Database オブジェクトが正常にリコンサイルされると、

- status.applied は true に設定されます。
- status.observedGeneration は、最後に適用された構成の metadata.generation と一致します。

リコンサイルされた Database オブジェクトの例

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Database
metadata:
  generation: 1
  name: cluster-example-one
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  name: one
  owner: app
status:
  observedGeneration: 1
  applied: true
```

リコンシリエーション中にエラーが発生した場合、status.applied は false になり、エラーメッセージは status.message フィールドに含まれます。

26.4 データベースの削除

CloudNativePG は、データベース削除の 2 つの方法をサポートしています。

1. delete 再利用ポリシーの使用
2. データベースの ensure フィールドを absent に宣言的に設定する

26.4.1 delete 再利用ポリシーを介した削除

databaseReclaimPolicy フィールドは、Database オブジェクトが削除されたときの動作を決定します。

- retain デフォルトデータベースは、手動管理のために PostgreSQL に残ります。
- delete データベースは PostgreSQL から自動的に削除されます。

例

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Database
metadata:
  name: cluster-example-two
spec:
  databaseReclaimPolicy: delete
  name: two
  owner: app
  cluster:
    name: cluster-example
```

この Database オブジェクトを削除すると、cluster-example クラスターから two データベースが自動的に削除されます。

26.4.2 ensure: absent の宣言的設定

データベースを削除するには、次の例のように ensure フィールドを absent に設定します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Database
metadata:
  name: cluster-example-database-to-drop
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  name: database-to-drop
  owner: app
  ensure: absent
```

このマニフェストは、 database-to-drop データベースが cluster-example クラスターから削除されることを保証します。

26.5 制限と注意事項

26.5.1 データベースの名前の変更

CloudNativePG は PostgreSQL の CREATE DATABASE および ALTER DATABASE に準拠していますが

コマンド、**データベースの名前の変更はサポートされていません**。既存の Database オブジェクトの spec.name を変更しようとすると、Kubernetes によって拒否されます。

26.5.2 データベースの作成と変更

- 新しいデータベースの場合、CloudNativePG は CREATE DATABASE ステートメントを使用します。
- 既存のデータベースの場合、ALTER DATABASE を使用して変更を適用します。

これら 2 つの Postgres コマンドにはいくつかの違いがあることに注意することが重要です。特に、ALTER によって受け入れられるオプションは、CREATE によって受け入れられるオプションのサブセットです。

> **警告:** エンコードや照合設定などの一部のフィールドは、PostgreSQL で不変です。既存のデータベースのこれらのフィールドを変更しようとすると、無視されます。

26.5.3 レプリカクラスター

レプリカには書き込み特権がないため、レプリカクラスターで宣言されたデータベースオブジェクトは適用できません。これらのオブジェクトは、レプリカが昇格するまで保留状態のままです。

26.5.4 競合の解決

同じ名前空間内の 2 つの `Database` オブジェクトが同じ PostgreSQL データベースつまり同一の `spec.name` および `spec.cluster.name` を管理している場合、2 番目のオブジェクトは拒否されます。

ステータスメッセージの例

```
status:
  applied: false
  message: reconciliation error: database "one" is already managed by Database object
↪"cluster-example-one"
```

26.5.5 Postgres バージョンの違い

CloudNativePG は、PostgreSQL の機能を遵守しています。たとえば、PostgreSQL 16 で導入された `ICU_RULES` のような機能は、以前のバージョンでは使用できません。PostgreSQL からのエラーは、`Database` オブジェクトの `status` に反映されます。

26.5.6 手動変更

CloudNativePG は、データベースへの手動変更を上書きしません。リコンサイルが完了すると、`Database` オブジェクトは、 `metadata.generation` が変更しない限り再適用されないため、PostgreSQL を直接変更するための柔軟性が得られます。

第27章　テーブルスペース

テーブルスペースは、データベース管理システムで堅牢で広く採用されている機能です。データの物理的および論理モデリングを分離することにより、データベースの垂直スケーラビリティを強化する強力な手段を提供します。基本的に、これは物理データベースモデリングの技術として機能し、個別のストレージ上のマルチプルのボリューム全体に I/O 操作を効率的に分散できます。これにより、並列ディスク上の読み取り/書き込み操作を介してパフォーマンスが最適化されます。

データベース業界のコンテキストでは、テーブルスペースは、特に論理データベースモデリング技術であるテーブルパーティショニングと組み合わせた場合、戦略的な役割を果たします。これらは大規模なデータベースの管理に役立つことが証明されており、インデックスからテーブルを分離したり、一時的な操作を実行したりするようなタスクにも使用されます。

PostgreSQL のテーブルスペースは、2005 バージョン 8.0 から重要な役割を果たしていますが、宣言的パーティショニングは 2017 バージョン 10 に導入されました。その結果、テーブルスペースは、サポートされている PostgreSQL のすべてのリリースにシームレスに統合されています。*PostgreSQL documentation on tablespaces* からの引用

> テーブルスペースを使用することにより、管理者は PostgreSQL インストールのディスクレイアウトを制御できます。これは、少なくとも 2 つの方法で役立ちます。> > - まず、クラスターが初期化されたパーティションまたはボリュームが領域不足で実行され、拡張できない場合、別のパーティションにテーブルスペースを作成し、システムが再構成できるまで使用できます。> - 第二に、テーブルスペースにより、管理者はデータベースオブジェクトの使用パターンに関する知識を使用して、パフォーマンスを最適化できます。

27.1 宣言的テーブルスペース

CloudNativePG は、2 つの異なるレベルで動作する_declarative tablespaces_を介して PostgreSQL テーブルスペースのサポートを提供します。

- Kubernetes、PGDATA および WAL ボリュームが処理される方法と同じように、永続ボリューム要求を管理します
- PostgreSQL、 PostgreSQL インスタンスで `TABLESPACE` グローバルオブジェクトを管理する

Kubernetes エコシステムの一部である CloudNativePG の宣言的テーブルスペースは、永続ボリューム要求および永続ボリュームを活用して実装されます。クラスターで定義された各テーブルスペースは、独自の永続ボリュームに格納されます。CloudNativePG は、PVC の生成を担当します。正規化された場所のインスタンスポッドに必要なボリュームをマウントし、プライマリでアクティブにする前にレプリカがテーブルスペースをサポートする準備ができていることを確認します。

要求されたときにストレージが利用可能な場合、クラスターの作成時にテーブルスペースを設定するか、後で追加できます。現在、それらを削除することはできません。ただし、この制限は CloudNativePG の将来のマイナーまたはパッチバージョンで対応される予定です。

27.2 宣言的テーブルスペースの使用

宣言的テーブルスペースの使用は簡単です。完全な例は次のとおりです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-with-tablespaces
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi

  tablespaces:
    - name: atablespace
      storage:
        size: 1Gi
        storageClass: standard
      temporary: true
    - name: another_tablespace
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
      temporary: true
    - name: tablespacea1
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
```

。

これらを使用するには、新しいまたは既存の `Cluster` リソースで新しい `tablespaces` スタンザを使用します。

```
spec:
  instances: 3

  # ...

  tablespaces:
    - name: tbs1
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      storage:
        size: 1Gi
    - name: tbs2
      storage:
        size: 2Gi
    - name: tbs3
      storage:
        size: 2Gi
```

各テーブルスペースには、生成された PVC のサイズとストレージクラスを構成できる独自のストレージセクションがあります。したがって、管理者は、ストレージクラスとテーブルスペース で説明しているように、さまざまな種類のワークロードに異なるストレージクラスの使用を計画できます。

CloudNativePG は、高可用性 Postgres クラスター内の各インスタンスの永続ボリューム要求を作成します。プロビジョニングが完了すると、各ポッドにマウントします。次に、`CREATE TABLESPACE` コマンドを使用してプライマリ PostgreSQL インスタンスに `tbs1` 、`tbs2` 、および `tbs3` 表領域が作成されることを確認します。このプロセスは迅速で、これは Postgres に反映されます。

```
app=# SELECT oid, spcname FROM pg_tablespace;
  oid  |      spcname
- ------+--------------------
  1663 | pg_default
  1664 | pg_global
 16387 | tbs1
 16388 | tbs2
 16389 | tbs3
(5 rows)
```

すぐに使用を開始できます。

```
app=# CREATE TABLE fibonacci(num INTEGER) TABLESPACE tbs1;
CREATE TABLE
```

クラスターステータスには、テーブルスペースのセクションがあります。

```
status:

  <- snipped ->
  tablespacesStatus:
  - name: atablespace
    state: reconciled
  - name: another_tablespace
    state: reconciled
  - name: tablespacea1
    state: reconciled
```

27.3 ストレージクラスとテーブルスペース

PGDATA および WAL ボリュームと同じように、テーブルスペースにさまざまなストレージクラスを使用できます。これは、リソースを最適化し、データアクセスの使用量と予想に基づいてストレージのパフォーマンスとコストのバランスを保つ便利な方法です。

この例は、機能を説明するのに役立ちます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: yardbirds
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 10Gi
  walStorage:
    size: 10Gi
  tablespaces:
    - name: current
      size: 100Gi
      storageClass: fastest
    - name: this_year
      size: 500Gi
      storageClass: balanced
```

yardbirds クラスター例は、3 つの異なるストレージクラスを使用して 4 つの永続ボリューム要求を要求します。

- デフォルトのストレージクラス – PGDATA および WAL ボリュームによって使用されます。
- fastest – current テーブルスペースによって使用され、データベースで最もアクティブで要求の高いデータセットを保存します。
- balanced – this_year 表領域によって使用され、ユーザーがほとんどアクセスせず、パフォーマンスの期待が最も高くないデータの古いパーティションを保存します。

次に、ホリゾンタルテーブルパーティショニングを利用して、current 表領域に当月のテーブル 2023 年 12 月のファクトなどを作成できます。

```
CREATE TABLE facts_202312 PARTITION OF facts
    FOR VALUES FROM (2023-12-01) TO (2024-01-01)
    TABLESPACE current;
```

重要: この例では、 PostgreSQL declarative partitioning に精通していることを前提としています。

27.4 テーブルスペースの所有権

デフォルトでは、特に指定しない限り、表領域は.spec.bootstrap.initdb.owner で定義されているように、app アプリケーションユーザーが所有します。詳細は、*Bootstrap a new cluster* を参照してください。このデフォルトの動作は、ほとんどのマイクロサービスデータベースのユースケースで動作します。

次の抜粋のように、 owner スタンザで表領域の所有者、たとえば postgres ユーザーを設定できます。

```
#  ...

tablespaces:
  - name: clapton
    owner:
      name: postgres
    storage:
      size: 1Gi
```

重要: 表領域の所有権を変更する場合は、既存のロールを使用していることを確認します。それ以外の場合、クラスターのステータスが問題を報告し、修正されるまでテーブルスペースのリコンサイルを停止します。ステータスとログを監視し、問題を修正して迅速に介入するのはあなたの責任です。

存在しない所有者でテーブルスペースを定義すると、CloudNativePG はテーブルスペースを作成できず、これをクラスターステータスに反映します。

```
spec:
  instances: 3

  # ...

  tablespaces:
    - name: tbs1
      storage:
        size: 1Gi
    - name: tbs2
      storage:
        size: 2Gi
    - name: tbs3
      owner:
        name: badhombre
      storage:
        size: 2Gi
        status:

  <- snipped ->
  tablespacesStatus:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  - name: tbs1
    status: reconciled
  - name: tbs2
    status: reconciled
  - error: while creating tablespace tbs3: ERROR: role "badhombre" does
      not exist (SQLSTATE 42704)
    name: tbs3
    status: pending
```

27.5 バックアップ リカバリー

CloudNativePG は、オブジェクトストアとボリュームスナップショットの両方でテーブルスペースおよび相対テーブルスペースマップのバックアップを処理します。

警告: デフォルトでは、バックアップはレプリカノードから取得されます。クラスターで表領域を作成した直後にバックアップを作成すると、レプリカからの表領域の不完全なビュー、したがって不完全なバックアップが生成される場合があります。遅延は、次の調整で最大 5 分で解決されます。

テーブルスペースを含むクラスターにベースバックアップがあると、そこから新しいクラスターを復元できます。復旧側については、復旧したデータベースの `Cluster` 定義に表領域の正確なリストが含まれていることを確認するのは自分の責任です。

27.6 レプリカクラスター

レプリカクラスターには、オリジンと同じ表領域定義が必要です。その理由は、`CREATE TABLESPACE` のようなテーブルスペース管理コマンドは WAL ログに記録され、物理レプリケーションクライアントストリーミングまたは WAL シッピング経由で再生されるためです。

レプリカクラスターに同じ名前のテーブルスペースの同じリストがあることを確認するのはあなたの責任です。ストレージクラスとサイズは異なる場合があります。

例

```
spec:
  # ...
  bootstrap:
    recovery:
      # ... your selected recovery method

  tablespaces:
    - name: tbs1
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    storage:
      size: 1Gi
  - name: tbs2
    storage:
      size: 2Gi
  - name: tbs3
    storage:
      size: 2Gi
```

27.7 一時テーブルスペース

PostgreSQL では、1 つ以上の一時表領域を定義して、CREATE コマンドが明示的に表領域を指定しない場合に、一時オブジェクト一時テーブルと一時テーブルのインデックスを作成したり、大規模なデータセットのソートなどの目的で一時ファイルを作成したりできます。一時表領域が指定されない場合、PostgreSQL は、現在メインの PGDATA ボリュームであるデータベースのデフォルトの表領域を使用します。

複数の一時テーブルスペースを指定すると、PostgreSQL は、トランザクションで最初に一時オブジェクトを作成する必要があるときにランダムに 1 つを選択します。次に、リストを順番に反復します。

一時テーブルスペースは、バックアップに関して通常のテーブルスペースと同様に動作します。

CloudNativePG は、 `.spec.tablespaces[*].temporary` オプションを提供して、テーブルスペースを `temp_tablespaces` PostgreSQL パラメーターに追加し、明示的なテーブルスペースの割り当てがない一時データを保存できるかどうかを決定します。

```
spec:
  [...]
  tablespaces:
    - name: atablespace
      storage:
        size: 1Gi
      temporary: true
```

これらは初期化時に作成するか、後で追加できますが、ローリング更新が必要です。`temporary: true/false` オプションは、 `temp_tablespaces` オプションの表領域のリストに表領域名を追加または削除します。この変更では、PostgreSQL の再起動は必要ありません。

一時表領域は通常の表領域として機能することもできますが、ユーザーが一時的な操作に使用しながら通常のデータをホストすることもできますが、2 つのワークロードを混合しないことをお勧めします。

*PostgreSQL documentation on `temp_tablespaces* <https://www.postgresql.org/docs/current/runtime-config-client.html#GUC-TEMP-TABLESPACES>`_ を参照してください。

詳細については。

27.8 kubectl プラグインのサポート

kubectl status プラグインには、表領域のステータス、所有者、一時フラグ、エラーなどの便利な概要を提供する表領域専用のセクションが含まれています。

```
[...]

Tablespaces status
Tablespace          Owner  Status      Temporary  Error
- ---------          -----  ------      ---------  -----
atablespace         app    reconciled  true
another_tablespace  app    reconciled  true
tablespacea1        app    reconciled  false

Instances status
[...]
```

27.9 制限事項

現在、既存の CloudNativePG クラスターからテーブルスペースを削除することはできません。

第28章　オペレーター設定

CloudNativePG のオペレーターは、標準の展開マニフェストからインストールされ、構成パラダイムの規則に従います。ほとんどの場合、これで問題ありませんが、次のようなデフォルトの動作を変更する必要があるシナリオもあります。

- オペレーターが作成し、クラスターリソースに設定されているすべてのリソースに継承されるアノテーションとラベルの定義
- PostgreSQL の別のデフォルトイメージまたは追加のプルシークレットを定義

デフォルトでは、オペレーターは `cnpg-controller-manager` と呼ばれる Kubernetes `Deployment` として `cnpg-system` 名前空間にインストールされます。

注釈: 以下の例では、オペレーター展開のデフォルトの名前と名前空間を想定しています。

オペレーターの動作は、オペレーター展開と同じ名前空間にあり、名前が `cnpg-controller-manager-config` を持つ `ConfigMap` /`Secret` を介してカスタマイズできます。

重要: 構成の `ConfigMap` /*Secret* への変更は、オペレーターによって自動的に検出されません。そのため、リロードする必要があります以下を参照してください。さらに、変更は、構成がリロードされた後に作成されたリソースにのみ適用されます。

重要: オペレーターは、最初に ConfigMap 値を処理し、次に Secret をこの順序で処理します。その結果、パラメーターが両方の場所で定義されている場合、シークレットにあるものが使用されます。

28.1 使用可能なオプション

オペレーターは、 `ConfigMap` /`Secret` で定義される次の環境変数を探します。

Name	Description
CERTIFICATE_DURATION	生成された証明書の有効期間を日単位で示します。デフォルト 90 です。

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

Name	Description
CLUSTERS_ROLLOUT_DELAY	オペレーターのアップグレード中にさまざまなクラスターのロールアウトの間で待機する時間秒単位。この設定は、クラスター全体でアップグレードのタイミングを制御し、アップグレードを分散してシステムへの影響を軽減します。デフォルト値は `0`で、PostgreSQL クラスターのアップグレードの間に遅延がないことを意味します。
CREATE_ANY_SERVICE	*true* `に設定すると、クラスターの-any`サービスを作成します。デフォルトは `false`です
ENABLE_AZURE_PVC_UPDATES	PVC がサイズ変更状態でスタックしている場合、Postgres ポッドを削除できます。この機能は、主に Azure 環境デフォルト `false`
ENABLE_INSTANCE_MANAGER_INPL	*true* `に設定すると、オペレーターの更新後にインスタンスマネージャーのインプレース更新が有効になり、クラスターのローリング更新が回避されますデフォルト` *false*
EXPIRING_CHECK_THRESHOLD	証明書の有効期限が間もなく識別されるためのしきい値を日単位で決定します。デフォルト 7 です。
INCLUDE_PLUGINS	クラスターの調整に常に含まれるプラグインのコンマ区切りリスト。
INHERITED_ANNOTATIONS	`Cluster`メタデータで定義されている場合、ポッドを含む生成されたすべてのリソースに継承されるアノテーション名のリスト
INHERITED_LABELS	`Cluster`メタデータで定義されている場合、ポッドを含む生成されたすべてのリソースに継承されるラベル名のリスト
INSTANCES_ROLLOUT_DELAY	オペレーターのアップグレード中に、同じクラスター内の個々の PostgreSQL インスタンスのロールアウトの間で待機する時間秒単位。デフォルト値は `0`で、同じ PostgreSQL クラスター内のインスタンスのアップグレードの間に遅延がないことを意味します。
MONITORING_QUERIES_CONFIGMAP	作成されるすべてのクラスターに適用されるデフォルトのクエリー `queries`の下で指定されるオペレーターの名前空間の ConfigMap の名前
MONITORING_QUERIES_SECRET	作成されるすべてのクラスターに適用されるデフォルトのクエリー `queries`の下で指定されるオペレーターの名前空間のシークレットの名前
PULL_SECRET_NAME	オペレーターの名前空間で定義され、イメージのダウンロードに使用される追加のプルシークレットの名前

`INHERITED_ANNOTATIONS` および `INHERITED_LABELS` の値は、パスのようなワイルドカードをサポートしています。たとえば、値 `example.com/*` は、値 `example.com/one` および `example.com/two` の両方と一致します。

`PULL_SECRET_NAME` パラメーターを使用して追加のプルシークレット名を指定すると、オペレーターはそのシークレットを使用して、作成されたすべての PostgreSQL クラスターのプルシークレットを作成します。そのシークレットの名前は`<cluster-name>-pull` になります。

オペレーターが `PULL_SECRET_NAME` シークレットを検索する名前空間は、オペレーターをインストールした場所です。オペレーターがそのシークレットを見つけることができない場合、構成パラメーターは無視

されます。

28.2 オペレーター構成マップの定義

次の例では、後でデプロイされる Cluster オブジェクトによって作成されたリソースが継承するラベル/アノテーション名を定義し、*in-place updates for the instancemanager* を有効にして、アップグレードを分散することにより、オペレーターの動作をカスタマイズします。

```
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
  name: cnpg-controller-manager-config
  namespace: cnpg-system
data:
  CLUSTERS_ROLLOUT_DELAY: "60"
  ENABLE_INSTANCE_MANAGER_INPLACE_UPDATES: "true"
  INHERITED_ANNOTATIONS: categories
  INHERITED_LABELS: environment, workload, app
  INSTANCES_ROLLOUT_DELAY: "10"
```

28.3 オペレーターシークレットの定義

次の例では、後でデプロイされる Cluster オブジェクトによって作成されたリソースが継承するラベル/アノテーション名を定義し、*in-place updates for the instancemanager* を有効にして、アップグレードを分散することにより、オペレーターの動作をカスタマイズします。

```
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: cnpg-controller-manager-config
  namespace: cnpg-system
type: Opaque
stringData:
  CLUSTERS_ROLLOUT_DELAY: "60"
  ENABLE_INSTANCE_MANAGER_INPLACE_UPDATES: "true"
  INHERITED_ANNOTATIONS: categories
  INHERITED_LABELS: environment, workload, app
  INSTANCES_ROLLOUT_DELAY: "10"
```

28.4 オペレーターを再起動して構成をリロードする

変更を有効にするには、オペレーターポッドを再作成して構成マップをリロードする必要があります。マニフェストを使用して Kubernetes にオペレーターをインストールしている場合、次のコマンドを発行してそれを行うことができます。

```
kubectl rollout restart deployment \
    -n cnpg-system \
    cnpg-controller-manager
```

通常、特定の名前空間を指定すると、次のコマンドでオペレーターポッドを削除できます。

```
kubectl delete pods -n [NAMESPACE_NAME_HERE] \
  -l app.kubernetes.io/name=cloudnative-pg
```

警告: カスタマイズは、オペレーター展開のリロード後に作成される `Cluster` リソースにのみ適用されます。

上記の例に従って、 `Cluster` 定義に `categories` アノテーションと `environment` 、 `workload` 、または `app` ラベルのいずれかが含まれている場合、これらはデプロイメントによって生成されたすべてのリソースに継承されます。

28.5 pprof HTTP Server

オペレーターは、`localhost:6060` の次のエンドポイントで PPROF HTTP サーバーを公開できます。

- `/debug/pprof/` . 使用可能なプロファイルをリストする HTML ページで「/debug/pprof/」の要求に応答します
- `/debug/pprof/cmdline` . 実行中のプログラムのコマンドラインに、NULL バイトで区切られた引数を使用して応答します。
- `/debug/pprof/profile` . pprof 形式の cpu プロファイルで応答します。プロファイリングは、GET パラメーターで指定された期間、または指定しない場合は 30 秒間持続します。
- `/debug/pprof/symbol` . 要求にリストされているプログラムカウンターを検索し、プログラムカウンターをファンクション名にマッピングするテーブルで応答します。
- `/debug/pprof/trace` . バイナリ形式の実行トレースで応答します。トレースは、秒 GET パラメーターで指定された期間、または指定しない場合は 1 秒間持続します。

オペレーターを有効にするには、オペレーター展開を編集し、フラグ `--pprof-server=true` を追加する必要があります。

これは、次のコマンドを実行して行うことができます。

```
kubectl edit deployment -n cnpg-system cnpg-controller-manager
```

次に、この例のように、編集ページでコンテナ引数を下にスクロールし、--pprof-server=true を追加します。

```
containers:
  - args:
      - controller
      - --enable-leader-election
      - --config-map-name=cnpg-controller-manager-config
      - --secret-name=cnpg-controller-manager-config
      - --log-level=info
      - --pprof-server=true # relevant line
    command:
      - /manager
```

変更を保存します。ここでの展開ではロールアウトが実行され、新しいポッドでは PPROF サーバーが有効になります。

ポッドが実行されたら、次の方法でコンテナ内で実行できます。

```
kubectl exec -ti -n cnpg-system <pod name> -- bash
```

内部に入ったら、次を実行します。

```
curl localhost:6060/debug/pprof/
```

第29章　インスタンスポッド構成

29.1 予測される量

CloudNativePG は、 `.spec.projectedVolumeTemplate` を介して Postgres ポッド内のカスタムファイルのマウントをサポートしています。この機能は、追加のデータファイルを必要とするいくつかの Postgres 機能と拡張機能に役立ちます。CloudNativePG では、`.spec.projectedVolumeTemplate` フィールドは projected volume

Postgres ポッドの`/projected` フォルダーの下に任意のデータをマウントできる Kubernetes のテンプレート。

この単純な例は、既存の TLS シークレット `sample-secret` 名前付けをファイルとして Postgres ポッドにマウントする方法を示しています。`sample-secret` の秘密キー `tls.crt` および `tls.key` の値は、Postgres ポッドのパス`/projected/certificate/tls.crt` および`/projected/certificate/tls.key` にファイルとしてマウントされます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-projected-volumes
spec:
  instances: 3
  projectedVolumeTemplate:
    sources:
      - secret:
          name: sample-secret
          items:
            - key: tls.crt
              path: certificate/tls.crt
            - key: tls.key
              path: certificate/tls.key
  storage:
    size: 1Gi
```

投影されたボリュームテンプレートを使用して、展開マニフェストにシークレットと ConfigMap をマウントする完全な例を見つけることができます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-projected-volume
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
spec:
  instances: 3
  projectedVolumeTemplate:
    sources:
      - secret:
          name: sample-secret
          items:
            - key: tls.crt
              path: certificate/tls.crt
            - key: tls.key
              path: certificate/tls.key
      - configMap:
          name: sample-configmap
          items:
            - key: key1
              path: config/key1
            - key: key2
              path: config/key2
  storage:
    size: 1Gi

- --
apiVersion: v1
data:
  tls.crt:␣
↪LS0tLS1CRUdJTiBDRVJUSUZJQ0FURS0tLS0tCk1JSUNqekNDQWVXZ0F3SUJBZ0lRSHVDY2lKcDVkZis0dHZBcDBrTk9rekFLQmdr
  tls.key:␣
↪LS0tLS1CRUdJTiBFQyBQUklWQVRFIEtFWS0tLS0tCk1IY0NBUUVFSUtucWxVQjFqU2sxWW5VZzAyb0tGbXlRdDJLUEZwaFc0K1lm
kind: Secret
metadata:
  name: sample-secret
type: kubernetes.io/tls
- --
apiVersion: v1
data:
  key1: value1
  key2: value2
  key3: value3
kind: ConfigMap
metadata:
  name: sample-configmap
```

29.2 エフェメラルボリューム

CloudNativePG は ephemeral volumes に依存しています

社内活動の一部。一時ボリュームは、ポッドの存続期間が唯一の期間存在し、ポッドが再起動されても持続しません。

29.2.1 一時ストレージのボリューム要求テンプレート

オペレーターはデフォルトで emptyDir ボリュームを使用しますが、.spec.ephemeralVolumesSizeLimit field を使用してカスタマイズできます。これは、.spec.ephemeralVolumeSource フィールドでボリューム要求テンプレートを指定することにより、オーバーライドできます。

次の例では、1Gi エフェメラルボリュームが設定されます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-ephemeral-volume-source
spec:
  instances: 3
  ephemeralVolumeSource:
    volumeClaimTemplate:
      spec:
        accessModes: ["ReadWriteOnce"]
        # example storageClassName, replace with one existing in your Kubernetes␣
↪cluster
        storageClassName: "scratch-storage-class"
        resources:
          requests:
            storage: 1Gi
```

.spec.emphemeralVolumeSource と .spec.ephemeralVolumesSizeLimit.temporaryData は同時に指定できません。

29.2.2 共有メモリのボリューム

このボリュームは、Postgres の共有メモリ領域として、およびエフェメラルタイプとして使用されますが、メモリに保存されます。クラスター仕様の.spec.ephemeralVolumesSizeLimit.shm フィールドを使用して、サイズの上限を構成できます。このフィールドは、PostgreSQL running with `posix shared memory dynamic allocation <PostgreSQL の構成>` の場合にのみ使用します。

29.3 環境変数

環境変数を使用して、一部のシステム動作をカスタマイズできます。一例は、カスタム LDAP 構成ファイルをポイントできる LDAPCONF 変数です。別の例は、PostgreSQL コンテナが使用するタイムゾーンを表す TZ 環境変数です。

CloudNativePG では、クラスター仕様の env および envFrom スタンザを使用して、カスタム環境変数を設定できます。

この例では、デフォルトのクラスターレベルのタイムゾーンとして Australia/Sydney タイムゾーンを使用して PostgreSQL クラスターを定義します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  env:
    - name: TZ
      value: Australia/Sydney

  storage:
    size: 1Gi
```

envFrom スタンザは、ConfigMap またはシークレットを参照して、コンテンツを環境変数として使用できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  envFrom:
    - configMapRef:
        name: config-map-name
    - secretRef:
        name: secret-name

  storage:
    size: 1Gi
```

オペレーターは、次の環境変数を設定することを許可していません。

- POD_NAME

- NAMESPACE
- 名前が PG で始まる環境変数。

env または envFrom セクションを変更すると、PostgreSQL ポッドのローリング更新がトリガーされます。

env または envFrom セクションがシークレットまたは ConfigMap を参照している場合、オペレーターはそれらの変更を検出せず、ロールアウトをトリガーしません。kubelet はポッドと同じ動作を使用するため、ポッドのロールアウトを手動でトリガーする必要があります。

第30章　ストレージ

ストレージは、データベースワークロードで最も重要なコンポーネントです。ストレージは常に利用でき、スケーリング、パフォーマンスが良く、一貫性と耐久性を保証する必要があります。仮想マシンやベアメタルなどの従来の環境に適用されるのと同じ期待と要件は、Kubernetes によって管理されるコンテナコンテキストでも有効です。

重要: 動的にプロビジョニングされるストレージに関しては、Kubernetes に独自の詳細があります。これらには、_ストレージクラス_、_永続ボリューム_、および_永続ボリューム要求 PVCs_が含まれます。 VM および物理サーバー上のデータベースワークロードのストレージの観点から、長年構築してきた貴重な知識に加えて、これらの概念を所有する必要があります。

ストレージへのアクセスには、主に 2 つの方法があります。

- **ネットワーク** – 直接または間接的に。(Kubernetes を実行しているホストにローカルにマウントされた NFS ボリュームを考えます。)
- **ローカル** – ポッドが実行されているノードに直接接続されます。これには、Kubernetes のベアメタルインストールに直接接続されたディスクも含まれます。

Kubernetes で最も一般的な使用パターンであるネットワークストレージは、従来の環境で経験する可能性のあるスループットとレイテンシと同じ問題を示します。これらの問題は、複数のアプリケーションとの I/O 競合によりパフォーマンス結果のばらつきが増加する共有環境では強調される可能性があります。

ローカルストレージは、シェアードナッシングアーキテクチャを有効にします。これは、より高く予測可能なパフォーマンスを保証するため、高トランザクションで非常に大規模なデータベース VLDB ワークロードに適しています。

> **警告:** CloudNativePG で PostgreSQL クラスターを展開する前に、使用しているストレージがデータベースワークロードに推奨されていることを確認してください。 fio などのツールを使用してストレージをベンチマークし、パフォーマンスの期待値を明確に設定することをお勧めします

次に、 pgbench を使用したデータベース。

注釈: CloudNativePG は、データの永続性の管理に `StatefulSet` を使用しません。むしろ、PVC を直接管理します。詳細については、 **カスタムポッドコントローラ** を参照してください。

30.1 バックアップ リカバリー

CloudNativePG は、バックアップとリカバリーの両方のボリュームスナップショットをサポートしているため、ストレージソリューションを選択するときに、特に非常に大規模なデータベースを管理する場合、この側面も考慮することをお勧めします。

重要: サポートされているすべてのサービスのリストについては、Kubernetes ドキュメントを参照してください container storage interface (CSI) drivers

---

スナップショット機能を提供します。

30.2 CloudNativePG のベンチマーク

データベースを実稼働環境に展開する前に、制御された Kubernetes 環境で CloudNativePG のベンチマークを行うことをお勧めします。ベンチマーク のガイドラインに従ってください。

手短に言うと、2 つのレベルで動作することをお勧めします。

- シークエンシャル読み取り、シークエンシャル書き込み、ランダム読み取り、ランダム書き込みのスループットなど、データベースワークロードの関連メトリックを使用して、fio を使用して基になるストレージのパフォーマンスを測定する
- PostgreSQL で配布されるデフォルトのベンチマークツール、pgbench を使用してデータベースのパフォーマンスを測定する

重要: データベースを本番環境に配置する前に、ストレージとデータベースのパフォーマンスの両方を測定する必要があります。これらの結果は、計画段階たとえば、キャパシティプランニングなどにおいてだけでなく、非常に価値があります。また、実稼働ライフサイクル、特にこの種のテストを実行する時間がない緊急事態においても貴重です。データベースは時間の経過とともに変更および進化し、データの分散も同様に、パフォーマンスに影響を与える可能性があります。シークエンシャルな読み取りまたは書き込みの理論的な最大スループットを知ることは、これらの状況において非常に役立ちます。これは、外部ワークロードの影響によって結果が変化しないシェアードナッシングコンテキストに特に当てはまります。

自分のシステムを知り、ベンチマークします。

30.3 保存時の暗号化

CloudNativePG では、保存時の暗号化が可能です。オペレーターは、それを基になるストレージクラスに委任します。この重要なセキュリティ機能の詳細については、ストレージクラスを参照してください。

30.4 Persistent Volume Claim Claim PVC

オペレーターは、PGDATA を保存することを目的に、各 PostgreSQL インスタンスの PVC を作成します。次に、それを各ポッドにマウントします。

さらに、次のクラスターの作成をサポートしています。

- *WAL のボリューム* で説明しているように、PostgreSQL WAL を保存する別の PVC
- TablespaceState {postgresql-cnpg-io-v1-TablespaceState} で説明しているように、PostgreSQL テーブルスペース用に予約された追加の個別ボリューム

CloudNativePG では、単一の PostgreSQL インスタンスに接続されたボリュームは_PVC group_として定義されます。

30.5 ストレージクラスを介した構成

重要: CloudNativePG は、すべてのストレージクラスと互換的に動作するように設計されました。いつものように、運用に展開する前に、制御された環境でストレージクラスを適切にベンチマークすることをお勧めします。

PostgreSQL クラスのストレージを構成する最も簡単な方法は、次の例のように、特定のサイズのストレージを要求することです。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-storage-class
spec:
  instances: 3
  storage:
    size: 1Gi
```

前の構成を使用すると、生成された PVC はデフォルトのストレージクラスで満たされます。ターゲット Kubernetes クラスターにデフォルトのストレージクラスがない場合、または既知のストレージクラスで PVC を満たす必要がある場合でも、カスタムリソースに設定できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-storage-class
spec:
  instances: 3
  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi
```

30.6 PVC テンプレートを介した構成

生成された PVC をさらにカスタマイズするには、次の例のように、カスタムリソース内に PVC テンプレートを提供できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-pvc-template
spec:
  instances: 3

  storage:
    pvcTemplate:
      accessModes:
        - ReadWriteOnce
      resources:
        requests:
          storage: 1Gi
      storageClassName: standard
      volumeMode: Filesystem
```

30.7 WAL のボリューム

デフォルトでは、PostgreSQL はすべてのデータをいわゆる PGDATA ディレクトリに保存します。 PGDATA 内のコアディレクトリの 1 つが pg_wal で、これには、データベースで発生したトランザクション変更のログがセグメントファイルの形式で含まれています。pg_wal は、PostgreSQL では歴史的に pg_xlog として知られています。

注釈: 通常、各セグメントのサイズは 16MB ですが、 *walSegmentSize* オプションを使用してサイズを構成できます。 空のクラスターをブートストラップする `initdb <空のクラスターをブートストラップする *initdb*>` で説明しているように、このオプションはクラスターの初期化時に適用されます。

ほとんどの場合、PGDATA が存在するのと同じボリュームに pg_wal があっても問題ありません。ただし、WAL を別のボリュームに保存すると、いくつかの利点があります。

- **I/O パフォーマンス** – WAL ファイルを PGDATA とは別のストレージに保存することにより、PostgreSQL は WAL 操作通常はシークエンシャル書き込みとデータファイルテーブルやインデックスなどの並列 I/O を利用でき、したがって、垂直方向を向上させることができますスケーラビリティ。
- **信頼性の向上** – WAL ファイルに専用のディスク領域を予約することにより、PGDATA ボリュームの領域を使い果たしても WAL の書き込みが妨げられることはありません。この動作により、PostgreSQL プライマリが正しくシャットダウンされます。

- **より細かい制御** – PGDATA と pg_wal の両方専用の領域の量を定義でき、 WAL configuration を微調整できます。

とチェックポイント、さらにはコスト最適化のために別のストレージクラスを使用します。

- **I/O モニタリングの向上** – PGDATA と pg_wal の両方で負荷とディスク使用量を常にモニタできます。たとえば、PGDATA のサイズ変更が必要な場合に通知するアラートを設定することもできます。

参考:

Reliability and the Write-Ahead Log を参照

詳細については、PostgreSQL ドキュメントを参照してください。

.spec.walStorage オプションを使用して、WAL の別のボリュームを追加できます。 storage フィールドで説明したものと同じルールに従い、専用の PVC をプロビジョニングします。例

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: separate-pgwal-volume
spec:
  instances: 3
  storage:
    size: 1Gi
  walStorage:
    size: 1Gi
```

重要: *walStorage* の削除はサポートされていません。 WAL の別のボリュームを追加すると、既存の Postgres クラスターから削除することはできません。

30.8 テーブルスペースのボリューム

CloudNativePG は、宣言的テーブルスペースをサポートしています。それぞれが単一の PostgreSQL テーブルスペース専用の 1 つ以上のボリュームを追加できます。詳細は、TablespaceState {postgresql-cnpg-io-v1-TablespaceState} を参照してください。

30.9 ボリュームの拡張

Kubernetes が *expanding PVCs* を許可する API を公開

それはデフォルトで有効になっています。ただし、基になる StorageClass でサポートされている必要があります。

特定の StorageClass がボリューム拡張をサポートしているかどうかを確認するには、ストレージクラスの allowVolumeExpansion フィールドを読み取ることができます。

```
$ kubectl get storageclass -o jsonpath={$.allowVolumeExpansion} premium-storage
true
```

30.9.1 ボリューム拡張 Kubernetes 機能の使用

ストレージクラスがボリューム拡張をサポートしている場合、 `Cluster` のサイズ要件を変更できます。オペレーターはすべての PVC に変更を適用します。

`StorageClass` が *online volume resizing* をサポートしている場合、変更はすぐにポッドに適用されます。基になるストレージクラスがそれをサポートしていない場合、ポッドを削除してサイズ変更をトリガーする必要があります。

続行する最良の方法は、一度に 1 つのポッドを削除し、レプリカから始めて、各ポッドがバックアップされるまで待機することです。

30.9.2 AKS での PVC ボリュームの拡張

現在、 Azure can resize the PVC's volume without restarting the pod only on specific regions . CloudNativePG は、**オペレーター設定** の `ENABLE_AZURE_PVC_UPDATES` 環境変数を介してこの制限を克服しました。 `true` に設定すると、CloudNativePG は Postgres クラスターのローリング更新をトリガーします。

または、次の回避策を使用して、AKS のボリュームのサイズを手動で変更できます。

30.9.3 AKS のボリューム拡張の回避策

AKS で PVC のサイズを手動で変更できます。例として、3 つのレプリカを持つクラスターがあるとします。

```
$ kubectl get pods
NAME                READY   STATUS    RESTARTS   AGE
cluster-example-1   1/1     Running   0          2m37s
cluster-example-2   1/1     Running   0          2m22s
cluster-example-3   1/1     Running   0          2m10s
```

Kubernetes documentation で説明しているように、Azure ディスクは「未接続」状態にあるときにのみ拡張できます。これは、PostgreSQL クラスターが使用するディスクのサイズを変更するには、手動ロールアウトを実行し、最初にディスクにバインドされた PVC を使用してポッドをホストするノードを遮断する必要があることを意味します。これにより、バックグラウンドでのディスクのサイズ変更が完了する前に、オペレーターがポッドを再作成し、すぐに PVC に再接続することを防ぎます。

最初に、クラスター定義を編集し、新しいサイズを適用します。この例では、新しいサイズは `2Gi` です。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  storage:
    storageClass: default
    size: 2Gi
```

cluster-example-1 ポッドがクラスターのプライマリであると仮定すると、最初にレプリカの使用を続行できます。たとえば、cluster-example-3 ポッドをホストする Kubernetes ノードを遮断することから始めます。

```
kubectl cordon <node of cluster-example-3>
```

次に、 cluster-example-3 ポッドを削除します。

```
$ kubectl delete pod/cluster-example-3
```

次のコマンドを実行します。

```
kubectl get pvc -w -o=jsonpath={.status.conditions[].message} cluster-example-3
```

次の出力が表示されるまで待ちます。

```
Waiting for user to (re-)start a Pod to finish file system resize of volume on node.
```

次に、ノードの遮断を解除できます。

```
kubectl uncordon <node of cluster-example-3>
```

ポッドが正しく再作成され、「Running and Ready」状態になるのを待ちます。

```
kubectl get pods -w cluster-example-3
cluster-example-3   0/1     Init:0/1   0          12m
cluster-example-3   1/1     Running    0          12m
```

次のコマンドを実行して、PVC 拡張を確認します。これは、構成どおりに 2Gi を結果ます。

```
kubectl get pvc cluster-example-3 -o=jsonpath={.status.capacity.storage}
```

残りのポッドに対してこれらの手順を繰り返すことができます。

重要: *kubectl cnpg promote* を使用して、新しいサイズ変更されたポッドをスイッチオーバーでプロモートした後、プライマリインスタンスに関連付けられているディスクのサイズ変更を最後のディスクとして残します。たとえば、 *kubectl cnpg promote cluster-example 3* を使用して `cluster-example-3` をプライマリに昇格させます。

30.9.4 ストレージの再作成

ストレージクラスがボリューム拡張をサポートしていない場合でも、別の PVC でクラスターを再生成できます。増加したストレージに新しい PVC を割り当て、データベースをそこに移動します。この操作は、クラスターに複数のノードが含まれる場合にのみ実行可能です。

その際、次の例のように、`resizeInUseVolumes` フラグを無効にすることにより、オペレーターが既存の PVC を変更しないようにする必要があります。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-pvc-template
spec:
  instances: 3

  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi
    resizeInUseVolumes: False
```

クラスター全体を別の記憶領域に移動するには、すべての PVC とすべてのポッドを再作成する必要があります。次の例のように、3 つのレプリカを含むクラスターがあるとします。

```
$ kubectl get pods
NAME                READY   STATUS    RESTARTS   AGE
cluster-example-1   1/1     Running   0          2m37s
cluster-example-2   1/1     Running   0          2m22s
cluster-example-3   1/1     Running   0          2m10s
```

別の PVC を使用してクラスターを再作成するには、クラスター定義を編集して `resizeInUseVolumes` を無効にできます。次に、すべてのインスタンスを別の PVC で再作成します。

たとえば、 `cluster-example-3` のストレージを再作成します。

```
$ kubectl delete pvc/cluster-example-3 pod/cluster-example-3
```

重要: 専用の WAL ボリュームを作成した場合、このプロセス中に両方の PVC を削除する必要があります。 WAL ボリューム PVC を再生成する場合にも、同じ手順が適用されます。これは、*.spec.walStorage* セクションの `resizeInUseVolumes` も無効にすることにより実行できます。

たとえば、WAL ストレージ専用の PVC が存在する場合

```
$ kubectl delete pvc/cluster-example-3 pvc/cluster-example-3-wal pod/cluster-example-3
```

それが完了したら、オペレーターは、サイズ変更した PVC を使用して別のレプリカの作成を調整します。

```
$ kubectl get pods
NAME                          READY   STATUS      RESTARTS   AGE
cluster-example-1             1/1     Running     0          5m58s
cluster-example-2             1/1     Running     0          5m43s
cluster-example-4-join-v2     0/1     Completed   0          17s
cluster-example-4             1/1     Running     0          10s
```

30.10 永続ボリュームの静的プロビジョニング

CloudNativePG は、動的ボリュームプロビジョニングで動作するように設計されました。この機能により、ストレージクラスと PVC テンプレートを介してユーザーが要求したときに、ストレージボリュームをオンデマンドで作成できます。**ストレージの再作成** を参照してください。

ただし、場合によっては、Kubernetes 管理者がストレージボリュームを手動で作成し、Kubernetes クラスター内での表現形式に関連する `PersistentVolume` オブジェクトを作成することを優先する場合があります。これは、ボリュームの_pre-provisioning_としても知られています。

重要: ボリュームの事前プロビジョニングは、オペレーターの高可用性と自己修復機能に影響を与えるため、回避することをお勧めします。これは、CloudNativePG が構築された完全な宣言型モデルを中断します。

CloudNativePG で事前プロビジョニングされたボリュームを使用するには

1. Kubernetes の外部でボリュームを手動で作成します。
2. 実際の CSI ドライバーつまり `volumeHandle` 、`fsType` 、`storageClassName` などに必要な正しいパラメーターを使用して、このボリュームと一致するように `PersistentVolume` オブジェクトを作成します。
3. ストレージセクションごとに、コヒーレントな *pvcTemplate* を使用して Postgres `Cluster` を作成します

このセクションは、Kubernetes が `PersistentVolume` と一致し、CloudNativePG が必要な `PersistentVolumeClaim` を作成できるようにします。

> **警告:** 静的プロビジョニングでは、事前プロビジョニングされたボリュームが存在する Kubernetes によって Postgres ポッドを正しくスケジュールできることを確認するのはあなたの責任です。スケジューリング構成は、クラスターのアフィニティルールにもとづいています。クラスターを展開した後、*Pending* にスタックしているポッドがないかを確認してください。状態が続く場合は、それが発生した理由を調査します。

30.11 ブロックストレージの考慮事項 Ceph/Longhorn

Longhorn や Ceph など、Kubernetes のほとんどのブロックストレージソリューションでは、復元力を強化するためにボリュームの複数のレプリカを持つことをお勧めします。このアプローチは、組み込みの復元力が不足しているワークロードに適しています。

ただし、 CloudNativePG は、**状態の同期** で説明しているように、インスタンスの数とそれらにアタッチされている永続ボリュームを介して、この復元力を Postgres `Cluster` に直接統合します。

その結果、ストレージレベルで追加のレプリカを定義すると、書き込み増幅が発生し、ディスク I/O と領域の使用量が不必要に増加する可能性があります。

CloudNativePG を使用する場合、ブロックストレージレベルのレプリカの数を 1 つに減らしながら、`Cluster` リソース全体のストレージレベルで単一障害点 SPoF が存在しないことを確認することを検討します。これは通常、単一のストレージホスト、そして最終的には物理ディスクが、より広範な_shared-nothing アーキテクチャ_原則に沿って、同じ `Cluster` の異なるインスタンスからのブロックをホストしないことを意味します。

Longhorn では、カスタムストレージクラスを作成するときに厳密なローカルデータの局所性を有効にすることにより、このリスクを軽減できます。厳密なローカルデータの局所性を使用してボリュームを作成するための詳細な手順は、here を参照してください。この設定により、ポッドのデータボリュームがポッド自分自身と同じノードに存在します。

さらに、Postgres `Cluster` には *pod anti-affinity rules* が必要です

オペレーターがさまざまなノードにポッドを展開できるように、Longhorn は対応するホストにデータボリュームを配置できます。必要に応じて、ボリュームレプリカ数を一時的に 2 に設定し、後で減らして、古いレプリカを削除することにより、Longhorn のボリュームを手動で再配置できます。ホストが破損した場合は、Backup {postgresql-cnpg-io-v1-Backup}

影響を受けるインスタンス。CloudNativePG は別のホストでインスタンスを再作成し、データを複製します。

Ceph では、これは CRUSH ルールを介して構成できます。CRUSH ルールの構成に関するドキュメントは here で入手できます。これらのルールは、ノードごとにポッドごとに 1 つのボリュームを保証することを目的としています。ボリュームを別のプールにインポートすることにより、再配置することもできます。

第31章　ラベルとアノテーション

Kubernetes のリソースはフラット構造で編成され、階層情報やそれらの間の関係はありません。ただし、このようなリソースとオブジェクトは、_labels_および_annotations_を介してリンクし、関係を置くことができます。

注釈: 詳細については、 annotations および labels に関する Kubernetes ドキュメントを参照してください。

簡単に言うと

- アノテーションは、外部ツールとの統合を促進することを目的に、追加の非識別情報をリソースに割り当てるために使用されます。
- ラベルは、オブジェクトをグループ化し、Kubernetes ネイティブセレクター機能を介して照会するために使用されます。

CloudNativePG 展開で使用する 1 つ以上のラベルまたはアノテーションを選択できます。次に、クラスターのメタデータでこれらのラベルまたはアノテーションを定義すると、それによって作成されたすべてのリソースポッドを含むすべてに継承されるようにオペレーターを構成する必要があります。

注釈: ラベルとアノテーションの継承は、ポッドテンプレートなどの代替アプローチの代わりに CloudNativePG によって採用された技術です。

31.1 事前定義されたラベル

これらの事前定義されたラベルは CloudNativePG によって管理されます。

`cnpg.io/backupDate` ISO 8601 形式のバックアップの日付 `YYYYMMDD`

`cnpg.io/backupName` バックアップ識別子、`Backup` および `VolumeSnapshot` リソースでのみ使用可能

`cnpg.io/backupMonth` バックアップが取られた年/月

`cnpg.io/backupTimeline` バックアップが取られたインスタンスのタイムライン

`cnpg.io/backupYear` バックアップが取られた年

`cnpg.io/cluster` クラスターの名前

`cnpg.io/immediateBackup` バックアップが `immediate` が `true` に設定されている `ScheduledBackup` オブジェクトから作成された最初のバックアップである場合、 `Backup` リソースに適用されます

cnpg.io/instanceName PostgreSQL インスタンスの名前古い非推奨の postgresql ラベルを置き換えます

cnpg.io/jobRole ジョブのロールつまり import 、initdb 、join , …

cnpg.io/onlineBackup バックアップがオンラインであるかホットか、Postgres がダウンしているときに取得されたかコールド

cnpg.io/podRole プーラー展開専用のポッドとデータベースインスタンスに使用されるポッドを区別します

cnpg.io/poolerName PgBouncer プーラーの名前

cnpg.io/pvcRole PG_DATA や PG_WAL などの PVC の目的

cnpg.io/reload ConfigMap および Secret リソースで使用できます。 true に設定されている場合、リソースの変更はオペレーターによって自動的にリロードされます。

cnpg.io/userType Secret 、superuser Postgres スーパーユーザーアクセスまたは app CloudNativePG 用語でアプリケーションレベルのユーザーのいずれかに関連付けられている PostgreSQL ユーザーのタイプを指定し、CloudNativePG によって作成されたデフォルトユーザー通常は postgres および app に制限されています。

role - **非推奨** ポッドで実行されているインスタンスが primary または replica であるかどうか。このラベルは非推奨です。代わりに cnpg.io/instanceRole を使用する必要があります。

cnpg.io/scheduled-backup 使用可能な場合、特定の Backup オブジェクトを作成した ScheduledBackup リソースの名前

cnpg.io/instanceRole ポッドで実行されているインスタンスが primary または replica かどうか。

31.2 事前定義されたアノテーション

これらの事前定義されたアノテーションは CloudNativePG によって管理されます。

container.apparmor.security.beta.kubernetes.io/* 名前付けたコンテナに適用する AppArmor プロファイルの名前。*AppArmor* **を使用してポッドアクセスを制限する** を参照

詳細については。

cnpg.io/backupEndTime バックアップが終了した時刻。

cnpg.io/backupEndWAL バックアップ終了時の WAL。

cnpg.io/backupStartTime バックアップが開始された時刻。

cnpg.io/backupStartWAL バックアップ開始時の WAL。

cnpg.io/coredumpFilter Postgres プロセスのコアダンプを制御するフィルター、ビットマスクで表現されます。デフォルトでは、ダンプから共有メモリセグメントを除外するように 0x31 に設定されます。*PostgreSQL* **コアダンプ** を参照

詳細については、

cnpg.io/clusterManifest このリソース PVC などを所有する Cluster のマニフェスト。このラベルは、古い非推奨の cnpg.io/hibernateClusterManifest ラベルを置き換えます。

cnpg.io/fencedInstances JSON 形式で表現された、フェンスする必要があるインスタンスのリスト。リストに* 要素が含まれる場合、クラスター全体がフェンスされます。

cnpg.io/forceLegacyBackup テスト目的のみで Cluster リソースに適用され、バージョン 3.4 2023 年 1 月より前の--name オプションが使用できなかった場合の barman-cloud-backup の動作をシミュレートします。

cnpg.io/hash リソースのハッシュ値。

cnpg.io/hibernation Cluster リソースに適用されて、*declarative hibernation feature* を制御します。許可される値は on および off です。

cnpg.io/managedSecrets オペレーターによって管理され、各 Postgres クラスターの ServiceAccount リソースに自動的に設定されるシークレットをプルします。

cnpg.io/nodeSerial ポッドリソースで、Postgres クラスター内のインスタンスのシリアル番号を識別します。

cnpg.io/operatorVersion オペレーターのバージョン。

cnpg.io/pgControldata pg_controldata コマンドの出力。このアノテーションは、古い非推奨の cnpg.io/hibernatePgControlData アノテーションを置き換えます。

cnpg.io/podEnvHash cnpg.io/podSpec アノテーションにもポッド環境が含まれるため、非推奨。

cnpg.io/podSpec オペレーターによって生成されたポッドの spec のスナップショット。このアノテーションは、古い非推奨の cnpg.io/podEnvHash アノテーションを置き換えます。

cnpg.io/poolerSpecHash プーラーリソースのハッシュ。

cnpg.io/pvcStatus PVC の現在のステータス initializing 、ready 、または detached 。

cnpg.io/reconcilePodSpec アノテーションを Cluster または Pooler に適用して、再起動を防止できます。

Cluster で disabled に設定されている場合、オペレーターは PodSpec の変更によるインスタンスが再起動しないようにします。これには、次の変更が含まれます。

- トポロジまたはアフィニティ - スケジューラー - ボリュームまたはコンテナ

Pooler で disabled に設定されている場合、オペレーターは spec.instances への変更を除き、展開仕様の変更を制限します。

cnpg.io/reconciliationLoop Cluster で disabled に設定されている場合、オペレーターは調整ループの実行を防止します。

cnpg.io/reloadedAt 最新のクラスター reload 時間が含まれます。reload は、プラグインを介してユーザーによってトリガーされます。

cnpg.io/skipEmptyWalArchiveCheck Cluster リソースで true に設定されている場合、オペレーターは、データを書き込む前に WAL アーカイブが空であることを確認するチェックを無効にします。自分の責任で使用してください。

cnpg.io/skipWalArchiving Cluster リソースで enabled に設定されている場合、オペレーターは WAL アーカイブを無効にします。これにより、archive_mode が off に設定され、すべての PostgreSQL インスタンスの再起動が必要です。自分の責任で使用してください。

cnpg.io/snapshotStartTime スナップショットが開始された時刻。

cnpg.io/snapshotEndTime スナップショットが使用する準備ができているとしてマークされた時間。

kubectl.kubernetes.io/restartedAt 利用可能な場合、最後に Postgres クラスターの再起動が要求された時間。

31.3 前提条件

デフォルトでは、クラスターのメタデータで定義されたラベルまたはアノテーションは、関連付けられたリソースに継承されません。ラベル/アノテーションの継承を有効にするには、**オペレーター設定** で提供されている手順に従ってください。

以下はその例の続きであり、次のことに制限します。

- アノテーション categories
- ラベル app 、environment 、および workload

注釈: 注釈とラベルの両方に、コンテキストに最も適した名前を自由に選択してください。名前付けにワイルドカードを使用し、すべてのラベルに `mycompany/*` を使用したり、*mycompany/* で始まるアノテーションを継承するように設定したりするなどの戦略を採用することもできます。

31.4 クラスターのメタデータの定義

クラスターを定義するときに、リソースがデプロイされる前に、次のようにメタデータを設定できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
  annotations:
    categories: database
  labels:
    environment: production
    workload: database
    app: sso
spec:
  # ... <snip>
```

クラスターが展開されると、たとえば、ポッドにラベルが正しく設定されたことを確認できます。

```
kubectl get pods --show-labels
```

31.5 現在の制限

現在、CloudNativePG は、ラベルまたはアノテーションの削除を自動的に伝播しません。したがって、以前に基になるポッドに伝播されたクラスターからアノテーションまたはラベルが削除される場合、オペレーターは、関連するリソースでそれを削除しません。

第32章　モニタリング

重要: Prometheus と Grafana のインストールは、このプロジェクトの範囲を超えています。これらはシステムに正しくインストールされていることを前提としています。ただし、実験のために、 *Part 4 of the Quickstart* で指示を提供します。

32.1 モニタリングインスタンス

PostgreSQL インスタンスごとに、オペレーターは、HTTP または HTTPS、ポート 9187 で `metrics` という名前の Prometheus のメトリックのエクスポーターを提供します。オペレーターには、**事前定義されたメトリックセット** に加えて、1 つ以上の `ConfigMap` または `Secret` リソースを介して追加クエリを定義するための高度な構成およびカスタマイズ可能なシステムが付属しています詳細については、以下の **ユーザー定義メトリック** を参照してください。

重要: CloudNativePG は、デフォルトで、 **メトリックのデフォルトセット** のセットをインストールします

`default-monitoring` という名前の `ConfigMap` で。

注釈: **エクスポートされたメトリックを検査する方法** の指示に従って、エクスポートされたメトリックを検査できます。

以下のセクション。

PostgreSQL で実行されるすべての監視クエリは次のとおりです。

- アトミック クエリごとに 1 つのトランザクション
- `pg_monitor` ロールで実行
- `application_name` を `cnpg_metrics_exporter` に設定して実行
- ユーザー `postgres` として実行

PostgreSQL の「事前定義されたロール」セクションを参照してください documentation

`pg_monitor` ロールの詳細は、

デフォルトでは、クエリーは、次のロジックに従って、 `Cluster` リソースの指定された `bootstrap` メソッドで定義された_main Database_に対して実行されます。

- using `initdb` クエリーはデフォルトで `initdb.database` または `app` で指定されたデータベースに対して実行されます指定しない場合
- using `recovery` クエリーはデフォルトで `recovery.database` または `postgres` で指定されたデータベースに対して実行されます指定しない場合
- using `pg_basebackup` クエリーはデフォルトで `pg_basebackup.database` または `postgres` で指定されたデータベースに対して実行されます指定しない場合

`target_databases` オプションで 1 つ以上のデータベースのリストを指定することにより、特定のユーザー定義メトリックのデフォルトデータベースを常にオーバーライドできます。

参考:

CloudNativePG と Prometheus および Grafana の統合を評価することに興味がある場合は、 *Part 4 of the quickstart* で簡単なセットアップガイドを見つけることができます。

32.1.1 Prometheus Operator の例

特定の PostgreSQL クラスターは、 Prometheus Operator's リソース PodMonitor を使用してモニタできます。

クラスターリソース自分自身デフォルト `false` で `.spec.monitoring.enablePodMonitor` 〜`true` を設定することにより、クラスターを正しくポイントする `PodMonitor` をオペレーターが自動的に作成できます。

重要: 自動的に作成される `PodMonitor` への変更は、次の調整サイクルでオペレーターによってオーバーライドされます。カスタマイズが必要な場合は、以下の説明に従って行うことができます。

特定のクラスターに `PodMonitor` を手動で展開するには、次のように定義し、必要に応じて調整します。

```
apiVersion: monitoring.coreos.com/v1
kind: PodMonitor
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  selector:
    matchLabels:
      "cnpg.io/cluster": cluster-example
  podMetricsEndpoints:
    - port: metrics
```

重要: 一意の名前、および正しいクラスターの名前空間とラベルたとえば *cluster-example* などを使用して上記の例を変更していることを確認します。

重要: このドキュメントの以前のバージョンで使用されていた `postgresql` ラベルは非推奨であり、将来的

に削除されます。代わりに `cnpg.io/cluster` ラベルを使用して、インスタンスを選択してください。

32.1.2 メトリックポートで TLS を有効にする

メトリックポートで TLS 通信を有効にするには、`.spec.monitoring.tls.enabled` 設定を `true` に構成します。この設定により、メトリックエクスポーターは、PostgreSQL が使用するものと同じサーバー証明書を使用して、ポート 5432 での通信を安全にします。

重要: *.spec.monitoring.tls.enabled* 設定を変更すると、クラスターのローリング再起動がトリガーされます。

`PodMonitor` がオペレーター`.spec.monitoring.enablePodMonitor` を `true` に設定して管理されている場合、TLS を介してメトリックにアクセスするために必要な構成が自動的に含まれます。

TLS 経由でメトリックを読み取るのに適した `PodMonitor` を手動で展開するには、次のように定義し、必要に応じて調整します。

```yaml
apiVersion: monitoring.coreos.com/v1
kind: PodMonitor
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  selector:
    matchLabels:
      "cnpg.io/cluster": cluster-example
  podMetricsEndpoints:
    - port: metrics
      scheme: https
      tlsConfig:
        ca:
          secret:
            name: cluster-example-ca
            key: ca.crt
        serverName: cluster-example-rw
```

重要: 一意の名前、および正しいクラスターの名前空間とラベルたとえば *cluster-example* などを使用して上記の例を変更していることを確認します。

重要: メトリックエンドポイントの `serverName` フィールドは、サーバー証明書で定義された名前のいずれかと一致する必要があります。デフォルトの証明書が使用されている場合、*serverName* 値は `<cluster-name>-rw` 形式である必要があります。

32.1.3 事前定義されたメトリックセット

すべての PostgreSQL インスタンスエクスポーターは、事前定義されたメトリックのセットを自動的に公開します。これらは 2 つの主要カテゴリに分類できます。

- cnpg_collector_* で始まる PostgreSQL 関連メトリックインスタンスを収容する個別のノードの数 s
- 最後に失敗したバックアップと最後に使用可能なバックアップを示すタイムスタンプ、および cluster
- フラグ レプリカクラスターモードが有効または無効かを示します
- フラグ手動スイッチオーバーが必要かどうかを示す b_tran_12 フェンシングが有効かどうかを示す b_tran_12 フラグ有効または無効
- go_* で始まる Go ランタイム関連のメトリック

以下は、インスタンスの localhost:9187/metrics エンドポイントによって返されるメトリックのサンプルです。ご覧のとおり、Prometheus フォーマットは自己文書です。

```
#  HELP cnpg_collector_collection_duration_seconds Collection time duration in seconds

#  TYPE cnpg_collector_collection_duration_seconds gauge

cnpg_collector_collection_duration_seconds{collector="Collect.up"} 0.0031393

#  HELP cnpg_collector_collections_total Total number of times PostgreSQL was␣
↪accessed for metrics.

#  TYPE cnpg_collector_collections_total counter

cnpg_collector_collections_total 2

#  HELP cnpg_collector_fencing_on 1 if the instance is fenced, 0 otherwise

#  TYPE cnpg_collector_fencing_on gauge

cnpg_collector_fencing_on 0

#  HELP cnpg_collector_nodes_used NodesUsed represents the count of distinct nodes␣
↪accommodating the instances. A value of -1 suggests that the metric is not␣
↪available. A value of 1 suggests that all instances are hosted on a single node,␣
↪implying the absence of High Availability (HA). Ideally this value should match the␣
↪number of instances in the cluster.

#  TYPE cnpg_collector_nodes_used gauge

cnpg_collector_nodes_used 3
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#  HELP cnpg_collector_last_collection_error 1 if the last collection ended with␣
↪error, 0 otherwise.

#  TYPE cnpg_collector_last_collection_error gauge

cnpg_collector_last_collection_error 0

#  HELP cnpg_collector_manual_switchover_required 1 if a manual switchover is␣
↪required, 0 otherwise

#  TYPE cnpg_collector_manual_switchover_required gauge

cnpg_collector_manual_switchover_required 0

#  HELP cnpg_collector_pg_wal Total size in bytes of WAL segments in the /var/lib/
↪postgresql/data/pgdata/pg_wal directory  computed as (wal_segment_size * count)

#  TYPE cnpg_collector_pg_wal gauge

cnpg_collector_pg_wal{value="count"} 9
cnpg_collector_pg_wal{value="slots_max"} NaN
cnpg_collector_pg_wal{value="keep"} 32
cnpg_collector_pg_wal{value="max"} 64
cnpg_collector_pg_wal{value="min"} 5
cnpg_collector_pg_wal{value="size"} 1.50994944e+08
cnpg_collector_pg_wal{value="volume_max"} 128
cnpg_collector_pg_wal{value="volume_size"} 2.147483648e+09

#  HELP cnpg_collector_pg_wal_archive_status Number of WAL segments in the /var/lib/
↪postgresql/data/pgdata/pg_wal/archive_status directory (ready, done)

#  TYPE cnpg_collector_pg_wal_archive_status gauge

cnpg_collector_pg_wal_archive_status{value="done"} 6
cnpg_collector_pg_wal_archive_status{value="ready"} 0

#  HELP cnpg_collector_replica_mode 1 if the cluster is in replica mode, 0 otherwise

#  TYPE cnpg_collector_replica_mode gauge

cnpg_collector_replica_mode 0

#  HELP cnpg_collector_sync_replicas Number of requested synchronous replicas␣
↪(synchronous_standby_names)
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#  TYPE cnpg_collector_sync_replicas gauge

cnpg_collector_sync_replicas{value="expected"} 0
cnpg_collector_sync_replicas{value="max"} 0
cnpg_collector_sync_replicas{value="min"} 0
cnpg_collector_sync_replicas{value="observed"} 0

#  HELP cnpg_collector_up 1 if PostgreSQL is up, 0 otherwise.

#  TYPE cnpg_collector_up gauge

cnpg_collector_up{cluster="cluster-example"} 1

#  HELP cnpg_collector_postgres_version Postgres version

#  TYPE cnpg_collector_postgres_version gauge

cnpg_collector_postgres_version{cluster="cluster-example",full="17.2"} 17.2

#  HELP cnpg_collector_last_failed_backup_timestamp The last failed backup as a unix␣
↪timestamp

#  TYPE cnpg_collector_last_failed_backup_timestamp gauge

cnpg_collector_last_failed_backup_timestamp 0

#  HELP cnpg_collector_last_available_backup_timestamp The last available backup as a␣
↪unix timestamp

#  TYPE cnpg_collector_last_available_backup_timestamp gauge

cnpg_collector_last_available_backup_timestamp 1.63238406e+09

#  HELP cnpg_collector_first_recoverability_point The first point of recoverability␣
↪for the cluster as a unix timestamp

#  TYPE cnpg_collector_first_recoverability_point gauge

cnpg_collector_first_recoverability_point 1.63238406e+09

#  HELP cnpg_collector_lo_pages Estimated number of pages in the pg_largeobject table

#  TYPE cnpg_collector_lo_pages gauge

cnpg_collector_lo_pages{datname="app"} 0
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
cnpg_collector_lo_pages{datname="postgres"} 78

#  HELP cnpg_collector_wal_buffers_full Number of times WAL data was written to disk␣
↪because WAL buffers became full. Only available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_buffers_full gauge

cnpg_collector_wal_buffers_full{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 6472

#  HELP cnpg_collector_wal_bytes Total amount of WAL generated in bytes. Only␣
↪available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_bytes gauge

cnpg_collector_wal_bytes{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 1.0035147e+07

#  HELP cnpg_collector_wal_fpi Total number of WAL full page images generated. Only␣
↪available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_fpi gauge

cnpg_collector_wal_fpi{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 1474

#  HELP cnpg_collector_wal_records Total number of WAL records generated. Only␣
↪available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_records gauge

cnpg_collector_wal_records{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 26178

#  HELP cnpg_collector_wal_sync Number of times WAL files were synced to disk via␣
↪issue_xlog_fsync request (if fsync is on and wal_sync_method is either fdatasync,␣
↪fsync or fsync_writethrough, otherwise zero). Only available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_sync gauge

cnpg_collector_wal_sync{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 37

#  HELP cnpg_collector_wal_sync_time Total amount of time spent syncing WAL files to␣
↪disk via issue_xlog_fsync request, in milliseconds (if track_wal_io_timing is␣
↪enabled, fsync is on, and wal_sync_method is either fdatasync, fsync or fsync_
↪writethrough, otherwise zero). Only available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_sync_time gauge
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
cnpg_collector_wal_sync_time{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 0

#  HELP cnpg_collector_wal_write Number of times WAL buffers were written out to disk␣
↪via XLogWrite request. Only available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_write gauge

cnpg_collector_wal_write{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 7243

#  HELP cnpg_collector_wal_write_time Total amount of time spent writing WAL buffers␣
↪to disk via XLogWrite request, in milliseconds (if track_wal_io_timing is enabled,␣
↪otherwise zero). This includes the sync time when wal_sync_method is either open_
↪datasync or open_sync. Only available on PG 14+

#  TYPE cnpg_collector_wal_write_time gauge

cnpg_collector_wal_write_time{stats_reset="2023-06-19T10:51:27.473259Z"} 0

#  HELP cnpg_last_error 1 if the last collection ended with error, 0 otherwise.

#  TYPE cnpg_last_error gauge

cnpg_last_error 0

#  HELP go_gc_duration_seconds A summary of the pause duration of garbage collection␣
↪cycles.

#  TYPE go_gc_duration_seconds summary

go_gc_duration_seconds{quantile="0"} 5.01e-05
go_gc_duration_seconds{quantile="0.25"} 7.27e-05
go_gc_duration_seconds{quantile="0.5"} 0.0001748
go_gc_duration_seconds{quantile="0.75"} 0.0002959
go_gc_duration_seconds{quantile="1"} 0.0012776
go_gc_duration_seconds_sum 0.0035741
go_gc_duration_seconds_count 13

#  HELP go_goroutines Number of goroutines that currently exist.

#  TYPE go_goroutines gauge

go_goroutines 25

#  HELP go_info Information about the Go environment.
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
# TYPE go_info gauge

go_info{version="go1.20.5"} 1

# HELP go_memstats_alloc_bytes Number of bytes allocated and still in use.

# TYPE go_memstats_alloc_bytes gauge

go_memstats_alloc_bytes 4.493744e+06

# HELP go_memstats_alloc_bytes_total Total number of bytes allocated, even if freed.

# TYPE go_memstats_alloc_bytes_total counter

go_memstats_alloc_bytes_total 2.1698216e+07

# HELP go_memstats_buck_hash_sys_bytes Number of bytes used by the profiling bucket␣
↪hash table.

# TYPE go_memstats_buck_hash_sys_bytes gauge

go_memstats_buck_hash_sys_bytes 1.456234e+06

# HELP go_memstats_frees_total Total number of frees.

# TYPE go_memstats_frees_total counter

go_memstats_frees_total 172118

# HELP go_memstats_gc_cpu_fraction The fraction of this programs available CPU time␣
↪used by the GC since the program started.

# TYPE go_memstats_gc_cpu_fraction gauge

go_memstats_gc_cpu_fraction 1.0749468700447189e-05

# HELP go_memstats_gc_sys_bytes Number of bytes used for garbage collection system␣
↪metadata.

# TYPE go_memstats_gc_sys_bytes gauge

go_memstats_gc_sys_bytes 5.530048e+06

# HELP go_memstats_heap_alloc_bytes Number of heap bytes allocated and still in use.
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#  TYPE go_memstats_heap_alloc_bytes gauge

go_memstats_heap_alloc_bytes 4.493744e+06

#  HELP go_memstats_heap_idle_bytes Number of heap bytes waiting to be used.

#  TYPE go_memstats_heap_idle_bytes gauge

go_memstats_heap_idle_bytes 5.8236928e+07

#  HELP go_memstats_heap_inuse_bytes Number of heap bytes that are in use.

#  TYPE go_memstats_heap_inuse_bytes gauge

go_memstats_heap_inuse_bytes 7.528448e+06

#  HELP go_memstats_heap_objects Number of allocated objects.

#  TYPE go_memstats_heap_objects gauge

go_memstats_heap_objects 26306

#  HELP go_memstats_heap_released_bytes Number of heap bytes released to OS.

#  TYPE go_memstats_heap_released_bytes gauge

go_memstats_heap_released_bytes 5.7401344e+07

#  HELP go_memstats_heap_sys_bytes Number of heap bytes obtained from system.

#  TYPE go_memstats_heap_sys_bytes gauge

go_memstats_heap_sys_bytes 6.5765376e+07

#  HELP go_memstats_last_gc_time_seconds Number of seconds since 1970 of last garbage␣
↪collection.

#  TYPE go_memstats_last_gc_time_seconds gauge

go_memstats_last_gc_time_seconds 1.6311727586032727e+09

#  HELP go_memstats_lookups_total Total number of pointer lookups.

#  TYPE go_memstats_lookups_total counter
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
go_memstats_lookups_total 0

#  HELP go_memstats_mallocs_total Total number of mallocs.

#  TYPE go_memstats_mallocs_total counter

go_memstats_mallocs_total 198424

#  HELP go_memstats_mcache_inuse_bytes Number of bytes in use by mcache structures.

#  TYPE go_memstats_mcache_inuse_bytes gauge

go_memstats_mcache_inuse_bytes 14400

#  HELP go_memstats_mcache_sys_bytes Number of bytes used for mcache structures␣
↪obtained from system.

#  TYPE go_memstats_mcache_sys_bytes gauge

go_memstats_mcache_sys_bytes 16384

#  HELP go_memstats_mspan_inuse_bytes Number of bytes in use by mspan structures.

#  TYPE go_memstats_mspan_inuse_bytes gauge

go_memstats_mspan_inuse_bytes 191896

#  HELP go_memstats_mspan_sys_bytes Number of bytes used for mspan structures␣
↪obtained from system.

#  TYPE go_memstats_mspan_sys_bytes gauge

go_memstats_mspan_sys_bytes 212992

#  HELP go_memstats_next_gc_bytes Number of heap bytes when next garbage collection␣
↪will take place.

#  TYPE go_memstats_next_gc_bytes gauge

go_memstats_next_gc_bytes 8.689632e+06

#  HELP go_memstats_other_sys_bytes Number of bytes used for other system allocations.

#  TYPE go_memstats_other_sys_bytes gauge
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
go_memstats_other_sys_bytes 2.566622e+06

#  HELP go_memstats_stack_inuse_bytes Number of bytes in use by the stack allocator.

#  TYPE go_memstats_stack_inuse_bytes gauge

go_memstats_stack_inuse_bytes 1.343488e+06

#  HELP go_memstats_stack_sys_bytes Number of bytes obtained from system for stack␣
↪allocator.

#  TYPE go_memstats_stack_sys_bytes gauge

go_memstats_stack_sys_bytes 1.343488e+06

#  HELP go_memstats_sys_bytes Number of bytes obtained from system.

#  TYPE go_memstats_sys_bytes gauge

go_memstats_sys_bytes 7.6891144e+07

#  HELP go_threads Number of OS threads created.

#  TYPE go_threads gauge

go_threads 18
```

注釈: *cnpg_collector_postgres_version* は、PostgreSQL の `Major.Minor` バージョンを含む GaugeVec メトリックです。フルセマンティックバージョン `Major.Minor.Patch` は、 *full* という名前のラベルフィールドの 1 つ内にあります。

注釈: *cnpg_collector_first_recoverability_point* および `cnpg_collector_last_available_backup_timestamp` は、オブジェクトストアへの最初のバックアップまで 0 になります。これは WAL アーカイブとは別です。

32.1.4 ユーザー定義メトリック

この機能は現在_beta_状態にあり、フォーマットは queries.yaml file (release 0.12)

PostgreSQL Prometheus Exporter の。

カスタムメトリックは、次の例のように、.spec.monitoring.customQueriesConfigMap または customQueriesSecret セクションの下の Cluster 定義で作成した Configmap /Secret を参照することにより、ユーザーが定義できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
  namespace: test
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi

  monitoring:
    customQueriesConfigMap:
      - name: example-monitoring
        key: custom-queries
```

customQueriesConfigMap /customQueriesSecret セクションには、カスタムクエリーが定義されているキーを指定する ConfigMap /Secret 参照のリストが含まれています。参照されるリソースは、**クラスター**リソースと同じ名前空間に作成する必要があることに注意してください。

注釈: ConfigMap と Secrets をインスタンスによって**自動的に**リロードしたい場合は、キー `cnpg.io/reload` を持つラベルをそれに追加できます。それ以外の場合、 *kubectl cnpg reload* サブコマンドを使用してインスタンスをリロードする必要があります。

重要: ユーザー定義メトリックが既存のメトリックを上書きすると、インスタンスマネージャーは json 警告ログを出力します。これには、メッセージ `Query with the same name already found. Overwriting the existing one.` と上書きされたクエリー名を含むキー `queryName` が含まれます。

32.1.5 ユーザー定義メトリックの例

ここでは、上記の Cluster の例で参照される、単一のカスタムクエリーを含む ConfigMap の例を示します。

```yaml
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
  name: example-monitoring
  namespace: test
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
data:
  custom-queries: |
    pg_replication:
      query: "SELECT CASE WHEN NOT pg_is_in_recovery()
              THEN 0
              ELSE GREATEST (0,
                EXTRACT(EPOCH FROM (now() - pg_last_xact_replay_timestamp())))
              END AS lag,
              pg_is_in_recovery() AS in_recovery,
              EXISTS (TABLE pg_stat_wal_receiver) AS is_wal_receiver_up,
              (SELECT count(*) FROM pg_stat_replication) AS streaming_replicas"

      metrics:
        - lag:
            usage: "GAUGE"
            description: "Replication lag behind primary in seconds"
        - in_recovery:
            usage: "GAUGE"
            description: "Whether the instance is in recovery"
        - is_wal_receiver_up:
            usage: "GAUGE"
            description: "Whether the instance wal_receiver is up"
        - streaming_replicas:
            usage: "GAUGE"
            description: "Number of streaming replicas connected to the instance"
```

基本的なモニタリングクエリーのリストは、 *default-monitoring.yaml*

これは CloudNativePG 展開に既にインストールされています**メトリックのデフォルトセット** を参照してください。

32.1.6 述語クエリーを使用したユーザー定義メトリックの例

predicate_query オプションを使用すると、ユーザーは query を実行して、指定された条件でのみメトリックを収集できます。これを行うには、ユーザーは単一の boolean 列で最大 1 つの行を返す述語照会を提供する必要があります。

述語クエリーは、メインクエリーと同じトランザクションで、同じデータベースに対して実行されます。

```
some_query: |
  predicate_query: |
    SELECT
      some_bool as predicate
    FROM some_table
  query: |
    SELECT
     count(*) as rows
    FROM some_table
  metrics:
    - rows:
        usage: "GAUGE"
        description: "number of rows"
```

32.1.7 複数のデータベースで実行されているユーザー定義メトリックの例

target_databases オプションが複数のデータベースをリストする場合、メトリックは各データベースから収集されます。

target_databases のリストで_shell-like pattern_つまり、* 、? または [] を含むを指定することにより、特定のクエリーに対してデータベース自動検出を有効にできます。提供されている場合、オペレーターは、SELECT datname FROM pg_database WHERE datallowconn AND NOT datistemplate の実行によって返されたすべてのデータベースを追加し、 path.Match() ルールに従ってパターンと一致することにより、ターゲットデータベースのリストを展開します。

注釈: * 文字は yaml に special meaning があるため、このようなパターンが含まれる場合、*target_databases* 値を引用符で `"*"` する必要があります。

返されるラベルには、常にデータベースの名前を含めることをお勧めします。たとえば、次の例のように current_database() ファンクションを使用します。

```
some_query: |
  query: |
    SELECT
     current_database() as datname,
     count(*) as rows
    FROM some_table
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  metrics:
    - datname:
        usage: "LABEL"
        description: "Name of current database"
    - rows:
        usage: "GAUGE"
        description: "number of rows"
  target_databases:
    - albert
    - bb
    - freddie
```

これにより、次のメトリックが公開されます。

```
cnpg_some_query_rows{datname="albert"} 2
cnpg_some_query_rows{datname="bb"} 5
cnpg_some_query_rows{datname="freddie"} 10
```

次に、自動検出を有効にしたクエリーの例を示します。これは、 `template1` データベースでも実行されますそれ以外の場合、前述のクエリーによって返されません。

```
some_query: |
  query: |
    SELECT
     current_database() as datname,
     count(*) as rows
    FROM some_table
  metrics:
    - datname:
        usage: "LABEL"
        description: "Name of current database"
    - rows:
        usage: "GAUGE"
        description: "number of rows"
  target_databases:
    - "*"
    - "template1"
```

上記の例では、次のメトリックを生成しますデータベースが存在する場合。

```
cnpg_some_query_rows{datname="albert"} 2
cnpg_some_query_rows{datname="bb"} 5
cnpg_some_query_rows{datname="freddie"} 10
cnpg_some_query_rows{datname="template1"} 7
cnpg_some_query_rows{datname="postgres"} 42
```

32.1.8 ユーザー定義メトリックの構造

すべてのカスタムクエリーには、次の基本構造があります。

```
<MetricName>:
  query: "<SQLQuery>"
  metrics:
    - <ColumnName>:
        usage: "<MetricType>"
        description: "<MetricDescription>"
```

次に、使用可能なすべてのフィールドの簡単な説明を示します。

- <MetricName> プロメテウスの名前 metric
- name オーバーライド<MetricName> 、定義されている場合
- query メトリックを生成するためにターゲットデータベースで実行する SQL クエリー
- primary プライマリインスタンスでのみクエリーを実行するかどうか
- edb_fortran_20 Prometheus PostgreSQL エクスポータの互換性-非推奨)
- runonserver クエリを実行する PostgreSQL のバージョンを制限するセマンティックバージョンレンジたとえば">=11.0.0" または">=12.0.0 <=15.0.0"
- target_databases query を実行するデータベースのリスト、または edb_asis edb_lk_16

自動検出を有効にします。デフォルトのデータベースが提供されている場合は上書きします。- predicate_query ターゲットデータベースで実行する最大 1 つの行と 1 つの boolean 列を返す SQL クエリー。システムは述語を評価し、true が query . - metrics エクスポートされたすべての列のリストを含むセクション。次のように定義します。- <ColumnName> クエリーによって返された列の名前 - name 列の ColumnName をオーバーライドしますメトリック、定義されている場合 b_tran_17 usage 以下で説明する値のいずれか - description メトリックの説明 - metrics_mapping usage が MAPPEDMETRIC に設定されている場合のオプションの列マッピング

usage の可能な値は次のとおりです。

Column Usage Label	Description
DISCARD	この列は無視する必要があります
LABEL	この列をラベルとして使用します
COUNTER	この列をカウンターとして使用する
GAUGE	この列をゲージとして使用します
MAPPEDMETRIC	指定されたテキスト値のマッピングでこの列を使用します
DURATION	この列をテキストの長さミリ秒単位として使用します
HISTOGRAM	この列をヒストグラムとして使用します

Metric Types にアクセスしてください。

詳細については、Prometheus のドキュメントから 。

32.1.9 ユーザー定義メトリックの出力

カスタム定義メトリックは、次の形式で Prometheus エクスポータエンドポイント:9187/metrics によって返されます。

```
cnpg_<MetricName>_<ColumnName>{<LabelColumnName>=<LabelColumnValue> ... }
↪<ColumnValue>
```

注釈: *LabelColumnName* は、 *usage* が `LABEL` に設定されたメトリックとその `Value`

上記の pg_replication の例を考慮すると、エクスポーターのエンドポイントは、呼び出されると次の出力を結果ます。

```
#  HELP cnpg_pg_replication_in_recovery Whether the instance is in recovery

#  TYPE cnpg_pg_replication_in_recovery gauge

cnpg_pg_replication_in_recovery 0

#  HELP cnpg_pg_replication_lag Replication lag behind primary in seconds

#  TYPE cnpg_pg_replication_lag gauge

cnpg_pg_replication_lag 0

#  HELP cnpg_pg_replication_streaming_replicas Number of streaming replicas connected␣
↪to the instance

#  TYPE cnpg_pg_replication_streaming_replicas gauge

cnpg_pg_replication_streaming_replicas 2

#  HELP cnpg_pg_replication_is_wal_receiver_up Whether the instance wal_receiver is up

#  TYPE cnpg_pg_replication_is_wal_receiver_up gauge

cnpg_pg_replication_is_wal_receiver_up 0
```

32.1.10 メトリックのデフォルトセット

オペレーターは、オペレーターの名前空間内の ConfigMap または Secret で定義された一連のモニタリングクエリーをクラスターに自動的に注入するように構成できます。**オペレーター設定** の MONITORING_QUERIES_CONFIGMAP または MONITORING_QUERIES_SECRET キーを、それぞれ ConfigMap または Secret の名前に設定する必要があります。オペレーターは queries キーの内容を使用します。

queries コンテンツを変更すると、それを使用するデプロイされたすべてのクラスターにすぐに反映されます。

オペレーターインストールマニフェストには、すべてのクラスターが使用する cnpg-default-monitoring と呼ばれる事前定義された ConfigMap が付属しています。MONITORING_QUERIES_CONFIGMAP は、オペレーター構成でデフォルトで cnpg-default-monitoring に設定されます。

デフォルトのメトリックセットを無効にする場合は、次のことができます。

- オペレーターレベルで無効にする オペレーター ConfigMap で MONITORING_QUERIES_CONFIGMAP / MONITORING_QUERIES_SECRET キーを"" 空の文字列に設定します。オペレーターの ConfigMap を変更するには、オペレーターの再起動が必要です。
- 特定のクラスターで無効にします。クラスターで.spec.monitoring.disableDefaultQueries を true に設定します。

重要: *MONITORING_QUERIES_CONFIGMAP / MONITORING_QUERIES_SECRET* を介して指定された ConfigMap または Secret は、常に固定名`cnpg-default-monitoring` でクラスターの名前空間にコピーされます。そのため、デフォルトのメトリックを使用する場合は、クラスターの名前空間にこの名前で ConfigMap を作成しないでください。

32.1.11 Prometheus Postgres エクスポーターとの違い

CloudNativePG は、PostgreSQL Prometheus Exporter からインスピレーションを得ていますが、いくつかの違いがあります。特に、cache_seconds フィールドは CloudNativePG のエクスポーターに実装されていません。

32.2 オペレーターのモニタリング

オペレーターは、metrics という名前のポート 8080 で HTTP を介して Prometheus メトリックを内部公開します。

注釈: **エクスポートされたメトリックを検査する方法** の指示に従って、エクスポートされたメトリックを検査できます。

以下のセクション。

現在、オペレーターはデフォルトの kubebuilder メトリックを公開しています。詳細については、kubebuilder documentation を参照してください。

32.2.1 Prometheus Operator の例

オペレーターの展開は、次の PodMonitor を定義することにより、 Prometheus Operator を使用して監視できます。

リソース

```yaml
apiVersion: monitoring.coreos.com/v1
kind: PodMonitor
metadata:
  name: cnpg-controller-manager
spec:
  selector:
    matchLabels:
      app.kubernetes.io/name: cloudnative-pg
  podMetricsEndpoints:
    - port: metrics
```

32.3 エクスポートされたメトリックを検査する方法

このセクションでは、同じ名前空間で curl を実行する一時ポッドを使用して、特定の PostgreSQL インスタンスマネージャープライマリまたはレプリカまたはオペレーターによってエクスポートされたメトリックを検査する方法に関する基本的な手順を提供します。

注釈: 次の例では、PostgreSQL クラスターと並んで、デフォルトの名前空間で作業していることを前提としています。 Kubernetes の基本的な知識を適用して、この例をユースケースに自由に調整してください。

次の内容で curl.yaml ファイルを作成します。

```yaml
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
  name: curl
spec:
  containers:
    - name: curl
      image: curlimages/curl:8.2.1
      command: ["sleep", "3600"]
```

次に、ポッドを作成します。

```
kubectl apply -f curl.yaml
```

インスタンスによってエクスポートされたメトリックを検査する場合、ターゲットポッドのポート 9187 に接続する必要があります。これは、実行する汎用コマンドです。ポッドの正しい IP を使用していることを確認します。

```
kubectl exec -ti curl -- curl -s <pod_ip>:9187/metrics
```

たとえば、PostgreSQL クラスターが `cluster-example` と呼ばれ、クラスター内の最初のポッドのエクスポートされたメトリックを取得する場合、次のコマンドを実行してそのポッドの IP をプログラム的に取得できます。

```
POD_IP=$(kubectl get pod cluster-example-1 --template {{.status.podIP}})
```

そして、実行します。

```
kubectl exec -ti curl -- curl -s ${POD_IP}:9187/metrics
```

TLS メトリックを有効にした場合、代わりに実行します。

```
kubectl exec -ti curl -- curl -sk https://${POD_IP}:9187/metrics
```

オペレーターのメトリックにアクセスする場合は、オペレーターが実行されているポッドをポイントし、ターゲットとして TCP ポート 8080 を使用する必要があります。

インスペクションの最後に、`curl` ポッドを削除していることを確認してください。

```
kubectl delete -f curl.yaml
```

32.4 補助リソース

重要: これらのリソースは、説明と実験のために提供されており、実稼働システムへのいかなる種類の推奨を表すものではありません

---

doc/src/samples/monitoring/

ディレクトリには、可観測性のための一連のサンプルファイルがあります。*Part 4 of the quickstart* を参照してください。

コンテキストのセクション

- `kube-stack-config.yaml` kube-stack Helm chart インストールの構成ファイル。これにより、Prometheus がすべての PodMonitor リソースをリッスンすることが保証されます。
- `prometheusrule.yaml` CloudNativePG のアラートを含む `PrometheusRule` 。注これには、通知サービスとの相互運用は含まれません。Prometheus documentation を参照してください。

- `podmonitor.yaml` CloudNativePG Operator 展開の `PodMonitor` 。

さらに、Prometheus アラートルールの「生」ソースを `alerts.yaml` ファイルで提供します。

Grafana dashboard には、専用のリポジトリがあります。

`kube-prometheus-stack` の構成では、`kube-stack-config.yaml` で提供するものより他のフィールドと設定が利用できることに注意してください。

`helm show values prometheus-community/kube-prometheus-stack` を実行して表示できます。詳細については、kube-prometheus-stack を参照してください。

ページ。

第33章　ロギング

CloudNativePG は、セキュリティ上の理由からストレージに永続化せずに、PostgreSQL ログを含む標準出力に JSON 形式でログを出力します。このデザインにより、stern のようなコマンドラインのものを含む、ほとんどの Kubernetes 互換ログ管理ツールとのシームレスな統合が促進されます。

重要: ログの長期保存と管理はオペレーターの範囲外であり、Kubernetes インフラストラクチャレベルで処理する必要があります。詳細については、 *Kubernetes Logging Architecture* を参照してください。

ドキュメント。

各ログエントリには、次のフィールドが含まれます。

- `level` – ログレベルたとえば `info` 、`notice` 。
- `ts` – タイムスタンプ。
- `logger` – ログのタイプ `postgres` 、`pg_controldata` など。
- `msg` – ログメッセージ、またはメッセージが JSON 形式の場合はキーワード `record`
- `record` – 実際のレコード。`logger` タイプに応じて異なる構造。
- `logging_pod` – ログが生成されたポッドの名前。

注釈: ログ取り込みシステムでカスタムフィールド名が必要な場合、オペレーターコントローラの `log-field-level` および `log-field-timestamp` フラグを使用して、*level* および `ts` フィールドの名前を変更できます。これは、 *cloudnative-pg* オペレーターの `Deployment` 定義を編集することにより構成できます。

33.1 クラスターログ

`logLevel` オプションを使用して、クラスター仕様でインスタンスポッドのログレベルを構成できます。使用可能なログレベルは `error` 、`warning` 、`info` デフォルト、`debug` 、および `trace` です。

重要: 現在、ログレベルはインスタンスの起動時にのみ設定できます。クラスターが起動した後のクラスター仕様のログレベルの変更は、新しいポッドにのみ適用され、既存のポッドには適用されません。

33.2 オペレーターログ

オペレーターポッドによって生成されるログは、インスタンスポッドと同じログレベルで構成できます。`error`、`warning`、`info` デフォルト、`debug`、および `trace`。

オペレーターのログレベルは、オペレーターの `Deployment` 定義を編集し、`--log-level` コマンドライン引数を目的の値に設定することにより、構成できます。

33.3 PostgreSQL ログ

各 PostgreSQL ログエントリは、`logger` キーが `postgres` に設定された JSON オブジェクトです。ログエントリの構造は次のとおりです。


```
{
  "level": "info",
  "ts": 1619781249.7188137,
  "logger": "postgres",
  "msg": "record",
  "record": {
    "log_time": "2021-04-30 11:14:09.718 UTC",
    "user_name": "",
    "database_name": "",
    "process_id": "25",
    "connection_from": "",
    "session_id": "608be681.19",
    "session_line_num": "1",
    "command_tag": "",
    "session_start_time": "2021-04-30 11:14:09 UTC",
    "virtual_transaction_id": "",
    "transaction_id": "0",
    "error_severity": "LOG",
    "sql_state_code": "00000",
    "message": "database system was interrupted; last known up at 2021-04-30 11:14:07␣
↪UTC",
    "detail": "",
    "hint": "",
    "internal_query": "",
    "internal_query_pos": "",
    "context": "",
    "query": "",
    "query_pos": "",
    "location": "",
    "application_name": "",
    "backend_type": "startup"
  },
```


(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  "logging_pod": "cluster-example-1"
}
```

注釈: 内部的に、オペレーターは PostgreSQL の CSV ログ形式を使用します。詳細については、*PostgreSQL documentation on CSV log format* を参照してください。

33.4 PG 監査ログ

CloudNativePG は、PostgreSQL クラスターで PGAudit のシームレスなネイティブサポートを提供します。

PGAudit を有効にするには、クラスター構成の `postgresql` セクションに必要な `pgaudit` パラメーターを追加します。

重要: PGAudit ライブラリを `shared_preload_libraries` に追加する必要があります。 CloudNativePG は、PostgreSQL 構成内の `pgaudit.*` パラメーターの存在に基づいて、これを自動的に管理します。オペレーターは、*shared_preload_libraries* からのライブラリの追加と削除の両方を処理します。

さらに、オペレーターは、クラスター内のすべてのデータベースで PGAudit 拡張機能の作成と削除を管理します。

重要: CloudNativePG は、接続を受け入れるクラスター内のすべてのデータベースで `CREATE EXTENSION` および `DROP EXTENSION` コマンドを実行します。

次の例は、PGAudit が有効および構成された PostgreSQL `Cluster` 展開を示しています。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  postgresql:
    parameters:
      "pgaudit.log": "all, -misc"
      "pgaudit.log_catalog": "off"
      "pgaudit.log_parameter": "on"
      "pgaudit.log_relation": "on"
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  storage:
    size: 1Gi
```

PGAudit によって生成された監査 CSV ログエントリは解析され、他のすべてのログと同様に、JSON 形式で標準出力にルーティングされます。

- `.logger` は `pgaudit` に設定されます。
- `.msg` は `record` に設定されます。
- `.record` には、解析されたレコード全体が JSON オブジェクトとして含まれています。この構造は、JSON オブジェクトとしてフォーマットされた PGAudit CSV メッセージを含む `.record.audit` を除き `logging_collector` ログの構造に似ています。

この例は、サンプルログエントリを示しています。

```
{
  "level": "info",
  "ts": 1627394507.8814096,
  "logger": "pgaudit",
  "msg": "record",
  "record": {
    "log_time": "2021-07-27 14:01:47.881 UTC",
    "user_name": "postgres",
    "database_name": "postgres",
    "process_id": "203",
    "connection_from": "[local]",
    "session_id": "610011cb.cb",
    "session_line_num": "1",
    "command_tag": "SELECT",
    "session_start_time": "2021-07-27 14:01:47 UTC",
    "virtual_transaction_id": "3/336",
    "transaction_id": "0",
    "error_severity": "LOG",
    "sql_state_code": "00000",
    "backend_type": "client backend",
    "audit": {
      "audit_type": "SESSION",
      "statement_id": "1",
      "substatement_id": "1",
      "class": "READ",
      "command": "SELECT FOR KEY SHARE",
      "statement": "SELECT pg_current_wal_lsn()",
      "parameter": "<none>"
    }
  },
  "logging_pod": "cluster-example-1"
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
}
```

PGAudit documentation を参照してください。

レコードの各フィールドの詳細については、

33.5 その他のログ

オペレーターとそのインスタンスによって生成されたすべてのログは JSON 形式であり、`logger` フィールドは、それらを生成したプロセスを示します。使用可能な `logger` 値は次のとおりです。

- `barman-cloud-wal-archive` `barman-cloud-wal-archive` からのログ
- `barman-cloud-wal-restore` `barman-cloud-wal-restore` からのログ
- `initdb` `initdb` の実行からのログ
- `pg_basebackup` `pg_basebackup` の実行からのログ
- `pg_controldata` `pg_controldata` の実行からのログ
- `pg_ctl` `pg_ctl` サブコマンドの実行からのログ
- `pg_rewind` `pg_rewind` の実行からのログ
- `pgaudit` PGAudit 拡張機能からのログ
- `postgres` `postgres` インスタンスからのログ `msg` は `record` とは異なります
- `wal-archive` インスタンスマネージャーの `wal-archive` サブコマンドからのログ
- `wal-restore` インスタンスマネージャーの `wal-restore` サブコマンドからのログ
- `instance-manager` *PostgreSQL instance manager* から

特定の構造に従う `postgres` を除き 、他のすべての `logger` 値には、ログに記録されるエスケープメッセージを含む `msg` フィールドが含まれます。

第34章　証明書

CloudNativePG は、TLS 証明書をネイティブにサポートするように設計されました。クラスターをセットアップするには、オペレーターに以下が必要です。

- サーバー認証局 CA 証明書
- サーバー CA によって署名されたサーバー TLS 証明書
- クライアント CA 証明書
- クライアント CA によって生成されたストリーミングレプリケーションクライアント証明書

注釈: クラスターが使用するすべてのシークレットとその有効期限は、クラスターのステータスで見つけることができます。

CloudNativePG は、TLS 証明書に関して非常に柔軟です。主に 2 つのモードで動作します。

1. **オペレーター管理モード**–証明書は完全に自動化された方法でオペレーターによって内部管理され、CloudNativePG によって作成された CA を使用して署名されます。
2. **ユーザー提供の証明書モード** – 証明書はオペレーターの外部で生成され、シークレットとしてクラスター定義にインポートされます。CloudNativePG は cert-manager と自分自身を統合します

Cert-manager **の例** を参照してください。

証明書の一部のみが CNPG 外部で生成されるハイブリッドアプローチを選択することもできます。

注釈: オペレーターとインスタンスは、DNS 名を無視して、CA のみに対してサーバー証明書を検証します。このアプローチは、クラスター内の通信に使用される `<cluster>-rw` サービスのユーザー指定証明書に DNS 名が一般的に欠如しているためです。

34.1 オペレーター管理モード

デフォルトでは、オペレーターは単一の認証局 CA を自動的に生成して、クライアントとサーバーの証明書の両方を発行します。これらの証明書は事業者によって継続的に管理され、有効期限の 7 日前に自動更新されます 90 日の有効期間内。

注釈: *CERTIFICATE_DURATION* および `EXPIRING_CHECK_THRESHOLD` 環境変数を構成することにより、このデフォルトの動作を調整できます。詳細なガイダンスについては、**オペレーター設定** を参照し

てください。

重要: 単純なリロード操作で十分であるため、証明書の更新は PostgreSQL サーバーのダウンタイムを発生させません。ただし、CloudNativePG によって制御されないユーザー管理証明書は、更新プロセスの後に再発行する必要があります。

34.1.1 サーバー証明書

34.1.2 サーバー CA シークレット

オペレーターは、自己署名 CA を生成し、次のキーを含む汎用シークレットに保存します。

- `ca.crt` – サーバー証明書の検証に使用される CA 証明書。クライアントの接続文字列で `sslrootcert` として使用されます。
- `ca.key` – サーバー SSL 証明書に自動的に署名するために使用されるキー。

34.1.3 サーバー TLS シークレット

オペレーターは、生成された自己署名 CA を使用して、サーバー TLS 証明書に署名します。これは `kubernetes.io/tls` タイプのシークレットに保存され、インスタンスによって `ssl_cert_file` および `ssl_key_file` として使用されるように構成されます。このアプローチにより、クライアントは自分の ID を確認し、安全に接続できます。

34.1.4 サーバー代替 DNS 名

デフォルトのものに加えて、生成されたサーバー TLS シークレットの一部として DNS サーバーの代替名を指定できます。

34.1.5 クライアント証明書

34.1.6 クライアント CA シークレット

デフォルトでは、サーバー CA と同じ自己署名 CA が使用されます。パブリック部分は `ssl_ca_file` としてすべてのインスタンスに渡されるため、署名したクライアント証明書を検証できます。プライベートキーは同じシークレットに保存され、`kubectl cnpg` プラグインによって生成されたクライアント証明書の署名に使用されます。

34.1.7 クライアント streaming_replica 証明書

オペレーターは、生成された自己署名 CA を使用して、ユーザー `streaming_replica` のクライアント証明書に署名し、`kubernetes.io/tls` タイプのシークレットに保存します。プライマリインスタンスへの安全な接続を許可するために、この証明書はレプリカの接続文字列で `sslcert` および `sslkey` として渡されます。

34.2 ユーザー提供の証明書モード

34.2.1 サーバー証明書

必要に応じて、 cert-manager などの別のコンポーネントを使用して生成し、2 つのサーバー証明書を提供することもできます。クラスターにカスタムサーバー TLS 証明書を使用するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

- `serverTLSSecret` – サーバー TLS 証明書を含む `kubernetes.io/tls` タイプのシークレットの名前。これには、標準の `tls.crt` および `tls.key` キーの両方が含まれている必要があります。
- `serverCASecret` – `ca.crt` キーを含むシークレットの名前。

注釈: オペレーターは、引き続きクライアント証明書に関連する 2 つのシークレットを作成および管理します。

注釈: オペレーターとインスタンスは、DNS 名を無視して、CA のみに対してサーバー証明書を検証します。このアプローチは、クラスター内の通信に使用される `<cluster>-rw` サービスのユーザー指定証明書に DNS 名が一般的に欠如しているためです。

注釈: ConfigMap とシークレットをインスタンスによってリロードする場合は、キー *cnpg.io/reload* のラベルを追加できます。それ以外の場合は、 *kubectl cnpg reload* サブコマンドを使用してインスタンスをリロードする必要があります。

34.2.2 例

次のファイルがあるとします。

- `server-ca.crt` – サーバー TLS 証明書に署名した CA の証明書。
- `server.crt` – サーバー TLS 証明書の証明書。
- `server.key` –サーバー TLS 証明書のプライベートキー。

CA 証明書を含むシークレットを作成します。

```
kubectl create secret generic my-postgresql-server-ca \
  --from-file=ca.crt=./server-ca.crt
```

TLS 証明書を使用してシークレットを作成します。

```
kubectl create secret tls my-postgresql-server \
  --cert=./server.crt --key=./server.key
```

これらのシークレットを参照する PostgreSQL クラスターを作成します。

```
kubectl apply -f - <<EOF
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  certificates:
    serverCASecret: my-postgresql-server-ca
    serverTLSSecret: my-postgresql-server
  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi
EOF
```

新しいクラスターは、TLS 接続に提供されたサーバー証明書を使用します。

34.2.3 Cert-manager の例

この簡単な例は、 cert-manager の使用方法を示しています

自己署名 CA をセットアップし、必要な TLS サーバー証明書を生成するには。

```
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: selfsigned-issuer
spec:
  selfSigned: {}
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-postgres-server-cert
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: my-postgres-server-cert
spec:
  secretName: my-postgres-server-cert
  usages:
    - server auth
  dnsNames:
    - cluster-example-lb.internal.mydomain.net
    - cluster-example-rw
    - cluster-example-rw.default
    - cluster-example-rw.default.svc
    - cluster-example-r
    - cluster-example-r.default
    - cluster-example-r.default.svc
    - cluster-example-ro
    - cluster-example-ro.default
    - cluster-example-ro.default.svc
  issuerRef:
    name: selfsigned-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
```

Cert-manager は、`my-postgres-server-cert` という名前のシークレットを作成します。これには、必要なすべてのファイルが含まれており、次のようにクラスターから参照できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  certificates:
    serverTLSSecret: my-postgres-server-cert
    serverCASecret: my-postgres-server-cert
  storage:
    size: 1Gi
```

cert-manager を使用して、サーバーとクライアントの両方の CA、および展開マニフェストの証明書を管理する完全な例を見つけることができます。

```
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: selfsigned-issuer
spec:
  selfSigned: {}
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: server-ca
spec:
  isCA: true
  commonName: my-selfsigned-server-ca
  secretName: server-ca-key-pair
  privateKey:
    algorithm: ECDSA
    size: 256
  issuerRef:
    name: selfsigned-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: server-ca-issuer
spec:
  ca:
    secretName: server-ca-key-pair
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-postgres-server-cert
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: my-postgres-server-cert
spec:
  secretName: my-postgres-server-cert
  usages:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    - server auth
  dnsNames:
    - cluster-example-lb.internal.mydomain.net
    - cluster-example-rw
    - cluster-example-rw.default
    - cluster-example-rw.default.svc
    - cluster-example-r
    - cluster-example-r.default
    - cluster-example-r.default.svc
    - cluster-example-ro
    - cluster-example-ro.default
    - cluster-example-ro.default.svc
  issuerRef:
    name: server-ca-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: client-ca
spec:
  isCA: true
  commonName: my-selfsigned-client-ca
  secretName: client-ca-key-pair
  privateKey:
    algorithm: ECDSA
    size: 256
  issuerRef:
    name: selfsigned-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: client-ca-issuer
spec:
  ca:
    secretName: client-ca-key-pair
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-postgres-client-cert
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: my-postgres-client-cert
spec:
  secretName: my-postgres-client-cert
  usages:
    - client auth
  commonName: streaming_replica
  issuerRef:
    name: client-ca-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  certificates:
    serverTLSSecret: my-postgres-server-cert
    serverCASecret: my-postgres-server-cert
    clientCASecret: my-postgres-client-cert
    replicationTLSSecret: my-postgres-client-cert
  storage:
    size: 1Gi
```

34.2.4 クライアント証明書

必要に応じて、cert-manager や HashiCorp vault などの別のコンポーネントを使用して生成し、2 つのクライアント証明書を提供することもできます。カスタム CA を使用してクラスターのクライアント証明書を検証するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

- `replicationTLSSecret` – ユーザー `streaming_replica` のクライアント証明書を含む `kubernetes.io/tls` タイプのシークレットの名前 `streaming_replica`。これには、標準の `tls.crt` および `tls.key` キーの両方が含まれている必要があります。
- `clientCASecret` – クライアント証明書の検証に使用する CA の `ca.crt` キーを含むシークレットの名前。

注釈: オペレーターは、サーバー証明書に関連する 2 つのシークレットを作成および管理します。

注釈: クラスターはクライアント CA 秘密キーを制御していないため、 *kubectl cnpg certificate* を使用してクライアント証明書を生成できません。

注釈: ConfigMap とシークレットをインスタンスによって自動的にリロードする場合は、キー *cnpg.io/reload* のラベルを追加できます。それ以外の場合、 *kubectl cnpg reload* サブコマンドを使用してインスタンスをリロードする必要があります。

34.2.5 Cert-manager の例

この簡単な例は、 cert-manager の使用方法を示しています

自己署名 CA をセットアップし、必要な TLS サーバー証明書を生成するには。

```
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: selfsigned-issuer
spec:
  selfSigned: {}
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-postgres-client-cert
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: my-postgres-client-cert
spec:
  secretName: my-postgres-client-cert
  usages:
    - client auth
  commonName: streaming_replica
  issuerRef:
    name: selfsigned-issuer
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
```

Cert-manager は、必要なすべてのファイルを含む my-postgres-client-cert という名前のシークレットを作成します。次のようにクラスターから参照できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  certificates:
    clientCASecret: my-postgres-client-cert
    replicationTLSSecret: my-postgres-client-cert
  storage:
    size: 1Gi
```

cert-manager を使用して、サーバーとクライアントの両方の CA、および展開マニフェストの証明書を管理する完全な例を見つけることができます。

```
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: selfsigned-issuer
spec:
  selfSigned: {}
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: server-ca
spec:
  isCA: true
  commonName: my-selfsigned-server-ca
  secretName: server-ca-key-pair
  privateKey:
    algorithm: ECDSA
    size: 256
  issuerRef:
    name: selfsigned-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
kind: Issuer
metadata:
  name: server-ca-issuer
spec:
  ca:
    secretName: server-ca-key-pair
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-postgres-server-cert
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: my-postgres-server-cert
spec:
  secretName: my-postgres-server-cert
  usages:
    - server auth
  dnsNames:
    - cluster-example-lb.internal.mydomain.net
    - cluster-example-rw
    - cluster-example-rw.default
    - cluster-example-rw.default.svc
    - cluster-example-r
    - cluster-example-r.default
    - cluster-example-r.default.svc
    - cluster-example-ro
    - cluster-example-ro.default
    - cluster-example-ro.default.svc
  issuerRef:
    name: server-ca-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: client-ca
spec:
  isCA: true
  commonName: my-selfsigned-client-ca
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  secretName: client-ca-key-pair
  privateKey:
    algorithm: ECDSA
    size: 256
  issuerRef:
    name: selfsigned-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Issuer
metadata:
  name: client-ca-issuer
spec:
  ca:
    secretName: client-ca-key-pair
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: my-postgres-client-cert
  labels:
    cnpg.io/reload: ""
- --
apiVersion: cert-manager.io/v1
kind: Certificate
metadata:
  name: my-postgres-client-cert
spec:
  secretName: my-postgres-client-cert
  usages:
    - client auth
  commonName: streaming_replica
  issuerRef:
    name: client-ca-issuer
    kind: Issuer
    group: cert-manager.io
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  certificates:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    serverTLSSecret: my-postgres-server-cert
    serverCASecret: my-postgres-server-cert
    clientCASecret: my-postgres-client-cert
    replicationTLSSecret: my-postgres-client-cert
  storage:
    size: 1Gi
```

第35章　クライアントTLS/SSL接続

参考:

証明書 を参照

CloudNativePG が TLS 証明書をサポートする方法の詳細については、こちらをご覧ください。

CloudNativePG オペレーターは、転送中の暗号化とサーバー側とクライアント側での認証の両方で TLS / SSL と連携するように設計されました。CNPG オペレーターを使用して作成されたクラスターには、TLS クライアント証明書を作成および署名するための認証局 CA が付属します。kubectl の cnpg プラグインを使用して、パスワードを使用する代わりにユーザーを認証するための新しい TLS クライアント証明書を発行できます。

TLS / SSL 証明書を使用して認証するためのこれらの手順では、マニフェストを使用してクラスターをインストールしていることを前提としています。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  postgresql:
    pg_hba:
      - hostssl app all all cert

  storage:
    size: 1Gi
```

構成より規約パラダイムによると、そのファイルは、app と呼ばれるユーザーが所有する app データベースを作成します。`bootstrap` セクションの `initdb` 構成を介して、この規則を変更できます。

35.1 新しい証明書の発行

参考:

Certificates in the CloudNativePG plugin を参照

kubectl のプラグインの使用方法の詳細については、コンテンツをご覧ください。

次のようにして、`cluster-example` PostgreSQL クラスターにアプリユーザーの証明書を作成できます。

```
kubectl cnpg certificate cluster-app \
  --cnpg-cluster cluster-example \
  --cnpg-user app
```

これで、証明書を検証できるようになりました。

```
kubectl get secret cluster-app \
  -o jsonpath="{.data[tls\.crt]}" \
  | base64 -d | openssl x509 -text -noout \
  | head -n 11
```

出力

```
Certificate:
  Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
      5d:e1:72:8a:39:9f:ce:51:19:9d:21:ff:1e:4b:24:5d
    Signature Algorithm: ecdsa-with-SHA256
    Issuer: OU = default, CN = cluster-example
    Validity
      Not Before: Mar 22 10:22:14 2021 GMT
      Not After : Mar 22 10:22:14 2022 GMT
    Subject: CN = app
```

ご覧のとおり、デフォルトの TLS クライアント証明書は、90 日間の有効期間と、PostgreSQL のユーザー名に対応する単純な CN で作成されます。`EXPIRE_CHECK_THRESHOLD` および `CERTIFICATE_DURATION` パラメーターを使用して、有効性としきい値を指定できます。これは、`pg_hba.conf` の `hostssl` エントリの `cert` 認証方法を活用するために必要です。

35.2 TLS 証明書を介した接続のテスト

次に、CloudNativePG クラスターに接続するデモクライアントアプリケーションを構成することにより、このクライアント証明書をテストします。

`cert-test.yaml` と呼ばれる次のマニフェストは、データベースクラスターが実行されているのと同じ名前空間にテストアプリケーションを使用してデモポッドを作成します。

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
  name: cert-test
spec:
  replicas: 1
  selector:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  matchLabels:
    app: webtest
template:
  metadata:
    labels:
      app: webtest
  spec:
    containers:
      - image: ghcr.io/cloudnative-pg/webtest:1.6.0
        name: cert-test
        volumeMounts:
          - name: secret-volume-root-ca
            mountPath: /etc/secrets/ca
          - name: secret-volume-app
            mountPath: /etc/secrets/app
        ports:
          - containerPort: 8080
        env:
          - name: DATABASE_URL
            value: >
              sslkey=/etc/secrets/app/tls.key
              sslcert=/etc/secrets/app/tls.crt
              sslrootcert=/etc/secrets/ca/ca.crt
              host=cluster-example-rw.default.svc
              dbname=app
              user=app
              sslmode=verify-full
          - name: SQL_QUERY
            value: SELECT 1
        readinessProbe:
          httpGet:
            port: 8080
            path: /tx
    volumes:
      - name: secret-volume-root-ca
        secret:
          secretName: cluster-example-ca
          defaultMode: 0600
      - name: secret-volume-app
        secret:
          secretName: cluster-app
          defaultMode: 0600
```

このポッドは、CloudNativePG オペレーターによって管理されるシークレットをマウントします。

- `sslcert` – TLS クライアントのパブリック証明書。

- sslkey – TLS クライアント証明書のプライベートキー。
- sslrootcert – インスタンスの ID の確認に使用するサーバー上の証明書に署名した TLS CA 証明書。

これらは、psql および pgbench のような他の libpq ベースのアプリケーションが Postgres データベースへの TLS 暗号化された接続を確立するために必要なデフォルトリソースを作成するために使用されます。

デフォルトでは、psql は現在のユーザーの~/.postgresql ディレクトリで証明書を検索しますが、sslkey 、sslcert 、および sslrootcert オプションを使用して、libpq を暗号化マテリアルの実際の場所を指すことができます。これらのファイルのコンテンツは、kubectl の cnpg プラグインを使用して以前に作成したシークレットから収集されます。

アプリケーションを展開します。

```
kubectl create -f cert-test.yaml
```

次に、作成したポッドを PostgreSQL クライアントとして使用して、作成した TLS 証明書を使用して SSL 接続と認証を検証します。

準備状況プローブは、データベースサーバーに到達できるときにアプリケーションの準備ができていることを確認するように構成されました。

接続が機能していることを確認できます。これを行うには、ポッドのコンテナ内でインタラクティブな bash を実行し、必要なオプションを使用して psql を実行します。PostgreSQL サーバーは、読み取り/書き込みの Kubernetes サービスを介して公開されます。psql コマンドを指定してこのサービスに接続します。

```
kubectl exec -it cert-test -- bash -c "psql
sslkey=/etc/secrets/app/tls.key sslcert=/etc/secrets/app/tls.crt
sslrootcert=/etc/secrets/ca/ca.crt host=cluster-example-rw.default.svc dbname=app
user=app sslmode=verify-full -c select version();"
```

出力

```
                                        version
- ------------------------------------------------------------------------------------
↪-
- -----------------
PostgreSQL 17.2 on x86_64-pc-linux-gnu, compiled by gcc (GCC) 8.3.1 20191121 (Red Hat
8. 3.1-5), 64-bit
(1 row)
```

35.3 TLS プロトコルバージョンについて

デフォルトでは、オペレーターは両方の ssl_min_protocol_version を設定します

と ssl_max_protocol_version

`TLSv1.3` に。

これは、PostgreSQL オペランドイメージに、`TLSv1.3` バージョンをサポートする OpenSSL ライブラリが含まれていることを前提としています。そうでない場合、またはクライアントアプリケーションがより低いバージョン番号を必要とする場合、他の Postgres GUC と同様に、PostgreSQL 構成で手動で構成する必要があります。

第36章　アプリケーションから接続する

アプリケーションは、同じ Kubernetes クラスター内の CloudNativePG によって作成されたサービスで動作することになっています。

サービスとその管理方法の詳細については、**サービスマネージメント** セクションを参照してください。

ヒント: アプリケーションでこれらのサービスを使用し、特定の PostgreSQL インスタンスに直接接続することを強くお勧めします。後者はクラスターの有効期間中に変更される可能性があります。

これらのサービスは、次の方法でアプリケーションで使用できます。

- DNS 解決
- 環境変数

PostgreSQL に接続するための資格情報には、オペレーターによって生成されたシークレットを使用できます。

参考:

接続プーラーとして PgBouncer を利用し、アプリケーションと PostgreSQL クラスターの間にアクセスレイヤーを作成する方法については、 **接続プーリング** を参照してください。

36.1 DNS 解決

Kubernetes DNS サービスを使用して、特定のサーバーをポイントできます。オペレーターには Kubernetes DNS サービスが必要です。アプリケーションが PostgreSQL クラスターと同じ名前空間に展開されている場合、サービスの名前を使用してこれを行うことができます。PostgreSQL クラスターが別の名前空間にある場合、完全な修飾子 `service-name.namespace-name` を使用できます。

DNS が優先および推奨される検出方法です。

36.2 環境変数

PostgreSQL クラスターが含まれる同じ名前空間にアプリケーションを展開する場合、環境変数を使用してデータベースに接続することもできます。

たとえば、PostgreSQL クラスターの名前が pg-database であるとすると、アプリケーションで次の環境変数を使用できます。

- PG_DATABASE_R_SERVICE_HOST 読み取り専用ワークロードのすべての PostgreSQL インスタンスを指すサービスの IP アドレス
- PG_DATABASE_RO_SERVICE_HOST クラスターのすべてのホットスタンバイレプリカをポイントするサービスの IP アドレス
- PG_DATABASE_RW_SERVICE_HOST クラスターの_primary_インスタンスを指すサービスの IP アドレス

36.3 シークレット

PostgreSQL オペレーターは、展開する PostgreSQL クラスターごとに最大 2 つの basic-auth タイプシークレットを生成します。

- [cluster name]-app .spec.bootstrap.initdb.secret.name を介して既存のシークレットを提供していない場合
- [cluster name]-superuser .spec.enableSuperuserAccess が true に設定されており、.spec.superuserSecret を使用して別のシークレットを指定していない場合

各シークレットには次のものが含まれます。

- ユーザー名
- パスワード
- RW サービスへのホスト名
- ポート番号
- データベース名
- 作業用 .pgpass file
- uri
- jdbc-uri

-app 資格情報は、PostgreSQL クラスターに接続するアプリケーションが使用するものであり、データベースを_owning_するユーザーに対応します。

-superuser のものは、管理目的でのみ使用されることになっており、postgres ユーザーに対応します。

重要: ネットワーク上のスーパーユーザーのアクセスはデフォルトで無効になっています。

第37章　接続プーリング

CloudNativePG は、`Pooler` カスタムリソース定義 CRD を介して、PostgreSQL で最も人気のあるオープンソース接続プーラーの 1 つである PgBouncer との接続プーリングのネイティブサポートを提供します。

簡単に言うと、CloudNativePG のプーラーは、アプリケーションと PostgreSQL サービスたとえば `rw` サービスの間にある PgBouncer ポッドの展開です。別個の、スケーラブル、構成可能、高可用性のデータベースアクセスレイヤーを作成します。

37.1 アーキテクチャ

次の図は、PgBouncer に基づいたデータベースアクセスレイヤーの導入が CloudNativePG のアーキテクチャをどのように変更するかを強調しています。PostgreSQL プライマリサービスに直接接続する代わりに、アプリケーションは PgBouncer の同等のサービスに接続できます。この機能により、既存の接続を再利用できるため、PostgreSQL 側でのパフォーマンスとリソース管理が向上します。

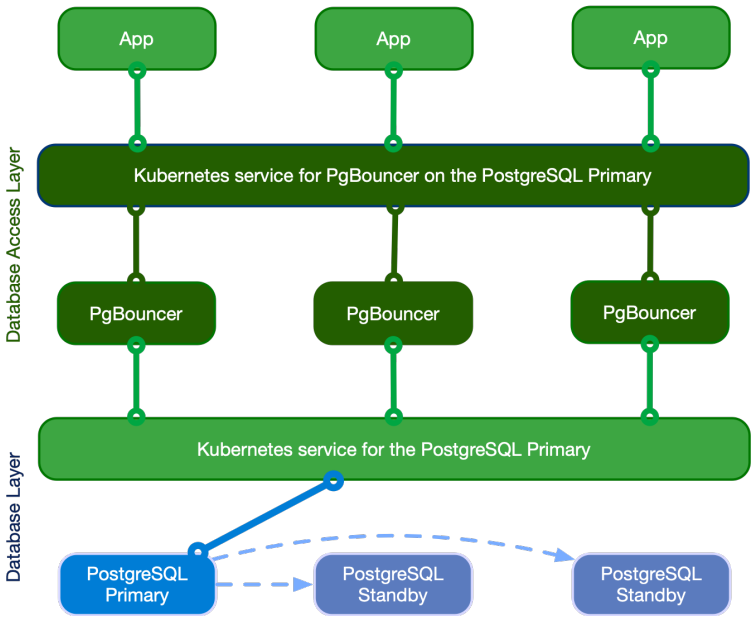


図 1: Applications writing to the single primary via PgBouncer

37.2 クイックスタート

この例は、CloudNativePG が PgBouncer プーラーを実装する方法を示すのに役立ちます。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Pooler
metadata:
  name: pooler-example-rw
spec:
  cluster:
    name: cluster-example

  instances: 3
  type: rw
  pgbouncer:
    poolMode: session
    parameters:
      max_client_conn: "1000"
      default_pool_size: "10"
```

重要: プーラー名は、同じ名前空間内のクラスター名と同じにすることはできません。

この例では、 `cluster-example` と呼ばれる Postgres `Cluster` リソースに厳密に関連付けられる `pooler-example-rw` と呼ばれる `Pooler` リソースを作成します。これは、読み取り/書き込みサービス `rw` 、したがって `cluster-example-rw` によって識別されるプライマリを指します。

`Pooler` リソースは、Postgres クラスターと同じ名前空間に存在する必要があります。これは、session で構成された latest stable image of PgBouncer を実行する 3 つのポッドの Kubernetes デプロイメントで構成されています

それぞれ最大 1000 の接続を受け入れます。デフォルトのプールサイズは、PostgreSQL に対する 10 ユーザー/データベースペアです。

重要: *Pooler* リソースは、PgBouncer に`*` フォールバックデータベースのみを設定します。この設定は、クライアントから渡された接続文字列のすべてのパラメーターが PostgreSQL サーバーに中継されることを意味します。詳細については、 ["Section [databases]" in the PgBouncer documentation](https://www.pgbouncer.org/config.html#section-databases) を参照してください。

CloudNativePG は、PgBouncer で使用される構成ファイルを含むプーラーと同じ名前のシークレットも作成します。

参考:

詳細はこちら PgBouncerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerSpec}

API リファレンスで。

37.3 リソースのライフサイクルのプール化

`Pooler` リソースはクラスター管理リソースではありません。プーラーは、必要に応じて手動で作成します。PostgreSQL クラスターごとに複数のプーラーを展開することもできます。

重要な点は、`Cluster` および `Pooler` リソースのライフサイクルが現在独立していることです。クラスターの削除はプーラーの削除を意味しません。その逆も同様です。

重要: プーラーがどのように動作するかを理解すると、使用可能なアーキテクチャの点で完全に自由になります。プーラーのないクラスター、単一のプーラーを含むクラスター、または複数のプーラー、つまりアプリケーションごとに 1 つを含むクラスターを持つことができます。

重要: オペレーターがアップグレードされると、プーラーポッドのローリングアップグレードが実行されます。これは、プーラーポッド内のインスタンスマネージャーもアップグレードされるようにするために必要です。

37.4 セキュリティ

PgBouncer プーラーは、プールのクライアントアプリケーション側とサーバー PostgreSQL 側の両方で、TLS 接続を介した転送中の暗号化の CloudNativePG サポートと透過的に統合されています。

具体的には、PgBouncer は PostgreSQL サーバーの証明書を再利用します。また、TLS クライアント証明書認証を使用して PostgreSQL サーバーに接続し、クライアントのパスワード認証のために `auth_query` を実行します 認証を使用する を参照してください。

コンテナは pgbouncer システムユーザーとして実行され、`pgbouncer` データベースへのアクセスは、ピア認証を介したローカル接続を介してのみ許可されます。

37.4.1 証明書

デフォルトでは、PgBouncer プーラーは、クラスターが使用するものと同じ証明書を使用します。ただし、これらの証明書を提供した場合、プーラーは次の形式のシークレットを受け入れます。

1. ベーシック認証
2. TLS
3. 不透明

不透明の場合、使用する必要がある次の特定のキーを検索します。

- tls.crt
- tls.key

したがって、このシークレットを TLS シークレットとして扱い、そこから開始できます。

37.5 認証

パスワードベースの認証は、CloudNativePG の PgBouncer のクライアントでサポートされている唯一の方法です。

内部的に、実装は PgBouncer の auth_user および auth_query オプションに依存しています。具体的には、演算子

- PostgreSQL サーバーに cnpg_pooler_pgbouncer と呼ばれる標準ユーザーを作成します
- postgres データベースに lookup ファンクションを作成し、cnpg_pooler_pgbouncer ユーザーに実行特権を付与します PoLA
- このユーザーの TLS 証明書を発行します
- cnpg_pooler_pgbouncer を auth_user として設定します
- TLS 証明書を使用して PostgreSQL サーバーに対して cnpg_pooler_pgbouncer を認証するように PgBouncer を構成します
- クラスターに関連付けられたプーラーがないことを検出した場合、上記のすべてを削除します

重要: 独自のシークレットを指定する場合、オペレーターはプーラーを自動的に統合しません。

独自のシークレットを指定した場合、プーラーを手動で統合するには、クラスター内から次のクエリを実行する必要があります。

最初に、ロールを作成する必要があります。

```
CREATE ROLE cnpg_pooler_pgbouncer WITH LOGIN;
```

次に、アプリケーションデータベースごとに、cnpg_pooler_pgbouncer に接続する権限を付与します。

```
GRANT CONNECT ON DATABASE { database name here } TO cnpg_pooler_pgbouncer;
```

最後に、_superuser_として各アプリケーションデータベースに接続し、各アプリケーションデータベース内に認証ファンクションを作成します。

```
CREATE OR REPLACE FUNCTION public.user_search(uname TEXT)
  RETURNS TABLE (usename name, passwd text)
  LANGUAGE sql SECURITY DEFINER AS
  SELECT usename, passwd FROM pg_catalog.pg_shadow WHERE usename=$1;;

REVOKE ALL ON FUNCTION public.user_search(text)
  FROM public;

GRANT EXECUTE ON FUNCTION public.user_search(text)
  TO cnpg_pooler_pgbouncer;
```

重要: *user_search* が `SECURITY DEFINER` ファンクションであることを考えると、 *postgres* ユーザーなどの `SUPERUSER` 特権を持つロールを介して作成する必要があります。

37.6 ポッドテンプレート

`Pooler` リソースの `template` セクションのポッドテンプレート仕様を利用できます。詳細については、API リファレンスの PoolerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSpec} を参照してください。

テンプレートを使用して、ポッドとノードのアフィニティおよびアンチアフィニティルールの微制御を含め、必要に応じてポッドを構成できます。デフォルトでは、コンテナは `ghcr.io/cloudnative-pg/pgbouncer` のイメージを使用します。

この例は、 `PodAntiAffinity` を指定する Pooler`を示しています。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Pooler
metadata:
  name: pooler-example-rw
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  instances: 3
  type: rw

  template:
    metadata:
      labels:
        app: pooler
    spec:
      containers: []
      affinity:
        podAntiAffinity:
          requiredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution:
            - labelSelector:
                matchExpressions:
                  - key: app
                    operator: In
                    values:
                      - pooler
              topologyKey: "kubernetes.io/hostname"
```

注釈: *PodSpec* の必須フィールドであるため、変更しない場合は `.spec.template.spec.containers` を `[]` に明示的に設定します。 *.spec.template.spec.containers* が設定されていない場合、Kubernetes API サーバーは

マニフェストを適用しようとすると次のエラーを返します。*error validating "pooler.yaml": error validating data: ValidationError(Pooler.spec.template.spec): missing required field "containers"*

この例では、リソースを設定し、使用されるイメージを変更します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Pooler
metadata:
  name: pooler-example-rw
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  instances: 3
  type: rw

  template:
    metadata:
      labels:
        app: pooler
    spec:
      containers:
        - name: pgbouncer
          image: my-pgbouncer:latest
          resources:
            requests:
              cpu: "0.1"
              memory: 100Mi
            limits:
              cpu: "0.5"
              memory: 500Mi
```

37.7 サービステンプレート

場合によっては、プーラーには別のラベル、アノテーション、またはサービスタイプの変更が必要になる場合があります。`serviceTemplate` フィールドを使用してこれを実現できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Pooler
metadata:
  name: pooler-example-rw
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  instances: 3
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  type: rw
  serviceTemplate:
    metadata:
      labels:
        app: pooler
    spec:
      type: LoadBalancer
  pgbouncer:
    poolMode: session
    parameters:
      max_client_conn: "1000"
      default_pool_size: "10"
```

デフォルトで、オペレーターは次のデータを使用して ServicePort を追加します。

```
ports:
- name: pgbouncer
  port: 5432
  protocol: TCP
  targetPort: pgbouncer
```

警告: 名前 `pgbouncer` またはポート `5432` で `ServicePort` を指定すると、デフォルトの `ServicePort` が追加されません。これは、同じ `name` または `port` と同じ `ServicePort` エントリが Kubernetes では許可されず、エラーが発生するためです。

37.8 高可用性 HA

Kubernetes の展開のため、単一のインスタンスまたは複数のポッドで実行するようにプーラーを構成できます。公開されたサービスにより、クライアントが PgBouncer を実行している利用可能なポッドにランダムに分散されるようになり、基になるサーバー rw サービスを使用する場合またはサーバー複数のレプリカで ro サービスを使用する場合への接続を管理および再利用します。

警告: インフラストラクチャが複数のアベイラビリティーゾーンにまたがり、それらの間の遅延が高い場合、ネットワークホップに注意してください。たとえば、ゾーン 2 で実行され、ゾーン 3 で実行されている PgBouncer に接続し、ゾーン 1 の PostgreSQL プライマリをポイントしている場合を検討します。

37.9 PgBouncer 構成オプション

オペレーターは configuration options for PgBouncer の大部分を管理し、それらのサブセットのみを変更できます。

> **警告:** オペレーターは検証しないため、各オプションの値を正しく設定する責任があります。

これらはカスタマイズ可能な PgBouncer オプションであり、各パラメーターの PgBouncer ドキュメントへのリンクがあります。特に記載のない限り、デフォルト値は PgBouncer によって直接設定された値です。

- application_name_add_host
- autodb_idle_timeout
- cancel_wait_timeout
- client_idle_timeout
- client_login_timeout
- default_pool_size
- disable_pqexec
- dns_max_ttl
- dns_nxdomain_ttl
- idle_transaction_timeout
- ignore_startup_parameters `extra_float_digits,options` に追加します-CloudNativePG が必要
- listen_backlog
- log_connections
- log_disconnections
- log_pooler_errors
- log_stats デフォルトで無効になっています `0`、以下の ClusterMonitoringTLSConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterMonitoringTLSConfiguration} セクションで説明するように、Prometheus エクスポートによって統計が既に収集されている場合
- max_client_conn
- max_db_connections
- max_packet_size
- max_prepared_statements
- max_user_connections
- min_pool_size

- pkt_buf
- query_timeout
- query_wait_timeout
- reserve_pool_size
- reserve_pool_timeout
- sbuf_loopcnt
- server_check_delay
- server_check_query
- server_connect_timeout
- server_fast_close
- server_idle_timeout
- server_lifetime
- server_login_retry
- server_reset_query
- server_reset_query_always
- server_round_robin
- server_tls_ciphers
- server_tls_server_tls_protocols
- stats_period
- suspend_timeout
- tcp_defer_accept
- tcp_keepalive
- tcp_keepcnt
- tcp_keepidle
- tcp_keepintvl
- tcp_user_timeout
- tcp_socket_buffer
- track_extra_parameters
- verbose

PgBouncer 構成のカスタマイズは、`.spec.pgbouncer.parameters` マップに宣言的に書き込まれます。

オペレーターはプーラー仕様の変更に対応し、すべての PgBouncer インスタンスは、サービスを中断せずに更新された構成をリロードします。

警告: すべての PgBouncer ポッドは同じ構成で、仕様のパラメーターに合わせて調整されています。これらのパラメーターを間違えると、プーラー全体の操作性を混乱させる可能性があります。演算子はオプションの値を検証しません。

37.10 モニタリング

Pooler の PgBouncer 実装には、デフォルトの Prometheus エクスポーターが付属しています。次のコマンドを実行して、cnpg_pgbouncer_ 接頭辞を持ついくつかのメトリックを利用できるようにします。

- SHOW LISTS 接頭辞 cnpg_pgbouncer_lists
- SHOW POOLS 接頭辞 cnpg_pgbouncer_pools
- SHOW STATS 接頭辞 cnpg_pgbouncer_stats

CloudNativePG インスタンスと同様に、エクスポーターは、PgBouncer を実行している各ポッドのポート 9127 で実行され、Go ランタイム接頭辞 go_* に関連するメトリックも提供します。

注釈: PgBouncer を実行しているポッドでエクスポートされたメトリックを検査できます。手順については、 エクスポートされたメトリックを検査する方法 を参照してください。正しい IP と `9127` ポートを使用していることを確認します。

この例は、cnpg_pgbouncer メトリックの出力を示しています。

```
#  HELP cnpg_pgbouncer_collection_duration_seconds Collection time duration in seconds

#  TYPE cnpg_pgbouncer_collection_duration_seconds gauge

cnpg_pgbouncer_collection_duration_seconds{collector="Collect.up"} 0.002443168

#  HELP cnpg_pgbouncer_collections_total Total number of times PostgreSQL was␣
↪accessed for metrics.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_collections_total counter

cnpg_pgbouncer_collections_total 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_last_collection_error 1 if the last collection ended with␣
↪error, 0 otherwise.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_last_collection_error gauge

cnpg_pgbouncer_last_collection_error 0
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_databases Count of databases.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_databases gauge

cnpg_pgbouncer_lists_databases 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_dns_names Count of DNS names in the cache.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_dns_names gauge

cnpg_pgbouncer_lists_dns_names 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_dns_pending Not used.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_dns_pending gauge

cnpg_pgbouncer_lists_dns_pending 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_dns_queries Count of in-flight DNS queries.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_dns_queries gauge

cnpg_pgbouncer_lists_dns_queries 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_dns_zones Count of DNS zones in the cache.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_dns_zones gauge

cnpg_pgbouncer_lists_dns_zones 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_free_clients Count of free clients.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_free_clients gauge

cnpg_pgbouncer_lists_free_clients 49

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_free_servers Count of free servers.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_free_servers gauge

cnpg_pgbouncer_lists_free_servers 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_login_clients Count of clients in login state.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_login_clients gauge
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
cnpg_pgbouncer_lists_login_clients 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_pools Count of pools.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_pools gauge

cnpg_pgbouncer_lists_pools 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_used_clients Count of used clients.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_used_clients gauge

cnpg_pgbouncer_lists_used_clients 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_used_servers Count of used servers.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_used_servers gauge

cnpg_pgbouncer_lists_used_servers 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_lists_users Count of users.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_lists_users gauge

cnpg_pgbouncer_lists_users 2

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_cl_active Client connections that are linked to server␣
↪connection and can process queries.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_cl_active gauge

cnpg_pgbouncer_pools_cl_active{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_cl_cancel_req Client connections that have not forwarded␣
↪query cancellations to the server yet.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_cl_cancel_req gauge

cnpg_pgbouncer_pools_cl_cancel_req{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_cl_waiting Client connections that have sent queries but␣
↪have not yet got a server connection.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_cl_waiting gauge
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
cnpg_pgbouncer_pools_cl_waiting{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_maxwait How long the first (oldest) client in the queue␣
↪has waited, in seconds. If this starts increasing, then the current pool of servers␣
↪does not handle requests quickly enough. The reason may be either an overloaded␣
↪server or just too small of a pool_size setting.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_maxwait gauge

cnpg_pgbouncer_pools_maxwait{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_maxwait_us Microsecond part of the maximum waiting time.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_maxwait_us gauge

cnpg_pgbouncer_pools_maxwait_us{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_pool_mode The pooling mode in use. 1 for session, 2 for␣
↪transaction, 3 for statement, -1 if unknown

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_pool_mode gauge

cnpg_pgbouncer_pools_pool_mode{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 3

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_sv_active Server connections that are linked to a client.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_sv_active gauge

cnpg_pgbouncer_pools_sv_active{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_sv_idle Server connections that are unused and␣
↪immediately usable for client queries.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_sv_idle gauge

cnpg_pgbouncer_pools_sv_idle{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_sv_login Server connections currently in the process of␣
↪logging in.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_sv_login gauge

cnpg_pgbouncer_pools_sv_login{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_sv_tested Server connections that are currently running␣
↪either server_reset_query or server_check_query.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_sv_tested gauge

cnpg_pgbouncer_pools_sv_tested{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_pools_sv_used Server connections that have been idle for more␣
↪than server_check_delay, so they need server_check_query to run on them before they␣
↪can be used again.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_pools_sv_used gauge

cnpg_pgbouncer_pools_sv_used{database="pgbouncer",user="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_query_count Average queries per second in last stat␣
↪period.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_query_count gauge

cnpg_pgbouncer_stats_avg_query_count{database="pgbouncer"} 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_query_time Average query duration, in microseconds.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_query_time gauge

cnpg_pgbouncer_stats_avg_query_time{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_recv Average received (from clients) bytes per␣
↪second.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_recv gauge

cnpg_pgbouncer_stats_avg_recv{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_sent Average sent (to clients) bytes per second.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_sent gauge

cnpg_pgbouncer_stats_avg_sent{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_wait_time Time spent by clients waiting for a server,
 in microseconds (average per second).

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_wait_time gauge
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
cnpg_pgbouncer_stats_avg_wait_time{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_xact_count Average transactions per second in last␣
↪stat period.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_xact_count gauge

cnpg_pgbouncer_stats_avg_xact_count{database="pgbouncer"} 1

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_avg_xact_time Average transaction duration, in␣
↪microseconds.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_avg_xact_time gauge

cnpg_pgbouncer_stats_avg_xact_time{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_query_count Total number of SQL queries pooled by␣
↪pgbouncer.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_query_count gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_query_count{database="pgbouncer"} 3

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_query_time Total number of microseconds spent by␣
↪pgbouncer when actively connected to PostgreSQL, executing queries.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_query_time gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_query_time{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_received Total volume in bytes of network traffic␣
↪received by pgbouncer.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_received gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_received{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_sent Total volume in bytes of network traffic sent␣
↪by pgbouncer.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_sent gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_sent{database="pgbouncer"} 0
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_wait_time Time spent by clients waiting for a␣
↪server, in microseconds.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_wait_time gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_wait_time{database="pgbouncer"} 0

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_xact_count Total number of SQL transactions pooled␣
↪by pgbouncer.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_xact_count gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_xact_count{database="pgbouncer"} 3

#  HELP cnpg_pgbouncer_stats_total_xact_time Total number of microseconds spent by␣
↪pgbouncer when connected to PostgreSQL in a transaction, either idle in transaction␣
↪or executing queries.

#  TYPE cnpg_pgbouncer_stats_total_xact_time gauge

cnpg_pgbouncer_stats_total_xact_time{database="pgbouncer"} 0
```

クラスターと同様に、 Prometheus operator's リソース PodMonitor を使用して特定のプーラーを監視できます。オペレーターが Pooler リソースの.spec.monitoring.enablePodMonitor から true を設定することにより、プーラーを正しくポイントする PodMonitor を作成できます。デフォルトは false です。

重要: 自動的に作成される `PodMonitor` の変更は、次の調整サイクルでオペレーターによってオーバーライドされます。カスタマイズする必要がある場合は、次の例に示すように実行できます。

特定のプーラーに PodMonitor を手動で展開するには、次のように定義し、必要に応じて変更できます。

```yaml
apiVersion: monitoring.coreos.com/v1
kind: PodMonitor
metadata:
  name: <POOLER_NAME>
spec:
  selector:
    matchLabels:
      cnpg.io/poolerName: <POOLER_NAME>
  podMetricsEndpoints:
    - port: metrics
```

37.11 ロギング

ログは、次の例のように、JSON 形式で標準出力に直接送信されます。

```
{
  "level": "info",
  "ts": SECONDS.MICROSECONDS,
  "msg": "record",
  "pipe": "stderr",
  "record": {
    "timestamp": "YYYY-MM-DD HH:MM:SS.MS UTC",
    "pid": "<PID>",
    "level": "LOG",
    "msg": "kernel file descriptor limit: 1048576 (hard: 1048576); max_client_conn:␣
↪100, max expected fd use: 112"
  }
}
```

37.12 接続の一時停止

Pooler 仕様では、宣言的構成のみを使用して、PgBouncer の PAUSE および RESUME コマンドを利用できます。 paused オプションを使用してこれを行うことができます。デフォルトでは false に設定されています。 true に設定すると、オペレーターは PgBouncer の PAUSE コマンドを内部的に呼び出します。

1. クエリが完了するのを待った後、PostgreSQL サーバーへのアクティブな接続をすべて閉じます。
2. クライアントからの新しい接続を一時停止します

paused オプションが false にリセットされると、オペレーターは PgBouncer で RESUME コマンドを呼び出し、Pooler リソースで定義された PostgreSQL サービスへのタップを再度開きます。

参考:

詳細については、 PAUSE を参照してください。

重要: 将来のバージョンでは、スイッチオーバー操作は PgBouncer プーラーと完全に統合され、 *PAUSE / RESUME* 機能を利用して、クライアントアプリケーションによる知覚的なダウンタイムを削減します。現在、 *paused* 属性を `true` に設定し、 Backup {postgresql-cnpg-io-v1-Backup} を介して switchover コマンドを発行して、 *paused* 属性を `false` に復元することにより、同じ結果を得ることができます。

37.13 制限事項

37.13.1 単一の PostgreSQL クラスター

プーラーの現在の実装は、特定の CloudNativePG クラスターサービスの一部として動作するように設計されています。現在、複数のクラスターにまたがるプーラーを作成することはできません。

37.13.2 制御された構成可能性

CloudNativePG は、PgBouncer レイヤーが PostgreSQL と通信するために使用されるいくつかの構成オプションを透過的に管理します。このようなオプションは外部から構成できず、TLS 証明書、認証設定、`databases` セクション、および `users` セクションが含まれます。また、単一の PostgreSQL クラスターの特定のユースケースを考慮して、採用される基準は、ユーザーが構成できるオプションを明示的にリストすることです。

注釈: 採用されたソリューションは、大部分のユースケースに対応する可能性があります。これにより、PgBouncer の別のオペレーターを将来的に実装して、より高度なカスタマイズされたシナリオでガンマを完了する余地が残されています。

第38章　レプリカクラスター

レプリカクラスターは、別の PostgreSQL インスタンスからデータをレプリケートするように設計された CloudNativePG `Cluster` リソースであり、理想的には CloudNativePG によって管理されます。

通常、レプリカクラスターは、別のリージョンの別の Kubernetes クラスターに展開されます。これらのクラスターは、カスケードレプリケーションを実行するように構成でき、以下で詳しく説明するように、ソースからのデータレプリケーションのオブジェクトストアに依存できます。

レプリカクラスターには、主に 2 つのユースケースがあります。

1. **ディザスターリカバリーと高可用性**ディザスターリカバリーとある程度、通常は異なるリージョンにあるさまざまな Kubernetes クラスターにわたる CloudNativePG クラスターの高可用性を強化します。CloudNativePG 用語では、これは **レプリカクラスターから分散トポロジへ** と呼ばれます。
2. **読み取り専用ワークロード**レポートやオンライン分析処理 OLAP などの目的で、PostgreSQL クラスターのスタンドアロンレプリカを作成します。これらのレプリカは、主に読み取り専用ワークロード用です。CloudNativePG 用語では、これは **スタンドアロンレプリカクラスター** と呼ばれます。

例、以下の図 — **アーキテクチャ** から取得

—は、主にディザスターリカバリーの目的で機能する対称レプリカクラスターを使用した、2 つの Kubernetes クラスターにまたがる分散 PostgreSQL トポロジを示しています。

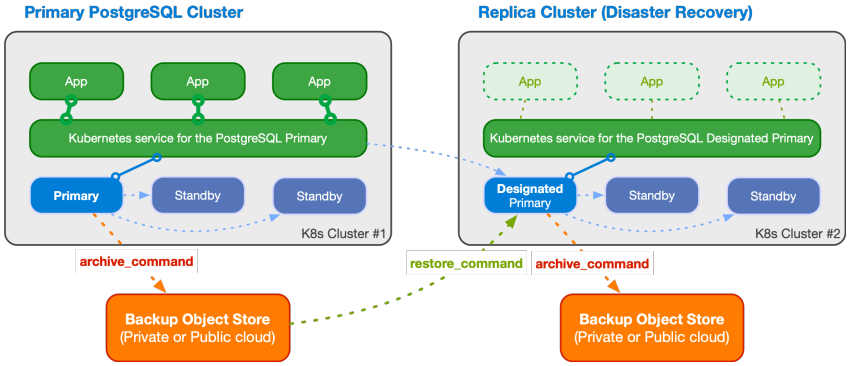


図 1: An example of multi-cluster deployment with a primary and a replica cluster

38.1 基本概念

CloudNativePG は PostgreSQL レプリケーションフレームワークをベースに構築されており、このセクションで説明するレプリカクラスター機能を使用して、既存のソースクラスターから PostgreSQL クラスターを作成および同期できます。ソースは、プライマリクラスターまたは別のレプリカクラスターカスケードレプリケーションです。

38.1.1 PostgreSQL のロールについて

レプリカクラスターは継続的リカバリモードで動作します。つまり、カタログを含むデータベースへの変更、およびロールやデータベースのようなグローバルオブジェクトは許可されません。これらの変更は、`Cluster` がプライマリに移行するまで遅延されます。このフェーズでは、ロールなどのグローバルオブジェクトは、ソースクラスターで定義されたとおりに残ります。クラスターが昇格すると、CloudNativePG はローカル再定義を適用します。

クラスターを昇格する予定がない場合読み取り専用ワークロードの場合、またはレプリカクラスターが昇格したらソースクラスターから完全に切断する予定がある場合、アクションを実行する必要はありません。これは通常、**スタンドアロンレプリカクラスター** の場合です。

ある時点でクラスターを昇格する予定がある場合、CloudNativePG は、レプリカクラスターからプライマリに移行するときに次のロールとパスワードを管理します。

- アプリケーションユーザー
- スーパーユーザー使用している場合
- *declarative interface* を使用して定義されたロール

上記のロールとパスワードが変更されないことをシームレスに保証することが目的である場合、各 `Cluster` で上記に必要なシークレットを定義する必要があります。これは通常、**レプリカクラスターから分散トポロジへ** の場合です。

38.1.2 レプリカクラスターのブートストラップ

最初のステップは、次のいずれかの方法を使用してレプリカクラスターをブートストラップすることです。

- `pg_basebackup` 経由の **ストリーミングレプリケーション**
- **ボリュームスナップショットからのリカバリ**
- オブジェクトストアの **Barman Cloud バックアップからのリカバリ**

`pg_basebackup` ストリーミングまたはリカバリーボリュームスナップショットまたはオブジェクトストアを使用して PostgreSQL サーバーのクローンを作成する手順の詳細については、*Bootstrap* を参照してください。

38.1.3 レプリケーションの構成

レプリカクラスターのベースバックアップが利用できるようになったら、PostgreSQL 継続的リカバリーを使用してオリジンから変更をレプリケートする方法を定義する必要があります。3 つの主なオプションがあります。

1. **ストリーミングレプリケーション**レプリカクラスターとソース間のストリーミングレプリケーションを設定します。この方法では、ネットワーク接続を構成し、適切な管理およびセキュリティ対策を実装して、シームレスなデータ転送を保証する必要があります。
2. **WAL アーカイブ**オブジェクトストアに保存されている WAL 書き込み先行ログアーカイブを使用します。WAL ファイルは、ソースクラスターからオブジェクトストアに定期的に転送され、`barman-cloud-wal-restore` ユーティリティはレプリカクラスターの WAL ファイルを取得します。
3. **ハイブリッドアプローチ**ストリーミングレプリケーションと WAL アーカイブ方法の両方を組み合わせます。PostgreSQL は、必要に応じてこれら 2 つのアプローチを管理および切り替えて、データの一貫性と可用性を保証できます。

38.1.4 外部クラスターの定義

外部クラスターを構成する場合、次のオプションがあります。

- **``barmanObjectStore`` セクション**
- CloudNativePG が指定したプライマリインスタンスで `restore_command` を自動的に設定して、WAL アーカイブの使用を有効にします。
- ボリュームスナップショットが実現できない場合、`recovery` セクションを使用してオブジェクトストアからレプリカクラスターをブートストラップできます。
- **``connectionParameters`` セクション**
- `pg_basebackup` セクションを使用したストリーミングレプリケーションを介したレプリカクラスターのブートストラップを有効にします。
- CloudNativePG は、指定されたプライマリインスタンスに `primary_conninfo` オプションを自動的に設定し、ソースクラスターに接続してデータを受信する WAL レシーバープロセスを開始します。

38.1.5 バックアップおよびシンメトリックアーキテクチャ

レプリカクラスターは、指定されたプライマリから予約されたオブジェクトストアへのバックアップを実行でき、分散環境での対称アーキテクチャをサポートします。このアーキテクチャの選択は、制御されたデータセンターのスイッチオーバーまたは予期しないイベントに続くフェイルオーバー中にクラスターがプロモーションの準備ができるようにするため、重要です。

38.1.6 分散アーキテクチャの柔軟性

PostgreSQL データベースの優先分散アーキテクチャを柔軟に設計でき、以下から選択できます。

- **プライベートクラウド**異なるデータセンターにある複数の Kubernetes クラスターにまたがります。
- **パブリッククラウド**さまざまなリージョンにある複数の Kubernetes クラスターにまたがります。
- **ハイブリッドクラウド**プライベートクラウドとパブリッククラウドを組み合わせます。
- **マルチクラウド**さまざまなリージョンおよびクラウドサービスプロバイダーにまたがる複数の Kubernetes クラスターにまたがります。

38.2 レプリカクラスターのセットアップ

ソースクラスターからレプリカクラスターをセットアップするには、次の手順に従ってクラスター YAML ファイルを作成し、それに応じて構成します。

1. **外部クラスターの定義**

- `externalClusters` セクションで、レプリカクラスターを指定します。
- ディザスターリカバリー DR と高可用性 HA を目的とした分散 PostgreSQL トポロジの場合、このセクションはすべての PostgreSQL クラスターに対して定義する必要があります分散データベースで。

2. **レプリカクラスターのブートストラップ**

- **ストリーミングブートストラップ**ストリーミングレプリケーションを介したブートストラップには `pg_basebackup` セクションを使用します。
- **スナップショット/オブジェクトストアブートストラップ** `recovery` セクションを使用してボリュームスナップショットからブートストラップまたはオブジェクトストア。

3. **継続的リカバリ戦略** `.spec.replica` スタンザで定義します。

- **分散トポロジ** `externalClusters` で定義された分散トポロジとともに、`primary`、`source`、および `self` フィールドを使用して構成します。これにより、CloudNativePG は、プライマリクラスターの降格と、その後のプロモーショントークンを使用したレプリカクラスターのプロモーションを宣言的に制御できます。
- **スタンドアロンレプリカクラスター** `enabled` オプションを使用して継続的リカバリーを有効にし、`source` フィールドをポイントするように設定します `externalClusters` 名前。この構成は、主に読み取り専用ワークロードを目的としたレプリカの作成に適しています。

継続的リカバリーのための分散トポロジーとスタンドアロンレプリカクラスター戦略の両方を以下で徹底的に説明します。

38.3 分散トポロジ

重要: 分散トポロジー戦略は CloudNativePG 1.24 で導入されました。

38.3.1 分散 PostgreSQL データベースの計画

ドワイト・アイゼンハワーの有名な言葉「計画がすべてです」。これは、Kubernetes での PostgreSQL アーキテクチャの設計にも当てはまります。

最初に、分散トポロジを紙の上で概念化し、それを CloudNativePG API 構成に変換します。この構成には、主に次のものが含まれます。

- `externalClusters` セクション。分散 PostgreSQL セットアップ内のすべての `Cluster` 定義に含める必要があります。
- `.spec.replica` スタンザ、具体的には `primary` 、`source` 、およびオプションの `self` フィールド。

たとえば、南ヨーロッパと中央ヨーロッパにある 2 つの Kubernetes クラスターに分散された PostgreSQL クラスターを展開するとします。

このシナリオでは、南ヨーロッパの Kubernetes クラスターに CloudNativePG がインストールされており、プライマリとして機能する `cluster-eu-south` という名前の PostgreSQL `Cluster` を使用していることを前提としています。このクラスターには、ローカルオブジェクトストアで構成された継続的バックアップがあります。このオブジェクトストアには、中央ヨーロッパの Kubernetes クラスターにインストールされている `cluster-eu-central` という名前の PostgreSQL `Cluster` からもアクセスできます。最初に、`cluster-eu-central` はレプリカクラスターとして機能します。対称的なアプローチに従い、継続的バックアップ用のローカルオブジェクトストアも持っています。これは、`cluster-eu-south` によって読み取られる必要があります。この設定での回復は、WAL シッピングにのみ依存し、2 つのクラスター間のストリーミング接続はありません。

次に、両方の `Cluster` リソースの `externalClusters` セクションを構成する方法を示します。

```
#  Distributed topology configuration

externalClusters:
  - name: cluster-eu-south
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://cluster-eu-south/
      # Additional configuration
  - name: cluster-eu-central
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://cluster-eu-central/
      # Additional configuration
```

`cluster-eu-south` PostgreSQL プライマリ `Cluster` の `.spec.replica` スタンザは次のように構成する必要があります。

```
replica:
  primary: cluster-eu-south
  source: cluster-eu-central
```

一方、 cluster-eu-central PostgreSQL レプリカ Cluster の.spec.replica スタンザは次のように構成する必要があります。

```
replica:
  primary: cluster-eu-south
  source: cluster-eu-south
```

この構成では、primary フィールドが Cluster リソースまたは別のものが使用される場合は.spec.replica.self の名前と一致する場合、現在のクラスターは分散トポロジのプライマリと見なされます。それ以外の場合、source この場合、Barman オブジェクトストアを使用してからのレプリカとして設定されます。

この設定により、複数の Kubernetes クラスターにわたる分散 PostgreSQL アーキテクチャを効率的に管理でき、宣言的構成を使用したプライマリ PostgreSQL クラスターの制御されたスイッチオーバーを介して、高可用性とディザスターリカバリーの両方を保証します。

分散トポロジにおける制御されたスイッチオーバーは、以下を含む 2 段階のプロセスです。

- プライマリクラスターのレプリカクラスターへの降格
- レプリカクラスターのプライマリクラスターへのプロモーション

これらのプロセスについては、次のセクションで説明します。

重要: 続行する前に、必ずご確認ください *PostgreSQL のロールについて*

上記であり、分散トポロジに参加しているすべての Cluster オブジェクトでシークレットを含む同一のロール定義を使用します。

38.3.2 プライマリのレプリカクラスターへの降格

CloudNativePG は、プライマリクラスターをレプリカクラスターに降格する機能を提供します。このアクションは、通常、プライマリロールをあるデータセンターから別のデータセンターに移行するときに計画されます。このプロセスには、現在のプライマリクラスターたとえば cluster-eu-south をレプリカクラスターに降格し、その後、完全に同期したときに指定されたレプリカクラスター cluster-eu-central をプライマリに昇格させることが含まれます。

新しいプライマリになるように選択されたレプリカクラスターをポイントする現在のプライマリ Cluster リソースで外部クラスターを定義している場合、次のように primary フィールドを変更するだけです。

```
replica:
  primary: cluster-eu-central
  source: cluster-eu-central
```

プライマリ PostgreSQL クラスターが降格されると、書き込み操作は可能でなくなります。CloudNativePG の場合

1. シャットダウンチェックポイントを含む WAL ファイルを WAL アーカイブの.partial ファイルとしてアーカイブします。
2. ステータスに demotionToken 、システム識別子、タイムスタンプ、タイムライン ID、REDO ロケーション、最新のチェックポイントの REDO WAL ファイルなど、pg_controldata からの関連情報を含む base64 エンコードされた JSON 構造を生成します。

最初のステップは、WAL アーカイブのみを使用して継続的リカバリプロセスにフィードを与えるために降格/プロモートする必要がありますストリーミングレプリケーションなしで。

2 番目のステップ .status.demotionToken の生成は、データの損失や元のプライマリをリビルドすることなく、スムーズな降格/プロモーションプロセスを保証します。

この段階で、元のプライマリはレプリカクラスターに移行し、新しいグローバルプライマリ cluster-eu-central からの WAL データを待機しています。

他のクラスターの昇格を続行するには、次のコマンドを使用して cluster-eu-south から demotionToken を取得する必要があります。

```
kubectl get cluster cluster-eu-south \
  -o jsonpath={.status.demotionToken}
```

cnpg プラグインを使用して、クラスターのステータスを確認して demotionToken を取得できます。トークンは Demotion token セクションの下にリストされています。

注釈: *cluster-eu-south* から取得した`demotionToken` は、*cluster-eu-central* の`promotionToken` になります。

---

cnpg プラグインを使用して、クラスターのステータスを確認して、ロールの変更を確認できます。

```
kubectl cnpg status cluster-eu-south
```

38.3.3 レプリカのプライマリクラスターへの昇格

PostgreSQL レプリカクラスター cluster-eu-central などをプライマリクラスターに昇格させ、指定されたプライマリを実際のプライマリインスタンスにするには、次の手順を同時に実行する必要があります。

1. .spec.replica.primary を、昇格する現在のレプリカクラスターの名前に設定します cluster-eu-central など。
2. .spec.replica.promotionToken を、以前のプライマリクラスターから取得した値で設定しますプライマリのレプリカクラスターへの降格 を参照してください。

cluster-eu-central の仕様の更新された replica セクションは次のようになります。

```
replica:
  primary: cluster-eu-central
  promotionToken: <PROMOTION_TOKEN>
  source: cluster-eu-south
```

警告: 変更を `primary` および `promotionToken` フィールドに同時に適用することが重要です。プロモーショントークンを省略すると、フェールオーバーがトリガーされ、以前のプライマリのリビルドが必要になります。

これらの調整を行った後、CloudNativePG は、レプリカクラスターのプライマリクラスターへのプロモーションを開始します。最初に、CloudNativePG は、指定されたプライマリクラスターが、トークンに含まれる指定されたログシーケンス番号 LSN までのすべての書き込み先行ロギング WAL 情報をレプリケートするのを待機します。この目標を達成すると、プロモーションプロセスが開始されます。新しいプライマリクラスターは、タイムラインを切り替え、履歴ファイルと新しい WAL をアーカイブすることにより、レプリカとして動作する `cluster-eu-south` クラスターのレプリケーションプロセスのブロックを解除します。

ロールの変更を確認するには、 `cnpg` プラグインを使用して、クラスターのステータスを確認します。

```
kubectl cnpg status cluster-eu-central
```

このコマンドは、`cluster-eu-central` の現在のステータスを提供し、プライマリへの昇格を確認します。

これらの手順に従うことで、スムーズで制御されたプロモーションプロセスを保証し、中断を最小限に抑え、PostgreSQL クラスター全体でデータの整合性を維持できます。

38.4 スタンドアロンレプリカクラスター

重要: スタンドアロンレプリカクラスターは、CloudNativePG 1.24 で分散トポロジ戦略を導入する前は、レプリカクラスターと呼ばれていました。

CloudNativePG では、スタンドアロンレプリカクラスターは、次の構成で継続的にリカバリーしている PostgreSQL クラスターです。

- `.spec.replica.enabled` を `true` に設定
- `.spec.replica.source` フィールドを介して定義された物理レプリケーションソース、`externalClusters` 名前を指す

`.spec.replica.enabled` が `false` に設定されている場合、レプリカクラスターは継続的リカバリモードを終了し、プライマリクラスターになり、元のソースから完全に分離されます。

警告: レプリケーションの無効化は、**不可逆的な**操作です。レプリケーションが無効になり、指定されたプライマリがプライマリに昇格すると、レプリカクラスターとソースクラスターは決定的に 2 つの独立したクラスターになります。

重要: スタンドアロンレプリカクラスターは、主に読み取り専用のワークロードが関係する、いくつかのユースケースに適しています。ディザスターリカバリーソリューションのセットアップを予定している場合は、上記の「分散トポロジ」を確認してください。

38.4.1 分散トポロジとの主な違い

スタンドアロンレプリカクラスターは、ディザスターリカバリーの目的で使用できますが、いくつかの重要な点で「分散トポロジ」戦略とは異なります。

- **分散データベース概念の欠如**スタンドアロンレプリカクラスターは、単純な形式 2 つのクラスターまたはより複雑な構成たとえば、円形トポロジの 3 つのクラスターなど、分散データベースの概念をサポートしていません。
- **グローバルプライマリクラスターなし**スタンドアロンレプリカクラスターには、グローバルプライマリクラスターの概念がありません。
- **制御されたスイッチオーバーなし**スタンドアロンレプリカクラスターは、プライマリにのみ昇格できます。制御されたスイッチオーバーは不可能であるため、以前のプライマリクラスターは再クローンを作成する必要があります。

フェールオーバーは両方の戦略で同じであるため、元のプライマリが復旧した場合は再クローンを作成する必要があります。

38.4.2 pg_basebackup を使用したスタンドアロンレプリカクラスターの例

この **最初の例**は、ブートストラップと継続的リカバリーの両方でストリーミングレプリケーションを使用して、スタンドアロンレプリカクラスターを定義します。レプリカクラスターは、TLS 認証を使用してソースクラスターに接続します。

sample YAML

`samples/` サブディレクトリ。

ソースクラスターを指している `bootstrap` および `replica` セクションに注意してください。

```
bootstrap:
  pg_basebackup:
    source: cluster-example

replica:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  enabled: true
  source: cluster-example
```

前述の構成では、アプリケーションデータベースとその所有ユーザーがデフォルトの app に設定されていることを前提としています。リストアする PostgreSQL クラスターが別の名前を使用している場合、**アプリケーションデータベースの構成** の文書に従ってそれらを指定する必要があります。また、元のクラスターからアプリケーションユーザーシークレットをコピーし、ソースとの同期を維持することを検討する必要があります。詳細については、*PostgreSQL のロールについて* を参照してください。

externalClusters セクションでは、connectionParameters サブセクションのホストに対応した適切な名前空間を使用することに注意してください。レプリカクラスターが別の名前空間にある場合、-replication および-ca シークレットは、必要に応じてコピーしておく必要があります。

```
externalClusters:
  - name: <MAIN-CLUSTER>
    connectionParameters:
      host: <MAIN-CLUSTER>-rw.<NAMESPACE>.svc
      user: streaming_replica
      sslmode: verify-full
      dbname: postgres
    sslKey:
      name: <MAIN-CLUSTER>-replication
      key: tls.key
    sslCert:
      name: <MAIN-CLUSTER>-replication
      key: tls.crt
    sslRootCert:
      name: <MAIN-CLUSTER>-ca
      key: ca.crt
```

38.4.3 オブジェクトストアからのスタンドアロンレプリカクラスターの例

2 番目の例 は、 recovery セクションと継続的リカバリーを使用してオブジェクトストアからブートストラップするレプリカクラスターを定義します。ストリーミングレプリケーションと特定のオブジェクトストアの両方を使用します。ストリーミングレプリケーションの場合、レプリカクラスターは基本認証を使用してソースクラスターに接続します。

sample YAML

samples/ サブディレクトリにあります。

ソースクラスターを指している bootstrap および replica セクションに注意してください。

```
bootstrap:
  recovery:
    source: cluster-example
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
replica:
  enabled: true
  source: cluster-example
```

前述の構成では、アプリケーションデータベースとその所有ユーザーがデフォルトの app に設定されていることを前提としています。リストアする PostgreSQL クラスターが別の名前を使用している場合、**アプリケーションデータベースの構成** の文書に従ってそれらを指定する必要があります。また、元のクラスターからアプリケーションユーザーシークレットをコピーし、ソースとの同期を維持することを検討する必要があります。詳細は、*PostgreSQL のロールについて* を参照してください。

externalClusters セクションでは、 endpointURL および connectionParameters.host で適切な名前空間を使用するように注意してください。また、必要に応じて必要なシークレットがコピーされていること、およびソースクラスターのバックアップが既に作成されていることを確認してください。

```
externalClusters:
  - name: <MAIN-CLUSTER>
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://backups/
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials: ⋯
    connectionParameters:
      host: <MAIN-CLUSTER>-rw.default.svc
      user: postgres
      dbname: postgres
    password:
      name: <MAIN-CLUSTER>-superuser
      key: password
```

注釈: ソースクラスターとレプリカクラスター間でストリーミングレプリケーションを使用するには、2 つのクラスター間のネットワーク接続があることを確認し、パスワードまたは証明書を保持する必要なシークレットがすべて事前に適切に作成されていることを確認する必要があります。

38.4.4 ボリュームスナップショットを使用した例

ボリュームスナップショットを使用し、ストレージクラスがスナップショットクラスター間の可用性を提供する場合、それを活用して、ソースクラスターのボリュームスナップショットを介してレプリカクラスターをブートストラップできます。

3 番目の例 は、 recovery セクションを使用してボリュームスナップショットからブートストラップするレプリカクラスターを定義します。ストリーミングレプリケーション基本認証を介して、オブジェクトストアを使用して WAL ファイルを取得します。

sample YAML

samples/ サブディレクトリにあります。

この例では、アプリケーションデータベースとその所有ユーザーがデフォルトの app に設定されていることを前提としています。リストアする PostgreSQL クラスターが別の名前を使用している場合、*Configure theapplication database* の文書に従ってそれらを指定する必要があります。また、元のクラスターからアプリケーションユーザーシークレットをコピーし、ソースとの同期を維持することを検討する必要があります。詳細は、*PostgreSQL* **のロールについて** を参照してください。

38.5 遅延レプリカ

CloudNativePG は、 PostgreSQL の *recovery_min_apply_delay* を活用して、*.spec.replica.minApplyDelay* を介して **遅延レプリカ** の作成をサポートしています。

遅延レプリカは、指定された時間プライマリデータベースより意図的に遅延するように設計されています。この遅延は、PostgreSQL の基になる `recovery_min_apply_delay` パラメーターにマップする `.spec.replica.minApplyDelay` オプションを使用して構成できます。

遅延レプリカの主な目的は、プライマリデータベースでの意図しない SQL ステートメントの実行の影響を軽減することです。これは、`UPDATE` や `DELETE` などの操作が適切な `WHERE` 句なしで実行されるシナリオで特に役立ちます。

レプリカクラスターで遅延を構成するには、 `.spec.replica.minApplyDelay` オプションを調整します。このパラメーターは、レプリカがプライマリからどれくらいの時間を決定します。例

```
#  ...

replica:
  enabled: true
  source: cluster-example
  # Enforce a delay of 8 hours
  minApplyDelay: "8h"

#  ...
```

上記の例では、8 時間のバッファ期間を提供して、問題がレプリカに伝播する前に検出および修正することにより、誤ったデータの変更に対する安全対策に役立ちます。

目標復旧時間と意図しないプライマリデータベース操作の潜在的な影響に基づいて、必要に応じて遅延を監視および調整します。

遅延レプリカの主な使用ケースは次のように要約できます。

1. 人的エラーの軽減プライマリデータベースでの意図しない SQL 操作に起因するデータの破損または損失のリスクを削減します。
2. 復旧時間の最適化変更が他のレプリカに適用される前に問題を特定および修正できる遅延レプリカを使用することにより、意図しない変更からの迅速な復旧を促進します。
3. データ保護の強化不要な変更の伝播を介入および防止する機会を提供する時間バッファを導入することにより、重要なデータを保護します。

警告: 遅延レプリカの`minApplyDelay` オプションは、 *promotionToken* と組み合わせて使用することはできません。

遅延レプリカをレプリケーション戦略に統合することにより、PostgreSQL 環境の復元力とデータ保護機能を強化できます。特定のニーズとデータの重要度に基づいて、遅延期間を調整します。

重要: 常に目標を測定します。環境によっては、より迅速な結果を得るには、ボリュームスナップショットベースのリカバリーに依存する方が効率的である場合があります。独自の要件とインフラストラクチャに最適なアプローチを評価および選択します。

第39章　Kubernetesのアップグレードとメンテナンス

最新の Kubernetes クラスターを維持することは、最適なパフォーマンスとセキュリティを保証するために重要であり、特に自己管理クラスター、特にベアメタルインフラストラクチャで実行されているクラスターの場合。定期的な更新は、メンテナンスのためにクラスターからノードを一時的に削除することに関連するダウンタイムの制御にもかかわらず、技術的負債に対処し、ビジネスリスクを軽減するのに役立ちます。オペレーションでのリスクの受け入れに関する詳細な洞察については、Embracing Risk を参照してください。

Site Reliability Engineering の本からの章。

39.1 定期的なアップデートの重要性

Kubernetes の更新には、基になる Linux サーバーへのセキュリティ更新の適用、故障したハードウェアコンポーネントの交換、クラスターの最新の Kubernetes バージョンへのアップグレードなどのメンテナンスタスクの計画と実行が含まれます。これらのアクティビティは、堅牢で安全なインフラストラクチャを維持するために不可欠です。

39.2 クラスター内のメンテナンス操作

通常、メンテナンス操作は、structured process に従って、一度に 1 つのノードで実行されます。

1. ワークロードのエビクション `drain` ワークロードは更新するノードから正常に移動され、スムーズな移行が保証されます。
2. 操作の実行システムの更新やハードウェアの交換など、実際のメンテナンス操作が実行されます。
3. ノードのクラスター `uncordon` への再参加更新されたノードはクラスターに再統合され、その責任を再開する準備が整います。

このプロセスでは、アップグレード期間全体でワークロードを停止するか、クラスター内の他のノードに移行する必要があります。

39.3 一時的な PostgreSQL クラスターの低下

標準のアプローチはサービスの信頼性を保証し、Kubernetes の自己修復機能を活用しますが、一時的に機能が低下したクラスターでの動作が受け入れられるシナリオがあります。これは、**ノードローカルストレージ**に依存する PostgreSQL クラスターに特に関連します。ここで、ストレージは PostgreSQL データベースを実行している Kubernetes ワーカーノードにローカルです。ノードローカルストレージまたは単に**ローカルストレージ** は、パフォーマンスを向上させるために使用されます。

注釈: データベースファイルがネットワーク経由でアクセスできる共有ストレージにある場合、オペレーターのデフォルトの自己修復動作は、ドレイン操作の後に別のノードのポッドによってボリュームが再利用されるシナリオを効率的に処理できます。このような場合、このドキュメントの残りのセクションをスキップできます。

39.4 ポッドの中断予算

デフォルトでは、CloudNativePG は Postgres クラスターオペレーションを保護します。ノードがドレインされ、クラスターのプライマリインスタンスが含まれている場合、スイッチオーバーはドレインの前に発生します。ノードのインスタンスがレプリカにダウングレードされると、ドレインを再開できます。単一インスタンスクラスターの場合、スイッチオーバーは不可能であるため、CloudNativePG は、インスタンスが格納されているノードのドレインを防止します。さらに、3 つ以上のインスタンスがあるクラスターでは、CloudNativePG は、ドレイン操作中に一度に 1 つのレプリカのみが正常にシャットダウンされることを保証します。

各 PostgreSQL `Cluster` には、関連する 2 つの `PodDisruptionBudget` リソースが装備されています。`kubectl get pdb` コマンドで簡単に確認できます。

すべての運用 Postgres クラスターでポッドの中断バジェットを有効にしたままにすることをお勧めします。これは、*API リファレンス* で詳細に説明しているように、 `.spec.enablePDB` オプションを切り替えることにより簡単に管理できます。

39.5 開発またはテストに使用される PostgreSQL クラスター

開発目的で使用される PostgreSQL クラスターの場合、多くの場合単一のインスタンスで構成され、ポッドの中断バジェットを無効にすることが重要です。これを行わないと、そのクラスターをホストするノードはドレインされません。

次の例は、1 インスタンスの開発クラスターのポッド中断バジェットを無効にする方法を示しています。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: dev
spec:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  instances: 1
  enablePDB: false

  storage:
    size: 1Gi
```

この構成により、開発アクティビティ中にノードのドレインを制限せずに、よりスムーズなメンテナンス手順が保証されます。

39.6 ノードのメンテナンスウィンドウ

重要: CloudNativePG はノードのメンテナンスウィンドウのサポートを継続しますが、現在は、前のセクションで説明したように、ポッドの中断バジェットの直接制御に移行することをお勧めします。このセクションは、主に下位互換性のために保持されています。

リリース 1.23 より前は、CloudNativePG には、ローカルストレージを扱う際に Kubernetes のアップグレードを管理する宣言的メカニズムが 1 つだけありました。たとえば、物理ノードのパーティションを拡大したり、ノード自分自身を更新したりしながら。

警告: メンテナンスウィンドウの期間を可能な限り短い時間に制限します。このフェーズでは、Kubernetes の予想される動作の一部が無効になっているか、自己修復、ローリング更新、ポッドの中断バジェットなどの制限付きで実行されています。

クラスターの `nodeMaintenanceWindow` オプションには、さらに 2 つの設定があります。

`inProgress` ノードのメンテナンスウィンドウが現在進行中かどうかを示すブール値。デフォルトでは、`off` に設定されています。メンテナンスウィンドウ中に、以下の `reusePVC` オプションがオペレーターによって評価されます。

`reusePVC` メンテナンス操作中に既存の PVC を再利用するかどうかを定義するブール値。デフォルトでは、on に設定されています。 **有効になっている**、Kubernetes はノードが再び起動するのを待機して、既存の PVC を再利用します。`PodDisruptionBudget` ポリシーは一時的に削除されます。**無効になっている**、Kubernetes は、PostgreSQL の物理的ストリーミングレプリケーションに依存して、新しい PVC を使用して別のノードでポッドの再作成を強制し、ポッドとともに古い PVC を破棄します。このシナリオは、データベースのサイズが小さく、新しい PostgreSQL インスタンスの再クローンの作成にかかる時間が待機するよりも短い場合を除き、一般的にお勧めできません。この動作は、インスタンスが 1 つだけで再利用 PVC が無効になっているクラスターには適用されません。以下のセクションを参照してください。

注釈: *kubectl drain* コマンドを実行するときは、 *--delete-emptydir-data* オプションを追加する必要があります。恐れないでください。これは、PostgreSQL データディレクトリではなく、オペレーターが内部的に使用する別のボリュームを参照します。

重要: *PodDisruptionBudget* 管理は、 *.spec.enablePDB* フィールドを `false` に設定することにより無効にできます。その場合、オペレーターは `PodDisruptionBudgets` を作成せず、以前に作成されている場合は削除します。

39.6.1 reusePVC が false に設定された単一インスタンスクラスター

重要: 高可用性を保証するために、常に複数のインスタンスでクラスターを作成することをお勧めします。

reusePVC が false に設定されている単一インスタンスクラスター内の唯一の PostgreSQL インスタンスを削除することは、すべてのデータが失われることを意味します。したがって、メンテナンスモードでも、ユーザーがそのようなインスタンスが実行されているノードをドレインできないようにします。

ただし、このようなノードのメンテナンスが必要な場合、2 つのオプションがあります。

1. reusePVC を有効にし、ダウンタイムを受け入れます
2. 別のノードでインスタンスを複製し、プライマリをスイッチオーバーします

データベースサービスのダウンタイムがご使用の環境で許容される限り、ノードのドレインは、nodeMaintenanceWindow を inProgress: true および reusePVC: true に設定するだけで簡単です。これにより、元の PVC が利用可能になるとすぐにインスタンスを削除して再作成できますたとえば、ノードローカルストレージを使用して、ノードがバックアップされたらすぐに。

それ以外の場合は、クラスターをスケールアップし、別のノードで新しいインスタンスを作成し、新しいインスタンスをプライマリに昇格させて、メンテナンス中のノードで元のインスタンスをシャットダウンする必要があります。この場合の唯一のダウンタイムは、スイッチオーバーの期間です。

考えられるアプローチは次のとおりです。

1. 現在のインスタンスが実行されているノードを遮断します。
2. クラスターを 2 つのインスタンスにスケールアップします。データベースのサイズによっては、時間がかかる場合があります。
3. 現在のプライマリが遮断されたノードで実行されている場合、新しいインスタンスが実行されると、オペレーターは自動的にスイッチオーバーを実行します。
4. クラスターを単一のインスタンスにスケールダウンします。これにより、古いインスタンスが削除されます
5. 新しいノードで新しいプライマリを実行したまま、古いプライマリのノードを正常にドレインできるようになりました。

第40章　Kubectlプラグイン

CloudNativePG は、Kubernetes でクラスターを管理するための kubectl のプラグインを提供します。

40.1 インストール

さまざまな方法を使用して cnpg プラグインをインストールできます。

注釈: エアギャップシステムの場合、以前にダウンロードしたファイルを使用して、パッケージマネージャーを介したインストールが良いオプションである場合があります。

40.1.1 インストールスクリプトを介して

```
curl -sSfL \
  https://github.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/raw/main/hack/install-cnpg-plugin.
↪sh | \
  sudo sh -s -- -b /usr/local/bin
```

40.1.2 Debian または RedHat パッケージを使用する

releases section of the GitHub repository では、関心のあるリリース CloudNativePG オペレーターと同じまたは新しいリリースを選択してくださいに移動できます。その中には **Assets** セクションがあります。そのセクションには、さまざまなシステム用の事前ビルドパッケージが含まれています。その結果、標準の手順と手順に従って、システムにインストールできます。

40.1.3 Debian パッケージ

たとえば、Intel ベースの 64 ビットサーバーの場合、プラグインの 1.25.0-rc1 リリースをインストールしてみましょう。最初に、適切な.deb ファイルをダウンロードします。

```
wget https://github.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/releases/download/v1.25.0-rc1/
↪kubectl-cnpg_1.25.0-rc1_linux_x86_64.deb \
  --output-document kube-plugin.deb
```

次に、スーパーユーザー権限で、 dpkg を使用してローカルファイルからインストールします。

```
$ sudo dpkg -i kube-plugin.deb
Selecting previously unselected package cnpg.
(Reading database ... 6688 files and directories currently installed.)
Preparing to unpack kube-plugin.deb ...
Unpacking cnpg (1.25.0-rc1) ...
Setting up cnpg (1.25.0-rc1) ...
```

40.1.4 RPM パッケージ

.rpm パッケージの例と同様に、Intel 64 ビットマシンの 1.25.0-rc1 リリースをインストールしましょう。ファイル名を提供する--output フラグに注意してください。

```
curl -L https://github.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/releases/download/v1.25.0-
↪rc1/kubectl-cnpg_1.25.0-rc1_linux_x86_64.rpm \
  --output kube-plugin.rpm
```

次に、スーパーユーザー権限を使用して、yum でインストールすると、使用する準備が整います。

```
$ sudo yum --disablerepo=* localinstall kube-plugin.rpm
Failed to set locale, defaulting to C.UTF-8
Dependencies resolved.
================================================================================
 Package            Architecture         Version                   Repository
         Size
================================================================================
Installing:
 cnpg               x86_64               1.25.0-rc1-1              @commandline
             20 M

Transaction Summary
================================================================================
Install  1 Package

Total size: 20 M
Installed size: 78 M
Is this ok [y/N]: y
```

40.1.5 Krew を使用する

Krew を既にインストールしている場合は、単に実行できます。

```
kubectl krew install cnpg
```

プラグインの新しいバージョンがリリースされたら、次の方法で既存のインストールを更新できます。

```
kubectl krew update
kubectl krew upgrade cnpg
```

40.1.6 Homebrew を使用する

注釈: Homebrew コミュニティが kubectl-cnpg plugin on Homebrew の可用性を管理していることに注意してください。

Homebrew を既にインストールしている場合は、単に実行できます。

```
brew install kubectl-cnpg
```

プラグインの新しいバージョンがリリースされたら、次の方法で既存のインストールを更新できます。

```
brew update
brew upgrade kubectl-cnpg
```

注釈: kubectl プラグインのオートコンプリートは、既に Homebrew によって管理されています。以下で説明する `kubectl_complete-cnpg` スクリプトを作成する必要はありません。

40.1.7 サポートされているアーキテクチャ

CloudNativePG プラグインは、現在次のオペレーティングシステムとアーキテクチャ用にビルドされています。

- Linux
- amd64
- arm 5/6/7
- arm64
- s390x
- ppc64le

- macOS
- amd64
- arm64
- Windows
- 386
- amd64
- arm 5/6/7
- arm64

40.1.8 オートコンプリートの設定

プラグインのオートコンプリートを構成するには、ヘルパーシェルスクリプトを現在の PATH にインストールする必要があります。後者に/usr/local/bin が含まれていると仮定すると、これは次のコマンドで実行できます。

```
cat > kubectl_complete-cnpg <<EOF
# !/usr/bin/env sh

#  Call the __complete command passing it all arguments

kubectl cnpg __complete "\$@"
EOF

chmod +x kubectl_complete-cnpg

#  Important: the following command may require superuser permission

sudo mv kubectl_complete-cnpg /usr/local/bin
```

重要: スクリプトの名前は、kubectl オートコンプリートプロセスで使用されるため、指定されたものと正確である必要があります

40.2 使用する

プラグインがインストールおよび展開されたら、次のように使用を開始できます。

```
kubectl cnpg COMMAND [ARGS...]
```

注釈: プラグインは、標準出力チャンネルが端末に接続されているかどうかを自動的に検出します。このような場合、ANSI カラーをコマンド出力に追加する場合があります。色を無効にするには、コマンドで `--color=never` オプションを使用します。

40.2.1 インストールマニフェストの生成

cnpg プラグインを使用して、オペレーターのインストールのための YAML マニフェストを生成できます。このオプションは通常、レプリカの数、インストール名前空間、監視する名前空間などのデフォルト構成をオーバーライドする場合に使用されます。

詳細および使用可能なオプションについては、次を実行します。

```
kubectl cnpg install generate --help
```

主なオプションは次のとおりです。

- `-n` オペレーターデフォルト `cnpg-system` をインストールする名前空間を指定します。
- `--control-plane` true に設定されている場合、オペレーターの展開には `node-role.kubernetes.io/control-plane` の許容範囲とアフィニティが含まれます。
- `--replicas` 展開内のレプリカの数を設定します。
- `--watch-namespace` 監視する名前空間のコンマ区切りリストを指定しますデフォルトすべての名前空間。
- `--version` 1.23 など、インストールするオペレーターのマイナーバージョンを定義します。マイナーバージョンが指定された場合、プラグインはそのマイナーバージョンの最新のパッチバージョンをインストールします。バージョンが指定されない場合、プラグインはオペレーターの最新の `MAJOR.MINOR.PATCH` バージョンをインストールします。

オペレーターをインストールする YAML マニフェストを生成する `generate` コマンドの例は、次のとおりです。

```
kubectl cnpg install generate \
  -n king \
  --version 1.23 \
  --replicas 3 \
  --watch-namespace "albert, bb, freddie" \
  > operator.yaml
```

上記のコマンドのフラグは、次の意味を持っています。

- `-n king` CNPG オペレーターを `king` 名前空間にインストールします
- `--version 1.23` マイナーバージョン 1.23 の最新パッチバージョンをインストールします
- `--replicas 3` 3 つのレプリカを使用してオペレーターをインストールします
- `--watch-namespace "albert, bb, freddie"` は、オペレーターに `albert` 、`bb` 、および `freddie` 名前空間の変更のみを監視させます

40.2.2 ステータス

`status` コマンドは、クラスターの現在のステータスの概要を提供します。

- **一般情報**クラスターの名前、PostgreSQL のシステム ID、インスタンス数、現在のタイムライン、WAL 内の位置
- **backup** リカバリー可能ポイント、およびプライマリまたはレプリカクラスターの場合は指定されたプライマリから `pg_stat_archiver` ビューによって返される WAL アーカイブステータス
- **ストリーミングレプリケーション**プライマリインスタンスの `pg_stat_replication` ビューから直接取得した情報
- **instances** 各 Postgres インスタンスに関する情報、各インスタンスマネージャーによって直接取得されます。スタンバイの場合、`Current LSN` フィールドは、リカバリー中に再生された最新のログ先行書き込みの場所リプレイ LSN に対応します。

重要: 上記のステータス情報は、異なる時間に異なる場所で取得されたため、わずかに一貫性のない戻り値が発生します。たとえば、メインヘッダーの `Current Write LSN` 場所は、2 つの異なる時間間隔で取得されるため、インスタンスステータスの `Current LSN` フィールドとは異なる場合があります。

```
kubectl cnpg status sandbox
```

```
Cluster Summary
Name:                default/sandbox
System ID:           7423474350493388827
PostgreSQL Image:    ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:16.4
Primary instance:    sandbox-1
Primary start time:  2024-10-08 18:31:57 +0000 UTC (uptime 1m14s)
Status:              Cluster in healthy state
Instances:           3
Ready instances:     3
Size:                126M
Current Write LSN:   0/604DE38 (Timeline: 1 - WAL File: 000000010000000000000006)

Continuous Backup status
Not configured

```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
Streaming Replication status
Replication Slots Enabled
Name       Sent LSN   Write LSN  Flush LSN  Replay LSN  Write Lag  Flush Lag  Replay␣
↪Lag  State      Sync State  Sync Priority  Replication Slot
- ---       --------   ---------  ---------  ----------  ---------  ---------  -------
↪---  -----      ----------  -------------  ----------------
sandbox-2  0/604DE38  0/604DE38  0/604DE38  0/604DE38   00:00:00   00:00:00  ␣
↪00:00:00    streaming  async       0              active
sandbox-3  0/604DE38  0/604DE38  0/604DE38  0/604DE38   00:00:00   00:00:00  ␣
↪00:00:00    streaming  async       0              active

Instances status
Name       Current LSN  Replication role  Status  QoS         Manager Version  Node
- ---       -----------  ----------------  ------  ---         ---------------  ----
sandbox-1  0/604DE38    Primary           OK      BestEffort  1.25.0-rc1         ␣
↪k8s-eu-worker
sandbox-2  0/604DE38    Standby (async)   OK      BestEffort  1.25.0-rc1         ␣
↪k8s-eu-worker2
sandbox-3  0/604DE38    Standby (async)   OK      BestEffort  1.25.0-rc1         ␣
↪k8s-eu-worker
```

より詳細なステータス情報が必要な場合は、 `--verbose` オプションまたは略して`-v` を使用します。フラグが繰り返されるたびに、詳細レベルが増加します。

```
kubectl cnpg status sandbox --verbose
```

```
Cluster Summary
Name:                default/sandbox
System ID:           7423474350493388827
PostgreSQL Image:    ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:16.4
Primary instance:    sandbox-1
Primary start time:  2024-10-08 18:31:57 +0000 UTC (uptime 2m4s)
Status:              Cluster in healthy state
Instances:           3
Ready instances:     3
Size:                126M
Current Write LSN:   0/6053720 (Timeline: 1 - WAL File: 000000010000000000000006)

Continuous Backup status
Not configured

Physical backups
No running physical backups found

Streaming Replication status
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
Replication Slots Enabled
Name       Sent LSN   Write LSN  Flush LSN  Replay LSN  Write Lag  Flush Lag  Replay␣
↪Lag  State      Sync State  Sync Priority  Replication Slot  Slot Restart LSN  Slot␣
↪WAL Status  Slot Safe WAL Size
- ---       --------   ---------  ---------  ----------  ---------  ---------  -------
↪---  -----      ----------  -------------  ----------------  ----------------  -----
↪----------  ------------------
sandbox-2  0/6053720  0/6053720  0/6053720  0/6053720   00:00:00   00:00:00
 00:00:00    streaming  async       0              active            0/6053720
 reserved         NULL
sandbox-3  0/6053720  0/6053720  0/6053720  0/6053720   00:00:00   00:00:00
 00:00:00    streaming  async       0              active            0/6053720
 reserved         NULL

Unmanaged Replication Slot Status
No unmanaged replication slots found

Managed roles status
No roles managed

Tablespaces status
No managed tablespaces

Pod Disruption Budgets status
Name             Role     Expected Pods  Current Healthy  Minimum Desired Healthy ␣
↪Disruptions Allowed
- ---             ----     -------------  ---------------  ------------------------  --
↪-----------------
sandbox          replica  2              2                1                         1
sandbox-primary  primary  1              1                1                         0

Instances status
Name       Current LSN  Replication role  Status  QoS         Manager Version  Node
- ---       -----------  ----------------  ------  ---         ---------------  ----
sandbox-1  0/6053720    Primary           OK      BestEffort  1.25.0-rc1          ␣
↪k8s-eu-worker
sandbox-2  0/6053720    Standby (async)   OK      BestEffort  1.25.0-rc1          ␣
↪k8s-eu-worker2
sandbox-3  0/6053720    Standby (async)   OK      BestEffort  1.25.0-rc1          ␣
↪k8s-eu-worker
```

追加の`-v` `kubectl cnpg status sandbox -v -v` などを使用すると、PostgreSQL 構成、HBA 設定、および証明書を表示することもできます。

このコマンドは、 `yaml` および `json` 形式での出力もサポートしています。

40.2.3 プロモート

このコマンドの意味は、クラスター内のポッドをプライマリに promote することにより、メンテナンス作業を開始するか、クラスターでスイッチオーバー状況をテストできます。

```
kubectl cnpg promote CLUSTER CLUSTER-INSTANCE
```

または、インスタンスノード番号を使用してプロモートせることができます。

```
kubectl cnpg promote CLUSTER INSTANCE
```

40.2.4 証明書

CloudNativePG オペレーターを使用して作成されたクラスターは、CA と連携して TLS 認証証明書に署名します。

証明書を取得するには、資格情報を保存するシークレットの名前、クラスター名、およびこの証明書のユーザーを提供する必要があります。

```
kubectl cnpg certificate cluster-cert --cnpg-cluster CLUSTER --cnpg-user USER
```

シークレットが作成されたら、kubectl を使用して取得できます。

```
kubectl get secret cluster-cert
```

また、次のコマンドを使用してプレーンテキストで同じ内容を取得します。

```
kubectl get secret cluster-cert -o json | jq -r .data | map(@base64d) | .[]
```

40.2.5 再起動

kubectl cnpg restart コマンドは、次の 2 つの場合に使用できます。

- 特定のクラスターのロールアウト再起動を調整するようにオペレーターに要求します。これは、カスタム監視クエリを含む ConfigMaps などのクラスター依存オブジェクトに構成変更を適用する場合に役立ちます。
- 単一インスタンスの再起動を要求します。インスタンスがクラスターのプライマリの場合はインプレース、またはレプリカの場合はポッドの削除と再作成。

```
#  this command will restart a whole cluster in a rollout fashion

kubectl cnpg restart CLUSTER

#  this command will restart a single instance, according to the policy above
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
kubectl cnpg restart CLUSTER INSTANCE
```

インプレース・リスタートが要求されたが、スイッチオーバーなしでは変更を適用できない場合、スイッチオーバーはインプレース・リスタートより優先されます。この一般的なケースは、PostgreSQL イメージのマイナーアップグレードです。

注釈: ConfigMaps と Secrets をインスタンスによって**自動的に**リロードしたい場合は、キー `cnpg.io/reload` を持つラベルをそれに追加できます。

40.2.6 リロード

`kubectl cnpg reload` コマンドは、オペレーターに、特定のクラスターの調整ループをトリガーするように要求します。これは、カスタム監視クエリを含む ConfigMap などのクラスター依存オブジェクトに構成変更を適用する場合に役立ちます。

次のコマンドは、特定のクラスターのすべての構成をリロードします。

```
kubectl cnpg reload CLUSTER
```

40.2.7 メンテナンス

`kubectl cnpg maintenance` コマンドは、名前空間全体で 1 つ以上のクラスターを変更し、メンテナンスウィンドウ値を設定するのに役立ちます。次のフィールドを変更します。

- .spec.nodeMaintenanceWindow.inProgress
- .spec.nodeMaintenanceWindow.reusePVC

これを使用して `set` および `unset` を引数として受け入れ、`set` の場合は `inProgress` を `true` に設定し、`unset` の場合は `false` に設定します。

デフォルトでは、 `--reusePVC` フラグが渡されない限り、 `reusePVC` は常に `false` に設定されます。

プラグインは、変更するクラスターのリストとその新しい値の確認を求めます。これが受け入れられる場合、このアクションはリスト内のすべてのクラスターに適用されます。

Kubernetes クラスター内のすべての PostgreSQL をメンテナンスに設定する場合は、次のコマンドを記述するだけです。

```
kubectl cnpg maintenance set --all-namespaces
```

更新するすべてのクラスターのリストが得られます

```
The following are the new values for the clusters
Namespace  Cluster Name     Maintenance  reusePVC
- --------  ------------     -----------  --------
default    cluster-example  true         false
default    pg-backup        true         false
test       cluster-example  true         false
Do you want to proceed? [y/n]: y
```

40.2.8 レポート

kubectl cnpg report コマンドは、さまざまな情報を ZIP ファイルにバンドルします。実稼働環境のクラスターの問題をデバッグするために必要なコンテキストを提供することを目的としています。

operator および cluster の 2 つのサブコマンドがあります。

40.2.9 レポート演算子

operator サブコマンドは、オペレーターの展開、構成、およびイベントに関する情報の提供をオペレーターに要求します。

重要: Secrets と ConfigMap のすべての機密情報は編集されています。データマップには**キー**が表示されますが、値は空になります。フラグ`-S` / *--stopRedaction* は、リダクションを無効にし、値を表示します。自己の責任でのみ使用します。これはプライベートデータを共有します。

注釈: デフォルトでは、オペレーターログは収集されませんが、 *--logs* フラグを使用してオペレーターログ収集を有効にできます

- **展開情報** オペレーター展開とオペレーターポッド
- **configuration** オペレーター名前空間のシークレットと ConfigMap
- **events** オペレーター名前空間のイベント
- **webhook configuration** Webhook 構成の変更および検証
- **webhook service** Webhook サービス
- **logs** JSON 行形式のオペレーターポッドのログオプショナル、デフォルトではオフ

このコマンドは、YAML 形式のさまざまなマニフェストを含む ZIP ファイルを生成しますデフォルトでは、-o フラグを使用して JSON に設定可能です。 -f フラグを使用して、結果ファイルに明示的に名前を付けます。 -f フラグを使用しない場合、zip ファイルにデフォルトのタイムスタンプ付きファイル名が作成されます。

注釈: Report プラグインは `kubectl` 規約に従い、名前空間によって制限されたオブジェクトを検索します。 CNPG オペレーターは、通常、クラスターと同じ名前空間にインストールされません。例デフォルトのインストール名前空間は cnpg-system です

```
kubectl cnpg report operator -n cnpg-system
```

での結果

```
Successfully written report to "report_operator_<TIMESTAMP>.zip" (format: "yaml")
```

-f フラグを設定した場合

```
kubectl cnpg report operator -n cnpg-system -f reportRedacted.zip
```

ファイルを解凍すると、タイムスタンプ付きのトップレベルフォルダーが生成され、ディレクトリを整理します。

```
unzip reportRedacted.zip
```

結果は次のとおりです。

```
Archive:  reportRedacted.zip
   creating: report_operator_<TIMESTAMP>/
   creating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/deployment.yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/operator-pod.yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/events.yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/validating-webhook-configuration.
↪yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/mutating-webhook-configuration.yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/webhook-service.yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/cnpg-ca-secret.yaml
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/cnpg-webhook-cert.yaml
```

--logs オプションをアクティブにすると、追加のサブディレクトリが表示されます。

```
Archive:  report_operator_<TIMESTAMP>.zip
  <snipped ⋯>
  creating: report_operator_<TIMESTAMP>/operator-logs/
  inflating: report_operator_<TIMESTAMP>/operator-logs/cnpg-controller-manager-
↪66fb98dbc5-pxkmh-logs.jsonl
```

注釈: プラグインは、 PREVIOUS オペレーターのログを取得しようとします。これは、再起動されたオペレーターを調査するときに役立ちます。すべての場合、現在のオペレーターログも取得しようとします。

現在と以前のログが利用可能な場合、両方が表示されます。

```
====== Begin of Previous Log =====
2023-03-28T12:56:41.251711811Z {"level":"info","ts":"2023-03-28T12:56:41Z","logger":
↪"setup","msg":"Starting CloudNativePG Operator","version":"1.25.0-rc1","build":{
↪"Version":"1.25.0-rc1+dev107","Commit":"cc9bab17","Date":"2023-03-28"}}
2023-03-28T12:56:41.251851909Z {"level":"info","ts":"2023-03-28T12:56:41Z","logger":
↪"setup","msg":"Starting pprof HTTP server","addr":"0.0.0.0:6060"}
  <snipped ⋯>

====== End of Previous Log =====
2023-03-28T12:57:09.854306024Z {"level":"info","ts":"2023-03-28T12:57:09Z","logger":
↪"setup","msg":"Starting CloudNativePG Operator","version":"1.25.0-rc1","build":{
↪"Version":"1.25.0-rc1+dev107","Commit":"cc9bab17","Date":"2023-03-28"}}
2023-03-28T12:57:09.854363943Z {"level":"info","ts":"2023-03-28T12:57:09Z","logger":
↪"setup","msg":"Starting pprof HTTP server","addr":"0.0.0.0:6060"}
```

オペレーターが再起動されていない場合、`====== Begin ⋯`および`====== End ⋯`ガードが表示されますが、中にコンテンツはありません。

機密情報がデフォルトで編集されていることを確認できます。

```
cd report_operator_<TIMESTAMP>/manifests/
head cnpg-ca-secret.yaml
```

```
data:
  ca.crt: ""
  ca.key: ""
metadata:
  creationTimestamp: "2022-03-22T10:42:28Z"
  managedFields:
    - apiVersion: v1
      fieldsType: FieldsV1
      fieldsV1:
```

`-S --stopRedaction`オプションを有効にすると、シークレットが表示されます。

```
kubectl cnpg report operator -n cnpg-system -f reportNonRedacted.zip -S
```

機密情報を表示しようとしていることを示すリマインダーが届きます。

```
WARNING: secret Redaction is OFF. Use it with caution
Successfully written report to "reportNonRedacted.zip" (format: "yaml")
```

```
unzip reportNonRedacted.zip
head cnpg-ca-secret.yaml
```

```
data:
  ca.crt: LS0tLS1CRUdJTiBD···
  ca.key: LS0tLS1CRUdJTiBF···
metadata:
  creationTimestamp: "2022-03-22T10:42:28Z"
  managedFields:
    - apiVersion: v1
      fieldsType: FieldsV1
```

40.2.10 レポートクラスター

cluster サブコマンドは、以下を収集します。

- **クラスターリソース**クラスター情報、kubectl get cluster -o yaml と同じ
- **クラスターポッド**クラスター名と一致するクラスター名前空間内のポッド
- **クラスタージョブ**クラスター名と一致するクラスター名前空間内のジョブがある場合
- **events** クラスター名前空間のイベント
- **pod logs** JSON 行形式のクラスターポッドのログオプショナル、デフォルトでオフ
- **ジョブログ**ジョブによって作成されたポッドのログオプショナル、デフォルトでオフ JSON 行形式で

cluster サブコマンドは、 operator が行うように、-f および-o フラグを受け入れます。 -f フラグを使用しない場合、デフォルトのタイムスタンプ付きレポート名が使用されます。クラスター情報には構成シークレット/構成マップが含まれていないため、-S は無効になっていることに注意してください。

注釈: デフォルトでは、クラスターログは収集されませんが、 *--logs* フラグを使用してクラスターログ収集を有効にできます

使用法

```
kubectl cnpg report cluster CLUSTER [flags]
```

operator サブコマンドとは異なり、 cluster サブコマンドの場合、クラスターがデフォルトの場合を除き、クラスター名前と、多くの場合、名前空間を指定する必要があることに注意してください。

```
kubectl cnpg report cluster CLUSTER -f report.zip [-n NAMESPACE]
```

そして

```
unzip report.zip
```

```
Archive:  report.zip
   creating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/
   creating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/cluster.yaml
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/cluster-pods.yaml
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/cluster-jobs.yaml
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/events.yaml
```

--logs フラグを使用して、ポッドとジョブログを ZIP に追加できることに注意してください。

```
kubectl cnpg report cluster CLUSTER [-n NAMESPACE] --logs
```

結果は次のとおりです。

```
Successfully written report to "report_cluster_example_<TIMESTAMP>.zip" (format: "yaml
↪")
```

```
unzip report_cluster_<TIMESTAMP>.zip
```

```
Archive:  report_cluster_example_<TIMESTAMP>.zip
   creating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/
   creating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/cluster.yaml
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/cluster-pods.yaml
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/cluster-jobs.yaml
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/manifests/events.yaml
   creating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/logs/
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/logs/cluster-example-full-1.jsonl
   creating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/job-logs/
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/job-logs/cluster-example-full-1-
↪initdb-qnnvw.jsonl
  inflating: report_cluster_example_<TIMESTAMP>/job-logs/cluster-example-full-2-join-
↪tvj8r.jsonl
```

40.2.11 ログ

kubectl cnpg logs コマンドを使用すると、CloudNativePG に関連するポッドのコレクションのログを一度にたどることができます。

現時点では、使用可能なサブコマンドが 1 つあります cluster 。

40.2.12 クラスターログ

cluster サブコマンドは、クラスターのすべてのポッドログを単一のストリームまたはファイルに収集します。これは、単一のターミナルウィンドウで、コマンドを 1 回呼び出して、すべてのポッドログを取得できることを意味します。

すべての cnpg プラグインサブコマンドと同様に、-h フラグの指示とヘルプを取得できます。

```
kubectl cnpg logs cluster -h
```

logs コマンドは、 --timestamps フラグを使用しない限り、JSON 行形式でログを表示します。その場合、人間が判読可能なタイムスタンプが各行の先頭に追加されます。この場合、行は有効な JSON でなくなり、jq などのツールが目的のように動作しない場合があります。

logs cluster サブコマンドに-f フラグ別名--follow が指定されている場合、クラスターポッドログをたどり、コマンドが呼び出された後にクラスターで作成された新しいポッドを監視します。再起動または再作成されたポッドを含む、見つかった新しいポッドもポッドが追跡されます。ログは端末の標準出力に表示されます。このコマンドは、クラスターにポッドが残っていない場合、またはユーザーによって中断された場合にのみ終了します。

-f オプションを指定せずに logs が呼び出された場合、呼び出されるまですべてのクラスターポッドからログを読み取り、ターミナルの標準出力に表示してから終了します。-o または--output フラグを提供して、標準出力で表示する代わりに、ログを保存するファイルの名前を指定できます。--tail フラグを使用して、クラスター内の各ポッドから取得するログ行数を指定できます。デフォルトでは、logs cluster サブコマンドは、クラスター内の各ポッドからのすべてのログを表示します。「follow」フラグ-f と組み合わせると、--tail で指定された数のログが現在まで取得され、それ以降新しいログが追跡されます。

注他の cnpg プラグインコマンドとは異なり、 -f はファイルを指定するのではなく「フォロー」を示すために使用されます。これは、kubectl logs の規則に従いますが、 -f は、ログに従う必要があることを意味します。

使用法

```
kubectl cnpg logs cluster CLUSTER [flags]
```

-f オプションを使用して次のことを行います。

```
kubectl cnpg report cluster CLUSTER -f
```

--tail オプションを使用して各ポッドから 3 行を表示し、 -f オプションを追跡します。

```
kubectl cnpg report cluster CLUSTER -f --tail 3
```

```
{"level":"info","ts":"2023-06-30T13:37:33Z","logger":"postgres","msg":"2023-06-30␣
↪13:37:33.142 UTC [26] LOG:  ending log output to stderr","source":"/controller/log/
↪postgres","logging_pod":"cluster-example-3"}
{"level":"info","ts":"2023-06-30T13:37:33Z","logger":"postgres","msg":"2023-06-30␣
↪13:37:33.142 UTC [26] HINT:  Future log output will go to log destination \"csvlog\
↪".","source":"/controller/log/postgres","logging_pod":"cluster-example-3"}
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
...
...
```

-o オプションを省略し、--output を指定する場合

```
$ kubectl cnpg logs cluster CLUSTER --output my-cluster.log

Successfully written logs to "my-cluster.log"
```

40.2.13 かなり

pretty サブコマンドは、標準入力からログストリームを読み取り、人間が判読可能な出力にフォーマットし、タイムスタンプでエントリを並べ替えようとします。

次の例に示すように、kubectl cnpg logs cluster と組み合わせて使用できます。

```
$ kubectl cnpg logs cluster cluster-example | kubectl cnpg logs pretty
2024-10-15T17:35:00.336 INFO     cluster-example-1 instance-manager Starting␣
↪CloudNativePG Instance Manager
2024-10-15T17:35:00.336 INFO     cluster-example-1 instance-manager Checking for free␣
↪disk space for WALs before starting PostgreSQL
2024-10-15T17:35:00.347 INFO     cluster-example-1 instance-manager starting␣
↪tablespace manager
2024-10-15T17:35:00.347 INFO     cluster-example-1 instance-manager starting external␣
↪server manager
[...]
```

または、次の例にあるように、JSON 形式で CNPG ログを生成する他のコマンド、stern 、kubectl logs などと組み合わせて使用できます。

```
$ kubectl logs cluster-example-1 | kubectl cnpg logs pretty
2024-10-15T17:35:00.336 INFO     cluster-example-1 instance-manager Starting␣
↪CloudNativePG Instance Manager
2024-10-15T17:35:00.336 INFO     cluster-example-1 instance-manager Checking for free␣
↪disk space for WALs before starting PostgreSQL
2024-10-15T17:35:00.347 INFO     cluster-example-1 instance-manager starting␣
↪tablespace manager
2024-10-15T17:35:00.347 INFO     cluster-example-1 instance-manager starting external␣
↪server manager
[...]
```

pretty サブコマンドは、高度なログフィルタリングもサポートしているため、ユーザーは特定のポッドまたはロガーのログを表示したり、重大度レベルでログをフィルタリングしたりできます。次に例を示します。

```
$ kubectl cnpg logs cluster cluster-example | kubectl cnpg logs pretty --pods cluster-
↪example-1 --loggers postgres --log-level info
2024-10-15T17:35:00.509 INFO     cluster-example-1 postgres         2024-10-15␣
↪17:35:00.509 UTC [29] LOG:  redirecting log output to logging collector process
2024-10-15T17:35:00.509 INFO     cluster-example-1 postgres         2024-10-15␣
↪17:35:00.509 UTC [29] HINT:  Future log output will appear in directory "/
↪controller/log"...
2024-10-15T17:35:00.510 INFO     cluster-example-1 postgres         2024-10-15␣
↪17:35:00.509 UTC [29] LOG:  ending log output to stderr
2024-10-15T17:35:00.510 INFO     cluster-example-1 postgres         ending log output␣
↪to stderr
[...]
```

pretty サブコマンドは、ログを推論しやすくするために、ログストリームをソートしようとします。これを行うために、ログをグループに収集し、グループ内でタイムスタンプで並べ替えます。pretty は「follow」モードのコマンドからパイプされる場合があるため、これは対話型で並べ替える唯一の方法です。サブコマンドは、ソートされた各グループの最後にグループ区切り線--- を追加します。次の例に示すように、グループのサイズは--sorting-group-size フラグデフォルト 1000 を介して構成できます。

```
$ kubectl cnpg logs cluster cluster-example | kubectl cnpg logs pretty --sorting-
↪group-size=3
2024-10-15T17:35:20.426 INFO     cluster-example-2 instance-manager Starting␣
↪CloudNativePG Instance Manager
2024-10-15T17:35:20.426 INFO     cluster-example-2 instance-manager Checking for free␣
↪disk space for WALs before starting PostgreSQL
2024-10-15T17:35:20.438 INFO     cluster-example-2 instance-manager starting␣
↪tablespace manager
- --
2024-10-15T17:35:20.438 INFO     cluster-example-2 instance-manager starting external␣
↪server manager
2024-10-15T17:35:20.438 INFO     cluster-example-2 instance-manager starting␣
↪controller-runtime manager
2024-10-15T17:35:20.439 INFO     cluster-example-2 instance-manager Starting␣
↪EventSource
- --
[...]
```

使用可能なすべてのオプションを確認するには、 -h フラグを使用して、サポートされているフラグとその使用法の詳細を確認します。

注釈: *-v* オプションを追加して、ログの詳細度を高めることもできます。

40.2.14 デストロイ

kubectl cnpg destroy コマンドは、インスタンスと、関連するすべての PVC を Kubernetes クラスターから削除するのに役立ちます。

オプションの--keep-pvc フラグを指定すると、PVC を保持したまま、インスタンスによって設定されたすべての metadata.ownerReferences を削除できます。さらに、PVC の cnpg.io/pvcStatus ラベルが ready から detached に変更され、使用されなくなったことを示します。

--keep-pvc フラグを指定せずにコマンドを再度実行すると、分離された PVC が削除されます。

使用法

```
kubectl cnpg destroy CLUSTER INSTANCE
```

次の例は、cluster-example-2 ポッドと関連する PVC を削除します。

```
kubectl cnpg destroy cluster-example 2
```

40.2.15 クラスターハイバーネーション

データを保持しながら CloudNativePG Cluster の実行を一時停止し、後でアクティビティを再開することが必要になる場合があります。この機能を**クラスターハイバーネーション** と呼びます。

ハイバネーションは、 kubectl cnpg hibernate [on|off] コマンドを介してのみ使用できます。

CloudNativePG クラスターを休止するとは、PostgreSQL プライマリインスタンスに属する PVC を除き、クラスターによって生成されたすべてのリソースを破棄することを意味します。

次の方法でクラスターを休止状態にできます。

```
kubectl cnpg hibernate on CLUSTER
```

これにより、

1. すべての PostgreSQL インスタンスをシャットダウンする
2. プライマリインスタンスのデータを含む PVC を切断し、最新のデータベースステータスと最新のクラスター構成でアノテーションを付けます。
3. 生成されたすべてのリソースを含む Cluster リソースを削除します-前述の PVC を除く

冬眠している場合、CloudNativePG クラスターは PVC のグループだけで表され、PGDATA を含むものには、pg_controldata のコンテンツを含む最新の利用可能なステータスで注釈が付けられます。

> **警告:** フェンシングもハイバーネーションプロシージャーの一部であるため、フェンスされたインスタンスを持つクラスターは冬眠できません。

エラーが発生した場合、オペレーターはプロシージャーを元に戻すことはできません。次のコマンドを使用して操作を強制できます。

```
kubectl cnpg hibernate on CLUSTER --force
```

休止状態のクラスターは、次の方法で再開できます。

```
kubectl cnpg hibernate off CLUSTER
```

クラスターが休止状態になると、最後の構成と、シャットダウン後に PostgreSQL のステータスを表示できます。それは次の方法で行うことができます。

```
kubectl cnpg hibernate status CLUSTER
```

40.2.16 pgbench を使用したデータベースのベンチマーク

Pgbench は、次のコマンドを使用して、既存の PostgreSQL クラスターに対して実行できます。

```
kubectl cnpg pgbench CLUSTER -- --time 30 --client 1 --jobs 1
```

詳細については、 *Benchmarking pgbench section* を参照してください。

40.2.17 fio を使用したストレージのベンチマーク

`fio` は、次のコマンドを使用して既存のストレージクラスで実行できます。

```
kubectl cnpg fio FIO_JOB_NAME [-n NAMESPACE]
```

詳細については、 *Benchmarking fio section* を参照してください。

40.2.18 新しい物理バックアップの要求

`kubectl cnpg backup` コマンドは、新しい `Backup` リソースを作成することにより、既存の Postgres クラスターの新しい物理バックアップを要求します。

次の例は、特定のクラスターのオンデマンドバックアップを要求します。

```
kubectl cnpg backup CLUSTER
```

または、ボリュームスナップショットを使用する場合

```
kubectl cnpg backup CLUSTER -m volumeSnapshot
```

作成されるバックアップには、要求時間に基づいた名前が付けられます。

```
$ kubectl cnpg backup cluster-example
backup/cluster-example-20230121002300 created
```

デフォルトでは、新しく作成されるバックアップは、クラスターで定義されたバックアップターゲットポリシーを使用して、実行するインスタンスを選択します。ただし、このポリシーは--backup-target オプションでオーバーライドできます。

ボリュームスナップショットバックアップの場合、 --online オプションを使用して、オンライン/ホットバックアップまたはオフライン/コールドバックアップを要求することもできます。さらに、--immediate-checkpoint および--wait-for-archive オプションを明示的に設定することにより、オンラインバックアップを調整することもできます。

付録 *A*-バックアップ用の共通オブジェクトストア には、構成設定に関する詳細情報が含まれています。

40.2.19 psql の起動

kubectl cnpg psql CLUSTER コマンドは、実際のポッドから実行しているかのように、既存の Postgres クラスターに接続された新しい PostgreSQL 対話型フロントエンドプロセス psql を起動します。これは、postgres ユーザーを使用することを意味します。

重要: *postgres* ユーザーとして接続するため、運用環境では、この方法は許可された担当者のみが細心の注意を払って使用する必要があります。

```
$ kubectl cnpg psql cluster-example

psql (17.2 (Debian 17.2-1.pgdg110+1))
Type "help" for help.

postgres=#
```

デフォルトでは、コマンドはプライマリインスタンスに接続します。ユーザーは--replica オプションを使用して、レプリカに対して作業することを選択できます。

```
$ kubectl cnpg psql --replica cluster-example

psql (17.2 (Debian 17.2-1.pgdg110+1))

Type "help" for help.

postgres=# select pg_is_in_recovery();
 pg_is_in_recovery
- ------------------
 t
(1 row)

postgres=# \q
```

このコマンドは kubectl exec を起動します。正常に動作するには、PATH 変数で kubectl 実行可能ファイルに到達できる必要があります。

40.2.20 Postgres クラスターのスナップショット

警告: *kubectl cnpg snapshot* コマンドは削除されました。 新しい物理バックアップの要求 を使用して、ボリュームスナップショットを使用したバックアップを要求してください。

40.2.21 評価/デモ目的でのみ pgAdmin4 を使用する

pgAdmin は、PostgreSQL の最も人気のある機能が豊富なオープンソースの管理および開発プラットフォームです。プロジェクトの詳細については、公式 documentation を参照してください。

pgAdmin 開発チームが公式の Docker コンテナイメージを維持していることを考えると、標準の Kubernetes 展開として環境に pgAdmin をインストールできます。

重要: Kubernetes 運用環境での pgAdmin の展開は、このドキュメントの範囲を超えており、より広範には CloudNativePG プロジェクトの範囲を超えています。

ただし、 **デモと評価の目的で**、CloudNativePG は適切なソリューションを提供します。 `cnpg` プラグインは `pgadmin4` コマンドを実装し、特定のデータベース `Cluster` に接続し、`kind` などのローカル環境でそのコンテンツをナビゲートする簡単な方法を提供します。

たとえば、次のとおりに `cluster-example` クラスターの pgAdmin4 のデモ展開をインストールできます。

```
kubectl cnpg pgadmin4 cluster-example
```

このコマンドは次を生成します。

```
ConfigMap/cluster-example-pgadmin4 created
Deployment/cluster-example-pgadmin4 created
Service/cluster-example-pgadmin4 created
Secret/cluster-example-pgadmin4 created

[...]
```

pgAdmin を展開した後、kubectl を使用してポートを転送し、画面の指示に従ってブラウザーを介して接続します。

いつものように、`--dry-run` オプションを使用して YAML ファイルを生成できます。

```
kubectl cnpg pgadmin4 --dry-run cluster-example
```

pgAdmin4 はデスクトップまたはサーバーモードでインストールできます。デフォルトはサーバーです。

`server` モードでは、ランダムに生成されたパスワードを使用して認証が必要で、ユーザーは接続するデータベースを手動で指定する必要があります。

一方、`desktop` モードは、認証を必要とせずに pgAdmin Web インターフェイスを開始します。 `app` ユーザーとして `app` データベースに自動的に接続するため、 `kind` を使用したローカル展開などの簡単なデモ

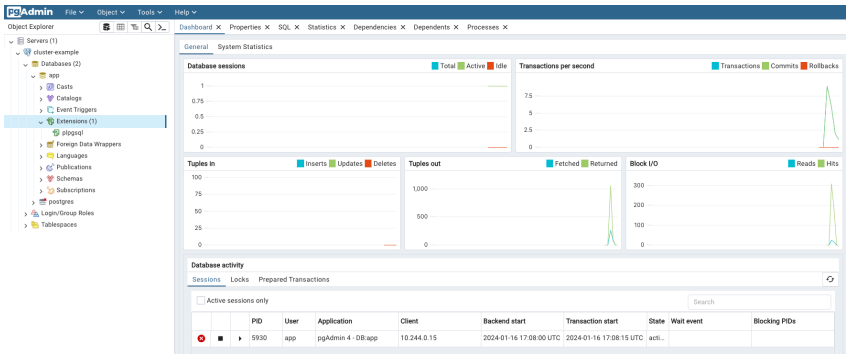


図 1: Screenshot of desktop installation of pgAdmin

に最適です。

```
kubectl cnpg pgadmin4 --mode desktop cluster-example
```

デモが終了した後、次のコマンドを実行して pgAdmin 展開を確実に終了します。

```
kubectl cnpg pgadmin4 --dry-run cluster-example | kubectl delete -f -
```

> **警告:** プラグインを使用して pgAdmin を運用環境に展開しないでください。

40.2.22 ロジカルレプリケーションのパブリケーション

`cnpg publication` コマンドグループは、*PostgreSQL logical replication publications* の作成と削除を合理化するように設計されています。これらのコマンドは、主に、特にリモートの PostgreSQL データベースでの論理レプリケーションパブリケーションの作成を支援することを目的としていることに注意してください。

> **警告:** これらのコマンドを使用する前に、PostgreSQL のネイティブ論理レプリケーションシステムの機能と制限の両方をしっかりと理解することが重要です。特に、 *logical replication restrictions* に注意してください。

40.2.23 新しいパブリケーションの作成

論理レプリケーションパブリケーションを作成するには、`cnpg publication create` コマンドを使用します。このコマンドの基本的な構造は次のとおりです。

```
kubectl cnpg publication create \
  --publication PUBLICATION_NAME \
  [--external-cluster EXTERNAL_CLUSTER]
  LOCAL_CLUSTER [options]
```

2 つの主な使用例があります。

- --external-cluster の場合このオプションを使用して、外部クラスターつまり externalClusters スタンザで定義された上にパブリケーションを作成します。コマンドは LOCAL_CLUSTER から発行されますが、パブリケーションは EXTERNAL_CLUSTER のデータ用です。
- --external-cluster なし このオプションを使用して、LOCAL_CLUSTER PostgreSQL Cluster デフォルトでは app データベースにパブリケーションを作成します。

警告: 外部クラスターに接続するときは、指定されたユーザーに `CREATE PUBLICATION` コマンドを実行するための十分な権限があることを確認してください。

CREATE PUBLICATION と同様の、いくつかのオプションがあります。

コマンドを使用して、レプリケートするテーブルのグループを定義します。重要なオプションには次のものが含まれます。

- --all-tables オプションを指定した場合、パブリケーション FOR ALL TABLES を作成します。
- または、次の複数のオカレンスを指定できます。
- --table 特定のテーブル式を追加します。
- --schema 指定されたデータベーススキーマ PostgreSQL 15 から利用可能にあるすべてのテーブルを含めます。

--dry-run オプションを使用すると、プラグインが実行する SQL コマンドをプレビューできます。

追加情報と詳細な手順については、次のコマンドを入力してください。

```
kubectl cnpg publication create --help
```

例

source-cluster および destination-cluster を指定して、source-cluster 上のデータのパブリケーションを作成します。destination-cluster には、source-cluster を指す externalClusters スタンザにエントリーがあります。

次を実行できます。

```
kubectl cnpg publication create destination-cluster  \
  --external-cluster=source-cluster --all-tables
```

これは、 destination-cluster で SQL コマンドを実行し、source-cluster のすべてのテーブルのパブリケーションを作成します。

または、その代わりに、次を実行できます。

```
kubectl cnpg publication create source-cluster \
  --publication=app --all-tables
```

これは、 source-cluster 内のすべてのテーブルに app という名前のパブリケーションを作成し、ソースクラスターで SQL コマンドを実行します。

注釈: イラストとインスピレーションのために提供されている 2 つのサンプルファイル *logical-source* および *logical-destination* 。

40.2.24 パブリケーションの削除

cnpg publication drop コマンドは、パブリケーション名、クラスター名、オプションの外部クラスターを含む同様のキーオプションを提供することにより、create コマンドをシームレスに補完します。次のコマンド構造を使用して PUBLICATION をドロップできます。

```
kubectl cnpg publication drop \
  --publication PUBLICATION_NAME \
  [--external-cluster EXTERNAL_CLUSTER]
  LOCAL_CLUSTER [options]
```

さらに詳細と正確な指示にアクセスするには、次のコマンドを使用します。

```
kubectl cnpg publication drop --help
```

40.2.25 論理レプリケーションサブスクリプション

cnpg subscription コマンドグループは、*PostgreSQL logical replication subscriptions* の作成と削除を簡素化するように設計された専用のコマンドセットです。これらのコマンドは、特にリモートの PostgreSQL データベースを扱う場合、論理レプリケーションサブスクリプションの確立を支援するように特別に作成されています。

警告: これらのコマンドを使用する前に、PostgreSQL のネイティブ論理レプリケーションシステムの機能と制限の両方を包括的に理解することが重要です。特に、 *logical replication restrictions* に注意してください。

サブスクリプション管理に加えて、ソースクラスターからすべてのシーケンスを同期するための役立つコマンドを提供します。その適用性は異なる場合がありますが、このコマンドは、メジャーアップグレードまたはリモートサーバーからのデータのインポートを含むシナリオで特に役立ちます。

40.2.26 新しいサブスクリプションの作成

論理レプリケーションサブスクリプションを作成するには、cnpg subscription create コマンドを使用します。このコマンドの基本的な構造は次のとおりです。

```
kubectl cnpg subscription create \
  --subscription SUBSCRIPTION_NAME \
  --publication PUBLICATION_NAME \
  --external-cluster EXTERNAL_CLUSTER \
  LOCAL_CLUSTER [options]
```

このコマンドは、 LOCAL_CLUSTER の externalClusters スタンザで定義されているとおりに、指定された外部クラスター内の指定されたパブリケーションを対象としたサブスクリプションを構成します。

追加情報と詳細な手順については、次のコマンドを入力してください。

```
kubectl cnpg subscription create --help
```

例

パブリケーションに関するセクションと同様に、source-cluster および destination-cluster があり、app というパブリケーションを既に作成しています。

次のコマンド

```
kubectl cnpg subscription create destination-cluster \
  --external-cluster=source-cluster \
  --publication=app --subscription=app
```

は、宛先クラスターに app のサブスクリプションを作成します。

> **警告:** 非実稼働環境でのテストサブスクリプションを優先して、実稼働設定に実装する前にその有効性を確認し、潜在的な問題を特定します。

注釈: イラストとインスピレーションのために提供されている 2 つのサンプルファイル *logical-source* および *logical-destination* 。

40.2.27 サブスクリプションの削除

cnpg subscription drop コマンドは、 create コマンドをシームレスに補完します。次のコマンド構造を使用して SUBSCRIPTION をドロップできます。

```
kubectl cnpg subcription drop \
  --subscription SUBSCRIPTION_NAME \
  LOCAL_CLUSTER [options]
```

さらに詳細と正確な指示にアクセスするには、次のコマンドを使用します。

```
kubectl cnpg subscription drop --help
```

40.2.28 シーケンスの同期

パブリケーションとサブスクリプションを介して実装される PostgreSQL 論理レプリケーションの重要な制約の 1 つは、シーケンス同期の欠如です。これは、論理レプリケーションを利用する場合に特に関連しますライブデータベース移行、特に PostgreSQL の上位バージョンの場合。このプロセスの重要な手順には、アプリケーションを新しいデータベース_cutover_に移行する前にシーケンスの更新が含まれます。

この制限に対処するために、 cnpg subscription sync-sequences コマンドは解決策を提供します。このコマンドは、ソースデータベースとの接続を確立し、関連するすべてのシーケンスを取得し、その後、一致する ID でローカルシーケンスを更新しますデータベーススキーマとシーケンス名に基づいて。

以下に示すようにコマンドを使用できます。

```
kubectl cnpg subscription sync-sequences \
  --subscription SUBSCRIPTION_NAME \
  LOCAL_CLUSTER
```

包括的な詳細と特定の手順については、次のコマンドを使用します。

```
kubectl cnpg subscription sync-sequences --help
```

例

パブリケーションとサブスクリプションに関する以前のセクションと同様に、source-cluster および destination-cluster があります。パブリケーションとサブスクリプションは、両方とも app と呼ばれますが、既に存在します。

次のコマンドは、app サブスクリプションに関係するシーケンスをソースクラスターから宛先クラスターに同期します。

```
kubectl cnpg subscription sync-sequences destination-cluster \
  --subscription=app
```

警告: 非実稼働環境でのテストサブスクリプションを優先して、実稼働設定に展開する前にその有効性を保証し、潜在的な問題を検出します。

40.3 K9s との統合

cnpg プラグインは、Kubernetes クラスターと対話するための一般的なターミナルベースの UI である K9s に簡単に統合できます。

詳細は、 *k9s/plugins.yml* を参照してください。

40.4 プラグインに必要な権限

プラグインには、実行するコマンドに応じて一連の Kubernetes 権限が必要です。これらの権限は、ポッド、PDB、PVC などのリソースやサブリソースに影響を与え、`get` 、`delete` 、`patch` などのアクションを有効にする場合があります。次の表には、完全な詳細が含まれています。

Command	Resource Permissions
backup	clusters: get backups: create
certificate	clusters: get secrets: get,create
destroy	pods: get,delete jobs: delete,list PVCs: list,delete,update
fencing	clusters: get,patch pods: get
fio	PVCs: create configmaps: create deployment: create
hibernate	clusters: get,patch,delete pods: list,get,delete pods/exec: create jobs: list PVCs: get,list,update,patch,delete
install	none
logs	clusters: get pods: list pods/log: get
maintenance	clusters: get,patch,list
pgadmin4	clusters: get configmaps: create deployments: create services: create secrets: create
pgbench	clusters: get jobs: create
promote	clusters: get clusters/status: patch pods: get
psql	pods: get,list pods/exec: create
publication	clusters: get pods: get,list pods/exec: create
reload	clusters: get,patch
report cluster	clusters: get pods: list pods/log: get jobs: list events: list PVCs: list
report operator	configmaps: get deployments: get events: list pods: list pods/log: get secrets: get services: get mutatingwebhookconfigurations: list[^1] validatingwebhookconfigurations: list[^1] If OLM is present on the K8s cluster, also: clusterserviceversions: list installplans: list subscriptions: list

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

Command	Resource Permissions
restart	clusters: get,patch pods: get,delete
status	clusters: get pods: list pods/exec: create pods/proxy: create PDBs: list
subscription	clusters: get pods: get,list pods/exec: create
version	none

[^1] 権限は、クラススコープの ClusterRole リソースです。

///脚注はここにあります///

さらに、`clusters` に `list` 権限を割り当てると、複数のコマンドのオートコンプリートが有効になります。

40.4.1 ロールの例

権限が制限されたロールを作成することが可能です。次の例では、クラスターログにのみアクセスするロールを作成します。

```
- --
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: Role
metadata:
  name: cnpg-log
rules:
  - verbs:
      - get
    apiGroups:
      - postgresql.cnpg.io
    resources:
      - clusters
  - verbs:
      - list
    apiGroups:
      - ""
    resources:
      - pods
  - verbs:
      - get
    apiGroups:
      - ""
    resources:
      - pods/log
```

次の例は、プラグインの `status` コマンドを使用してクラスターステータスを取得するために必要な最小限の権限を持つロールを示しています。

```yaml
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: Role
metadata:
  name: cnpg-status
rules:
  - verbs:
      - get
    apiGroups:
      - postgresql.cnpg.io
    resources:
      - clusters
  - verbs:
      - list
    apiGroups:
      - ""
    resources:
      - pods
  - verbs:
      - create
    apiGroups:
      - ""
    resources:
      - pods/exec
  - verbs:
      - create
    apiGroups:
      - ""
    resources:
      - pods/proxy
  - verbs:
      - list
    apiGroups:
      - policy
    resources:
      - poddisruptionbudgets
```

重要: *resources* ごとおよび `apiGroups` ごとに動詞を制限したままにすると、意図した以上の権限を誤って付与するのを防ぐことができます。

第41章　自動フェイルオーバー

プライマリで予期しないエラーが.spec.failoverDelay デフォルトでは 0 秒より長く発生した場合、クラスターは**フェールオーバーモード**になります。これは、たとえば次の場合に発生する可能性があります。

- プライマリポッドにディスク障害が発生した
- プライマリポッドが削除された
- プライマリの postgres コンテナに何らかの持続的な障害がある

フェールオーバーシナリオでは、プライマリが正常に動作していると想定できません。

上記のような場合の後、プライマリポッドの準備状況プローブは失敗し始めます。これは、コントローラの調整ループで取得されます。コントローラは、2 つの手順でフェールオーバープロセスを開始します。

1. 最初に、TargetPrimary を pending としてマークします。この状態の変更は、プライマリポッドを強制的にシャットダウンし、レプリカの WAL レシーバーが停止します。クラスターは、フェールオーバーフェーズ「フェールオーバー」でマークされます。
2. すべての WAL レシーバーが停止すると、リーダー選挙が行われ、新しい予備選挙が名前付けられます。選択されたインスタンスはプライマリへの昇格を開始し、これが完了すると、クラスターは通常のオペレーションを再開します。一方、以前のプライマリポッドは再起動し、プライマリでなくなったことを検出し、レプリカノードになります。

重要: 2 フェーズプロシージャは、WAL レシーバーが正常に停止でき、障害が発生したプライマリが再起動時に WAL のストリーミングを再度開始しないことを保証します。これらの安全対策は、新しいプライマリとレプリカ間のタイムラインの不一致を防ぎます。

障害が発生したプライマリがシャットダウンされている間

1. 最初に.spec.switchoverDelay 秒をタイムアウトとして PostgreSQL の_fast shutdown_を試行します。この正常なシャットダウンは、保留中の WAL をアーカイブしようとします。
2. 高速シャットダウンが失敗するか、そのタイムアウトを超過すると、PostgreSQL の_即時シャットダウン_が開始されます。

注釈: 「Fast」モードは、PostgreSQL クライアントが切断されるのを待機せず、進行中のオンラインバックアップを終了します。アクティブなトランザクションはすべてロールバックされ、クライアントは強制的に切断され、サーバーはシャットダウンされます。「Immediate」モードは、クリーンシャットダウンせずに、すべての PostgreSQL サーバープロセスをすぐに中止します。

41.1 RTO と RPO のインパクト

フェイルオーバーにより、サービスが影響を受ける *RTO と RPO のインパクト*および/またはデータが失われる PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} が発生する場合があります。

1. プライマリに障害が発生し始め、コントローラがフェールオーバー手順を開始する前に、転送中のクエリ、WAL 書き込み、チェックポイントおよび同様の操作が失敗する場合があります。
2. fast shutdown コマンドが発行されると、クラスターは接続を受け入れなくなるため、サービスは影響を受けますが、データは失われません。
3. 高速シャットダウンが失敗した場合、即時シャットダウンは WAL 書き込みを含む保留中のプロセスを停止します。データが失われる可能性があります。
4. プライマリがシャットダウンしており、新しいプライマリがまだ起動していない間、クラスターはプライマリなしで動作するため、機能が低下しますが、データの損失はありません。

注釈: 高速シャットダウンを制御するタイムアウトは、スイッチオーバーの場合と同様に `.spec.switchoverDelay` によって設定されます。高速シャットダウンの時間を長くすることは、RPO の観点からより安全ですが、通常のオペレーションへの復帰が遅延する可能性があり、RTO に悪影響を及ぼします。

警告: インスタンスマネージャーのインプレース更新 で既に述べたように

スイッチオーバープロセスを説明するとき、 `.spec.switchoverDelay` オプションは PostgreSQL データベースの RPO と RTO に影響を与えます。低い値に設定すると、RPO よりも RTO が優先される場合がありますが、クラスターレベルおよび/またはバックアップレベルでデータの損失が発生します。逆に、高い値に設定すると、スイッチオーバー中にアクティブなプライマリのないクラスターを長時間放置する間のデータ損失のリスクを取り除くことができます。

41.2 遅延フェイルオーバー

上記で予想されたように、 `.spec.failoverDelay` オプションを使用すると、プライマリが異常であると検出された後、フェイルオーバープロシージャの開始を秒単位で遅延できます。デフォルトでは、この設定は `0` に設定され、フェイルオーバー手順がすぐにトリガーされます。

場合によっては、新しいプライマリへのフェイルオーバーの方が、プライマリがオンラインに戻るのを待つよりも混乱を招く可能性があります。これは、複数の層が影響を受けるダウンストリーム論理サブスクライバー、またはフェールオーバーの実行時間が予想される停止よりも長い場合、ネットワークの中断に特に当てはまります。

フェールオーバーを遅延する新しい構成オプションを有効にすることにより、短期間のネットワークまたはノードの不安定性による時期尚早のフェールオーバーを防止するメカニズムを提供します。

第42章　障害対応

このページでは、Kubernetes クラスター展開で CloudNativePG をトラブルシューティングする方法に関する基本的な情報を見つけることができます。

ヒント: Kubernetes 管理者は、 kubectl ページをブックマークする必要があります。

42.1 始める前に

42.1.1 Kubernetes 環境

トラブルシューティングアクティビティに違いをもたらすのは、基になる Kubernetes システムに関する明確な情報を提供することです。

次のことを確認してください

- 使用している Kubernetes ディストリビューションとバージョン
- PostgreSQL が実行されているノードの仕様
- 運用に入る前に実行したストレージクラスとベンチマークを含む、実際の**その他の *S3* 互換オブジェクトストレージプロバイダー** について可能な限り。
- クラスターで使用している関連する Kubernetes アプリケーションつまり Prometheus、Grafana、Istio、Certmanager など。
- 継続的なバックアップの状況、特にそれが配置され、正常に動作している場合。そうでない場合、必ず **緊急バックアップ** を取ってください

潜在的な破壊的な操作を実行する前に

42.1.2 便利なユーティリティ

トラブルシューティングの為、必須の `kubectl` ユーティリティに加えて、次のプラグイン/ユーティリティをシステムで使用できることをお勧めします。

- `kubectl` の場合 Backup {postgresql-cnpg-io-v1-Backup}
- jq 、軽量で柔軟なコマンドライン JSON プロセッサー

- grep 、1 つ以上の入力ファイルで、指定されたパターンとの一致を含む行を検索します。これは、ほとんどの*nix ディストリビューションで既に利用可能です。Windows OS を使用している場合は、`grep` の代替として findstr を使用するか、wsl を直接使用できます。

そして、優先する*nix ディストリビューションをインストールし、上記のツールを使用します。

42.2 最初の一歩

クラスターまたはインストールの概要をすばやく取得するために、`kubectl` プラグインは使用する主なツールです。

1. *status subcommand* は、クラスターの概要を提供します
2. *report subcommand* は、クラスターとオペレーター展開のマニフェストを提供します。`--logs` オプションを使用してログを含めることもできます。プラグインを介して生成されたレポートには、完全なクラスターマニフェストが含まれます。

プラグインは、パッケージを介してエアギャップシステムにインストールできます。完全な手順については、*plugin document* を参照してください。

42.3 バックアップはありますか？

プラグインでクラスターマニフェストを取得した後、バックアップがセットアップされ動作しているかどうかを確認する必要があります。

バックアップが設定されたクラスターでは、クラスターステータスにフィールド `lastSuccessfulBackup` および `firstRecoverabilityPoint` があります。最近の `lastSuccessfulBackup` があることを確認する必要があります。

`.spec.backup` スタンザが欠けているクラスターにはバックアップがありません。しつこいメッセージが PostgreSQL ログに表示されます。

```
Backup not configured, skip WAL archiving.
```

トラブルシューティング操作を続行する前に、バックアップに関する結果によっては、緊急バックアップを実行することをお勧めします。手順については、次のセクションを参照してください。

定期的なバックアップを保持せずに運用データベースを操作することは、**非常にリスク** です。

42.4 緊急バックアップ

一部の緊急の状況では、メインの app データベースの緊急論理バックアップを作成する必要がある場合があります。

重要: 以下にある指示は、緊急の場合、および一時的なバックアップファイルは、組織で有効なデータ保護ポリシーの下で保存される場合にのみ実行する必要があります。ダンプファイルは実際に `kubectl` コマンドを実行するクライアントマシンに保存されているため、すべての保護が設定されており、バックアップファイルを保存するための十分な領域があることを確認してください。

次の例は、cluster-example-1 ポッドから cluster-example Postgres クラスターの app データベースの論理バックアップを取得する方法を示しています。

```
kubectl exec cluster-example-1 -c postgres \
  -- pg_dump -Fc -d app > app.dump
```

注釈: 環境で使用したオブジェクトの名前を提供することにより、上記のコマンドをクラスターのバックアップに簡単に適合させることができます。

上記のコマンドは、カスタム形式で pg_dump コマンドを発行します。これは、logical backups in PostgreSQL を取得する最も汎用性の高い方法です。

次の手順は、データベースを復元することです。初期化されたばかりの新しい PostgreSQL クラスターで操作していることを前提としていますので、app データベースは空です。

次の例は、プライマリ new-cluster-example-1 ポッドに接続することにより、new-cluster-example Postgres クラスターの app データベースに上記の論理バックアップを復元する方法を示しています。

```
kubectl exec -i new-cluster-example-1 -c postgres \
  -- pg_restore --no-owner --role=app -d app --verbose < app.dump
```

重要: このセクションの例では、推奨に従って、ダンプとリストアの他のグローバルオブジェクトデータベースとロールがないことを前提としています。複数のロールがある場合は、 *pg_dumpall -g* を使用してバックアップをとり、新しいクラスターに手動で復元していることを確認します。複数のデータベースがある場合、一度に 1 つのデータベースごとに上記の操作を繰り返し、適切な所有権を割り当てていることを確認する必要があります。 PostgreSQL に慣れていない場合は、専門のサポート会社の指導の下でこれらの重要な操作を実行することをお勧めします。

上記の手順は、将来のある段階で cnpg プラグインに統合される可能性があります。

42.5 ログ

CloudNativePG によって作成および管理されるすべてのリソースは、*JSON 形式の PostgreSQL エラーメッセージの標準出力ログ* を使用して、Kubernetes 規約に従って標準出力に記録されます。

ログは通常インフラレベルで処理され、CloudNativePG からのログが含まれますが、トラブルシューティング中にコマンドラインインターフェイスからログに直接アクセスすることが重要です。これには、3 つの主なオプションがあります。

- `kubectl logs` コマンドを使用して特定のリソースからログを取得し、読みやすいように `jq` を適用します。
- CloudNativePG 固有のロギングには *kubectl cnpg logs* を使用します。
- stern のような専用のオープンソースツールを活用し、複数のリソースたとえば、`cnpg.io/clusterName` ラベルを選択して PostgreSQL クラスター内のすべてのポッドからログを集計し、ログエントリをフィルタリング、出力形式をカスタマイズできます。

注釈: 以下のセクションでは、CloudNativePG のトラブルシューティングを行うときにさまざまなリソースのログを取得する方法の例を提供します。

42.6 オペレーター情報

デフォルトでは、CloudNativePG オペレーターは Kubernetes の `cnpg-system` 名前空間に `Deployment` としてインストールされますデプロイメントの詳細 を参照してください

詳細についてはこちらをご覧ください。

次のコマンドを実行して、オペレーターポッドのリストを取得できます。

```
kubectl get pods -n cnpg-system
```

注釈: 通常、オペレーターが実行されているポッドが 1 つあり、 *cnpg-controller-manager-* で始まる名前で識別されます。高可用性用にオペレーターを設定している場合、より多くのエントリがあるはずです。これらのポッドは、 *cnpg-controller-manager* という名前の展開によって管理されます。

次の方法を使用して、ポッド <POD> で実行されているオペレーターに関する関連情報を収集します。

```
kubectl describe pod -n cnpg-system <POD>
```

次に、次のコマンドを実行して同じポッドからログを取得します。

```
kubectl logs -n cnpg-system <POD>
```

42.6.1 オペレーターに関する詳細情報を収集する

次のコマンドを実行して、CloudNativePG オペレーター展開のすべてのポッドからログを取得しますマルチオペレーター展開がある場合。

```
kubectl logs -n cnpg-system \
  deployment/cnpg-controller-manager --all-containers=true
```

Tip: *-f* フラグを上記のコマンドに追加して、リアルタイムでログを追跡できます。

次のコマンドを実行して、ログを JSON ファイルに保存します。

```
kubectl logs -n cnpg-system \
  deployment/cnpg-controller-manager --all-containers=true | \
  jq -r . > cnpg_logs.json
```

kubectl-cnpg プラグインを使用して CloudNativePG オペレーターバージョンを取得します。

```
kubectl-cnpg status <CLUSTER>
```

出力

```
Cluster in healthy state
Name:               cluster-example
Namespace:          default
System ID:          7044925089871458324
PostgreSQL Image:   ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2-3
Primary instance:   cluster-example-1
Instances:          3
Ready instances:    3
Current Write LSN:  0/5000000 (Timeline: 1 - WAL File: 000000010000000000000004)

Continuous Backup status
Not configured

Streaming Replication status
Name               Sent LSN   Write LSN  Flush LSN  Replay LSN  Write Lag       Flush␣
↪Lag       Replay Lag      State      Sync State  Sync Priority
- ---               --------   ---------  ---------  ----------  ---------       -----
↪----       ----------      -----      ----------  -------------
cluster-example-2  0/5000000  0/5000000  0/5000000  0/5000000   00:00:00       ␣
↪00:00:00        00:00:00        streaming  async       0
cluster-example-3  0/5000000  0/5000000  0/5000000  0/5000000   00:00:00.10033 ␣
↪00:00:00.10033  00:00:00.10033  streaming  async       0
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
Instances status
Name               Database Size  Current LSN  Replication role  Status  QoS        ␣
↪Manager Version
- ---                -------------  -----------  ----------------  ------  ---        ␣
↪---------------
cluster-example-1  33 MB          0/5000000    Primary           OK      BestEffort ␣
↪1.12.0
cluster-example-2  33 MB          0/5000000    Standby (async)   OK      BestEffort ␣
↪1.12.0
cluster-example-3  33 MB          0/5000060    Standby (async)   OK      BestEffort ␣
↪1.12.0
```

42.7 クラスター情報

NAMESPACE 名前空間の<CLUSTER> クラスターのステータスは、次の方法で確認できます。

```
kubectl get cluster -n <NAMESPACE> <CLUSTER>
```

出力

```
NAME        AGE        INSTANCES   READY   STATUS                     PRIMARY
<CLUSTER>   10d4h3m    3           3       Cluster in healthy state   <CLUSTER>-1
```

上記の例では、すべてが_ready_状態で、<CLUSTER>-1 がプライマリである 3 つのインスタンスの正常な PostgreSQL クラスターをレポートします。

異常な状態の場合、 Cluster リソースのマニフェストを取得することにより、詳細を検出できます。

```
kubectl get cluster -o yaml -n <NAMESPACE> <CLUSTER>
```

収集するもう 1 つの重要なコマンドは、 cnpg プラグインが提供する status コマンドです。

```
kubectl cnpg status -n <NAMESPACE> <CLUSTER>
```

Tip: *--verbose* オプションを追加することにより、詳細情報を印刷できます。

PostgreSQL コンテナイメージバージョンを取得します。

```
kubectl describe cluster <CLUSTER_NAME> -n <NAMESPACE> | grep "Image Name"
```

出力

```
Image Name:    ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2-3
```

注釈: また、 *kubectl-cnpg status -n <NAMESPACE> <CLUSTER_NAME>* を使用して同じ情報を取得できます。

42.8 ポッド情報

次の方法を使用して、特定の PostgreSQL クラスターに属するインスタンスのリストを取得できます。

```
kubectl get pod -l cnpg.io/cluster=<CLUSTER> -L role -n <NAMESPACE>
```

出力

```
NAME          READY   STATUS    RESTARTS   AGE       ROLE
<CLUSTER>-1   1/1     Running   0          10d4h5m   primary
<CLUSTER>-2   1/1     Running   0          10d4h4m   replica
<CLUSTER>-3   1/1     Running   0          10d4h4m   replica
```

次を実行して、ポッドに障害が発生しているかどうか、およびどのように障害が発生しているかを確認できます。

```
kubectl get pod -n <NAMESPACE> -o yaml <CLUSTER>-<N>
```

次の使用で、特定の PostgreSQL インスタンスのすべてのログを取得できます。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N>
```

検索を PostgreSQL プロセスのみに制限したい場合は、次のコマンドを実行できます。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | \
  jq select(.logger=="postgres") | .record.message
```

次の例では、タイムスタンプも追加します。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | \
  jq -r select(.logger=="postgres") | [.ts, .record.message] | @csv
```

タイムスタンプが Unix エポック時間で表示されている場合、使いやすい形式に変換できます。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | \
  jq -r select(.logger=="postgres") | [(.ts|strflocaltime("%Y-%m-%dT%H:%M:%S %Z")), .
↪record.message] | @csv
```

42.8.1 PostgreSQL ポッドに関する追加情報を収集およびフィルタリングする

クラッシュした特定のポッドからログを確認します。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> --previous <CLUSTER>-<N>
```

特定の PostgreSQL ポッドから FATAL エラーを取得します。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | \
  jq -r .record | select(.error_severity == "FATAL")
```

出力

```
{
  "log_time": "2021-11-08 14:07:44.520 UTC",
  "user_name": "streaming_replica",
  "process_id": "68",
  "connection_from": "10.244.0.10:60616",
  "session_id": "61892f30.44",
  "session_line_num": "1",
  "command_tag": "startup",
  "session_start_time": "2021-11-08 14:07:44 UTC",
  "virtual_transaction_id": "3/75",
  "transaction_id": "0",
  "error_severity": "FATAL",
  "sql_state_code": "28000",
  "message": "role \"streaming_replica\" does not exist",
  "backend_type": "walsender"
}
```

特定のポッドのログにある PostgreSQL DB エラーメッセージをフィルタリングします。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | jq -r .err | select(. != null)
```

出力

```
dial unix /controller/run/.s.PGSQL.5432: connect: no such file or directory
```

err ワードと一致するメッセージを特定のポッドから取得します。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | jq -r .msg | grep "err"
```

出力

```
2021-11-08 14:07:39.610 UTC [15] LOG:  ending log output to stderr
```

特定のポッドから PostgreSQL プロセスからすべてのログを取得します。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | \
  jq -r . | select(.logger == "postgres") | select(.msg != "record") | .msg
```

出力

```
2021-11-08 14:07:52.591 UTC [16] LOG:  redirecting log output to logging collector␣
↪process
2021-11-08 14:07:52.591 UTC [16] HINT:  Future log output will appear in directory "/
↪controller/log".
2021-11-08 14:07:52.591 UTC [16] LOG:  ending log output to stderr
2021-11-08 14:07:52.591 UTC [16] HINT:  Future log output will go to log destination
↪"csvlog".
```

値を含むフィールドでフィルタリングされた Pod ログを取得し、実行している| で区切って結合します。

```
kubectl logs -n <NAMESPACE> <CLUSTER>-<N> | \
  jq -r [.level, .ts, .logger, .msg] | join(" | ")
```

出力

```
info | 1636380469.5728037 | wal-archive | Backup not configured, skip WAL archiving
info | 1636383566.0664876 | postgres | record
```

42.9 バックアップ情報

次の使用で、名前付けクラスターに対して作成されたバックアップをリストできます。

```
kubectl get backup -l cnpg.io/cluster=<CLUSTER>
```

42.10 ストレージ情報

次のように、クラスターが使用する StorageClass をダブルチェックして、調査またはトラブルシューティング中により多くのコンテキストを理解すると役立つ場合があります。

```
STORAGECLASS=$(kubectl get pvc <POD> -o jsonpath={.spec.storageClassName})
kubectl get storageclasses $STORAGECLASS -o yaml
```

多くの場合、クラスターはデフォルトの StorageClass を使用して作成されるため、ここではクラスターポッドの 1 つから StorageClass を取得します。

42.11 ノード情報

Kubernetes ノードは、最終的に PostgreSQL ポッドが実行される場所です。それらについてできるだけ多くを知ることが戦略的に重要です。

次の使用で、Kubernetes クラスター内のノードのリストを取得できます。

```
#  look at the worker nodes and their status

kubectl get nodes -o wide
```

さらに、特定のクラスターのポッドが実行されているノードのリストを収集できます。

```
kubectl get pod -l cnpg.io/cluster=<CLUSTER> \
  -L role -n <NAMESPACE> -o wide
```

後者は、ポッドがどこに分散されているかを理解するために重要です。*affinity/anti-affinity rules and/or tolerations* を使用している場合に非常に役立ちます。

42.12 条件

多くのネイティブ kubernetes オブジェクト like here と同様に、クラスターは `status.conditions` も公開します。これにより、クラスター全体の状態に依存するのではなく、特定のイベントが発生するを「待機」できます。現在利用可能な条件は次のとおりです。

- LastBackupSucceeded
- 継続的アーカイブ
- 準備完了

`LastBackupSucceeded` は、最新のバックアップのステータスを報告しています。 `True` に設定されている場合、最後のバックアップは正しく取得されており、それ以外の場合は `False` に設定されます。

`ContinuousArchiving` は、WAL アーカイブのステータスを報告しています。`True` に設定されている場合、最後の WAL アーカイブプロセスは正常に終了しており、それ以外の場合は `False` に設定されます。

クラスターにユーザーが指定した数のインスタンスがあり、プライマリインスタンスの準備ができている場合、`Ready` は `True` です。この条件は、クラスターが作成されるのを待機するスクリプトで使用できます。

42.12.1 特定の条件を待機する方法

- バックアップ

```
$ kubectl wait --for=condition=LastBackupSucceeded cluster/<CLUSTER-NAME> -n
↪<NAMESPACE>
```

- 継続的アーカイブ

```
$ kubectl wait --for=condition=ContinuousArchiving cluster/<CLUSTER-NAME> -n
↪<NAMESPACE>
```

- Ready クラスターの準備ができているかどうか。

```
$ kubectl wait --for=condition=Ready cluster/<CLUSTER-NAME> -n <NAMESPACE>
```

以下は、失敗条件を含む `cluster.status` のスニペットです。

```
$ kubectl get cluster/<cluster-name> -o yaml
.
.
.
  status:
    conditions:
    - message: unexpected failure invoking barman-cloud-wal-archive: exit status
        2
      reason: ContinuousArchivingFailing
      status: "False"
      type: ContinuousArchiving

    - message: exit status 2
      reason: LastBackupFailed
      status: "False"
      type: LastBackupSucceeded

    - message: Cluster Is Not Ready
      reason: ClusterIsNotReady
      status: "False"
      type: Ready
```

42.13 ネットワーキング

CloudNativePG には、基本的なネットワーキングと接続が必要です。詳細については、ネットワーキングセクションをご覧ください。

既存の環境に CloudNativePG をインストールする場合、ネットワークポリシー、またはクラスター専用に作成されたその他のネットワーク構成が存在する可能性があります。これは、オペレーターとクラスターポッド間および/またはポッド間の必要な接続に影響を与える可能性があります。

次のコマンドを使用して、既存のネットワークポリシーを検索できます。

```
kubectl get networkpolicies
```

Kubernetes ネットワーク管理者によって設定された複数のネットワークポリシーが存在する場合があります。

```
$ kubectl get networkpolicies
NAME                   POD-SELECTOR                        AGE
allow-prometheus       cnpg.io/cluster=cluster-example   47m
default-deny-ingress   <none>                              57m
```

42.14 PostgreSQL コアダンプ

まれに、PostgreSQL はクラッシュし、PGDATA フォルダーにコアダンプを生成する場合があります。それが発生した場合、通常、それは PostgreSQL のバグであり、ほとんどの場合、既に解決されています。これが、常に PostgreSQL の最新のマイナーバージョンを実行することが重要である理由です。

CloudNativePG では、 cnpg.io/coredumpFilter アノテーションを介してコアダンプに含めるものを制御できます。

注釈: ラベルとアノテーション を参照してください。

CloudNativePG が提供する標準のアノテーションの詳細については、をご覧ください。

デフォルトでは、これがほとんどの場合最も安全なアプローチであるため、ダンプから共有メモリセグメントを除外するために、cnpg.io/coredumpFilter は 0x31 に設定されます。

注釈: Core dump filtering settings を参照してください。コアダンプフィルタを制御するビットマスクを設定する方法の詳細については、

重要: この設定はポッドの起動中にのみ有効になり、アノテーションを変更してもインスタンスの自動ロールアウトはトリガーされないことに注意してください。

あなたはコアダンプの検査に個人的に関わっていないかもしれませんが、Postgres の専門家がそれらを調べることができるようにそれらの提供を求められる場合があります。まず、次のコマンドを使用して、PGDATA ディレクトリにコアダンプがあることを確認します。Postgres インスタンスが実行されている正しいポッドに対して実行してください。

```
kubectl exec -ti POD -c postgres \
  -- find /var/lib/postgresql/data/pgdata -name core.*
```

通常、これは空のセットを返すはずです。例、コアダンプファイルがあるとします。

```
/var/lib/postgresql/data/pgdata/core.14177
```

ディスク上の領域が十分であることを確認したら、次のように kubectl cp を介してマシンでコアダンプを収集できます。

```
kubectl cp POD:/var/lib/postgresql/data/pgdata/core.14177 core.14177
```

これで、ファイルができました。コアダンプを削除して、サーバー上の領域を解放してください。

42.15 いくつかの既知の問題

42.15.1 ストレージがいっぱいです

ストレージがいっぱいの場合、PostgreSQL ポッドは新しいデータを書き込むことができません。または、WAL セグメントを含むディスクがいっぱいである場合、PostgreSQL はシャットダウンします。

ディスクがいっぱいであることに関するメッセージがログにある場合は、影響を受ける PVC のサイズを増やす必要があります。これは、PVC を編集し、spec.resources.requests.storage フィールドを変更することにより行うことができます。その後、新しいサイズでクラスターリソースを更新して、同じ変更をすべてのポッドに適用する必要があります。ドキュメントの ボリュームの拡張 を参照してください。

WAL セグメントの領域が使い果たされると、ポッドはクラッシュループし、クラスターステータスは Not enough disk space と報告されます。PVC、次にクラスターリソースのサイズを増やすと、問題が解決されます。ディスクフル障害 も参照してください。

42.15.2 ポッドが Pending 状態でスタックしている

クラスターのインスタンスが Pending フェーズでスタックしている場合、ポッドの Events セクションを確認して、この背後にある理由を理解する必要があります。

```
kubectl describe pod -n <NAMESPACE> <POD>
```

この考えられる原因の一部は次のとおりです。

- nodeSelector と一致するノードはありません
- Toleration がノードのテイントと一致するように正しく構成されていません

- 利用可能なノードがまったくありません。これは、cluster-autoscaler がいくつかの制限に到達したこと、または一時的な問題が発生したことに関連している可能性があります。

この場合、名前空間内のイベントをチェックすることも役立つ場合があります。

```
kubectl get events -n <NAMESPACE>

#  list events in chronological order

kubectl get events -n <NAMESPACE> --sort-by=.metadata.creationTimestamp
```

42.15.3 バックアップが構成されていない場合、レプリカが同期していない

場合によっては、メンテナンスのため、レプリカが少しの間オフになる場合があります Kubernetes ノードがドレインされたときを考えてください。クラスターにバックアップが構成されていない場合、レプリカがバックアップしたときに、プライマリにはもう存在しない WAL ファイル:ref:``postgresql` セクション <*postgresql* セクション>` で述べているように、WAL 管理ポリシーに従って既にリサイクルされており、フォールアウトする場合があります同期のこと。

同様に、pg_rewind が以前のプライマリに存在しない WAL ファイルを必要とする場合、pg_rewind: error: could not open file をレポートします。

これらの場合、ポッドの準備ができなくなるため、PVC を削除し、オペレーターにレプリカを再構築してもらう必要があります。

動的にプロビジョニングされた永続ボリュームに依存し、PV 自分自身を削除することに自信がある場合は、次の方法で削除できます。

```
PODNAME=<POD>
VOLNAME=$(kubectl get pv -o json | \
  jq -r .items[]|select(.spec.claimRef.name==\"$PODNAME\")|.metadata.name)

kubectl delete pod/$PODNAME pvc/$PODNAME pvc/$PODNAME-wal pv/$VOLNAME
```

42.15.4 クラスターが Creating new replica でスタックしている

クラスターは「新しいレプリカの作成」でスタックしていますが、ポッドログには関連する問題は表示されません。これは、次の問題インストールされたネットワークポリシーにより、ネットワーキングが障害されますに関連していることがわかりました。ネットワークの問題は、次のようにステータス列に反映されます。

```
Instance Status Extraction Error: HTTP communication issue
```

42.15.5 インストールされたネットワークポリシーにより、ネットワーキングが障害されます

ネットワーキング で指摘されているように、ローカルネットワークポリシーは、必要な接続の一部を妨げる可能性があります。

接続が障害されていることを示す兆候は、オペレーターログに次のようなメッセージが存在することです。

```
"Cannot extract Pod status", [···snipped···] "Get \"http://<pod IP>:8000/pg/status\":␣
↪dial tcp <pod IP>:8000: i/o timeout"
```

ネットワークポリシーをリストし、接続を制限するポリシーを探す必要があります。

```
$ kubectl get networkpolicies
NAME                   POD-SELECTOR                        AGE
allow-prometheus       cnpg.io/cluster=cluster-example   47m
default-deny-ingress   <none>                              57m
```

たとえば、上記のリストでは、 `default-deny-ingress` が犯人である可能性が高いと思われます。それをドリルダウンできます。

```
$ kubectl get networkpolicies default-deny-ingress -o yaml
<···snipped···>
spec:
  podSelector: {}
  policyTypes:
  - Ingress
```

networking page には、オペレーターがクロスネームスペースをクラスターポッドに接続できるようにする `NetworkPolicy` を作成するようにカスタマイズできるネットワークポリシーファイルがあります。

42.15.6 データディレクトリのブートストラップ中のエラー

クラスターの初期化ジョブが「バスエラーコアダンプされた子プロセスが終了コード 135 で終了しました」でクラッシュした場合、クラスター hugepages 設定を修正する必要がある可能性があります。

その理由は、v2 で修正する必要がある cgroup v1 の huge ページのサポートが不完全であるためです。詳細については、PostgreSQL BUG #17757: Nothonoring huge_pages setting during initdb causes DB crash inKubernetes を確認してください。

huge ページが有効になっているかどうかを確認するには、Kubernetes ノードで `grep HugePages /proc/meminfo` を実行し、hugepage が存在するかどうか、そのサイズ、および空き数を確認します。

huge ページが存在する場合、すべての PostgreSQL ポッドで使用可能な hugepage メモリの量を構成する必要があります。

例

```
postgresql:
  parameters:
    shared_buffers: "128MB"

resources:
  requests:
    memory: "512Mi"
  limits:
    hugepages-2Mi: "512Mi"
```

クラスター内のすべてのポッドをスケジュールするには、十分な hugepages メモリが必要であることに注意してください。上記の例では、ポッドごとに少なくとも 512MiB を解放する必要があります。

42.15.7 ブートストラップジョブが実行中ステータスでハングする

Running ステータスにあるときにクラスターの初期化ジョブがハングし、メッセージ「API サーバーが到達可能になるのを待機しているときにエラーが発生した場合」は、おそらくネットワークに問題があり、Kubernetes API サーバーとの通信を妨げています。初期化ジョブほとんどのジョブと同様に、Kubernetes API にアクセスする必要があります。ネットワークを確認してください。

もう 1 つの考えられる原因は、サイドカーインジェクションを構成している場合です。Istio などのサイドカーは、起動中にネットワークを一時的に利用できなくなる場合があります。サイドカーインジェクションを有効にしている場合は、インジェクションを無効にして再試行します。

第43章　フェンシング

CloudNativePG のフェンシングは、PostgreSQL クラスターの 1 つ以上、またはすべてのインスタンスに障害が発生しているように見える場合に、データを保護する究極のプロセスです。インスタンスがフェンスされると、PostgreSQL サーバープロセス `postmaster` はシャットダウンが保証されますが、ポッドは実行されたままです。これにより、フェンスが解除されるまで、ポッド上のデータが PostgreSQL によって変更されず、デバッグとトラブルシューティングの目的でファイルシステムを調査できることが保証されます。

43.1 インスタンスをフェンスする方法

CloudNativePG では、次のことをフェンスできます。

- 特定のインスタンス
- インスタンスのリスト
- Postgres 全体 `Cluster`

フェンシングは、`cnpg.io/fencedInstances` アノテーションの内容を介して制御されます。これは、JSON 形式のインスタンス名のリストを想定しています。アノテーションが`'["*"]'`、ワイルドカードを使用したシングルトンリストに設定されている場合、クラスター全体がフェンスされます。アノテーションが空の JSON リストに設定されている場合、オペレーターは、アノテーションが設定されていないかのように動作します。

例

- `cnpg.io/fencedInstances: '["cluster-example-1"]'` は `cluster-example-1` インスタンスのみをフェンスします
- `cnpg.io/fencedInstances: '["cluster-example-1","cluster-example-2"]'` は、`cluster-example-1` および `cluster-example-2` インスタンスをフェンスします
- `cnpg.io/fencedInstances: '["*"]'` は、クラスター内のすべてのインスタンスをフェンスします。

アノテーションは、`kubectl annotate` コマンドを介して、または `kubectl cnpg fencing on` サブコマンドを使用して透過的な方法で、Kubernetes オブジェクトに手動で設定できます。

```
#  to fence only one instance

kubectl cnpg fencing on cluster-example 1

#  to fence all the instances in a Cluster
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
kubectl cnpg fencing on cluster-example "*"
```

次に、以前にフェンスされたインスタンスを使用した Cluster の例を示します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
    annotations:
      cnpg.io/fencedInstances: ["cluster-example-1"]
[...]
```

43.2 フェンシングのリフティング方法

フェンシングは、注釈をクリアするか、別の値に設定することにより解除できます。

フェンシングに関しては、これは kubectl annotate を使用して手動で行うか、次のように kubectl cnpg fencing サブコマンドを使用して実行できます。

```
#  to lift the fencing only for one instance

#  N.B.: at the moment this wont work if the whole cluster was fenced previously,

#        in that case you will have to manually set the annotation as explained above

kubectl cnpg fencing off cluster-example 1

#  to lift the fencing for all the instances in a Cluster

kubectl cnpg fencing off cluster-example "*"
```

43.3 フェンシングの仕組み

インスタンスがフェンシング用に設定されると、スイッチオーバーの場合と同様に、postmaster プロセスをシャットダウンする手順が開始されます。これは、タイムアウトを.spec.switchoverDelay に設定した最初の高速シャットダウンと、それに続く即時シャットダウンで構成されます。次に

- ポッドは生きたままになります
- ポッドは **準備完了** としてマークされません
- Postgres インスタンスを起動する必要がないすべての変更がリコンサイルされます。
  - 構成ファイル

  - 証明書およびすべての暗号化マテリアル

- 1 に設定される cnpg_collector_fencing_on を除き、メトリックは収集されません

警告: **プライマリインスタンス**がフェンスされている場合、そのポストマスタープロセスはシャットダウンされますが、フェイルオーバーは実行されず、アプリケーションの操作性が中断されます。フェンスが解除されると、プライマリインスタンスはフェイルオーバーを実行せずに再度起動されます。

そのため、厳密に必要な場合にのみプライマリインスタンスをフェンスすることをお勧めします。

フェンスされたインスタンスが削除されると、ポッドは通常通り再作成されますが、ポストマスターは起動されません。これは、インスタンスが Crashlooping の場合に非常に役立ちます。

第44章　宣言的ハイバーネーション

CloudNativePG は、PostgreSQL クラスターを起動、実行、いつでも利用できるように設計されています。

一部の種類のワークロードは、ワークロードがアクティブなときにのみデータベースを起動する必要があります。バッチ駆動のソリューションは、そのようなケースの 1 つです。

バッチ駆動ソリューションでは、バッチプロセスの実行中にのみデータベースを起動する必要があります。

宣言的ハイバーネーション機能を使用すると、データベース PVC を維持したままデータベースポッドを削除することにより、CPU パワーを節約できます。

注釈: 宣言的ハイバーネーションは、 imperative hibernation via the `cnpg plugin <Kubectl プラグイン>` の既存の実装とは異なります。必須ハイバーネーションは、高可用性クラスター内のすべての Postgres インスタンスをシャットダウンし、 *PGDATA* および WAL を含むプライマリの PVC の静的コピーを保持します。プラグインは、プライマリを再開し、すべてのレプリカが存在する場合を再作成することにより、ハイバーネーションフェーズを終了できます。

44.1 ハイバネーション

クラスターを休止状態にするには、 `cnpg.io/hibernation=on` アノテーションを設定します。

```
$ kubectl annotate cluster <cluster-name> --overwrite cnpg.io/hibernation=on
```

冬眠したクラスターには実行中のポッドはありませんが、PVC は保持されるため、後でクラスターをリハイドレートできます。レプリカ PVC は、プライマリの PVC に加えて保持されます。

ハイバーネーションプロシージャは、プライマリポッドを削除してからレプリカポッドを削除し、スイッチオーバーを回避して、レプリカの同期が保たれるようにします。

ハイバーネーションステータスは、 `cnpg.io/hibernation` 条件を探すことにより監視できます。

```
$ kubectl get cluster <cluster-name> -o "jsonpath={.status.conditions[?(.type==\"cnpg.
↪io/hibernation\")]}"

{
        "lastTransitionTime":"2023-03-05T16:43:35Z",
        "message":"Cluster has been hibernated",
        "reason":"Hibernated",
        "status":"True",
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
        "type":"cnpg.io/hibernation"
}
```

ハイバーネーションステータスは、kubectl の cnpg プラグインの status サブコマンドで読み取ることもできます。

```
$ kubectl cnpg status <cluster-name>
Cluster Summary
Name:               cluster-example
Namespace:          default
PostgreSQL Image:   ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2
Primary instance:   cluster-example-2
Status:             Cluster in healthy state
Instances:          3
Ready instances:    0

Hibernation
Status   Hibernated
Message  Cluster has been hibernated
Time     2023-03-05 16:43:35 +0000 UTC
[..]
```

44.2 水分補給

クラスターを rehydrate には、 cnpg.io/hibernation アノテーションを off に設定します。

```
$ kubectl annotate cluster <cluster-name> --overwrite cnpg.io/hibernation=off
```

または、完全に設定を解除します。

```
$ kubectl annotate cluster <cluster-name> cnpg.io/hibernation-
```

ポッドが再作成され、クラスターがオペレーションを再開します。

第45章　PostGIS

PostGIS は、 PostgreSQL の非常に人気のオープンソース拡張機能であり、GIS 地理情報システムオブジェクトをデータベースに保存し、SQL を介して照会するためのサポートを導入します。

重要: このセクションでは、PostGIS に精通していることを前提として、CloudNativePG を介して Kubernetes で PostGIS データベースを使用して新しい PostgreSQL クラスターを作成する方法に関する基本情報を提供します。

CloudNativePG コミュニティは、公式の *PostGIS images hosted on DockerHub* 上にビルドされたコンテナイメージを維持します。詳細については、次をご覧ください。

- *postgis-containers*
- *postgis-containers*

45.1 PostGIS クラスターに関する基本的な概念

概念的に、PostGIS ベースの PostgreSQL クラスターまたは単に PostGIS クラスターは、他の PostgreSQL クラスターと似ています。唯一の違いは次のとおりです。

- PostGIS および関連ライブラリのシステム内の存在
- PostGIS 拡張機能のデータベース内の存在

CloudNativePG は不変アプリケーションコンテナに基づいているため、PostGIS をプロビジョニングする唯一の方法は、オペランドに使用するコンテナイメージに追加することです。**コンテナイメージの要件** は、これを実現する方法に関する詳細な手順を提供します。もっと簡単には、以下の例にあるように、コミュニティからの PostGIS コンテナイメージを使用できます。

2 番目のステップは、PostgreSQL データベースに拡張機能をインストールすることです。これは 2 つの方法で行うことができます。

- アプリケーションデータベースにインストールします。これは、マイクロサービスアーキテクチャに従って、クラスターでホストするメインで唯一のデータベースです。または
- インスタンスが複数のデータベースで共有されるモノリスアーキテクチャを採用する場合、クラスター内に作成することになるすべてのデータベースで利用できるように、`template1` データベースにインストールします

注釈: データベース内のマイクロサービスとモノリスアーキテクチャの詳細については、*How many databases should be hosted in a single PostgreSQL instance?* を参照してください。

または *Database import* 。

45.2 PostGIS で新しい PostgreSQL クラスターを作成する

PostGIS 3.2 を使用して新しい PostgreSQL 14 クラスターを作成することにします。

最初のステップは、オペランドに適切な PostGIS コンテナイメージを使用し、`Cluster` リソースの`.spec.imageName` オプションを適切に設定することです。

以下は、PostGIS クラスターの作成を行う方法に関するガイダンスを提供します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgis-example
spec:
  instances: 3
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgis:14
  bootstrap:
    initdb:
      postInitTemplateSQL:
        - CREATE EXTENSION postgis;
        - CREATE EXTENSION postgis_topology;
        - CREATE EXTENSION fuzzystrmatch;
        - CREATE EXTENSION postgis_tiger_geocoder;

  storage:
    size: 1Gi
```

警告: CloudNativePG では構成より規約が適用されますが、本番用にシステムの構成とチューニングに時間を費やす必要があることを考慮してください。また、以下の例の `imageName` は、PostgreSQL 14 の最新の利用可能なイメージを意図的にポイントしています。真の不変性を実現するには、特定のイメージ名、またはできれば SHA256 ダイジェストを使用する必要があります。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgis-example
spec:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  instances: 3
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgis:14
  bootstrap:
    initdb:
      postInitTemplateSQL:
        - CREATE EXTENSION postgis;
        - CREATE EXTENSION postgis_topology;
        - CREATE EXTENSION fuzzystrmatch;
        - CREATE EXTENSION postgis_tiger_geocoder;

  storage:
    size: 1Gi
```

この例では、 app と呼ばれるアプリケーションデータベースを実際に作成する前に、template1 データベースに対してクエリーのリストを実行する postInitTemplateSQL オプションに依存しています。これは、マニフェストを適用し、クラスターが起動すると、上記の拡張機能がテンプレートデータベースとアプリケーションデータベースの両方にインストールされ、使用できる状態になることを意味します。

注釈: 時間をかけて、 *postInitApplicationSQL* などの *API* リファレンス から `.spec.bootstrap.initdb` で使用可能なオプションを確認します。

---

app データベースに接続することにより、コンテナ内にある PostGIS の利用可能なバージョンを簡単に確認できます。このドキュメントの値とは異なる値を取得する場合があります。

```
$ kubectl exec -ti postgis-example-1 -- psql app
Defaulted container "postgres" out of: postgres, bootstrap-controller (init)
psql (17.2 (Debian 17.2-1.pgdg110+1))
Type "help" for help.

app=# SELECT * FROM pg_available_extensions WHERE name ~ ^postgis ORDER BY 1;
           name           | default_version | installed_version |
     comment
- ------------------------+-----------------+-------------------+--------------------
↪----------------------------------------
 postgis                  | 3.2.2           | 3.2.2             | PostGIS geometry␣
↪and geography spatial types and functions
 postgis-3                | 3.2.2           |                   | PostGIS geometry␣
↪and geography spatial types and functions
 postgis_raster           | 3.2.2           |                   | PostGIS raster␣
↪types and functions
 postgis_raster-3         | 3.2.2           |                   | PostGIS raster␣
↪types and functions
 postgis_sfcgal           | 3.2.2           |                   | PostGIS SFCGAL␣
↪functions
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
 postgis_sfcgal-3         | 3.2.2           |                   | PostGIS SFCGAL␣
↪functions
 postgis_tiger_geocoder   | 3.2.2           | 3.2.2             | PostGIS tiger␣
↪geocoder and reverse geocoder
 postgis_tiger_geocoder-3 | 3.2.2           |                   | PostGIS tiger␣
↪geocoder and reverse geocoder
 postgis_topology         | 3.2.2           | 3.2.2             | PostGIS topology␣
↪spatial types and functions
 postgis_topology-3       | 3.2.2           |                   | PostGIS topology␣
↪spatial types and functions
(10 rows)
```

次のステップは、 postInitTemplateSQL セクションにリストされている拡張機能が app データベースに正しくインストールされていることを確認することです。

```
app=# \dx
                                    List of installed extensions
          Name          | Version |   Schema   |                          Description
- ----------------------+---------+------------+--------------------------------------
↪------------------------
 fuzzystrmatch          | 1.1     | public     | determine similarities and distance␣
↪between strings
 plpgsql                | 1.0     | pg_catalog | PL/pgSQL procedural language
 postgis                | 3.2.2   | public     | PostGIS geometry and geography␣
↪spatial types and functions
 postgis_tiger_geocoder | 3.2.2   | tiger      | PostGIS tiger geocoder and reverse␣
↪geocoder
 postgis_topology       | 3.2.2   | topology   | PostGIS topology spatial types and␣
↪functions
(5 rows)
```

最後に

```
app=# SELECT postgis_full_version();
                                                                                postgis_
↪full_version
- ----------------------------------------------------------------------------------------
↪----------------------------------------------------------------------------------------
↪---
 POSTGIS="3.2.2 628da50" [EXTENSION] PGSQL="140" GEOS="3.9.0-CAPI-1.16.2" PROJ="7.2.1"
 LIBXML="2.9.10" LIBJSON="0.15" LIBPROTOBUF="1.3.3" WAGYU="0.5.0 (Internal)" TOPOLOGY
(1 row)
```

第46章　エンドツーエンドテスト

CloudNativePG は、オペレーターが PostgreSQL クラスターを正しく展開および管理していることを確認する一連の**エンドツーエンド E2E テスト**または統合テストを介して、各コミットの後に自動的にテストされます。

Kubernetes バージョン 1.25〜1.29、および PostgreSQL バージョン 12〜16 は、コミットごとにテストされ、開発プロセスの初期段階でバグを検出するのに役立ちます。

Kubernetes と PostgreSQL のテストされたバージョンごとに、kind を使用して Kubernetes クラスターが作成され、GitHub Actions プラットフォームで実行され、そのクラスターで次の E2E テストスイートが実行されます。

- **基本**
- Operator
- のインストール Cluster
- の作成 データストレージのための永続ボリュームの使用
- **サービス接続**
- 読み取り専用を含むサービスを介した接続
- ユーザー提供のサーバーおよび/またはクライアント証明書を介した接続
- PgBouncer
- **自己修復**
- フェールオーバー
- スイッチオーバー
- 10 秒未満でフェールオーバーの場合のプライマリエンドポイントスイッチ
- 20 秒未満でスイッチオーバーの場合のプライマリエンドポイントスイッチ
- 60 秒未満で低下した状態からの回復 b_tran_8 PVC 削除 b_tran_8 破損した PVC
- **バックアップとリストア**
- ボリュームスナップショットからのバックアップと復元 s
- S3
- で Barman Barman を使用したバックアップとスケジュールバックアップの実行
- S3

- で Barman Barman を使用してバックアップから復元 Azure blob storage
- Azure、S3 でのポイントインタイムリカバリ PITR storage
- Wal-Restore シークエンシャル/パラレル
- **オペレーター**
- オペレーターの展開
- ConfigMap
- オペレーターポッドの削除 b_tran_7 オペレーターポッドのエビクション
- オペレーターのアップグレード b_tran_7 オペレーターの高可用性
- **オブザーバビリティ**
- メトリック収集
- PgBouncer Metrics
- JSON ログ形式
- **レプリケーション**
- レプリケーションスロット s
- 同期レプリケーション
- Cluster
- のスケールアップおよびスケールダウン 宣言による論理レプリケーションパブリケーション/サブスクリプション
- **レプリカクラスター**
- backup
- からのレプリカクラスターのブートストラップストリーミング
- を介したレプリカクラスターのブートストラップ
- ボリュームスナップショットを介したブートストラップ
- レプリカクラスターの切断
- **プラグイン**
- CNPG を使用したクラスターハイバネーション plugin
- Fencing
- 接続証明書の作成
- **Postgres 構成**
- PostgreSQL 構成の変更を管理する
- PostgreSQL 画像変更時のローリング更新
- ImageCatalog/ClusterImageCatalog 画像変更時のローリング更新

- ホットスタンバイ依存のパラメーター変更のローリング更新
- InitDB を介したデータベースの初期化
- **ポッドのスケジューリング**
- 許容範囲とテイント s
- `NodeSelector`
- を使用したポッドアフィニティ
- PodSpec ドリフト検出のローリング更新
- インプレースアップグレード
- マルチアーチの可用性
- **クラスターメタデータ**
- クラスターラベルとアノテーションの構成マップ
- オブジェクトメタデータ
- **リカバリー**
- データ破損
- pg_basebackup
- **データベースのインポート**
- マイクロサービスのアプローチ b_tran_3 モノリスアプローチ
- **Storage:**
- ストレージ拡張
- 専用 PG_WAL 永続ボリューム
- **セキュリティ**
- AppArmor アノテーションの伝播。 Azure 環境でのみ実行
- **メンテナンス**
- メンテナンスウィンドウを使用したノードドレイン
- シングルインスタンスクラスターを使用したノードドレインポッド中断バジェットの有無にかかわらず
- **ハイバネーション**
- 宣言的ハイバーネーション/再水和
- **ボリュームスナップショット**
- コールドおよびオンラインスナップショットのバックアップ/リストア s
- コールドおよびオンラインスナップショットのポイントインタイムリカバリー s
- コールドおよびオンラインスナップショットのプラグインを介したバックアップ s

- コールドおよびオンラインスナップショットの宣言的バックアップ
- **管理対象ロール**
- 管理対象ロールの作成と更新
- Kubernetes シークレットを使用したパスワードのメンテナンス
- **テーブルスペース**
- テーブルスペースの宣言的作成 s
- 一時テーブルスペースの宣言的作成 s
- オブジェクトストレージからのバックアップ/リカバリー
- ボリュームスナップショットからのバックアップ/リカバリー
- **宣言的データベース** - デフォルトの retain 再利用ポリシーを使用したデータベースの宣言的作成 - 削除再利用ポリシーを使用したデータベースの宣言的作成

第47章　コンテナイメージの要件

Kubernetes の CloudNativePG オペレーターは、次の要件に準拠する PostgreSQL の互換性のあるコンテナイメージで動作するように設計されています。

- パスに存在する必要がある PostgreSQL 実行可能ファイル
  - `initdb`
  - `postgres`
  - `pg_ctl`
  - `pg_controldata`
  - `pg_basebackup`
- パスにある必要がある Barman クラウド実行可能ファイル
  - `barman-cloud-backup`
  - `barman-cloud-backup-delete`
  - `barman-cloud-backup-list`
  - `barman-cloud-check-wal-archive`
  - `barman-cloud-restore`
  - `barman-cloud-wal-archive`
  -
  -
  -
  -
  -
  -
  -
  -
  -
  -
  -

- PGAudit 拡張機能のインストールオプショナル-展開されたクラスターで PGAudit が必要な場合のみ
- 適切なロケール設定
- du オプショナル、`kubectl cnpg status` の場合

重要: PostgreSQL versions supported by the PGDG のみが許可されます。

CloudNativePG はインスタンスマネージャーでオーバーライドするため、イメージ定義にエントリーポイントやコマンドは必要ありません。

> **警告:** アプリケーションコンテナイメージは、**マルチプル/オプショナルのホットスタンバイサーバーアーキテクチャ**を備えたプライマリ**でのみ CloudNativePG によって使用されます。

CloudNativePG コミュニティは、 public PostgreSQL container images を提供およびサポート

CloudNativePG で動作し、 ghcr.io で公開されます。

47.1 イメージタグの要件

オペレーターが情報に基づいた決定を下せるように、PostgreSQL メジャーバージョンを正確に検出する必要があります。この検出は 2 つの方法で発生できます。

1. `imageCatalogRef` の `major` フィールドが定義されている場合、それを利用します。
2. 明示的に指定されていない場合、`imageName` のイメージタグからメジャーバージョンを自動検出します。

自動検出が機能するには、イメージタグが特定の形式に準拠している必要があります。これは、有効な PostgreSQL メジャーバージョン番号 15.6 または 16 などで始まり、オプションでドットとパッチレベルが続く必要があります。

これに続いて、タグには、Docker タグで受け入れられる有効な文字の組み合わせを含めることができ、前にドット、アンダースコア、またはマイナス記号が続きます。

受け入れられるイメージタグの例

- `12.1`
- `13.3.2.1-1`
- `13.4`
- `14`
- `15.5-10`
- `16.0`

警告: *latest* は、画像の有効なタグとは見なされません。

注釈: イメージタグ要件は、カタログで定義されたイメージには適用されません。

第48章　オペレーター能力レベル

これらの機能は CloudNativePG によって実装され、Operator SDK definition of Capability Levels を使用して分類されました

フレームワーク。

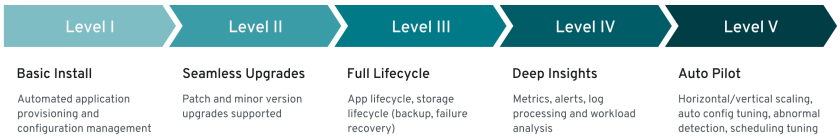


図 1: Operator Capability Levels

重要: *Operator Capability Levels model* に基づいて、CloudNativePG オペレーターからの「レベル V - 自動パイロット」機能セットを期待できます。

各機能レベルは、オペレーターが提供する特定の管理機能のセットに関連付けられています。

1. 基本的なインストール
2. シームレスなアップグレード
3. 完全なライフサイクル
4. 深い洞察
5. オートパイロット

注釈: 私たちは、このフレームワークを、オペレーターでの将来の作業と実装のガイドと考えます。

48.1 レベル 1 基本インストール

機能レベル 1 には、オペレーターのインストールと構成が含まれます。このカテゴリには、オペレーターや PostgreSQL クラスター構成との対話方法の改善など、使いやすさとユーザーエクスペリエンスの強化が含まれています。

重要: 情報セキュリティはこのレベルの一部であると考えられます。

48.1.1 宣言的構成を介した Operator の展開

オペレーターは、4 つの主要な CustomResourceDefinition オブジェクト Cluster 、Pooler 、Backup 、および ScheduledBackup を定義する Kubernetes マニフェストを使用して宣言的方法でインストールされます。

48.1.2 宣言的構成を介した PostgreSQL クラスターの展開

Cluster カスタムリソースを使用して、完全な宣言的方法で PostgreSQL クラスターオペランドを定義します。PostgreSQL バージョンは、CR で定義されたオペランドコンテナイメージによって決定されます。これは、要求されたレジストリから自動的に取得されます。オペランドを展開するときに、オペレーターは次のリソースも作成します。Pod 、Service 、Secret 、ConfigMap 、PersistentVolumeClaim 、PodDisruptionBudget 、ServiceAccount 、RoleBinding 、および Role 。

48.1.3 CRD を介したオペランドイメージのオーバーライド

オペレーターは、内部に PostgreSQL を使用したオペランドコンテナイメージをサポートするように設計されています。デフォルトでは、オペレーターは PostgreSQL コミュニティでサポートされ、ghcr.io で公開された最新の安定したメジャーバージョンの利用可能な最新のマイナーバージョンを使用します。CR で imageName 属性を設定することにより、プライマリ/スタンバイアーキテクチャをサポートする PostgreSQL の互換イメージを直接使用できます。また、オペレーターは、プライベートコンテナレジストリにアクセスするための imagePullSecrets をサポートし、コンテナイメージの不変性をより詳細に制御するためのダイジェストとタグをサポートしています。イメージ名を指定したくない場合は、PostgreSQL メジャーバージョンを参照するだけで *image catalogs* を活用できます。さらに、イメージカタログを使用すると、カスタムカタログを簡単に作成し、特定の要件に基づいて画像を指定できます。

48.1.4 ラベルとアノテーション

クラスターのメタデータで定義されたラベルとアノテーションの継承をサポートするようにオペレーターを構成できます。目標は、Kubernetes インフラストラクチャでの CloudNativePG 展開の構成を改善することです。

48.1.5 自己完結型インスタンスマネージャー

Patroni や Stolon などの Kubernetes クラスターポッド内の PostgreSQL インスタンスを調整する外部ツールに依存する代わりに、オペレーターは各ポッド内の/controller/manager という名前のファイルにオペレーター実行可能ファイルを注入します。アプリケーションは、基になる PostgreSQL インスタンスを制御し、PostgreSQL クラスタートポロジに基づいてインスタンスとポッドステータスを調整するために使用されます。インスタンスマネージャーは、プローブの kubelet によって呼び出される Web サーバーも起動します。 kubelet によって呼び出される Unix シグナルは、インスタンスマネージャーによってフィルタリングされます。必要に応じて、それらは postgres プロセスに転送され、外部イベントに対する高速で制御された反応が行われます。インスタンスマネージャーは Go で書かれており、外部依存関係はありません。

48.1.6 ストレージ構成

ストレージは、データベースワークロードの重要なコンポーネントです。オペレーターは、ストレージに関する Kubernetes のネイティブ機能とリソースを利用して、基になる Kubernetes 環境が提供できるものに基づいて、ワークロード要件に適切なストレージを選択するための十分な柔軟性を提供します。これは、パブリッククラウド環境で特定のストレージクラスを選択するか、CR の `storage` パラメーターの PVC テンプレートを介して生成された PVC を微調整することを意味します。

パフォーマンスの向上とより詳細な制御のために、クラスターのログ先行書き込み WAL、`pg_wal` としても知られるを別のボリューム、できれば別のストレージでホストすることを選択することもできます。ドキュメントの **ベンチマーク** セクションでは、運用前にストレージとデータベースの両方をベンチマークする方法の詳細な手順を提供します。`cnpg` プラグインに依存して、最適なパフォーマンスと信頼性を保証します。

48.1.7 レプリカ構成

オペレーターは、`instances` と呼ばれる単一のパラメーターを介してクラスター内のレプリカを検出します。1 に設定されている場合、クラスターは、レプリカのない単一のプライマリ PostgreSQL インスタンスで構成されます。1 より高い場合、オペレーターは自動フェイルオーバーを介した高可用性 HA、スイッチオーバー操作を介したローリング更新を含む `instances -1` レプリカを管理します。

CloudNativePG は、HA クラスター内のすべてのレプリカのレプリケーションスロットを管理します。この実装は、以前に提案された PostgreSQL のパッチ failover slots からインスピレーションを受けており、プライマリでのユーザー定義の物理レプリケーションスロットもサポートしています。

48.1.8 サービス構成

デフォルトでは、CloudNativePG は 3 つの Kubernetes ManagedServices {postgresql-cnpg-io-v1-ManagedServices} を作成します

アプリケーションがネットワークを介してクラスターにアクセスする場合

- 読み取り/書き込み操作のプライマリを指すもの。
- 読み取り専用クエリーのレプリカを指すもの。
- 読み取り操作のインスタンスを指す汎用的なもの。

構成を介して読み取り専用および読み取りサービスを無効にできます。さらに、サービステンプレート機能を活用して、ロードバランサーを含むカスタムサービスリソースを作成し、Kubernetes 外部の PostgreSQL にアクセスできます。これは、DBaaS の目的で特に役立ちます。

48.1.9 データベース構成

オペレーターは、単一のデータベースで PostgreSQL クラスターをブートストラップするように設計されています。オペレーターは、読み取り書き込み、読み取り、および読み取り専用のワークロード用にプロビジョニングおよび管理される 3 つの Kubernetes サービスを介して、クラスターへのネットワークアクセスを透過的に管理します。構成より規約のアプローチを使用して、オペレーターは app と呼ばれるデータベースを作成します。デフォルトでは、同じ名前の通常の Postgres ユーザーが所有します。必要に応じて、ブートストラップの一部としてデータベース名とユーザー名の両方を指定できます。

`Database` CRD を使用して、 *declarative database management* 経由で追加のデータベースを作成または管理できます。

クラスターを実行するための構成は必要ありませんが、 CR の `postgresql` セクションで PostgreSQL ランタイム構成と PostgreSQL ホストベースの認証ルールの両方をカスタマイズできます。

48.1.10 Postgres のロール、ユーザー、およびグループの構成

CloudNativePG は *management of PostgreSQL roles, users, and groups through declarative configuration* をサポート

`.spec.managed.roles` スタンザを使用します。

48.1.11 ポッドセキュリティポリシー

InfoSec 要件の場合、オペレーターはコンテナに特権モードを必要としません。読み取り専用のルートファイルシステムを適用して、オペレーターとオペランドの両方のポッドのコンテナの不変性を保証します。また、必要なセキュリティコンテキストも明示的に設定します。

48.1.12 アフィニティ

クラスターの `affinity` セクションでは、ポッドと永続ボリュームなどの関連リソースを Kubernetes クラスターのノード全体でスケジュールする方法を微調整できます。特に、オペレーターは以下をサポートしています。

- ポッドのアフィニティとアンチアフィニティ
- ノードセレクター
- テイントと許容範囲

48.1.13 トポロジスプレッドコンストレイン

クラスターの topologySpreadConstraints セクションにより、トポロジ全体でポッドのスケジューリングの追加制御が有効になり、アフィニティとアンチアフィニティが提供できる内容が強化されます。

48.1.14 コマンドラインインターフェイス

CloudNativePG には、独自のコマンドラインインターフェイスがありません。cnpg と呼ばれるプラグインを提供することにより、Kubernetes に最適なコマンドラインインターフェイス kubectl に依存しています。このプラグインは、PostgreSQL クラスター管理エクスペリエンスを強化および簡素化します。

48.1.15 クラスターの現在のステータス

オペレーターは、クラスターの観察されたステータスで CR のステータスセクションを継続的に更新します。PostgreSQL クラスター全体のステータスは、各ポッドで実行されているインスタンスマネージャーによって継続的に監視されます。インスタンスマネージャーは、制御される PostgreSQL インスタンスに必要な変更を適用して、クラスターの必要なステータスに収束します。たとえば、クラスターステータスがポッド-1 がプライマリであることをレポートする場合、ポッド -1 は自分自身を昇格させる必要がありますが、他のポッドはポッド -1 に従う必要があります。

48.1.16 オペレーターの認証局

オペレーターは、自分自身の認証局を作成します。Webhook サーバーが使用するリーフ証明書を作成し、オペレーター認証局で署名します。この証明書は、Kubernetes API サーバーとオペレーター間の安全な通信を保証します。

48.1.17 クラスターの認証局

オペレーターは、すべての PostgreSQL クラスターの証明機関を作成します。この認証局は、ストリーミングレプリケーションスタンバイサーバーパスワードの代わりにを含むクライアントの認証のための TLS 証明書を発行および更新するために使用されます。クライアント証明書のカスタム認証局のサポートは、シークレットを介して利用できます。これには、cert-manager との統合も含まれます。証明書は、kubectl の cnpg プラグインを使用して発行できます。

48.1.18 TLS 接続

オペレーターは、TLS / SSL 接続を透過的にサポートし、クラスターの認証局を使用してクライアント/サーバー通信を暗号化し、セキュリティを向上させます。カスタムサーバー証明書のサポートは、シークレットを介して利用できます。これには、cert-manager との統合も含まれます。

48.1.19 ストリーミングレプリケーションの証明書認証

スタンバイサーバーからのストリーミングレプリケーション接続を承認するために、オペレーターは TLS クライアント証明書認証に依存します。この方法は、パスワードおよびシークレットに依存する代わりに使用されます。

48.1.20 継続的な構成管理

オペレーターを使用すると、PostgreSQL 構成の `Cluster` リソース YAML セクションに変更を適用できます。構成オプションによっては、すべてのインスタンスが適切にリロードまたは再起動されていることも確認します。

48.1.21 既存の PostgreSQL データベースのインポート

オペレーターは、オフライン移行を使用して、既存の Postgres データベースを Kubernetes の新しい CloudNativePG クラスターにインポートする宣言的方法を提供します。同じ機能は、PostgreSQL データベースのオフラインメジャーアップグレードもカバーしています。オフラインとは、データベースがインポートされるまで、アプリケーションがソースで書き込み操作を停止する必要があることを意味します。この機能は、`initdb` ブートストラップ方法を拡張して、別の PostgreSQL データベースで使用可能なデータの論理スナップショットを使用して、新しい PostgreSQL クラスターを作成します。このデータは、スーパーユーザー接続を介してネットワークを介してアクセスできます。インポートは、サポートされている Postgres のバージョンからです。これは、操作の一部であるすべてのデータベース、および要求に応じてロールの新しいクラスタープライマリから実行される `pg_dump` および `pg_restore` に依存しています。

48.1.22 PostGIS クラスター

CloudNativePG は、*PostGIS コンテナイメージ* を使用したクラスターのインストールをサポートしています

地理データベースのオープンソース拡張機能。この拡張機能は、PostgreSQL の最も人気のある拡張機能の 1 つです。

48.1.23 PostgreSQL の基本的な LDAP 認証

オペレーターを使用すると、 LDAP authentication section of the PostgreSQL documentation で説明しているように、_simplebind_または_search+bind_モードを使用して、PostgreSQL クライアントの LDAP 認証を構成できます。

48.1.24 複数のインストール方法

オペレーターは、`kubectl apply` を介して Kubernetes マニフェストを介してインストールでき、パブリックおよびプライベートクラウド環境での従来の Kubernetes インストールで使用できます。CloudNativePG は、OperatorHub.io からの Helm チャートまたは OLM バンドルを介したインストールもサポートしています。

48.1.25 構成より規約

オペレーターは、規約より構成パラダイムをサポートし、標準のデフォルト値を決定しながら、オーバーライドおよびカスタマイズができます。数行の YAML コードで `Cluster` CRD を使用して、PostgreSQL クラスターのデプロイメントを指定できます。

48.2 レベル 2 シームレスなアップグレード

機能レベル 2 は、オペレーターと実際のワークロード、この場合 PostgreSQL サーバーの更新を有効にすることに関するものです。これには、PostgreSQL のマイナーリリース更新通常はセキュリティとバグ修正が含まれ、メジャーオンラインアップグレードが含まれます。

48.2.1 オペレーターのアップグレード

オペレーターのアップグレードはシームレスで、新しい展開として実行できます。コントローラをアップグレードした後、展開されたすべての PostgreSQL クラスターのローリング更新が開始されます。すべてのクラスターを同時に更新するか、時間の経過とともにアップグレードを分散することを選択できます。

インスタンスマネージャーのインジェクションのおかげで、オペレーターのアップグレードにオペランドの変更が必要ないため、オペレーターは古いバージョンを管理できます。

さらに、CloudNativePG は **インスタンスマネージャーのインプレース更新** をサポート

オペレーターのアップグレード後。インプレース更新では、ローリング更新またはその後のクラスターのスイッチオーバーは必要ありません。

48.2.2 管理対象ワークロードのアップグレード

CR、特に imageName パラメーターの変更の一部として、宣言的構成アプローチを使用してオペランドをアップグレードできます。オペレーターは、PostgreSQL のメジャーアップグレードを防止しながら、メジャーバージョン内のマイナー PostgreSQL リリースの点で両方向に行くことを可能にし、更新とロールバックを有効にします。

スタンバイサーバーが存在する場合、オペレーターはレプリカから開始してローリング更新を実行します。これは、既存のポッドを削除し、基になるストレージを再利用する新しい要求されたオペランドイメージで新しいポッドを作成することにより実行されます。primaryUpdateStrategy の値に応じて、オペレーターは元のプライマリ unsupervised を更新する前にスイッチオーバーを続行します。または、ユーザーが kubectl の cnpg プラグインを介してスイッチオーバープロシージャー supervised を手動で発行するのを待機します。操作はアプリケーションにダウンタイムを生成する可能性があるため、使用する設定はビジネス要件によって異なります。このダウンタイムは、実際のデータベースワークロードに基づいて、数秒から数分の範囲です。

48.2.3 アップグレード中にクラスターの可用性ステータスを表示する

任意の時点で、クラスターの高可用性ステータスたとえば、Setting up primary 、Creating a new replica、Cluster in healthy state、Switchover in progress、Failing over、および Upgrading cluster などを伝えます。

48.3 レベル 3 完全なライフサイクル

機能レベル 3 では、オペレーターはビジネスの継続性とスケーラビリティの側面を管理する必要があります。

_ディザスターリカバリー_は、データベースのバックアップとリカバリーの両方が正常に動作することを必要とするビジネス継続コンポーネントです。出発点として、目標は PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} < 5 分を達成することですが、長期的な目標は RPO=0 のバックアップソリューションを実装することです。_高可用性_は、ビジネス継続性のもう 1 つの重要なコンポーネントです。PostgreSQL ネイティブ物理レプリケーションとホットスタンバイレプリカを介して、オペレーターはフェールオーバーとスイッチオーバー操作を実行できます。この領域には、次の機能の強化が含まれます。

- 同期レプリケーション、カスケードレプリケーションクラスターなどの PostgreSQL 物理レプリケーションの制御
- 接続プーリング、pgBouncer を使用した接続プーリングレイヤーを介してパフォーマンスと制御を向上させます

48.3.1 PostgreSQL WAL アーカイブ

オペレーターは、オブジェクトストア AWS S3 および S3 互換、Azure Blob Storage、Google Cloud Storage、および MinIO のようなゲートウェイへの WAL ファイルの PostgreSQL 継続的アーカイブをサポートしています。

WAL アーカイブは、クラスター定義の backup パラメーターを介して、クラスターレベルで宣言的に定義されます。これは、S3 プロトコルの宛先 URL たとえば、AWS S3 バケットの特定のフォルダーをポイントするなど、オプションで汎用エンドポイント URL を指定することにより実行されます。

継続的バックアップの前提条件である WAL アーカイブには、それ以上のユーザーアクションは必要ありません。オペレーターは、barman-cloud-wal-archive に依存して WAL ファイルを定義されたエンドポイントに出荷するように archive_command を透過的に設定します。圧縮アルゴリズムと、アーカイブ内の WAL ファイルを同時にアップロードする並列ジョブの数を決定できます。さらに、Instance Manager は、WAL ファイルの最初のセットの出荷を開始する前に barman-cloud-check-wal-archive コマンドを実行して、アーカイブの宛先の正しさをチェックします。

48.3.2 PostgreSQL のバックアップ

このオペレーターは、物理ベースのバックアップと継続的な WAL アーカイブに基づいた PostgreSQL のネイティブの継続的ホットバックアップテクノロジーを使用して、アプリケーションレベルのバックアップを提供するように設計されました。ベースバックアップは次の場所に保存できます。

- Kubernetes ボリュームのスナップショット
- オブジェクトストア AWS S3 および S3 互換、Azure Blob Storage、Google Cloud Storage、および MinIO のようなゲートウェイ

ベースバックアップは、クラスター定義の backup パラメーターを介して、クラスターレベルで宣言的に定義されます。

ベースバックアップは 2 つの方法で定義できます。

- オンデマンド、Backup カスタムリソース定義を介して
- cron のような構文を使用して、 ScheduledBackup カスタムリソース定義を介してスケジュール

ボリュームスナップショットは、この機能を基になるストレージクラスと CSI ドライバーに委任する Kubernetes API に直接依存します。ボリュームスナップショットバックアップは、非常に大規模なデータベース VLDB コンテキストに適しています。

オブジェクトストアのバックアップは、ジョブアプリケーションコンテナイメージの一部として配布の barman-cloud-backup に依存して、WAL ファイルと同じエンドポイントでバックアップを中継します。

barman-cloud-wal-restore と barman-cloud-backup は両方とも、GNU GPL 3 条件に基づいてアプリケーションコンテナイメージで配布されます。

オブジェクトストアのバックアップとボリュームスナップショットのバックアップは、PostgreSQL の稼働中に実行されますホットバックアップ。ボリュームスナップショットは、コールドバックアップでの一貫したデータベーススナップショットの取得もサポートしています。

48.3.3 スタンバイからのバックアップ

オペレーターは、データベースの PgBouncerPoolMode {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerPoolMode} に影響を与えることなく、スタンバイへのベースバックアップのオフロードをサポートします。これにより、標準のデータベース操作のためにプライマリにリソース、特に I/O を保存できます。

48.3.4 バックアップからの完全な復元

オペレーターを使用すると、ボリュームスナップショットまたはオブジェクトストア内の既存のアクセス可能なバックアップから新しいクラスターとその設定をブートストラップできます。

ブートストラッププロセスが完了すると、オペレーターはリカバリモードでインスタンスを起動します。指定されたアーカイブから使用可能なすべての WAL ファイルを再生し、リカバリを終了してプライマリとして起動します。次に、オペレーターは、要求された数のスタンバイインスタンスをプライマリからクローン作成します。CloudNativePG は、アーカイブからの並列 WAL 取得をサポートしています。

48.3.5 バックアップからのポイント インタイム リカバリー PITR

オペレーターを使用すると、既存のバックアップをタイムスタンプ、ラベル、またはトランザクション ID で定義された特定の時点にリカバリーすることにより、新しい PostgreSQL クラスターを作成できます。この機能は、完全なリストアのものの上に構築され、PostgreSQL for PITR で使用可能なすべてのオプションをサポートしています。

48.3.6 同期レプリケーションを介したゼロデータ損失クラスター

クォーラムベースと優先度ベースの両方の同期レプリケーションのサポートを使用して、ローカルの高可用性 CloudNativePG クラスターで_zero data loss_RPO=0 を達成します。オペレーターは、いつでも使用可能な予想同期スタンバイレプリカの数を定義する柔軟な方法を提供し、必要に応じて `synchronous_standby_names` オプションをカスタマイズできます。

48.3.7 レプリカクラスター

ネイティブストリーミングとカスケードレプリケーションの力を利用して、PostgreSQL クラスター用の堅牢なクロス Kubernetes クラスタートポロジを確立します。`replica` オプションを使用すると、同じメジャーバージョンの別の PostgreSQL ソースからデータを一貫してレプリケートするように自律クラスターを構成できます。WAL ファイルを取得するための WAL アーカイブ、または 2 つのエンドポイント間の TLS を介した直接ストリーミング接続にアクセスできる場合、このソースはどこにでもあります。

特に、ソースの PostgreSQL インスタンスは、物理的設定か仮想設定かにかかわらず、Kubernetes 環境の外部に存在できます。

レプリカクラスターは、ボリュームスナップショット、リカバリオブジェクトストア Barman Cloud バックアップ形式を使用、`pg_basebackup` を使用したストリーミングなどのさまざまな方法を介してインスタンス化できます。WAL ファイルシッピングと WAL ストリーミングの両方がサポートされています。レプ

リカクラスターの展開により、Kubernetes 内の PostgreSQL データベースのビジネス継続体制が大幅に向上し、マルチプルのデータセンターに拡張され、ハイブリッドおよびマルチクラウドのセットアップが促進されます。Kubernetes フェデレーションネイティブ機能を想定していますが、データセンター間の手動スイッチオーバーは引き続き必要です。

さらに、柔軟性は、プライマリクラスターから意図的に遅延して作成される遅延レプリカクラスターにまで及びます。この意図的な遅延は、誤った `DELETE` または `UPDATE` SQL 操作などの意図しないエラーが発生した場合の目標復旧時間 *RTO と RPO のインパクト*を最小限に抑えることを目的としています。

48.3.8 分散データベーストポロジ

レプリカクラスターを活用して 分散データベーストポロジ を定義する

さまざまな Kubernetes クラスターにまたがる PostgreSQL に対応し、ハイブリッドおよびマルチクラウドの展開を促進します。CloudNativePG を使用すると、次のような強力な機能を獲得できます。

- **宣言的プライマリ制御**どの PostgreSQL クラスターがプライマリとして機能するかを簡単に指定します。
- **シームレスなプライマリスイッチオーバー**現在のプライマリを簡単に降格し、通常は別のリージョンにある別の PostgreSQL クラスターを昇格させます。以前のプライマリを再クローンする必要はありません。

このセットアップは、2 つ以上のリージョンにまたがって効率的に動作でき、レプリケーションをオブジェクトストアに完全に依存でき、最大 5 分の RPO 目標リカバリポイントを保証します。この高度な機能は CloudNativePG が独自に提供し、多様な環境にわたって堅牢なデータの完全性と継続性を保証します。

48.3.9 テーブルスペースのサポート

CloudNativePG は、個々の永続ボリュームの宣言的定義を容易にすることにより、PostgreSQL テーブルスペースの堅牢なサポートをシームレスに統合します。この革新的な機能により、さまざまなストレージデバイスに I/O 操作を効率的に分散できます。CloudNativePG は、テーブルスペースの透過的なオーケストレーションを通じて、PostgreSQL データベースのパフォーマンスとスケーラビリティを強化し、クラウドネイティブ環境で大規模なデータストレージを管理するための合理化され最適化されたエクスペリエンスを保証します。一時テーブルスペースのサポートも含まれています。

48.3.10 スタートアップ、ライブネス、および準備状況プローブ

CloudNativePG は、Kubernetes kubelet によって管理される PostgreSQL コンテナのスタートアップ、ライブネス、および準備状況プローブを構成します。これらのプローブは、インスタンスマネージャーの Web サーバーによって公開される `/healthz` および `/readyz` エンドポイントと対話して、ポッドの状態と準備状況をモニタします。

start および liveness プローブは、`pg_isready` ユーティリティを使用します。 `pg_isready` が 0 の終了コードを返す場合、Pod は正常であると考えられます。サーバーが接続を受け入れていることを示しますか、1 サーバーが起動中などに接続を拒否していることを示します。

Readiness Probe は、単純な SQL クエリー；を実行して、PostgreSQL サーバーがクライアント接続を受け入れる準備ができていることを確認します。

すべてのプローブはデフォルト設定で構成されますが、特定のニーズを満たすように完全にカスタマイズでき、環境やワークロードに合わせて微調整が可能です。

48.3.11 ローリング展開

オペレーターは、ローリング展開をサポートして、ダウンタイムを最小限に抑えます。PostgreSQL クラスターが一般に公開されている場合、サービスは、初期化または更新中に使用可能なポッドにのみ読み取り専用トラフィックをロードバランシングします。

48.3.12 レプリカのスケールアップとスケールダウン

演算子を使用すると、PostgreSQL クラスター内のインスタンスの数をスケールアップおよびダウンできます。新しいレプリカはプライマリサーバーから起動され、クラスターの HA インフラストラクチャに参加します。CRD は、`kubectl scale` コマンドを使用できるようにする「scale」サブリソースを宣言します。

48.3.13 Kubernetes ノードのメンテナンスウィンドウと PodDisruptionBudget

オペレーターは `PodDisruptionBudget` リソースを作成して、同時中断数を 1 つのプライマリインスタンスに制限します。この構成により、メンテナンス操作でクラスター内のすべてのポッドが削除されるのを防ぎ、指定された数のインスタンスを作成できます。PodDisruptionBudget は、ノードドレイン操作中に適用され、クラスターサービスの中断を防ぎます。

この戦略は、ストレージがすべてのワーカーノードで共有される Kubernetes クラスターには正しいですが、ローカルストレージを使用するクラスター、またはプライベートクラウドにインストールされたクラスターには、最適なソリューションではない可能性があります。オペレーターを使用すると、メンテナンスウィンドウを指定し、基になるノードのエビクションへの反応を構成できます。メンテナンスウィンドウセクションの `ReusePVC` オプションを使用すると、使用するストラテジーを指定できます。削除されたインスタンスの別の PVC に新しいストレージを割り当てるか、基になるノードが再び利用できるようになるのを待ちます。

48.3.14 フェンシング

フェンシングは、PostgreSQL クラスターの 1 つ以上、またはすべてのインスタンスに障害があると思われる場合に、データを保護するプロセスです。インスタンスがフェンスされると、PostgreSQL サーバープロセスは保証的にシャットダウンされますが、ポッドは実行されたままです。これにより、フェンスが解除されるまで、ポッド上のデータは PostgreSQL によって変更されず、デバッグとトラブルシューティングの目的でファイルシステムを調査できます。

48.3.15 ハイバネーション宣言的

CloudNativePG は *hibernation of a running PostgreSQL cluster* をサポート

`cnpg.io/hibernation` アノテーションを介して宣言的な方法で。ハイバネーションでは、データベース PVC を維持したままデータベースポッドを削除することにより、CPU パワーを節約できます。この機能は、0 インスタンスへのスケーリングをシミュレートします。

48.3.16 ハイバネーション (必須)

CloudNativePG は *hibernation of a running PostgreSQL cluster* をサポート

`cnpg` プラグインを介して。ハイバネーションは、高可用性クラスター内のすべての Postgres インスタンスをシャットダウンし、プライマリの PVC グループの静的コピーを保持します。コピーには、`PGDATA` および WAL が含まれています。プラグインを使用すると、プライマリを再開し、すべてのレプリカが存在する場合は再作成することにより、ハイバーネーションフェーズを終了できます。

48.3.17 ポッドの永続ボリュームストレージの再利用

ユーザーによって削除されたポッド、または Kubernetes メンテナンスオペレーションによって削除されたポッドをオペレーターが作成する必要がある場合、`PersistentVolumeClaim` 可能な場合は再利用します。この機能により、プライマリからデータを再度クローン作成する必要がなくなります。

48.3.18 CPU とメモリの要求と制限

オペレーターを使用すると、管理者は、マニフェストの `resources` セクションでクラスターのポッドによるリソースの使用を制御および管理できます。特に、CPU と RAM の両方に `requests` および `limits` 値を設定できます。

48.3.19 PgBouncer を使用した接続プーリング

CloudNativePG は、PostgreSQL で最も人気のあるオープンソース接続プーラーの 1 つである PgBouncerIntegrationStatus {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerIntegrationStatus} を使用した接続プーリングのネイティブサポートを提供します。アーキテクチャの観点から、PgBouncer 接続プーラーのネイティブ実装は、データベースにアクセスするための新しいレイヤーを導入します。これにより、インスタンスへのクエリフローが最適化され、基になる PostgreSQL リソースの使用がより効率的になります。PostgreSQL サービスに直接接続する代わりに、アプリケーションは PgBouncer サービスに接続し、既存の接続の再利用を開始できるようになりました。

48.3.20 論理レプリケーション

CloudNativePG は、 `Publication` および `Subscription` カスタムリソース定義を使用して、宣言的方法で PostgreSQL の論理レプリケーションをサポートします。

論理レプリケーションは、オンラインデータの移行パブリック DBaaS ソリューションからでもおよびメジャー PostgreSQL のアップグレードの場合のインポート機能と特に役立ちます。

48.4 レベル 4 深い洞察

機能レベル 4 は、_observability_モニタリング、アラート、トレンド、ログ処理に関するものです。これには、Prometheus、Grafana、Fluent Bit などの外部ツール、および JSON 形式で直接エラーログを出力するための PostgreSQL エンジンの拡張機能の使用が含まれる場合があります。

CloudNativePG は、柔軟なモニタリングとロギングのための業界標準のコミュニティで認められたツールと簡単に統合するために必要なすべてを提供するように設計されました。

48.4.1 構成可能なクエリを備えた Prometheus エクスポータ

インスタンスマネージャーは、プラグ可能なフレームワークを提供します。`metrics` ポート 9187 でリッスンする独自の Web サーバーを介して、 Prometheus モニタリングおよびアラートツールのメトリックをエクスポートするエンドポイントを公開します。オペレーターは、postgres_exporter と互換性のある構文を使用して、`ConfigMap` または `Secret` オブジェクトとして定義されたカスタムモニタリングクエリーをサポートします。CloudNativePG は、コンテキストに統合して適応できる PostgreSQL の基本的なモニタリングクエリセットを提供します。

48.4.2 Grafana ダッシュボード

CloudNativePG には、PostgreSQL クラスターのすべての重要な側面を監視し、カスタマイズするためのベースとして使用できる Grafana ダッシュボードが付属しています。

48.4.3 JSON 形式の PostgreSQL エラーメッセージの標準出力ログ

すべてのログメッセージは JSON 形式で標準出力に配信されます。最初のレベルは、タイムスタンプ、ログレベル、および正規の PostgreSQL エラーメッセージチャネルの `postgres` などのログエントリのタイプの定義です。その結果、CloudNativePG によって管理されるすべてのポッドは、ソースデータ型として JSON をサポートするダウンストリームログ処理スタックと簡単かつ直接統合できます。

48.4.4 リアルタイムクエリモニタリング

CloudNativePG は以下を透過的かつネイティブにサポートします。

- 必須の pg_stat_statements 、PostgreSQL サーバーによって実行されるすべての SQL ステートメントの計画と実行統計の追跡を有効にします
- auto_explain 、 `EXPLAIN` を手動で実行せずに、遅いステートメントの実行プランを自動的にログに記録する手段を提供します最適化されていないクエリーを追跡するのに役立ちます
- pg_failover_slots 物理的フェイルオーバーにわたって論理レプリケーションスロットを使用できるようにし、PostgreSQL のネイティブ論理レプリケーションに基づいて変更データキャプチャ CDC コンテキストの復元力を保証します

48.4.5 監査

CloudNativePG を使用すると、データベースとセキュリティの管理者、監査人、およびオペレーターは、PostgreSQL の PGAudit を使用してデータベースアクティビティを追跡および分析できます。このようなアクティビティは JSON ログで直接フローし、Fluentd のような一般的なログブローカーを使用して正しいダウンストリームターゲットに適切にルーティングできます。

48.4.6 Kubernetes イベント

リソースの作成、ノードの削除、アップグレードなど、Kubernetes API で想定されているメジャーイベントを記録します。 `kubectl describe` 、`kubectl get events` コマンドを使用してイベントを表示できます。

48.5 レベル 5 自動操縦

機能レベル 5 は、オブザーバビリティレイヤーから現れた異常と洞察の発見を介した自動スケーリング、修復、および調整に焦点を当てています。

48.5.1 自己修復のための自動フェイルオーバー

プライマリで障害が検出された場合、オペレーターは、最も調整されたレプリカを新しいターゲットプライマリとして設定することにより、クラスターのステータスを変更します。その結果、各生きているポッドのインスタンスマネージャーは、必要なプロシージャを開始して、クラスターの要求されたステータスに自分自身を調整します。これは、新しいプライマリになるか、フォローすることにより実行されます。元のプライマリが復旧した場合、同じメカニズムにより、アプリケーションがそれに到達しないようにし、サーバーで `pg_rewind` を実行し、スタンバイとして再起動することにより、スプリットブレインを回避します。

48.5.2 スタンバイの自動再作成

スタンバイをホスティングするポッドが削除された場合、オペレーターはスタンバイサーバーを再作成する手順を開始します。

第49章　カスタムポッドコントローラ

Kubernetes は *Controller pattern* を使用します

をクリックして、現在のクラスターの状態を目的の状態に調整します。

ステートフルアプリケーションは、通常、 *StatefulSet* で管理されます

コントローラ、同じ仕様から構築されたポッドのセットを作成および調整し、それらにスティッキー ID を割り当てます。

CloudNativePG は、`StatefulSet` コントローラに依存するのではなく、PostgreSQL インスタンスを管理するための独自のカスタムコントローラを実装します。このデザインの選択により、実装がより複雑になる一方で、PostgreSQL クラスターのトポロジについて透過的でありながら、クラスターの管理方法についてより柔軟にオペレーターに提供されます。

デザイン領域の多くの選択と同様に、ものが異なると他の妥協が発生します。以下のセクションでは、このデザインの選択により CloudNativePG の実装の信頼性が向上し、理解しやすくなったと考えられるいくつかのポイントについて説明します。

49.1 PVC のサイズ変更

これは `StatefulSet` のよく知られた制限です。PVC のサイズ変更はサポートされていません。これはデータベースにとって不便です。ボリュームのサイズを変更するには、複雑な回避策が必要です。

対照的に、CloudNativePG は、構成されたストレージクラスを活用して、基になる PVC を直接管理し、ストレージクラスがサポートしている場合は PVC のサイズ変更を処理できます。

49.2 プライマリインスタンスとレプリカ

`StatefulSet` コントローラは、1 つのテンプレートからポッドのセットを作成するように設計されています。PostgreSQL インスタンスごとに 1 つの `Pod` を使用することを考えると、2 種類のポッドがあります。

1. プライマリインスタンス 1 つだけ
2. レプリカマルチプル、オプショナル

この違いは、特定の操作に対して実行する正しい展開戦略を決定する際に関連します。

一部の操作は、最初にレプリカで実行し、次にプライマリで実行する必要がありますが、更新されたレプリカが新しいプライマリとして昇格した後にのみです。たとえば、別の PostgreSQL イメージバージョンを適用する場合、または `max_connections` treated specially by PostgreSQL because CloudNativePG uses hot standbyreplicas のような構成パラメーターを増加する場合。

その際、CloudNativePG は、シリアル番号だけでなく、PostgreSQL インスタンスのロールを考慮します。

場合によっては、オペレーターは逆のプロセスに従う必要があります。最初にプライマリで作業し、次にレプリカで作業します。例、`max_connections` を下げた場合。その場合、CloudNativePG は次のことを行います。

- 新しい設定をプライマリインスタンスに適用します
- 再起動します
- レプリカに新しい設定を適用します

`StatefulSet` コントローラはアプリケーションに依存しないため、PostgreSQL のネイティブレプリケーションテクノロジーに固有のこの動作を組み込むことができません。

49.3 PVC のコヒーレンス

PostgreSQL インスタンスは、複数の PVC で動作するように構成できます。これが、WAL ストレージを `PGDATA` から分離する方法です。

2 つのデータストアは、同時に使用されるため、PostgreSQL の観点から一貫性がある必要があります。インスタンスの WAL ストレージに対応する PVC を削除すると、`PGDATA` が保存されている PVC は使用できなくなります。

この動作は PostgreSQL に固有であり、`StatefulSet` コントローラには実装されていません - 後者はアプリケーション固有ではありません。

ユーザーが PVC をドロップした後、`StatefulSet` はそれを再作成するだけで、破損した PostgreSQL インスタンスが発生します。

CloudNativePG は、代わりに残りの PVC を使用不可として分類し、別のインスタンスがクラスターに正しく参加するように新しい PVC ペアの作成を開始します。

49.4 ローカルストレージ、リモートストレージ、およびデータベースのサイズ

場合によっては、アップグレードを行うために Kubernetes ノードをダウンする必要がある場合があります。アップグレード後、アップグレード戦略によっては、更新されたノードが再び起動するか、新しいノードに置き換えられる場合があります。

使用できないノードが PostgreSQL インスタンスをホストしていたと仮定すると、データベースのサイズとクラウドインフラストラクチャによっては、次のいずれかのアクションを選択することができます。

1. ダウンしたノードにある PVC とポッドをドロップします。別の PVC からデータのクローンを作成する新しい PVC を作成します。その後、そのためのポッドをスケジュールします
2. ポッドをドロップし、別のノードでポッドをスケジュールし、そこから PVC をマウントします
3. ポッドと PVC をそのままにして、ノードがバックアップされるのを待ちます。

最初の解決策は、データベースのサイズが許可する場合に実用的で、目的の数のレプリカをすぐに戻すことができます。

2 番目の解決策は、ローカルノードのストレージを使用していない場合にのみ実行可能であり、別のホストでの PVC の再マウントは合理的な時間で可能ですあなたとあなたの組織のみが知っています。

3 番目のソリューションは、データベースが大規模で、パフォーマンスとデータの耐久性を最大化するためにローカルノードストレージを使用する場合に適しています。

CloudNativePG コントローラは、これらの戦略をすべて実装して、ユーザーがクラスターレベルで優先される動作を選択できるようにします。詳細については、*Kubernetes* **のアップグレードとメンテナンス** セクションを読んでください。

`StatefulSet` は汎用であるため、このレベルのカスタマイズはできません。

第50章　例

例は、PostgreSQL クラスターをセットアップするための構成ファイルを示しています。

重要: これらの例は、デモンストレーションと実験を目的としています。 **クイックスタート** で説明しているように、Minikube または Kind を使用して個人の Kubernetes クラスターで実行できます。

参考:

使用可能なオプションのリストについては、 *API* **リファレンス** を参照してください。

50.1 基本

基本的なクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi
```

クラスターの基本的な例。

カスタムクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-custom
spec:
  instances: 3

  # Parameters and pg_hba configuration will be append
  # to the default ones to make the cluster work
  postgresql:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    parameters:
      max_worker_processes: "60"
    pg_hba:
      # To access through TCP/IP you will need to get username
      # and password from the secret cluster-example-custom-app
      - host all all all md5

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Require 1Gi of space per instance using default storage class
  storage:
    size: 1Gi
```

デフォルトのストレージクラスとカスタムパラメーターを使用する基本的なクラスター postgresql.conf および pg_hba.conf ファイル。

カスタマイズされたストレージクラスを使用したクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-storage-class
spec:
  instances: 3

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi
```

standard の指定されたストレージクラスを使用する基本クラスター。

永続的なボリューム要求 PVC テンプレートが構成されたクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgresql-pvc-template
spec:
  instances: 3

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    size: 1Gi
    pvcTemplate:
      accessModes:
        - ReadWriteOnce
      resources:
        requests:
          storage: 1Gi
      storageClassName: standard
      volumeMode: Filesystem
```

明示的な永続ボリューム要求テンプレートを使用した基本クラスター。

拡張構成例

```
#  Example of definition of a test cluster using all the elements available

#  in the CRD. Please change values appropriately for your environment.

#  Remember that you can take advantage of convention over configuration

#  and normally you dont need to use all these definitions.

apiVersion: v1
data:
  password:␣
↪VHhWZVE0bk44MlNTaVlIb3N3cU9VUlp2UURhTDRLcE5FbHNDRUVlOWJ3RHhNZDczS2NrSWVYelM1Y1U2TGlDMg==
  username: YXBw
kind: Secret
metadata:
  name: cluster-example-app-user
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
type: kubernetes.io/basic-auth
- --
apiVersion: v1
data:
  password:␣
↪dU4zaTFIaDBiWWJDYzRUeVZBYWNCaG1TemdxdHpxeG1PVmpBbjBRSUNoc0pyU211OVBZMmZ3MnE4RUtLTHBaOQ==
  username: cG9zdGdyZXM=
kind: Secret
metadata:
  name: cluster-example-superuser
type: kubernetes.io/basic-auth
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: backup-creds
data:
  ACCESS_KEY_ID: a2V5X2lk
  ACCESS_SECRET_KEY: c2VjcmV0X2tleQ==
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-full
spec:
  description: "Example of cluster"
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:17.2
  # imagePullSecret is only required if the images are located in a private registry
  # imagePullSecrets:
  #   - name: private_registry_access
  instances: 3
  startDelay: 300
  stopDelay: 300
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  postgresql:
    parameters:
      shared_buffers: 256MB
      pg_stat_statements.max: 10000
      pg_stat_statements.track: all
      auto_explain.log_min_duration: 10s
    pg_hba:
      - host all all 10.244.0.0/16 md5

  bootstrap:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  initdb:
    database: app
    owner: app
    secret:
      name: cluster-example-app-user
  # Alternative bootstrap method: start from a backup
  #recovery:
  #  backup:
  #    name: backup-example

enableSuperuserAccess: true
superuserSecret:
  name: cluster-example-superuser

storage:
  storageClass: standard
  size: 1Gi

backup:
  barmanObjectStore:
    destinationPath: s3://cluster-example-full-backup/
    endpointURL: http://custom-endpoint:1234
    s3Credentials:
      accessKeyId:
        name: backup-creds
        key: ACCESS_KEY_ID
      secretAccessKey:
        name: backup-creds
        key: ACCESS_SECRET_KEY
    wal:
      compression: gzip
      encryption: AES256
    data:
      compression: gzip
      encryption: AES256
      immediateCheckpoint: false
      jobs: 2
  retentionPolicy: "30d"

resources:
  requests:
    memory: "512Mi"
    cpu: "1"
  limits:
    memory: "1Gi"
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      cpu: "2"

  affinity:
    enablePodAntiAffinity: true
    topologyKey: failure-domain.beta.kubernetes.io/zone

  nodeMaintenanceWindow:
    inProgress: false
    reusePVC: false
```

使用可能なオプションのほとんどを設定するクラスター。

SQL ファイルを使用したブートストラップクラスター

```
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
  name: post-init-sql-configmap
data:
  configmap.sql: |
    create table configmaps (i integer);
    insert into configmaps (select generate_series(1,10000));
- --
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: post-init-sql-secret
stringData:
  secret.sql: |
    create table secrets (i integer);
    insert into secrets (select generate_series(1,10000));
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-initdb
spec:
  instances: 3

  bootstrap:
    initdb:
      database: appdb
      owner: appuser
      postInitSQL:
        - create table numbers (i integer)
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      - insert into numbers (select generate_series(1,10000))
    postInitTemplateSQL:
      - create extension intarray
    postInitApplicationSQL:
      - create table application_numbers (i integer)
      - insert into application_numbers (select generate_series(1,10000))
    postInitApplicationSQLRefs:
      configMapRefs:
      - name: post-init-sql-configmap
        key: configmap.sql
      secretRefs:
      - name: post-init-sql-secret
        key: secret.sql

  storage:
    size: 1Gi
```

データベースが作成された直後に、シークレットと ConfigMap で定義されたクエリセットを実行するクラスターの例。

カスタマイズされた ``pg_hba`` 構成を使用したサンプルクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3
  postgresql:
    pg_hba:
      - hostssl app all all cert

  storage:
    size: 1Gi
```

ユーザアプリが証明書を使用して認証できるようにする基本的なクラスター。

投影されたボリュームテンプレートを使用してマウントされた Secret と ConfigMap を含むサンプルクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-projected-volume
spec:
  instances: 3
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  projectedVolumeTemplate:
    sources:
      - secret:
          name: sample-secret
          items:
            - key: tls.crt
              path: certificate/tls.crt
            - key: tls.key
              path: certificate/tls.key
      - configMap:
          name: sample-configmap
          items:
            - key: key1
              path: config/key1
            - key: key2
              path: config/key2
  storage:
    size: 1Gi

- --
apiVersion: v1
data:
  tls.crt:␣
↪LS0tLS1CRUdJTiBDRVJUSUZJQ0FURS0tLS0tCk1JSUNqekNDQWVXZ0F3SUJBZ0lRSHVDY2lKcDVkZis0dHZBcDBrTk9rekFLQmdr
  tls.key:␣
↪LS0tLS1CRUdJTiBFQyBQUklWQVRFIEtFWS0tLS0tCk1IY0NBUUVFSUtucWxVQjFqU2sxWW5VZzAyb0tGbXlRdDJLUEZwaFc0K1lm
kind: Secret
metadata:
  name: sample-secret
type: kubernetes.io/tls
- --
apiVersion: v1
data:
  key1: value1
  key2: value2
  key3: value3
kind: ConfigMap
metadata:
  name: sample-configmap
```

投影されたボリュームマウントを使用して Postgres ポッドにマウントされた既存の Secret および ConfigMap を含む基本的なクラスター。

50.2 バックアップ

カスタマイズされたストレージクラスとバックアップ：**前提条件**バケットストレージが利用できること。サンプル構成は AWS 用です。セットアップに合わせて変更します。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: pg-backup
spec:
  instances: 3

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi

  # Backup properties
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://BUCKET_NAME/path/to/folder
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_SECRET_KEY
      wal:
        compression: gzip
```

バックアップが構成されたクラスター。

バックアップ：**前提条件**

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: pg-backup
spec:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  instances: 3

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi

  # Backup properties
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://BUCKET_NAME/path/to/folder
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_SECRET_KEY
      wal:
        compression: gzip
```

応用されて健康的。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Backup
metadata:
  name: pg-backup-example
spec:
  cluster:
    name: pg-backup
```

前のサンプルに対して実行されるバックアップの例。

minio 用に構成されたバックアップを含む単純なクラスター： **前提条件**構成は、minio が実行され動作していることを前提としています。minio パラメーターまたはクラウドソリューションで backup.barmanObjectStore を更新します。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
metadata:
  name: cluster-example-with-backup
spec:
  instances: 3
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    storageClass: csi-hostpath-sc
    size: 1Gi

  # Backup properties
  # This assumes a local minio setup
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://backups/
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: minio
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: minio
          key: ACCESS_SECRET_KEY
      wal:
        compression: gzip
      data:
        additionalCommandArgs:
          - "--min-chunk-size=5MB"
          - "--read-timeout=60"
          - "-vv"
```

バックアップが構成された基本的なクラスター。

Scaleway Object Storage 用に構成されたバックアップを含む単純なクラスター：**前提条件**この構成では、Scaleway Object Storage バケットが存在することを前提としています。`backup.barmanObjectStore` を Scaleway パラメーターで更新します。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: pg-backup-scaleway
spec:
  instances: 3
  storage:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    storageClass: standard
    size: 1Gi
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "s3://<bucket>/backups/"     # change <bucket> with your␣
↪buckets name.
      endpointURL: "https://s3.<region>.scw.cloud"  # change <region> with your␣
↪buckets location/region.
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: scaleway
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: scaleway
          key: ACCESS_SECRET_KEY
        region:
          name: scaleway
          key: ACCESS_REGION
```

Scaleway Object Storage で動作するように構成されたバックアップを含む基本的なクラスター。

50.3 レプリカクラスター

オブジェクトストアからのバックアップによるレプリカクラスター : 前提条件

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: pg-backup
spec:
  instances: 3

  # Example of rolling update strategy:
  # - unsupervised: automated update of the primary once all
  #                 replicas have been upgraded (default)
  # - supervised: requires manual supervision to perform
  #               the switchover of the primary
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    storageClass: standard
    size: 1Gi
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  # Backup properties
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://BUCKET_NAME/path/to/folder
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_SECRET_KEY
      wal:
        compression: gzip
```

適用され、正常、およびバックアップ

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Backup
metadata:
  name: cluster-example-trigger-backup
spec:
  cluster:
    name: cluster-example-with-backup
```

適用されて完了しました。:

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-replica-from-backup-simple
spec:
  instances: 1

  bootstrap:
    recovery:
      source: cluster-example-backup

  replica:
    enabled: true
    source: cluster-example-backup

  storage:
    size: 1Gi

  externalClusters:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  - name: cluster-example-backup
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://backups/
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: minio
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: minio
          key: ACCESS_SECRET_KEY
```

バックアップが構成されたクラスターの次のレプリカクラスター。

ボリュームスナップショットを介したレプリカクラスター : 前提条件

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-with-volume-snapshot
spec:
  instances: 3
  primaryUpdateStrategy: unsupervised

  # Persistent storage configuration
  storage:
    storageClass: csi-hostpath-sc
    size: 1Gi
  walStorage:
    storageClass: csi-hostpath-sc
    size: 1Gi

  # Backup properties
  backup:
    volumeSnapshot:
       className: csi-hostpath-snapclass
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://backups/
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: minio
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: minio
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
          key: ACCESS_SECRET_KEY
      wal:
        compression: gzip
```

適用され、正常な、およびボリュームのスナップショット

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Backup
metadata:
  name: backup-with-volume-snapshot
spec:
  method: volumeSnapshot
  cluster:
    name: cluster-example-with-volume-snapshot
```

適用されて完了しました。:

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-replica-from-snapshot
spec:
  instances: 1

  storage:
    storageClass: csi-hostpath-sc
    size: 1Gi
  walStorage:
    storageClass: csi-hostpath-sc
    size: 1Gi

  bootstrap:
    recovery:
      source: cluster-example-with-volume-snapshot
      volumeSnapshots:
        storage:
          name: cluster-example-with-volume-snapshot-2-1692618163
          kind: VolumeSnapshot
          apiGroup: snapshot.storage.k8s.io
        walStorage:
          name: cluster-example-with-volume-snapshot-2-wal-1692618163
          kind: VolumeSnapshot
          apiGroup: snapshot.storage.k8s.io

  replica:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    enabled: true
    source: cluster-example-with-volume-snapshot

  externalClusters:
    - name: cluster-example-with-volume-snapshot

      connectionParameters:
        host: cluster-example-with-volume-snapshot-rw.default.svc
        user: postgres
        dbname: postgres
      password:
        name: cluster-example-with-volume-snapshot-superuser
        key: password

      barmanObjectStore:
        destinationPath: s3://backups/
        endpointURL: http://minio:9000
        s3Credentials:
          accessKeyId:
            name: minio
            key: ACCESS_KEY_ID
          secretAccessKey:
            name: minio
            key: ACCESS_SECRET_KEY
        wal:
          maxParallel: 8
```

ボリュームスナップショットが構成されたクラスターの次のレプリカクラスター。

ストリーミング pg_basebackup を介したレプリカクラスター **前提条件*

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi
```

応用されて健康的。 :

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  name: cluster-replica-example
spec:
  instances: 1

  bootstrap:
    pg_basebackup:
      source: cluster-example

  replica:
    enabled: true
    source: cluster-example

  storage:
    size: 1Gi
  # note the namespace default in the host name `cluster-example-rw.default.svc`
  # remember to change accordingly with the namespace of the main cluster
  externalClusters:
  - name: cluster-example
    connectionParameters:
      host: cluster-example-rw.default.svc
      user: streaming_replica
      sslmode: verify-full
      dbname: postgres
    # NOTE: if this cluster is created in a different namespace than the main cluster
    # remember to create the `-replication` and `-ca` secrets in the follower namespace
    # before creating the follower cluster
    sslKey:
      name: cluster-example-replication
      key: tls.key
    sslCert:
      name: cluster-example-replication
      key: tls.crt
    sslRootCert:
      name: cluster-example-ca
      key: ca.crt
```

ストリーミングレプリケーションを使用した cluster-example に続くレプリカクラスター。

50.4 PostGIS

PostGIS の例

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: postgis-example
spec:
  instances: 3
  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgis:14
  bootstrap:
    initdb:
      postInitTemplateSQL:
        - CREATE EXTENSION postgis;
        - CREATE EXTENSION postgis_topology;
        - CREATE EXTENSION fuzzystrmatch;
        - CREATE EXTENSION postgis_tiger_geocoder;

  storage:
    size: 1Gi
```

PostGIS クラスターの例。詳細は、 *PostGIS* コンテナイメージ を参照してください。

50.5 管理対象ロール

宣言的ロール管理を使用したクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-with-roles
spec:
  instances: 3
  storage:
    size: 1Gi

  managed:
    roles:
    - name: app
      createdb: true
      login: true
    - name: dante
      ensure: present
      comment: my database-side comment
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      login: true
      superuser: false
      createdb: true
      createrole: false
      inherit: false
      replication: false
      bypassrls: false
      connectionLimit: 4
      validUntil: "2053-04-12T15:04:05Z"
      inRoles:
        - pg_monitor
        - pg_signal_backend
      passwordSecret:
        name: cluster-example-dante
- --
apiVersion: v1
data:
  username: ZGFudGU=
  password: ZGFudGU=
kind: Secret
metadata:
  name: cluster-example-dante
type: kubernetes.io/basic-auth
```

managed スタンザでロールを宣言します。Kubernetes シークレットを使用したパスワード管理が含まれます。

50.6 管理対象サービス

管理対象サービスを使用したクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-managed-services
spec:
  instances: 1
  storage:
    size: 1Gi

  managed:
    services:
      ## disable the default services
      disabledDefaultServices: ["ro", "r"]
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    additional:
      - selectorType: rw
        serviceTemplate:
          metadata:
            name: "test-rw"
            labels:
              test-label: "true"
            annotations:
              test-annotation: "true"
          spec:
            type: LoadBalancer
```

managed スタンザを使用してサービスを宣言します。デフォルトサービスが無効になり、定義された LoadBalancer タイプの新しい rw サービステンプレートが含まれます。

50.7 宣言的テーブルスペース

宣言的テーブルスペースを使用したクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-with-tablespaces
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi

  tablespaces:
    - name: atablespace
      storage:
        size: 1Gi
        storageClass: standard
      temporary: true
    - name: another_tablespace
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
      temporary: true
    - name: tablespacea1
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
```

宣言的テーブルスペースとバックアップを使用したクラスター： **前提条件** 構成は、minio が実行され動作していることを前提としています。minio パラメーターまたはクラウドソリューションで backup.barmanObjectStore を更新します。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-with-tablespaces
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi

  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://backups/
      endpointURL: http://minio:9000
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: minio
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: minio
          key: ACCESS_SECRET_KEY
      wal:
        compression: gzip

  tablespaces:
    - name: atablespace
      storage:
        size: 1Gi
        storageClass: standard
    - name: another_tablespace
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
    - name: tablespacea1
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
```

オブジェクトストアからのテーブルスペースを含む復元されたクラスター：**前提条件**以前のクラスターが適用され、ベースバックアップが完了しました。bootstrap.recovery.backup.name をバックアップ名で更新することを忘れないでください。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-restore-with-tablespaces
spec:
  instances: 3

  storage:
    size: 1Gi

  bootstrap:
    recovery:
      backup:
        name: cluster-example-with-tablespaces-20231128093940

  tablespaces:
    atablespace:
      storage:
        size: 1Gi
        storageClass: standard
    another_tablespace:
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
    tablespacea1:
      storage:
        size: 2Gi
        storageClass: standard
```

使用可能なオプションのリストについては、*API リファレンス* を参照してください。

50.8 プーラー構成

カスタムサービス構成を使用したプーラー

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Pooler
metadata:
  name: pooler-example-rw
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  instances: 3
  type: rw
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  serviceTemplate:
    metadata:
      labels:
        app: pooler
    spec:
      type: LoadBalancer
  pgbouncer:
    poolMode: session
    parameters:
      max_client_conn: "1000"
      default_pool_size: "10"
```

50.9 宣言的なパブリケーションおよびサブスクリプションオブジェクトを介した論理レプリケーション

2 つのテストマニフェストには、論理レプリケーションのセットアップに必要なすべてが含まれています。

パブリケーションのあるソースクラスター

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example
spec:
  instances: 1

  imageName: ghcr.io/cloudnative-pg/postgresql:16

  storage:
    size: 1Gi

  bootstrap:
    initdb:
      postInitApplicationSQL:
        - CREATE TABLE numbers (i SERIAL PRIMARY KEY, m INTEGER)
        - INSERT INTO numbers (m) (SELECT generate_series(1,10000))
        - ALTER TABLE numbers OWNER TO app
        - CREATE TABLE numbers_two (i SERIAL PRIMARY KEY, m INTEGER)
        - INSERT INTO numbers_two (m) (SELECT generate_series(1,10000))
        - ALTER TABLE numbers_two OWNER TO app
        - CREATE SCHEMA another_schema
        - ALTER SCHEMA another_schema OWNER TO app
        - CREATE TABLE another_schema.numbers_three (i SERIAL PRIMARY KEY, m INTEGER)
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
        - INSERT INTO another_schema.numbers_three (m) (SELECT generate_series(1,
↪10000))
        - ALTER TABLE another_schema.numbers_three OWNER TO app

  managed:
    roles:
      - name: app
        login: true
        replication: true
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Publication
metadata:
  name: cluster-example-pub
spec:
  name: pub
  dbname: app
  cluster:
    name: cluster-example
  target:
    allTables: true
```

app データベースで作成されたいくつかのテーブルを使用してクラスター cluster-example をセットアップし、重要なことに、**アプリユーザーにレプリケーションを追加します** 。 app データベースにクラスターのパブリケーションが作成されます。パブリケーションは、クラスターのプライマリが起動して実行された後にのみリコンサイルされることに注意してください。

サブスクリプションのある宛先クラスター : **前提条件**上記のように定義されたパブリケーションのあるソースクラスター。 :

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
  name: cluster-example-dest
spec:
  instances: 1

  storage:
    size: 1Gi

  bootstrap:
    initdb:
      import:
        type: microservice
        schemaOnly: true
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
      databases:
        - app
      source:
        externalCluster: cluster-example

  externalClusters:
  - name: cluster-example
    connectionParameters:
      host: cluster-example-rw.default.svc
      user: app
      dbname: app
    password:
      name: cluster-example-app
      key: password
- --
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Subscription
metadata:
  name: cluster-example-dest-sub
spec:
  cluster:
    name: cluster-example-dest
  name: sub
  dbname: app
  publicationName: pub
  externalClusterName: cluster-example
```

次を使用してクラスター cluster-example-dest を設定します。

- externalClusters スタンザで定義されたソースクラスター。 app ロールを使用して接続することに注意してください。これは、ソースクラスターが replication 特権を付与していることを前提としています。
- schemaOnly が有効になったマイクロサービスタイプのブートストラップインポート

サブスクリプションは宛先クラスターで作成されます。サブスクリプションは、宛先クラスターのプライマリが起動して実行された後にのみ調整されることに注意してください。

両方のクラスターがリコンサイルされた後、パブリケーションオブジェクトとサブスクリプションオブジェクトとともに、ソースクラスターのテーブルとそのデータが宛先クラスターでレプリケートされたことを確認できます。

さらに、いくつかのスタンドアロンのマニフェストの例があります。

すべてのテーブルをターゲットとするプレーンパブリケーション： **前提条件** 既存のクラスター cluster-example 。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Publication
metadata:
  name: publication-example
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  name: pub-all
  dbname: app
  target:
    allTables: true
```

制約されたパブリケーションターゲットを使用したパブリケーション： **前提条件** 既存のクラスター `cluster-example` 。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Publication
metadata:
  name: publication-example-objects
spec:
  cluster:
    name: cluster-example
  name: pub-objects
  dbname: app
  target:
    objects:
      - tablesInSchema: public
      - table:
          schema: another_schema
          name: numbers_three
          only: true
```

プレーンなサブスクリプション 前提条件既存のクラスター `cluster-example` がソースとして設定され、パブリケーション `pub-all` を使用します。宛先クラスターとして設定されたクラスター `cluster-example-dest` 。レプリケーション特権を持つロールを含む、ソースクラスターへの接続パラメーターを含む `externalClusters` スタンザを含みます。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Subscription
metadata:
  name: subscription-sample
spec:
  name: sub
  dbname: app
  publicationName: pub-all
  cluster:
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
    name: cluster-example-dest
  externalClusterName: cluster-example
```

上記のマニフェストはすべて、app データベースにパブリケーションまたはサブスクリプションを作成します。Database CRD は、データベースを宣言的に作成する便利な方法を提供します。これを使用すると、任意のデータベースに論理レプリケーションを設定できます。次のセクションに進みます。

50.10 Postgres データベースの宣言的管理

プレーンなデータベース：**前提条件**既存のクラスター `cluster-example` 。：

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Database
metadata:
  name: db-one
spec:
  name: one
  owner: app
  cluster:
    name: cluster-example
```

ICU ローカル仕様のデータベース： **前提条件** Postgres 16 以降を実行している既存のクラスター `cluster-example` 。：

```
#  NOTE: this manifest will only work properly if the Postgres version supports

#  ICU locales and rules (version 16 and newer)

apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Database
metadata:
  name: db-icu
spec:
  name: declarative-icu
  owner: app
  encoding: UTF8
  localeProvider: icu
  icuLocale: en
  icuRules: fr
  template: template0
  cluster:
    name: cluster-example
```

第51章　ネットワーキング

CloudNativePG は、基になる Kubernetes クラスターに必要な接続が既に設定されていることを前提としています。Kubernetes でのネットワーキングは、重要かつ拡張されたトピックです。詳細については、*Kubernetes documentation* を参照してください。

クイックスタートガイドに従ってローカルの KinD または K3d クラスターに CloudNativePG をインストールしている場合、どちらのプラットフォームもデフォルトでネットワーク制限を追加しないため、ネットワークの問題は発生しないはずです。

ただし、既存のインフラストラクチャに CloudNativePG を展開する場合、ネットワーク制限が適用される場合があり、オペレーターと PostgreSQL クラスターとの通信を損なう可能性があります。具体的には、既存の Network Policies

特定の種類のトラフィックを制限する場合があります。

または、セキュリティを強化するために環境にネットワークポリシーを追加することに興味がある場合があります。*security document* で述べたように、オペレーターがポート 8000 および 5432 ですべてのクラスターポッドに到達でき、ポッドが相互に接続できることを確認してください。

51.1 オペレーターのクロス名前空間ネットワークポリシー

クイックスタートガイドに従うか、展開に helm チャートを使用すると、オペレーターが専用の名前空間デフォルトで `cnpg-system` にインストールされます。クラスターは別の名前空間に作成することをお勧めします。

オペレーターはクラスターポッドに接続できる必要があります。これは、名前空間を越えたトラフィックを制限する `NetworkPolicy` がある場合、妨げられる可能性があります。

例、 *kubernetes guide on network policies*

デフォルトですべての入力トラフィックを拒否するポリシーの例が含まれています。

ローカル kubernetes セットアップにこの種の制限的なネットワークポリシーがある場合、`NetworkPolicy` を作成して、オペレーター名前空間とポッドからクラスター名前空間とポッドへの接続を明示的に許可する必要があります。以下のような例を見つけることができます。

```
#  This network policy allows ingress from the CNPG operator

#  installed in namespace cnpg-system into the pods corresponding

#  to a cluster named cluster-example
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
  name: allow-operator
spec:
  podSelector:
    matchLabels:
      cnpg.io/cluster: cluster-example # The label value must be the cluster name
  ingress:
    - from:
        - namespaceSelector:
            matchLabels:
              kubernetes.io/metadata.name: cnpg-system # Namespace where the operator␣
↪is deployed
          podSelector:
            matchLabels:
              app.kubernetes.io/name: cloudnative-pg # Matches the Operator pod
      ports:
        - port: 8000
        - port: 5432
```

特定のセットアップに一致するようにクラスター名とクラスター名前空間を調整する必要があることに注意してください。デフォルトの名前空間でない場合は、オペレーター名前空間も調整する必要があります。

51.2 クロスクラスターネットワーキング

別のクラスターから レプリカクラスターのブートストラップ を使用している間、または externalClusters セクションを使用している場合、関係するすべてのクラスター、オブジェクトストア、および名前空間間の接続を確認します。

繰り返しになりますが、 *Kubernetes documentation* を参照します

セットアップ情報については。

第52章　ベンチマーク

CNPG kubectl プラグインは、CloudNativePG を使用して Kubernetes で PostgreSQL 展開をベンチマークする簡単な方法を提供します。

ベンチマークは、2 つの側面に焦点を当てています。

- **データベース** 、 pgbench に依存すること
- **ストレージ** fio に依存すること

重要: *pgbench* および `fio` は、ステージングまたは実稼働前環境で実行する必要があります。運用環境ではこれらのプラグインを使用しないでください。データベースと、同じ共有環境で実行される他のワークロード/アプリケーションに壊滅的な結果をもたらす可能性があります。

52.1 pgbench

`kubectl` CNPG プラグインコマンド `pgbench` は、既存の Postgres クラスターに対してユーザー定義の `pgbench` ジョブを実行します。

`--dry-run` フラグを介して、後の変更/実行のためにジョブのマニフェストを生成できます。

`pgbench` を使用した一般的なコマンド構造は次のとおりです。

```
kubectl cnpg pgbench \
  -n <namespace> <cluster-name> \
  --job-name <pgbench-job> \
  --db-name <db-name> \
  -- <pgbench options>
```

重要: pgbench を参照してください。

ジョブで使用される特定のオプションについては、

この例では、 `pgbench` OLTP のような目的で、スケールファクター 1000 を使用して `cluster-example` という名前の `Cluster` の `app` データベースを初期化する `pgbench-init` というジョブを作成します。

```
kubectl cnpg pgbench \
  --job-name pgbench-init \
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  cluster-example \
  -- --initialize --scale 1000
```

注釈: これにより、100000000 レコードを含むデータベースが生成され、ディスク上に約 13GB の領域が必要です。

ジョブの進行状況は次の方法で確認できます。

```
kubectl logs jobs/pgbench-run
```

次の例では、単一の接続を使用して、以前に初期化されたデータベースに対して 30 秒間 pgbench を実行する pgbench-run というジョブを作成します。

```
kubectl cnpg pgbench \
  --job-name pgbench-run \
  cluster-example \
  -- --time 30 --client 1 --jobs 1
```

次の例では、 --db-name フラグと pgbench 名前空間を使用して、既存のデータベースに対して pgbench を実行します。

```
kubectl cnpg pgbench \
  --db-name pgbench \
  --job-name pgbench-job \
  cluster-example \
  -- --time 30 --client 1 --jobs 1
```

特定のワーカーノードで pgbench ジョブを実行する場合は、 --node-selector オプションを使用できます。 workload=pgbench ラベルを持つノードで以前の初期化ジョブを実行する場合、次のことを実行できます。

```
kubectl cnpg pgbench \
  --db-name pgbench \
  --job-name pgbench-init \
  --node-selector workload=pgbench \
  cluster-example \
  -- --initialize --scale 1000
```

ジョブステータスは、次のコマンドを実行して取得できます。

```
kubectl get job/pgbench-job -n <namespace>

NAME       COMPLETIONS   DURATION   AGE
job-name   1/1           15s        41s
```

ジョブが完了すると、次のことを実行して結果を収集できます。

```
kubectl logs job/pgbench-job -n <namespace>
```

52.2 fio

kubectl CNPG プラグインコマンド fio は、デフォルト値と読み取り操作を使用して fio ジョブを実行します。--dry-run フラグを介して、後の変更/実行のためにジョブのマニフェストを生成できます。

注釈: kubectl プラグインコマンド `fio` は、ConfigMap を使用して事前定義された fio ジョブ値を使用してデプロイメントを作成します。カスタムジョブ値を提供する場合は、 *--dry-run* フラグを使用してマニフェストを生成し、生成された ConfigMap でカスタムジョブ値を提供することをお勧めします。

デフォルトの使用例

```
kubectl cnpg fio <fio-name>
```

カスタム値を使用した例

```
kubectl cnpg fio <fio-name> \
  -n <namespace>  \
  --storageClass <name> \
  --pvcSize <size>
```

fio 名前空間の standard および pvcSize: 2Gi という名前の StorageClass に対して fio コマンドを実行する方法の例

```
kubectl cnpg fio fio-job \
  -n fio  \
  --storageClass standard \
  --pvcSize 2Gi
```

展開ステータスは、次のコマンドを実行して取得できます。

```
kubectl get deployment/fio-job -n fio

NAME          READY   UP-TO-DATE   AVAILABLE   AGE
fio-job        1/1     1            1           14s
```

kubectl プラグインコマンド fio を実行した後。

それは次のことを行います。

1. PVC を作成する
2. fio ジョブの構成を表す ConfigMap を作成します

3. 単一のポッドで構成される fio 展開を作成し、PVC で fio を実行し、ベンチマークの完了後にグラフを作成し、ウェブサーバーで生成されたファイルの提供を開始します。そのためには、*fio-tools <https://github.com/wallnerryan/fio-tools>`_* イメージを使用します。

デプロイメントによって作成されたポッドは、結果の提供を開始すると準備が整います。デプロイメントによって作成されるポッドのポートを転送できます

```
kubectl port-forward -n <namespace> deployment/<fio-name> 8000
```

次に、ブラウザを使用して `http://localhost:8000/` に接続してデータを取得します。

PostgreSQL ワークロードをエミュレートするために、デフォルトの 8k ブロックサイズが選択されました。使用可能な IOPS の量を制限するディスクは、このパラメーターを変更すると、非常に異なるスループット値を示す場合があります。

以下は、専用の Kubernetes ノードにマウントされたローカルディスクへのシークエンシャル書き込みの図の例 1 時間ベンチマーク。

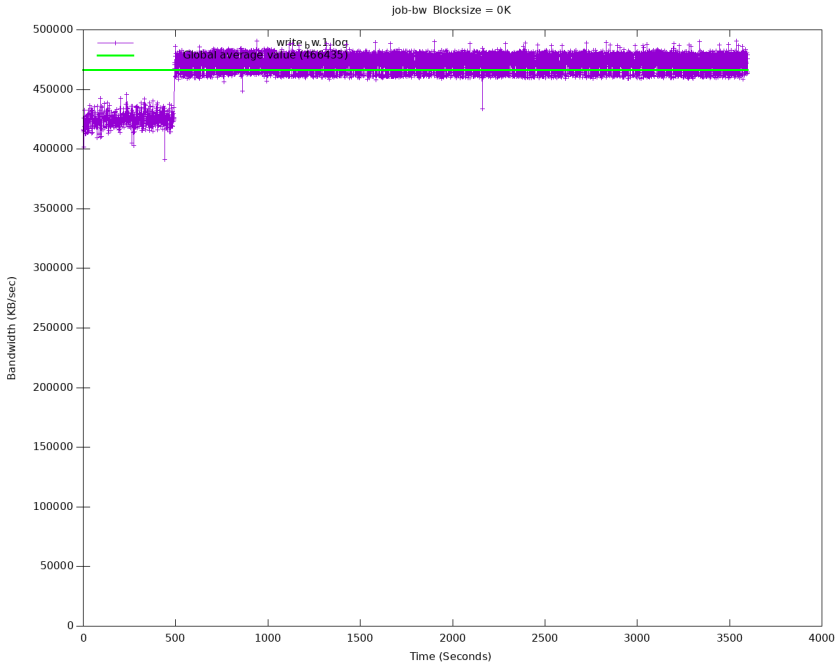


図 1: Sequential writes bandwidth

すべてのテストが完了したら、fio 展開とリソースを次の方法で削除できます。

```
kubectl cnpg fio <fio-job-name> --dry-run | kubectl delete -f -
```

fio 展開の作成に使用したものと同じ名前を使用して、必要に応じて名前空間を追加します。

第53章　よくある質問FAQ

53.1 KubernetesでのPostgreSQLの実行

**PostgreSQLのようなステートフルワークロードはKubernetesでは実行できないことは誰もが知っています。なぜ逆に言うのですか？*

2021年9月の _independent research survey commissioned by the Data on KubernetesCommunity_ では、回答者の半数が運用ワークロードのほとんどをKubernetesで実行していることが明らかになりました。90％がKubernetesがステートフルワークロードに対応する準備ができていると考えており、70％が本番環境でデータベースを実行しています。Postgresのようなデータベース。しかし、彼らによると、知識ギャップ一般にKubernetesとクラウドネイティブは急な学習曲線を持っていますや、Kubernetesオペレーターの品質など、重要な課題が残っています。後者は、CloudNativePGのようなオペレーターがプロジェクトの成功に大きく貢献すると信じる理由です。

私たちのようなデータベース愛好家にとって、真のゲームチェンジャーは、_Kubernetes 1.14 in April 2019_ でのローカル永続ボリュームのサポートの導入でした。

CloudNativePGは、不変のアプリケーションコンテナに基づいて構築されています。それはどういう意味ですか？

マイクロサービスアーキテクチャパターンによると、コンテナは単一のアプリケーションまたはプロセスを実行するように設計されています。その結果、このようなコンテナイメージは、メインアプリケーションを単一のエントリポイントいわゆるPID 1プロセスとして実行するようにビルドされます。

Kubernetesの用語では、アプリケーションはワークロードと呼ばれます。ワークロードは、Webアプリケーションサーバーのようなステートレスまたはデータベースのようなステートフルにすることができます。この概念をPostgreSQLにマッピングすると、不変アプリケーションコンテナは、実行され、単一の特定のバージョン不変コンテナイメージ内のバージョンに関連付けられている単一の「postgres」プロセスです。

SSH、systemd、またはsyslogなどの他のプロセスは許可されません。

不変のアプリケーションコンテナは、依然としてコンテナを解釈して使用する非常に一般的な方法である可変システムコンテナとは対照的です。

不変とは、コンテナがその存続期間中に変更されないことを意味します。更新、パッチ、構成変更はありません。アプリケーションコードを更新するか、パッチを適用する必要がある場合は、新しいイメージをビルドして再展開します。不変性により、展開がより安全で反復可能になります。

詳細については、 _"Why EDB chose immutable application containers"_ を参照してください。

クラウドネイティブとはどういう意味ですか?

Cloud Native Computing Foundationは、用語「 _Cloud Native_ 」を定義しています。ただし、2ndQuadrantでCloud Native PostgreSQL / CloudNativePGオペレーターが開始されて以来、開発チームはクラウドネイ

ティブを 3 つの主要なコンセプトとして解釈してきました。

1. 人、および原則とプロセスに基づいた、既存の健全で、本物の、豊かな DevOps 文化。これにより、チームと組織がチームのチームとして継続的に変化し、結果と成果の提供を革新および加速できます。より安全、より効率、そしてより魅力的な方法でビジネスの価値を引き出します
2. 不変のアプリケーションコンテナに基づいたマイクロサービスアーキテクチャ
3. Kubernetes などのこれらのコンテナを管理およびオーケストレーションする方法

現在、コンテナオーケストレーションのデファクト標準は Kubernetes であり、クラウドネイティブアプリケーションの展開、管理、およびスケーラビリティを自動化します。

私たちの共鳴をもたらすクラウドネイティブのもう 1 つの定義は、_"Kubernetes Patterns", published by O'Reilly_ で Ibryam と Huß によって定義されたものです。

> コンテナ化されたマイクロサービスを大規模に自動化するための原則、パターン、ツール

ベアメタル Kubernetes で CloudNativePG を実行できますか?

はい、確かに。ベアメタルで Kubernetes を実行できます。また、ローカルに接続されたストレージを使用する 1 つ以上の物理ワーカーノードを PostgreSQL ワークロード専用にすると、最大かつ予測可能な I/O パフォーマンスを実現できます。

CloudNativePG の元となる実際のクラウドネイティブ PostgreSQL プロジェクトは、同じベアメタルサーバー上のストレージと PostgreSQL を、最初に Linux で直接、次に Kubernetes 内でベンチマークした 2019 年のパイロットプロジェクトの後に生まれました。予想されたように、実験では、ローカル永続ボリュームを介して Kubernetes で実行されているコンテナによってもたらされたパフォーマンスへのごくわずかな影響のみが示されたため、クラウドネイティブイニシアチブを続行できます。

ファイルシステムレプリケーションの代わりに PostgreSQL レプリケーションを使用する必要があるのはなぜですか?

Architecture: Synchronizing the state をお読みください

セクション。

PostgreSQL をコンテナとして実行する代わりに、オペレーターを使用する必要があるのはなぜですか?

Kubernetes で PostgreSQL を実行するための最も基本的なアプローチは、Kubernetes での展開の最小単位であるポッドを使用し、レプリカのない Postgres コンテナを実行することです。Postgres データディレクトリをホスティングするボリュームはポッドにマウントされ、通常はネットワークストレージにあります。この場合、Kubernetes は問題が発生した場合にポッドを再起動するか、別の Kubernetes ノードに移動します。

最も洗練されたアプローチは、演算子を使用して PostgreSQL を実行することです。オペレーターは Kubernetes コントローラーの拡張機能であり、ビジネス継続性のコンテキストで複雑なアプリケーションがどのように動作するかを定義します。演算子パターンは、この目的のための Kubernetes の現在最先端の技術です。オペレーターは、自動化されたプログラム的な方法で人間のオペレーターの作業をシミュレートします。

Postgres は複雑なアプリケーションであり、オペレーターはクラスターを展開する最初のステップだけでなく、予期しないイベントの後に適切に対応する必要があります。典型的な例は、フェイルオーバーの例です。

オペレーターは、自己修復、スケーラビリティ、レプリケーション、高可用性、バックアップ、リカバリー、更新、アクセス、リソース制御、ストレージ管理などの機能で Kubernetes に依存しています。また、ログ

管理および監視インフラストラクチャへの PostgreSQL クラスターの統合も促進します。

CloudNativePG は、宣言的構成を介して PostgreSQL クラスターの目的の状態を定義できます。Kubernetes は、Kubernetes コントローラによって開始される調整ループを介して、インフラストラクチャの現在の状態が目的の状態と一致することを継続的に確認します。目的の状態と実際の状態が一致しない場合、調整ループは自己修復プロシージャーをトリガーします。そこで、CloudNativePG のようなオペレーターが登場します。

Postgres の他の演算子はありますか?

はい、もちろんです。そして、私たちのアドバイスは、決定を行う前に、それらをすべて見て CloudNativePG と比較することです。これらのオペレーターのほとんどは、外部フェールオーバー管理ツール Patroni または同様のツールを使用し、StatefulSet に依存していることがわかります。

これは、GitHub での公開からの時系列での非完全なリストです。

- Crunchy Data Postgres Operator 2017
- Zalando Postgres Operator 2017
- Stackgres 2020
- Percona Operator for PostgreSQL 2021
- Kubegres 2021

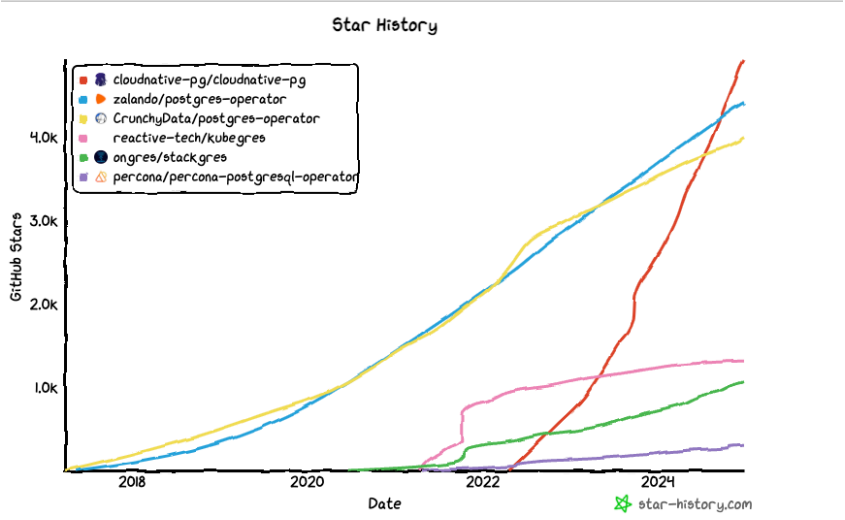


図 1: star history

関連する欠落エントリを PR としてご自由に報告してください。

注釈: Data on Kubernetes Community

メンテナーの一部を含むは、 Operator Feature Matrix と呼ばれるオペレーターをリストする独立したベンダー中立プロジェクトに取り組んでいます。

CloudNativePG は完全な宣言的演算子であると言います。それはどういう意味ですか？

最も簡単な方法は、命令的構成との違いを強調する例を介して宣言的構成を説明することです。命令的コンテキストでは、状態は順番に実行される一連のタスクとして定義されます。したがって、最初のインスタンスを作成し、レプリケーションの構成、2 番目のインスタンス、3 番目のインスタンスのクローンを作成することにより、3 ノードの PostgreSQL クラスターを取得できます。

宣言的アプローチでは、システムの状態は構成を使用して定義されます。つまり、2 つのレプリカを持つ PostgreSQL 13 クラスターがあります。このアプローチは、変更管理操作を非常に簡素化し、これらが Git のようなソース制御システムに保存されると、Infrascriptor as Code 機能が有効になります。そして、Kubernetes は、私たちの要求が常に満たされることを保証するため、展開よりもさらに進んでいます。

Kubernetes で PostgreSQL を実行するために必要なスキルは何ですか?

Kubernetes で PostgreSQL を実行するには、DevOps チームに PostgreSQL と Kubernetes の両方のスキルが必要です。最高のエクスペリエンスは、データベース管理者が Kubernetes のコア概念を理解し、Kubernetes 管理者と対話できる場合です。

私たちのアドバイスは、クラウドネイティブ PostgreSQL を完全に活用して、CNCF 認定プログラムから「Certified Kubernetes AdministratorCKA」ステータスを取得したいと考えているすべての人を対象としています。

CloudNativePG はステートフルセットを使用しないのはなぜですか?

CloudNativePG は `StatefulSet` リソースに依存せず、代わりに、動的プロビジョニング用に選択されたストレージクラスを活用して、基になる PVC を直接管理します。この決定の背後にある理由と詳細については、**カスタムポッドコントローラ** セクションを参照してください。

53.2 高可用性

オペレーターポッドが停止するか、特定の時間使用できない場合、PostgreSQL クラスターはどうなりますか?

CloudNativePG オペレーターは、特に、自己修復機能を担当します。そのため、オペレーターの停止中は利用できない場合があります。

ただし、停止が PostgreSQL クラスターが実行されているノードに影響を与えないと仮定すると、データベースは、関連する Kubernetes サービスを介して通常の操作を提供し続けます。さらに、各 PostgreSQL ポッド内で実行される **インスタンスマネージャーのインプレース更新** は引き続き動作し、ロギング、メトリックのエクスポート、WAL ファイルの継続的アーカイブなどのアクセサリサービスを含む、データベースサーバーがアップしていることを確認します。

要約すると

オペレーターの停止は、必ずしも PostgreSQL データベースの停止を意味するわけではありません。それは、DBA またはシステム管理者なしでデータベースを実行するようなものです。

CloudNativePG が Patroni、repmgr、Stolon のようなフェールオーバー管理ツールに依存しない理由は何ですか?

CloudNativePG を開発するチームの一部は、過去に repmgr に深く関わっていましたが、私たちは別のアプローチを取って Kubernetes コントローラを直接拡張し、Kubernetes API サーバーに依存して Postgres クラスターのステータスを保持し、使用することにしました。以下の真実の唯一の情報源として

- 主に自動フェイルオーバーとスイッチオーバーを介して Postgres クラスターの高可用性を制御し、インスタンスマネージャーのインプレース更新 と調整します
- Kubernetes サービス、つまりアプリケーションのエントリポイントを制御します

フェールオーバーに続いて、元のプライマリを新しいプライマリと手動で再同期する必要がありますか?

いいえ。オペレーターはそれを自動的に行い、 `pg_rewind` に依存して元のプライマリと新しいプライマリを同期します。

第54章　APIリファレンス

パッケージ v1 には、postgresql v1 API グループの API スキーマ定義が含まれています

54.1 リソースタイプ

- 付録 *A*-バックアップ用の共通オブジェクトストア
- マルチアベイラビリティーゾーン *Kubernetes* クラスター
- ClusterImageCatalog {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterImageCatalog}
- アプリケーションデータベースの構成
- ClusterImageCatalog {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterImageCatalog}
- プーラー {postgresql-cnpg-io-v1-Pooler}
- Publication {postgresql-cnpg-io-v1-Publication}
- ScheduledBackup {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackup}
- サブスクリプション {postgresql-cnpg-io-v1-Subscription}

54.2 Backup

Backup はバックアップ API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*Backup*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_BackupSpec_	バックアップの目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

次のページに続く

表 1 – 前のページからの続き

Field	Description
status _BackupStatus_	最近観察されたバックアップのステータス。このデータは最新でない可能性があります。システムによって設定されます。読み取り専用。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.3 クラスター

クラスターは PostgreSQL API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*Cluster*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_ClusterSpec_	クラスターの目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status
status _ClusterStatus_	最近観察されたクラスターのステータス。このデータは最新でない可能性があります。システムによって設定されます。読み取り専用。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.4 ClusterImageCatalog

ClusterImageCatalog は、 clusterimagecatalogs API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*ClusterImageCatalog*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_ImageCatalogSpec_	ClusterImageCatalog の目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.5 Database

データベースはデータベース API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*Database*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_DatabaseSpec_	目的のデータベースの仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status
status _DatabaseStatus_	最近観察されたデータベースのステータス。このデータは最新でない可能性があります。システムによって設定されます。読み取り専用。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.6 ImageCatalog

ImageCatalog は、imagecatalogs API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*ImageCatalog*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_ImageCatalogSpec_	ImageCatalog の目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.7 プーラー

Pooler は、プーラー API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*Pooler*

次のページに続く

表 6 – 前のページからの続き

Field	Description
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_PoolerSpec_	プーラーの目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status
status _PoolerStatus_	プーラーの最近観察されたステータス。このデータは最新でない可能性があります。システムによって設定されます。読み取り専用。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.8 Publication

パブリケーションは、パブリケーション API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*Publication*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_PublicationSpec_	説明はありません。
status ** Required]** [_PublicationStatus_	説明はありません。

54.9 ScheduledBackup

ScheduledBackup は、スケジュールされたバックアップ API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*ScheduledBackup*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_ScheduledBackup-Spec_	ScheduledBackup の目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

次のページに続く

表 8 – 前のページからの続き

Field	Description
status _ScheduledBackupStatus_	ScheduledBackup の最近観察されたステータス。このデータは最新でない可能性があります。システムによって設定されます。読み取り専用。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.10 サブスクリプション

サブスクリプションは、サブスクリプション API のスキーマです

Field	Description
apiVersion **[Required]** string	*postgresql.cnpg.io/v1*
kind **[Required]** string	*Subscription*
metadata ** Required]** [_meta/v1.ObjectMeta_	説明はありません。`metadata`フィールドのフィールドについては、Kubernetes API ドキュメントを参照してください。
spec ** Required]** [_SubscriptionSpec_	説明はありません。
status ** Required]** [_SubscriptionStatus_	説明はありません。

54.11 AffinityConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

AffinityConfiguration には、ポッドのアフィニティルールを作成するために必要な情報が含まれています

Field	Description
enablePodAntiAffinity _bool_	ポッドのアンチアフィニティをアクティブにします。このフィールドが明示的に false に設定されていない限り、オペレーターはポッドのアンチアフィニティを定義します
topologyKey _string_	アンチアフィニティ構成に使用するトポロジキー。その詳細については、k8s ドキュメントを参照してください
nodeSelector _map[string]string_	NodeSelector は、ポッドを実行できるノードを定義するために使用されるキーと値ペアのマップです。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/configuration/assign-pod-node/

次のページに続く

表 10 – 前のページからの続き

Field	Description
nodeAffinity _core/v1.NodeAffinity_	NodeAffinity は、ポッドのノードアフィニティスケジューリングルールを説明します。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/scheduling-eviction/assign-pod-node/#node-affinity
tolerations _[]core/v1.Toleration_	Tolerations は、汚染されたノードで実行できるようにするために、すべてのポッドに設定する必要がある許容範囲のリストです。詳細情報 https://kubernetes.io/docs/concepts/scheduling-eviction/taint-and-toleration/
podAntiAffinityType _string_	PodAntiAffinityType を使用すると、ユーザーは、クラスターインスタンス間のポッドアンチアフィニティを、スケジュール中に強い要件と見なす必要があるかどうかを決定できます。使用できる値は「preferred」空の場合のデフォルトまたは「required」です。「required」に設定すると、既存のすべてのノードが必要なポッドのアンチアフィニティルールと一致しない場合、新しい kubernetes ノードが追加されるまでインスタンスが保留されたままになる可能性があります。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/scheduling-eviction/assign-pod-node/#inter-pod-affinity-and-anti-affinity
additionalPodAntiAffinity _core/v1.PodAntiAffinity_	AdditionalPodAntiAffinity では、EnablePodAntiAffinity が true デフォルトに設定されている場合にオペレーターが生成した用語に追加するポッドアンチアフィニティ用語、false に設定されている場合に排他的に使用されるポッドアンチアフィニティ用語を指定できます。
additionalPodAffinity _core/v1.PodAffinity_	AdditionalPodAffinity では、すべてのクラスターのポッドに渡されるポッドアフィニティ用語を指定できます。

54.12 AvailableArchitecture

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

AvailableArchitecture は、クラスターのアーキテクチャの状態を表します

Field		Description
goArch _string_	**[Required]**	GoArch は実行可能アーキテクチャの名前です
hash _string_	**[Required]**	ハッシュは実行可能ファイルのハッシュです

54.13 BackupConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

BackupConfiguration は、クラスターのバックアップを取得する方法を定義します。サポートされているバックアップ方法は、BarmanObjectStore と VolumeSnapshot です。詳細と例については、ドキュメントのバックアップとリカバリーセクションを参照してください。

Field	Description
volumeSnapshot _VolumeSnapshotConfiguration_	VolumeSnapshot は、ボリュームスナップショットバックアップを実行するための構成を提供します。
barmanObjectStore _github.com/cloudnative-pg/barman-cloud/pkg/api.BarmanObje	barman-cloud ツールスイートの構成
retentionPolicy _string_	RetentionPolicy は、バックアップと WAL つまり '60d' に使用される保持ポリシーです。保持ポリシーは `XXu` の形式で表されます。ここで、 *XX* **`は正の整数、`** *`u`* **`は`** *`[dwm]`*-日、週、月です。現在、BarmanObjectStore メソッドを使用する場合にのみ適用されます。
target _BackupTarget_	バックアップを実行するインスタンスを決定するポリシー。使用可能なオプションは空の文字列で、デフォルトで `prefer-standby` ポリシー、バックアップを常にプライマリインスタンスで実行する `primary`、可能な場合は最も更新されたスタンバイでバックアップを実行する `prefer-standby` です。

54.14 BackupMethod

`string` のエイリアス

出演作品

- BackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-BackupSpec}
- BackupStatus {postgresql-cnpg-io-v1-BackupStatus}
- ScheduledBackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackupSpec}

BackupMethod は、選択した PostgreSQL インスタンスの物理ベースのバックアップを実行する方法を定義します

54.15 BackupPhase

string のエイリアス

出演作品

- BackupStatus {postgresql-cnpg-io-v1-BackupStatus}

BackupPhase はバックアップのフェーズです

54.16 BackupPluginConfiguration

出演作品

- BackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-BackupSpec}
- ScheduledBackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackupSpec}

BackupPluginConfiguration には、バックアッププラグインが使用するバックアップ構成が含まれます

Field	Description
name **[Required]** _string_	Name は、このバックアップを管理するプラグインの名前です
parameters _map[string]string_	パラメーターは、このバックアップのバックアッププラグインに渡される構成パラメーターです。

54.17 BackupSnapshotElementStatus

出演作品

- BackupSnapshotStatus {postgresql-cnpg-io-v1-BackupSnapshotStatus}

BackupSnapshotElementStatus は、ボリュームスナップショット方式バックアップの一部であるボリュームスナップショットです

Field	Description
name **[Required]** _string_	Name はスナップショットリソース名です
type **[Required]** _string_	タイプは、クラスター内のスナップショットのロールです。PG_DATA、PG_WAL、PG_TABLESPACE など
tablespaceName _string_	TablespaceName は、スナップショットされたテーブルスペースの名前です。タイプが PG_TABLESPACE の場合にのみ設定されます

54.18 BackupSnapshotStatus

出演作品

- BackupStatus {postgresql-cnpg-io-v1-BackupStatus}

BackupSnapshotStatus volumeSnapshot 方法のバックアップ専用のフィールド

Field	Description
elements _[]BackupSnapshotElementStatus_	収集されたボリュームスナップショットが設定された要素リスト

54.19 BackupSource

出演作品

- BootstrapRecovery {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapRecovery}

BackupSource には、復元する必要があるバックアップと、それを正しく復元するために必要な情報が含まれています。

Field	Description
LocalObjectReference _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	`LocalObjectReference`のメンバーはこのタイプに埋め込まれます。説明はありません。
endpointCA _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Secr	EndpointCA は、バーマンエンドポイントの CA バンドルを保存します。自己署名証明書を使用して、証明書の発行者と barman-cloud-wal-archive でのエラーを回避する場合に役立ちます。

54.20 BackupSpec

出演作品

- 付録 *A*-バックアップ用の共通オブジェクトストア

BackupSpec は、バックアップの望ましい状態を定義します

Field	Description
cluster ** Required]** [_github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	バックアップするクラスター

次のページに続く

表 17 – 前のページからの続き

Field	Description
target _BackupTarget_	このバックアップを実行するインスタンスを決定するポリシー。空の場合、デフォルトの`cluster.spec.backup.target`になります。使用可能なオプションは、空の文字列、`primary`および`prefer-standby`です。 `primary`は常にプライマリインスタンスでバックアップを実行します。`prefer-standby`は、可能な場合は最も更新されたスタンバイでバックアップを実行します。
method _BackupMethod_	使用するバックアップ方法、可能なオプションは`barmanObjectStore`、*volumeSnapshot*`または`*plugin*`です。デフォルト`*barmanObjectStore*
pluginConfiguration _BackupPluginConfiguration_	このバックアップを管理するプラグインに渡される構成パラメーター
online _bool_	ボリュームスナップショットを使用したバックアップのデフォルトのタイプがオンライン/ホット *true*、default またはオフライン/コールド *false* かどうか クラスターフィールド '.spec.backup.volumeSnapshot.online' で指定されたデフォルト設定をオーバーライドします
onlineConfiguration _OnlineConfiguration_	ボリュームスナップショットを使用してオンライン/ホットバックアップを制御する構成パラメーター クラスターで指定されたデフォルト設定をオーバーライドします '.backup.volumeSnapshot.onlineConfiguration' スタンザ

54.21 BackupStatus

出演作品

- 付録 *A*-バックアップ用の共通オブジェクトストア

BackupStatus は、バックアップの監視された状態を定義します

Field	Description
BarmanCredentials _github.com/cloudnative-pg/barman-cloud/pkg/api.BarmanCrec	`BarmanCredentials`のメンバーはこのタイプに埋め込まれます。各クラウドプロバイダーの潜在的な資格情報
endpointCA _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Secr	EndpointCA は、バーマンエンドポイントの CA バンドルを保存します。自己署名証明書を使用して、証明書の発行者と barman-cloud-wal-archive でのエラーを回避する場合に役立ちます。
endpointURL _string_	クラウドにデータをアップロードするために使用されるエンドポイント、自動エンドポイント検出をオーバーライドする
destinationPath _string_	バックアップを保存するパスつまり s3://bucket/path/to/folder このパスは、さまざまな宛先フォルダーで、WAL とデータに使用されます。これは、エラーが発生した場合に入力されない場合があります。
serverName _string_	このパラメータが省略された場合、S3 のサーバー名、クラスター名が使用されます

次のページに続く

表 18 – 前のページからの続き

Field	Description
encryption _string_	S3 API に必要な暗号化方法
backupId _string_	Barman バックアップの ID
backupName _string_	Barman のバックアップの名前
phase _BackupPhase_	前回のバックアップステータス
startedAt _meta/v1.Time_	バックアップが開始されたとき
stoppedAt _meta/v1.Time_	バックアップが終了したとき
beginWal _string_	開始する WAL
endWal _string_	エンディング WAL
beginLSN _string_	スタート xlog
endLSN _string_	エンディング xlog
error _string_	検出されたエラー
commandOutput _string_	未使用。古いバージョンとの互換性のために保持されています。
commandError _string_	エラーが発生した場合の backup コマンド出力
backupLabelFile _[]byte_	オンラインホットバックアップの場合に Postgres から返されたラベルファイルのコンテンツをバックアップします
tablespaceMapFile _[]byte_	オンラインホットバックアップの場合に Postgres によって返されるテーブルスペースマップファイルのコンテンツ
instanceID _InstanceID_	バックアップが取得されたインスタンスを識別する情報
snapshotBackupStatus _BackupSnapshotStatus_	ボリュームのステータススナップショットバックアップ
method _BackupMethod_	使用されているバックアップ方法
online _bool_	バックアップがオンライン/ホット *true* またはオフライン/コールド *false*
pluginMetadata _map[string]string_	プラグインのメタデータを含むマップ

54.22 BackupTarget

`string` のエイリアス

出演作品

- BackupConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-BackupConfiguration}
- BackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-BackupSpec}
- ScheduledBackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackupSpec}

BackupTarget は、バックアップの優先ターゲットを説明します

54.23 BootstrapConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

BootstrapConfiguration には、PostgreSQL クラスターの作成方法に関する情報が含まれています。サポートされているブートストラップ方法のうち、1 つのブートストラップ方法のみを定義できます。`initdb` は、指定しない場合、ブートストラップ方法として使用されます。詳細については、ドキュメントの Bootstrap ページを参照してください。

Field	Description
initdb _BootstrapInitDB_	initdb を介してクラスターをブートストラップする
recovery _BootstrapRecovery_	バックアップからクラスターをブートストラップする
pg_basebackup _BootstrapPgBaseBackup_	互換性のある別の PostgreSQL インスタンスの物理バックアップを取得してクラスターをブートストラップする

54.24 BootstrapInitDB

出演作品

- BootstrapConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapConfiguration}

BootstrapInitDB は、initdb が使用される場合のブートストラッププロセスの構成です。詳細については、ドキュメントの Bootstrap ページを参照してください。

Field	Description
database _string_	アプリケーションが使用するデータベースの名前。デフォルト `app`
owner _string_	アプリケーションが使用するインスタンス内のデータベースの所有者の名前。`database`キーの値のデフォルト。
secret _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	ユーザーデータベースの所有者の初期資格情報を含むシークレットの名前。空の場合、新しいシークレットは最初から作成されます
options _[]string_	クラスターの作成時に initdb に渡す必要があるオプションのリスト。非推奨これは、一貫性のない構成を引き起こす可能性があります。代わりに明示的に提供されたパラメーターを使用してください。定義されている場合、明示的な値は無視されます。
dataChecksums _bool_	*-k* `オプションを *initdb* に渡し、データページのチェックサムを有効にするかどうかデフォルト *false*
encoding _string_	initdb のオプション `--encoding`として渡される値デフォルト `UTF8`
localeCollate _string_	initdb のオプション `--lc-collate`として渡される値デフォルト `C`
localeCType _string_	initdb のオプション `--lc-ctype`として渡される値デフォルト `C`

次のページに続く

表 20 – 前のページからの続き

Field	Description
locale _string_	新しいデータベースにデフォルトの照合順序と文字分類を設定します。
localeProvider _string_	このオプションは、新しいクラスターで作成されるデータベースのロケールプロバイダーを設定します。 PostgreSQL 16 から利用できます。
icuLocale _string_	ICU プロバイダーを使用する場合に、ICU ロケールを指定します。このオプションでは、`localeProvider`を`icu`に設定する必要があります。 PostgreSQL 15 から利用できます。
icuRules _string_	追加の照合ルールを指定して、デフォルトの照合順序の動作をカスタマイズします。このオプションでは、`localeProvider`を`icu`に設定する必要があります。 PostgreSQL 16 から利用できます。
builtinLocale _string_	ビルトインプロバイダーを使用する場合にロケール名を指定します。このオプションでは、`localeProvider`を`builtin`に設定する必要があります。 PostgreSQL 17 から利用できます。
walSegmentSize _int_	initdb の`--wal-segsize`オプションに渡されるメガバイト単位の値 1〜1024 デフォルト空、PostgreSQL のデフォルト 16MB になります
postInitSQL _[]string_	クラスターが作成された直後に`postgres`データベースでスーパーユーザーとして実行される SQL クエリーのリスト-細心の注意を払って使用しますデフォルトでは空
postInitApplicationSQL _[]string_	クラスターが作成された直後にアプリケーションデータベースでスーパーユーザーとして実行される SQL クエリーのリスト-細心の注意を払って使用しますデフォルトでは空
postInitTemplateSQL _[]string_	クラスターが作成された直後に`template1`データベースでスーパーユーザーとして実行される SQL クエリーのリスト-細心の注意を払って使用しますデフォルトでは空
import _Import_	論理バックアップ`pg_dump`および`pg_restore`を使用して既存の PostgreSQL インスタンスからデータをインポートすることにより、新しいクラスターをブートストラップします
postInitApplicationSQLRefs _SQLRefs_	クラスターが作成された直後にアプリケーションデータベースでスーパーユーザーとして実行される SQL ファイルを含む ConfigMap または Secret への参照のリスト。参照は特定の順序で処理されます。最初にすべてのシークレットが処理され、次にすべての ConfigMap が処理されます。各グループ内での処理順序は、それぞれの配列で指定されたシーケンスに従います。デフォルトでは空
postInitTemplateSQLRefs _SQLRefs_	クラスターが作成された直後に`template1`データベースでスーパーユーザーとして実行される SQL ファイルを含む ConfigMap または Secret への参照のリスト。参照は特定の順序で処理されます。最初にすべてのシークレットが処理され、次にすべての ConfigMap が処理されます。各グループ内での処理順序は、それぞれの配列で指定されたシーケンスに従います。デフォルトでは空

次のページに続く

表 20 – 前のページからの続き

Field	Description
postInitSQLRefs _SQL-Refs_	クラスターが作成された直後に`postgres`データベースでスーパーユーザーとして実行される SQL ファイルを含む ConfigMap または Secret への参照のリスト。参照は特定の順序で処理されます。最初にすべてのシークレットが処理され、次にすべての ConfigMap が処理されます。各グループ内での処理順序は、それぞれの配列で指定されたシーケンスに従います。デフォルトでは空

54.25 BootstrapPgBaseBackup

出演作品

- BootstrapConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapConfiguration}

BootstrapPgBaseBackup には、既存の PostgreSQL クラスターの物理バックアップを取得するために必要な構成が含まれています

Field	Description
source **[Required]** _string_	物理的バックアップを取得する必要があるサーバーの名前
database _string_	アプリケーションが使用するデータベースの名前。デフォルト`app`
owner _string_	アプリケーションが使用するインスタンス内のデータベースの所有者の名前。`database`キーの値のデフォルト。
secret _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	ユーザーデータベースの所有者の初期資格情報を含むシークレットの名前。空の場合、新しいシークレットは最初から作成されます

54.26 BootstrapRecovery

出演作品

- BootstrapConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapConfiguration}

BootstrapRecovery には、外部クラスター、ボリュームスナップショット、またはバックアップオブジェクトの 3 つの方法論を使用して既存のクラスターから復元するために必要な構成が含まれています。フルリカバリーとポイントインタイムリカバリーがサポートされています。この方法は、継続的リカバリーのクラスターレプリカクラスターを作成するために使用することもでき、次の場合にカスケードレプリケーションをサポートします `instances` >

1. クラスターがリカバリーを終了すると、スーパーユーザーのパスワードは、提供されたシークレットを介して変更されます。詳細については、ドキュメントの Bootstrap ページを参照してください。

Field	Description
backup _BackupSource_	リカバリ手順を開始する物理ベースバックアップを含むバックアップオブジェクト。 `source`および `volumeSnapshots`と相互排他的。
source _string_	バックアップを復元する外部クラスター。これは、バックアップが保存されるフォルダーの名前としても使用されるため、ソースクラスターの名前に設定する必要があります `backup`と相互排他的。
volumeSnapshots _DataSource_	リカバリ手順を開始する静的 PVC データソース。現在、既存の PVC グループをマッピングする `VolumeSnapshot`および `PersistentVolumeClaim`リソースをサポートしており、CloudNativePG と互換性があり、フェンスされた Postgres インスタンスのコールドバックアップコピーで取得されます将来的にオンラインバックアップが実装されるときに削除される制限。 `backup`と相互排他的。
recoveryTarget _RecoveryTarget_	デフォルトでは、復旧プロセスは、アーカイブ内の使用可能なすべての WAL ファイルを適用します完全復旧。ただし、一貫した状態に到達するとすぐにリカバリーを終了するか、PostgreSQL で予想されるように `RecoveryTarget`オブジェクトつまりタイムスタンプ、トランザクション ID、LSN、.. を指定することにより、ポイントインタイム PITR にリカバリーすることもできます。 .)。詳細 https://www.postgresql.org/docs/current/runtime-config-wal.html#RUNTIME-CONFIG-WAL-RECOVERY-TARGET
database _string_	アプリケーションが使用するデータベースの名前。デフォルト `app`
owner _string_	アプリケーションが使用するインスタンス内のデータベースの所有者の名前。 `database`キーの値のデフォルト。
secret _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	ユーザーデータベースの所有者の初期資格情報を含むシークレットの名前。空の場合、新しいシークレットは最初から作成されます

54.27 CatalogImage

出演作品

- ImageCatalogSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ImageCatalogSpec}

CatalogImage はイメージとメジャーバージョンを定義します

Field	Description
image **[Required]** _string_	画像参照
major **[Required]** _int_	イメージの PostgreSQL メジャーバージョン。カタログ内で一意である必要があります。

54.28 CertificatesConfiguration

出演作品

- CertificatesStatus {postgresql-cnpg-io-v1-CertificatesStatus}
- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

CertificatesConfiguration には、サーバー証明書を処理するために必要な構成が含まれています。

Field	Description
serverCASecret _string_	Server CA 証明書を含むシークレット。定義されていない場合、新しいシークレットは自己署名 CA で作成され、TLS 証明書 ServerTLSSecret の生成に使用されます。以下が含まれます `*ca.crt*` **サーバー証明書の検証に使用する** *CA*。**クライアント接続文字列で** `*sslrootcert*` **として使用されます。** *ca.key* サーバー SSL 証明書を生成するために使用されるキー。ServerTLSSecret が提供されている場合、これは省略できます。
serverTLSSecret _string_	サーバー TLS 証明書とキーを含む kubernetes.io/tls タイプのシークレット。クライアントが postgres に安全に接続できるように `ssl_cert_file`および `ssl_key_file`として設定されます。定義されていない場合、ServerCASecret は `ca.key`も提供する必要があり、提供された CA を使用して新しいシークレットが作成されます。
replicationTLSSecret _string_	`streaming_replica`ユーザーとして認証するためのクライアント証明書を含む kubernetes.io/tls タイプのシークレット。定義されていない場合、ClientCASecret は `ca.key`も提供する必要があり、新しいシークレットは、提供された CA を使用して作成されます。
clientCASecret _string_	クライアント CA 証明書を含むシークレット。定義しない場合、自己署名 CA で新しいシークレットが作成され、すべてのクライアント証明書を生成するために使用されます。以下が含まれます `*ca.crt*` **クライアントを検証するために使用する** *CA* **証明書。すべてのインスタンスの** `*ssl_ca_file*` **として使用されます。** *ca.key* クライアント証明書の生成に使用されるキー。ReplicationTLSSecret が提供されている場合、これは省略できます。
serverAltDNSNames _[]string_	必要に応じて、生成されたサーバー TLS 証明書に追加されるサーバー代替 DNS 名のリスト。

54.29 CertificatesStatus

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

CertificatesStatus には、構成証明書と関連する有効期限が含まれています。

Field	Description
CertificatesConfiguration _CertificatesConfiguration_	`CertificatesConfiguration`のメンバーはこのタイプに埋め込まれています。サーバー証明書を処理するために必要な構成、必要に応じてデフォルト値で初期化されます。
expirations _map[string]string_	すべての証明書の有効期限。

54.30 ClusterMonitoringTLSConfiguration

出演作品

- MonitoringConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-MonitoringConfiguration}

ClusterMonitoringTLSConfiguration は、クラスターのモニタリングの TLS 構成を含むタイプです

Field	Description
enabled _bool_	監視エンドポイントの TLS を有効にします。このオプションを変更すると、すべてのインスタンスのロールアウトが強制されます。

54.31 ClusterSpec

出演作品

- マルチアベイラビリティーゾーン *Kubernetes* クラスター

ClusterSpec は、クラスターの望ましい状態を定義します

Field	Description
description _string_	この PostgreSQL クラスターの説明
inheritedMetadata _EmbeddedObjectMetadata_	クラスターに関連するすべてのオブジェクトが継承するメタデータ
imageName _string_	コンテナイメージの名前、タグ *<image>:<tag>* と決定的で反復可能な展開用のダイジェスト *<image>:<tag>@sha256:<digestValue>* の両方をサポート

次のページに続く

表 27 – 前のページからの続き

Field	Description
imageCatalogRef _ImageCatalogRef_	イメージカタログ内で使用する PostgreSQL のメジャーバージョンを定義します
imagePullPolicy _core/v1.PullPolicy_	イメージプルポリシー。*Always*、`Never`または`IfNotPresent`のいずれか。定義されていない場合、デフォルトの`IfNotPresent`が使用されます。更新できません。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/containerimages#updating-images
schedulerName _string_	指定した場合、ポッドは指定された Kubernetes スケジューラーによってディスパッチされます。指定しない場合、ポッドはデフォルトのスケジューラーによってディスパッチされます。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/scheduling-eviction/kube-scheduler/
postgresUID _int64_	画像内の `postgres`ユーザーの UID、デフォルトは `26`
postgresGID _int64_	画像内の `postgres`ユーザーの GID、デフォルトは `26`
instances **[Required]** _int_	クラスターで必要なインスタンスの数
minSyncReplicas _int_	プライマリとの同期レプリケーションで必要なインスタンスの最小数。未定義または 0 では、使用可能なスタンバイがない場合に書き込みを完了できます。
maxSyncReplicas _int_	同期レプリケーションクォーラムのターゲット値。準備ができているスタンバイの数がこれよりも少ない場合、削減できます。未定義または 0 は、同期レプリケーションを無効にします。
postgresql _PostgresConfiguration_	PostgreSQL サーバーの構成
replicationSlots _ReplicationSlotsConfiguration_	レプリケーションスロット管理構成
bootstrap _BootstrapConfiguration_	このクラスターをブートストラップする手順
replica _ReplicaClusterConfiguration_	レプリカクラスター構成
superuserSecret _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	スーパーユーザーのパスワードを含むシークレット。定義されていない場合、ランダムに生成されたパスワードで新しいシークレットが作成されます
enableSuperuserAccess _bool_	このオプションが有効になっている場合、オペレーターは`SuperuserSecret`を使用して`postgres`ユーザーパスワードを更新しますシークレットが存在しない場合、オペレーターは自動的に作成します。このオプションが無効になっている場合、オペレーターは`SuperuserSecret`コンテンツを無視し、自動的に作成されたら削除し、`NULL`に設定して`postgres`ユーザーのパスワードを空白にします。デフォルトでは無効になっています。
certificates _CertificatesConfiguration_	CA および関連する証明書の構成
imagePullSecrets _[]github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	イメージのプルに使用されるプルシークレットのリスト

次のページに続く

表 27 – 前のページからの続き

Field	Description
storage _StorageConfiguration_	インスタンスのストレージの構成
serviceAccountTemplate _ServiceAccountTemplate_	サービスアカウントの世代を構成する
walStorage _StorageConfiguration_	PostgreSQL WAL のストレージの構成書き込み先行ログ
ephemeralVolumeSource _core/v1.EphemeralVolum	Ephemeral VolumeSource を使用すると、ユーザーはエフェメラルボリュームのソースを構成できます。
startDelay _int32_	PostgreSQL インスタンスが正常に起動するまでの秒単位の時間デフォルト 3600。起動プローブ障害しきい値は、次の式 ceiling(startDelay / 10) を使用してこの値から導き出されます。
stopDelay _int32_	PostgreSQL インスタンスが正常にシャットダウンできるまでの秒単位の時間デフォルト 1800
smartShutdownTimeout _int32_	Postgres のスマートシャットダウンが完了するために予約された時間枠を制御する秒単位の時間。オペレーターが Postgres の高速シャットダウンを要求するための十分な時間を確保してください *stopDelay- smartShutdownTimeout* 。
switchoverDelay _int32_	スイッチオーバー中にプライマリ PostgreSQL インスタンスが正常にシャットダウンできる秒単位の時間。デフォルト値は 3600 秒 1 時間です。
failoverDelay _int32_	クラスター内のプライマリ PostgreSQL インスタンスが異常であることが検出された後、フェールオーバーをトリガーするまで待機する時間秒
livenessProbeTimeout _int32_	LivenessProbeTimeout は、PostgreSQL インスタンスが liveness プローブデフォルト 30 に正常に応答するまでに許可される時間秒単位です。 Liveness プローブの障害しきい値は、次の式を使用してこの値から導き出されます。ceiling(livenessProbe / 10)
affinity _AffinityConfiguration_	ポッドのアフィニティ/アンチアフィニティルール
topologySpreadConstraints _[]core/v1.TopologySprea	TopologySpreadConstraints は、指定されたトポロジ間で一致するポッドを分散する方法を指定します。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/scheduling-eviction/topology-spread-constraints/
resources _core/v1.ResourceRequire	生成されたすべてのポッドのリソース要件。詳細については、 https://kubernetes.io/docs/concepts/configuration/manage-resources-containers/を参照してください。
ephemeralVolumesSizeLimit _EphemeralVolumesSizeLimitConfiguration_	Ephemeral VolumesSizeLimit を使用すると、ユーザーは一時ボリュームの制限を設定できます
priorityClassName _string_	生成されたすべてのポッドで使用される優先度クラスの名前。指定された PriorityClass が存在しない場合、ポッドはスケジュールできません。詳細については、https://kubernetes.io/docs/concepts/scheduling-eviction/pod-priority-preemption/#priorityclass を参照してください。

次のページに続く

表 27 – 前のページからの続き

Field	Description
primaryUpdateStrategy _PrimaryUpdateStrategy_	すべてのレプリカが正常に更新された後、ローリング更新手順中にプライマリサーバーをアップグレードするために従う展開戦略。自動化することができます *unsupervised*-default または手動 `supervised`
primaryUpdateMethod _PrimaryUpdateMethod_	すべてのレプリカが正常に更新された後、ローリング更新手順中にプライマリサーバーをアップグレードするために従う方法。スイッチオーバー `switchover` またはインプレース `restart`-default を使用できます。
backup _BackupConfiguration_	バックアップに使用される構成
nodeMaintenanceWindow _NodeMaintenanceWindow_	Kubernetes ノードのメンテナンスウィンドウを定義する
monitoring _MonitoringConfiguration_	このクラスターの監視インフラストラクチャの構成
externalClusters _ExternalClusterList_	構成で使用される外部クラスターのリスト
logLevel _string_	インスタンスのログレベル、次の値のいずれか Error、Warning、info デフォルト、debug、trace
projectedVolumeTemplate _core/v1.ProjectedVolume	投影ボリュームを定義するために使用されるテンプレート。投影ボリュームは `/projected` ベースフォルダーの下にマウントされます
env _[]core/v1.EnvVar_	Env は、 Env 形式に従って、クラスター内に作成されたポッドに環境変数を渡します
envFrom _[]core/v1.EnvFromSource	EnvFrom は、 EnvFrom フォーマットに従って、環境変数ソースを Env が使用するポッドに渡します
managed _ManagedConfiguration_	インスタンスマネージャーによって管理される PostgreSQL の部分で使用される構成
seccompProfile _core/v1.SeccompProfile_	すべてのポッドとコンテナに適用される Seccomp プロファイル。デフォルト `RuntimeDefault`
tablespaces _[]TablespaceConfiguration_	テーブルスペース構成
enablePDB _bool_	クラスター内の `PodDisruptionBudget` リソースを管理します。 `true` デフォルト設定として構成されている場合、ポッド中断バジェットは、プライマリノードが終了されないように安全に保護されます。逆に、`false` に設定すると、`PodDisruptionBudget` リソースが存在せず、PostgreSQL クラスターをホストするすべてのノードのシャットダウンが許可されます。この後者の構成は、開発/ステージングの目的で使用される PostgreSQL クラスターにお勧めします。
plugins _PluginConfigurationList_	プラグイン構成。対応する構成でロードされるプラグインを含む
probes _ProbesConfiguration_	PostgreSQL ポッドに挿入されるプローブの構成。

54.32 ClusterStatus

出演作品

- マルチアベイラビリティーゾーン *Kubernetes* クラスター

ClusterStatus は、クラスターの観察された状態を定義します

Field	Description
instances _int_	クラスター内で検出された PVC グループの合計数。既存のインスタンスポッドの数とは異なる場合があります。
readyInstances _int_	クラスター内の準備ができているインスタンスの合計数。これは、準備ができているインスタンスポッドの数と同じです。
instancesStatus _map[PodStatus][]string_	InstancesStatus は、インスタンスがどのステータスを示します
instancesReportedState _map[PodName]InstanceR	最後の調整ループ中に報告されたインスタンスの状態
managedRolesStatus _ManagedRoles_	ManchedRolesStatus は、クラスター内の管理対象ロールの状態を報告します
tablespacesStatus _[]TablespaceState_	TablespacesStatus は、クラスター内の宣言的表領域の状態をレポートします
timelineID _int_	Postgres クラスターのタイムライン
topology _Topology_	インスタンスのトポロジ。
latestGeneratedNode _int_	最後に生成されたノードの ID ノード名の衝突を回避するために使用されます
currentPrimary _string_	現在のプライマリインスタンス
targetPrimary _string_	ターゲットプライマリインスタンス、これは、スイッチオーバーまたはフェイルオーバー中の以前のインスタンスとは異なります。
lastPromotionToken _string_	LastPromotionToken は、レプリカクラスターをプロモートするために使用された最後の検証されたプロモーショントークンです
pvcCount _int32_	このクラスターによって作成された PVC の数
jobCount _int32_	このクラスターによって作成されたジョブの数
danglingPVC _[]string_	このクラスターによって作成され、ポッドに接続されていないまだ使用可能なすべての PVC のリスト
resizingPVC _[]string_	ResizingPVC 条件を持つすべての PVC のリスト。
initializingPVC _[]string_	このクラスターによって初期化されているすべての PVC のリスト
healthyPVC _[]string_	ハングリングも初期化もしていないすべての PVC のリスト
unusablePVC _[]string_	別の PVC が欠落しているため使用できないすべての PVC のリスト
writeService _string_	現在の書き込みポッド
readService _string_	読み取りポッドの現在のリスト
phase _string_	クラスターの現在のフェーズ
phaseReason _string_	現在のフェーズの理由
secretsResourceVersion _SecretsResourceVersion_	オペレーターによって管理されているシークレットのリソースバージョンのリスト。ここでのすべての変更は、インスタンスマネージャーの利益のために行われ、シークレットデータが更新されます

次のページに続く

表 28 – 前のページからの続き

Field	Description
configMapResourceVersion _ConfigMapResourceVersion_	オペレーターによって管理される、構成マップのリソースバージョンのリスト。ここでのすべての変更は、インスタンスマネージャーの利益のために行われ、構成マップデータが更新されます
certificates _CertificatesStatus_	CA および関連する証明書の構成。デフォルトで初期化されます。
firstRecoverabilityPoint _string_	最初の復旧可能ポイント。RFC3339 形式の日付として保存されます。このフィールドは、FirstRecoverabilityPointByMethod の内容から計算されます
firstRecoverabilityPointByMethod _map[BackupMethod]meta	バックアップ方法タイプごとに、RFC3339 形式の日付として保存される最初の復旧可能ポイント
lastSuccessfulBackup _string_	最後に成功したバックアップ、RFC3339 形式の日付として保存されますこのフィールドは、LastSuccessfulBackupByMethod の内容から計算されます
lastSuccessfulBackupByMethod _map[BackupMethod]meta	最後に成功したバックアップ、バックアップ方法タイプごとに RFC3339 形式で日付として保存
lastFailedBackup _string_	RFC3339 形式の日付として保存
cloudNativePGCommitHash _string_	このオペレーターが実行しているコミットハッシュ番号
currentPrimaryTimestamp _string_	最後にプライマリへの実際の昇格が発生したタイムスタンプ
currentPrimaryFailingSinceTimestamp _string_	プライマリが異常であることが検出されたときのタイムスタンプ このフィールドは、`.spec.failoverDelay`が設定されたとき、またはオンラインアップグレード中に報告されます
targetPrimaryTimestamp _string_	新しいプライマリの最後の要求が発生したタイムスタンプ
poolerIntegrations _PoolerIntegrations_	クラスターを参照するプーラーに必要な統合
cloudNativePGOperatorHash _string_	オペレーターのバイナリのハッシュ
availableArchitectures _[]AvailableArchitecture_	AvailableArchitectures は、クラスターの使用可能なアーキテクチャをレポートします
conditions _[]meta/v1.Condition_	クラスターオブジェクトの条件
instanceNames _[]string_	クラスター内のインスタンス名のリスト
onlineUpdateEnabled _bool_	OnlineUpdateEnabled は、クラスター内でオンラインアップグレードが有効になっているかどうかを示します
azurePVCUpdateEnabled _bool_	AzurePVCUpdateEnabled は、このクラスターで PVC オンラインアップグレードが有効になっているかどうかを示します
image _string_	イメージには、ポッドが使用するイメージ名が含まれています

次のページに続く

表 28 – 前のページからの続き

Field	Description
pluginStatus _[]PluginStatus_	PluginStatus は、ロードされたプラグインのステータスです
switchReplicaClusterStatus _SwitchReplicaClusterStatus_	SwitchReplicaClusterStatus は、レプリカクラスターへのスイッチのステータスです
demotionToken _string_	DemotionToken は、データベースシステム識別子、最新のチェックポイントの TimeLineID、最新のチェックポイントの REDO 場所、最新のチェックポイントの REDO WAL ファイル、最新のチェックポイントの時間などの pg_controldata からの情報を含む JSON トークン

54.33 ConfigMapResourceVersion

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

ConfigMapResourceVersion は、オペレーターが管理するシークレットのリソースバージョンです

Field	Description
metrics _map[string]string_	メトリックを渡すために使用されるすべての構成マップのバージョンを含むマップ。マップキーは構成マップ名であり、マップ値はバージョンです

54.34 DataDurabilityLevel

`string` のエイリアス

出演作品

- SynchronousReplicaConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-SynchronousReplicaConfiguration}

DataDurabilityLevel は、クラスターインスタンスが使用できないときに同期レプリケーションをどれだけ厳密に適用するかを指定します。オプションは `required` または `preferred` です。

54.35 DataSource

出演作品

- BootstrapRecovery {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapRecovery}

データソースには、既存のストレージから PostgreSQL クラスターをブートストラップするために必要な構成が含まれています

Field	Description
storage ** Required]** [_core/v1.TypedLocalObje	インスタンスのストレージの構成
walStorage _core/v1.TypedLocalObjec	PostgreSQL WAL のストレージの構成書き込み先行ログ
tablespaceStorage _map[string]core/v1.Typed	PostgreSQL テーブルスペースのストレージの構成

54.36 DatabaseReclaimPolicy

`string` のエイリアス

出演作品

- DatabaseSpec {postgresql-cnpg-io-v1-DatabaseSpec}

DatabaseReclaimPolicy は、データベースのサポート終了のメンテナンスのポリシーを説明します。

54.37 DatabaseRoleRef

出演作品

- TablespaceConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-TablespaceConfiguration}

DatabaseRoleRef は、PostgreSQL 内で使用可能なロールの参照です

Field	Description
name _string_	説明はありません。

54.38 DatabaseSpec

出演作品

- アプリケーションデータベースの構成

DatabaseSpec は、Postgresql データベースの仕様であり、PostgreSQL の `CREATE DATABASE`、`ALTER DATABASE`、および `DROP DATABASE` SQL コマンドを中心に構築されています。

Field	Description
cluster ** Required]** [_core/v1.LocalObjectRefe	データベースをホストする PostgreSQL クラスターの名前。
ensure _EnsureOption_	PostgreSQL データベースが`present`または`absent`であることを確認します。デフォルトは「present」です。
name **[Required]** _string_	PostgreSQL 内に作成するデータベースの名前。この設定は変更できません。
owner **[Required]** _string_	`CREATE DATABASE`の `OWNER`パラメーターにマッピングされます。`ALTER DATABASE`の `OWNER TO`コマンドにマッピングされます。 PostgreSQL 内のデータベースを所有するユーザーのロール名。
template _string_	`CREATE DATABASE`の `TEMPLATE`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。このデータベースを作成するテンプレートの名前。
encoding _string_	`CREATE DATABASE`の `ENCODING`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。データベースで使用する文字セットエンコーディング。
locale _string_	`CREATE DATABASE`の `LOCALE`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。新しいデータベースにデフォルトの照合順序と文字分類を設定します。
localeProvider _string_	`CREATE DATABASE`の `LOCALE_PROVIDER`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。このオプションは、新しいクラスターで作成されるデータベースのロケールプロバイダーを設定します。 PostgreSQL 16 から利用できます。
localeCollate _string_	`CREATE DATABASE`の `LC_COLLATE`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。
localeCType _string_	`CREATE DATABASE`の `LC_CTYPE`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。
icuLocale _string_	`CREATE DATABASE`の `ICU_LOCALE`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。 ICU プロバイダーを使用する場合に、ICU ロケールを指定します。このオプションでは、 `localeProvider`を`icu`に設定する必要があります。 PostgreSQL 15 から利用できます。
icuRules _string_	`CREATE DATABASE`の `ICU_RULES`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。追加の照合ルールを指定して、デフォルトの照合順序の動作をカスタマイズします。このオプションでは、 `localeProvider`を`icu`に設定する必要があります。 PostgreSQL 16 から利用できます。
builtinLocale _string_	`CREATE DATABASE`の `BUILTIN_LOCALE`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。ビルトインプロバイダーを使用する場合にロケール名を指定します。このオプションでは、`localeProvider`を`builtin`に設定する必要があります。 PostgreSQL 17 から利用できます。
collationVersion _string_	`CREATE DATABASE`の `COLLATION_VERSION`パラメーターにマッピングされます。この設定は変更できません。
isTemplate _bool_	`CREATE DATABASE`および `ALTER DATABASE`の `IS_TEMPLATE`パラメーターにマッピングされます。 true の場合、このデータベースはテンプレートとみなされ、 `CREATEDB`権限を持つすべてのユーザーがクローンを作成できます。

次のページに続く

表 32 – 前のページからの続き

Field	Description
allowConnections _bool_	`CREATE DATABASE`お よ び `ALTER DATABASE`の `ALLOW_CONNECTIONS`パラメーターにマッピングされます。 false の場合、誰もこのデータベースに接続できません。
connectionLimit _int_	`CREATE DATABASE`および `ALTER DATABASE`の `CONNECTION LIMIT`句にマップします。このデータベースへの同時接続の数。 -1 デフォルトは制限なしを意味します。
tablespace _string_	`CREATE DATABASE`の `TABLESPACE`パラメーターにマッピングされます。 `ALTER DATABASE`の `SET TABLESPACE`コマンドにマッピングされます。新しいデータベースに関連付けられるテーブルスペース PostgreSQL の名前。このテーブルスペースは、このデータベースで作成されるオブジェクトに使用されるデフォルトのテーブルスペースになります。
databaseReclaimPolicy _DatabaseReclaimPolicy_	このデータベースのサポートが終了したメンテナンスのポリシー。

54.39 DatabaseStatus

出演作品

- アプリケーションデータベースの構成

DatabaseStatus は、データベースの観察された状態を定義します

Field	Description
observedGeneration _int64_	同期された最新の目的の状態を表すシーケンス番号
applied _bool_	データベースが正しくリコンサイルされた場合、Applied は true です
message _string_	Message はリコンシリエーション出力メッセージです

54.40 EmbeddedObjectMetadata

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

EmbeddedObjectMetadata には、クラスターに関連するすべてのリソースによって継承されるメタデータが含まれています

Field	Description
labels _map[string]string_	説明はありません。
annotations _map[string]string_	説明はありません。

54.41 EnsureOption

`string` のエイリアス

出演作品

- DatabaseSpec {postgresql-cnpg-io-v1-DatabaseSpec}
- RoleConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-RoleConfiguration}

EnsureOption は、PostgreSQL インスタンスにロールの存在または不存在を強制するかどうかを表します

54.42 Ephemeral VolumesSizeLimitConfiguration {#postgresql-cnpg-io-v1-Ephemeral VolumesSizeLimitConfiguration}

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

Ephemeral VolumesSizeLimitConfiguration には、エフェメラルストレージの構成が含まれます

Field	Description
shm _k8s.io/apimachinery/pkg/	Shm は、共有メモリボリュームのサイズ制限です
temporaryData _k8s.io/apimachinery/pkg/	TemporaryData は、一時データボリュームのサイズ制限です

54.43 外部クラスターリスト

(`[]github.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/api/v1.ExternalCluster` のエイリアス)

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

外部クラスターリストは、外部クラスターのリストです

54.44 ImageCatalogRef

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

ImageCatalogRef は、ImageCatalog 内のメジャーバージョンへの参照を定義します

Field	Description
TypedLocalObjectReference _core/v1.TypedLocalObjec	`TypedLocalObjectReference`のメンバーはこのタイプに埋め込まれます。説明はありません。
major **[Required]** _int_	ImageCatalog から使用する PostgreSQL のメジャーバージョン

54.45 ImageCatalogSpec

出演作品

- ClusterImageCatalog {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterImageCatalog}
- ClusterImageCatalog {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterImageCatalog}

ImageCatalogSpec は、目的のイメージカタログを定義します

Field	Description
images ** Required]** [_[]CatalogImage_	カタログで使用可能なカタログ画像のリスト

54.46 Import

出演作品

- BootstrapInitDB {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapInitDB}

インポートには、外部クラスターの論理スナップショットからデータベースを初期化する構成が含まれています

Field	Description
source ** Required]** [_ImportSource_	輸入元
type ** Required]** [_SnapshotType_	インポートタイプ。`microservice`または`monolith`です。

次のページに続く

表 38 – 前のページからの続き

Field	Description
databases **[Required]** _[]string_	インポートするデータベース
roles _[]string_	インポートするロール
postImportApplicationSQL _[]string_	インポートされた直後にアプリケーションデータベースでスーパーユーザーとして実行される SQL クエリーのリスト。細心の注意を払って使用されますデフォルトでは空。マイクロサービスタイプでのみ使用できます。
schemaOnly _bool_	true に設定されている場合、*pg_restore* `の `*pre-data* `および `*post-data* `セクションのみが呼び出され、データのインポートが回避されます。デフォルト *false*
pgDumpExtraOptions _[]string_	`pg_dump`コマンドに渡すカスタムオプションのリスト。重要 オペレーターはコンテンツを検証していないため、これらのオプションは自分自身の責任で注意して使用します。特定のオプションは、オペレーターの意図した機能またはデザインと競合する場合があることに注意してください。
pgRestoreExtraOptions _[]string_	`pg_restore`コマンドに渡すカスタムオプションのリスト。重要 オペレーターはコンテンツを検証していないため、これらのオプションは自分自身の責任で注意して使用します。特定のオプションは、オペレーターの意図した機能またはデザインと競合する場合があることに注意してください。

54.47 ImportSource

出演作品

- Import {postgresql-cnpg-io-v1-Import}

ImportSource は、論理スナップショットのソースを説明します

Field	Description
externalCluster **[Required]** _string_	インポートに使用される外部クラスターの名前

54.48 インスタンス ID

出演作品

- BackupStatus {postgresql-cnpg-io-v1-BackupStatus}

InstanceID には、インスタンスを識別する情報が含まれます

Field	Description
podName _string_	ポッド名

次のページに続く

表 40 – 前のページからの続き

Field	Description
ContainerID _string_	コンテナ ID

54.49 InstanceReportedState

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

InstanceReportedState は、調整ループ中に最後に報告されたインスタンスの状態を説明します

Field	Description
isPrimary **[Required]** _bool_	インスタンスがプライマリかどうかを示します
timeLineID _int_	インスタンスがどの TimelineId にあるかを示します

54.50 LDAPBindAsAuth

出演作品

- LDAPConfig {postgresql-cnpg-io-v1-LDAPConfig}

LDAPBindAsAuth は、LDAP のバインド認証を使用するための必須フィールドを提供します

Field	Description
prefix _string_	バインド認証オプションのプレフィックス
suffix _string_	バインド認証オプションのサフィックス

54.51 LDAPBindSearchAuth

出演作品

- LDAPConfig {postgresql-cnpg-io-v1-LDAPConfig}

LDAPBindSearchAuth は、バインド+検索 LDAP 認証プロセスを使用するための必須フィールドを提供します

Field	Description
baseDN _string_	ユーザー検索を開始するルート DN

次のページに続く

表 43 – 前のページからの続き

Field	Description
bindDN _string_	ディレクトリにバインドするユーザーの DN
bindPassword _core/v1.SecretKeySelecto	ディレクトリにバインドするユーザーのパスワードを使用したシークレット
searchAttribute _string_	ユーザー名と一致する属性
searchFilter _string_	検索+バインド認証を実行するときに使用する検索フィルター

54.52 LDAPConfig

出演作品

- PostgresConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-PostgresConfiguration}

LDAPConfig には、LDAP 認証に必要なパラメーターが含まれています

Field	Description
server _string_	LDAP ホスト名または IP アドレス
port _int_	LDAP サーバーポート
scheme _LDAPScheme_	使用する LDAP スキーマ、使用可能なオプションは `ldap`および `ldaps`です
bindAsAuth _LDAP-BindAsAuth_	認証構成としてバインド
bindSearchAuth _LDAP-BindSearchAuth_	バインド+サーチ認証構成
tls _bool_	LDAP over TLS を有効にするには、 'true' に設定します。 'false' がデフォルトです

54.53 LDAPScheme

`string` のエイリアス

出演作品

- LDAPConfig {postgresql-cnpg-io-v1-LDAPConfig}

LDAPScheme は、 LDAP の使用可能なスキームを定義します

54.54 ManchedConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

ManageConfiguration は、インスタンスマネージャーによって管理される PostgreSQL の部分を表します

Field	Description
roles _[]RoleConfiguration_	`Cluster`によって管理されるデータベースロール
services _ManagedServices_	`Cluster`によって管理されるサービスロール

54.55 ManchedRoles

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

ManageRoles は、クラスターの管理対象ロールのステータスを追跡します

Field	Description
byStatus _map[RoleStatus][]string_	ByStatus は、各状態のロールのリストを提供します
cannotReconcile _map[string][]string_	CannotReconcile は、PostgreSQL でリコンサイルできないロールと、その原因の説明をリストします
passwordStatus _map[string]PasswordState_	PasswordStatus は、各管理対象ロールの最後のトランザクション ID とパスワードのシークレットバージョンを提供します

54.56 ManchedService

出演作品

- ManagedServices {postgresql-cnpg-io-v1-ManagedServices}

ManchedService は、クラスターによって管理される特定のサービスを表します。これには、サービスの種類とそれに関連するテンプレート仕様が含まれます。

Field	Description
selectorType ** Required]** [_ServiceSelectorType_	SelectorType は、サービスが持つセレクターのタイプを指定します。有効な値は「rw」、「r」、および「ro」で、読み取り書き込み、読み取り、および読み取り専用サービスを表します。
updateStrategy _ServiceUpdateStrategy_	UpdateStrategy は、サービスの違いを調整する方法を説明します
serviceTemplate ** Required]** [_ServiceTemplateSpec_	ServiceTemplate は、サービスのテンプレート仕様です。

54.57 ManagedServices

出演作品

- ManchedConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ManchedConfiguration}

ManagedServices は、クラスターによって管理されるサービスを表します。

Field	Description
disabledDefaultServices _[]ServiceSelectorType_	DisabledDefaultServices は、デフォルトで無効になっているサービスタイプのリストです。有効な値は「r」および「ro」で、読み取りおよび読み取り専用サービスを表します。
additional _[]ManagedService_	Additional は、ユーザーが指定した追加の管理サービスのリストです。

54.58 メタデータ

出演作品

- PodTemplateSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PodTemplateSpec}
- ServiceAccountTemplate {postgresql-cnpg-io-v1-ServiceAccountTemplate}
- ServiceTemplateSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ServiceTemplateSpec}

メタデータは metav1.ObjectMeta に似た構造ですが、controller-gen によって解析され、ユーザーに適切な CRD を作成できます。PodTemplateSpec のコメントには、コアデータ型を使用しない理由の説明があります。

Field	Description
name _string_	リソースの名前。特定のタイプでのみサポートされています

次のページに続く

表 49 – 前のページからの続き

Field	Description
labels _map[string]string_	オブジェクトを整理および分類および選択するために使用できる文字列キーと値のマップ。レプリケーションコントローラとサービスのセレクターと一致する場合があります。詳細 http://kubernetes.io/docs/user-guide/labels
annotations _map[string]string_	アノテーションは、リソースと共に保存される非構造化キー値マップであり、任意のメタデータを保存および取得する外部ツールによって設定される場合があります。これらは照会不可であり、オブジェクトを変更するときに保存する必要があります。詳細 http://kubernetes.io/docs/user-guide/annotations

54.59 MonitoringConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

MonitoringConfiguration は、特定のクラスターのすべての監視構成を含むタイプです

Field	Description
disableDefaultQueries _bool_	デフォルトのクエリーを挿入するかどうか。クラスターにデフォルトのクエリーを挿入したくない場合は、`true`に設定します。デフォルト false。
customQueriesConfigMap _[]github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Con	カスタムクエリを含む構成マップのリスト
customQueriesSecret _[]github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Secr	カスタムクエリーを含むシークレットのリスト
enablePodMonitor _bool_	`PodMonitor`を有効または無効にします
tls _ClusterMonitoringTLSConfiguration_	メトリックエンドポイントの TLS 通信を構成します。 tls.enabled オプションを変更すると、すべてのインスタンスのロールアウトが強制されます。
podMonitorMetricRelabelings *archive_timeout*	`PodMonitor`のメトリックの再ラベル付けのリスト。摂取する前にサンプルに適用されます。
podMonitorRelabelings *archive_timeout*	`PodMonitor`の再ラベル付けのリスト。スクレイピングの前にサンプルに適用されます。

54.60 NodeMaintenanceWindow

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

NodeMaintenanceWindow には、基になるノードのアップグレード中にオペレーターが使用する情報が含まれています。

このオプションは、選択したストレージがポッドをノード間で自由に移動できない場合にのみ役立ちます。

Field	Description
reusePVC _bool_	既存の PVC を再利用するノードが再び起動するまで待機するか、他の場所で再作成します- *instances* >1 の場合
inProgress _bool_	進行中のノードのメンテナンスアクティビティはありますか?

54.61 OnlineConfiguration

出演作品

- BackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-BackupSpec}
- ScheduledBackupSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackupSpec}
- VolumeSnapshotConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1- VolumeSnapshotConfiguration}

OnlineConfiguration には、オンラインボリュームスナップショットの構成パラメーターが含まれています

Field	Description
waitForArchive _bool_	false の場合、ファンクションは、バックアップが完了すると、WAL がアーカイブされるのを待たずに、すぐに返されます。この動作は、WAL アーカイブを個別に監視するバックアップソフトウェアでのみ役立ちます。そうしないと、バックアップの一貫性を保つために必要な WAL が欠落し、バックアップが役に立たなくなる可能性があります。デフォルトでは、またはこのパラメータが true の場合、アーカイブが有効になっているときに pg_backup_stop は WAL がアーカイブされるまで待機します。スタンバイでは、これは archive_mode = Always の場合にのみ待機することを意味します。プライマリの書き込みアクティビティが低い場合、プライマリで pg_switch_wal を実行して、即時セグメントスイッチをトリガーすると役立つ場合があります。
immediateCheckpoint _bool_	PostgreSQL サーバーの `checkpoint_completion_target`設定に従って、バックアップの初期チェックポイントの I/O ワークロードを制限するかどうかを制御します。 true に設定されている場合、即時チェックポイントが使用されます。つまり、PostgreSQL ができるだけ早くチェックポイントを完了します。デフォルトでは`false`。

54.62 PasswordState

出演作品

- ManchedRoles {postgresql-cnpg-io-v1-ManadedRoles}

PasswordState は、管理対象ロール構成のパスワードの状態を表します

Field	Description
transactionID _int64_	PostgreSQL のロール定義に影響を与える最後のトランザクション ID
resourceVersion _string_	パスワードシークレットのリソースバージョン

54.63 PgBouncerIntegrationStatus

出演作品

- PoolerIntegrations {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerIntegrations}

PgBouncerIntegrationStatus は、クラスターを参照する pgbouncer プーラーに必要な統合をカプセル化します

Field	Description
secrets _[]string_	説明はありません。

54.64 PgBouncerPoolMode

`string` のエイリアス

出演作品

- PgBouncerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerSpec}

PgBouncerPoolMode は PgBouncer のモードです

54.65 PgBouncerSecrets

出演作品

- PoolerSecrets {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSecrets}

PgBouncerSecrets には、pgbouncer が使用するシークレットのバージョンが含まれています

Field	Description
authQuery _SecretVersion_	認証クエリーのシークレットバージョン

54.66 PgBouncerSpec

出演作品

- PoolerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSpec}

PgBouncerSpec は、PgBouncer の構成方法を定義します

Field	Description
poolMode _PgBouncerPoolMode_	プールモード。デフォルト `session`
authQuerySecret _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	認証クエリーに使用する必要があるユーザーの資格情報。指定される場合、AuthQuery たとえば、"SELECT usename, passwd FROM pg_catalog.pg_shadow WHERE usename=$1" を指定する必要があり、自動 CNPG クラスター統合はトリガーされません。
authQuery _string_	特定のユーザーのパスワードのハッシュをダウンロードするために使用されるクエリー。デフォルト「SELECT usename, passwd FROM public.user_search($1)」。指定される場合、AuthQuerySecret も指定する必要があり、自動 CNPG クラスター統合はトリガーされません。
parameters _map[string]string_	PgBouncer に渡される追加パラメーター-構成可能なオプションのリストについては、CNPG ドキュメントを確認してください
pg_hba _[]string_	PostgreSQL ホストベースの認証ルール pg_hba.conf ファイルに追加される行
paused _bool_	`true` に設定すると、PgBouncer は PostgreSQL サーバーから切断し、最初にすべてのクエリが完了するのを待機し、この値が `false` デフォルトに設定されるまで、すべての新しいクライアント接続を一時停止します。内部的には、オペレーターは PgBouncer の `PAUSE` および `RESUME` コマンドを呼び出します。

54.67 PluginConfiguration

出演作品

PluginConfiguration は、このクラスターをリコンサイルするためにロードする必要があるプラグインを指定します

Field	Description
name **[Required]** _string_	Name はプラグイン名です
enabled _bool_	このプラグインを使用する場合、 Enabled は true
parameters _map[string]string_	Parameters はプラグインの構成です

54.68 PluginConfigurationList

(`[]github.com/cloudnative-pg/cloudnative-pg/api/v1.PluginConfiguration` のエイリアス)

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

PluginConfigurationList は、プラグインのセットとその構成パラメーターを表します

54.69 PluginStatus

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

PluginStatus は、ロードされたプラグインのステータスです

Field	Description
name **[Required]** _string_	Name はプラグインの名前です
version **[Required]** _string_	バージョンは、最新の調整ループによってロードされたプラグインのバージョンです
capabilities _[]string_	Capacity は、プラグインの機能のリストです。
operatorCapabilities _[]string_	OperatorCapabilities は、リコンサイラーに関するプラグインの機能のリストです。
walCapabilities _[]string_	WALCapabilities は、WAL 管理に関するプラグインの機能のリストです。
backupCapabilities _[]string_	BackupCapabilities は、バックアップ管理に関するプラグインの機能のリストです。
restoreJobHookCapabilities _[]string_	RestoreJobHookCapabilities は、RestoreJobHook 管理に関するプラグインの機能のリストです。
status _string_	ステータスには、 SetStatusInCluster インターフェイスを介してプラグインによって報告されたステータスが含まれます

54.70 PodTemplateSpec

出演作品

- PoolerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSpec}

PodTemplateSpec は、ユーザーが Pod 生成のテンプレートを設定できる構造です。

残念ながら、生成された CRD にはメタデータセクションのフィールドが含まれないため、corev1.PodTemplateSpec タイプは使用できません。

参考 https://github.com/kubernetes-sigs/controller-tools/issues/385 https://github.com/kubernetes-sigs/controller-tools/issues/448 https://github.com/prometheus- Operator/prometheus-operator/issues/3041

Field	Description
metadata _Metadata_	標準オブジェクトのメタデータ。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#metadata
spec _core/v1.PodSpec_	ポッドの目的の動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.71 PodTopologyLabels

(`map[string]string` のエイリアス)

出演作品

- PodTopologyLabels {postgresql-cnpg-io-v1-PodTopologyLabels}

PodTopologyLabels は、ポッドのトポロジを表します。map[labelName]labelValue

54.72 PoolerIntegrations

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

PoolerIntegrations は、クラスターを参照するプーラーに必要な統合をカプセル化します

Field	Description
pgBouncerIntegration _PgBouncerIntegrationStatus_	説明はありません。

54.73 PoolerMonitoringConfiguration

出演作品

- PoolerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSpec}

PoolerMonitoringConfiguration は、特定のプーラーのすべての監視構成を含むタイプです。

クラスターのモニタリング構成をミラーしますが、今のところカスタムクエリ部分はありません。

Field	Description
enablePodMonitor _bool_	`PodMonitor`を有効または無効にします
podMonitorMetricRelabelings *archive_timeout*	`PodMonitor`のメトリックの再ラベル付けのリスト。摂取する前にサンプルに適用されます。
podMonitorRelabelings *archive_timeout*	`PodMonitor`の再ラベル付けのリスト。スクレイピングの前にサンプルに適用されます。

54.74 PoolerSecrets

出演作品

- PoolerStatus {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerStatus}

PoolerSecrets には、使用されるすべてのシークレットのバージョンが含まれています

Field	Description
serverTLS _SecretVersion_	サーバー TLS シークレットバージョン
serverCA _SecretVersion_	サーバー CA シークレットバージョン
clientCA _SecretVersion_	クライアント CA シークレットバージョン
pgBouncerSecrets _PgBouncerSecrets_	PgBouncer が使用するシークレットのバージョン

54.75 PoolerSpec

出演作品

- プーラー {postgresql-cnpg-io-v1-Pooler}

PoolerSpec は、プーラーの目的の状態を定義します

Field	Description
cluster ** Required]** [_github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	これは、プーラーが動作するクラスター参照です。プール名は、同じ名前空間内のクラスター名と決して一致しないはずです。
type _PoolerType_	トラフィックの転送先のサービスの種類。デフォルト `rw`
instances _int32_	必要なレプリカの数。デフォルト 1
template _PodTemplateSpec_	作成する Pod のテンプレート
pgbouncer ** Required]** [_PgBouncerSpec_	PgBouncer 構成
deploymentStrategy _apps/v1.DeploymentStrat	pgbouncer で既存のポッドを新しいポッドに置き換えるために使用する展開戦略
monitoring _PoolerMonitoringConfiguration_	このプーラーの監視インフラストラクチャの構成。
serviceTemplate _ServiceTemplateSpec_	作成するサービスのテンプレート

54.76 PoolerStatus

出演作品

- プーラー {postgresql-cnpg-io-v1-Pooler}

PoolerStatus は、プーラーの観察された状態を定義します

Field	Description
secrets _PoolerSecrets_	config オブジェクトのリソースバージョン
instances _int32_	スケジュールしようとしているポッドの数

54.77 PoolerType

string のエイリアス

出演作品

- PoolerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSpec}

PoolerType は接続プールのタイプ、つまりターゲットとしているサービスを意味します。使用できる値は rw および ro です。

54.78 PostgresConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

PostgresConfiguration は PostgreSQL 構成を定義します

Field	Description
parameters _map[string]string_	PostgreSQL 構成オプション postgresql.conf
synchronous _SynchronousReplicaConfiguration_	PostgreSQL 同期レプリケーション機能の構成
pg_hba _[]string_	PostgreSQL ホストベースの認証ルール pg_hba.conf ファイルに追加される行
pg_ident _[]string_	PostgreSQL のユーザー名マップルール pg_ident.conf ファイルに追加される行
syncReplicaElectionConstraint _SyncReplicaElectionConstraints_	同期レプリカが満たす要件。これは、 "synchronous_standby_names"パラメーターの設定方法に影響します。
shared_preload_libraries _[]string_	デフォルトのライブラリに追加する共有プリロードライブラリのリスト
ldap _LDAPConfig_	LDAP 構成を指定するオプション
promotionTimeout _int32_	インスタンスをプライマリに昇格するときに待機する最大秒数を指定します。デフォルト値は 40000000 で、秒単位で 1 年より大きく、無限タイムアウトをシミュレートするのに十分な大きさです
enableAlterSystem _bool_	このパラメーターが true の場合、ユーザーはこの CloudNativePG クラスターで`ALTER SYSTEM`を呼び出すことができます。これは、デバッグとトラブルシューティングの場合にのみ使用してください。デフォルト false。

54.79 PrimaryUpdateMethod

string のエイリアス

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

PrimaryUpdateMethod には、ローリング更新の一部としてクラスターのプライマリサーバーをアップグレードするときに使用するメソッドが含まれています

54.80 PrimaryUpdateStrategy

string のエイリアス

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

PrimaryUpdateStrategy には、ローリング更新の一部としてクラスターのプライマリサーバーをアップグレードするときに従うべき戦略が含まれています

54.81 Probe

出演作品

- ProbesConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ProbesConfiguration}

プローブは、コンテナに対して実行されるヘルスチェックを記述して、コンテナが生きているか、トラフィックを受信する準備ができているかを判断します。

Field	Description
initialDelaySeconds _int32_	コンテナが起動してから liveness プローブが開始されるまでの秒数。詳細 https://kubernetes.io/docs/concepts/workloads/pods/pod-lifecycle#container-probes
timeoutSeconds _int32_	プローブがタイムアウトになるまでの秒数。デフォルト 1 秒。最小値は 1 です。詳細情報 https://kubernetes.io/docs/concepts/workloads/pods/pod-lifecycle#container-probes
periodSeconds _int32_	プローブを実行する頻度秒単位。デフォルト 10 秒。最小値は 1 です。
successThreshold _int32_	失敗した後に成功したとみなされるプローブの最小連続成功数。デフォルト 1。活性およびスタートアップの場合は 1 である必要があります。最小値は 1 です。
failureThreshold _int32_	成功した後に失敗したと考えられるプローブの最小連続失敗数。デフォルト 3。最小値は 1 です。

次のページに続く

表 66 – 前のページからの続き

Field	Description
terminationGracePeriodSeconds _int64_	プローブが失敗したときにポッドが正常に終了する必要がある秒単位のオプションの期間。猶予期間は、ポッドで実行されているプロセスに終了信号が送信された後の秒単位の期間と、プロセスが kill 信号で強制的に停止される時間です。この値を、プロセスの予想されるクリーンアップ時間よりも長く設定します。この値が nil の場合、ポッドの terminationGracePeriodSeconds が使用されます。それ以外の場合、この値はポッド仕様が提供する値をオーバーライドします。値は負でない整数である必要があります。値 0 は、kill 信号を介してすぐに停止することを示しますシャットダウンの機会なし。これはベータフィールドであり、ProbeTerminationGracePeriod 機能ゲートを有効にする必要があります。最小値は 1 です。未設定の場合、spec.terminationGracePeriodSeconds が使用されます。

54.82 ProbesConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

ProbesConfiguration は、PostgreSQL ポッドに注入されるプローブの構成を表します

Field	Description
startup ** Required]** [_Probe_	起動プローブ構成
liveness ** Required]** [_Probe_	liveness プローブ構成
readiness ** Required]** [_Probe_	Readiness Probe 構成

54.83 PublicationReclaimPolicy

`string` のエイリアス

出演作品

- PublicationSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PublicationSpec}

PublicationReclaimPolicy は、パブリケーションのサポートが終了したメンテナンスのポリシーを定義します。

54.84 PublicationSpec

出演作品

- Publication {postgresql-cnpg-io-v1-Publication}

PublicationSpec は、パブリケーションの望ましい状態を定義します

Field	Description
cluster ** Required]** [_core/v1.LocalObjectRefe	「パブリッシャー」を識別する PostgreSQL クラスターの名前
name **[Required]** _string_	PostgreSQL 内のパブリケーションの名前
dbname **[Required]** _string_	パブリケーションが「パブリッシャー」クラスターにインストールされるデータベースの名前
parameters _map[string]string_	PostgreSQL で想定される `WITH` 句のパブリケーションパラメーターの一部 `CREATE PUBLICATION` コマンド
target ** Required]** [_PublicationTarget_	PostgreSQL `CREATE PUBLICATION` コマンドで予想されるパブリケーションのターゲット
publicationReclaimPolicy _PublicationReclaimPolicy_	この出版物のサポートが終了したメンテナンスのポリシー

54.85 PublicationStatus

出演作品

- Publication {postgresql-cnpg-io-v1-Publication}

PublicationStatus は、パブリケーションの観察された状態を定義します

Field	Description
observedGeneration _int64_	同期された最新の目的の状態を表すシーケンス番号
applied _bool_	パブリケーションが正しくリコンサイルされた場合、Apply は true です
message _string_	Message はリコンシリエーション出力メッセージです

54.86 PublicationTarget

出演作品

- PublicationSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PublicationSpec}

PublicationTarget は、このパブリケーションが公開するものです

Field	Description
allTables _bool_	データベース内のすべてのテーブル、今後作成されるテーブルを含む変更をレプリケートするパブリケーションとしてマークします。 PostgreSQL の `FOR ALL TABLES`に対応します。
objects _[]PublicationTargetObject_	次のスキーマオブジェクトのみ

54.87 PublicationTargetObject

出演作品

- PublicationTarget {postgresql-cnpg-io-v1-PublicationTarget}

PublicationTargetObject は、パブリッシュするオブジェクトです

Field	Description
tablesInSchema _string_	指定されたスキーマのリスト内のすべてのテーブル、今後作成されるテーブルを含むすべてのテーブルの変更をレプリケートするパブリケーションとしてマークします。 PostgreSQL の `FOR TABLES IN SCHEMA`に対応します。
table _PublicationTargetTable_	パブリケーションに追加するテーブルのリストを指定します。 PostgreSQL の `FOR TABLE`に対応します。

54.88 PublicationTargetTable

出演作品

- PublicationTargetObject {postgresql-cnpg-io-v1-PublicationTargetObject}

PublicationTargetTable は、パブリッシュするテーブルです

Field	Description
only _bool_	テーブルのみに制限するか、そのすべての子孫を含めるか
name **[Required]** _string_	テーブル名
schema _string_	スキーマ名
columns _[]string_	公開する列

54.89 RecoveryTarget

出演作品

- BootstrapRecovery {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapRecovery}

RecoveryTarget を使用すると、復旧プロセスが停止する瞬間を構成できます。TargetTLI を除くすべてのターゲットオプションは相互排他的です。

Field	Description
backupID _string_	リカバリプロセスを開始するバックアップの ID。空の場合デフォルト 、オペレーターは指定されている場合、targetTime または targetLSN に基づいて、バックアップを自動的に検出します。それ以外の場合は、使用可能な最新のバックアップを時系列で使用します。
targetTLI _string_	ターゲットタイムライン「latest」または正の整数
targetXID _string_	ターゲットトランザクション ID
targetName _string_	ターゲット名`pg_create_restore_point`で事前に作成します
targetLSN _string_	ターゲット LSN ログシーケンス番号
targetTime _string_	RFC3339 標準のタイムスタンプとしてのターゲット時間
targetImmediate _bool_	一貫した状態に到達すると、リカバリーを終了します
exclusive _bool_	ターゲットを排他的に設定します。省略した場合、デフォルトの false になるため、Postgres では`recovery_target_inclusive`が true になります

54.90 ReplicaClusterConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

ReplicaClusterConfiguration は、レプリカクラスターの構成をカプセル化します

Field	Description
self _string_	このクラスターの名前を自己定義します。`primary`と比較して、これがプライマリクラスターであるかレプリカクラスターであるかを判断するために使用されます
primary _string_	Primary は、externalClusters で指定されたトポロジに基づいて、分散 PostgreSQL クラスターのプライマリとして定義されるクラスターを定義します
source **[Required]** _string_	レプリケーション元の外部クラスターの名前
enabled _bool_	レプリカモードが有効になっている場合、このクラスターは既存のクラスターのレプリカになります。レプリカクラスターは、リカバリオブジェクトストアから、または pg_basebackup を介したストリーミングを介して作成できます。詳細については、ドキュメントのレプリカクラスターページを参照してください。
promotionToken _string_	プロモーション要件が満たされているかどうかを確認するために使用される外部クラスターによって生成された降格トークン。
minApplyDelay _meta/v1.Duration_	レプリカモードが有効になっている場合、このパラメーターを使用すると、システム時間が少なくとも構成された時間コミット時間を経過している場合にのみトランザクションを再生できます。これにより、データ損失エラーを修正する機会が提供されます。このパラメーターが設定されている場合、プロモーショントークンは使用できないことに注意してください。

54.91 ReplicationSlotsConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

ReplicationSlotsConfiguration は、レプリケーションスロットの構成をカプセル化します

Field	Description
highAvailability _ReplicationSlotsHAConfiguration_	高可用性構成のレプリケーションスロット
updateInterval _int_	スタンバイは、`updateInterval`秒ごとにローカルレプリケーションスロットのステータスを更新しますデフォルト 30。
synchronizeReplicas _SynchronizeReplicasConfiguration_	ユーザー定義の物理レプリケーションスロットの同期を構成します

54.92 ReplicationSlotsHAConfiguration

出演作品

- ReplicationSlotsConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ReplicationSlotsConfiguration}

ReplicationSlotsHAConfiguration は、オペレーターが自動的に管理するレプリケーションスロットの構成をカプセル化して、高可用性 HA を目的としてスタンバイインスタンスとのストリーミングレプリケーション接続を制御します。レプリケーションスロットは、PostgreSQL の機能であり、ストリーミングクライアントこの特定の場合、HA クラスターの一部であるレプリカが切断されたときに、PostgreSQL が WAL ファイルをプライマリに自動的に保持するようにします。

Field	Description
enabled _bool_	有効になっているデフォルト場合、オペレーターはプライマリインスタンスのレプリケーションスロットを自動的に管理し、HA クラスターの一部であるすべてのスタンバイインスタンスとのストリーミングレプリケーション接続でそれらを使用します。無効にすると、オペレーターはレプリカとのストリーミング接続でレプリケーションスロットを利用しません。この機能は、指定されたプライマリからそのカスケードレプリカまで、レプリカクラスター内のレプリケーションスロットも制御します。
slotPrefix _string_	HA のオペレーターが管理するレプリケーションスロットのプレフィックス。小文字、数字、アンダースコア文字のみを含めることができます。これは、作成時にのみ設定できます。デフォルトでは`_cnpg_`に設定されます。

54.93 RoleConfiguration

出演作品

- ManchedConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ManchedConfiguration}

RoleConfiguration は、追加フィールド Ensure を備えた PostgreSQL ロールの Kubernetes での表現形式であり、データベース内のロールの存在または不在を保証するかどうかを指定します

CREATE ROLE コマンドのデフォルトが適用されます 参考 https://www.postgresql.org/docs/current/sql-createrole.html

Field	Description
name **[Required]** _string_	ロールの名前
comment _string_	ロールの説明

次のページに続く

表 77 – 前のページからの続き

Field	Description
ensure _EnsureOption_	ロールが `present`または `absent`であることを確認します-デフォルトは「present」です
passwordSecret _github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	ロールのパスワードを含むシークレット存在する場合 null の場合、パスワードは DisablePassword が設定されていない限り無視されます
connectionLimit _int64_	ロールがログインできる場合、これはロールが確立できる同時接続の数を指定します。`-1`デフォルトは制限なしを意味します。
validUntil _meta/v1.Time_	ロールのパスワードが有効でなくなる日時。省略すると、パスワードの有効期限はありませんデフォルト。
inRoles _[]string_	このロールが新しいメンバーとしてすぐに追加される 1 つ以上の既存のロールのリスト。デフォルトは空。
inherit _bool_	ロールが、そのメンバーであるロールの特権を「継承」するかどうか。デフォルトは`true`です。
disablePassword _bool_	DisablePassword は、Postgres でロールのパスワードを NULL に設定する必要があることを示します
superuser _bool_	ロールがデータベース内のすべてのアクセス制限をオーバーライドできる`superuser`であるかどうか。スーパーユーザーステータスは危険で、本当に必要な場合にのみ使用する必要があります。新しいスーパーユーザーを作成するには、自分自身がスーパーユーザーである必要があります。デフォルトは`false`です。
createdb _bool_	`true`に設定すると、定義されるロールは新しいデータベースを作成できます。`false`デフォルトを指定すると、ロールがデータベースを作成する機能が拒否されます。
createrole _bool_	ロールが他のロールのメンバーシップを作成、変更、ドロップ、コメント、セキュリティラベルの変更、および他のロールのメンバーシップを付与または取り消しできるかどうか。デフォルトは`false`です。
login _bool_	ロールにログインを許可するかどうか。`login`属性を持つロールはユーザーと考えられます。この属性のないロールは、データベース特権の管理に役立ちますが、通常の意味でのユーザーではありません。デフォルトは`false`です。
replication _bool_	ロールがレプリケーションロールであるかどうか。レプリケーションモード物理または論理レプリケーションでサーバーに接続し、レプリケーションスロットを作成またはドロップできるようにするには、ロールがこの属性を持つか、スーパーユーザーである必要があります。`replication`属性を持つロールは非常に高い特権ロールであり、レプリケーションに実際に使用されるロールでのみ使用する必要があります。デフォルトは`false`です。
bypassrls _bool_	ロールがすべての行レベルセキュリティ RLS ポリシーをバイパスするかどうか。デフォルトは`false`です。

54.94 SQLRefs

出演作品

- BootstrapInitDB {postgresql-cnpg-io-v1-BootstrapInitDB}

SQLRefs は、SQL ファイルを含む ConfigMap または Secret への参照を保持します。参照は特定の順序で処理されます。最初にすべてのシークレットが処理され、次にすべての ConfigMap が処理されます。各グループ内での処理順序は、それぞれの配列で指定されたシーケンスに従います。

Field	Description
secretRefs _[]github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Secr	SecretRefs は、シークレットへの参照のリストを保持します
configMapRefs _[]github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Con	ConfigMapRefs は、ConfigMaps への参照のリストを保持します

54.95 ScheduledBackupSpec

出演作品

- ScheduledBackup {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackup}

ScheduledBackupSpec は、 ScheduledBackup の目的の状態を定義します

Field	Description
suspend _bool_	このバックアップが一時停止されているかどうか
immediate _bool_	最初のバックアップを作成後にすぐに開始する必要があるかどうか
schedule **[Required]** _string_	スケジュールは、追加の秒指定子が含まれるため、Kubernetes の Cron ジョブで使用される形式に従いません。参照してください。 https://pkg.go.dev/github.com/robfig/cron#hdr-CRON_Expression_Format
cluster ** Required]** [_github.com/cloudnative-pg/machinery/pkg/api.Loc	バックアップするクラスター
backupOwnerReference _string_	作成したバックアップリソース内にどの ownerReference を配置するかを示します。 *none* **作成されたバックアップオブジェクトの所有者参照なしフィールドが導入される前と同じ動作** self スケジュールされたバックアップオブジェクトをバックアップの所有者として設定します * cluster クラスターをバックアップの所有者として設定します

次のページに続く

表 79 – 前のページからの続き

Field	Description
target _BackupTarget_	このバックアップを実行するインスタンスを決定するポリシー。空の場合、デフォルトの`cluster.spec.backup.target`になります。使用可能なオプションは、空の文字列、`primary`および`prefer-standby`です。 `primary`は常にプライマリインスタンスでバックアップを実行します。`prefer-standby`は、可能な場合は最も更新されたスタンバイでバックアップを実行します。
method _BackupMethod_	使用するバックアップ方法、可能なオプションは`barmanObjectStore`、*volumeSnapshot*`または`*plugin*`です。デフォルト`*barmanObjectStore*
pluginConfiguration _BackupPluginConfiguration_	このバックアップを管理するプラグインに渡される構成パラメーター
online _bool_	ボリュームスナップショットを使用したバックアップのデフォルトのタイプがオンライン/ホット *true*、default またはオフライン/コールド *false* かどうか クラスターフィールド '.spec.backup.volumeSnapshot.online' で指定されたデフォルト設定をオーバーライドします
onlineConfiguration _OnlineConfiguration_	ボリュームスナップショットを使用してオンライン/ホットバックアップを制御する構成パラメーター クラスターで指定されたデフォルト設定をオーバーライドします '.backup.volumeSnapshot.onlineConfiguration' スタンザ

54.96 ScheduledBackupStatus

出演作品

- ScheduledBackup {postgresql-cnpg-io-v1-ScheduledBackup}

ScheduledBackupStatus は、 ScheduledBackup の観察された状態を定義します

Field	Description
lastCheckTime _meta/v1.Time_	最新のスケジュール
lastScheduleTime _meta/v1.Time_	そのバックアップが最後に正常にスケジュールされたときの情報。
nextScheduleTime _meta/v1.Time_	次回バックアップを実行します

54.97 SecretVersion

出演作品

- PgBouncerSecrets {postgresql-cnpg-io-v1-PgBouncerSecrets}
- PoolerSecrets {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSecrets}

SecretVersion には、シークレット名とそのリソースバージョンが含まれます

Field	Description
name _string_	シークレットの名前
version _string_	シークレットのリソースバージョン

54.98 SecretsResourceVersion

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

SecretsResourceVersion は、オペレーターが管理するシークレットのリソースバージョンです。

Field	Description
superuserSecretVersion _string_	"postgres"ユーザーシークレットのリソースバージョン
replicationSecretVersion _string_	"streaming_replica"ユーザーシークレットのリソースバージョン
applicationSecretVersion _string_	"app"ユーザーシークレットのリソースバージョン
managedRoleSecretVersion _map[string]string_	管理対象ロールシークレットのリソースバージョン
caSecretVersion _string_	未使用。古いバージョンとの互換性のために保持されています。
clientCaSecretVersion _string_	PostgreSQL のリソースバージョンクライアントサイドの CA シークレットバージョン
serverCaSecretVersion _string_	PostgreSQL のリソースバージョンサーバーサイド CA シークレットバージョン
serverSecretVersion _string_	PostgreSQL のリソースバージョンサーバーサイドシークレットバージョン
barmanEndpointCA _string_	Barman エンドポイント CA のリソースバージョンが提供されている場合
externalClusterSecretVersion _map[string]string_	外部クラスターシークレットのリソースバージョン

次のページに続く

表 82 – 前のページからの続き

Field	Description
metrics _map[string]string_	メトリックを渡すために使用されるすべてのシークレットのバージョンを含むマップ。マップキーはシークレット名であり、マップ値はバージョンです

54.99 ServiceAccountTemplate

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

ServiceAccountTemplate には、サービスアカウントを生成するために必要なテンプレートが含まれています

Field	Description
metadata ** Required]** [_Metadata_	Metadata は、生成されたサービスアカウントに使用されるメタデータです

54.100 ServiceSelectorType

`string` のエイリアス

出演作品

- ManchedService {postgresql-cnpg-io-v1-ManchedService}
- ManagedServices {postgresql-cnpg-io-v1-ManagedServices}

ServiceSelectorType は、サービスセレクターを生成するための有効な値を説明します。読み取り/書き込み、読み取り、読み取り専用など、セレクターが適用されるサービスの種類を示します

54.101 ServiceTemplateSpec

出演作品

- ManchedService {postgresql-cnpg-io-v1-ManchedService}
- PoolerSpec {postgresql-cnpg-io-v1-PoolerSpec}

ServiceTemplateSpec は、ユーザーがサービス生成のテンプレートを設定できる構造です。

Field	Description
metadata _Metadata_	標準オブジェクトのメタデータ。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#metadata
spec _core/v1.ServiceSpec_	サービスの目的な動作の仕様。詳細情報 https://git.k8s.io/community/contributors/devel/sig-architecture/api-conventions.md#spec-and-status

54.102 ServiceUpdateStrategy

`string` のエイリアス

出演作品

- ManchedService {postgresql-cnpg-io-v1-ManchedService}

ServiceUpdateStrategy は、管理対象サービスへの変更を処理する方法を説明します

54.103 SnapshotOwnerReference

`string` のエイリアス

出演作品

- VolumeSnapshotConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1- VolumeSnapshotConfiguration}

SnapshotOwnerReference は、スナップショットの所有者の参照タイプを定義します。これは、処理されたリソースがどの所有者に関連するかを指定します。

54.104 SnapshotType

`string` のエイリアス

出演作品

- Import {postgresql-cnpg-io-v1-Import}

SnapshotType は許可されるインポートのタイプです

54.105 StorageConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}
- TablespaceConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-TablespaceConfiguration}

StorageConfiguration は、PVC の作成と調整に使用される構成であり、WAL ボリューム、PGDATA ボリューム、またはテーブルスペースに使用できます

Field	Description
storageClass _string_	PVC に使用する StorageClass。可能な場合は、PVC テンプレートを評価した後に適用されます。指定しない場合、生成された PVC はデフォルトのストレージクラスを使用します
size _string_	ストレージのサイズ。 PVC テンプレートでまだ指定されていない場合は必須。このフィールドへの変更は、作成された PVC に自動的に再適用されます。サイズを小さくすることはできません。
resizeInUseVolumes _bool_	既存の PVC のサイズを変更します、デフォルトは true
pvcTemplate _core/v1.PersistentVolume	Persistent Volume Claim を生成するために使用されるテンプレート

54.106 SubscriptionReclaimPolicy

`string` のエイリアス

出演作品

- SubscriptionSpec {postgresql-cnpg-io-v1-SubscriptionSpec}

SubscriptionReclaimPolicy は、サブスクリプションのサポートが終了したメンテナンスのポリシーを説明します。

54.107 SubscriptionSpec

出演作品

- サブスクリプション {postgresql-cnpg-io-v1-Subscription}

SubscriptionSpec は、サブスクリプションの目的の状態を定義します

Field	Description
cluster ** Required]** [_core/v1.LocalObjectRefe	「サブスクライバー」を識別する PostgreSQL クラスターの名前
name **[Required]** _string_	PostgreSQL 内のサブスクリプションの名前
dbname **[Required]** _string_	パブリケーションが「サブスクライバー」クラスターにインストールされるデータベースの名前
parameters _map[string]string_	PostgreSQL で想定される `WITH` 句のサブスクリプションパラメーターの一部 `CREATE SUBSCRIPTION` コマンド

次のページに続く

表 86 – 前のページからの続き

Field	Description
publicationName **[Required]** _string_	「パブリッシャー」の PostgreSQL データベース内のパブリケーションの名前
publicationDBName _string_	外部クラスター上のパブリケーションを含むデータベースの名前。デフォルトは外部クラスター定義のものです。
externalClusterName **[Required]** _string_	パブリケーション「パブリッシャー」を含む外部クラスターの名前
subscriptionReclaimPolicy _SubscriptionReclaimPolicy_	このサブスクリプションのサポートが終了したメンテナンスのポリシー

54.108 SubscriptionStatus

出演作品

- サブスクリプション {postgresql-cnpg-io-v1-Subscription}

SubscriptionStatus は、サブスクリプションの観察された状態を定義します

Field	Description
observedGeneration _int64_	同期された最新の目的の状態を表すシーケンス番号
applied _bool_	サブスクリプションが正しく調整された場合、Apply は true です
message _string_	Message はリコンシリエーション出力メッセージです

54.109 SwitchReplicaClusterStatus

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

SwitchReplicaClusterStatus には、クラスターからレプリカクラスターへのスイッチに関するすべてのステータスが含まれています

Field	Description
inProgress _bool_	InProgress は、クラスターをレプリカクラスターに切り替える進行中の手順があるかどうかを示します。

54.110 SyncReplicaElectionConstraints

出演作品

- PostgresConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-PostgresConfiguration}

SyncReplicaElectionConstraints には、同期レプリカ選択のコンストレインが含まれています。

アンチアフィニティパラメーターの場合、すべてのラベル値が一致する場合、2 つのインスタンスは同じ場所にあるとみなされます。

将来的には、名前による同期レプリカ選択制限がサポートされる予定です。

Field	Description
nodeLabelsAntiAffinity _[]string_	抽出および比較して、ポッドが同じトポロジに存在するかどうかを評価するノードラベル値のリスト
enabled **[Required]** _bool_	このフラグは、同期レプリカのコンストレインを有効にします

54.111 SynchronizeReplicasConfiguration

出演作品

- ReplicationSlotsConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-ReplicationSlotsConfiguration}

SynchronizeReplicasConfiguration には、ユーザー定義の物理レプリケーションスロットの同期のための構成が含まれています

Field	Description
enabled **[Required]** _bool_	true に設定すると、プライマリにあるすべてのレプリケーションスロットが各スタンバイで同期されます
excludePatterns _[]string_	除外するレプリケーションスロットの名前と一致する正規表現パターンのリストデフォルトでは空

54.112 SynchronousReplicaConfiguration

出演作品

- PostgresConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-PostgresConfiguration}

SynchronousReplicaConfiguration には、PostgreSQL 同期レプリケーション機能の構成が含まれています。重要現時点では、 `.spec.minSyncReplicas` および `.spec.maxSyncReplicas` も考慮する必要があります。

Field	Description
method ** Required]** [_SynchronousReplica-ConfigurationMethod_	'any' クォーラムベースの同期レプリケーションまたは'first' プライオリティベースの同期レプリケーションを値として受け入れて、リストされたサーバーから同期レプリケーションスタンバイを選択する方法。
number **[Required]** _int_	トランザクションが応答を待機する必要がある同期スタンバイサーバーの数を指定します。
maxStandbyNamesFrom-Cluster _int_	PostgreSQL の `synchronous_standby_names`オプションに自動的に含めることができるローカルクラスターポッドの最大数を指定します。
standbyNamesPre _[]string_	ローカルクラスターポッドの前に `synchronous_standby_names`に追加されるアプリケーション名のユーザー定義のリストこの順序は、優先度ベースの同期レプリケーションの場合にのみ役立ちます。
standbyNamesPost _[]string_	ローカルクラスターポッドの後に `synchronous_standby_names`に追加されるアプリケーション名のユーザー定義のリストこの順序は、優先度ベースの同期レプリケーションの場合にのみ役立ちます。
dataDurability _DataDurabilityLevel_	「必須」に設定されている場合、データの耐久性は厳密に適用されます。同期コミット設定 `on`、*remote_write*、または `remote_apply`を使用した書き込み操作は、正常なレプリカが不十分な場合にブロックされ、データの永続性が保証されます。「preferred」に設定されている場合、正常なレプリカが利用可能な場合、データの耐久性は維持されますが、レプリカが利用できなくなると、必要なインスタンスの数は動的に調整されます。この設定は、厳密な耐久性の適用を緩和して、操作の継続性を可能にします。この設定は、`standbyNamesPre`と `standbyNamesPost`の両方が設定されていない空の場合にのみ適用されます。

54.113 SynchronousReplicaConfigurationMethod

`string` のエイリアス

出演作品

- SynchronousReplicaConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-SynchronousReplicaConfiguration}

SynchronousReplicaConfigurationMethod は、クォーラムベースのレプリケーションまたは優先リストを使用するかどうかを構成します

54.114 TablespaceConfiguration

出演作品

- ClusterSpec {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterSpec}

TablespaceConfiguration はテーブルスペースの構成であり、テーブルスペースのストレージ仕様が含まれます

Field	Description
name **[Required]** _string_	テーブルスペースの名前
storage ** Required]** [_StorageConfiguration_	テーブルスペースのストレージ構成
owner _DatabaseRoleRef_	所有者は、テーブルスペースを所有する PostgreSQL ユーザーです
temporary _bool_	true に設定すると、テーブルスペースが PostgreSQL の `temp_tablespaces`エントリとして追加され、一時データベースオブジェクトまたはその他の一時ファイルを自動的に収容するために利用できます。 *temp_tablespaces* GUC の詳細については、 PostgreSQL ドキュメントを参照してください。

54.115 TablespaceState

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

TablespaceState は、クラスター内のテーブルスペースの状態を表します

Field	Description
name **[Required]** _string_	Name はテーブルスペースの名前です
owner _string_	所有者は、テーブルスペースを所有する PostgreSQL ユーザーです
state ** Required]** [_TablespaceStatus_	状態は最新の調整状態です
error _string_	Error はリコンシリエーションエラーである場合

54.116 TablespaceStatus

`string` のエイリアス

出演作品

- TablespaceState {postgresql-cnpg-io-v1-TablespaceState}

TablespaceStatus は、クラスター内のテーブルスペースのステータスを表します

54.117 トポロジ

出演作品

- ClusterStatus {postgresql-cnpg-io-v1-ClusterStatus}

トポロジにはクラスタートポロジが含まれます

Field	Description
instances _map[PodName]PodTopol	インスタンスには、インスタンスのポッドトポロジが含まれます
nodesUsed _int32_	Nodes Used は、インスタンスを収容する個別のノードの数を表します。値「1」は、すべてのインスタンスが単一のノードでホストされることを示し、高可用性 HA が存在しないことを示します。理想的には、この値は Postgres HA クラスターのインスタンスの数と同じである必要があり、コンピューティング側でシェアードナッシングアーキテクチャを意味します。
successfullyExtracted _bool_	SuccessquietlyExtracted は、トポロジデータが抽出されたかどうかを示します。障害が発生した場合に、同期レプリカ選択でフォールバック動作を制定すると役立ちます

54.118 VolumeSnapshotConfiguration {#postgresql-cnpg-io-v1-VolumeSnapshotConfiguration}

出演作品

- BackupConfiguration {postgresql-cnpg-io-v1-BackupConfiguration}

VolumeSnapshotConfiguration は、スナップショットバックアップを実行するための構成を表します。

Field	Description
labels _map[string]string_	ラベルは、 .metadata.labels スナップショットリソースに追加されるキーと値のペアです。
annotations _map[string]string_	.metadata.annotations スナップショットリソースに追加される注釈のキーと値のペア。
className _string_	ClassName は、PG_DATA Persistent VolumeClaim に使用されるスナップショットクラスを指定します。特定のクラスが存在しない場合、それは他のタイプのデフォルトクラスです
walClassName _string_	WalClassName は、PG_WAL Persistent VolumeClaim に使用されるスナップショットクラスを指定します。
tablespaceClassName _map[string]string_	TablespaceClassName は、テーブルスペースに使用されるスナップショットクラスを指定します。デフォルトで PGDATA スナップショットクラスが設定されている場合

次のページに続く

表 95 – 前のページからの続き

Field	Description
snapshotOwnerReference _SnapshotOwnerReference_	SnapshotOwnerReference は、スナップショットが持つ必要がある所有者参照のタイプを示します
online _bool_	ボリュームスナップショットを使用したバックアップのデフォルトのタイプがオンライン/ホット *true*、default またはオフライン/コールド *false*
onlineConfiguration _OnlineConfiguration_	ボリュームスナップショットを使用してオンライン/ホットバックアップを制御する構成パラメーター

第55章　サポートされているリリース

_このページには、CloudNativePG_の現在サポートされているリリースのステータス、タイムライン、ポリシーがリストされています。

私たちは、2 か月ごとに新しいマイナーリリースをリリースすることに専念して、最新のマイナーリリースのサポートを提供することに尽力しています。*CloudNativePG* **リリースのサポートステータス** で概要を示しているように、各リリースは、指定された「サポート終了」日に達するまで完全にサポートされ続けます。これには、シームレスなアップグレード計画を促進するための追加の 3 か月のアシスタンスウィンドウが含まれます。

CloudNativePG のサポートされているリリースには、アクティブなメンテナンス期間にあり、セキュリティとバグ修正のためのパッチが適用されているリリースが含まれます。

マイナーリリースの後続のパッチリリースには、下位互換性の変更のみが含まれます。

- **サポートポリシー**
- **命名スキーム**
- *CloudNativePG* **リリースのサポートステータス**
- **サポートとは**

55.1 サポートポリシー

CloudNativePG は、コミットごとに新しいビルドを生成します。

約 2 か月ごとに、いくつかの追加テストと完全なリリース認定プロセスを受けるマイナーリリースを作成します。サポートされているマイナーリリースで見つかった問題のパッチバージョンをリリースします。

公式リリースの前に、少なくとも 1 つのリリース候補 RC が *preview testing* 用にビルドされます。新しいバグが発見された場合、追加のリリース候補が発行される場合があります。リリース候補は Slack チャンネルで発表され、最終リリースの前にコミュニティテストを促進します。メンテナはコミュニティテストに 1〜2 週間を提供し、異議が提起されない場合、最終リリースが発表されます。

さまざまなタイプのリリースは、さまざまなレベルの製品品質と CloudNativePG コミュニティからの支援を表しています。コミュニティが提供するサポートの詳細については、**サポートとは** を参照してください。

Type	Support level	Quality and recommended Use
Development Build	No support	Dangerous, might not be fully reliable. Useful to experiment with.
Release Candidate	No support	*archive_timeout* . Released for experimentation and testing.
Minor Release	Support provided until 3 months after the N+1 minor release (ex. 1.23 supported until 3 months after 1.24.0 is released)	
Patch	Same as the corresponding minor release	Users are encouraged to adopt patch releases as soon as they are available for a given release.
Security Patch	Same as a patch, however, it doesn't contain any additional code other than the security fix from the previous patch	Given the nature of security fixes, users are **strongly** encouraged to adopt security patches after release.

利用可能なリリースは releases page で見つけることができます。

1.14.0 **以前のリリースノート**では、各マイナーリリースとパッチリリースの高レベルの詳細情報を見つけることができます。

もちろん、これは名前付けスキームセクションの改良バージョンです。

55.2 命名スキーム

命名スキームは Semantic Versioning 2.0.0 に従い、次のような構造になっています。

```
<major>.<minor>.<patch>
```

- <minor> は、リリースごとにインクリメントされます。
- <patch> は、現在の<minor> リリースのパッチの数をカウントし、<minor> リリースと比較して小さな変更を表します。

リリース候補は、Semantic Versioning 2.0.0 - item #9 で指定されているように、パッチバージョンの後に追加の-<pre-release> 識別子で示されます。

バージョンの Git タグには、先頭に v が付きます。

55.3 CloudNativePG リリースのサポートステータス

Version	Currently supported	Release date	End of life	Supported Kubernetes versions	Tested, but not supported	Supported Postgres versions
1.25.x	No (RC)	Dec XX, 2024	~ May/Jun, 2025	1.29, 1.30, 1.31, 1.32 (!)	1.27, 1.28	13 - 17
1.24.x	Yes	Aug 22, 2024	Feb XX, 2025	1.28, 1.29, 1.30, 1.31	1.27	13 - 17
main	No, development only					13 - 17

表内のサポートされている Kubernetes バージョンのリストは、CloudNativePG メンテナーが何をサポートおよびテストするのが合理的であると考えているかによって異なります。

現在、CloudNativePG コミュニティは、Red Hat OpenShift など、標準/バニラを超える Kubernetes ディストリビューションを公式にサポートまたはテストしていません。これは将来的に変更される可能性があり、その場合、CloudNativePG メンテナーはそれに応じて公式ポリシーを更新します。

Red Hat OpenShift に CloudNativePG を展開する予定がある場合は、EDB からの完全なサポートが付属する certified operator provided by EDB を使用できます。

55.3.1 サポートされている PostgreSQL バージョン

前の表でサポートされている Postgres バージョンのリストは、一般に、CloudNativePG のマイナーバージョンがリリースされたときにコミュニティでサポートされていた PostgreSQL バージョンによって異なります。

PostgreSQL を参照してください Versioning Policy

サポートされているバージョンの詳細については、ページをご覧ください。

注釈: 2024 年 11 月 14 日から Postgres 12 is no longer supported 。

また、アップグレードしないのはアップグレードするよりリスクが高いため、PostgreSQL オペランドイメージを定期的に更新し、使用しているメジャーバージョンの最新のマイナーリリースを使用することをお勧めします。その結果、PostgreSQL の古いマイナーバージョンに関する問題をオープンする場合、私たちはあなたを助けることができない場合があります。

55.4 今後のリリース

Version	Release date	End of life
1.25.0	Dec, 2024	May/Jun, 2025
1.26.0	Mar, 2025	Aug/Sep, 2025
1.27.0	Jun, 2025	Dec, 2025

注釈: 機能のフリーズはリリースの 1〜2 週間前に発生し、その時点で、前述のようにリリース候補バージョンがビルドおよびテスト用に配布されます。

重要: 将来の日付は不確定であり、変更される可能性があります。これは、Kubernetes バージョンにも適用されます。リリーススケジュールの更新と変更は、 Release updates で通知されます

メイン GitHub リポジトリでのディスカッション。

55.5 古いリリース

Version	Release date	End of life	Compatible Kubernetes versions
1.23.x	April 24, 2024	November 24, 2024	1.27, 1.28, 1.29
1.22.x	December 21, 2023	July 24, 2024	1.26, 1.27, 1.28
1.21.x	October 12, 2023	Jun 12, 2024	1.25, 1.26, 1.27, 1.28
1.20.x	April 27, 2023	January 21, 2024	1.24, 1.25, 1.26, 1.27
1.19.x	February 14, 2023	November 3, 2023	1.23, 1.24, 1.25, 1.26
1.18.x	Nov 10, 2022	June 12, 2023	1.23, 1.24, 1.25, 1.26, 1.27
1.17.x	September 6, 2022	March 20, 2023	1.22, 1.23, 1.24
1.16.x	July 7, 2022	December 21, 2022	1.22, 1.23, 1.24
1.15.x	April 21, 2022	October 6, 2022	1.21, 1.22, 1.23

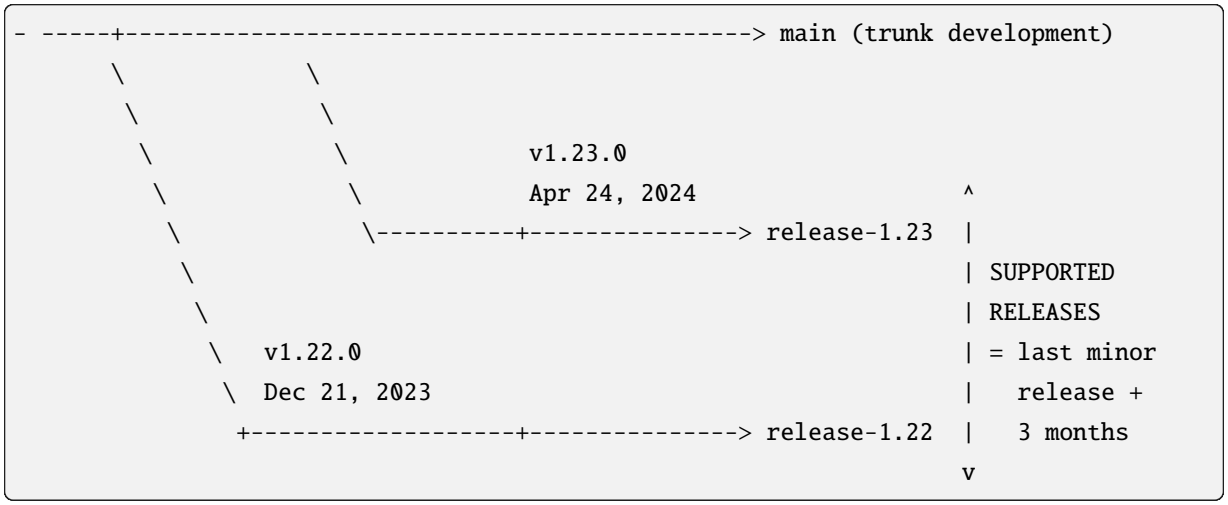
55.6 サポートとは

2 か月ごとに新しい最終リリースを生成することを考えると、サポート期間は各リリースブランチ最新のマイナーリリースと追加 3 か月ごとに約 5 か月です。

次の図では、`release-1.23` はリリースブランチの例です。

たとえば、最新のリリースが `v1.23.0` の場合、以前のリリース `v1.22.x` の補助 3 か月サポート期間が期待できます。

各ブランチの最後のパッチリリースのみがサポートされています。



私たちは 2 種類のサポートを提供します。

テクニカルサポートテクニカルサポートは、サポートされているリリースについてのみベストエフォートベースで提供されています。CloudNativePG Slack `#general` チャンネル内、または GitHub Discussions を使用して、コミュニティからのサポートを要求できます。

セキュリティとバグ修正重要なバグ修正セキュリティ修正を含むを、現在サポートされているすべてのリリースにバックポートします。パッチをバックポートする前に、私たちは自分自身に問います。**“既にリリースされたバージョンの安定性を本当に重視していることを念頭に置いて、このバックポートは ``*CloudNativePG*`` を向上させますか*?*”**

専門的なサポートが必要な場合は、Support page in the website を参照してください。そこにリストされているベンダーは、サポート期間の延長を含むサービスレベル契約を提供する場合があります。

第56章　プレビューバージョン

CloudNativePG 候補リリースは、コミュニティが新しい一般利用可能な GA リリースを発行する前に、テストに利用できるプレリリースバージョンです。これらのバージョンは機能が凍結されており、新しい機能が追加されず、最終リリースの前に公開テストを対象としています。

重要: CloudNativePG リリース候補は、実稼働システムでの使用を想定していません。

56.1 リリース候補の目的

リリース候補は、公式リリースの前に広範なテストのためにコミュニティに提供されます。リリース候補は、CloudNativePG の新しいマイナーバージョンの最初のリリースと同一であることを目指していますが、GA リリース前に追加の変更が実装される場合があります。

56.2 コミュニティへの参加

各 CloudNativePG マイナーリリースの安定性は、ワークロードとツールで次のバージョンをテストするコミュニティの努力に大きく依存しています。ユーザーテストを介してバグとリグレッションを特定することは、リリースを完成できる時期を決定する上で重要です。

56.3 使用アドバイザリー

CloudNativePG コミュニティは、運用環境またはアクティブな開発プロジェクトで CloudNativePG のプレビューバージョンを使用しないことを強くお勧めします。CloudNativePG は大規模な自動および手動テストを受けていますが、ベータリリースには重大なバグが含まれる場合があります。プレビューバージョンの機能は、下位互換性のない方法で変更される場合があり、完全に削除される可能性があります。

56.4 現在のプレビューバージョン

現在、利用可能なプレビューバージョンはありません。

現在のプレビューバージョンは **1.25.0-rc1** です。

現在のプレビューバージョンとテスト方法の詳細については、以下のリンクを参照してください。

- Announcement
- Documentation

第57章　Release notes

CloudNativePG のユーザーに表示される変更の履歴、マイナーリリースごとに分類されます。

- *CloudNativePG 1.25 - Release Candidate*
- *CloudNativePG 1.24* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.23* のリリースノート

CloudNativePG のコミュニティサポートポリシーの詳細については、**サポートされているリリース** を参照してください。

古いリリース

- *CloudNativePG 1.22* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.21* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.20* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.19* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.18* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.17* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.16* のリリースノート
- *CloudNativePG 1.15* のリリースノート

また、CloudNativePG の前身であるすべての *release notes from 1.0.0 to 1.14.0 of Cloud Native PostgreSQL by EDB* の記録も保持しています。

57.1 CloudNativePG 1.25 のリリースノート

CloudNativePG の 1.25 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

57.1.1 バージョン 1.25.0-rc1

発売日 2024 年 12 月 9 日

機能

- **宣言的データベース管理** Database カスタムリソース定義 CRD を導入し、ユーザーはクラスター内で PostgreSQL データベースを宣言的に作成および管理できます。(#5325)
- **論理レプリケーション管理** PostgreSQL 論理レプリケーションの宣言管理用に Publication および Subscription CRD を追加します。これらにより、レプリケーションのセットアップが簡素化され、CloudNativePG へのオンライン移行が容易になります。(#5329)

機能強化

- dataDurability オプションを.spec.postgresql.synchronous スタンザに追加し、ユーザーが同期レプリケーションで required デフォルトまたは preferred の耐久性を選択できるようにします。(#5878)
- .spec.probes スタンザを介してスタートアップ、ライブネス、および準備状況プローブのカスタマイズを有効にします。(#6266)
- 追加の pg_dump および pg_restore オプションをサポートして、データベースのインポートの柔軟性を強化します。(#6214)
- CloudNativePG コントローラに maxConcurrentReconciles のサポートを追加し、デフォルトを 10 に設定して、オペレーターがすぐに大規模な展開を効率的に管理する能力を向上させます。(#5678)
- 事前定義されたユーザー、具体的には superuser および app 用に生成されたシークレットに cnpg.io/userType ラベルを追加します。 (#4392)
- cnpg プラグイン:
  - プラグインをサポートするように backup コマンドを強化します。(#6045)
  - API サーバーでの HTTP 要求の User-Agent ヘッダーを尊重します。(#6153)

バグ修正

- レプリカとして再同期する前に、元のプライマリが WAL ファイルキューをアーカイブにフラッシュすることにより、復旧時間を削減し、フェールオーバー中のデータの一貫性を強化します。(#6141)
- ブートストラップ中に PGDATA ボリュームとともに WAL ボリュームをクリーンアップします。 (#6265)
- 以前に生成された PersistentVolumeClaims がすべて欠落している場合、クラスターフェーズを Unrecoverable に設定するようにオペレーターを更新します。 (#6170)
- .spec.postgresql.synchronous.method が first に設定されている場合の synchronous_standby_names GUC の解析を修正しました。 (#5955)

- ロールの変更を修正して、データベースコンテキストではなくトランザクションレベルで適用します。(#6064)
- プライマリ上の `override.conf` ファイルから `primary_slot_name` 定義を削除して、常に空になるようにします。 (#6219)
- PgBouncer ポッドで `PGHOST` を含む libpq 環境変数を構成して、コンテナ内から `psql` を使用して `pgbouncer` 仮想データベースへのシームレスなアクセスを有効にします。 (#6247)
- イメージカタログの変更を確認するときに、クラスターステータスの不要な更新を削除します。(#6277)
- cnpg プラグイン:
  - `kubectl` コンテキストが `psql` コマンドに適切に渡されることを確認します。 (#6257)
  - `status` コマンドで空のときに物理バックアップブロックを表示しないようにします。(#5998)

サポートされているバージョン

- **Kubernetes** 1.31、1.30、および 1.29
- **PostgreSQL** 17、16、15、14、および 13 -デフォルトイメージ PostgreSQL 17.2 - PostgreSQL 12 のサポートを公式に終了しました - PostgreSQL 13 のサポートは 2025 年 11 月 12 日に終了します

57.2 CloudNativePG 1.24 のリリースノート

CloudNativePG の 1.24 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

57.2.1 バージョン 1.24.1

発売日 2024 年 10 月 16 日

機能強化

- `PGDATA` ディレクトリ全体をスキャンしてデータベースサイズを計算することにより、リソース使用率が高くなる原因となったため、ステータスプローブから `pg_database_size` の使用を削除します。`kubectl status` プラグインは du に依存して、詳細なサイズ情報の取得を提供するようになりました #5689
- PostgreSQL で `full_page_writes` パラメーターを構成する機能を追加します。この設定は、PostgreSQL の推奨事項#5516 に従って、デフォルトの on です。
- プラグイン

  - cnpg プラグインに logs pretty コマンドを追加して、標準入力からログストリームを読み取り、人間が判読可能な形式で出力します。ログエントリをフィルタリングするオプションを使用します。
  - 複数の-v オプションを増加できるようにして、status コマンドを機能強化します。
  - pgadmin4 プラグインコマンドの--image フラグを使用してカスタム Docker イメージを指定するサポートを追加し、ユーザーが pgAdmin4 展開に使用される Docker イメージを制御できるようにします#5515

修正

- プライマリを指定されたプライマリに降格する際の同時ステータス更新の問題を解決し、クラスターロールの変更中のよりスムーズな移行を保証します#5755
- 2 つのインスタンスにスケールダウンするときにレプリカ PodDisruptionBudgetPDB が削除されるようにし、レプリカをホストするノードのメンテナンスを簡単にします#5487
- インプレースリスタートよりも完全なロールアウトを優先します #5407
- .spec.postgresql.synchronous を使用する場合、レプリカに到達できない場合でも、synchronous_standby_names パラメーターが正しく設定されていることを確認します #5831
- 接続が失われた場合に二重フェイルオーバーが発生する可能性のある問題を修正します#5788
- ポッドとジョブの TMPDIR および PSQL_HISTORY 環境変数を正しく設定し、一時ファイルと履歴の管理を改善します #5503
- プラグイン
  - logs cluster コマンド#5775 の競合状態を解決します。
  - status プラグイン#5533 で potential 同期ステータスを表示します。
  - pgadmin4 コマンドによって展開されたポッドに書き込み可能なホームがなかった問題を修正しますディレクトリ#5800。

サポートされているバージョン

- PostgreSQL 17 PostgreSQL 17.0 がデフォルトイメージです。

57.2.2 バージョン 1.24.0

発売日 2024 年 8 月 22 日

重要な変更

- `cnpg.io/instanceRole` を優先して、`Service` および `PodDisruptionBudget` リソースのセレクターの `role` ラベルを非推奨にします。#4897
- PostgreSQL ポッドのデフォルトの PodAntiAffinity 構成を修正し、アンチアフィニティ構成が `required` #5156 に設定されている場合に、PostgreSQL とプーラーインスタンスを同じノードで共存できます。

警告: PodAntiAffinity の変更は、オンラインアップグレードが有効になっている場合でも、オペレーターがアップグレードされるときにすべてのインスタンスのロールアウトをトリガーします。

機能

- **分散 PostgreSQL トポロジ**レプリカクラスター機能を強化して、マルチプルの Kubernetes クラスターにまたがる PostgreSQL の分散データベーストポロジを作成し、ハイブリッドおよびマルチクラウドの展開を有効にします。この機能は以下をサポートします。
  - **宣言的プライマリ制御**分散セットアップ#4388 でプライマリとして機能する PostgreSQL クラスターを簡単に指定します。
  - **シームレスなスイッチオーバー**現在のプライマリを簡単に降格し、選択したレプリカクラスターをプロモートします、通常は別のリージョンにあり、元のプライマリを再構築する必要はありません。これにより、多様な環境での高可用性と復元力が保証されます#4411
- **管理サービス** `managed.services` スタンザ#4769 および#4952 を介して管理サービスを導入し、次のことができます。
  - configuration.
  - を介して読み取り専用および読み取りサービスを無効にするサービステンプレート機能を活用してカスタムサービスリソースを作成する、ロードバランサーを含む、Kubernetes の外部の PostgreSQL にアクセスするための DBaaS 目的に特に役立ちます。
- **同期レプリケーションの拡張 API** 同期レプリケーションの明示的な構成のための改良された API を導入し、クォーラムベースと優先リスト戦略の両方をサポートします。この更新では、`synchronous_standby_names` オプションの完全なカスタマイズが可能になり、より優れた制御と柔軟性を提供します#5148
- **WAL ディスク領域の枯渇** PostgreSQL が WAL ファイルを保存するディスク領域を使い果たしたときにクラスターを安全に停止し、関連ボリュームのサイズを増やすことにより復旧を簡単にします #4404

機能強化

- PostgreSQL の recovery_min_apply_delay 機能 #5181 を活用して、.spec.replica.minApplyDelay オプションを導入することにより、遅延レプリカのサポートを追加します。
- postInitSQLRefs および postInitTemplateSQLRefs を導入して、ユーザーが postInit および postInitTemplate 指示を 1 つ以上の構成マップまたはシークレットとして定義できるようにします#5074
- PostgreSQL 17 の allow_alter_system パラメーターの透過的なサポートを追加し、.spec.postgresql.enableAlterSystem オプションを介して ALTER SYSTEM コマンドを有効または無効にします#4921
- name キー/値ペアを使用して、クエリメトリック名と列の名前をオーバーライドできます。これは、親キーから自動的に継承された名前を置き換えることができます#4779
- 同じトランザクション内で実行され、predicate_query フィールドで定義されたカスタムクエリによって返される値の対象とすることにより、エクスポートされたメトリックの制御が強化されました。#4503
- 追加の引数を barman-cloud-wal-archive および barman-cloud-wal-restore に渡せるようにしました#5099
- Cluster および Pooler リソースに reconcilePodSpec アノテーションを導入して、ポッド仕様の変更に続いてポッドのリスタートを制御します#5069
- 準備状況プローブは、プライマリインスタンスに接続されたことのないストリーミングレプリカに対して失敗するようになったため、一貫性のないレプリカを迅速に検出できます#5206。
- Pooler メトリックコレクター#5044 で PgBouncer 1.23 で導入された新しいメトリックをサポートします。
- cnpg プラグインの更新
  - --control-plane オプションを追加して install generate コマンドを強化し、ノードアフィニティと許容範囲を設定することによりコントロールプレーンノードにオペレーターの展開を許可します。
  - destroy コマンドを強化して、に関連するジョブも削除しますターゲットインスタンス#5298.
  - 利用可能な場合は demotionToken および promotionToken を表示するように status コマンドを強化し、分散トポロジ#5149 でのより詳細な操作の洞察を提供します。
  - publication および subscription サブコマンドでのリモートデータベース名のカスタマイズのサポートを追加しました。この機能強化により、外部クラスターから複数のデータベース#5113 とデータを同期する際の柔軟性が向上します。

セキュリティ

- オペレーターとインスタンスマネージャー間の TLS 通信を追加します #4442
- インスタンスメトリックエクスポーター#4927 のオプションの TLS 通信を追加します。

修正

- 終了されたが、エビクションプロセス中に削除されなかったポッドを検出するメカニズムを強化し、メンテナンスウィンドウ中にクリーンアッププロセスを拡張して、`reusePVC` フラグが false に設定されている場合にスケジュール不可のポッドを含めます#2056
- WAL ファイルに新しいシャットダウンチェックポイントエントリが導入されるのを回避するために、ブートストラップ中に VolumeSnapshot を使用する新しく作成されたレプリカの `pg_rewind` 実行を無効にします。これにより、レプリカは問題なくプライマリに再接続できます。それ以外の場合、追加のチェックポイントエントリ#5081 によって妨げられます。
- 新しいインスタンスの初期化中の障害を正常に処理します。失敗した初期化からの残りのデータは、削除されるか、有効な PostgreSQL データディレクトリである場合は、バックアップの場所に移動して、データ損失の可能性を回避します。#5112
- 初期バックアップ失敗#4982 時の再試行ロジックを実装することにより、即時バックアップリコンサイラーの堅牢性を強化します。
- `postmaster` を再度起動する前に、`postmaster` がシャットダウンするのを待ってください #4938
- `Pooler` サービステンプレートがデフォルトサービス#4846 をオーバーライドできることを確認します。
- `pg_database` メトリックモニタリングとアラートプロセスから不変データベースを除外します#4980
- オペレーターサービスアカウント#4911 から不要な権限を削除しました。
- `ClusterImageCatalogs` #5034 のクラスターロール権限を修正します。
- オペレーターイメージがアップグレードされたときに、オペレーターが `Pooler` インスタンスのロールアウトを開始するように保証 #5006
- `postmaster` にアクセスできた場合でも、PostgreSQL の再起動後に readness probe が誤って「notready」を表示する原因となる競合状態を修正しました#4920
- `Pooler` #4967 によって所有されていないリソースのリコンシリエーションを防止します。
- DNS サブジェクト代替名 SAN が更新されたときに、オペレーターが管理する証明書を更新します #3269、#3319。
- 未指定の場合にのみテンプレートに PVC デフォルト `AccessModes` を設定します #4845
- 満足できないバックアップスケジュール#5109 を正常に処理します。
- 同期レプリケーション自己修復チェックは、終了したポッドを除外し、アクティブで機能的なポッドにのみ焦点を当てます#5210。

- インスタンスマネージャーは、レプリカクラスター#5209 のロールの変更に続いて、既存のすべてのオペレーター関連のレプリケーション接続を終了するようになりました。
- `smartShutdownTimeout` をゼロに設定して、即時高速シャットダウンを有効にし、必要に応じてスマートシャットダウンプロセスをバイパスできるようにします#5347
- `cnpg` プラグイン
  - `status` コマンドの実行中にエラーを適切に処理します。
  - `status` コマンドで TLS をサポート#4915

サポートされているバージョン

- Kubernetes 1.31、1.30、1.29、および 1.28
- PostgreSQL 16、15、14、13、および 12 - PostgreSQL 16.4 がデフォルトイメージです。PostgreSQL 12 のサポートは 2024 年 11 月 12 日に終了します

57.3 CloudNativePG 1.23 のリリースノート

CloudNativePG の 1.23 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

57.3.1 バージョン 1.23.5

発売日 2024 年 10 月 16 日

機能強化

- `PGDATA` ディレクトリ全体をスキャンしてデータベースサイズを計算することにより、リソース使用率が高くなる原因となったため、ステータスプローブから `pg_database_size` の使用を削除します。`kubectl status` プラグインは `du` に依存して、詳細なサイズ情報の取得を提供するようになりました #5689
- PostgreSQL で `full_page_writes` パラメーターを構成する機能を追加します。この設定は、PostgreSQL の推奨事項#5516 に従って、デフォルトの `on` です。
- プラグイン
  - `cnpg` プラグインに `logs pretty` コマンドを追加して、標準入力からログストリームを読み取り、人間が判読可能な形式で出力します。ログエントリをフィルタリングするオプションを使用します。
  - 複数の`-v` オプションを増加できるようにして、`status` コマンドを機能強化します。

  - pgadmin4 プラグインコマンドの--image フラグを使用してカスタム Docker イメージを指定するサポートを追加し、ユーザーが pgAdmin4 展開に使用される Docker イメージを制御できるようにします#5515

修正

- プライマリを指定されたプライマリに降格する際の同時ステータス更新の問題を解決し、クラスターロールの変更中のよりスムーズな移行を保証します#5755
- 2 つのインスタンスにスケールダウンするときにレプリカ PodDisruptionBudgetPDB が削除されるようにし、レプリカをホストするノードのメンテナンスを簡単にします#5487
- インプレースリスタートよりも完全なロールアウトを優先します #5407
- 接続が失われた場合に二重フェイルオーバーが発生する可能性のある問題を修正します#5788
- ポッドとジョブの TMPDIR および PSQL_HISTORY 環境変数を正しく設定し、一時ファイルと履歴の管理を改善します #5503
- プラグイン
  - logs cluster コマンド#5775 の競合状態を解決します。
  - status プラグイン#5533 で potential 同期ステータスを表示します。
  - pgadmin4 コマンドによって展開されたポッドに書き込み可能なホームがなかった問題を修正しますディレクトリ#5800。

サポートされているバージョン

- PostgreSQL 17 PostgreSQL 17.0 がデフォルトイメージです。

57.3.2 バージョン 1.23.4

発売日 2024 年 8 月 22 日

機能強化

- cnpg プラグインの更新
  - --control-plane オプションを追加して install generate コマンドを強化し、ノードアフィニティと許容範囲を設定することによりコントロールプレーンノードにオペレーターの展開を許可します。
  - destroy コマンドを強化して、に関連するジョブも削除しますターゲットインスタンス#5298。

修正

- 同期レプリケーション自己修復チェックは、終了したポッドを除外し、アクティブで機能的なポッドにのみ焦点を当てます#5210。
- インスタンスマネージャーは、レプリカクラスター#5209 のロールの変更に続いて、既存のすべてのオペレーター関連のレプリケーション接続を終了するようになりました。
- `smartShutdownTimeout` をゼロに設定して、即時高速シャットダウンを有効にし、必要に応じてスマートシャットダウンプロセスをバイパスできるようにします#5347

57.3.3 バージョン 1.23.3

発売日 2024 年 7 月 29 日

機能強化

- PostgreSQL 17 の `allow_alter_system` パラメーターの透過的なサポートを追加し、`.spec.postgresql.enableAlterSystem` オプションを介して `ALTER SYSTEM` コマンドを有効または無効にします#4921
- `Cluster` および `Pooler` リソースに `reconcilePodSpec` アノテーションを導入して、ポッド仕様の変更に続いてポッドのリスタートを制御します#5069
- `Pooler` メトリックコレクター#5044 で PgBouncer 1.23 で導入された新しいメトリックをサポートします。

修正

- 終了されたが、エビクションプロセス中に削除されなかったポッドを検出するメカニズムを強化し、メンテナンスウィンドウ中にクリーンアッププロセスを拡張して、`reusePVC` フラグが false に設定されている場合にスケジュール不可のポッドを含めます#2056
- WAL ファイルに新しいシャットダウンチェックポイントエントリが導入されるのを回避するために、ブートストラップ中に VolumeSnapshot を使用する新しく作成されたレプリカの `pg_rewind` 実行を無効にします。これにより、レプリカは問題なくプライマリに再接続できます。それ以外の場合、追加のチェックポイントエントリ#5081 によって妨げられます。
- 新しいインスタンスの初期化中の障害を正常に処理します。失敗した初期化からの残りのデータは、削除されるか、有効な PostgreSQL データディレクトリである場合は、バックアップの場所に移動して、データ損失の可能性を回避します。#5112
- 初期バックアップ失敗#4982 時の再試行ロジックを実装することにより、即時バックアップリコンサイラーの堅牢性を強化します。
- `postmaster` を再度起動する前に、`postmaster` がシャットダウンするのを待ってください #4938

- Pooler サービステンプレートがデフォルトサービス#4846 をオーバーライドできることを確認します。
- pg_database メトリックモニタリングとアラートプロセスから不変データベースを除外します#4980
- オペレーターサービスアカウント#4911 から不要な権限を削除しました。
- ClusterImageCatalogs #5034 のクラスターロール権限を修正します。
- オペレーターイメージがアップグレードされたときに、オペレーターが Pooler インスタンスのロールアウトを開始するように保証 #5006
- postmaster にアクセスできた場合でも、PostgreSQL の再起動後に readness probe が誤って「notready」を表示する原因となる競合状態を修正しました#4920
- Pooler #4967 によって所有されていないリソースのリコンシリエーションを防止します。
- DNS サブジェクト代替名 SAN が更新されたときに、オペレーターが管理する証明書を更新します #3269、#3319。
- 未指定の場合にのみテンプレートに PVC デフォルト AccessModes を設定します #4845
- 満足できないバックアップスケジュール#5109 を正常に処理します。
- cnpg プラグイン
- status コマンドの実行中にエラーを適切に処理します。
- status コマンドで TLS をサポート#4915

57.3.4 バージョン 1.23.2

発売日 2024 年 6 月 12 日

機能強化

- 物理バックアップを使用したリカバリー中のスタンバイ依存パラメーターの構成を有効にしました #4564
- .spec.livenessProbeTimeout オプションを介した liveness プローブタイムアウトの構成を有効にしました#4719
- kubectl :
  - の cnpg プラグイン --color オプションを追加することにより、プラグインでの ANSI カラーのサポートを強化しました。これは、always 、never 、および auto デフォルトを受け入れます。#4775
  - macOS ユーザーの Homebrew でプラグインが利用できるようになりました。#4602)

修正

- フェンスされたインスタンスが不要なループに入り、使用可能なすべての CPU を消費するのを防ぎました#4625
- プライマリのインスタンスマネージャーが、停止操作に続いて障害が発生した後、インスタンスが起動するのを無期限に待機する問題を解決しました#4434
- `hot_standby_feedback` と管理対象クラスターレベルのレプリケーションスロット間の相互作用により、自動バキュームが正しく動作しない問題を修正しました。この問題は、ディスク領域がデッドタプルによって占有されたままになっている原因でした#4811
- ポッドコンテナのステータスが欠落しているときに発生したバックアップコントローラのパニックを修正しました#4765
- インスタンスマネージャーの不要なシャットダウンを防止 #4670
- PostgreSQL 構成が変更されない場合の不必要なリロードを防止#4531
- コンテンツを書き込む一貫した一意の方法を保証することにより、ident マップの不必要なリロードを防止しました#4648
- リソースのステータスを更新する代わりにパッチを適用することにより、フェーズ登録中の競合を回避しました#4637
- PostgreSQL を再起動し、フェンシングをリフティングするときにタイムアウトを実装しました#4504
- アーカイブモードを適切に設定するための昇格後にレプリカクラスターが再起動されるようにした #4399
- ボリュームスナップショットバックアップでランダムな障害を引き起こしていた不要なコンカレントキープアライブルーチンを削除しました#4768
- `pgaudit.log_rows` オプションが有効になっているときに返される追加行フィールドの正しい解析を保証し、監査ログが通常のログストリームに誤ってルーティングされるのを防ぎます#4394
- `kubectl` 用の `cnpg` プラグイン
- `cnpg status` コマンドを使用した PDB のリストに関する問題を解決しました #4530

変更

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.3 に設定した#4584
- 名前空間オブジェクトのすべての RBAC 要件を削除しました #4753

57.3.5 バージョン 1.23.1

発売日 2024 年 4 月 29 日

修正

- 回帰のために失敗していた PodMonitor リソースのリコンシリエーションを修正します #4286

57.3.6 バージョン 1.23.0

発売日 2024 年 4 月 24 日

機能

- **PostgreSQL イメージカタログ** PostgreSQL メジャーバージョンに基づいてオペランドコンテナイメージを管理するための ClusterImageCatalog および ImageCatalog CRD を導入しました。これは、Cluster の.spec.imageCatalogRef stanza を介して促進されます。この機能は、imageName オプションの代替を提供し、最終的にオペランドコンテナイメージを定義するデフォルトの方法として置き換えます。
- **ユーザー定義のレプリケーションスロット**物理的レプリケーションスロットの同期を強化して、新しく導入されたスタンザ replicationSlots.synchronizeReplicas を介して、プライマリのユーザー定義のレプリケーションスロットをカバーします。
- **ポッド中断バジェット PDB の構成** .spec.enablePDB フィールドを導入して、プライマリインスタンスで PDB を無効にし、メンテナンス操作中にポッドの適切なエビクションを可能にします。これは、単一インスタンスの展開に特に役立ちます。この機能は、ノードのメンテナンスウィンドウ機能を置き換えることを目的としています。

機能強化

- ユーザーは既存のクラスターをレプリカモードに移行し、クロスデータセンターのスイッチオーバー操作を簡素化できる機能を備えています#4261
- ユーザーは、タイプ、ラベル、注釈を含む接続プーラーサービスをカスタマイズできるようになりました#3384
- ユーザーは wal_log_hints PostgreSQL パラメーターを構成できるようになりました #4218 #4218
- 自動的に生成されたシークレットの URI の完全修飾ドメイン名 FQDN #4095
- クラスターの復元中にクラスターが所有していないインスタンスポッドのクリーンアップ#4141
- PDB のステータスを表示するプラグインの status コマンドのコマンド出力 #4319
- recovery ブートストラップで barman-cloud-wal-restore を呼び出す際のエラー検出 #4101

修正

- スイッチオーバーの前に、選択されたレプリカがストリーミングレプリケーションにあることを確認しました#4288
- インスタンスの LSN をソートするときにその解析エラーを正しく処理する#4283
- 昇格できる正常なスタンバイがない場合は、プライマリポッドを再作成します#4132
- リストアジョブが失敗した場合の `PGDATA` のクリーンアップ #4151
- 構成の更新時に証明書をリロードします #3705
- `kubectl` の `cnpg` プラグイン
  - `destroy` 、 `fencing` 、および `promote` プラグインコマンドの引数処理を改善します#4280
  - `cnpg status` のバックアップの進行状況のパーセンテージを正しく処理します#4131
  - 13b_tran にシーケンスのないデータベース
  - #4346)

変更点

- オペレーターイメージが `gcr.io/distroless/static-debian12:nonroot` #4201
- Grafana ダッシュボードは次の場所にあります。https://github.com/cloudnative-pg/grafana-dashboards #4154

57.4 Release Notes - Old

57.4.1 CloudNativePG 1.22 のリリースノート

CloudNativePG の 1.22 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.22.5

発売日 2024 年 7 月 29 日

> **警告:** これは、1.22.X シリーズの最後のリリースになる予定です。ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

機能強化

- PostgreSQL 17 の `allow_alter_system` パラメーターの透過的なサポートを追加し、`.spec.postgresql.enableAlterSystem` オプションを介して `ALTER SYSTEM` コマンドを有効または無効にします#4921
- `Cluster` および `Pooler` リソースに `reconcilePodSpec` アノテーションを導入して、ポッド仕様の変更に続いてポッドのリスタートを制御します#5069
- `Pooler` メトリックコレクター#5044 で PgBouncer 1.23 で導入された新しいメトリックをサポートします。

修正

- 終了されたが、エビクションプロセス中に削除されなかったポッドを検出するメカニズムを強化し、メンテナンスウィンドウ中にクリーンアッププロセスを拡張して、`reusePVC` フラグが false に設定されている場合にスケジュール不可のポッドを含めます#2056
- WAL ファイルに新しいシャットダウンチェックポイントエントリが導入されるのを回避するために、ブートストラップ中に VolumeSnapshot を使用する新しく作成されたレプリカの `pg_rewind` 実行を無効にします。これにより、レプリカは問題なくプライマリに再接続できます。それ以外の場合、追加のチェックポイントエントリ#5081 によって妨げられます。
- 新しいインスタンスの初期化中の障害を正常に処理します。失敗した初期化からの残りのデータは、削除されるか、有効な PostgreSQL データディレクトリである場合は、バックアップの場所に移動して、データ損失の可能性を回避します。#5112
- 初期バックアップ失敗#4982 時の再試行ロジックを実装することにより、即時バックアップリコンサイラーの堅牢性を強化します。
- `postmaster` を再度起動する前に、`postmaster` がシャットダウンするのを待ってください #4938
- `pg_database` メトリックモニタリングとアラートプロセスから不変データベースを除外します#4980
- オペレーターサービスアカウント#4911 から不要な権限を削除しました。
- オペレーターイメージがアップグレードされたときに、オペレーターが `Pooler` インスタンスのロールアウトを開始するように保証 #5006
- `postmaster` にアクセスできた場合でも、PostgreSQL の再起動後に readness probe が誤って「notready」を表示する原因となる競合状態を修正しました#4920
- `Pooler` #4967 によって所有されていないリソースのリコンシリエーションを防止します。
- DNS サブジェクト代替名 SAN が更新されたときに、オペレーターが管理する証明書を更新します #3269、#3319。
- 未指定の場合にのみテンプレートに PVC デフォルト `AccessModes` を設定します #4845
- 満足できないバックアップスケジュール#5109 を正常に処理します。
- `cnpg` プラグイン
- `status` コマンドの実行中にエラーを適切に処理します。

- status コマンドで TLS をサポート#4915

バージョン 1.22.4

発売日 2024 年 6 月 12 日

> **警告:** バージョン 1.22 は、2024 年 7 月 24 日にエンドオブライフ EOL が近づいています。まだ行っていない場合は、速やかにアップグレードの計画を開始して、継続的なサポートとセキュリティを確保してください。

機能強化

- 物理バックアップを使用したリカバリー中のスタンバイ依存パラメーターの構成を有効にしました#4564
- .spec.livenessProbeTimeout オプションを介した liveness プローブタイムアウトの構成を有効にしました#4719
- kubectl :
- の cnpg プラグイン --color オプションを追加することにより、プラグインでの ANSI カラーのサポートを強化しました。これは、always 、never 、および auto デフォルトを受け入れます。#4775
- macOS ユーザーの Homebrew でプラグインが利用できるようになりました。#4602)

修正

- フェンスされたインスタンスが不要なループに入り、使用可能なすべての CPU を消費するのを防ぎました#4625
- プライマリのインスタンスマネージャーが、停止操作に続いて障害が発生した後、インスタンスが起動するのを無期限に待機する問題を解決しました#4434
- hot_standby_feedback と管理対象クラスターレベルのレプリケーションスロット間の相互作用により、自動バキュームが正しく動作しない問題を修正しました。この問題は、ディスク領域がデッドタプルによって占有されたままになっている原因でした#4811
- ポッドコンテナのステータスが欠落しているときに発生したバックアップコントローラのパニックを修正しました#4765
- インスタンスマネージャーの不要なシャットダウンを防止 #4670
- PostgreSQL 構成が変更されない場合の不必要なリロードを防止#4531
- コンテンツを書き込む一貫した一意の方法を保証することにより、ident マップの不必要なリロードを防止しました#4648
- リソースのステータスを更新する代わりにパッチを適用することにより、フェーズ登録中の競合を回避しました#4637

- PostgreSQL を再起動し、フェンシングをリフティングするときにタイムアウトを実装しました#4504
- アーカイブモードを適切に設定するための昇格後にレプリカクラスターが再起動されるようにした #4399
- ボリュームスナップショットバックアップでランダムな障害を引き起こしていた不要なコンカレントキープアライブルーチンを削除しました#4768
- pgaudit.log_rows オプションが有効になっているときに返される追加行フィールドの正しい解析を保証し、監査ログが通常のログストリームに誤ってルーティングされるのを防ぎます#4394
- kubectl 用の cnpg プラグイン
- cnpg status コマンドを使用した PDB のリストに関する問題を解決しました #4530

変更

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.3 に設定した#4584
- 名前空間オブジェクトのすべての RBAC 要件を削除しました #4753

バージョン 1.22.3

発売日 2024 年 4 月 24 日

機能強化

- ユーザーは wal_log_hints PostgreSQL パラメーターを構成できるようになりました #4218 #4218
- 自動的に生成されたシークレットの URI の完全修飾ドメイン名 FQDN #4095
- クラスターの復元中にクラスターが所有していないインスタンスポッドのクリーンアップ#4141
- recovery ブートストラップで barman-cloud-wal-restore を呼び出す際のエラー検出 #4101

修正

- スイッチオーバーの前に、選択されたレプリカがストリーミングレプリケーションにあることを確認しました#4288
- インスタンスの LSN をソートするときにその解析エラーを正しく処理する#4283
- 昇格できる正常なスタンバイがない場合は、プライマリポッドを再作成します#4132
- リストアジョブが失敗した場合の PGDATA のクリーンアップ #4151
- 構成の更新時に証明書をリロードします #3705
- kubectl の cnpg プラグイン
- destroy 、fencing 、および promote プラグインコマンドの引数処理を改善します#4280

- cnpg status のバックアップの進行状況のパーセンテージを正しく処理します#4131
- 13b_tran にシーケンスのないデータベース
- #4346)

変更点

- Grafana ダッシュボードは次の場所にあります。https://github.com/cloudnative-pg/grafana-dashboards #4154

バージョン 1.22.2

発売日 2024 年 3 月 14 日

機能強化

- PostgreSQL で wal_level GUC のカスタマイズを許可する #4020
- cnpg.io/skipWalArchiving アノテーションを追加して、enabled に設定されている場合に WAL アーカイブを無効にします #4055
- publication および subscription コマンドグループで kubectl の cnpg プラグインを強化して、PostgreSQL ネイティブ論理レプリケーションを強制的にセットアップする#4052
- オペレーターによって処理される TLS 証明書の自動管理のために CERTIFICATE_DURATION および EXPIRING_CHECK_THRESHOLD のカスタマイズを許可します #3686
- インプレース更新中に、実行中のオペレーターイメージの対応するカタログから正しいアーキテクチャのバイナリを取得し、オペレーターがサポートされているアーキテクチャを備えたポッドに正しいバイナリを注入できるようにします#3840
- kubectl の cnpg プラグインを使用したタブ補完の初期サポートを導入します #3875

修正

- PVC グループラベルをポッド上のラベルと適切に同期します。すべてのポッドが削除され、オペレーターが最初にどのポッドを再作成するかを決定する必要がある場合に重要な側面#3930
- レプリカのクローンを作成するときに wal_sender_timeout を無効にして、接続が遅いことによるタイムアウトエラーを防ぐ #4080
- リカバリブートストラップ手順を開始する前にボリュームスナップショットの準備ができていることを確認し、不完全なバックアップによるリカバリがエラーループに入るエラー状態を防止します #3663
- 管理対象ロールで接続制限の設定を解除するときのエラーループの防止 #3832

- インスタンスポッドは削除されたが、クラスターステータスのハイバーネーション条件が false に設定されたままである、ハイバーネーションのコーナーケースを解決します#3970
- Barman Cloud の Google Cloud 機能を正しく検出する #3931

セキュリティ

- OLM のオペレーター権限に `ClusterRole` の代わりに `Role` を使用し、名前空間ごとにインストールするときに必要な特権が少なくなります#3855、#3990
- PgBouncer プーラーの SQL クエリーで完全修飾オブジェクト名を適用する #4080

変更

- Kubernetes の推奨事項に従って、マニフェストのクライアントサイドからサーバーサイドのアプリケーションに切り替えます。オペレーター#3729 のインストール時に、デフォルトで`--server-side` オプションが必要です。
- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.2#3823 に設定します。

バージョン 1.22.1

発売日 2024 年 2 月 2 日

機能強化

- `ephemeralVolumeSource` オプションからクレームテンプレートを使用して、Postgres クラスターの一時ボリュームストレージを調整する#3678
- `kubectl` の `cnpg` プラグインに `pgadmin4` コマンドを導入し、特定のデータベースクラスターへの接続をデモンストレーションし、種類などのローカル環境でそのコンテンツをナビゲートする簡単な方法を提供します- 評価目的のみ #3701
- ユーザー名マップのリストを介して、`.spec.postgresql.pg_ident` スタンザを介して PostgreSQL の ident マップファイルのカスタマイズを許可します#3534

修正

- `ALTER SYSTEM` SQL コマンドが無効になっているクラスターで `postgresql.auto.conf` が読み取り専用であるため、 `pg_rewind` が失敗するという回復不能な問題を防ぐ - デフォルト #3728
- ボリュームスナップショットからのテーブルスペースの適切なリカバリー#3682
- インポートプロセス中に PostgreSQL インスタンスの耐久性設定を無効にすることにより、`initdb` ブートストラップ方法のインポート機能を使用する際のディスク領域不足のリスクを削減します。#3743
- 誤ったリソース量の比較によるポッドの再起動を回避します。“1 != 1000m”#3706
- `pgpass` 接続フィールドの予約文字を適切にエスケープする #3713

- `.spec.projectedVolumeTemplate.sources` でゼロと nil の異なる値を考慮することにより、ポッドの体系的なロールアウトを防止#3647
- `override.conf` に組み込まれたオプションを `postgresql.auto.conf` からプルーニングすることにより、構成の一貫性を確保します #3773

バージョン 1.22.0

発売日 2023 年 12 月 21 日

機能

- **宣言的テーブルスペース** `Cluster` 仕様に `tablespaces` スタンザを導入し、PostgreSQL テーブルスペースの包括的なライフサイクル管理を有効にして、垂直スケーラビリティを強化します#3410
- **一時テーブルスペース** `.spec.tablespaces[*].temporary` オプションを追加して、名前を `temp_tablespaces` PostgreSQL パラメーター#3464 に組み込むことにより、一時的なデータベース操作でのテーブルスペースの利用を促進します。

セキュリティ

- デフォルトでは、TLSv1.3 はすべての PostgreSQL 12 以降のインストールに適用されます。さらに、ユーザーは `ssl_ciphers` 、`ssl_min_protocol_version` 、および `ssl_max_protocol_version` GUC#3408 を構成できます。
- セキュリティ対策を強化するための Docker イメージスキャンの Dockle および Snyk の統合#3300

機能強化

- 外部クラスターのリコンシリエーションの向上#3533
- `ALTER SYSTEM` コマンドを有効/無効にする機能の導入 #3535
- `Cluster` および `Pooler` リソースの `.spec.monitoring` スタンザの `podMonitorMetricRelabelings` および `podMonitorRelabelings` オプションを介した Prometheus の動的なリラベル付けのサポート #3075
- オブジェクトストアバックアップ#2940 とともにボリュームスナップショットを考慮することにより、最初の復旧可能ポイントと最後に成功したバックアップの計算を強化しました。
- PostgreSQL へのネットワーク接続を確立する際の `PGPASSFILE` 環境変数の使用を削除 #3522
- クラスターの PVC を収集することにより `cnpg report` プラグインコマンドを改善しました #3357
- `cnpg status` プラグインコマンドの強化、アラートを含む管理対象ロールに関する情報を提供します#3310
- OLM 展開に適した、オペレーター用の Red Hat UBI 8 コンテナイメージの導入。

- 接続プーラー
- Pooler リソースのインスタンスを 0 にスケールダウンすることが可能になりました#3517.
- 値が’pooler’である cnpg.io/podRole ラベルをすべてのプーラー展開に追加し、インスタンスポッドと区別します#3396

修正

- PodDisruptionBudget リソース#3312 および#3434 のメタデータ、アノテーション、およびラベルの調整。
- 管理対象資格情報シークレットのメタデータの調整 #3316
- 本文の読み取りエラーが全体的なエラーとして処理され、バックアッププロセスが無期限にスタックしたままになるバックアップスナップショットコードのバグの解決#3321。
- immediate-checkpoint または wait-for-archive オプションが要求された場合の cnpg backup プラグインコマンドを使用したオンラインバックアップの暗黙的な設定#3449
- pg_basebackup を介して参加する場合の wal_sender_timeout の無効化 #3586
- 外部クラスターが使用するシークレットのリロード #3565
- 接続プーラー
- コントローラーが Pooler リソースが所有するすべてのシークレットを監視するように保証#3428.
- Pooler リソースの RoleBinding の調整#3391.
- Pooler リソースの imagePullSecret の調整#3389 Reconciliation of16_service Pooler の、必要なラベルの追加#3349.
- ポッドだけでなく展開への Pooler ラベルの拡張#3350。

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.1#3270 に設定します。
- ALTER SYSTEM コマンドはデフォルトで無効になりました#3545

57.4.2 CloudNativePG 1.21 のリリースノート

CloudNativePG の 1.21 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.21.6

発売日 2024 年 6 月 12 日

> **警告:** これは、1.21.X シリーズの最後のリリースになる予定です。ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

機能強化

- 物理バックアップを使用したリカバリー中のスタンバイ依存パラメーターの構成を有効にしました #4564
- `.spec.livenessProbeTimeout` オプションを介した liveness プローブタイムアウトの構成を有効にしました#4719
- `kubectl` :
- の `cnpg` プラグイン `--color` オプションを追加することにより、プラグインでの ANSI カラーのサポートを強化しました。これは、`always` 、`never` 、および `auto` デフォルトを受け入れます。#4775
- macOS ユーザーの Homebrew でプラグインが利用できるようになりました。#4602)

修正

- フェンスされたインスタンスが不要なループに入り、使用可能なすべての CPU を消費するのを防ぎました#4625
- プライマリのインスタンスマネージャーが、停止操作に続いて障害が発生した後、インスタンスが起動するのを無期限に待機する問題を解決しました#4434
- `hot_standby_feedback` と管理対象クラスターレベルのレプリケーションスロット間の相互作用により、自動バキュームが正しく動作しない問題を修正しました。この問題は、ディスク領域がデッドタプルによって占有されたままになっている原因でした#4811
- ポッドコンテナのステータスが欠落しているときに発生したバックアップコントローラのパニックを修正しました#4765
- インスタンスマネージャーの不要なシャットダウンを防止 #4670
- PostgreSQL 構成が変更されない場合の不必要なリロードを防止#4531
- コンテンツを書き込む一貫した一意の方法を保証することにより、ident マップの不必要なリロードを防止しました#4648
- リソースのステータスを更新する代わりにパッチを適用することにより、フェーズ登録中の競合を回避しました#4637
- PostgreSQL を再起動し、フェンシングをリフティングするときにタイムアウトを実装しました#4504

- アーカイブモードを適切に設定するための昇格後にレプリカクラスターが再起動されるようにした #4399
- ボリュームスナップショットバックアップでランダムな障害を引き起こしていた不要なコンカレントキープアライブルーチンを削除しました#4768
- pgaudit.log_rows オプションが有効になっているときに返される追加行フィールドの正しい解析を保証し、監査ログが通常のログストリームに誤ってルーティングされるのを防ぎます#4394
- kubectl 用の cnpg プラグイン
- cnpg status コマンドを使用した PDB のリストに関する問題を解決しました #4530

変更

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.3 に設定した#4584
- 名前空間オブジェクトのすべての RBAC 要件を削除しました #4753

バージョン 1.21.5

発売日 2024 年 4 月 24 日

機能強化

- ユーザーは wal_log_hints PostgreSQL パラメーターを構成できるようになりました #4218 #4218
- 自動的に生成されたシークレットの URI の完全修飾ドメイン名 FQDN #4095
- クラスターの復元中にクラスターが所有していないインスタンスポッドのクリーンアップ#4141
- recovery ブートストラップで barman-cloud-wal-restore を呼び出す際のエラー検出 #4101

修正

- スイッチオーバーの前に、選択されたレプリカがストリーミングレプリケーションにあることを確認しました#4288
- インスタンスの LSN をソートするときにその解析エラーを正しく処理する#4283
- 昇格できる正常なスタンバイがない場合は、プライマリポッドを再作成します#4132
- リストアジョブが失敗した場合の PGDATA のクリーンアップ #4151
- 構成の更新時に証明書をリロードします #3705
- kubectl の cnpg プラグイン
- destroy 、fencing 、および promote プラグインコマンドの引数処理を改善します#4280
- cnpg status のバックアップの進行状況のパーセンテージを正しく処理します#4131

- 13b_tran にシーケンスのないデータベース
- #4346)

変更点

- Grafana ダッシュボードは次の場所にあります。https://github.com/cloudnative-pg/grafana-dashboards #4154

バージョン 1.21.4

発売日 2024 年 3 月 14 日

機能強化

- PostgreSQL で `wal_level` GUC のカスタマイズを許可する #4020
- `cnpg.io/skipWalArchiving` アノテーションを追加して、`enabled` に設定されている場合に WAL アーカイブを無効にします #4055
- `publication` および `subscription` コマンドグループで `kubectl` の `cnpg` プラグインを強化して、PostgreSQL ネイティブ論理レプリケーションを強制的にセットアップする#4052
- オペレーターによって処理される TLS 証明書の自動管理のために `CERTIFICATE_DURATION` および `EXPIRING_CHECK_THRESHOLD` のカスタマイズを許可します #3686
- `kubectl` の `cnpg` プラグインを使用したタブ補完の初期サポートを導入します #3875
- インプレース更新中に、実行中のオペレーターイメージの対応するカタログから正しいアーキテクチャのバイナリを取得し、オペレーターがサポートされているアーキテクチャを備えたポッドに正しいバイナリを注入できるようにします#3840

修正

- PVC グループラベルをポッド上のラベルと適切に同期します。すべてのポッドが削除され、オペレーターが最初にどのポッドを再作成するかを決定する必要がある場合に重要な側面#3930
- レプリカのクローンを作成するときに `wal_sender_timeout` を無効にして、接続が遅いことによるタイムアウトエラーを防ぐ #4080
- リカバリブートストラップ手順を開始する前にボリュームスナップショットの準備ができていることを確認し、不完全なバックアップによるリカバリがエラーループに入るエラー状態を防止します #3663
- 管理対象ロールで接続制限の設定を解除するときのエラーループの防止 #3832
- インスタンスポッドは削除されたが、クラスターステータスのハイバーネーション条件が false に設定されたままである、ハイバーネーションのコーナーケースを解決します#3970

- Barman Cloud の Google Cloud 機能を正しく検出する #3931

セキュリティ

- OLM のオペレーター権限に `ClusterRole` の代わりに `Role` を使用し、名前空間ごとにインストールするときに必要な特権が少なくなります#3855、#3990
- PgBouncer プーラーの SQL クエリーで完全修飾オブジェクト名を適用する #4080

変更

- Kubernetes の推奨事項に従って、マニフェストのクライアントサイドからサーバーサイドのアプリケーションに切り替えます。オペレーター#3729 のインストール時に、デフォルトで`--server-side` オプションが必要です。
- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.2#3823 に設定します。

バージョン 1.21.3

発売日 2024 年 2 月 2 日

機能強化

- `ephemeralVolumeSource` オプションからクレームテンプレートを使用して、Postgres クラスターの一時ボリュームストレージを調整する#3678
- `kubectl` の `cnpg` プラグインに `pgadmin4` コマンドを導入し、特定のデータベースクラスターへの接続をデモンストレーションし、種類などのローカル環境でそのコンテンツをナビゲートする簡単な方法を提供します- 評価目的のみ #3701
- ユーザー名マップのリストを介して、`.spec.postgresql.pg_ident` スタンザを介して PostgreSQL の ident マップファイルのカスタマイズを許可します#3534

修正

- `ALTER SYSTEM` SQL コマンドが無効になっているクラスターで `postgresql.auto.conf` が読み取り専用であるため、 `pg_rewind` が失敗するという回復不能な問題を防ぐ - デフォルト #3728
- インポートプロセス中に PostgreSQL インスタンスの耐久性設定を無効にすることにより、`initdb` ブートストラップ方法のインポート機能を使用する際のディスク領域不足のリスクを削減します。#3743
- 誤ったリソース量の比較によるポッドの再起動を回避します。“1 != 1000m”#3706
- `pgpass` 接続フィールドの予約文字を適切にエスケープする #3713

- .spec.projectedVolumeTemplate.sources でゼロと nil の異なる値を考慮することにより、ポッドの体系的なロールアウトを防止#3647
- override.conf に組み込まれたオプションを postgresql.auto.conf からプルーニングすることにより、構成の一貫性を確保します #3773

バージョン 1.21.2

発売日 2023 年 12 月 21 日

セキュリティ

- デフォルトでは、TLSv1.3 はすべての PostgreSQL 12 以降のインストールに適用されます。さらに、ユーザーは ssl_ciphers 、ssl_min_protocol_version 、および ssl_max_protocol_version GUC#3408 を構成できます。
- セキュリティ対策を強化するための Docker イメージスキャンの Dockle および Snyk の統合#3300

機能強化

- 外部クラスターのリコンシリエーションの向上#3533
- ALTER SYSTEM コマンドを有効/無効にする機能の導入 #3535
- Cluster および Pooler リソースの.spec.monitoring スタンザの podMonitorMetricRelabelings および podMonitorRelabelings オプションを介した Prometheus の動的なリラベル付けのサポート #3075
- オブジェクトストアバックアップ#2940 とともにボリュームスナップショットを考慮することにより、最初の復旧可能ポイントと最後に成功したバックアップの計算を強化しました。
- PostgreSQL へのネットワーク接続を確立する際の PGPASSFILE 環境変数の使用を削除 #3522
- クラスターの PVC を収集することにより cnpg report プラグインコマンドを改善しました #3357
- cnpg status プラグインコマンドの強化、アラートを含む管理対象ロールに関する情報を提供します#3310
- OLM 展開に適した、オペレーター用の Red Hat UBI 8 コンテナイメージの導入。
- 接続プーラー
- Pooler リソースのインスタンスを 0 にスケールダウンすることが可能になりました#3517.
- 値が’pooler’である cnpg.io/podRole ラベルをすべてのプーラー展開に追加し、インスタンスポッドと区別します#3396

修正

- PodDisruptionBudget リソース#3312 および#3434 のメタデータ、アノテーション、およびラベルの調整。
- 管理対象資格情報シークレットのメタデータの調整 #3316
- 本文の読み取りエラーが全体的なエラーとして処理され、バックアッププロセスが無期限にスタックしたままになるバックアップスナップショットコードのバグの解決#3321。
- immediate-checkpoint または wait-for-archive オプションが要求された場合の cnpg backup プラグインコマンドを使用したオンラインバックアップの暗黙的な設定#3449
- pg_basebackup を介して参加する場合の wal_sender_timeout の無効化 #3586
- 外部クラスターが使用するシークレットのリロード #3565
- 接続プーラー
- コントローラーが Pooler リソースが所有するすべてのシークレットを監視するように保証#3428.
- Pooler リソースの RoleBinding の調整#3391.
- Pooler リソースの imagePullSecret の調整#3389 Reconciliation of16_service Pooler の、必要なラベルの追加#3349.
- ポッドだけでなく展開への Pooler ラベルの拡張#3350。

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.1#3270 に設定します。

バージョン 1.21.1

発売日 2023 年 11 月 3 日

機能強化

- 物理的オンラインベースバックアップ用の PostgreSQL API を使用して、ボリュームスナップショットを使用したオンライン/ホットバックアップのサポートを導入します。特定の Postgres クラスターのホット/コールドバックアップのデフォルト構成は、online オプションと .spec.backup.volumeSnapshot の onlineConfiguration スタンザを介して制御できます。明示的に設定しない限り、ボリュームスナップショットのバックアップはデフォルトでオンラインで取得されるようになりました#3102
- ScheduledBackup および Backup リソースを使用して、ボリュームスナップショットバックアップで上記のデフォルト設定をオーバーライドする機能を導入します#3208、#3226
- ターゲットインスタンススタンバイまたはプライマリがフェンスされる時間枠を削減することにより、ボリュームスナップショットのコールドバックアップを強化します。ボリュームスナップショット

がカットおよびプロビジョニングされたらすぐにリフトすることにより、ボリュームスナップショットのコールドバックアップを強化します#3210

- ボリュームスナップショットからのリカバリー中に、既存のラベルと注釈を検証することにより、提供されたボリュームスナップショットがコヒーレントであることを確認します
- kubectl の cnpg プラグインの backup コマンドは、--online 、--immediate-checkpoint 、および--wait-for-archive ランタイムオプションを介してボリュームスナップショットバックアップエクスペリエンスを向上させます
- アクティブなストリーミングベースバックアップの進行状況情報を使用して、kubectl の cnpg プラグインの status コマンドを強化します#3101
- pgBouncer Pooler リソースを使用した max_prepared_statements の構成を許可します #3174

修正

- スイッチオーバー中に WAL アーカイブを一時停止し、完了時に再開します#3227
- PostgreSQL クラスターを管理するときにインスタンスマネージャーが常に synchronous_commit = local を使用するように保証#3143
- .spec.certificates.replicationTLSSecret を介したストリーミングレプリケーションユーザーのカスタム証明書が機能するようになりました#3209
- cnpg.io/cluster ラベルを Pooler ポッドに設定します #3153
- VolumeSnapshots リソースのラベルの数を減らし、より適切なアノテーションにレンダリングします#3151

変更点

- 1.21.0 で導入されたボリュームスナップショットバックアップは、デフォルトでオンライン/ホットになりました。オフライン/コールドバックアップを復元するには、.spec.backup.volumeSnapshot を false に設定します
- Postgres レプリケーション設定を制御するために PGDATA 内の postgresql.auto.conf ファイルの使用を停止し、override.conf という名前のファイルに置き換えます #2812

技術的な強化

- インスタンスマネージャーで PostgreSQL の拡張クエリプロトコルを使用する#3152

バージョン 1.21.0

発売日 2023 年 10 月 12 日

機能

- **バックアップとリカバリーのボリュームスナップショットのサポート**ボリュームスナップショットで標準の Kubernetes API を活用して、バックアップとリカバリー操作の両方でインクリメンタルおよび差分コピーなどの機能を利用します。スタンバイからのコールドバックアップをカバーするこの最初のステップは、1.22 でも継続され、PostgreSQL API とテーブルスペースを使用したホットバックアップのサポートになります。
- **OLM インストール方法**_stable_チャネルを介して最新のマイナーリリースの最新パッチバージョンの OperatorHub.io を介して Operator Lifecycle Manager のサポートを導入します。「EDB Postgres for Kubernetes 」オペレーターのバンドルを寄付し、CloudNativePG に適応させてくださった EDB に感謝します。

重要な変更

- `stopDelay` のデフォルト値を 30 秒ではなく 1800 秒に変更します #2848
- Postgres のスマートシャットダウンが完了するために予約された時間枠を制御するための `smartShutdownTimeout` と呼ばれる新しいパラメーターを導入します。Postgres を停止するまでの全体的なタイムアウトを計算する一般的な式は `max(stopDelay - smartShutdownTimeout, 30)` #2848
- `startDelay` のデフォルト値を 30 秒ではなく 3600 に変更します #2847
- livenessProbe の初期遅延をより適切な Kubernetes 起動プローブに置き換えて、Postgres サーバーの起動に対処する#2847
- `switchoverDelay` のデフォルト値を 40000000 秒ではなく 3600 秒に変更します #2846
- セキュリティのためにデフォルトでスーパーユーザーアクセスを無効にする#2905
- デフォルトで HA のレプリケーションスロットを有効にする #2903
- `postgresql` label のサポートを停止します - 1.18 の `cnpg.io/cluster` に置き換えられました#2744

セキュリティ

- デフォルトの `seccompProfile` をオペレーター展開に追加します #2926

機能強化

- ボリュームスナップショットの一貫したセットからのレプリカクラスターのブートストラップを有効にする#2647
- 一貫したボリュームスナップショットのセットからの完全なポイントインタイムリカバリーを有効にする#2390
- `cnpg.io/coredumpFilter` アノテーションを導入して、PostgreSQL クラッシュが発生した場合に生成されるコアダンプの内容を制御します。デフォルトでは、ダンプから共有メモリセグメントを除外するように設定されています#2733
- 共有メモリと一時データのエフェメラルボリュームのエフェメラルストレージ制限を構成できます #2830
- Webhook を介したリソース制限と要求を検証する #2663
- PostgreSQL の `shared_buffers` がポッドの割り当てられたメモリリソースとコヒーレントであることを確認します#2840
- 資格情報シークレットに `uri` および `jdbc-uri` フィールドを追加して、開発者がアプリケーションをデータベースに接続するときに容易にします#2186
- レプリカの準備が整うのを待機するクラスターの状態をより詳細に制御するための新しいフェーズ `Waiting for the instances to become active` を追加します #2612
- `podSpec` アノテーションを介したポッドのロールアウト条件の検出を向上させます#2243
- プライマリタイムスタンプとアップタイムを kubectl プラグインの `status` コマンドに追加します #2953

修正

- プライマリロールで準備ができている PVC を優先することにより、プライマリインスタンスが常に最初に再作成されるようにします#2544
- リカバリー中に `cnpg.io/skipEmptyWalArchiveCheck` アノテーションを尊重して、空の WAL アーカイブのチェックをバイパスします#2731
- PostgreSQL サーバーはダウンしているが、ポッドがプライマリでアップしているときに、クラスターがスタックするのを防ぐ#2966
- レプリケーションスロットが有効になっているときに、レプリカクラスターの指定されたプライマリを通常の HA レプリカとして扱わないようにします#2960
- セレクターが変更されるたび、またはラベル/注釈を変更する必要がある場合にサービスを調整します#2918
- リカバリブートストラップ中に所有者とデータベースの両方をデフォルト `app` に設定する #2957
- キャッシュされたクラスターでの書き込み-読み取りの同時実行を回避する#2884
- 空の項目を削除し、一意に作成し、生成されたロールの `ResourceName` セクションでソート #2875

- エラーが発生した場合に、ContinuousArchiving 条件が適切に’failed’に設定されていることを確認します #2625
- バックアップが完了または失敗した場合にのみ停止することにより、中断に対する Backup リソース調整サイクルの復元力を高めます #2591
- PodMonitor labels および annotations を調整する #2583
- Role オブジェクトの RBAC resourceNames の欠落によるバックアップ失敗を修正しました #2956
- 可観測性
- TCP ポートラベルをデフォルトの pg_stat_replication メトリックに追加します #2961
- プロメテウスの pg_wal_stat デフォルトメトリックを修正します #2569
- プロメテウスの pg_replication のデフォルトメトリックを改善します#2744 および#2750
- 代わりに edb_traned_13 edb_13 を使用します提供された Grafana ダッシュボード
- メトリック収集で standard_conforming_strings を適用する #2888

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.0 に設定します
- フェンシングは、スマートシャットダウンの代わりに PostgreSQL の高速シャットダウンを使用してインスタンスを停止するようになりました#3051
- Webhook の名前を kb.io から cnpg.io グループに変更します #2851
- kubectl プラグインの cnpg snapshot コマンドを cnpg backup -m volumeSnapshot に置き換えます
- cnpg hibernate プラグインコマンドで PVC の ClusterManifestAnnotationName および PgControldataAnnotationName アノテーションを使用させましょう #2657
- cnpg.io/instanceRole ラベルを追加しますが、既存の role ラベルを非推奨にします #2915

技術的な強化

- API リファレンスドキュメントを自動的にビルドするように k8s-api-docgen を gen-crd-api-reference-docs に置き換えます #2606

57.4.3 CloudNativePG 1.20 のリリースノート

CloudNativePG の 1.20 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.20.6

発売日 2024 年 2 月 2 日

> **警告:** これは、1.20.X シリーズの最後のリリースになる予定です。ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

機能強化

- `ephemeralVolumeSource` オプションからクレームテンプレートを使用して、Postgres クラスターの一時ボリュームストレージを調整する#3678
- `kubectl` の `cnpg` プラグインに `pgadmin4` コマンドを導入し、特定のデータベースクラスターへの接続をデモンストレーションし、種類などのローカル環境でそのコンテンツをナビゲートする簡単な方法を提供します- 評価目的のみ #3701
- ユーザー名マップのリストを介して、`.spec.postgresql.pg_ident` スタンザを介して PostgreSQL の ident マップファイルのカスタマイズを許可します#3534

修正

- `ALTER SYSTEM` SQL コマンドが無効になっているクラスターで `postgresql.auto.conf` が読み取り専用であるため、 `pg_rewind` が失敗するという回復不能な問題を防ぐ - デフォルト #3728
- インポートプロセス中に PostgreSQL インスタンスの耐久性設定を無効にすることにより、`initdb` ブートストラップ方法のインポート機能を使用する際のディスク領域不足のリスクを削減します。#3743
- 誤ったリソース量の比較によるポッドの再起動を回避します。 “1 != 1000m”#3706
- `pgpass` 接続フィールドの予約文字を適切にエスケープする #3713
- `.spec.projectedVolumeTemplate.sources` でゼロと nil の異なる値を考慮することにより、ポッドの体系的なロールアウトを防止#3647

バージョン 1.20.5

発売日 2023 年 12 月 21 日

セキュリティ

- デフォルトでは、TLSv1.3 はすべての PostgreSQL 12 以降のインストールに適用されます。さらに、ユーザーは `ssl_ciphers`、`ssl_min_protocol_version`、および `ssl_max_protocol_version` GUC#3408 を構成できます。
- セキュリティ対策を強化するための Docker イメージスキャンの Dockle および Snyk の統合#3300

機能強化

- 外部クラスターのリコンシリエーションの向上#3533
- `ALTER SYSTEM` コマンドを有効/無効にする機能の導入 #3535
- `Cluster` および `Pooler` リソースの `.spec.monitoring` スタンザの `podMonitorMetricRelabelings` および `podMonitorRelabelings` オプションを介した Prometheus の動的なリラベル付けのサポート #3075
- PostgreSQL へのネットワーク接続を確立する際の `PGPASSFILE` 環境変数の使用を削除 #3522
- クラスターの PVC を収集することにより `cnpg report` プラグインコマンドを改善しました #3357
- `cnpg status` プラグインコマンドの強化、アラートを含む管理対象ロールに関する情報を提供します#3310
- 接続プーラー
  - `Pooler` リソースのインスタンスを 0 にスケールダウンすることが可能になりました#3517.
  - 値が’pooler’である `cnpg.io/podRole` ラベルをすべてのプーラー展開に追加し、インスタンスポッドと区別します#3396

修正

- `PodDisruptionBudget` リソース#3312 および#3434 のメタデータ、アノテーション、およびラベルの調整。
- 管理対象資格情報シークレットのメタデータの調整 #3316
- 本文の読み取りエラーが全体的なエラーとして処理され、バックアッププロセスが無期限にスタックしたままになるバックアップスナップショットコードのバグの解決#3321。
- `immediate-checkpoint` または `wait-for-archive` オプションが要求された場合の `cnpg backup` プラグインコマンドを使用したオンラインバックアップの暗黙的な設定#3449
- pg_basebackup を介して参加する場合の wal_sender_timeout の無効化 #3586
- 外部クラスターが使用するシークレットのリロード #3565
- 接続プーラー
  - コントローラーが`Pooler` リソースが所有するすべてのシークレットを監視するように保証#3428.
  - `Pooler` リソースの `RoleBinding` の調整#3391.

  - Pooler リソースの imagePullSecret の調整#3389 Reconciliation of16_service Pooler の、必要なラベルの追加#3349.
  - ポッドだけでなく展開への Pooler ラベルの拡張#3350。

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.1#3270 に設定します。

バージョン 1.20.4

発売日 2023 年 11 月 3 日

機能強化

- アクティブなストリーミングベースバックアップの進行状況情報を使用して、kubectl の cnpg プラグインの status コマンドを強化します#3101
- pgBouncer Pooler リソースを使用した max_prepared_statements の構成を許可します #3174

修正

- スイッチオーバー中に WAL アーカイブを一時停止し、完了時に再開します#3227
- PostgreSQL クラスターを管理するときにインスタンスマネージャーが常に synchronous_commit = local を使用するように保証#3143
- .spec.certificates.replicationTLSSecret を介したストリーミングレプリケーションユーザーのカスタム証明書が機能するようになりました#3209
- cnpg.io/cluster ラベルを Pooler ポッドに設定します #3153

変更点

- Postgres レプリケーション設定を制御するために PGDATA 内の postgresql.auto.conf ファイルの使用を停止し、override.conf という名前のファイルに置き換えます #2812

技術的な強化

- インスタンスマネージャーで PostgreSQL の拡張クエリプロトコルを使用する#3152

バージョン 1.20.3

発売日 2023 年 10 月 11 日

重要な変更

- stopDelay のデフォルト値を 30 秒ではなく 1800 秒に変更します #2848
- Postgres のスマートシャットダウンが完了するために予約された時間枠を制御するための smartShutdownTimeout と呼ばれる新しいパラメーターを導入します。Postgres を停止するまでの全体的なタイムアウトを計算する一般的な式は max(stopDelay - smartShutdownTimeout, 30) #2848

- `startDelay` のデフォルト値を 30 秒ではなく 3600 に変更します #2847
- livenessProbe の初期遅延をより適切な Kubernetes 起動プローブに置き換えて、Postgres サーバーの起動に対処する#2847
- `switchoverDelay` のデフォルト値を 40000000 秒ではなく 3600 秒に変更します #2846
- `postgresql` label のサポートを停止します - 1.18 の `cnpg.io/cluster` に置き換えられました#2744

セキュリティ

- デフォルトの `seccompProfile` をオペレーター展開に追加します #2926

機能強化

- `cnpg.io/coredumpFilter` アノテーションを導入して、PostgreSQL クラッシュが発生した場合に生成されるコアダンプの内容を制御します。デフォルトでは、ダンプから共有メモリセグメントを除外するように設定されています#2733
- 共有メモリと一時データのエフェメラルボリュームのエフェメラルストレージ制限を構成できます #2830
- Webhook を介したリソース制限と要求を検証する #2663
- PostgreSQL の `shared_buffers` がポッドの割り当てられたメモリリソースとコヒーレントであることを確認します#2840
- 資格情報シークレットに `uri` および `jdbc-uri` フィールドを追加して、開発者がアプリケーションをデータベースに接続するときに容易にします#2186
- レプリカの準備が整うのを待機するクラスターの状態をより詳細に制御するための新しいフェーズ `Waiting for the instances to become active` を追加します #2612
- `podSpec` アノテーションを介したポッドのロールアウト条件の検出を向上させます#2243
- プライマリタイムスタンプとアップタイムを kubectl プラグインの `status` コマンドに追加します #2953

修正

- プライマリロールで準備ができている PVC を優先することにより、プライマリインスタンスが常に最初に再作成されるようにします#2544
- リカバリー中に `cnpg.io/skipEmptyWalArchiveCheck` アノテーションを尊重して、空の WAL アーカイブのチェックをバイパスします#2731
- PostgreSQL サーバーはダウンしているが、ポッドがプライマリでアップしているときに、クラスターがスタックするのを防ぐ#2966
- レプリケーションスロットが有効になっているときに、レプリカクラスターの指定されたプライマリを通常の HA レプリカとして扱わないようにします#2960
- セレクターが変更されるたび、またはラベル/注釈を変更する必要がある場合にサービスを調整します#2918
- リカバリブートストラップ中に所有者とデータベースの両方をデフォルト `app` に設定する #2957
- キャッシュされたクラスターでの書き込み-読み取りの同時実行を回避する#2884

- 空の項目を削除し、一意に作成し、生成されたロールの ResourceName セクションでソート #2875
- エラーが発生した場合に、ContinuousArchiving 条件が適切に’failed’に設定されていることを確認します #2625
- バックアップが完了または失敗した場合にのみ停止することにより、中断に対する Backup リソース調整サイクルの復元力を高めます #2591
- PodMonitor labels および annotations を調整する #2583
- Role オブジェクトの RBAC resourceNames の欠落によるバックアップ失敗を修正しました #2956
- 可観測性
  - TCP ポートラベルをデフォルトの pg_stat_replication メトリックに追加します #2961
  - プロメテウスの pg_wal_stat デフォルトメトリックを修正します#2569
  - プロメテウスの pg_replication のデフォルトメトリックを改善します #2744 および#2750
  - 代わりに edb_traned_13 edb_13 を使用します提供された Grafana ダッシュボード
  - メトリック収集で standard_conforming_strings を適用する #2888

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.0 に設定します
- フェンシングは、スマートシャットダウンの代わりに PostgreSQL の高速シャットダウンを使用してインスタンスを停止するようになりました#3051
- Webhook の名前を kb.io から cnpg.io グループに変更します #2851
- kubectl プラグインの cnpg snapshot コマンドを cnpg backup -m volumeSnapshot に置き換えます
- cnpg hibernate プラグインコマンドで PVC の ClusterManifestAnnotationName および PgControldataAnnotationName アノテーションを使用させましょう #2657
- cnpg.io/instanceRole ラベルを追加しますが、既存の role ラベルを非推奨にします #2915

技術的な強化

- API リファレンスドキュメントを自動的にビルドするように k8s-api-docgen を gen-crd-api-reference-docs に置き換えます #2606

バージョン 1.20.2

発売日 2023 年 7 月 27 日

機能強化

- kubectl プラグインの新しい logs コマンド、クラスター内のすべてのポッドのログを取得または追跡する #2375
- ポッドで priorityClassName を指定するサポートを追加し、Kubernetes のスケジュール決定を支援します#2043

- CloudNativePG クラスターによるノードの使用状況をモニタするためのメトリックとステータスフィールドを追加します#2257
- ドキュメントのさまざまな機能強化
  - hugepages に関連するトラブルシューティング手順を追加します#1390
  - FAQ ページを拡張します#2344

技術的な強化

- 復元プロセスの先頭にチェックを追加して、続行できることを確認します。できない場合は、改善されたエラー診断を提供します#2419
- 管理対象ロールでの無期限パスワードの処理を改善します#2334

修正

- リカバリターゲット設定のロジックが Postgres のロジックと一致することを確認します#2460
- サービスアカウントの作成中にのみ ownerMetadata を設定することにより、クラスターが所有していないサービスアカウントの引き継ぎを防止します#2462
- initdb およびリストアのための PGDATA ディレクトリの正しいアクセス許可を確認します#2384
- 構成のリロード中にインスタンスマネージャーのクラッシュの可能性を防止#2393
- 失敗したバックアップの後に新しいバックアップが成功した場合に、LastFailedArchiveTime アラートがトリガーされないようにしました #1751
- サービスが非インスタンスポッドをターゲットとしないようにする #2336

セキュリティ

- すべてのプロジェクトの依存関係を最新バージョンに更新しました

バージョン 1.20.1

発売日 2023 年 6 月 12 日

機能強化

- `snapshot` コマンドを `cnpg` プラグインに追加して、Kubernetes `VolumeSnapshot` 標準リソースを使用してスタンバイからクラスターの一貫したコールドバックアップを作成します#1960
- `.spec.bootstrap.recovery.volumeSnapshot` スタンザを介した CSI VolumeSnapshot リソースのセットからのリカバリの最初の実装#1960
- `pg_failover_slots` をマネージド拡張機能に追加します #2057
- ドキュメントとクイックスタートガイドの指示を更新した Grafana ダッシュボードを改善しました #1916
- `import` スタンザに `schemaOnly` オプションを導入して、1 つ以上の既存のデータベースから新しい Postgres クラスターをブートストラップするときにデータのエクスポートおよびインポートを回避します#2234

- インスタンスポッドのスケジュールを管理するための TopologySpreadConstraints のサポートを追加します#2202
- PgBouncer の `Pooler` に `PodMonitor` サポートを追加します#2034
- デフォルトの Kubernetes スケジューラーをオーバーライドするオプションを追加します#2013
- `Pooler` リソースのデプロイメント戦略の構成を許可します #1983
- デフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.3 に更新します#2022
- デフォルトで PgBouncer 1.19 を使用する#2018

技術的な強化

- 更新された k8s 種類のテスト済みバージョン#2054
- 宣言的ロールはパスワードが設定されていない場合を無視し、以前に存在したロールの管理を容易にする必要があります#2029
- 別のトランザクションを使用して、ロールの資格情報を調整します。このパッチの前は、オペレーターは、いずれかが失敗した場合、すべてのロールの同期を元に戻していました#2004
- クラスターの復元中にフェンシングが削除されることを確認します #1987
- ポッド削除時のロギングを改善します #2136

修正

- K3 でのセットアップを妨げる可能性がある k3s エンジンのバインドされていない変数を修正しました#2157
- メトリックで正しい PG バージョンをレポートする #2126
- ドキュメントで正しい walStorage キーを使用する #2140
- オペレーターがインスタンスに接続できない場合に調整を停止し、このような場合に明確な診断を提供します。これは、ネットワークの問題が CloudNativePG の通常のオペレーションを妨げるケースを明確にするのに役立ちます#2145、#2233、および#2242

バージョン 1.20.0

発売日 2023 年 4 月 27 日

特徴

- **宣言的ロール管理** `Cluster` 仕様に `managed.roles` スタンザを導入して、`CREATE ROLE` や `ALTER ROLE` などの PostgreSQL の関連 DDL コマンドに抽象化を提供することにより、データベースロールの完全なライフサイクル管理を提供します#1524、#1793 および#1815)
- **PostgreSQL クラスターの宣言的ハイバーネーション** `cnpg.io/hibernation` と呼ばれる新しいアノテーションを導入して、すべてのポッドを削除し、PVC のみを保持することにより PostgreSQL クラスターを宣言的に冬眠させます。この機能は、インバースプロシージャも実装します#1657

機能強化

- kubectl の cnpg プラグインの report コマンドの--logs オプションを改善して、可能な場合は以前のログも含めます #1811
- -any サービスがデフォルトで無効になりました #1755

セキュリティ

- ローカルファイルを介したオーバーライドを介して SeccompProfile のカスタマイズを有効にします #1827

修正

- サーバーが初めて起動される前に、initdb ブートストラップフェーズ中にユーザーが提供した PostgreSQL 構成を適用します#1858

57.4.4 CloudNativePG 1.19 のリリースノート

CloudNativePG の 1.19 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.19.6

発売日 2023 年 11 月 3 日

> **警告:** これは、1.19.X シリーズの最後のリリースになる予定です。ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

機能強化

- アクティブなストリーミングベースバックアップの進行状況情報を使用して、kubectl の cnpg プラグインの status コマンドを強化します#3101
- pgBouncer Pooler リソースを使用した max_prepared_statements の構成を許可します #3174

修正

- スイッチオーバー中に WAL アーカイブを一時停止し、完了時に再開します#3227
- PostgreSQL クラスターを管理するときにインスタンスマネージャーが常に synchronous_commit = local を使用するように保証#3143
- .spec.certificates.replicationTLSSecret を介したストリーミングレプリケーションユーザーのカスタム証明書が機能するようになりました#3209
- cnpg.io/cluster ラベルを Pooler ポッドに設定します #3153

変更点

- Postgres レプリケーション設定を制御するために PGDATA 内の `postgresql.auto.conf` ファイルの使用を停止し、`override.conf` (#2812) という名前のファイルに置き換えます。

技術的な強化

- インスタンスマネージャーで PostgreSQL の拡張クエリプロトコルを使用する#3152

バージョン 1.19.5

発売日 2023 年 10 月 11 日

> **警告:** バージョン 1.19 は、2023 年 11 月 9 日にサポート終了 EOL に達します。まだ行っていない場合は、できるだけ早くアップグレードの計画を開始してください。

重要な変更

- `stopDelay` のデフォルト値を 30 秒ではなく 1800 秒に変更します #2848
- Postgres のスマートシャットダウンが完了するために予約された時間枠を制御するための `smartShutdownTimeout` と呼ばれる新しいパラメーターを導入します。Postgres を停止するまでの全体的なタイムアウトを計算する一般的な式は `max(stopDelay - smartShutdownTimeout, 30)` #2848
- `startDelay` のデフォルト値を 30 秒ではなく 3600 に変更します #2847
- livenessProbe の初期遅延をより適切な Kubernetes 起動プローブに置き換えて、Postgres サーバーの起動に対処する#2847
- `switchoverDelay` のデフォルト値を 40000000 秒ではなく 3600 秒に変更します #2846
- `postgresql` label のサポートを停止します - 1.18 の `cnpg.io/cluster` に置き換えられました#2744

セキュリティ

- デフォルトの `seccompProfile` をオペレーター展開に追加します #2926

機能強化

- `cnpg.io/coredumpFilter` アノテーションを導入して、PostgreSQL クラッシュが発生した場合に生成されるコアダンプの内容を制御します。デフォルトでは、ダンプから共有メモリセグメントを除外するように設定されています#2733
- 共有メモリと一時データのエフェメラルボリュームのエフェメラルストレージ制限を構成できます #2830
- Webhook を介したリソース制限と要求を検証する #2663
- PostgreSQL の `shared_buffers` がポッドの割り当てられたメモリリソースとコヒーレントであることを確認します#2840
- 資格情報シークレットに `uri` および `jdbc-uri` フィールドを追加して、開発者がアプリケーションをデータベースに接続するときに容易にします#2186

- レプリカの準備が整うのを待機するクラスターの状態をより詳細に制御するための新しいフェーズ `Waiting for the instances to become active` を追加します #2612
- podSpec アノテーションを介したポッドのロールアウト条件の検出を向上させます#2243
- プライマリタイムスタンプとアップタイムを kubectl プラグインの `status` コマンドに追加します #2953

修正

- プライマリロールで準備ができている PVC を優先することにより、プライマリインスタンスが常に最初に再作成されるようにします#2544
- リカバリー中に `cnpg.io/skipEmptyWalArchiveCheck` アノテーションを尊重して、空の WAL アーカイブのチェックをバイパスします#2731
- PostgreSQL サーバーはダウンしているが、ポッドがプライマリでアップしているときに、クラスターがスタックするのを防ぐ#2966
- レプリケーションスロットが有効になっているときに、レプリカクラスターの指定されたプライマリを通常の HA レプリカとして扱わないようにします#2960
- セレクターが変更されるたび、またはラベル/注釈を変更する必要がある場合にサービスを調整します#2918
- リカバリブートストラップ中に所有者とデータベースの両方をデフォルト `app` に設定する #2957
- キャッシュされたクラスターでの書き込み-読み取りの同時実行を回避する#2884
- 空の項目を削除し、一意に作成し、生成されたロールの `ResourceName` セクションでソート #2875
- エラーが発生した場合に、`ContinuousArchiving` 条件が適切に'failed'に設定されていることを確認します #2625
- バックアップが完了または失敗した場合にのみ停止することにより、中断に対する `Backup` リソース調整サイクルの復元力を高めます #2591
- PodMonitor `labels` および `annotations` を調整する #2583
- `Role` オブジェクトの RBAC `resourceNames` の欠落によるバックアップ失敗を修正しました #2956
- 可観測性
  - TCP ポートラベルをデフォルトの `pg_stat_replication` メトリックに追加します #2961
  - プロメテウスの `pg_wal_stat` デフォルトメトリックを修正します#2569
  - プロメテウスの `pg_replication` のデフォルトメトリックを改善します #2744 および#2750
  - 代わりに edb_traned_13 edb_13 を使用します提供された Grafana ダッシュボード
  - メトリック収集で `standard_conforming_strings` を適用する #2888

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 16.0 に設定します
- フェンシングは、スマートシャットダウンの代わりに PostgreSQL の高速シャットダウンを使用してインスタンスを停止するようになりました#3051

- Webhook の名前を kb.io から cnpg.io グループに変更します #2851
- `cnpg hibernate` プラグインコマンドで PVC の `ClusterManifestAnnotationName` および `PgControldataAnnotationName` アノテーションを使用させましょう #2657
- `cnpg.io/instanceRole` ラベルを追加しますが、既存の `role` ラベルを非推奨にします #2915

技術的な強化

- API リファレンスドキュメントを自動的にビルドするように `k8s-api-docgen` を `gen-crd-api-reference-docs` に置き換えます #2606

バージョン 1.19.4

発売日 2023 年 7 月 27 日

機能強化

- kubectl プラグインの新しい `logs` コマンド、クラスター内のすべてのポッドのログを取得または追跡する #2375
- ポッドで priorityClassName を指定するサポートを追加し、Kubernetes のスケジュール決定を支援します#2043
- CloudNativePG クラスターによるノードの使用状況をモニタするためのメトリックとステータスフィールドを追加します#2257
- ドキュメントのさまざまな機能強化
  - hugepages に関連するトラブルシューティング手順を追加します#1390
  - FAQ ページを拡張します#2344

技術的な強化

- 復元プロセスの先頭にチェックを追加して、続行できることを確認します。できない場合は、改善されたエラー診断を提供します#2419

修正

- リカバリターゲット設定のロジックが Postgres のロジックと一致することを確認します#2460
- サービスアカウントの作成中にのみ ownerMetadata を設定することにより、クラスターが所有していないサービスアカウントの引き継ぎを防止します#2462
- initdb およびリストアのための PGDATA ディレクトリの正しいアクセス許可を確認します#2384
- 構成のリロード中にインスタンスマネージャーのクラッシュの可能性を防止#2393
- 失敗したバックアップの後に新しいバックアップが成功した場合に、LastFailedArchiveTime アラートがトリガーされないようにしました #1751
- サービスが非インスタンスポッドをターゲットとしないようにする #2336

セキュリティ

- すべてのプロジェクトの依存関係を最新バージョンに更新しました

バージョン 1.19.3

発売日 2023 年 6 月 12 日

機能強化

- `snapshot` コマンドを `cnpg` プラグインに追加して、Kubernetes `VolumeSnapshot` 標準リソースを使用してスタンバイからクラスターの一貫したコールドバックアップを作成します#1960
- `.spec.bootstrap.recovery.volumeSnapshot` スタンザを介した CSI VolumeSnapshot リソースのセットからのリカバリの最初の実装#1960
- `pg_failover_slots` をマネージド拡張機能に追加します #2057
- ドキュメントとクイックスタートガイドの指示を更新した Grafana ダッシュボードを改善しました #1916
- `import` スタンザに `schemaOnly` オプションを導入して、1 つ以上の既存のデータベースから新しい Postgres クラスターをブートストラップするときにデータのエクスポートおよびインポートを回避します#2234
- インスタンスポッドのスケジュールを管理するための TopologySpreadConstraints のサポートを追加します#2202
- PgBouncer の `Pooler` に `PodMonitor` サポートを追加します#2034
- デフォルトの Kubernetes スケジューラーをオーバーライドするオプションを追加します#2013
- `Pooler` リソースのデプロイメント戦略の構成を許可します #1983
- デフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.3 に更新します#2022
- デフォルトで PgBouncer 1.19 を使用する#2018

技術的な強化

- 更新された k8s 種類のテスト済みバージョン#2054
- 別のトランザクションを使用して、ロールの資格情報を調整します。このパッチの前は、オペレーターは、いずれかが失敗した場合、すべてのロールの同期を元に戻していました#2004
- クラスターの復元中にフェンシングが削除されることを確認します #1987
- ポッド削除時のロギングを改善します #2136

修正

- k3d でのセットアップを妨げる可能性がある k3d エンジンでのバインドされていない変数を修正しました#2157
- メトリックで正しい PG バージョンをレポートする #2126
- ドキュメントで正しい walStorage キーを使用する #2140
- オペレーターがインスタンスに接続できない場合に調整を停止し、このような場合に明確な診断を提供します。これは、ネットワークの問題が CloudNativePG の通常のオペレーションを妨げるケースを明確にするのに役立ちます#2145、#2233、および#2242

バージョン 1.19.2

発売日 2023 年 4 月 27 日

機能強化

- kubectl の cnpg プラグインの report コマンドの--logs オプションを改善して、可能な場合は以前のログも含めます #1811
- -any サービスがデフォルトで無効になりました #1755

セキュリティ

- ローカルファイルを介したオーバーライドを介して SeccompProfile のカスタマイズを有効にします #1827

修正

- サーバーが初めて起動される前に、initdb ブートストラップフェーズ中にユーザーが提供した PostgreSQL 構成を適用します#1858

バージョン 1.19.1

発売日 2023 年 3 月 20 日

機能強化

- デフォルトのバックアップターゲットポリシー#1602 のオーバーライドを許可します。以前は、すべてのバックアップとスケジュールされたバックアップがクラスターレベルのターゲットポリシーを使用していました
- debug クラスターのログレベルを initdb ジョブに拡張します#1503
- PgBouncer プーラーの IPv6 とカスタム pg_hba をサポート#1395
- 2 つの新しいメトリックとステータスの追加情報でバックアップの可観測性を強化します#1428
- インスタンスマネージャーからのドキュメント API 呼び出し #1641
- Helm を介して展開名を明確にする #1505
- psql コマンドを kubectl #1668 の cnpg プラグインに追加して、ユーザーはポッドデフォルトでプライマリとの psql セッションを開始できます。

技術的な強化

- 依存関係の追跡/更新に Renovate を採用する #1367、#1473
- オペレーターイメージにサポートされているすべてのアーキテクチャのバイナリを注入します#1513
- バックアップ名を使用してバックアップオブジェクトストアのリソースと一致する#1650 Barman 3.3 で導入された--name オプションを活用して、バックアップとオブジェクトストアの関連付けをより堅牢にします。

修正

- プローブのエラー処理でパニックを防止 #1716
- HTTP パッケージとコントローラのランタイムログが JSON 形式であることを確認します#1442
- 単一インスタンスのクラスターに WAL ストレージを追加します クラスター#1570
- バックアップコードをより堅牢にするためのさまざまな改善#1536、#1564、#1588、#1466、#1647
- cnpg プラグインの status コマンドで WAL アーカイブ情報を適切に表示する #1666
- AdditionalPodAffinity および AdditionalPodAntiAffinity が設定されていない場合でも、nodeAffinity が適用されるように保証#1663
- オンラインアップグレードフェーズ中にフェールオーバー遅延を導入する#1728 以前は、オンラインアップグレードプロセスが不必要にフェールオーバーロジックをトリガーする場合がありました。

バージョン 1.19.0

発売日 2023 年 2 月 14 日

重要なお知らせ

- PostgreSQL バージョン 10 は、EOL に達したため、サポートされません。バージョン 11 以降がサポートされています。できるだけ早く PostgreSQL 15 への移行を計画してください。 Importing Postgres databases を参照してください

PostgreSQL のメジャーオフラインアップグレードの詳細については、

特徴

- スタンバイからのバックアップ prefer-standby に設定すると実行されることを受け入れる.spec.backup.target オプションを導入し、最も調整されたレプリカから物理ベースのバックアップを取得します#1162
- 遅延フェイルオーバープライマリの異常が検出されると、フェイルオーバープロセスを遅延するための failoverDelay パラメーターを導入します #1366

機能強化

- Kubernetes の予測ボリュームのサポートを紹介します #1269
- PostgreSQL サーバープロセスをより詳細に制御するためのサポートカスタム環境変数を導入します #1275
- kubectl の cnpg プラグインに backup コマンドを導入して、クラスターの新しいベースバックアップを発行します#1348
- ユーザーが WAL ファイルを既存の Postgres クラスター上の専用ボリュームに移動できるようにすることにより、個別の WAL ボリューム機能のサポートを向上させます#1066
- min_wal_size 、max_wal_size 、keep_wal_size 、wal_keep_segments に相当する値、および専用ボリュームに保存できる WAL の最大数を含む Prometheus エクスポータの追加メトリックで WAL の可観測性を強化#1382
- streaming_replica ユーザーにデータベースコメントを追加します #1349

- GKE の Webhook でのファイアウォールの問題を文書化する #1364
- recovery の postgresql.conf に関するノートを追加#1211
- パッケージを使用してプラグインのインストールに関する手順を追加します#1357
- 各マイナーリリースでサポートされている Postgres バージョンを指定する#1355
- CloudNativePG の PVC グループの意味を明確にします#1344
- DigitalOcean S3 互換スペースの例を追加します #1289
- 新しいクラスター定義のデフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.2 に更新します#1430
- アーキテクチャドキュメント#1432 で Kubernetes レイヤーを詳細にカバーしています

技術的な強化

- リリースブランチの毎日のエンドツーエンドスモークテストを追加しました#1235

修正

- streaming_replica ユーザーとしての CHECKPOINT の実行をスキップする #1408
- waitForWalArchiveWorking の接続エラーに対する耐性を高める #1399
- PVC ロールが常に一貫していることを確認します #1380
- pvcTemplate を使用するときに walStorage のサイズ変更を許可します #1315
- ExecCommand がタイムアウトに従っていることを確認します#1242
- Prometheus がインストールされていない場合は PodMonitor リコンサイルを回避する #1238
- 必要がない場合は PodMonitor の検索を回避します #1213

57.4.5 CloudNativePG 1.18 のリリースノート

CloudNativePG の 1.18 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.18.5

発売日 2023 年 6 月 12 日

> **警告:** これは、1.18.X シリーズの最後のリリースになる予定です。 ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

機能強化

- snapshot コマンドを cnpg プラグインに追加して、Kubernetes VolumeSnapshot 標準リソースを使用してスタンバイからクラスターの一貫したコールドバックアップを作成します#1960
- .spec.bootstrap.recovery.volumeSnapshot スタンザを介した CSI VolumeSnapshot リソースのセットからのリカバリの最初の実装#1960
- pg_failover_slots をマネージド拡張機能に追加します #2057
- ドキュメントとクイックスタートガイドの指示を更新した Grafana ダッシュボードを改善しました #1916
- import スタンザに schemaOnly オプションを導入して、1 つ以上の既存のデータベースから新しい Postgres クラスターをブートストラップするときにデータのエクスポートおよびインポートを回避します#2234
- インスタンスポッドのスケジュールを管理するための TopologySpreadConstraints のサポートを追加します#2202
- PgBouncer の Pooler に PodMonitor サポートを追加します#2034
- デフォルトの Kubernetes スケジューラーをオーバーライドするオプションを追加します#2013
- Pooler リソースのデプロイメント戦略の構成を許可します #1983
- デフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.3 に更新します#2022
- デフォルトで PgBouncer 1.19 を使用する#2018

技術的な強化

- 更新された k8s 種類のテスト済みバージョン#2054
- 別のトランザクションを使用して、ロールの資格情報を調整します。このパッチの前は、オペレーターは、いずれかが失敗した場合、すべてのロールの同期を元に戻していました#2004
- クラスターの復元中にフェンシングが削除されることを確認します #1987
- ポッド削除時のロギングを改善します #2136

修正

- K3 でのセットアップを妨げる可能性がある k3s エンジンのバインドされていない変数を修正しました#2157
- メトリックで正しい PG バージョンをレポートする #2126
- ドキュメントで正しい walStorage キーを使用する #2140
- オペレーターがインスタンスに接続できない場合に調整を停止し、このような場合に明確な診断を提供します。これは、ネットワークの問題が CloudNativePG の通常のオペレーションを妨げるケースを明確にするのに役立ちます#2145、#2233、および#2242

バージョン 1.18.4

発売日 2023 年 4 月 27 日

重要: PostgreSQL 10 が 2022 年 11 月にサポート終了 EOL に達したため、CloudNativePG は PostgreSQL 10 のサポートを終了します。バージョン 11 以降がサポートされています。できるだけ早く PostgreSQL 15 への移行を計画してください。 Importing Postgres databases を参照してください

PostgreSQL のメジャーオフラインアップグレードの詳細については、

機能強化

- `kubectl` の `cnpg` プラグインの `report` コマンドの`--logs` オプションを改善して、可能な場合は以前のログも含めます #1811
- `-any` サービスがデフォルトで無効になりました #1755

セキュリティ

- ローカルファイルを介したオーバーライドを介して `SeccompProfile` のカスタマイズを有効にします #1827

修正

- サーバーが初めて起動される前に、`initdb` ブートストラップフェーズ中にユーザーが提供した PostgreSQL 構成を適用します#1858

バージョン 1.18.3

発売日 2023 年 3 月 20 日

機能強化

- `debug` クラスターのログレベルを `initdb` ジョブに拡張します#1503
- PgBouncer プーラーの IPv6 とカスタム `pg_hba` をサポート#1395
- 2 つの新しいメトリックとステータスの追加情報でバックアップの可観測性を強化します#1428
- インスタンスマネージャーからのドキュメント API 呼び出し #1641
- Helm を介して展開名を明確にする #1505
- `psql` コマンドを `kubectl` #1668 の `cnpg` プラグインに追加して、ユーザーはポッドデフォルトでプライマリとの `psql` セッションを開始できます。

技術的な強化

- 依存関係の追跡/更新に Renovate を採用する #1367、#1473
- オペレーターイメージにサポートされているすべてのアーキテクチャのバイナリを注入します#1513

- バックアップ名を使用してバックアップオブジェクトストアのリソースと一致する#1650 Barman 3.3 で導入された--name オプションを活用して、バックアップとオブジェクトストアの関連付けをより堅牢にします。

修正

- プローブのエラー処理でパニックを防止 #1716
- HTTP パッケージとコントローラのランタイムログが JSON 形式であることを確認します#1442
- 単一インスタンスのクラスターに WAL ストレージを追加します クラスター#1570
- バックアップコードをより堅牢にするためのさまざまな改善#1536、#1564、#1588、#1466、#1647
- cnpg プラグインの status コマンドで WAL アーカイブ情報を適切に表示する #1666
- AdditionalPodAffinity および AdditionalPodAntiAffinity が設定されていない場合でも、nodeAffinity が適用されるように保証#1663

バージョン 1.18.2

発売日 2023 年 2 月 14 日

機能強化

- Kubernetes の予測ボリュームのサポートを紹介します #1269
- PostgreSQL サーバープロセスをより詳細に制御するためのサポートカスタム環境変数を導入します #1275
- kubectl の cnpg プラグインに backup コマンドを導入して、クラスターの新しいベースバックアップを発行します#1348
- ユーザーが WAL ファイルを既存の Postgres クラスター上の専用ボリュームに移動できるようにすることにより、個別の WAL ボリューム機能のサポートを向上させます#1066
- min_wal_size 、max_wal_size 、keep_wal_size 、wal_keep_segments に相当する値、および専用ボリュームに保存できる WAL の最大数を含む Prometheus エクスポータの追加メトリックで WAL の可観測性を強化#1382
- streaming_replica ユーザーにデータベースコメントを追加します #1349
- GKE の Webhook でのファイアウォールの問題を文書化する #1364
- recovery の postgresql.conf に関するノートを追加#1211
- パッケージを使用してプラグインのインストールに関する手順を追加します#1357
- 各マイナーリリースでサポートされている Postgres バージョンを指定する#1355
- CloudNativePG の PVC グループの意味を明確にします#1344
- DigitalOcean S3 互換スペースの例を追加します #1289

技術的な強化

- リリースブランチの毎日のエンドツーエンドスモークテストを追加しました#1235

修正

- streaming_replica ユーザーとしての CHECKPOINT の実行をスキップする #1408
- waitForWalArchiveWorking の接続エラーに対する耐性を高める #1399
- PVC ロールが常に一貫していることを確認します #1380
- pvcTemplate を使用するときに walStorage のサイズ変更を許可します #1315
- ExecCommand がタイムアウトに従っていることを確認します#1242
- Prometheus がインストールされていない場合は PodMonitor リコンサイルを回避する #1238
- 必要がない場合は PodMonitor の検索を回避します #1213

バージョン 1.18.1

発売日 2022 年 12 月 21 日

重要なお知らせ

- CNPG クラスターを識別するラベルとしての postgresql の差し迫った非推奨に関するアラート。このラベルを使用したリモートケースでは、代わりに cnpg.io/cluster ラベルの使用を開始してください #1130
- Armando Ruocco @armru を、一貫したインパクトのある貢献により新しい CloudNativePG メンテナーとして表彰#1167
- ARMv7 サポートの削除 #1092
- 1.16 の最終パッチリリース 1.16.5。リリース 1.16 はサポート終了となります。

機能強化

- サービスアカウントのラベルと注釈をカスタマイズする例、IRSA を介した GKE または EKS の ID 管理を介した認証を簡単にするために使用できるサービスアカウントテンプレートを追加します#1105
- nodeAffinity サポートを追加します#1182-より豊富なスケジュールオプションが可能になります
- Istio との互換性の向上 Istio の quit エンドポイントのサポートを追加して、Istio サイドカーを使用したジョブが無期限に実行されないように#967
- JSON ログのフィールドのリマッピングを許可します level および ts フィールドが既存のロギングを妨げる可能性があるユースケースに役立ちます#843
- fio コマンドを kubectl-cnpg プラグインに追加します #1097
- kubectl-cnpg プラグインの rpm/deb パッケージを追加します#1008
- 新しいクラスター定義のデフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.1 に更新します#908
- Documentation
- CNPG サンドボックスへの参照を削除します#1120-クイックスタートドキュメントでのモニタリングに関する指示を優先して、CNPG サンドボックスは非推奨になりました

- “Release upgrade”ディスカッションへのリンク#1148-リリース更新ディスカッションがデフォルトになりますリリースの発表とディスカッションのためのチャンネル
- GOVERNANCE.md のメンテナーの名誉ステータスを文書#1033 - メンテナーがコントリビューションを続行する準備ができていない場合に続行する方法を説明します
- プルリクエストの作成手順の改善#1132
- 緊急バックアップのトラブルシューティング指示# 1184)
- アーキテクチャドキュメント#1432 で Kubernetes レイヤーを詳細にカバーしています

修正

- ブートストラップの PGDATA 権限が適切に 750 に設定されていることを確認します#1164
- クラスターをスケールダウンするときに WAL を含む PVC が削除されるように保証#1135
- `--dry-run` を使用する場合、pgbench マニフェストで欠落している ApiVersion と Kind を修正します #1088
- シークレットとサービスが見つからない場合にのみ作成するようにします#1145
- 復元時に設定済みの pg-wal を尊重する #1216
- nodeToClusters マップからレプリカをフィルタリングする #1194

技術的な強化

- テストの概要に `ciclops` を使用する #1064 ciclops GitHub アクションに依存して、E2E スイートの概要を提供し、そのプロジェクトから改善を継承します
- バックポートプル要求ワークフローを追加します #965 - 注釈が付けられている場合、リリースブランチにパッチを自動的にバックポートします
- e2e テストスイートでオペレーターログレベルを構成可能にする #1094
- ラベルに基づいてテストの実行を有効にする #951
- Go バージョンを 1.18 から 1.19 に更新します#1166

バージョン 1.18.0

発売日 2022 年 11 月 10 日

特徴

- **高可用性のためのクラスター管理物理レプリケーションスロット**プライマリとスタンバイの両方で、高可用性クラスター内の各ホットスタンバイレプリカの物理レプリケーションスロットを自動的に管理します#740
- **Postgres クラスターハイバーネーション** 新しいサブコマンド `kubectl cnpg hibernate on/off/status <cluster-name>` を使用して、プラグインを介してクラスターハイバーネーションを導入します。ハイバネーションは、PostgreSQL プライマリインスタンスに属する PVC を除き、クラスターによって生成されたすべてのリソースを破壊します#782

セキュリティ

- SeccomProfile をポッドとコンテナに追加します #888

機能強化

- pvcTemplate でサイズ要求がある場合、クラスター仕様でストレージサイズを省略できるようにしました#914
- cnpg プラグインの status コマンド
- レプリケーションスロット情報を追加します #873
- フェンスされたクラスターの表示を明確にします #886
- レプリカクラスターの表示を改善します #871
- ドキュメント
- モニタリングページを改善し、プロメテウスとグラファナを使用してローカルシステムで CloudNativePG の可観測性機能を評価する方法に関する手順を提供します#968
- カスタムコントローラのデザイン理由に関するページを追加します #918
- 最後までの更新- to エンドテストスイートページ #945
- cnpg プラグインの新しいサブコマンド
  - pgbench は、クラスターに対して pgbench を実行するジョブ定義を生成します#958
  - install は、オペレーターのインストールマニフェストを生成します#944
- PostgreSQL 15.0 を新しいデフォルトバージョンとして設定します #821

修正

- plpgsql ファンクションを使用したデータベースのインポート #974
- ポイントインタイムリカバリーを実行するときに最も近いバックアップを適切に見つけます#949
- ScheduledBackup 形式が Kubernetes CronJob 形式に従っていないことを明確にします #883
- 古い可能性がある Kubernetes ポッドの準備状況ではなく、インスタンスマネージャーからの Postgres 情報に基づいてフェイルオーバーロジックをベースにします#890
- 新しく作成されるクラスターごとにアーカイブする WAL があることを確認します。これがないため、バックアップが機能しない可能性があります#897
- ドキュメントの barmanObjectStore の YAML キー名を修正しました #877
- krew リリースを修正#866

57.4.6 CloudNativePG 1.17 のリリースノート

CloudNativePG の 1.17 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.17.5

発売日 2023 年 3 月 20 日

> **警告:** これは、1.17.X シリーズの最後のリリースになる予定です。 ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

機能強化

- `debug` クラスターのログレベルを `initdb` ジョブに拡張します#1503
- PgBouncer プーラーの IPv6 とカスタム `pg_hba` をサポート#1395
- インスタンスマネージャーからのドキュメント API 呼び出し #1641
- Helm を介して展開名を明確にする #1505
- `psql` コマンドを `kubectl` #1668 の `cnpg` プラグインに追加して、ユーザーはポッドデフォルトでプライマリとの `psql` セッションを開始できます。

技術的な強化

- 依存関係の追跡/更新に Renovate を採用する #1367、#1473

修正

- プローブのエラー処理でパニックを防止 #1716
- `cnpg` プラグインの `status` コマンドで WAL アーカイブ情報を適切に表示する #1666

バージョン 1.17.4

発売日 2023 年 2 月 14 日

特徴

- Kubernetes の予測ボリュームのサポート #1269
- PostgreSQL サーバープロセスをより詳細に制御するためのカスタム環境変数をサポート#1275

機能強化

- `kubectl` の `cnpg` プラグインに `backup` コマンドを導入して、クラスターの新しいベースバックアップを発行します#1348

- `streaming_replica` ユーザーにデータベースコメントを追加します #1349
- GKE の Webhook でのファイアウォールの問題を文書化する #1364
- `recovery` の postgresql.conf に関するノートを追加#1211
- パッケージを使用してプラグインのインストールに関する手順を追加します#1357
- 各マイナーリリースでサポートされている Postgres バージョンを指定する#1355
- CloudNativePG の PVC グループの意味を明確にします#1344
- DigitalOcean S3 互換スペースの例を追加します #1289

技術的な強化

- リリースブランチの毎日のエンドツーエンドスモークテストを追加しました#1235

修正

- PVC ロールが常に一貫していることを確認します #1380
- `pvcTemplate` を使用するときに `walStorage` のサイズ変更を許可します #1315
- Prometheus がインストールされていない場合は `PodMonitor` リコンサイルを回避する #1238
- 必要がない場合は `PodMonitor` の検索を回避します #1213

バージョン 1.17.3

発売日 2022 年 12 月 21 日

重要なお知らせ

- Armando Ruocco @armru を、一貫したインパクトのある貢献により新しい CloudNativePG メンテナーとして表彰#1167
- ARMv7 サポートの削除 #1092
- 1.16 の最終パッチリリース 1.16.5。リリース 1.16 はサポート終了となります。

機能強化

- Istio との互換性の向上 Istio の quit エンドポイントのサポートを追加して、Istio サイドカーを使用したジョブが無期限に実行されないように#967
- kubectl-cnpg プラグインの rpm/deb パッケージを追加します#1008
- 新しいクラスター定義のデフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.1 に更新します#908
- Documentation
- CNPG サンドボックスへの参照を削除します#1120-クイックスタートドキュメントでのモニタリングに関する指示を優先して、CNPG サンドボックスは非推奨になりました
- “Release upgrade”ディスカッションへのリンク#1148-リリース更新ディスカッションがデフォルトになりますリリースの発表とディスカッションのためのチャンネル

- GOVERNANCE.md のメンテナーの名誉ステータスを文書#1033 - メンテナーがコントリビューションを続行する準備ができていない場合に続行する方法を説明します
- プルリクエストの作成手順の改善#1132
- 緊急バックアップのトラブルシューティング指示# 1184)
- アーキテクチャドキュメント#1432 で Kubernetes レイヤーを詳細にカバーしています

修正

- ブートストラップの PGDATA 権限が適切に 750 に設定されていることを確認します#1164
- クラスターをスケールダウンするときに WAL を含む PVC が削除されるように保証#1135
- シークレットとサービスが見つからない場合にのみ作成するようにします#1145
- 復元時に設定済みの pg-wal を尊重する #1216
- nodeToClusters マップからレプリカをフィルタリングする #1194

技術的な強化

- テストの概要に `ciclops` を使用する #1064 ciclops GitHub アクションに依存して、E2E スイートの概要を提供し、そのプロジェクトから改善を継承します
- バックポートプル要求ワークフローを追加します #965 - 注釈が付けられている場合、リリースブランチにパッチを自動的にバックポートします
- e2e テストスイートでオペレーターログレベルを構成可能にする #1094
- ラベルに基づいてテストの実行を有効にする #951
- Go バージョンを 1.18 から 1.19 に更新します#1166

バージョン 1.17.2

発売日 2022 年 11 月 10 日

セキュリティ

- `SeccomProfile` をポッドとコンテナに追加します #888

機能強化

- `cnpg` プラグインの `status` コマンド
- フェンスされたクラスターの表示を明確にします #886
- レプリカクラスターの表示を改善します #871
- ドキュメント
- モニタリングページを改善し、プロメテウスとグラファナを使用してローカルシステムで CloudNativePG の可観測性機能を評価する方法に関する手順を提供します#968
- カスタムコントローラのデザイン理由に関するページを追加します #918

- PostgreSQL 15.0 を新しいデフォルトバージョンとして設定します #821

修正

- `plpgsql` ファンクションを使用したデータベースのインポート #974
- ポイントインタイムリカバリーを実行するときに最も近いバックアップを適切に見つけます#949
- `ScheduledBackup` 形式が Kubernetes `CronJob` 形式に従っていないことを明確にします #883
- 古い可能性がある Kubernetes ポッドの準備状況ではなく、インスタンスマネージャーからの Postgres 情報に基づいてフェイルオーバーロジックをベースにします#890
- 新しく作成されるクラスターごとにアーカイブする WAL があることを確認します。これがないため、バックアップが機能しない可能性があります#897
- ドキュメントの `barmanObjectStore` の YAML キー名を修正しました #877
- `krew` リリースを修正#866

バージョン 1.17.1

発売日 2022 年 10 月 6 日

機能強化

- コントローラマネージャーに `leaseDuration` および `renewDeadline` パラメーターを導入して、オペレーター展開でのリーダー選択の構成を強化します#759
- 初めて WAL ファイルをアーカイブする前に、バックアップオブジェクトストアが空であることを確認するメカニズムを改善します。正常にアーカイブされました

セキュリティ

- `nonroot:nonroot` ユーザーを使用して、`distroless/static:nonroot` コンテナイメージにコピーされるインスタンスマネージャーバイナリの権限を明示的に設定します#754

修正

- プライマリに昇格した後、スタンバイでアクティブな接続をドロップします#737
- ネイティブ Prometheus エクスポーターでの `MAPPEDMETRIC` および `DURATION` メトリックタイプの変換を尊重します #765
- PostgreSQL 形式を使用してマイクロ秒の精度で指定されたタイムスタンプが正しく解析されることを確認します#741

バージョン 1.17.0

リリース日 2022 年 9 月 6 日マイナーリリース

特徴

- **WAL ファイルの別のボリューム**書き込み先行ログ WAL とデータベースデータファイルを別のディスクに分離することのサポート。データディレクトリの I/O 負荷を軽減することにより、大量の書き込みシステムのパフォーマンスの向上につながる可能性があります。このオプションは、メインで必須の `storage` セクション#513 で定義された `PGDATA` とは別の、専用ボリュームで WAL ファイル `pg_wal` を分離するオプションの `walStorage` セクションの導入で制御されます。現在の制限 `walStorage` は、クラスターの作成時にのみ設定でき、クラスターが稼働しているときに追加または削除することはできません。

機能強化

- PgBouncer 接続プーラー実装での下位ネットワーク TCP 設定の構成を有効にする#584
- `cnpg.io/instanceName` および `cnpg.io/podRole` ラベルが常にポッドと PVC に存在することを確認します#632 および#680
- インスタンスの `role` ラベルを基になる PVC に伝播する #634
- インスタンスと関連するすべての PVC の削除に役立つ `kubectl cnpg destroy` コマンドの導入 #643

修正

- 新しいクラスターのプライマリをブートストラップするときに `shared_preload_libraries` を使用する #642
- 別のプロセスが進行中であるかどうかをアトミックにチェックすることにより、オペレーターの複数のインプレースアップグレードプロセスが同時に実行されないようにします#655
- 新しくアップロードされたインスタンスマネージャーを保存するためのハードコードされたファイル名の使用を避け、オペレーターのオンラインアップグレード中に発生する可能性のある競合状態を防止します。#660
- `GetAllAccessibleDatabases` 呼び出し時にパニックが発生しないようにします#641

57.4.7 CloudNativePG 1.16 のリリースノート

CloudNativePG の 1.16 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

バージョン 1.16.5

発売日 2022 年 12 月 21 日

> **警告:** これは、1.16.X シリーズの最後のリリースになる予定です。 ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

重要なお知らせ

- Armando Ruocco @armru を、一貫したインパクトのある貢献により新しい CloudNativePG メンテナーとして表彰#1167
- ARMv7 サポートの削除 #1092
- 1.16 の最終パッチリリース 1.16.5。リリース 1.16 はサポート終了となります。

機能強化

- kubectl-cnpg プラグインの rpm/deb パッケージを追加します#1008
- 新しいクラスター定義のデフォルトの PostgreSQL バージョンを 15.1 に更新します#908
- Documentation
- CNPG サンドボックスへの参照を削除します#1120-クイックスタートドキュメントでのモニタリングに関する指示を優先して、CNPG サンドボックスは非推奨になりました
- “Release upgrade”ディスカッションへのリンク#1148-リリース更新ディスカッションがデフォルトになりますリリースの発表とディスカッションのためのチャンネル
- GOVERNANCE.md のメンテナーの名誉ステータスを文書#1033 - メンテナーがコントリビューションを続行する準備ができていない場合に続行する方法を説明します
- プルリクエストの作成手順の改善#1132
- 緊急バックアップのトラブルシューティング指示# 1184)

修正

- ブートストラップの PGDATA 権限が適切に 750 に設定されていることを確認します#1164
- シークレットとサービスが見つからない場合にのみ作成するようにします#1145
- 復元時に設定済みの pg-wal を尊重する #1216
- nodeToClusters マップからレプリカをフィルタリングする #1194

技術的な強化

- テストの概要に `ciclops` を使用する #1064 ciclops GitHub アクションに依存して、E2E スイートの概要を提供し、そのプロジェクトから改善を継承します
- バックポートプル要求ワークフローを追加します #965 - 注釈が付けられている場合、リリースブランチにパッチを自動的にバックポートします
- e2e テストスイートでオペレーターログレベルを構成可能にする #1094

- ラベルに基づいてテストの実行を有効にする #951
- Go バージョンを 1.18 から 1.19 に更新します#1166

バージョン 1.16.4

発売日 2022 年 11 月 10 日

セキュリティ

- `SeccomProfile` をポッドとコンテナに追加します #888

機能強化

- `cnpg` プラグインの `status` コマンド
- フェンスされたクラスターの表示を明確にします #886
- レプリカクラスターの表示を改善します #871
- ドキュメント
- モニタリングページを改善し、プロメテウスとグラファナを使用してローカルシステムで CloudNativePG の可観測性機能を評価する方法に関する手順を提供します#968
- カスタムコントローラのデザイン理由に関するページを追加します #918

修正

- `plpgsql` ファンクションを使用したデータベースのインポート #974
- ポイントインタイムリカバリーを実行するときに最も近いバックアップを適切に見つけます#949
- `ScheduledBackup` 形式が Kubernetes `CronJob` 形式に従っていないことを明確にします #883
- 古い可能性がある Kubernetes ポッドの準備状況ではなく、インスタンスマネージャーからの Postgres 情報に基づいてフェイルオーバーロジックをベースにします#890
- 新しく作成されるクラスターごとにアーカイブする WAL があることを確認します。これがないため、バックアップが機能しない可能性があります#897
- ドキュメントの `barmanObjectStore` の YAML キー名を修正しました #877
- `krew` リリースを修正#866

バージョン 1.16.3

発売日 2022 年 10 月 6 日

機能強化

- コントローラマネージャーに `leaseDuration` および `renewDeadline` パラメーターを導入して、オペレーター展開でのリーダー選択の構成を強化します#759

- 初めて WAL ファイルをアーカイブする前に、バックアップオブジェクトストアが空であることを確認するメカニズムを改善します。正常にアーカイブされました

セキュリティ

- nonroot:nonroot ユーザーを使用して、distroless/static:nonroot コンテナイメージにコピーされるインスタンスマネージャーバイナリの権限を明示的に設定します#754

修正

- プライマリに昇格した後、スタンバイでアクティブな接続をドロップします#737
- ネイティブ Prometheus エクスポーターでの MAPPEDMETRIC および DURATION メトリックタイプの変換を尊重します#765

バージョン 1.16.2

発売日 2022 年 9 月 6 日

機能強化

- PgBouncer 接続プーラー実装での下位ネットワーク TCP 設定の構成を有効にする#584
- cnpg.io/instanceName および cnpg.io/podRole ラベルが常にポッドと PVC に存在することを確認します#632 および#680
- インスタンスの role ラベルを基になる PVC に伝播する #634

修正

- 新しいクラスターのプライマリをブートストラップするときに shared_preload_libraries を使用する #642
- 別のプロセスが進行中であるかどうかをアトミックにチェックすることにより、オペレーターの複数のインプレースアップグレードプロセスが同時に実行されないようにします#655
- 新しくアップロードされたインスタンスマネージャーを保存するためのハードコードされたファイル名の使用を避け、オペレーターのオンラインアップグレード中に発生する可能性のある競合状態を防止します。#660
- GetAllAccessibleDatabases 呼び出し時にパニックが発生しないようにします#641

バージョン 1.16.1

発売日 2022 年 8 月 12 日

機能強化

- PostgreSQL の huge_pages オプションの構成を有効にする#456
- 昇格と降格中の、フェールオーバーまたはスイッチオーバー後の、昇格の要求と書き込みの実際の可用性の間で経過時間を印刷することにより、ログを強化します#371
- クラスターステータスに PostgreSQL クラスターのタイムラインを導入する#462

- instanceName および clusterName ラベルをジョブ、ポッド、および PVC に追加して、これらのリソースとの相互作用を向上させます#534
- PostGIS クラスターを作成する方法に関する説明を追加します #570

セキュリティ

- securityContext を Pooler 展開に明示的に割り当てます #485
- 読み取りタイムアウト値を内部 Web サーバーに追加して、Slowloris DDoS を防止します #437

修正

- 再起動 stopDelay とスイッチオーバー switchoverDelay は、以前に誤ってスワップされたため、正しい遅延を使用します。switchoverDelay が設定されず、デフォルト値 40000000 秒を使用する場合、無期限に再起動をブロックする可能性があるため、これは重要な修正です。#531
- クエリがエラーを返したときにメトリックコレクターがパニックを発生させないようにしました#396
- 未チェックのポインターを参照していた安全でないデバッグメッセージを削除し、場合によっては、ログレベルに関係なくセグメンテーションフォールトを発生させます#491
- クラスターにアノテーションがない場合、フェンシング時のパニックを防止#512
- TLS 証明書が変更されない場合は、CRD の更新を回避する #501
- CRD に証明書を挿入しながら競合を処理する #547
- データベースインポート
  - データベースインポートで pg_restore を実行しているときに postgres ユーザーを使用します #411
  - モノリスインポートケースで sslmode を明示的に設定してオリジン外部サーバーとの SSL 接続を制御する要件を文書化します#572
  - 妨げたバグを修正 connectionParameters で dbname が指定された場合のインポート作業からのインポート #569
- バックアップとリカバリー - Google Cloud でオブジェクトストアの資格情報を正しく渡す #454

マイナーな変更

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 15.0 に設定します

バージョン 1.16.0

リリース日 2022 年 7 月 7 日マイナーリリース

特徴

- **PostgreSQL のオフラインデータのインポートとメジャーアップグレード** bootstrap.initdb.import セクションを導入して、PostgreSQL 論理バックアップコンセプトを使用して、新しい CloudNativePG クラスター内の既存の PostgreSQL インスタンス Kubernetes の外部でも、ネットワークを介してオブジェクトをインポートする方法を提供します pg_dump /pg_restore 同じ方法を使用して、新しいクラスターでメジャー PostgreSQL のアップグレードを実行できます。この機能では、2 種類のインポー

トmicroservice新しいクラスターに1つのデータベースのみをインポートしますとmonolith既存のインスタンスから選択したデータベースとロールをインポートします。

- ラベルに基づいた同期レプリケーションのアンチアフィニティルールアベイラビリティーゾーンなど、プライマリが実行されているノードとは異なる特性を持つノードで同期レプリカが実行されていることを確認します

機能強化

- 1つ以上のインスタンスがフェンスされている場合にフェイルオーバーを無効にする既存の制限を削除することにより、フェンシングを向上させます
- DROP EXTENSION IF EXISTSを不必要に実行する代わりに、カタログに拡張機能が存在するかどうかを確認することにより、自動拡張機能管理フレームワークを強化します
- スイッチオーバーとフェイルオーバー中のインスタンスマネージャーのログを改善します
- オブジェクトストアからリカバリするとき、またはpg_basebackupを介してインスタンスのクローンを作成するときに、アプリケーションのデータベースの名前、その所有者、および関連シークレットの再定義を有効にしますこれはこれまでinitdbブートストラップでのみ可能でした
- バックアップとリカバリー
  - PostgreSQL 15
  - の将来のサポートには Barman > = 3.0.0 が必要です inheritFromAzureAD オプションを介して Barman クラウドバックアップの Azure AD ワークロード ID を有効にします b_tran_5 barmanObjectStore.s3Credentials.region を導入して、バックアップとリカバリーオブジェクトストアの両方に AWS のリージョン AWS_DEFAULT_REGION を定義します
- Kubernetes 1.24 のサポート

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 15.0 に設定します
- バックアップと WAL アーカイブに独自の実装に依存するのではなく、Kubernetes API の条件を使用します

修正

- PostgreSQL サーバーの CSV ログパイプを開始する WithActiveInstance ファンクション内の初期化順序を修正し、クラスター初期化フェーズでの適切なロギングを保証します。これは、バックアップからのリカバリーのようなブートストラップ操作が失敗している場合に特に役立ちますこのパッチの前には、このようなログ標準出力チャンネルに送信されず、永久に失われました)
- ホットスタンバイの依存パラメーターが減少し、プライマリが既に再起動している場合、不必要なスイッチオーバーを回避します
- ALTER ROLEステートメントでロール名を適切に引用符で囲む
- バックアップとリカバリー
  - 要求されたリカバリタイムスタンプとバックアップの開始とを比較していた PITR の最も近い Barman バックアップを検出するアルゴリズムを修正します b_tran_9 トランザクション ID、名

前付けリストアポイント、または recoveryTarget セクションに backupID と呼ばれる新しいフィールドを提供することにより「即時」ターゲット

  - barman-cloud-wal-archive および barman-cloud-backup コマンドを呼び出す暗号化パラメーターを修正します
  - 現在のクラスター名と一致しないサーバー名を使用してバックアップオブジェクトストアからリカバリするときに barmanObjectStore.serverName オプションを無視するのをやめる

- cnpg プラグイン - ユーザーが指定したときにプラグインが-n パラメーターに準拠していることを確認します - status コマンドを修正して結果を並べ替え、出力のばらつきを削除します

57.4.8 CloudNativePG 1.15 のリリースノート

CloudNativePG の 1.15 マイナーリリースのユーザーに表示される変更の履歴。

変更の完全なリストについては、 commits を参照してください。

GitHub のリリースブランチで。

警告: これは、1.15.X シリーズの最後のリリースになる予定です。 ユーザーは、すぐに新しいマイナーバージョンに更新することをお勧めします。

バージョン 1.15.5

発売日 2022 年 10 月 6 日

機能強化

- コントローラマネージャーに leaseDuration および renewDeadline パラメーターを導入して、オペレーター展開でのリーダー選択の構成を強化します#759
- 初めて WAL ファイルをアーカイブする前に、バックアップオブジェクトストアが空であることを確認するメカニズムを改善します。正常にアーカイブされました

セキュリティ

- nonroot:nonroot ユーザーを使用して、distroless/static:nonroot コンテナイメージにコピーされるインスタンスマネージャーバイナリの権限を明示的に設定します#754

修正

- クラスターの条件を metav1.Conditions 構造体と互換性のあるものにする#720
- プライマリに昇格した後、スタンバイでアクティブな接続をドロップします#737
- ネイティブ Prometheus エクスポーターでの MAPPEDMETRIC および DURATION メトリックタイプの変換を尊重します #765

バージョン 1.15.4

発売日 2022 年 9 月 6 日

機能強化

- PgBouncer 接続プーラー実装での下位ネットワーク TCP 設定の構成を有効にする#584
- `cnpg.io/instanceName` および `cnpg.io/podRole` ラベルが常にポッドと PVC に存在することを確認します#632 および#680
- インスタンスの `role` ラベルを基になる PVC に伝播する #634

修正

- 別のプロセスが進行中であるかどうかをアトミックにチェックすることにより、オペレーターの複数のインプレースアップグレードプロセスが同時に実行されないようにします#655
- 新しくアップロードされたインスタンスマネージャーを保存するためのハードコードされたファイル名の使用を避け、オペレーターのオンラインアップグレード中に発生する可能性のある競合状態を防止します。#660
- `GetAllAccessibleDatabases` 呼び出し時にパニックが発生しないようにします#641

バージョン 1.15.3

発売日 2022 年 8 月 12 日

機能強化

- PostgreSQL の `huge_pages` オプションの構成を有効にする#456
- 昇格と降格中の、フェールオーバーまたはスイッチオーバー後の、昇格の要求と書き込みの実際の可用性の間で経過時間を印刷することにより、ログを強化します#371
- `instanceName` および `clusterName` ラベルをジョブ、ポッド、および PVC に追加して、これらのリソースとの相互作用を向上させます#534
- PostGIS クラスターを作成する方法に関する説明を追加します #570

セキュリティ

- `securityContext` を `Pooler` 展開に明示的に割り当てます #485
- 読み取りタイムアウト値を内部 Web サーバーに追加して、Slowloris DDoS を防止します #437

修正

- 再起動 `stopDelay` とスイッチオーバー `switchoverDelay` は、以前に誤ってスワップされたため、正しい遅延を使用します。`switchoverDelay` が設定されず、デフォルト値 40000000 秒を使用する場合、無期限に再起動をブロックする可能性があるため、これは重要な修正です。#531
- クエリがエラーを返したときにメトリックコレクターがパニックを発生させないようにしました#396
- 未チェックのポインターを参照していた安全でないデバッグメッセージを削除し、場合によっては、ログレベルに関係なくセグメンテーションフォールトを発生させます#491

- クラスターにアノテーションがない場合、フェンシング時のパニックを防止#512
- TLS 証明書が変更されない場合は、CRD の更新を回避する #501
- CRD に証明書を挿入しながら競合を処理する #547
- バックアップとリカバリー - Google Cloud でオブジェクトストアの資格情報を正しく渡す #454

マイナーな変更

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 15.0 に設定します

バージョン 1.15.2

リリース日 2022 年 7 月 7 日パッチリリース

機能強化

- スイッチオーバーとフェイルオーバー中のインスタンスマネージャーのログを改善します
- バックアップとリカバリーでの PostgreSQL 15 の将来のサポートには Barman > = 3.0.0 が必要です

変更点

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 15.0 に設定します

修正

- PostgreSQL サーバーの CSV ログパイプを開始する `WithActiveInstance` ファンクション内の初期化順序を修正し、クラスター初期化フェーズでの適切なロギングを保証します。これは、バックアップからのリカバリーのようなブートストラップ操作が失敗している場合に特に役立ちますこのパッチの前には、このようなログ標準出力チャンネルに送信されず、永久に失われました)
- ホットスタンバイの依存パラメーターが減少し、プライマリが既に再起動している場合、不必要なスイッチオーバーを回避します
- `ALTER ROLE` ステートメントでロール名を適切に引用符で囲む
- バックアップとリカバリー
  - 要求されたリカバリタイムスタンプとバックアップの開始とを比較していた PITR の最も近い Barman バックアップを検出するアルゴリズムを修正します b_tran_9 トランザクション ID、名前付けリストアポイント、または `recoveryTarget` セクションに `backupID` と呼ばれる新しいフィールドを提供することにより「即時」ターゲット
  - `barman-cloud-wal-archive` および `barman-cloud-backup` コマンドを呼び出す暗号化パラメーターを修正します
  - 現在のクラスター名と一致しないサーバー名を使用してバックアップオブジェクトストアからリカバリするときに `barmanObjectStore.serverName` オプションを無視するのをやめる
- cnpg プラグイン
  - プラグインが user

  - で指定されたときに-n パラメーターに準拠していることを確認します status コマンドを修正して結果をソートし、出力のばらつきを削除します

バージョン 1.15.1

リリース日 2022 年 5 月 27 日パッチリリース

マイナーな変更

- PostgreSQL の archive_timeout 設定の構成を有効にします。これは以前は固定パラメーターでしたデフォルトで 5 分に設定
- scheduledBackup リソースに backupOwnerReference と呼ばれる新しいフィールドを導入して、作成したバックアップリソースの所有権参照を設定します。使用可能な値は none デフォルト、self スケジュールされたバックアップオブジェクトが所有するオブジェクト、および cluster Postgres クラスターが所有オブジェクト)
- ネイティブ Prometheus エクスポーターに PostgreSQL 14 以降の pg_stat_wal メトリックの自動収集を導入します
- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 15.0 に設定します

修正

- postgres に関連する孤立したプロセスを強制終了してフェンシングを修正する
- WithActiveInstance ファンクション内の CSV ログパイプを有効にして、リカバリブートストラップジョブからログを収集し、トラブルシューティングフェーズに役立ちます
- 空ではないバックアップオブジェクトストアを使用した新しいクラスターのブートストラップを防止し、既存のバックアップを上書きするリスクを排除します
- recovery ブートストラップ方法では、既存のバックアップが上書きされないように、リカバリオブジェクトストアとバックアップオブジェクトストアが異なることを確認します
- バックアップの RBAC がまだ作成されていない場合、調整ループを再キューイングします
- バックアップに関する問題と、クラスター名プロパティの誤った仕様を修正します
- 複数のレプリカを使用した高可用性のオペレーターの展開の場合、オペレーターポッドが常に最新の証明書を持つように保証
- cnpg report operator コマンドを修正して、複数のレプリカを使用した高可用性のオペレーターの展開の場合を正しく処理する
- クラスターの inheritedMetadata ラベルとアノテーションの変更を、再起動を必要とせずにクラスターの関連リソースに適切に伝播します
- デフォルト値だけに依存するのではなく、オペレーターの展開で定義されたカスタム構成マップとシークレット名を正しく解析するように cnpg プラグインを修正
- mkdocs の minidocks/mkdocs イメージを使用して、ドキュメントのローカルビルドを修正

バージョン 1.15.0

発売日 2022 年 4 月 21 日

特徴

- **フェンシング** `cnpg.io/fencedInstances` アノテーションを介したクラスターまたは特定の PostgreSQL インスタンスのフェンシング機能の導入。空でない場合、クラスター内のスイッチオーバー/フェールオーバーを無効にします。フェンスされたインスタンスはシャットダウンされ、ポッドは検査と緊急事態に備えて準備ができていないと考えられて実行され続けます。
- **LDAP 認証** `pg_hba.conf` の LDAP Simple Bind および Search+Bind 構成オプションを Postgres クラスター仕様で宣言的に定義できるようにし、`ldapbindpasswd` などの機密オプションに Kubernetes シークレットのオプションで使用を有効にします
- `primaryUpdateMethod` オプションの導入、 `switchover` デフォルトと `restart` の値を受け入れ、教師なし `primaryUpdateStrategy` の場合に使用されます。このメソッドは、ローリング更新プロシージャ中にプライマリインスタンスに何が起こるかを制御します
- オペレーターと特定の Postgres クラスターの両方の診断とより効果的なトラブルシューティングを行うための `kubectl cnp` プラグインの新しい `report` コマンド
- バックアップオブジェクトストアにない `Backup` オブジェクトをプルーニング
- ポイントインタイムリカバリーブートストラップ方式でのターゲットタイムラインと `LSN` の仕様
- `sessionToken` オプションを介した AWS S3 での `AWS_SESSION_TOKEN` 認証トークンのサポート
- `quay.io/enterprisedb/pgbouncer:1.17.0` に設定された `Pooler` ポッドの PgBouncer のデフォルトのイメージ名

修正

- 以前は、使用可能な最新のバックアップより前のターゲットが不可能であったため、`targetTime` を介したポイントインタイムリカバリーのベースバックアップ検出が正しく機能するようになりました。検出アルゴリズムは、開始点として最後のバックアップを選択することにより常に間違っていました。
- オペレーターが `pg_controldata` から収集した値に依存することにより、ホットスタンバイの影響を受けやすいパラメーターの復元力が向上しました
- 無効な証明書エラーをスローする代わりに、無効なエントリを適切に破棄することにより、中間証明書の処理が改善されました
- データベース内の Prometheus エクスポーターメトリック収集クエリーがロールバックの代わりにコミットされるようになりましたこれにより、ダウンストリームダッシュボードから可視されるロールバックトランザクションの数が変更される場合があります該当する場合

バージョン 1.15.0 は、CloudNativePG の最初のリリースです。以前は、このソフトウェアは EDB Cloud Native PostgreSQL 現在は EDB Postgres for Kubernetes と呼ばれていました。以前のリリースに関する情報をお探しの場合は、EDB documentation を参照してください。

57.5 1.14.0 以前のリリースノート

CloudNativePG の最初のパブリックリリースはバージョン 1.15.0 です。それまでは、製品は EDB が完全に所有しており、Cloud Native PostgreSQL という名前で配布されていました。

このページの変更のリストは情報提供のみを目的とており、コミットに加えて製品の履歴を示します。**ここにリストされているバージョンは、CloudNativePG には存在しません。**

57.5.1 バージョン 1.14.0

発売日 2022 年 3 月 25 日

特徴

- Barman Cloud 2.19 で導入された機能を利用して、バックアップとリカバリーのための Google Cloud Storage をネイティブにサポート
- `Cluster` オブジェクトの `LastBackupSucceeded` 条件の導入によるバックアップの可観測性の向上
- ホットスタンバイの重要なパラメーターの更新のサポート `max_connections` 、`max_prepared_transactions` 、`max_locks_per_transaction` 、`max_wal_senders` 、`max_worker_processes`
- `Cluster` オブジェクトに `Online upgrade in progress` フェーズを追加して、オペレーターのオンラインアップグレードが進行中の場合を表示します
- S3 オブジェクトストレージの資格情報を提供する別の方法として AWS IAM ロールを継承する機能
- プーラーの authQuerySecret と証明書の不透明なシークレットのサポート
- デフォルトの PostgreSQL バージョンを 14.2 に更新しました
- 新しいコマンドを `maintenance` という名前の `kubectl cnp` プラグインに追加して、Kubernetes クラスター全体の 1 つまたはすべての名前空間のクラスターにメンテナンスウィンドウを設定します

コンテナイメージ

- 最新の PostgreSQL コンテナには Barman Cloud 2.19 が含まれます

セキュリティの強化

- OpenShift を含む Operator Lifecycle Manager を使用した名前空間オペレーターインストールの RBAC 適用の強化。OpenShift ユーザーはこのバージョンに更新することをお勧めします。

修正

- インスタンスマネージャーが元の `pg_control` ファイルのコピーを保存することにより、中断された `pg_rewind` を再試行できます
- `pg_rewind` を実行する前に古い PID ファイルをクリーンアップする
- `primary_conninfo` のキーによるソートを強制して、13 より前の PostgreSQL バージョンでのランダムな再起動を回避します
- リコンシリエーション時に `ServiceAccount` 変更ラベル、アノテーションなどを保存します

- imagePullPolicy のデフォルト値の適用を無効にする
- WAL セグメントサイズの initDB 検証を改善します
- 指定された LSN でクラスターをリカバリーするときに `targetLSN` オプションを適切に処理する
- サーバー証明書と CA 証明書の両方で証明書チェーンを許可することにより、カスタム TLS 証明書の検証を修正します

57.5.2 バージョン 1.13.0

リリース日 2022 年 2 月 17 日

特徴

- Snappy 圧縮のサポート。Snappy は、より低い圧縮率を使用してオブジェクトストアへのアップロードの速度を向上させるバックアップの高速圧縮オプションです
- Barman オブジェクトストアにアップロードされたファイルのタグ付けのサポート。この機能には、オペランドイメージに Barman 2.18 が必要です。クラスター削除後のバックアップの数
- `status.conditions` によるクラスターのステータスの拡張。条件 `ContinuousArchiving` は、クラスターが WAL ファイルのアーカイブを開始したことを示します
- 追加情報を使用して `kubectl` の `cnp` プラグインの status コマンドを改善します。クラスターのステータスを表示する `Cluster Summary` セクションと、クラスターで使用される証明書のステータスと有効期限までの残り時間を含む `Certificates Status` セクションを追加します
- 新しいクラスターの作成時に空ではないバックアップ先を検出する新しい `barman-cloud-check-wal-archive` コマンドをサポート
- `Secret` を使用して、`MONITORING_QUERIES_SECRET` 構成変数を介してデフォルトのモニタリングクエリーを追加するサポートを追加します。
- ユーザーが AppArmor を使用してコンテナの権限を制限できるようにします AppArmor サポートで展開された Kubernetes クラスターで
- `kubectl` の `cnp` プラグインに Windows プラットフォームのサポートを追加し、プラグインは Windows x86 および ARM で利用できるようになりました
- Kubernetes 1.18 および非推奨の API バージョンのサポートを終了

コンテナイメージ

- PostgreSQL コンテナには Barman 2.18 が含まれます

セキュリティ修正

- 所有者およびスーパーユーザーのシークレット内のユーザー名フィールドの一貫性チェックを追加します。以前は、悪意のあるユーザーがシークレットを使用して PostgreSQL ユーザーのパスワードを変更することができました

修正

- Postgres ポッドからのコード取得ステータスのメモリリークを修正

- クラッシュ後の PostgreSQL の自己再起動を無効にします。インスタンスコントローラは PostgreSQL インスタンスのライフサイクルを処理します
- 検証 Webhook の `.spec.postgresUID` および `.spec.postgresGID` フィールドの変更を防止します。クラスターの作成後にこれらのフィールドを変更すると、PostgreSQL が起動できなくなります
- バックアップおよび WAL アーカイブ処理コードからログの冗長性を削減します
- まだ初期化されていないときにクラスターが `Healthy` としてマークされるバグを修正
- 非常に高い WAL 生産レートのクラスター内のスタンバイサーバーは、調整されるとストリーミングに切り替えることができます
- まれにクラッシュにつながる可能性がある PostgreSQL ポッドの起動中の競合状態を修正します
- クラスター内の最初の PVC の初期化障害を引き起こす可能性のある競合状態を修正
- レプリカとしてクラスターに参加する前に、降格したばかりのプライマリポッドの余分な再起動を削除します
- バックアップから復旧するときにレプリケーション依存の PostgreSQL 構成パラメーターを正しく処理します
- クラスターの作成中に PostgreSQL 構成の検証が欠落していたのを修正

57.5.3 バージョン 1.12.0

発売日 2022 年 1 月 11 日

特徴

- Kubernetes 1.23 をサポートされる Kubernetes ディストリビューションのリストに追加し、2020 年 12 月に Kubernetes プロジェクトによるサポートを終了した 1.17 のエンドツーエンドテストを削除します。
- 2 秒の接続タイムアウトと 30 秒の通信タイムアウトを追加することにより、ネットワークに問題が発生した場合のポッドステータスチェックの応答性を向上させます。この変更は、ポッドが障害が発生したと宣言する前にそのステータスを報告するのをオペレーターが待機する時間に制限を設定し、フェールオーバー操作の堅牢性と予測可能性を強化します
- `.spec.inheritedMetadata` フィールドをクラスターに導入して、ユーザーがクラスターによって生成されたすべてのオブジェクトに適用されるラベルとアノテーションを指定できるようにします
- インスタンスのステータスを計算するときに実行されるクエリの数を削減します
- PgBouncer の準備状況プローブを追加します
- Azure プロトコルを使用する場合、Barman のバックアップオブジェクトストアのエンドポイントのカスタム認証局のサポートを追加

修正

- フェイルオーバー中に、すべての WAL ストリーミング接続が閉じるまで、新しいプライマリの選択を待ちます。オペレーターは、デフォルトで `wal_sender_timeout` および `wal_receiver_timeout`

を 5 秒に設定して、プライマリにネットワークの問題があるかどうかをスタンバイノードがすぐに認識できるようにしました

- レプリカクラスター内の PostgreSQL インスタンスの「archive_mode」を「always」に設定することにより、レプリカクラスターの WAL アーカイブ戦略を変更して、ローリング更新を修正します。次に、現在およびターゲット指定されたプライマリからのみ WAL のアップロードを制限します。WAL は、スイッチオーバー中に 2 回アップロードされる場合がありますが、これは問題ではありません
- レプリカクラスターソースの Barman のバックアップオブジェクトストアのエンドポイントのカスタム認証局のサポートを修正
- クラスター名前空間のデフォルトの監視構成マップの固定名を使用する
- デフォルトの Webhook が何らかの理由で機能していない場合、オペレーターは調整サイクル中にもデフォルトでクラスターを更新するようになりました
- リソース要求と制限の比較を修正して、調整サイクルごとにすべてのポッドの更新につながる稀な問題を修正します
- Webhook からのログメッセージを改善して、オブジェクト名前空間も含めます
- すべての調整ループの開始時に「デフォルト」メッセージのロギングを停止します
- `enablePodMonitor` が false の場合、調整サイクルごとに PodMonitor 削除のロギングを停止します
- ポッドに到達できない場合、アーキテクチャの不一致の可能性について文句を言わないでください

57.5.4 バージョン 1.11.0

発売日 2021 年 12 月 15 日

特徴

- **パラレル WAL アーカイブとリストア** `backupObjectStore.maxParallel` オプションを導入して、大量の書き込みシステムで WAL 生成に追いつくことができます。PostgreSQL の `archive_command` によると、両方の WAL アーカイブ中に実行するパラレルジョブの最大数を設定します。WAL リストア `restore_command` による。並列復元オプションを使用すると、必要な WAL ファイルを取得して、シークエンシャルではなくパラレルで再生することにより、新しく昇格したスタンバイをより速く準備状態に到達できます。
- **モニタリングのためのデフォルトのメトリックセット** `default-monitoring` と呼ばれる新しい `ConfigMap` は、オペレーターの同じ名前空間に自動的に展開され、デフォルトで、既存の Postgres クラスターに追加されます。このような動作は、オペレーターの構成で `MONITORING_QUERIES_CONFIGMAP` パラメーターを設定することによりグローバルに、または `.spec.monitoring.disableDefaultQueries` オプションデフォルトで `false` に設定を介してクラスターレベルで変更できます。
- クラスターのモニタリングセクションに `enablePodMonitor` オプションを導入して、`PodMonitor` リソースを自動的に管理し、Prometheus とシームレスに統合します
- ポッドが Kubernetes によって強制終了される前に、目的の `stopDelay` 時間の前半にスマートシャットダウンを実行し、残りの半分に高速シャットダウンを実行することにより、PostgreSQL のシャットダウンプロシージャを改善します

- switchoverDelay オプションを追加して、以前のプライマリが正常にシャットダウンし、新しいプライマリを昇格する前にすべての WAL ファイルをアーカイブするために与えられた時間を制御しますデフォルトでは、CloudNativePG は無期限に待機して特権データの耐久性
- ローリング更新を発行することにより、PostgreSQL Cluster のリソース要求と制限の変更を処理します
- kubectl の cnp プラグインの status コマンドを改善し、追加情報ストリーミングレプリケーションステータス、データベースの合計サイズ、クラスター内のインスタンスのロール
- PostgreSQL の共有メモリ管理の dynamic_shared_memory_type および shared_memory_type パラメーターの構成を有効にすることにより、多くの並列ワーカーを使用したワークロードのサポートを強化します
- クラスターレベルで定義されたラベルとアノテーションを、ポッドを含む関連リソースに伝播します削除はサポートされていません
- Kubelet によって追い出されたポッドを自動的に削除します
- ENABLE_AZURE_PVC_UPDATES オペレーター構成オプションを介して、必要に応じてクラスターのローリング更新を発行することにより、Azure の永続ボリュームの自動サイズ変更を管理しますデフォルトで無効
- 特定の Postgres クラスターで disabled に設定されている場合、調整ループの実行を防止する cnpg.io/reconciliationLoop アノテーションを導入します
- initdb ブートストラップ方法の一部として postInitApplicationSQL オプションを導入して、クラスターが作成された直後にスーパーユーザーとしてメインアプリケーションデータベースで実行する SQL クエリーのリストを指定します

修正

- Liveness プローブは、PostgreSQL サーバーの起動プロセスを正しく処理するようになりました。これは、少数の顧客から報告された問題を修正し、一貫した状態に到達するために WAL ファイルを復旧する必要がある再起動したスタンバイサーバーに影響しますが、liveness プローブのタイムアウトがキックインする前にそれを行うことができず、ポッドを CrashLoopBackOff に残しましたステータス。
- Liveness プローブは、タイムライン流用後に pg_rewind を使用して現在のプライマリと再調整する必要がある元のプライマリの場合を正しく処理するようになりました。これにより、新しいスタンバイのポッドが Kubernetes によって繰り返し強制終了されないように修正されます。
- Postgres ポッドからクライアントサイドの調整を削減します Waited for 1.182388649s due to client-side throttling, not priority and fairness, request: GET など
- 提供されたものを使用して、OpenShift および OLM インストールでの公開キーインフラストラクチャ PKI の初期化を無効にします
- 再起動が必要な構成パラメーターを変更する場合、常にプライマリを最後のままにしてください
- ジョブが正常に完了した後にのみ準備ができている PVC をマークし、PVC の初期化の競合状態を防ぎます
- 有効期限が切れた Webhook TLS シークレットを更新するときに、正しい公開キーを使用します。

- LSN を解析する際のオーバーフローを修正
- 起動時に古い PID ファイルを削除する
- `Pooler` リソースに、オペレーターで定義された `imagePullSecret` が存在する場合を継承させます

57.5.5 バージョン 1.10.0

発売日 2021 年 11 月 11 日

特徴

- **PgBouncer を使用した接続プーリング** `Pooler` リソースとコントローラを導入して、ローカル PostgreSQL `Cluster` の接続プーラーとして使用される PgBouncer 展開を自動的に管理します。この機能には、TLS クライアント/サーバー接続、パスワード認証、高可用性、ポッドテンプレートのサポート、主要な PgBouncer パラメーターの構成、`PAUSE` / `RESUME` 、JSON 形式のロギング、統計、プール、リストの Prometheus エクスポータが含まれます
- **バックアップリテンションポリシー**バックアップのリカバリウィンドウリテンションポリシーの定義をサポートたとえば、30 日のリカバリウィンドウを保証するための `30d'
- **オペレーターのインプレース更新**インスタンスマネージャーのインプレースオンライン更新を導入します。これにより、オペレーターの更新に続いてクラスター全体のローリング更新を実行する必要がなくなります。デフォルトでは、このオプションは無効になっています。*documentation for more detailed information* を参照してください。
- `initdb` ブートストラップ方法でカスタマイズできるオプションのリストを `dataChecksums` 、`encoding` 、`localeCollate` 、`localeCType` 、`walSegmentSize` に制限します。これにより、`options` 配列は時代遅れになり、v2 API で削除される予定です
- `initdb` ブートストラップ方法の一部として `postInitTemplateSQL` オプションを導入して、クラスターが作成された直後にスーパーユーザーとして `template1` データベースで実行する SQL クエリーのリストを指定します。この機能を使用すると、クラスター内に作成されるすべてのアプリケーションデータベースにデフォルトオブジェクトを含めることができます
- インスタンス Prometheus エクスポーターに新しいデフォルトメトリックを追加しました。バックアップカタログに基づく Postgres バージョン、クラスター名、およびリカバリ可能の最初のポイント
- 障害後のバックアップの再試行
- オペレーターが、頻繁に更新されないオペランドイメージに存在しない最近導入された機能リテンションポリシー、Azure Blob Container ストレージなどを呼び出さないようにするために、 Barman Cloud 機能に関する認識を高めます。
- `cnp` プラグインの `status` コマンドの出力とバックアップに関する情報を統合
- PVC のステータス初期化または準備ができていることを報告する新しいアノテーションを導入します
- `Backup` オブジェクトを含む `Cluster` で生成されたすべてのオブジェクトの `k8s.enterprisedb.io/cluster` ラベルにクラスター名を設定します
- `Cluster` 、`Backup` 、および `ScheduledBackup` 種類での非推奨の API バージョン `postgresql.cnpg.io/v1alpha1` のサポートをドロップ

- デフォルトのオペランドイメージを PostgreSQL 14.2 に設定します

セキュリティ

- オペレーターコンテナ securityContext の allowPrivilegeEscalation を `false` に設定します

修正

- シングルインスタンスクラスターでのメンテナンス中にプライマリ PodDisruptionBudget を無効にする
- 復旧操作中に正しい証明書認証局 CA を使用する
- バックアップする前に WAL アーカイブステータスを確認する際の Postgres 接続リークを防止
- ログをフラッディングする一時的なエラーの後、WAL アーカイブ/復元を 100 ミリ秒スリープさせます

57.5.6 バージョン 1.9.2

発売日 2021 年 10 月 15 日

特徴

- 2 つの新しいロガーで JSON ログを強化します。PostgreSQL の `archive_command` の場合は `wal-archive` 、スタンバイの `restore_command` の `wal-restore`

修正

- スタンバイプロモーション中に WAL アーカイブを有効にする `.history` ファイルがアーカイブされるのを防止
- Barman 2.13 以降を使用する場合にのみ`--cloud-provider` オプションを Barman Cloud ツールに渡して、古いオペランドでのエラーを回避します
- バックアップをトリガーする前に、プライマリのポッドの準備が整うのを待ちます

57.5.7 バージョン 1.9.1

発売日 2021 年 9 月 30 日

*このリリースは、 PostgreSQL 14 のローンチを記念するものです

特定のイメージ名を定義せずに新しい `Cluster` が作成されるときに、それをデフォルトのメジャーバージョンにすることにより。*

修正

- `Error while getting barman endpoint CA secret` メッセージがプライマリポッドのログに表示され、バックアップが正しく機能しない問題を修正
- インスタンスマネージャーとの一時的な通信の問題が発生した場合、新しいバックアップの要求を適切に再試行します

57.5.8 バージョン 1.9.0

発売日 2021 年 9 月 28 日

バージョン *1.9.0* は、リリースプロセスとバージョン *1.9.1* のその後のリリースの遅延により、*OpenShift* では利用できません。

特徴

- サポートされている Kubernetes ディストリビューションのリストに Kubernetes 1.22 を追加し、1.16 を削除
- 必要に応じて、バックアップアーカイブから WAL ファイルを取得するために、`pg_rewind` に`--restore-target-wal` オプションのサポートを導入します PostgreSQL 13 以降でのみ利用可能
- 各データベースの `pg_catalog.pg_largeobject` テーブルのページ数を推定する Prometheus エクスポーターのデフォルトメトリックを公開する
- ローカルのインメモリキャッシュを介して、WAL のアーカイブと取得のパフォーマンスを向上させます

修正

- `pg_isready` を呼び出すときに `postgres` ユーザーを明示的に設定します-OpenShift の制限された SCC で必要
- ステータスの `FirstRecoverabilityPoint` を適切に更新します
- バックアップが要求された場合、指定されたプライマリで `archive_mode = always` を設定します
- マイナーなバグ修正

57.5.9 バージョン 1.8.0

発売日 2021 年 9 月 13 日

特徴

- 外部クラスターセクションで定義されたオブジェクトストアから直接フルまたはポイントインタイムリカバリーを介して新しいクラスターをブートストラップし、バックアップ CR を定義するための以前の要件を排除します。
- スケジュールされたバックアップに `immediate` オプションを導入して、最初の Postgres インスタンスが実行された直後にバックアップを要求し、ポイントインタイムリカバリが構成されているときにクラスターの先頭に巻き戻す機能を追加します
- クラスターステータスに `firstRecoverabilityPoint` を追加して、バックアップオブジェクトストアのコンテンツに基づいてリカバリを要求する最も古い一貫したポイントを報告します
- 次の新しいメトリックを公開することにより、PostgreSQL インスタンスのデフォルトの Prometheus エクスポータを強化します。

    1. ディスク上の WAL ファイルの数と計算された合計サイズ b_tran_3 アーカイブステータスフォルダー内の`.ready` および`.done` ファイルの数 b_tran_6 レプリカモードのフラグ

2. 要求された最小/最大同期の数レプリカ、および予想および実際に観察されたレプリカ

- Prometheus エクスポーターでカスタムメトリックを定義するときに `runonserver` オプションのサポートを追加して、メトリックの収集をさまざまな PostgreSQL バージョンに制限します
- Barman Cloud の Barman 2.13 で導入された機能を利用して、バックアップとリカバリーのための Azure Blob Storage をネイティブにサポート
- liveness プローブに `pg_isready` に依存する
- リカバリターゲット時間のタイムスタンプ仕様の RFC3339 形式をサポート
- `.spec.imagePullPolicy` を導入して、クラスター用に作成されたすべてのポッドとジョブのイメージコンテナのプルポリシーを制御します
- OpenShift 4.5 に代わる OpenShift 4.8 のサポートを追加します
- PostgreSQL 14 ベータ版のサポート
- ストリーミング接続を必要とせず、外部クラスターセクションで定義されたオブジェクトストアからのクラスター間レプリケーションでレプリカクラスター機能を強化します実験
- クラスターの仕様に `logLevel` オプションを導入して、エラー、情報、デバッグ、またはトレースのいずれかのレベルを指定します

セキュリティの強化

- `.spec.enableSuperuserAccess` を導入して、パスワード認証を介して `postgres` ユーザーのネットワークアクセスを有効/無効にします

修正

- クラスターが回復不能な状態になり、人間の介入が必要になると、ユーザーに適切に通知します

57.5.10 バージョン 1.7.1

発売日 2021 年 8 月 11 日

特徴

- 同期レプリケーションに関して構成より自己修復を優先し、クラスターが自己修復操作中に要件を満たせない場合に、オペレーターが `minSyncReplicas` および `maxSyncReplicas` 設定を一時的にオーバーライドできるようにします
- `initdb` ブートストラップ方法の一部として `postInitSQL` オプションを導入して、クラスターが作成された直後にスーパーユーザーとして実行する SQL クエリーのリストを指定します

修正

- プライマリの準備ができていないときにオペレーターがフェイルオーバーを許可します 1.7.0 で導入されたバグ
- `LOCAL` 同期コミットレベルを使用して管理照会を実行します
- PGAudit の複数行のログエントリを正しく解析する

57.5.11 バージョン 1.7.0

発売日 2021 年 7 月 28 日

特徴

- JSON 出力で直接使用可能な pgaudit と呼ばれる新しいタイプの logger を使用して、PGAudit にネイティブサポートを追加します
-
  - によるモニタリングと可観測機能の強化 pg_stat_statements および auto_explain 拡張機能のネイティブサポート
  - 1 つ以上のデータベースでユーザー定義のメトリッククエリーを実行する Prometheus エクスポータの target_databases オプションシェルのようなパターンマッチングを介したデータベースの自動検出を含む)
  - primaryUpdateStrategy が supervised に設定されたクラスターに手動スイッチオーバーが必要かどうかを迅速に報告するための manual_switchover_required メトリックの公開
- pg_audit 、auto_explain 、および pg_stat_statements の shared_preload_libraries の透過的ハンドル
- pg_stat_statements 、pgaudit 、または auto_explain オプションが postgresql パラメーターセクションに追加される場合の PostgreSQL の shared_preload_libraries の自動構成
- cnpg.io/reload ラベルをサポートして、構成マップとシークレットの自動リロードを細かく制御します。プロメテウスエクスポータのカスタムモニタリング/アラートメトリックに使用されるもの、または証明書を保存するために使用されるものを含む
- reload コマンドを kubectl の cnp プラグインに追加して、インスタンスで調整ループをトリガーする
- additionalPodAffinity および additionalPodAntiAffinity を介してポッドアフィニティおよびアンチアフィニティ構成の制御を向上させます
- 任意の時点で、少なくとも 1 つのプライマリインスタンスを実行する必要があることにより、プライマリインスタンス用に別個の PodDisruptionBudget を導入します

セキュリティの強化

- .spec.certificates.clientCASecret および.spec.certificates.replicationTLSSecret オプションを追加して、カスタムクライアント認証局と PostgreSQL サーバーの証明書を定義します。クライアント証明書の認証と PostgreSQL ノード間の安全な通信に使用されます
- .spec.backup.barmanObjectStore.endpointCA オプションを追加して、Barman のバックアップオブジェクトストアのエンドポイントのカスタム認証局バンドルを定義します

修正

- Prometheus エクスポーターでヒストグラムを正しく解析する
- クラスター用にオペレーターが作成したサービスの調整

57.5.12 バージョン 1.6.0

発売日 2021 年 7 月 12 日

特徴

- レプリカモード **実験**ソースクラスターのレプリカとしてクラスターを作成できます。レプリカクラスターには、**指定されたプライマリ** と任意の数のスタンバイがあります。
- `.spec.postgresql.promotionTimeout` パラメーターを追加して、インスタンスをプライマリに昇格するときに待機する最大秒数を指定します。デフォルトは 40000000 秒です。
- `.spec.affinity.podAntiAffinityType` パラメーターを追加します。`preferred` デフォルトに設定して `preferredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution` が使用されるか、`required` に設定して `requiredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution` になります。

変更点

- PVC とポッドを削除する際の競合状態を修正し、オペレーターが新しいポッドを作成できませんでした。
- マネージャーが構成変更時に PostgreSQL の再起動の必要性を検出できない競合状態を修正しました。
- アノテーションのないクラスターでの `kubectl-cnp` のパニックを修正しました。
- 一部のログメッセージのレベルを `debug` に下げました。
- サーバー CA および TLS インジェクションの E2E テスト。

57.5.13 バージョン 1.5.1

発売日 2021 年 6 月 17 日

変更します

- Red Hat OpenShift でのオペレーター展開での自動更新を防止する CRD 検証のバグを修正
- シークレットを使用してオペレーターの構成を渡すことを許可します。

57.5.14 バージョン 1.5.0

発売日 2021 年 6 月 11 日

特徴

- `pg_basebackup` ブートストラップ方法を導入して、Kubernetes の外部でも、同じメジャーバージョンの既存の PostgreSQL インスタンスのコピーとして新しい PostgreSQL クラスターを作成します
- `Cluster` リソースの `Affinity` セクションに Kubernetes の許容範囲のサポートを追加し、ユーザーは必要なテイントを持つ Kubernetes ノードに PostgreSQL インスタンスを分散できます。
- より決定的で反復可能な展開のために、`<image>:<tag>@sha256:<digestValue>` 形式を介してイメージ名へのダイジェストの仕様を有効にします

セキュリティの強化

- サーバー証明書と、それに署名した関連認証局のシークレットを定義することにより、PostgreSQL サーバーを認証するように TLS 証明書をカスタマイズ
- 内部および自動的に管理されるストリーミングレプリカの WAL レシーバープロセスの `sslmode` を `require` から `verify-ca` に引き上げます

変更点

- `kubectl` の `cnp` プラグインの `promote` サブコマンドを強化して、ポッドの名前全体ではなくノード番号のみを受け入れるようにしました
- クラスター名に DNS-1035 検証スキームを採用サービス名が継承されます
- スタンバイインスタンスのクローンを作成するとき、または `pg_basebackup` メソッドを使用してブートストラップするときにストリーミングレプリケーション接続を強制する
- 物理ベースのバックアップに関して `Backup` リソースを `beginWal` 、`endWal` 、`beginLSN` 、`endLSN` 、`startedAt` 、`stoppedAt` と統合
- ドキュメントの改善
  - オペレーターとオペランドによって公開されるポートのリストを提供します container
  - データベースワークロードのストレージと PostgreSQL のベンチマークのための `cnp-bench` helpm チャートとガイドラインを紹介します
- E2E テストの機能強化
  - Kubernetes 1.21
  - をテストする オペレーターの高可用性のテストを追加します
  - ノードドレインのテストを追加します
- マイナーバグ修正、以下を含むマイナーバグ修正
  - リカバリ操作中の pg_ctl start へのタイムアウトが短すぎます b_tran_8 オペレーターが PVCs で直接イベントを監視していない
  - `barmanObjectStore` バックアップの `immediateCheckpoint` および `jobs` パラメーターの処理を修正します
  - バックアップから復旧するときに空のログ

57.5.15 バージョン 1.4.0

発売日 2021 年 5 月 18 日

特徴

- JSON 形式の PostgreSQL エラーメッセージの標準出力ログ
- Prometheus エクスポーターの PostgreSQL メトリックの基本セットを提供します

- `restart` コマンドを `kubectl` の `cnp` プラグインに追加して、特定の PostgreSQL クラスターのポッドをロールアウト方法で再起動します

セキュリティの強化

- ポッドの `readOnlyRootFilesystem` セキュリティコンテキストを設定します

変更点

- **重要** YAML マニフェストを使用して CloudNativePG オペレーターを展開したことがある場合、新しいバージョンをインストールする前に既存のオペレーター展開を削除する必要があります。これは、オペレーターによって直接管理されるラベルとラベルセレクターの変更に伴う他の Kubernetes API との競合を回避するために必要です。1.4.0 へのアップグレードの詳細については、CloudNativePG ドキュメントを参照してください。
- オペレーターによって自動的に定義されるラベルを修正し、名前を `control-plane: controller-manager` から `app.kubernetes.io/name: cloudnative-pg` に変更します
- Prometheus エクスポーターの TCP ポートに `metrics` 名前を割り当てます
- PostgreSQL のメトリックエクスポータ接続に `application_name` として `cnp_metrics_exporter` を設定します
- 可能な場合は、`postgres` データベースの代わりに Prometheus エクスポータのモニタリングクエリーにアプリケーションデータベースを使用します
- ドキュメントの改善
  - モニタリングクエリーのカスタマイズ
  - Operator のアップグレード手順
- E2E テストの機能強化
- マイナーバグ修正など
  - `pg_basebackup`
  - を呼び出すときに`-R` の使用を回避しますステータスを取得するときにエラーログからスタックトレースを削除します

57.5.16 バージョン 1.3.0

発売日 2021 年 4 月 23 日

特徴

- ラベルとアノテーションの継承
- すべてのコンテナにリソース制限を設定する

セキュリティの強化

- Red Hat OpenShift での制限付きセキュリティコンテキスト制約のサポートで、ポッドの実行を名前空間に割り当てられた UID および SELinux コンテキストに制限します

- 非ルート、非特権、および特権エスカレーションなしで実行するようにオペレーターによって明示的に定義されたポッドセキュリティコンテキスト

変更点

- ポート 9187 でリッスンする Prometheus エクスポータエンドポイントポート 8000 は、API サーバーとのインスタンス調整のために予約されています
- ドキュメントの改善
- GKE 環境を含む E2E テストの機能強化
- マイナーなバグ修正

57.5.17 バージョン 1.2.1

発売日 2021 年 4 月 6 日

- ScheduledBackup はバックアップの所有者でなくなりました。つまり、ScheduledBackup オブジェクトが削除されてもバックアップは削除されません
- RHSA-2021:1024 セキュリティアドバイザリ: 重要を解決するための ubi8-minimal イメージの更新

57.5.18 バージョン 1.2.0

発売日 2021 年 3 月 31 日

- Prometheus の `postgres_exporter` と互換性のある構文を使用して、ConfigMap および Secret オブジェクトとしてカスタムモニタリングクエリの実験的なサポートを導入します
- Operator Lifecycle ManagerOLM 展開をサポートし、その後の OperatorHub.io でのプレゼンス
- 米国国防総省 DoD の国防情報システム局 DISA およびインターネットセキュリティセンター CIS からのガイドラインを適用し、Dockle とのパイプラインで直接検証することにより、コンテナのセキュリティを強化します
- AKS での E2E テストの改善
- マイナーなバグ修正

57.5.19 バージョン 1.1.0

発売日 2021 年 3 月 3 日

- JSON および YAML 出力を含むクラスターのステータスを整形印刷するために `kubectl cnp status` を追加
- `kubectl cnp certificate` を追加して、クライアントアプリケーションの TLS 認証を有効にします
- `-ro` サービスを追加して、使用可能なホットスタンバイレプリカのみに接続をルーティングし、クラスターのプライマリインスタンスからの読み取り専用クエリのオフロードを有効にします

- クラスターを maxSyncReplicas より低い値にスケールダウンしたロールバック
- 元のプライマリを降格する前にチェックポイントを要求する
- SIGINT 信号高速シャットダウンを SIGTERM の PostgreSQL プロセスに送信します
- マイナーなバグ修正

57.5.20 バージョン 1.0.0

発売日 2021 年 2 月 4 日

CloudNativePG の最初のメジャー安定リリースは、API グループ postgresql.cnpg.io/v1 の Cluster 、Backup 、および ScheduledBackup を実装します。これらのリソースを使用して、次の主な機能を使用して Kubernetes 内で PostgreSQL クラスターを作成および管理します。

- 外部ツールを必要とせずに、高可用性を実現する Kubernetes API サーバーとの直接統合
- 最も調整されたレプリカ
  - レプリカの自動再作成を促進することによるプライマリインスタンスの
  - フェイルオーバーを介した自己修復機能
- 選択したレプリカの昇格によるプライマリインスタンスの計画的なスイッチオーバー
- スケールアップ/ダウン機能
- 任意の数のインスタンスの定義最小 1 - 1 つのプライマリサーバー
- アプリケーションをクラスターの唯一のプライマリサーバーに接続するための**読み取り-書き込み** サービスの定義
- アプリケーションを読み取りワークロードのインスタンスに接続する *read* サービスの定義
- PVC テンプレートを使用したローカル永続ボリュームのサポート
- ポッドの永続ボリュームストレージの再利用
- PostgreSQL のマイナーバージョンとオペレーターのアップグレードのローリングアップデート
- TLS 接続とクライアント証明書認証
- S3 互換オブジェクトストアへの継続的なバックアップ
- S3 互換オブジェクトストアバックアップからのフルリカバリーとポイントインタイムリカバリー
- 同期レプリカのサポート
- nodeSelector プロパティを介したノードアフィニティのサポート
- PostgreSQL エラーメッセージの標準出力ログ

第58章　Appendix

58.1 付録 A-バックアップ用の共通オブジェクトストア

付録 *A-*バックアップ用の共通オブジェクトストア ファイルは、 Barman Cloud インフラストラクチャでサポートされている任意のサービスに保存できます。つまり

- *AWS S3*
- *Azure Blob Storage*
- *Google Cloud Storage*

サポートされているサービスの互換性のある実装を使用することもできます。

必要なセットアップは、選択したストレージプロバイダーによって異なり、以降のセクションで説明します。

58.1.1 AWS S3

AWS Simple Storage Service (S3) は、Amazon が提供する非常に人気のオブジェクトストレージサービスです。

CloudNativePG バックアップに関する限り、2 つの方法でバックアップを S3 バケットに保存する権限を定義できます。

- CloudNativePG が EKS で実行されている場合。IRSA authentication method を使用することができます
- または、 `ACCESS_KEY_ID` および `ACCESS_SECRET_KEY` 資格情報を使用できます

AWS アクセスキー

環境に関する次の情報が必要です。

- `ACCESS_KEY_ID` S3 にファイルをアップロードするために使用されるアクセスキーの ID
- `ACCESS_SECRET_KEY` 上記のアクセスキーのシークレット部分
- `ACCESS_SESSION_TOKEN` オプションのセッショントークン、必要な場合

使用されるアクセスキーには、バケットにファイルをアップロードする権限が必要です。そのため、資格情報を使用して Kubernetes シークレットを作成する必要があります。これは、次のコマンドで行うことができます。

```
kubectl create secret generic aws-creds \
  --from-literal=ACCESS_KEY_ID=<access key here> \
  --from-literal=ACCESS_SECRET_KEY=<secret key here>

#  --from-literal=ACCESS_SESSION_TOKEN=<session token here> # if required
```

資格情報は Kubernetes 内に保存され、インストールで保存時の暗号化が構成されている場合、暗号化されます。

そのシークレットが作成されたら、次の例のようにクラスターを構成できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "<destination path here>"
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_KEY_ID
        secretAccessKey:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_SECRET_KEY
```

宛先パスには、インスタンスが WAL ファイルをアップロードできるフォルダーを指す任意の URL を指定できます。`s3://BUCKET_NAME/path/to/folder` .

サービスアカウント IRSA の IAM ロール

IRSA を使用するには、Postgres クラスターの `ServiceAccount` で `annotation` を設定する必要があります。

`serviceAccountTemplate` スタンザを使用してそれらを注入するように CloudNativePG を構成できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
metadata:
[...]
spec:
  serviceAccountTemplate:
    metadata:
      annotations:
        eks.amazonaws.com/role-arn: arn:[...]
        [...]
```

S3 ライフサイクルポリシー

Barman Cloud は S3 にオブジェクトを書き込み、 Barman Cloud リテンションポリシーによって削除されるまで更新しません。S3 ライフサイクルポリシーで推奨されるアプローチは、オブジェクトの現在のバージョンを Barman 保持ポリシーより数日長く有効期限があり、オブジェクトのバージョニングを有効にし、数日後に非最新バージョンの有効期限を有効にすることです。このようなポリシーは、誤った削除から保護し、CloudNativePG ワークロードへの権限を制限できるように、オブジェクトを完全に削除する権限を付与せずに S3 からオブジェクトを削除できます。

その他の S3 互換オブジェクトストレージプロバイダー

MinIO や **Linode Object Storage** のような S3 互換オブジェクトストレージを使用している場合、デフォルトの S3 のものを使用する代わりにエンドポイントを指定できます。

この例では、リージョン `us-east1` の **Linode** の `bucket` を使用します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "s3://bucket/"
      endpointURL: "https://us-east1.linodeobjects.com"
      s3Credentials:
        [...]
```

Digital Ocean Spaces を使用している場合、Path スタイルの構文を使用する必要があります。この例では、リージョン `SFO3` の **Digital Ocean Spaces** の `bucket` を使用します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "s3://[your-bucket-name]/[your-backup-folder]/"
      endpointURL: "https://sfo3.digitaloceanspaces.com"
      s3Credentials:
        [...]
```

プライベート CA でのオブジェクトストレージの使用

HTTPS 経由で MinIO を使用する場合など、プライベート CA で署名された証明書を使用するオブジェクトストレージプロバイダーを構成するとします。その場合、CA バンドルを含むシークレットを参照する barmanObjectStore 内にオプション endpointCA を設定して、Barman が証明書を正しく検証できるようにする必要があります。証明書 ドキュメントの証明書ファイルを使用してシークレットを作成する手順を見つけることができます。シークレットを作成したら、次の例のように endpointCA を設定できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  [...]
  backup:
    barmanObjectStore:
      endpointURL: <myEndpointURL>
      endpointCA:
        name: my-ca-secret
        key: ca.crt
```

注釈: ConfigMaps と Secrets をインスタンスによって**自動的に**リロードしたい場合は、キー `cnpg.io/reload` を持つラベルを Secrets/ConfigMaps に追加できます。それ以外の場合は、*kubectl cnpg reload* サブコマンドを使用してインスタンスをリロードする必要があります。

58.1.2 Azure Blob Storage

Azure Blob Storage は、Microsoft が提供するオブジェクトストレージサービスです。

CloudNativePG 管理対象データベースのバックアップとリカバリーのためにストレージアカウントにアクセスするには、次の資格情報のいずれかの組み合わせが必要です。

- *Connection String*
- ストレージアカウント名と *Storage account access key*
- ストレージアカウント名と *Storage account SAS Token*
- ストレージアカウント名と Azure AD Workload Identity

適切に構成されました。

Azure AD Workload Identity を使用すると、資格情報を Kubernetes シークレットに保存せず、次のように inheritFromAzureAD を追加するクラスター構成にすることができます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "<destination path here>"
      azureCredentials:
        inheritFromAzureAD: true
```

一方、 **ストレージアカウントアクセスキー** または**ストレージアカウント SAS トークン**の両方を使用する場合、資格情報を Kubernetes Secret 内に保存し、必要な場合にのみデータエントリを追加する必要があります。次のコマンドはそれを実行します。

```
kubectl create secret generic azure-creds \
  --from-literal=AZURE_STORAGE_ACCOUNT=<storage account name> \
  --from-literal=AZURE_STORAGE_KEY=<storage account key> \
  --from-literal=AZURE_STORAGE_SAS_TOKEN=<SAS token> \
  --from-literal=AZURE_STORAGE_CONNECTION_STRING=<connection string>
```

使用される Kubernetes クラスターでこの機能が有効になっている場合、資格情報は保存時に暗号化されます。

前述のシークレットを踏まえて、提供された資格情報をクラスター構成内に注入できます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "<destination path here>"
      azureCredentials:
        connectionString:
          name: azure-creds
          key: AZURE_CONNECTION_STRING
        storageAccount:
          name: azure-creds
          key: AZURE_STORAGE_ACCOUNT
        storageKey:
          name: azure-creds
          key: AZURE_STORAGE_KEY
        storageSasToken:
          name: azure-creds
          key: AZURE_STORAGE_SAS_TOKEN
```

Azure Blob Storage を使用する場合、`destinationPath` は次の構造を満たします。

```
<http|https>://<account-name>.<service-name>.core.windows.net/<resource-path>
```

<resource-path> は<container>/<blob> です。**ストレージアカウント名** とも呼ばれる **アカウント名**は、使用されるホスト名に含まれます。

その他の Azure Blob Storage 互換プロバイダー

Azure Blob Storage API の別の実装を使用している場合、destinationPath は次の構造になります。

```
<http|https>://<local-machine-address>:<port>/<account-name>/<resource-path>
```

その場合、<account-name> はパスの最初のコンポーネントです。

これは、 Azure ストレージエミュレータまたは Azurite を介して Azure サポートをテストする場合に必要です。

58.1.3 Google Cloud Storage

現在、CloudNativePG オペレーターは、Google Cloud Storage の 2 つの認証方法をサポートしています。

- 最初のものは、ポッドが Google Kubernetes Engine クラスター内で実行されていることを前提としています
- 2 つ目は、環境変数 GOOGLE_APPLICATION_CREDENTIALS を活用します

Google Kubernetes Engine 内での実行

Google Kubernetes Engine 内で実行されている場合、資格情報を設定せずに Workload Identity に単に依存するようにバックアップを構成できます。特に、次のことを行う必要があります。

- .spec.backup.barmanObjectStore.googleCredentials.gkeEnvironment を true に設定します
- serviceAccountTemplate スタンザに iam.gke.io/gcp-service-account アノテーションを設定する

次の例を参考として使用してください。

```yaml
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  [...]
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "gs://<destination path here>"
      googleCredentials:
        gkeEnvironment: true
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
  serviceAccountTemplate:
    metadata:
      annotations:
        iam.gke.io/gcp-service-account:  [...].iam.gserviceaccount.com
        [...]
```

認証を使用する

instruction from Google をフォローする

認証に必要な情報をすべて含む JSON ファイルを取得します。

JSON ファイルのコンテンツは、次のコマンドで作成できる `Secret` を使用して提供する必要があります。

```
kubectl create secret generic backup-creds --from-file=gcsCredentials=gcs_credentials_
↪file.json
```

これにより、次のように yaml ファイルで使用される `backup-creds` という名前で `Secret` が作成されます。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: "gs://<destination path here>"
      googleCredentials:
        applicationCredentials:
          name: backup-creds
          key: gcsCredentials
```

次に、オペレーターは資格情報を使用して Google Cloud Storage に対して認証します。

重要: この認証方法は、Google Cloud Storage バケットにアクセスするために必要なすべての情報を含む JSON ファイルをコンテナ内に作成します。つまり、誰かがポッドへのアクセスを取得すると、バケットへの書き込み権限もあります。

58.1.4 MinIO ゲートウェイ

オプションで、バックアップオブジェクトを S3 や GCS などの他のクラウドストレージソリューションに中継する共通インターフェイスとして MinIO ゲートウェイを使用できます。詳細については、MinIO official documentation を参照してください。

具体的には、CloudNativePG クラスターは、以前に作成した資格情報とサービスを使用して、エンドポイントとしてローカル MinIO ゲートウェイを直接ポイントできます。

MinIO シークレットは、PostgreSQL クラスターと MinIO インスタンスの両方で使用されます。したがって、それらを同じ名前空間に作成する必要があります。

```
kubectl create secret generic minio-creds \
  --from-literal=MINIO_ACCESS_KEY=<minio access key here> \
  --from-literal=MINIO_SECRET_KEY=<minio secret key here>
```

注釈: この場合、クラウドオブジェクトストレージ資格情報は MinIO ゲートウェイによってのみ使用されます。

重要: PostgreSQL が MinIO ゲートウェイに到達できるようにオーダーには、MinIO ゲートウェイインスタンスにバインドされたポート `9000` に `ClusterIP` サービスを作成する必要があります。

例

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
  name: minio-gateway-service
spec:
  type: ClusterIP
  ports:
    - port: 9000
      targetPort: 9000
      protocol: TCP
  selector:
    app: minio
```

警告: このドキュメントの執筆時点では、公式の MinIO Operator

for Kubernetes は、ゲートウェイ機能をサポートしていません。そのため、代わりに `deployment` を使用します。

MinIO 展開は、クラウドストレージの資格情報を使用してオブジェクトをリモートバケットにアップロードし、バックアップファイルを別の場所に中継します。

次に、AWS S3 をクラウドオブジェクトストレージとして使用する例を示します。

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
[...]
spec:
  containers:
  - name: minio
    image: minio/minio:RELEASE.2020-06-03T22-13-49Z
    args:
    - gateway
    - s3
    env:
    # MinIO access key and secret key
    - name: MINIO_ACCESS_KEY
      valueFrom:
        secretKeyRef:
          name: minio-creds
          key: MINIO_ACCESS_KEY
    - name: MINIO_SECRET_KEY
      valueFrom:
        secretKeyRef:
          name: minio-creds
          key: MINIO_SECRET_KEY
    # AWS credentials
    - name: AWS_ACCESS_KEY_ID
      valueFrom:
        secretKeyRef:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_KEY_ID
    - name: AWS_SECRET_ACCESS_KEY
      valueFrom:
        secretKeyRef:
          name: aws-creds
          key: ACCESS_SECRET_KEY

#  Uncomment the below section if session token is required

#    - name: AWS_SESSION_TOKEN

#      valueFrom:

#        secretKeyRef:

#          name: aws-creds
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
#          key: ACCESS_SESSION_TOKEN

        ports:
        - containerPort: 9000
```

Cluster 定義の endpointURL として MinIO Gateway サービスを構成し、 BUCKET_NAME を置き換えるバケット名を選択します。

```
apiVersion: postgresql.cnpg.io/v1
kind: Cluster
[...]
spec:
  backup:
    barmanObjectStore:
      destinationPath: s3://BUCKET_NAME/
      endpointURL: http://minio-gateway-service:9000
      s3Credentials:
        accessKeyId:
          name: minio-creds
          key: MINIO_ACCESS_KEY
        secretAccessKey:
          name: minio-creds
          key: MINIO_SECRET_KEY
    [...]
```

バックアップを続行する前に、s3://BUCKET_NAME/ でアーカイブされた WAL ファイルの存在を確認します。